

羅剛教授遺書

巖谷小波先生題字

西澤臺北市尹序文

臺灣通信社編纂

臺北市史全

發行所 臺灣通信社

68  
9/01.2



正 誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
三	九	官國官憲	清國官憲	二五九	三	置く	置かれない
元	二〇	その	他の	二五八	二	物品が	物品の
四	九	火薬庫	火薬庫	二五七	三	修得者	修得者
四	三	施設	施設	二五六	四	六士先生	七士先生
四	二	今日も	今日も	二五五	四	教育令	教育令
五	三	前垣道	大垣道	二五四	三	更に	別に
五	四	二階家建	二三階建	二五三	九	奔走に	奔走し
六	七	多國	外國	二五二	一	女子教育	女子教育
六	八	待遇實令	待遇員令	二五一	四	同様まで	同様で
七	二	參等	參考	二五〇	三	心が	心が
七	一〇	常態	常態	二四九	三	多	多い
七	九	異常	異常	二四八	九	それ	それ
八	七	七メートル	七メートル	二四七	四	小父	小父さん
八	五	當	常	二四六	二	臺教會	教會
九	二〇	雪泥	雲泥	二四五	六	臺教會	教會
一〇	三	辛抱されは	辛抱すれば	二四四	二	臺教會	教會
一〇	二	三徑道路	三線道路	二四三	三	臺教會	教會
一一	三	領臺後	領臺後	二四二	二	臺教會	教會
一一	四	呈す	呈する	二四一	七	臺教會	教會
一二	一	西北	西南	二四〇	二	臺教會	教會
一二	四	内地人街で	内地人街が	二三九	三	臺教會	教會
一三	七	これ	この	二三八	四	臺教會	教會
一三	一	舊時代	舊時代の	二三七	五	臺教會	教會
一四	八	地方へ等に	地方に	二三六	九	臺教會	教會
一四	八	め	めに	二三五	五	臺教會	教會
一五	二	道路を	道路に	二三四	一〇	臺教會	教會
一五	八	共の	其の	二三三	七	臺教會	教會
一六	一	宮まれる一方	營まれる	二三二	二	臺教會	教會
一七	二	十月	九月	二三一	三	臺教會	教會
一七	二	勢力	勢力	二三〇	三	臺教會	教會
一八	三	探訪	探訪	二二九	三	臺教會	教會
一八	九	若手	若手	二二八	二	臺教會	教會
一九	二	界隈に行く	界隈に行く	二二七	七	臺教會	教會
一九	三	名	各	二二六	八	臺教會	教會
二〇	三	醫士	學士	二二五	八	臺教會	教會

六一六頁(四・五)二行を左に訂正す  
 のは労働者階級か老練の類だからである。而して藝姐は酌をして唱歌を謳ひ月琴その他  
 の支那樂器の演奏する丈けで舞踊は決してやらない唄女の類であるが、拳は盛に對手を









巖谷小波先生題字

此書心字也  
於增人  
下自村  
可

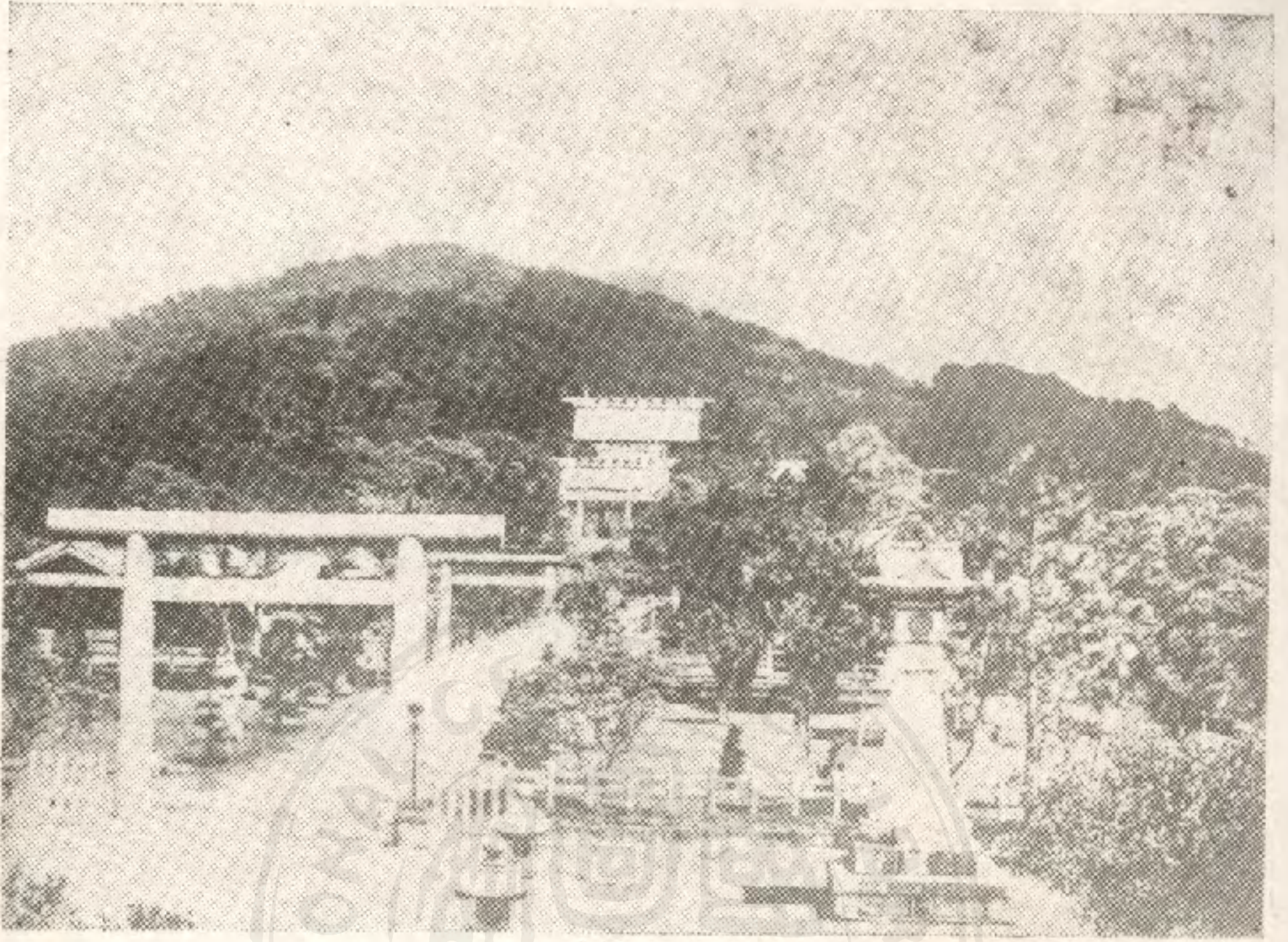
巖谷小波







社 神 灣 臺



社 神 功 建







臺灣總督 南 弘閣下



總務長官 平塚廣義閣下



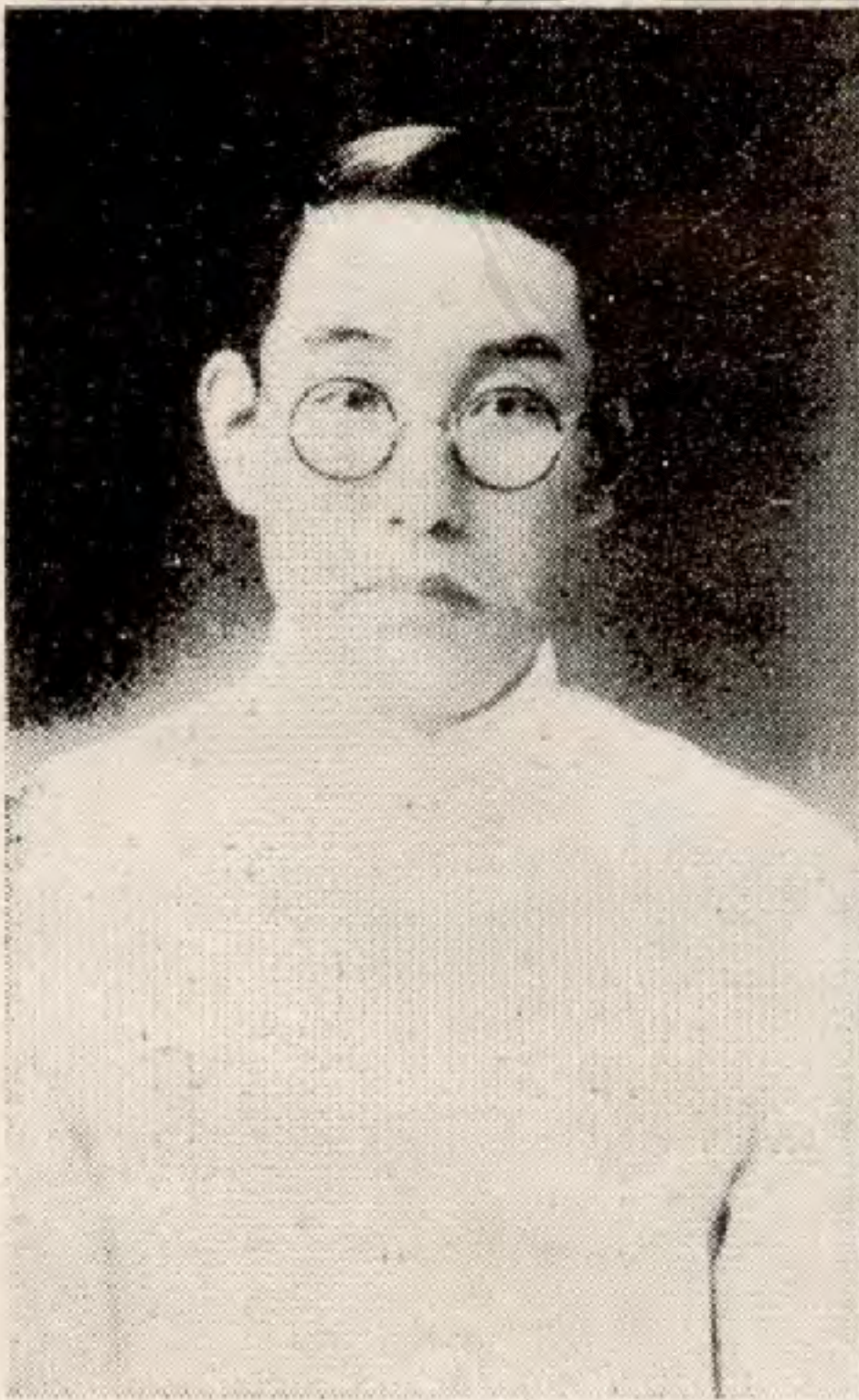


臺北州知事 中瀨拙夫氏





尹市北臺の代歴



上二代 太田 吾一 氏  
下四代 増田 秀吉 氏

上初代 故 武藤 針五郎 氏  
下三代 田端 幸三郎 氏





臺北市尹西澤義徵氏

臺灣總督府稅關長であつた西澤義徵氏は昭和七年三月十五日臺灣官場の花形たる臺北市尹の重職に任ぜられた、氏は高知縣の産、明治二十一年十一月生とあるから前市尹内海氏よりは五歳の弟である、大正二年京都帝大法科を卒業し同年文官高等試験に合格、神奈川縣屬を振出しに地方行政に携はること五年、八年外務省事務官に榮轉して外務畑に移り九年には大使館三等書記官となつて英國在勤を命ぜられ、同年九月對獨平和條約締結並大正四年乃至九年事件の功に依りて勳六等瑞寶章及金七百圓を授けられ、爾來トシ拍子に躍進して安東在勤、福州總領事等を歴任し、昭和四年臺灣入りをなした、氏は外交官畑の人に似ず至つて國粹黨の、夫人と與に大のダンス嫌ひで、長唄や日本舞踊には造詣淺からずといふ變り者である、市尹就任と同時に臺北市聯合青年團長に推載せられ、四月三日の臺北市青年訓練所入所式には鮮かな乗馬を以て閱兵式を行ひ滿場の喝采を買ふた、事務に精勤で今や押しも押されぬ臺北市尹ぶりを示してゐる。





氏司忠海内尹市北臺館



臺北市役所の中堅



役助木々佐 央中 長課車動自田坂 左上 長課生衛邊渡 右上  
 長課務財馬有、長係務庶田吉、師技鳥永、長課育教葉千リヨ 右中  
 長係書秘嶺赤(左) 長課業勸村中(右) 下中  
 長課木土野永(左) 長課道水部武(右) 下



老長ニの市北臺



氏郎治藤和菱



氏郎三德好三



臺北市の歴史

郭廷俊氏



古賀三千人氏



藤江醇三郎氏



三卷俊夫氏



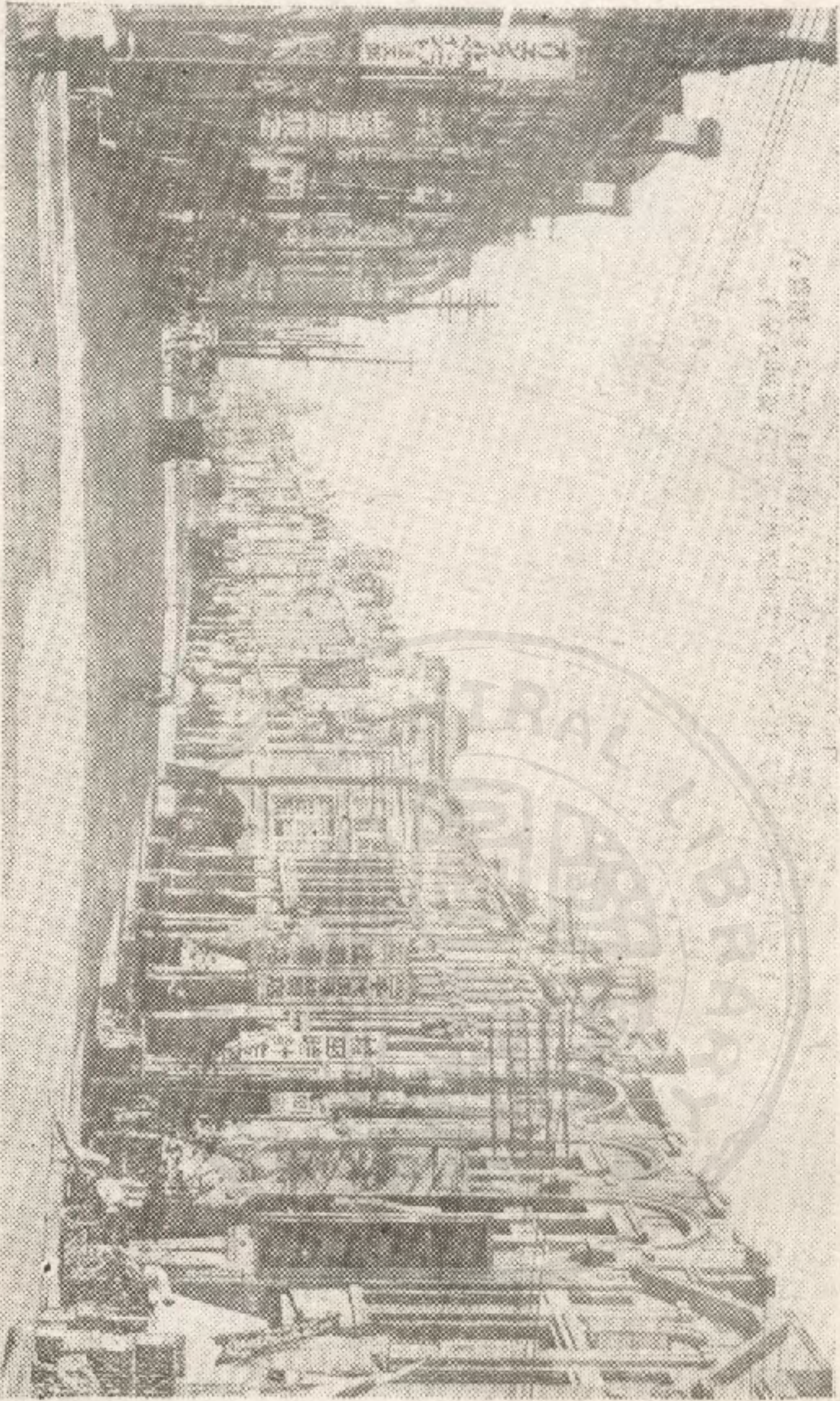
高橋猪之助氏



吉田坦造氏



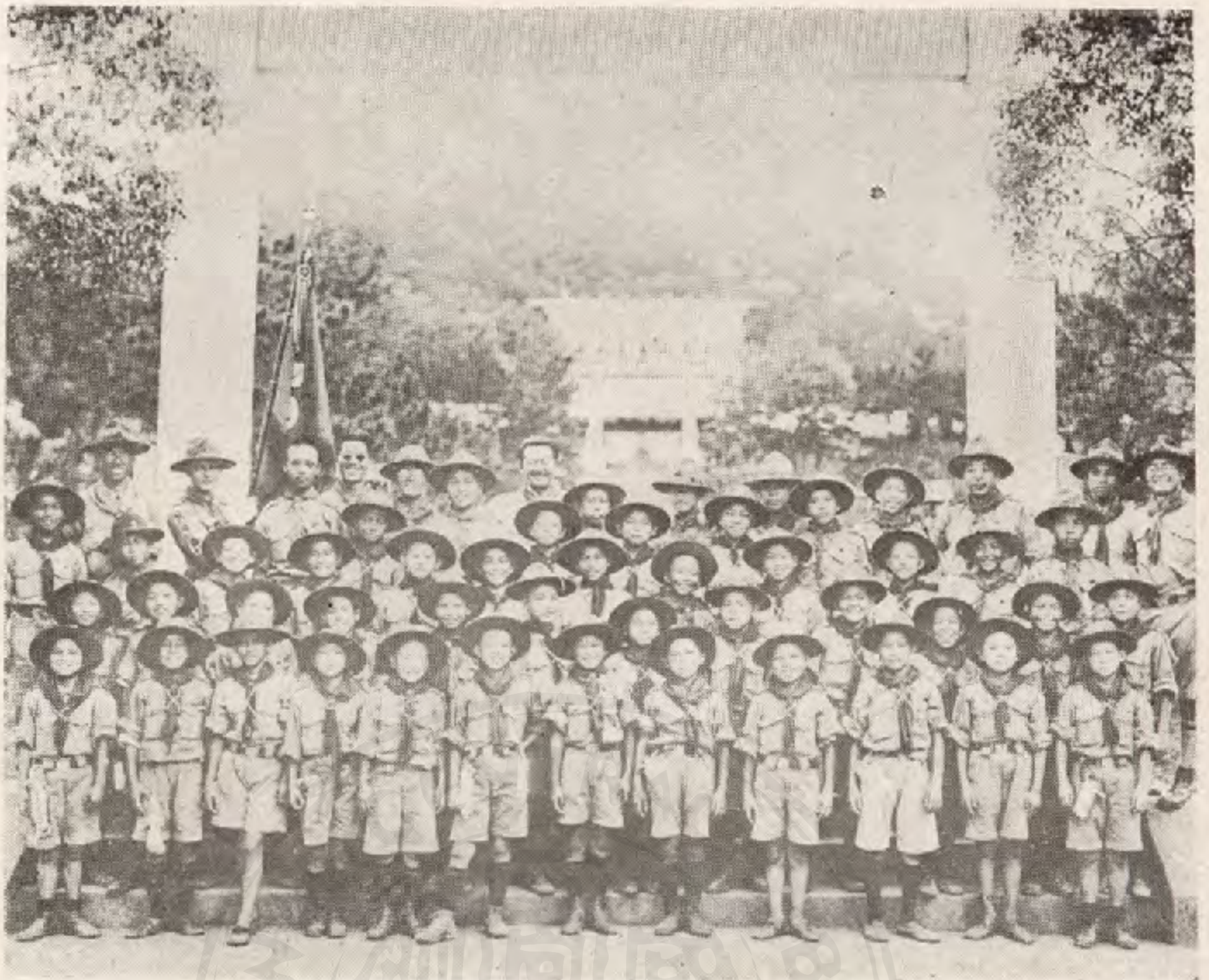




中辻次郎氏

町本通





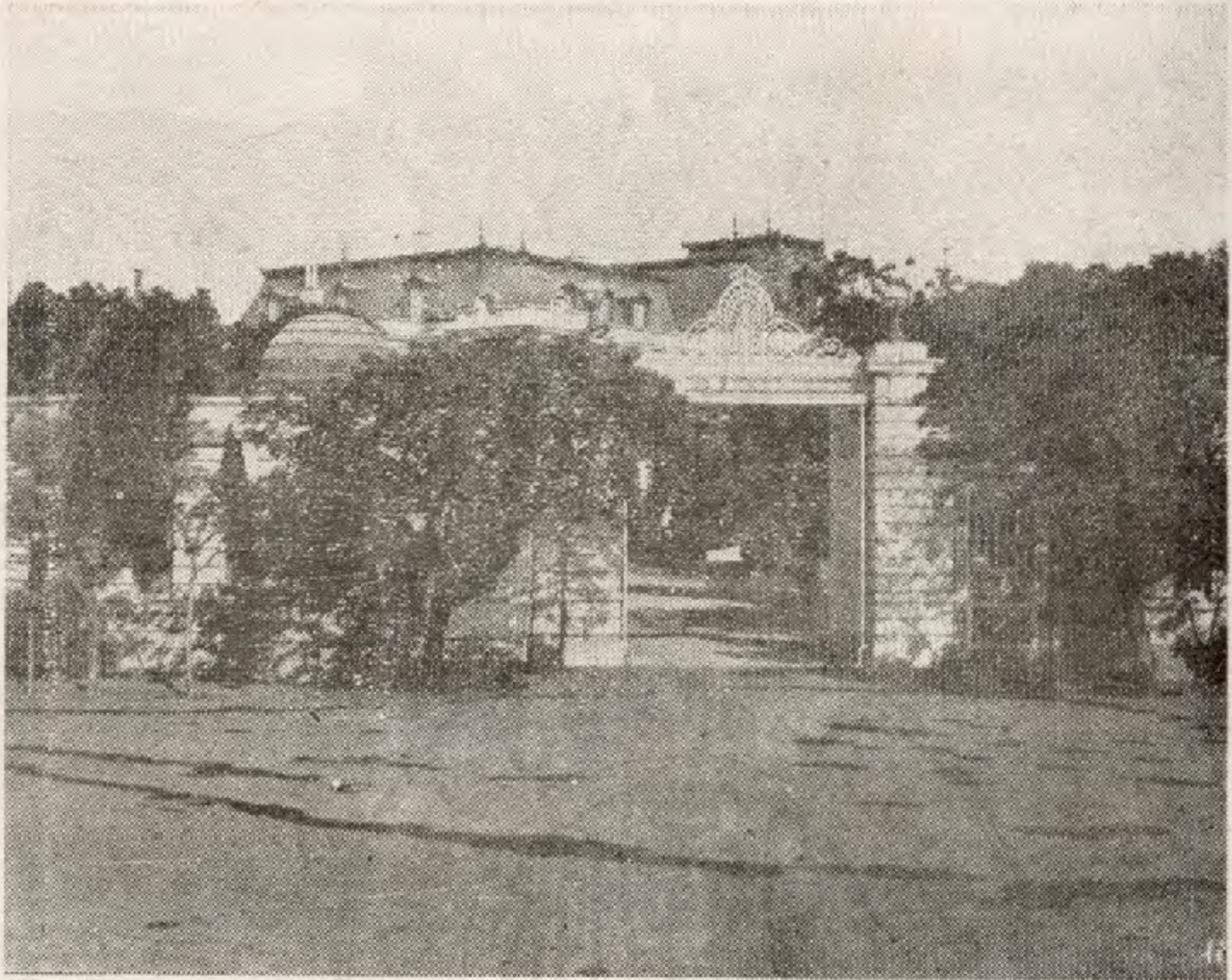
臺北市北樺山少年團



臺北市青年團聯合會慰問袋奉仕紀念攝影



總督官邸



臺北橋





臺 北 州 廳



臺 北 中 央 市 場



寺 山 龍



校 學 等 高



院 醫 北 臺



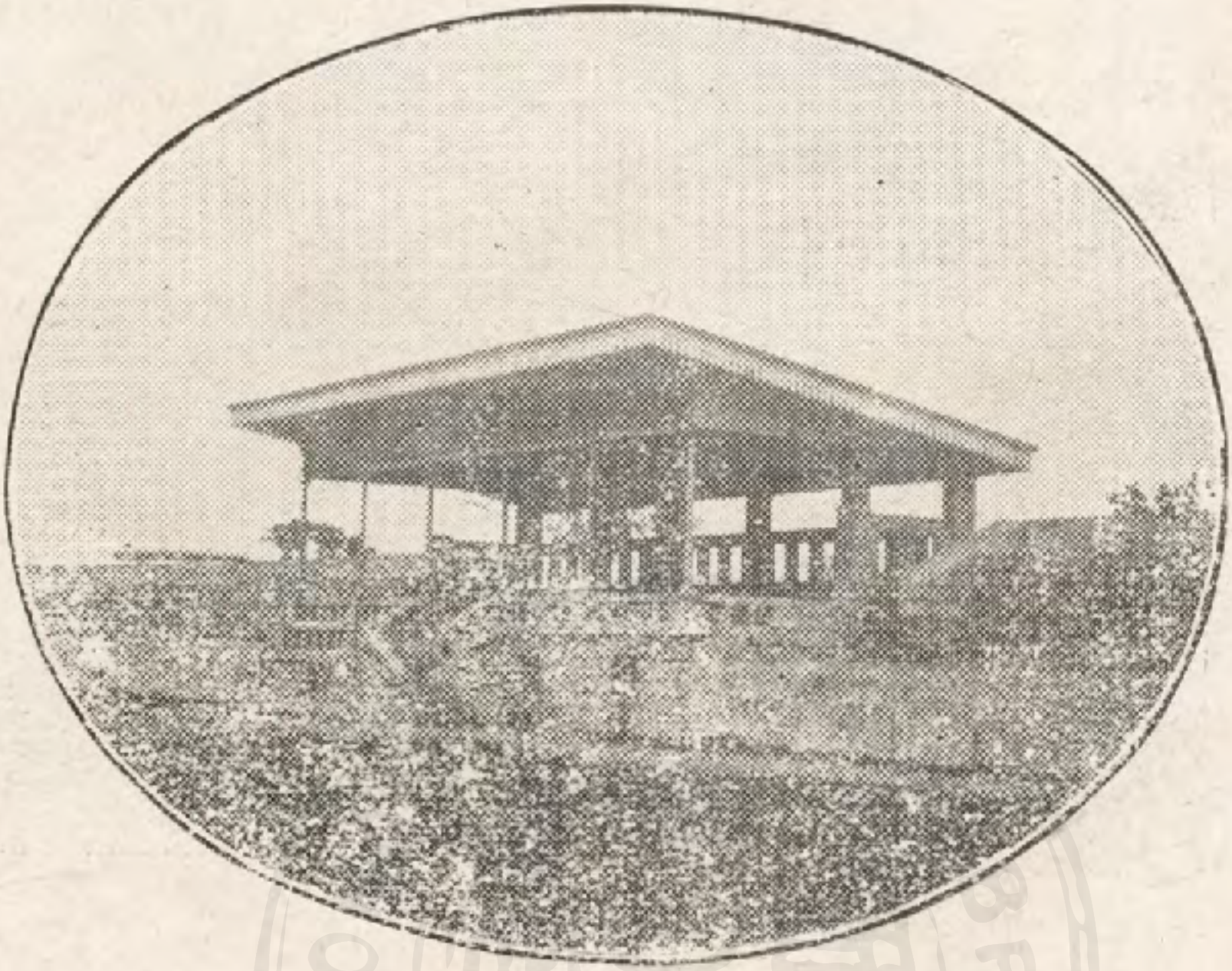
DENRYOKU KAISHA LTD. TAIBCKU.

(聯名北發) 社有式株力電灣臺

社 會 力 電 灣 臺



ドンウラグ山園



路道線三



脚 仔 亭



本島人の祭典行列



# 總督諭告

## 諭告第三號

我臺灣帝國ノ版圖ニ屬セシ以來歷代ノ總督夙夜懈ラス覆憐厚仁ノ聖旨ヲ奉體シ但夕厥愆無カラシコトヲ惟レ畏レ專ラ疆土ノ安寧ヲ保持シ民衆ノ福祉ヲ增進シ拮据經營茲ニ二十有五年今ヤ庶績漸ク舉ク産業日ニ興リ教化盛ニ行ハレ人文愈々彬ナリ之ヲ領臺始政ノ初期ニ較レハ殆ント隔世ノ感アリ孰レカ其進步發達ノ駿速ナルニ驚歎セサラン然レトモ更ニ思ヲ潜メテ我明治維新以後ニ於ケル國運ノ發展ト文明ノ開進トニ對照セハ其間尙ホ逕庭アルヲ覺ユ是レ畢竟海外ニ孤懸シ久シク世界ノ文明ト隔絶スルアリ且ツ我カ統治ノ日亦タ淺キニ由ルノミ敢テ之レヲ恠ムニ足ラスト雖苟モ生ヲ茲土ニ享クル者豈夫レ奮然トシテ作興セサルヘケンヤ

竊ニ惟ミルニ大凡ソ事ニ本末アリ物ニ前後アリ先ツ其根幹ヲ培ヒ而シテ後枝葉ニ及ササルヘカラス本總督ハ深ク世運ノ進轉ト本島民衆ノ實狀トニ鑑ミ謹テ



聖裁ヲ仰キ曩ニ地方官制ヲ改正シ今復々新ニ州制及ヒ市制街庄制ヲ制定公布シ正ニ本日ヲ以テ其實施ヲ見ルニ到レリ新制度ニ於テハ初メテ地方公共團體ノ成立ヲ認メ以テ自治ノ基礎ヲ確立セリ則チ其結果トシテ地方分權トナリ文治的施設トナリ處務簡捷トナリ公共團體其ノモノニ於テハ法定ノ人格トナリ隣保共同ノ主體トナリ公共事業ノ自營トナリ克ク官民分治ノ畛域ヲ明ニシ據テ以テ公益ヲ伸暢シ教化ヲ宣敷シ社會ノ安寧ト民衆ノ福祉トヲ増進スルノ途ヲ開ケリ

抑モ地方公共團體ハ國家組織ノ一分子ナルヲ以テ其健全鞏固ナル發達ヲ遂クルト否トハ直ニ國運ノ汚隆ト富强ノ消長トニ至大ノ關係ヲ有ス而シテ地方公共團體ノ發達ヲ促サント欲セハ先ツ其民衆タル者須ク鄉國ヲ愛護シ私ヲ捨テ公ニ徇シ小ニシテハ隣保相佑ケ大ニシテハ義勇公ニ奉シ健全ナル公德心ヲ發揮シ進テ忠良ナル臣民トシテ敢テ國家ノ責務ニ任スルヲ要ス是レ

明治聖帝ノ宣示シ給ヘル教育勅語ノ神髓ニシテ古來ノ聖賢乃チ修身齊家ノ道ヲ説キ直ニ以テ治國平天下ノ根源ト爲シタルモノト其揆一ナリ願フニ我帝國カ立憲法治ノ制ヲ敷キ



シ以來既ニ幾多ノ星霜ヲ過セリ其間法政上政治上臣民ノ權利ハ漸ク擴張セラレ隨テ其義務モ亦漸ク嚴明ヲ加ヘタリ是レ立憲制ノ通則ニシテ國運ノ發展民力ノ增進皆之ニ因テ發生シ社會ノ安寧民衆ノ福祉亦之ニ因テ保障セラル若夫レ權利ノ擴張アルヲ知テ其負荷スル所ノ義務ヲ忌避スルカ如キアレバ何ヲ以テ國家ノ重器ニ任シ臣民ノ責務ヲ盡シ海外ノ萬邦ト對峙シテ帝國ノ光輝ヲ發揚スルコトヲ得ンヤ深ク猛省セサルヘカラス

本總督莅任日尙ホ淺シト雖熟々全島ノ民情ヲ視察シ其ノ忠順公ニ奉シ勤勉業ヲ勵ミ教化日ニ普ク人文月ニ進ミ風化最モ順境ニ在ルヲ洞觀シ漸次立憲法治ノ民タルノ資質アルヲ認識シ爰ニ新制度ヲ實施スルニ到リタルハ寔ニ欣躍止ム能ハサル所ナリト是ニ於テ本總督赤心ヲ披瀝シ敢テ一般官民ニ誥ク庶クハ能ク斯旨ヲ體得シ其慶ヲ享受シ忠實履踐其利ヲ擴メ其弊ヲ除キ國家ノ爲メ民衆ノ爲メ本制度ヲシテ克ク有終ノ美ヲ收メシメ更ニ進テ一層改善進步ノ境ニ達センコトヲ

大正九年十月一日

臺灣總督 男爵 田 健治郎



## 序

歴史は政治の源である。俱に人類の生活を永遠に照す光である。往昔土蕃が原始的生活を營んで居た時代から莽甲へ、艚舩から臺北へ、そして島都へと幾多變遷の過程を取つた『吾等の大臺北市』も亦その光輝ある歴史の編纂に依つて一段の光彩を添へるのである。現代の市民も亦この島都幾百年の歴史の存在に依てのみ、その建設事業の如何に困難であつたかを察し得るのである。過去の史實に顧み現在に參酌し以て、將來市政の參考に資するは獨り市理事者のみならず、市民の最も喫緊必要とする所である。

思ふに我が臺北市は有史以來實に三百有餘載、支那の明朝の初年には已に漢人の來往ありしものの如く、降つて十七世紀の初め西班



牙人の占領時代より、和蘭人の占領時代を経て、明朝の恢復を目的とする鄭氏の占領となり、更に放慢なる清國の領有に屬する等、その歴史は實に洪荒潰廢を以て始終したのである、殊に前清の治下に於ては、匪亂械鬪相次で起り、政府亦化外の民として、無策曠廢に放任し爲に憐むべき民庶は毎に戰々競々として、生をこの邊陲に送るのみであつたが、明治二十八年帝國の版圖に入るや、臺灣總督府をこの地に定め、臺北廳を置き邦人の居住するに至り、市街の衛生設備を整へ、街路及上下水道の敷設延長、淡水河護岸壁の築造を完成し、城内の市區改正を施し、新領土の政都としての諸機關は概ねこの處に集め文化的施設を施すに至りたるは、永久に臺北市觀の上に大なる輝きを添へたるものと言ふべく、之等は一つに歴代總督を



始め關係當路者たる先輩諸公は勿論のこと、市民諸君が何れも島都建設の熱誠を以て事に當り全力を舉げて之が經營に任じ、大臺北市をして今日の確乎たる基礎の上に置かれたるものである。

大正九年臺北市に市制實施以來已に十有一年、この期間に於ける市政の進展竝に市民生活の充實發展は實に目覺しきものがあるのを認め得るのである、即ち市制施行當時の人口十七萬人に對し現在は二十五萬人に達し、市の歳入出に於ても大正十年年度の豫算額百六十三萬餘圓に對し、昭和六年度の豫算額は三百九十一萬餘圓に達し、更に市の生産額に於ても大正十年の二千八百八十七萬餘圓に對し、昭和五年には三千二十八萬餘圓を突破し、又小學校竝に公學校に就て見ても大正十年度に於ける學級數二百五十八兒童數一萬四千百五



十三人に對し、昭和六年度には學級數四百五兒童數二萬四千七百十  
一人を算し、異常の進暢を示しここにも伸び行く偉大の力を感ずる  
ものである。殊に多年の懸案たりし大臺北市建設を目標とする大市  
區計畫は最近總督府の都市計畫委員會に諮問せられたるは周知の事  
實にして、その計畫案に據れば内容外觀とも島都たるの實を供へ開  
け行く新臺灣の首都たるに耻ぢぬものであつて、この計畫が進めら  
れ具體化さるゝに至らば、臺北市の面目は全く一新して素晴らしい  
大都會となるであらうことを豫想せらるるのであつて、市民も又そ  
れ丈けの意氣と實力とを有して居るものご信ずるのである。

- 7 -  
今更申す迄もなく、我が臺北市は實に島民文化の源泉にして、又  
政治經濟の樞軸である、島都の隆替が直に我が臺灣全島の利害消長



に重大なる關聯を有し、その實力の及ぶ所極めて廣く且つ深いものがある『一層住みよき都市』への憧憬、その都市に對する熱誠眞摯なる愛、敬、信があつてこそ都市はその有終の美を收め得るのである、我が臺北市の建設に當り創造的新味を發輝して一層光彩ある實績を擧げ以て内地の先進都市や、姉妹都市に對して充分の氣を吐き得るの日の到來を希待して已まないのである。

『識るは愛するの始』と言ふから、先づ過去の臺北市の歴史と現在の市勢實情とを闡明周知するは、當面の喫緊事と言はねばならぬ、この時に方り畏友田中一二氏の主宰せらるる、臺灣通信社の編纂に係る『臺北市史』の好著世に出づ、繙て之を讀むに文意暢達、筆致端麗、出典自ら據る所あり、資料亦信憑すべく、史的沿革に關し一貫



した知識を與ふると共に趣味又横溢加るに市政の大觀を極めて懇切に市民の眼前に展開し、その市政に對する關心と愛市の念を喚起するの楔子ともなる誠に會心の快著述にして、新臺北市の盛觀を江湖に紹介し併て之を後昆に傳ふるに足るべきは信じて疑はざる所である、再版發行に際し、偶々余は臺北市尹の職に在るの故を以て、乞はるゝがまゝに欣悅の情を以て所感を舒べ序に代ふと云爾。

昭和七年三月下院

臺北市尹 西澤義徵



## 序

(第一版)

島都臺北市、それは實にわが偉大なる臺灣總督政治の善政精神を具現したものである。則ち本書は帝國が南方新附の植民事業に成功したるその表彰記念塔を建設したものと謂ふべきである。

臺北が地上に建設せられて既に二百餘年の歳月を閲みし、臺北市制の實施以來早くも十一年に及んで居る、而してこの建街から發展への變遷は、その恵まれた地文と、日進月歩の人文とに依つて、著しき進展を見、殊に最近島都としての繁榮いよく超スビー・ド式に面目一新し、堂々たる大都市が建設され、時代に適應した文化的施設は文明の都市たる誇りを示すに至つたのである、此苦難經營には先人の尊き血と汗と力とによつたもの多く、幾多の犠牲が拂はれて居ることを想察し得るのである、とは云へ時は絶え間もなく過ぎて、古き人は失はれ、徒に眼前の事實のみが残つて過去の事歴漸くに滅び行がんとしてゐるのである。殊に一地方の榮枯盛衰の變遷は、これを物語るもの甚だ尠く



之を傳へる文筆又乏しく、我臺北の歴史の如き正にその好適例であつて、改隸前は一つとして臺北を語る歴史の存するを聞かず、僅に淡水廳誌の如きに短簡に記されて居るに過ぎない、改隸後は二三此の種の刊行物が官の手に依つて發表されたが、臺北地方のはその一部分に收められて、歴史としては甚だ不完全なるものであつた、故に臺北市當局に於ても、昔を語る古老も漸くその數を減じ、參考と爲すべき文書又散逸して蒐集至難なるに鑑み、先年市史編纂の事業に着手し、漸く脱稿したと云ふことであつたが、何等かの事情に妨げられて上梓の機を逸し、徒に未定稿として筐底に納められてゐるのは惜しいことである。

茲に於て本社は臺北市制實施十年を送つた今日、之を記念すべく本書の出版を敢行した所以である、本書の編纂には、本社をして此事業斷行を勸説した社友橋本白水、田澤震吾兩氏の力を借ること多く、又西岡英夫氏の文藝的彩筆に負ふたものも尠くないが、主として田中一二社長が當時病床にあつたにも抱らず記者永島孝、守満憲の二君を鞭撻して各方面の資料蒐集に苦心し、かくて偉觀壯觀を呈せるグレート臺北、オール臺北の



過去現在を通じ、之を知らんと欲するものに取りて必要の事項を悉く網羅し、先づ其全體を盡したと言ふてもよいと思ふのである、而かも本書は、彼の徒らに資料を羅列集積したに過ぎない無味乾燥の官僚的出版と類を異にし、取材の如きは一つに記者獨特の秘法に依つたもので、筆を興味本位に採り、透徹せる觀察と細心の用意とを以て記述し、行文流逸、文藻又豊富にして含蘊無窮、眞に一讀三嘆せしむるに足る趣味横溢の編著であることを信じて居る、而かも卷末の『都市計畫と其將來』『歴代市尹助役と其功績』及び『臺北市現勢一覽』などは些か苦心を拂つたもので、先づ得難き資料を纏め得と思ふのである。

特に内海市尹の厚意に依つて、彼の市史資料の一覽を許されたことは、本書の編纂上大に参考と爲すべきものあつたは勿論である、かくて『史』の一字を附する此種書冊編著の記録破りとも謂ふべき型變りの一書を完成し得たことは、編者の以て大に誇りを感じざるものである。

昭和六年も將に暮れんとするに際し、この大臺北表彰記念の出版は蓋し有意義のこと



ではあるまいか、而も卷頭に現市尹の臺北市建設の精神と理想とを宣明せる熱血的一論文と、折よくも此時に來臺された巖谷小波先生が特に雅筆を揮つて題字を寄せられたことは、特に本書を華飾したもので、又之が公刊に付て市助役佐々木金太郎氏、臺北市の長老三好茶苦來山人、蓑和米南先生、安田勝次郎翁を初め、市の公人であり社友である鈴木重嶽氏、近藤滿夫氏諸氏の御厚情を賜はつたことは誠に感激に堪えない、特に茲に記して謝意を表するものである。

昭和六年晩冬

臺灣通信社編輯同人



## 第二版序

太田總督の退官によつて南總督の蒞任を見、之を機會に臺灣官場の大異動行はれ、内海市尹は出で、新竹州知事に榮轉し、税關長西澤義徵氏代つて臺北市尹の要職に就かれた、よつて本書も人事に關する一部を更改して、再版を發行するに至つた。今や大臺北市は剛直を以て鳴つた内海忠司氏の巨腕に依りて基礎工事成る、後任西澤義徵氏は練達の仁、必ずや其用意周到は、市事業の一切に對して有終の美を完了するであらうことを信じて疑はない。本書の再版又些か意義あるべきを信するものである。



目次

巖谷小波氏 題字

田臺灣總督市制實施諭告

臺北市尹內海忠司氏序文

編者自序

記事

歴史が語る臺北の今昔

◆臺北平野の開拓と艋舺の殷賑

…臺北平野は蕃人の占據地…蕃地侵佔と閩人の開拓…臺北の都邑と艋舺の建街…三艋と謳はれた艋舺の殷盛…

◆淡水河の水流と大稻埕の建街

…艋舺に起つた分類械闘…大稻埕の建街と烏龍茶…淡水河の水流と艋舺大稻埕…土地柄から見た兩街と艋舺人…稻江人…



◇城内の出現と附近の村落二三……………三五

…臺北城の造營と城内の出現…特色を見せた臺北三市街…劉銘傳の新設施設と臺北…變遷のあつた附近の村落…

◇領臺後の臺北と文明都市建設……………四六

…皇軍の臺北占領と土匪掃蕩…領臺後の臺北三市街と進展…時代の變遷と臺北の繁榮…文明都市の建設と文化の向上…

### 繁榮する臺北の鳥瞰圖

◇昔の臺北三市街と臺北の市内……………八二

…所謂臺北の三市街と臺北市…位置地勢と廣袤と人口…臺北の氣候天氣と夏季…伸び行く臺北市と新開地…

◇市内を装ふ大小の道路と街観……………一〇七

…綠樹に彩られた臺北市街と三線道路…改善された大小の道路と淡水河護岸壁…市區改正工事と街観美…勅使街道と遺物城門…

◇街観美の建物と内臺人の住宅……………一三二



…内地人街と本島人街と街観…改善された本島人家屋と文化住宅…便利な亭仔脚と南國氣分…城内の  
建物と郊外の農家…

◇交通機關とスピード時代出現……………一五三

…臺北市内の交通機關と變遷…減退した轎と人力車と激増の自動車自転車…タクシーとバス…スピード  
時代の出現と交通整理…

◇大小公園と散策地と涼み場所……………一六九

…北隅の圓山公園と中央の新公園…楢園公園と市内の小公園…散策地の植物園と近郊…夜涼の場所と  
臺北人…

## 臺北の進展振と各世相

◇島治の中樞地臺北市とお役人……………一八二

…臺北市の官衙と官界人…官舎街風景と官吏…官界の動靜と臺北の市況…奥さまの今昔と現代…

◇活動する新聞雜誌界と筆の人……………二〇六

…日刊週刊紙と操觚界…新聞記者と雜誌記者…市内刊行雜誌と刊行物…文筆の人と口の人…

◇臺北の公共團體と社交の團體……………二二九



…主な公共團體…日本赤十字と愛國婦人…鐵道ホテルと臺北驛頭…内臺人の社交振と内臺人融和…

◇商業地の臺北市と臺北の商店……………二五〇

…商業地域と内臺人商店…金融機關と會社株界…内臺商人の營業振と商業團體…出張通信販賣と臺北商人…

◇誇り得べき公設市場と行商人……………二七六

…公設市場と市場商人…市場出入の人々と女風俗…行商人と臺北の物價…雜貨屋と購買組合…

### 産業上より觀た臺北市

◇臺北市の産業界とその生産額……………三〇三

…工業不振は臺灣が農本位な故…改隸後の産業進展と産額…臺北の産業開發と進歩…現在臺北の産業と生産額…

◇市内の耕地と農業及び畜産業……………三二八

…市勢の伸展と耕地面積…主要産品額と農民生活…畜産業と農家の副業…市の奨励と指導…

◇臺北市の工業地帯と家内工業……………三三四

…臺灣の工業と臺北市…主要な工業と産額…臺北市内の工業地帯と主要な工場…家内工業とその變遷…



◇市内に於ける鑛業及び水産業……………三〇八

…臺北市の地勢と鑛業…淡水基隆兩河と水産業…鑛産高と水産高…水産業者と養殖業者…

◇各種の副業と労働者及び勞銀……………三五二

…副業内職と内臺人…苦力とその他の労働者…労働者の種類と苦力…勞銀と労働者及勞資運動…

## 臺北市の衛生保安と軍隊

◇臺北市の衛生施設と保健設備……………三六八

…衛生保健の施設と臺灣人…保健と臺北の水道…惡疫減退と防疫作業…醫事機關と墓地火葬場…

◇市の警察と消防と罹災民救助……………三九一

…臺灣の警察機關と臺北の警察…保甲壯丁團と消防組…青年團と在郷軍人班の活動…罹災救助と義捐

金募集…

◇島を守備する軍隊と臺北市民……………四〇四

…臺北の兵備と變遷…兵隊さんと臺北市民…兵事係と多端な事務…臺北市内の在郷軍人と其活動…

## 臺北の學界と運動競技



◇進展を示した教育界と向學心…………… 四三

…教育の普及と向學心の勃興…共學制の發布と入學問題…國語の獎勵普及と國語修得者…臺灣の女性の覺醒と女子教育…

◇完備した教育機關と研究機關…………… 四九

…備つた學校系統と臺北の學校街…小公學校幼稚園と私立學校及書房…臺北市の教育施設と社會教育…研究機關としての中央研究所…

◇向上した讀書熱と趣味と研究…………… 四五七

…向上した趣味と盛んな讀書熱…利用の多い圖書館と博物館…婦人の趣味と讀書と兒童…研究熱の勃興と學會…

◇講演會座談會とラヂオの放送…………… 四七一

…盛んになつた講演會と座談會…聽衆の種類と女性の入々…童話口演とお話の會…開拓されたラヂオ放送…

◇旺盛時代を示す臺北の運動界…………… 四八二

…臺北の體育運動の變遷と今日…臺灣體育協會と運動團體…野球、庭球と陸上競技…臺北市内競技の運動場と運動熱…



# 臺北の治政と市の出現

◇政治の沿革概要と臺北三市街……………五〇〇

…改隸前の臺北地方と治政…改隸後の治政と臺北三市街…地方長官と臺北の行政官廳…臺北三市街と  
臺北市の出現…

◇臺北市政運用と市の諸機關……………五二三

…市の行政機關と職員…諮問機關と諮問事項補助…機關と活動…市の制定した徽章…

◇伸展する臺北市勢と市の財政……………五二一

…臺北市の市勢と市の豫算…市の出現と市有財産…市の施設と市公債及借入金…市の財政と稅務概況…

◇過去の都市計畫と將來の改正案……………五三一

…市區計畫事業の沿革…特殊事情と其將來…臺北市街概況…

◇歴代市尹助役とその功績……………五三九

…名市尹武藤針五郎老…メーポアの太田吾一君…政治家肌の田端幸三郎君…美男子増田秀吉君…快男  
兒内海忠司君…才人佐々木金太郎助役…



# 臺北の名勝と風俗の變遷

◇臺北の名勝舊蹟地と臺北名物……………五六

：内市の神社佛閣と神佛廟：市内の名所舊蹟と附近の史蹟名所：遊覽地としての近郊と北投草山：臺北の名物とおみやげ品：

◇生活風俗の變遷と臺北人……………五六九

：生活狀態の變遷と流行の傾向：新職業の出現と婦人の街頭進出：臺灣人の年中行事と内地人：

◇臺北の社會事業と細民の生活……………五八五

：臺北の細民部落とごん底生活：浮浪者と不良少年少女：不景氣の襲來とルンペン：臺北の社會事業と市の施設：

◇臺北の歡樂境と柳暗花明の巷……………六〇四

：内臺人の享樂振りと歡樂境：興行界の變遷と興行物：内臺人の遊興振りと花柳界：臺北市内の窺窟と白粉の女：

## 臺北市十一年略史

◇自大正九年至昭和六年十一月重要事歴……………六二六



臺北市現勢一覽

臺北市町名一覽……………六四四

臺北市行政機關一覽……………六四五

市尹助役任歷表……………六四六

臺北市有財產一覽……………六四七

臺北市財政一覽……………六四八

臺北市土地一覽……………六四九

臺北市戶口一覽……………六五〇

臺北市地價一覽……………六五一

市公債及借入金一覽……………六五二

臺北市稅一覽……………六五三

臺北市生產價格一覽……………六五六

臺北市農耕地並農業人口表……………六五七



臺北市教育費一覽	六五八
臺北市傳染病患者一覽	六五九
臺北市給水一覽	六六〇
臺北市土工費一覽	六六一
臺北市勸業費一覽	六六四
臺北市物價並勞銀調一覽	六六五
臺北市公設市場現況一覽	六七〇
臺北市公設質舖現況一覽	六七三
臺北市職業紹介所年次成績一覽	六七四
臺北市商事會社數一覽	六七四
臺北市金利一覽	六七五
臺北市宗信徒數一覽	六七七
神社佛閣教會寺廟一覽	六七八



臺北市學校一覽…………… 六八〇

臺北市官設社會教育團體一覽…………… 六八四

青年團少年團一覽…………… 六八六

臺北市官設社會事業團體一覽…………… 六八八

臺北市私設教化社會事業一覽…………… 六八四

臺北市在任主要官吏…………… 六九一

臺北市職員一覽…………… 六九三

臺北市在任主要武官…………… 六九四

臺北市在任府評議員…………… 六九五

臺北市在任州協議會員…………… 六九五

臺北市協議會員…………… 六九六

臺北市町委員…………… 六九六

臺北市常設委員…………… 七〇三

臺北市臨時土地整理委員…………… 七〇五



臺北市方面委員……………七〇六

總督府都市計畫委員……………七〇七

諸團體諸組合一覽……………七〇七

主要銀行會社一覽……………七二二

臺北市地圖……………

### 寫 眞 目 次

臺灣神社…建功神社…太山總督…木下長官…臺北州の中堅…歴代の臺北市尹…内海現市尹…臺北市役所の中堅  
臺北市の二長老…臺北市の歴々…本町通り…臺北市青年團…總督官邸…臺北橋…臺北州廳…臺北中央市場…  
龍山寺…高等學校…臺北醫院…臺灣電力會社…圓山グラウンド…二線道路…亭仔脚…本島人の祭典行列

### 書中挿入寫眞目次

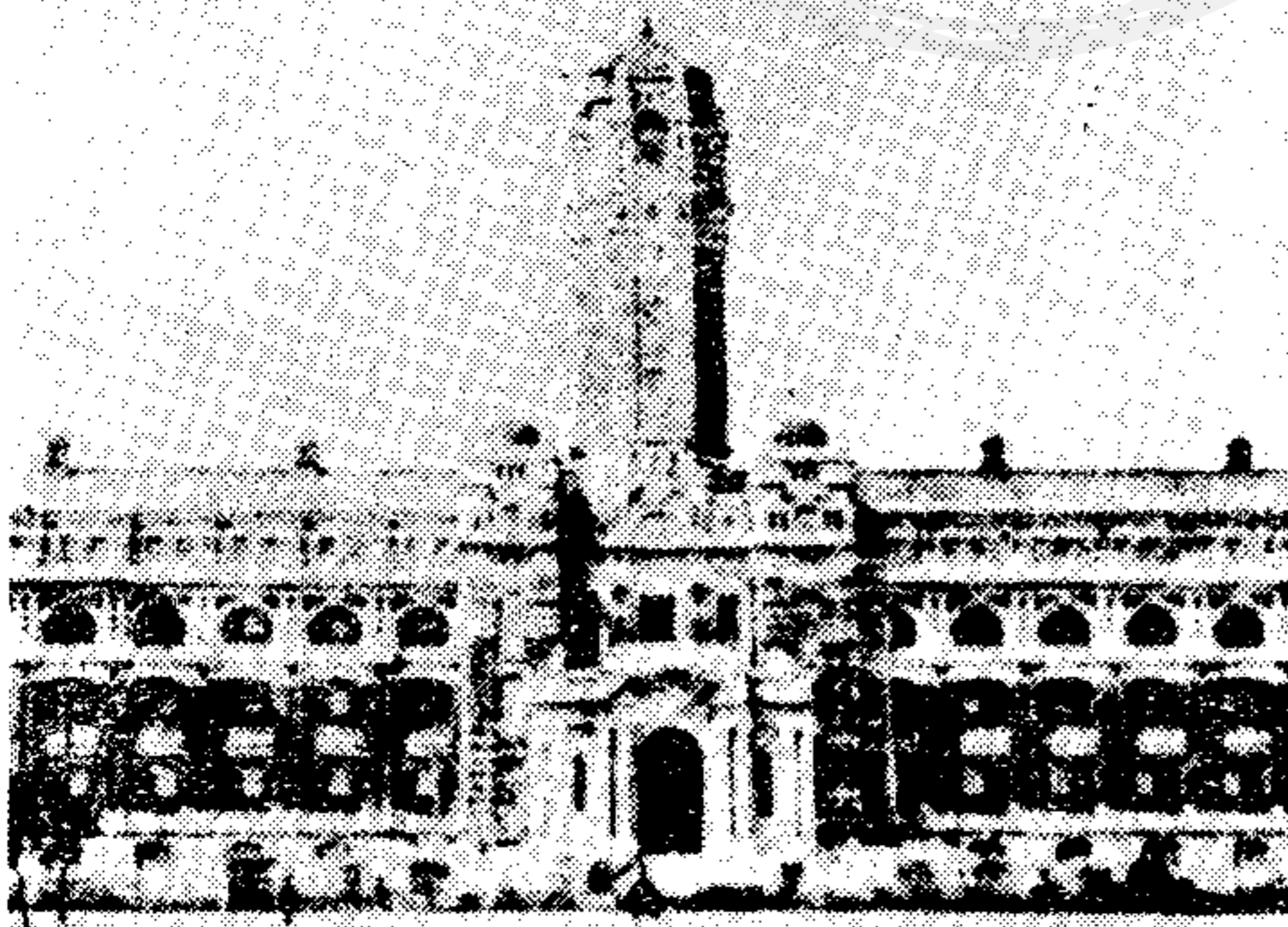
新舊總督府廳舎……………一  
榮町通り…臺北新公園……………八一  
西門消費市場…鐵道ホテル……………八一  
郊外農園…臺北洋式旅館……………三〇二  
臺北水源地…臺北守備隊……………三〇七  
臺北博物館…植物園……………三二一  
官衙…臺北市役所……………四九九  
寺廟…内地式旗亭……………五五五



# 歴史が語る臺北の今昔



- || 臺北平野の開拓と艋舺の殷賑 ||
- || 淡水河の水流と大稻埕の建街 ||
- || 城内の出現と附近の村落二三 ||
- || 領臺後の臺北と文明都市建設 ||
- || 市制の實施と出現した臺北市 ||





## 歴史が語る臺北の今昔

### 臺北平野の開拓と艋舺の殷賑

…臺北平野は蕃人の占據地…蕃地侵佔と閩人の開拓…

臺北の都邑と艋舺の建街…三艋と謳はれた艋舺の殷盛…

燈火の下、卓の上に擴げられた一葉の地圖、それに點綴された都邑や交通線に、幾多の變遷が行はれたか、その過去の動きが見る人の考察に伴はれて、その土地の興亡衰盛が窺知される。即ち山川草木は舊態を存しながら、歴史が語る種々の事實が、繪卷物を繰るやうに開展される。而もその昔荒涼たる平野、其處に今の都邑が出来たと云つても、その古い地圖に對しては、誰かそれに氣がつくものがあらう。親切に地勢を教へられ、あゝこれがあの山か、あの川かど、それ等の萌芽的局所々々を指示されて、初めて然うかと合點されるのである。恁うしたことは、一面に於て建設から發展へ、人々の不斷の



努力が拂はれ、向上を期しての慕進した人々の、奮闘の血と汗との尊いものがあるのを示して居る。羅馬の都は一日にして建てられぬとは、古い言葉であるが、全く興亡の運命に支配さるゝ都邑は、歴史が語り示すが如く、人の力と時の勢とに依つて動され、興廢が見らるゝことは、決して否定することが出来ぬ。臺灣の首都として、近代的文明の都市と稱せらるゝ我臺北の如きも、その一つに相違なく、その昔、誰か淡水河の河畔の地に、今日の臺北市街が建設されやうと思つた者があるか、夢想だもせなかつたであらう。古い地圖を見ると、淡水河の畔に、小さな驛次として、艋舺の名に依つて、その所在が示されてあるばかり、臺北の名は見られない。今更に帝都東京の地が、月影が草より出てゝ草に入ると歌にもよまれた、あの武藏野の曠原中にある一小邑であつたことや、浪花の殷盛を謳はるゝ大阪の地が、茅渚の浦畔の淋しい村であつたことを記さずとも、今を盛りと賑ふ都市の何れもは、その昔は淋しい、小さな村邑に過ぎなかつたことは何處も同じで、歴史が然う我々に教へて居るし、興廢に關する迂餘曲折が生んだ幾多の波瀾が、先人の奮闘努力を語ると共に且つ示して居る。臺北！我臺北市も亦た然うした徑



路を辿つて、今日の盛を致したものである。

人口二十餘萬を抱擁し、臺灣統治の中樞地となり、商業繁華の巷を出現し、一大文明都市として殷盛を示す我臺北市も、僅々百五十有餘年の星霜を経て建設されたもので、その昔は他のそれと同様、荒涼茫漠たる曠野で、鬱林が所々に散在して居た、所謂臺北平野の一地方で、先住民族たる蕃人が、此地を占據し、他の民族の侵入を許さず、天を蔽ふ鬱林中を奔走し、人の影を没するほど伸び茂つた荆棘の中を潜り、鳥獸を獵り、河流に獨木舟を浮べて魚介を獲り、地に蕃薯の類を栽培して、原始的生活を營んで居たのである。従つて久しい間彼等蕃人以外の人々は、慄奸蠻勇馘首の暴戾を逞ふする、彼等の兇害を恐れて敢て踏み入るものなく、完全に蕃人占據の地となつて居た。彼等蕃人は今日云ふ生蕃人でなく、平地に居住して居たもので、平地の蕃人と云ふ意味から、支那人は平埔蕃と呼んで居た。

歴史で知る如く、臺灣には先住民族として、南洋系の蕃人が占據し、各地に部落を作つて居た。臺灣に支那人が渡來したのは、可なり古い時代であつたが、支那の一領土とな



つたのは清朝時代で、三百有餘年前のことであるが、その以前に和蘭人が占據して居たが、それは臺灣の南部地方で、北部の地方を勢力範囲に入れるまでに至らなかつた。而してこの間西班牙人が北部地方に來て、淡水の地を本據に勢力を擴めたが、それも蕃人を掌中に入れることが難く、多少臺北平野に侵入したものの不結果に終つた。西班牙人を北部から退去させた和蘭人は、南部地方で占據するのみで、北上することが出來ず、鄭成功の一撃で、臺灣を放棄してしまつた。鄭成功も南部地方を本據とし、勢力を増大してから、部下の猛將を引き具して北上した。鄭成功が臺北平野に自ら兵を進めたと言はれるが、これは甚だ疑しく、臺北平野には代理者として、三將軍と稱する猛將三人を遣して、自らは南部地方の問題のために途中から歸南したと云はれて居る。それは兎に角として、支那人が臺北平野に入り込んだことは事實であつたが、まだ蕃人の勢力は容易に衰えず、盛に曠野をに逐鹿して居たし、鄭軍の將士中、足を此地に留めたものがあるが、勢力を振ふほどでなかつた。清朝時代には、鄭家が滅亡したので、臺灣を領して屬地となし、清朝政府が統治するやうになつた。もうこの時分、一葦帶水の地位に在



る關係から、從來にも増して、清人の渡來者が夥しく、年々増加する一方であつた。而もその渡來者は、福建省の漳州泉州地方と、廣東省の潮州地方、何れも南方支那地方の人々であつた。恁うした渡來者は、既に和蘭人や鄭氏に依つて開拓された南部地方に多く、中部以北の地方には比較的尠かつたのは、臺灣の開拓事情をば考察すれば、直にこれが了解されるのである。

清朝が臺灣を領有した當初、乾隆二十三年（今より二百四十八年前）の頃は、既に支那人の渡航移住する者が可なり多く、明の萬曆年間（今から三百四十二年前）に支那人が初め移住を企て、以來、天惠の郷土と知られたので、距離も然う遠くはないし、南方支那殊に福建地方の人々は、風波荒き臺灣海峽を越へて渡來し、天啓四年（今から三百六年前）には、臺南地方のみにでも十萬を算した位、その後鄭氏時代にも盛に渡來して愈々多きを加へた。然るに清朝政府は、治臺策の一つとして、臺灣は海外孤懸の地、奸客逋逃の藪となり易きが故に、開墾の民を聚むべからずとして、所謂三禁を發布したものの、當時臺灣を非常な樂郷と想ひ、而も苦しめられた戦禍に、生命財産の危を懼れること夥しい、福建地方



の住民即ち閩人は、恚うした禁令を犯しても、尙安穩の地に就かうとして、官の眼を偷んで渡來する者が多かつたので、三禁も畢竟空文に歸してしまつた始末。而も康熙の中葉（今から二百四十年前）には、粵人と云ふ廣東省潮州地方の住民まで、閩人の後を追ふて渡來する者亦多く、康熙末葉（今から二百十年前）の頃には、支那渡來の閩粵人が、臺灣の全半に分布される狀勢となつた。従つて萬曆年間即ち明朝の初年、支那人の移住以來、西班牙人や和蘭人、さては鄭氏の占領時代を経て清朝の領有までは、全く荒蕪に任せ、蕃人の逐鹿場裡に委し、治域の外に置かれた臺北地方も、恚うした閩人渡來の夥しい勢が及ぶやうになり、南部地方よりは後れたものの、閩人の渡來に依つて開拓さるゝに至つたのである。古い記録に依ると、臺北の地の開拓は、康熙四十七年（西曆千六百九十八年）に、泉州の人陳賴章と云ふものが、官に請ふて大加蚋堡、即ち現在の臺北市の地を開墾すべく着手したもので、これが實に臺北の發祥であること云はれ、今から二百三十三年前のことである。勿論北部地方は既に鄭氏時代には、兵を農に寓し、大に開墾に勉めたので、南は鳳山から瑯嶠（恒春）に及び、北は諸羅（嘉義彰化）の平原から、竹塹（新竹）淡北（臺北）の一部



に及んだと云ふから、この時代多少開墾されたものであらう。加之清朝領有以來、三禁を犯して盛に移住が行はれた結果、單に南部地方のみに渡來移住したものでなく、他にも移住したに相違なく、福建省の廈門地方とは、交通の都合が好い、滬尾即ち淡水地方にも移住したことは認められ得る、況んや往年西班牙人が占據した淡水(滬尾)は、港として存在が認められて居たから、此地を指して閩人が移住すべく渡來したに疑問がない、畢竟するに臺北地方の開拓が閩人の手に行はれるに至つたのは、淡水に渡來して、此地から更に淡水河の流を利用溯上し、開拓の手を臺北平野の地に伸したものであると云つて差支ない。既に淡水地方に移住開拓が行はれ、續いて新莊方面に到り、更に臺北に及んだもので、恚うした事情は、新莊や淡水の變遷を物語る、歴史や古文書、さては古老の話に徴しても明白である。臺北の地を開墾すべき官許を得た陳賴章も、恚うした渡來移住者の一人で、彼は淡水より淡水河を上溯して新莊方面に至り、同地方が閩人の手に開拓されつゝあるのを見たので、更に淡水河の對岸艋舺方面の地が、曠漠たる原野で蕃人に占據され、彼等が逐鹿の場裡に委せられて居たので、蕃人と交易の傍ら開墾しやう



と思つたのであらう。陳賴章が開墾に着手した時には、今の新莊方面の平野は、閩人に依つて漸次開墾の地域が擴大され、小さな村邑さへ所々に建設されて居たのだ。官許を得た彼は、郷人を招き寄せ、淡水河の一河畔、シヤモア社と云ふ蕃社のあつた地點、艋舺（今は萬華と記される）の地に到り、蕃人に酒肉布片等を與へ歡心を買ひ、交易の傍ら彼等と開墾を約して拓殖に努め、着々開墾地域を擴大して、漸次蕃地へと侵占した。蕃人は狩獵漁獲を主業とし、僅に蕃薯類を栽培して居たに過ぎず、而も彼等は原始的生活を營む、人智の低いもの、閩人の策に操縦されて、巧に土地を侵占されるに餘儀なくされた。陳賴章の開墾の事が郷關に傳はつてからは、同郷泉州人の移住開拓する者益々多きを加へ、而も後れて粵人たる廣東省潮州地方の人も移住開拓したが、閩人は我より後に來れる人として、これを客人と呼び、廣東人とも稱して、幾分多勢を頼んで輕視し、兩者は兎角仲が好くなく、多勢に無勢で少數の粵人は、更に開拓の地を他に求め、新竹地方に多くが移つた。

— 9 —  
鬱林所々に所在し、荊棘人影を没する曠野を我天地として占據し、異人種の侵入を防



歴嫌忌し、馘首の蠻行を敢てし、暴戾を逞ふした蕃人は、潮の如く押寄する閩粵人の渡來移住に、漸次その占據せる地を侵佔せらるゝに至つた。時の力もあらう、閩粵人の優越した勢力もあつたらうが、畢竟無智蒙昧の彼等は、人智の進んだ優越の渡來者に歸服せしめられたと云つて可い。支那民族の侵佔、これは臺灣各地到る所に見られた事實であつた。蘭人占據鄭氏治島の各時代は、切に本據の地附近を中心として漸次遠きに及ばし、その兵力に或は教化に、武威と愛撫で蕃人を歸順せしめ、勢力の擴大に努めたものであつた。而して清朝時代は夥しい移住者に依り開拓が盛で、彼等が進んで蕃人と交渉し酒肉布片を惠みて歡心を買ひ、婦女を娶りて信頼せしめ、物々交換を行ふ一方、證文を作り土地を借受け開墾を約し、業成れば蕃人の無智に乗じ、巧に操縦して遂に土地を奪ひ、彼等を驅逐し侵佔を逞ふした。それ故蕃人もこの狡猾極まる暴舉に憤慨し、その間激甚な争鬪が驅返し演ぜられ、双方幾多の犠牲者を出したが、この流血の慘劇は各地何れも同様であつた。然し優越した移住の支那民族は遂に彼等を壓服したので、地を奪はれた蕃人は、逃れて山地に入り生蕃人の群に加はり生蕃人となつたものがあり、或は滅



亡の悲境を見たものもあつたが、支那民族に屈し彼と同化したものも尠くなかつた、今  
熟蕃と云はるゝのがそれである。臺北地方も恁うした争鬪が、可なり激甚に繰返された  
ことは、各部落に傳はる古老の言に徴しても判るし、同化した蕃人の子孫も現存して居  
る。今日番とか蕃とかの姓を稱ふる者は、多くは同化した蕃人の子孫で一見それと知る  
由がないが、調査すると直に判明する。

閩人陳賴章に依り、公然と開拓が行はれた臺北地方は、爾來益々郷人の來航移住に因  
つて、大に開墾事業の進歩を見るに至つたが、この間蕃地の侵佔に伴ふ、對蕃人の争鬪  
に幾度となく、各地に隨所隨時に流血の慘事が繰返し演ぜられ、それが爲めに蕃人の乃  
に斃れた犠牲者の數も夥しいものであつた。然しその結果は、蕃人を驅逐し、或は滅亡  
せしめ、同化せしめたもので、完全に臺北の地は閩人粵人の手に歸し、後に粵人は新竹  
地方に多く移つたから、閩人の占むる所となつた。陳賴章が最初に開拓の第一着手地と  
して止まつたのは、淡水河の河畔の一地點で、シヤモア蕃社の地で、今日萬華遊廓のあ  
る地點であつた。最初は無論茅屋を二三建て聯ねたものであつたに相違ない、郷人が渡



來する者多きを加へてからは、家屋も増加して小邑を形造り、所謂昔の艋舺街が建設さるゝに至る端緒が出来た。臺北地方の繁榮は、實に先來閩人の血と汗との賜物、その結品に他ならない。而して新莊と云ふ都邑は、淡水河の西方に在るが、この方面には既に早く閩人が侵入開拓して居たから、所々に一部落が出来て居たものゝ、都邑としては存在して居なかつた。淡水河を隔てた艋舺の地が、漸次街形を成すに及んで新莊も街形を成したと云はれるが、陳賴章も初めは新莊方面に居たものらしい。陳賴章が本據を定めた地は、シヤモア、蕃社の地であつて、村落さへなく、陳賴章や郷人の家が建てられた位で、當時は蕃人の茅屋が點々と各所に見られるのみで、至つて淋しい所であつた。そこで閩人等は此地に止り開墾に着手したが、元來この地は、淡水河に臨んで居たので、淡水河の上流新店溪や大嵙崁溪の地方に居據した、屈尺蕃や大嵙崁蕃の生蕃人が、河流を利用し、これに獨木舟を浮べ、溪流を上下して、この地の蕃人と物々交換を行つて居たし、又たこの地の蕃人も河流を利用し、獨木舟に乗つて魚獲を行つて居た。而してこの獨木舟を蕃語でマンカアと云つた。支那人はその音を莽甲の文字で表はしたが、字音を



そのまゝ、魍魎とも書いたが、莽甲の字より魍魎の字が好いとあつて、魍魎と云ふことにされたが、大正九年市制實施に伴ふて、魍魎の字を萬華と改められたが、魍魎の文字の方が、今もよく廣く通用して居る。魍魎と書いてマンカと讀むのは難しいが、支那時代からのもので、久しい間云ひ馴れて居るから仕方がない。蕃語のマンカアから出來た地名で、後人は何時しかマンカと呼んで、この文字を用ゆるやうになつた。尙この地を昔は蕃薯市とか、蕃薯市街とも云つたし、時に今に恁う呼ぶ人もあるが、これは蕃人が栽培する蕃薯、即ち芋をば此處で賣買したゝめで、その市場と云つても小規模な賣買所が、今の遊廓有明町の妓樓のある一角であつたと、古老は云つて居る。恁うして盛に開墾されたのであるが、官國官憲は容易に政化を及ぼすべくもない事情にあつた時代なので、臺北地方の如きも、依然化外の地域にされ、僅に諸羅縣下の一地方として屬せしめたものであつたから、官の手は廻らない、移住者委せに放置されて居たのみであつた。その後二十五年を経て、雍正元年に淡水縣が出來、これが一地方とされたもので、雍正十一年に八里坌の地、今の八里庄（淡水の對岸）に巡檢と云ふ役所を置き、その後南方龜崙嶺の



山路を開通した結果、新庄街即ち海山口と云ふ都邑が出来た。恁うして漸次開拓されて行く間に、乾隆の初年（今から約百七十餘年前）漳州人の林成祖（林本源の先祖）と云ふ人が、郷人を引具して渡來移住し、新莊街に居て開墾を行つて居たが、更に大嵙崁溪を渡つて、新莊の對岸今の板橋なる枋橋の地に本據を定め、淡水河以西の地、新莊方面から枋橋さへは桃園方面までも漸次開拓して枋橋街を建て、林本源の大を致すの發展を見た一方、郭元汾なる人が、新店溪の一帶、今の景尾新店深坑と云つた方面と、遠く屈尺方面にも開拓の手を伸ばしたので、恁うした方面に、閩人の移住者が夥しくなり、その結果新莊街は非常に殷盛を呈し、八里坌の巡檢署も此地に移されるに至つたが、然し新莊街の南背面を流れ、淡水河に合する大嵙崁溪の下流は、年々洪水に依つて、上流地方から土砂が盛に流下して、遂に新莊河岸を淺くし、當時唯一の水上交通機關たる大戎克船の繫留に不便を感ずるに至つたが、その頃はもう艚舨の地一帶の開拓は餘程進歩し、多少街衢の形を成す位に人家も多くなり、一方新店溪一帶の地の開發と、新莊街の殷盛とに促され、恰もこの點が兩者の中心點となつて居る關係から、戎克船の繫留に不便を感じた新



莊街への舟の出入は、漸次艚船に移り來るの狀勢となり、物資の集散も、新莊から艚船へと移動する傾向が漸く著しく、従つて繁昌して居た新莊街に、一抹の衰運が兆し初めた。恚うして艚船は、一方開拓の進歩に連れ、人家の數を増すと共に、物資の集散する數量を、急速に増加し、商取引が盛に市街を構成する家竝が出来、何時しか立派な街衢が見られて來た。これも時の力、人の力であらう。

その昔蕃薯を賣買した小部落、蕃薯市街（後に歡慈市街と改めた）も、今は立派な商賞往來の盛な市街地をとなり、數筋かの街衢が縦横に建てられ、船着場所があり、魚菜肉の市場があり、妓樓旅亭が建ち並び、商戸軒を接し聯ねて住民亦た夥しく繁華は日を逐ふて進捗し、やがては新莊の殷盛は奪はれてこの地に移されてしまつた。かく乾隆の中葉頃にはこの地に都司が置かれて、都邑としての存在が認められ、乾隆五十三年には、八里坌口即ち今の淡水港の左岸の今の八里庄の地を開いて、對岸福州泉州等の航路を開始せしめ、運輸往來が便利になつた結果、淡水河の上流に在つて、開發の勢著しき都邑と知らるゝ艚船の地は、八里坌口に寄港した貿易戎克船を、更に此處より溯上して出入しせし



めたから、益々この方面の發達を促したことは夥しく、新莊の繁榮を河水の淺淤で移した艋舺は、恁うした事情の下に、一層の殷賑を見たものである。そこで二十有餘年の後嘉慶十四年には水師游擊を駐屯せしめ、艋舺は淡水廳下の一都市として、賑榮を示したもので、八里坌口の港が淡水河の流勢で、對岸の滬尾港即ち今の淡水港にその繁榮を移されて以來も、滬尾と艋舺との交渉は愈々頻繁となり、兩所は繁昌する一方であつた。

八里坌口の開港以來、漳州泉州の地方との來往は一層に甚しく、兩州地方人の郷人相具して來住する者、潮の寄するが如き勢であつたから、艋舺は勿論新莊その他臺北平野の各方面の開拓は、著しきものがあり、且つその發達は駸々として止まぬ狀勢を呈し、遂に人繁く地少きの形勢を呈し、侵佔の禁止の嚴令あるに拘らず空文に歸してしまひ、盛に蕃人を籠絡しては、その地を侵佔せるため、蕃人との争鬪は常に絶えなかつたが、遂に彼等の領域を侵略して、餘す所なきに至らしめたからその壓迫に堪え切れず、蕃人は遂に占據の地を奪はれ、或は滅亡し、或は相率ゐて山地に退轉し、唯だ少數者のみが、同化して餘喘を保つこととなり、嘉慶道光の兩年間には、全く閩人が臺北平野を開拓占



有してしまつたのである。而してこの間、臺北平野の開拓に努力した閩人や粵人中には、  
艋舺が既に陳賴章以來泉州人の手に占められたので、他の方面に進んだものも多く、  
艋舺の北方、今の大龍峒町と云つた、大龍峒方面から圓山大直劍潭と云つた、基隆河の附  
近一帯の地は、ト、ア、ロ、ン、ポ、ンと云ふ蕃社の蕃人が占據した地方であつたのを、  
閩人が侵佔したもので、大龍峒の地名の如きも、蕃社名を漢音譯したものださうな。その他朱厝  
崙や中崙、大安や頂内埔下内埔、さては六張犁三張犁等々、臺北市に今は編入された近  
郊の部落も、悉く閩人や粵人が、蕃人を驅逐し侵佔占據して、村邑としたもので、地名  
は多く蕃社名音をその儘漢字文字を當て嵌つめたものである。殊に六張犁や三張犁は、  
六人集つて開拓したからとか、三人で開發したからとか、その因縁から名づけ地名だと  
云はれ、また大安は、蕃人の兇害に安全地だと云ふ所から附せられた名だと云はれて居  
る。これでも彼等移住支那人の、蕃人占有の地を盛に開拓侵佔したことが想像し認めら  
れるであらう。而して恁うした各部落は、淡水河の流れに稍遠く、既に艋舺が街として  
繁華を見、これが中心となつたので、これ等の各地は一村落として存在して來たのであ



る。唯だ大龍峒のみは、地理的關係と、開拓者として陳維英の如き傑物が出て、大に土地の發展に努力盡瘁したので、艚船と相對して、一時は相當繁昌を呈したものであつた。

新店溪と大嵙崁溪と兩溪の下流が合して、臺北平野を貫流し淡水の海に注ぐ淡水河は、艚船の建街を見る頃は、その水深も可なり深かつた。既に新莊の街の背面を流るゝ大嵙崁溪は、上流から流下する土砂の堆積で水深が極めて淺く、戎克船の出入に多大の不便を來したに反し、水の深い艚船の河畔は、大小の戎克船が自由に出入繫留が出來たので、往來の戎克船は、もう新莊河畔を捨て、艚船に集まり、従つて貿易が此地に行はれ、物資亦た此處に集散することゝなつた。加ふるに閩人の開拓進歩に伴ひ、樟腦や茶やその他の土産品が、此地から輸出されると云ふ狀勢なところから、艚船に於ける商取引は旺盛となり、出入船舶の數も夥しく、艚船の河岸には常に大小の戎克船が繫留され、帆檣林立幅嶼を極むれば、旅客を對手の旅亭、さては商人や往來人、戎克の船頭衆を客とする、軒を竝べた旗亭娼家は賑ひ、絃歌さんざめき、港町の情調は濃厚なものがあつた。恁うした殷盛の街巷が出現し、盛に福建地方その他南方支那の各地方との往來が頻



繁になり、かの地の物資も夥しく輸入さるゝ一方、支那の文化が駭々乎として注入され、街衢整然と成り、人家櫛比して居住人多きを加ふるに至つて、支那の文化は此地に移され、觀音佛祖や天上聖母等の、彼等故郷で信仰して居た神佛が此處にも奉祀さるゝやうになり、かの名利龍山寺や祖師廟、さては天后宮の媽祖廟等々を初め、幾多大小の廟が建てられ、年々歳々盛な祭典が執行された。恁うして日々に繁榮般盛に赴く一方、遂に今から百十餘年前道光年間には、その極盛時代と呼ばれるゝに至り、古文書にも、『一府二鹿三艋』と記され、當時臺灣の首都たりし臺灣府（今の臺南）と、中部地方の港として繁華を示した鹿港と、駢稱して殷賑を謳はれ、北部臺灣地方に於ける、最も繁昌を極めた都市として、艋舺の存在が確認され、立派な都會となつた。従つて學海書院一名文甲學院と云つた官の學府や艋舺參將署、艋舺倉署、艋舺營等その他官衙學校が設けられ、駐屯の兵軍も置かれるに至り、臺北平野に立派な都が出現し、やがて臺北の地が、臺灣統治の中樞地となり、首都となるに至つたのである。陳賴章が開墾に着手してから、この時に至るまで、約百十餘年の歲月を閲した。



## 淡水河の水流と大稻埕の建街

…艋舺に起つた分類械闘…大稻埕の建街と烏龍茶…淡水河の

水流と艋舺大稻埕…土地柄から見た兩街と艋舺人稻江人…

古い文句ではあるが、榮枯盛衰は世の常、恚うした事實は歴史が物語る。時勢の變遷、時の力人の動きが然うさせるが、人亦た然り土地亦た然りである。而も建設から隆盛への努力の甚大なのに比して、衰退から滅亡への變遷の容易なのを感せずには居られない、槿花一朝の夢の比喻も然うだと領かれる。その昔一府二鹿三艋と駢稱され、その繁榮殷賑を謳はれる艋舺も、道光年間をその極盛期、頂上として衰退を餘儀なくするの運命に見舞はれ、此處に一頓挫を招來した。榮えたものはやがて衰へるとは云へ、艋舺の繁華に一抹の暗雲を投じたのは、この地に起つた例の泉漳兩州人の分類械闘で、これが艋舺の繁榮を挫き、漸次衰兆を濃厚ならしむるの一因を作つたものと云はれて居る。分類械闘これは支那民族の特有する民族性の一つで、同郷同地方の人々相結びて、他を排



し壓すべく、微細の事端を捉へて、相争闘して勢力を示し争奪を敢てするもので、現状の中華民國の狀勢も、考察の仕方ではそれと認められる。臺灣にも恚うした争闘は屢次繰返され、分類械闘に因る慘劇は、隨所隨時に演ぜられ、時に大波紋が描き出された例が尠くない。臺灣に渡來移住して開拓に汗と血を流した者は、福建の泉漳兩州地方出身者と廣東の潮州地方の出身者で、前者は閩族後者を粵族と呼んだ。彼等兩族は蕃人と争闘して土地を侵佔開拓する一方、時々分類械闘の紛争に、屢々流血沙汰を見たばかりか、同じ閩人でも、郷關を同じくせぬ泉漳兩州人間にも、分類械闘が屢次演ぜられたもので、各地何れもこれを見ざるなきの狀態であつたから、世情を騒がし不安を招くものゝ一つと云はれた。艋舺の繁榮に一頓挫を來し、爾來衰退の傾向を著しくせしめたのも同地在住の泉漳兩州人の分類械闘に歸因する。極盛期を出現した道光年間の繁華殷賑の夢まだ醒めやらぬ、咸豐三年夏七月、戎克船の出入繁き河畔の船着場に、貨物の揚卸に働く仲仕苦力の些細の紛擾口論が喧嘩沙汰となり、それに花が咲いた結果が、恐しい泉漳兩州人の分類械闘と云ふ、大波紋を描いての激しい争闘となつて、艋舺の地を戰場と



化せしめた。由來泉州人に依つて開拓に着手され、後れて漳州人が來住したから、泉州人は先住の誇と人數の多きを以て、後來の漳州人を壓制しやうとし、漳州人はこれに對抗し、屢々勢力の爭奪戰分類械闘が行はれ、兩者の間の確執は非常に甚しかつたから堪らない。河岸に働く仲仕の口論がこの確執に絡んだので火の手が愈々舉り、遂に泉漳兩州人は各團結を堅固に、艫舢の地に劍戟砲火を交ゆきに至り、さしも殷賑の巷は一朝にして爭鬪流血の巷と化し焚掠が盛に行はれたが、泉州人は戰利あらず、立籠つて敵に抗した祖師廟清水巖の建物は、包圍攻撃焼打され敗退し、漸く泉州同安縣人の部落であつた八甲庄、今の八甲町方面に難を避けたが遂にこれを保守する事が出來ず、同所に奉祀した城隍爺の神像を捧侍して、畦道傳ひに北方に退却し、漸く北方の原野に逃げて此處に一部落を建つるに至つた、これが實に大稻埕なる街衢が出現する起因を作つたのである。泉州人の敗退後の艫舢は、これが因を作つて爾來頓挫を招き、もう昔の殷賑を見るべくもなく、漸次衰退を示すやうになつた。この分類械闘の戰禍は、その及はず影響亦た甚大であつたかは略ぼ想像されやう。



艋舺盛衰それも時の力人の動きであるが、さしもに繁榮を謳はれた艋舺は、この咸豐三年の分類械闘で、極盛期を示した道光年間から約七年にして、一抹の衰兆が示されたわけである。艋舺はこの一頓挫に因つて、漸次衰退に傾く一方、敗退した泉州人に依つて建設された部落大稻埕は、これに反して隆盛を辿る機運に遭遇した。艋舺に起つた泉漳兩州人の分類械闘の流血沙汰が漸く消え去らうとした時、淡水河の西方新莊街にも在住の泉漳兩州人間に分類械闘が演ぜられ、その結果同所に在つた泉州人は、淡水河を渡つて大稻埕の地に、新に部落を建てた泉州人に合流し、此處に移り住むこととなりその數も多かつた。建設から發展へ、これが同所の泉州人を奮起努力せしめ、新興氣分を湧かしたが、更に新莊街からの泉州人を加へて、一層この氣分を濃厚強大ならしめたことは、後に立派な街衢が出現され、商業地として艋舺のそれにも優る殷盛を極むるに至つた事實でも知り得られやう。大稻埕の地は、ケイウナと云つた蕃人部落の所在地であつたが、臺北平野の開拓が閩人の手で盛に各地で行はれつゝあつた頃から、既に閩人の一部分は此地に來住し、三々伍々蕃人の地を侵佔して、水田を開き開墾に努めたもので、



その水田中に埕（庭の如きもの）と稱するものを設け、稻熟の秋にはこの埕上で粃を曝したもので、それで俚俗がこの地邊一帯を大稻埕と呼んだのが地名となり今日に及んで居る。咸豐三年八甲庄を敗退した泉州人がこの地を新に占據し、次で同六年及び九年の兩度新莊に於ける分類械鬪の結果、彼地から此處へ避難移住した多數の泉州人が來たので、それで聚落を成して以來、泉州人の往來は愈々繁く街衢も整然と備り人家も夥しく、やがて幾許ならずして立派な市街が建設されたばかりか、同治年間（明治初年）には、北部地方に在來から栽培された茶が、漸次進歩發達増産を見、茶業漸く盛況を示すに至り、烏龍茶の輸出市場とし、將又た再製工場地として、その名が頓に顯はれて、股賑を示すやうになり、且つ自然的に商業取引が盛となり、一頓挫を見た艋舺に代つて、漸次その中心地となるやうな勢を呈して來たのであるが、恁うした新興の大稻埕の勢に、艋舺は反比例して、商取引も退歩を辿り、繁華も大稻埕に奪はれ移されるやうになつて、唯だ古き都市と云ふ誇りの下に、街衢は舊態を保ち、漸く面目を持続するのみに變遷してしまつた。新興の大稻埕、艋舺の股賑が移つて行つた大稻埕の街は、全く分類械鬪に因つ



て建設されたもので、街としては艋舺の古さに比すべくもなく、咸豐三年以來であるから、大稻埕の建街は今から七十有八年前で、烏龍茶の市場とし、茶業發展の結果、一層繁華の度を増し、商業地と認められるやうになつたのは同治七年頃で、我維新の當初、明治元年頃からと云ふから、これまた今から六十餘年前になる。而して分類械闘が、恁うした結果を生んだが、その後艋舺にも泉州人は可なり多數居住して居たことは勿論だが、それでも漳州人の多きに及ばない。然し大稻埕には建街の由來に於ても明かに知り得る通り、艋舺から退散した泉州人や、新莊方面から退散避難して來た泉州人が、此處に聚落一街を構成をなしたから、大稻埕に泉州人が多數を占めて居たのに不思議はない位だが、漳州人も亦た艋舺その他から移つて來たものも無論ないことはないから、數に於ては少いだらうが相當居たものである。その昔蕃人占據の地たる大稻埕も淋しい所で、閩人の茅屋が水田や草原の間に散點し、靛曝す埕に夕陽が寂しく射して居たが、恁うした賑ふ商業地が出現しやうとは、誰が夢想したものがあらう。城隍爺の神像を護り捧持して、此地に八甲庄から退散して來た泉州人にして、恁うした新街が建設されやう



と、彼も亦た想はなかつたであらう、これも亦た時の勢時の力人の動きである。而してこの地を逐はれた、ケイウナ、蕃社の蕃人は、今も奎府と云ふ地名を残して、東北方面に走り、大龍峒の建街に逐はれた、トアロンボン社の蕃人と共に、タアタアユウ社の蕃人居據の地方に行つたのである。

地理學者の説に依ると、發達する都市の要件は、平野の中に位して、その近くに河流のあることも、その一つであるとのことだ。艋舺の發達に就いて考究すると、正にその説の通りであつた。艋舺は臺北平野の中に在り、而もその西に淡水河が流れ、市街はその河に臨んで居る、大稻埕もその通りである。大稻埕は艋舺とは接近して、その北に在り、同じく西に淡水河が流れて、それに臨んで居る。これは一面交通の便を得る地勢をば、言を換へて説明したものとも思はれる、交通の便否は、土地の開發に至大の關係交渉を有することは、今更に論ずるまでもないことで、幾多の事例がこれを證明して居る。畢竟平野の中に在りつて、近くに河流が流れて居ると云ふ、都市發達の要件と、交通の便利に俟つことが多いと云ふことを物語るものと云つて可い。従つて交通の便否は都



市の盛衰に歸因することとなるもので、この交通の便否が、都市の盛衰に因果關係をば生せしめた事例は、過去に於ける土地の變遷、都市の狀勢變化が示す發達變遷の歴史が、雄辯にこの事實を示して居るではないか。その昔三艚と謳はれ、段盛を示した艚船も、對岸の新莊も、臺北平野の中にあり、近くに淡水河が流れ、舟楫の便があつたので、都市として發達すべき條件を具備して居る、大稻埕亦然りである。而も繁華が最初に新莊の地に示され、それが更に對岸の地艚船に移り、再び大稻埕に轉遷したと云ふものは、正に淡水河の水の勢が變轉した結果で、原因中の最大なるものであつた。鐵道や貨車自動車のない時代、交通運輸の機關は、陸に牛車や轎、水に戎克船であつた。殊に淡水河の流れを利用して、發達した新莊艚船大稻埕の各市街は、對岸南方支那地方との往來貿易が繁華を齎すもの多く、戎克船の出入の盛否が、繁華を左右するものと云はれたものである。恁う云ふ時代、恁うした狀勢の下に、淡水河の水勢が、土地の榮枯盛衰に、密接至大の因果關係があつたのは、當然のことで、帶の如く臺北平野を貫流する淡水河は、都市の發達を促したことに多大の力があつたと同時に、水勢に支配されてこれに近



き都邑の盛衰變遷が著しく示されたものであつたと云ひ得る。故に新莊街を盛にしたのも衰へしめたのも、淡水河の變る水の勢であり、艚船の盛衰大稻埕の發展も同じく淡水河の水に支配された結果と云つて差支ない。即ち淡水河の流れを利用して、閩人がこの方面を開拓し、漸次これに人の力、人の動きが、時の勢が伴つて建街發展を見たが、淡水河の上流にして、大料崁溪の下流が新莊街の南背面を流れ、水も深くあつたから戎克船の出入も繋留も至便であり、物資も此處に集散し、商取引も行はれて殷賑を呈したけれども、年々歳々上流地方の増水や、暴風雨のために、上流から流下する土砂が、河底に堆積して、逐年水深の淺さを増し、遂に戎克船も小型以外出入不能となり、物資の集散地としては不適當となつた、一方その當時漸く新興しつゝある艚船の河岸は、水尙深くして大小の戎克船その他の船舶の出入容易であつたから、從來新莊方面に出入繋留した戎克船は、漸次艚船に移りやがて此處が物資集散地となり商取引が漸く盛況を呈し、遂に新莊の繁榮が全く艚船の地に移つてしまつて、艚船が繁榮隆盛を致すに至つた。爾來道光年間を極盛期として五十餘年間は、淡水河の水も淺くならず、盛に戎克船は出入



して繁榮段賑を呈し、咸豐三年の分類械鬪の争鬪が禍して一頓挫を見たとは云へ、尙相當の繁昌振を示して古き都色を誇つて居た。恁うして居る間に、一方新興の大稻埕は、茶業の發展と共に、商業地として著しき發達を遂げつゝあつたが、この時分漸く艚舢の殷盛を致すの一因であつた淡水河も、長い歲月の間洪水の屢次ある毎に、上流から流下する土砂は、自然的に漸次河底に堆積して、年一年と水深か淺淤となり來て、同治元年頃には出入の戎克船その他の船舶が、これが爲めに不便を痛感し、従つて艚舢の河岸に繫留することが出來ぬ狀勢になつた。而も、百二十餘年前嘉慶十三年に、漸く頻繁となつた戎克船の出入の監視と地方稽查の爲め、淡水廳に隸屬して設けられた艚舢縣丞衙門と云ふ官衙があつた位、戎克船の出入繫留夥しく、物資の集散取引が盛んであつたのが、この盛況を見ることが出來ず、これ等出入繫留して橋影林立の殷賑を呈した戎克船やその船舶は、その下流の新興の大稻埕の河岸に移り、此處に出入繫留するやうになり、盛んであつた艚舢は今や全く寂れて、小型の戎克船やその他の小舸が、僅に出入繫留して在りし日の殘影を止むるに過ぎぬ位にまでに衰退してしまつた、従つて物資の集散取引



も、自然に艚船を去つて大稻埕に遷つてしまつたから、さなきだに咸豐三年の分類械闘の禍で一頓挫を招いた上に、この淡水河の水の勢河底の變化に重ねて禍を受けてその繁華が大稻埕に遷り奪はれて、いよ／＼衰勢著しくなつてしまつた。新莊の繁榮を遷し奪つた艚船は、同一の轍を踏んで五十餘年後の同治年間には、その繁榮が大稻埕が遷轉奪はれて、徒に古い都邑として、在りし日の殷賑を物語り傳へて、殘骸を横へて居ると云ふて可いであらう、いや餘喘を保つに過ぎないと云ふ状態で今日に及び、その街觀は古街めきて、過去の繁華を偲ばすものがある。緩く流るゝ淡水河、その流るゝ水のその力は、恁うした都邑の變遷を示すものと思へば、河の力も亦た大なるかなと云ふべきであらう。艚船の繁華を移した大稻埕も、今では尙同一の轍を踏んで大稻埕の河岸にも、大型戎克船の出入繫留すること、漸く不便となり、小型のそれ以外影を見せず、昔の盛況は見る由もなく、領臺當初大稻埕から淡水港まで、外輪の蒸汽船が航行したと云ふ事實は全く昔語りには傳はる事實、誰が今の河岸に立つてそれを想像し得やう。都邑の變遷と河流、恁うして因果關係があるのを知ると、一つの興味を覺ゆる。淡水河と新莊艚船大



稻埕、恁うした都邑と河流の關係、都色の盛衰と變遷は、臺北人士には、興多きものの一つとして臺北の歴史の幾頁を割く價值があると信ずる。

所變れば品變る、これは昔も今も同じであらう。従つて土地何れもに於て其處に特色が見られ、差異が示されるのは自然のことであつて、獨り土地に限らない、其處に住む人々に於てもそれが窺知される。土地に土地柄があり、人に氣風氣質があるのが、それであると云ひ得る。上方氣風、江戸氣質がその一つ、これは否定し得られない事實である。臺北の市街たる艋舺と大稻埕にもこれが見られ、窺知される。等しく淡水河の河畔に建てられた都邑、他にも原因があらうが、淡水河の水勢に支配され、繁榮が變遷し、盛衰が示された、この艋舺大稻埕の兩都邑、土地柄から見て、それ／＼異なる特色が存するの無理からぬことであらう。即ち艋舺は建街以來久しきに亙り、その間繁榮殷盛を極め、漸く種々の事情が因を作つて、盛榮の峠を越して衰微の傾向を辿つて、嬰退したものの、過去の殷賑は、傳へ語つて誇るに足るものがあつたし、一面には長さ星霜を閱したる、古さを示すものがある。一方大稻埕はその建街は艋舺の極盛期を過ぐる幾年



の後に屬し、新興の氣分が殷賑を導き、他の諸事情が更に一層の繁華を見るに至らしめたもので、新興の街としての色彩が濃厚であることも認められる。艸艸が過去の殷盛と古きを誇るならば、大稻埕は新興の氣分と今の殷盛を示して、古き都邑の嬰退状態に比較すべきである。古きものに尊いものがあり、新しきに捨つべからざるものがある、土地柄に見て、兩都邑は何れ劣らぬものがあると云ふべきだ。艸艸は古き年代を経て來た市街とて何となく落着きがあり、舊家も多く、長者の家も尠くない、衰微に傾き嬰退したとは云へ、過去に於ては、三艸と謳はれた殷盛に、北部地方で最も繁榮した都邑と云はれただけに、商戸もあり商取引も行はれ、過去の盛況を偲ぶことが出来る。その他繁榮に伴ひ、對岸から支那の文明が盛に輸入されて、著しく文化の向上を示したもので、燦たる文明の光に浴したことが充分に窺知され得ることが多い。大稻埕に商取引が移り物資が彼地に集散するやうになつて、商取引も物資の集散も昔日の如くないにしても、商戸軒を竝べて、商賈往來も相當にあつて、過去の面影が確に保たれて居るのが見られる、その他神寺廟の數々、何れも古き年代を閲したものが多く、祭祀がなかく盛に



行はれ、繁華を示した過去の餘力が、この古き都邑に充されて、いよ／＼値打ちつけられて居るのも、古き都邑なるが故で、尊いものと云ふべきであらう。従つて新しい都邑の大稻埕とは自然にその趣きが、何處かに異つて、ゆかしさが窺はれ、何れの古き都邑が有する色彩が、この艋舺にも見得らるゝと云ふものである。分類械闘と淡水河の水勢とで、艋舺の繁榮が移つた大稻埕は、新しい都邑として、何れの地にも見らるゝ、新興氣分が横溢して、遂に股賑を來たしたもので、進展の經路が艋舺のそれと大にその趣きを異にして居る。而も艋舺の過去に見られた商取引と物資の集散が盛に行はれる一方、茶業の發展に伴ひ、再製茶の工場地とし、烏龍茶の市場として、その名を知らるゝに至つた如く、商業地として進展股賑を呈したので、商家の多いのが殊に著しく、商賈往來が頗る盛であつた、従つて新興の氣分と、進取的の氣運とが濃厚で、街全體として活氣が横溢して居たが、艋舺に見るが如き古きを誇る落着きが何處にも見出されない、従つて新しいだけに、舊家もなく、長者の家もない、又た神佛廟も艋舺に比して少く、古い歴史を有するものがないのは、新しい都邑であるから仕方がない、然し大稻埕には新興



氣分と活氣縱横なのが、著しく見られて自然艸艸とは新舊の差異が、土地柄から見ても、明かに認め得られるのである。土地柄に於て既に然りであるが、その土地に住む人も、その氣質氣分が自然的に兩者に於て差異があるのが知られる。艸艸に住む人は艸艸人と稱し、土地の古き都邑を有する傳統的の誇りと、土地それに見る如き落着きを見せ、長い歳月を閲して繁華盛殷を呈した土地だけに、舊家や長者の家も多く、資産家、名望家、さては篤行家等々の、尊ぶ人々や憊うした人々が生まれた名家も尠くないし、學者、文人、墨客の輩出も多く、學藝や文事がなか／＼盛に行はれ、氣風や氣質も古い都邑の地だけに、艸艸人としての特色を有するものが認められるが、殊に大稻埕の建街以來、漳州人が多きを占めた結果、同じ閩族で泉州人とは總てに於て異なる特色があるので、これが艸艸人の氣風とか氣質となつて居る。年々に行はるゝ、神佛の祭祀に於てこれが見られる位で、憊うした心理的作用の動きが窺知されるが、これが所謂艸艸人の有する誇りとも云ひ得るであらう。艸艸の在住人が艸艸人と稱する如く、大稻埕の在住人は稻江人と稱して居る。建街の由來で知る如く、泉州人に依つて新に建設された土地



柄、泉州人が多数を占めて居るのは當然で、而も新しい都邑だけに、新興氣分が濃厚で、これが發展を促進せしめたものである、従つて稻江人は稍もすると、嬰退保守に傾き易い艋舺人に反して、進取的で活氣に満ちて居るとも云ひ得る。而して土地そのものが新しいから舊家もなければ名家も尠く、資産家は新にこの地で活動努力の結果富を得た分限者の類で、祖先傳來の富者は餘り見受けない、殊に商人が多いのは、商業地としての進展に因るもので、學者や文人墨客の如きが尠いのも當然であらう、恁うした事情が、稻江人の他と異なる所で、これが氣風氣質を作つたものと云ひ得る。土地に新舊の差異が生む特趣があり、人に亦た氣風氣質の特趣があると云ふもので、艋舺人稻江人同じく閩族でありながら、出身地方の差異、泉漳兩州人が持つ差異ある氣風氣質が土地柄の差異と合して、一層著しく差異を兩者の間に示すと云ふもので、其處に各特色が存して面白く思はれるのである。



## 城内の出現と附近の村落二三

…臺北城の造營と城内の出現…特色を見せた臺北三市街…

劉銘傳の新施設と臺北…變遷のあつた附近の村落…

康熙四十八年閩人の手に依つて開拓に着手された臺北の地は、爾來彼等が開墾に侵佔に血と汗とを流して、蕃人を驅逐壓迫し、漸次開拓の地を擴め、淡水河畔に艋舺を建街し、續いて大龍峒の出現を見、更に大稻埕の建設ありて、盛衰こそあれ殷賑の變遷を見ながら、何れも立派な都邑が築き上げられ、北部地方に最も段盛を示した地方となつた。

殊に艋舺の著しき進展繁昌を呈してからは、此處が北臺灣の繁華の地文化花咲く所となり、官に於ても都邑と認め、官衙を設置して學校を設け、その地方統治の諸機關が置かれて北臺灣に於ける重要な都市に數へらるゝに至つた。而して開拓着手後百六十有餘年を経た光緒元年、從來竹塹の地即ち今の新竹に置かれた淡水廳下の一地方であつたのを、臺北地方の繁榮と當時内外の狀勢に因つて新に臺北に府城を置き、新竹、淡水、宜蘭



の各地方廳を統轄することゝなつて、臺北は全く北臺灣の主都となつた。即ち光緒元年には欽差大臣沈葆楨の奏議に依り臺北府が置かれ、陳星聚が臺北知府に任ぜられたが、これは今から五十六年前のことである。この府廳は艋舺の地に置かれたのである。然るにその後府廳の所在地としては艋舺が不適當であり、而も年々人口増加し大稻埕の如き市街の擴大を見たので、他に適當の地を求めて府城を築造することとなり、知府陳星聚は艋舺大稻埕の有力な民間の人々も加へ、官民協議して資二十萬兩を以て築城することに決し、各方面に地を物色した末、現在城内と呼んで居る地域、艋舺と大稻埕との中間に位する地域を選定し、資金は官費の外民間の醸出に待ち、遂に光緒六年起工し、二年の歲月を費して同八年三月これを竣工したが、城壁は方形で、東西各四百十二丈、南壁三百四十二丈、北壁三百四十丈、厚さ一丈二尺、高さ二丈、上部に凸凹形の障壁を設け、東西南北の四門の外に、南門の西方に小南門の一門を加へて、合計五門の樓門を建て、城外には壕を繞したもので、實に府城として誇るべき、立派な廣大なものが造營された。

それで此處に官衙や官設の神廟を建て、市街を區劃して人民を招致したのである。恁う



して所謂城内なる市街地が出現したので、臺北は艋舺大稻埕城内の三市街となり、三市街が鼎立の形となつた。而してこの造營された臺北府城も、三十餘年後即ち領臺後に於て、城壁は打ち毀されて、石材は監獄その他の官營物の障壁その他に用ひられたのみならず下水工事にも利用され、城壁の跡は三線道路として残存し、市街を包圍する約二十五間乃至四十五間幅のリングガーデンとなり、遊歩道と處々に圓形若くは半圓形の小公園が配され、他に見られない瀟洒なる感を示して居る。かの五箇所の樓門は、城壁と同じ運命の下に打ち毀されることとなり、既に西門は打ち毀されたが、後藤(新平)民政長官の御聲が掛り、他の四樓門は保存されることになり、今も残存して、臺北府城の在りし昔の片影を止めて居る。而して臺北のこの三市街を包括した所謂臺北市街なる都邑は、臺北府城の造營成り、城内に知府の官衙その他に置かれたので、全く北臺灣の主都となり、南方の主都にして、清朝が本島を領有以來、統治の中樞地首都であつた臺灣府、即ち後年に臺南府と改められた、今の臺南市街と相對峙するの都市としての位置を占むるに至つたのである。その昔は蕃人占據の大加蚋堡内の荒涼たる曠野の一地方であつた



のが、艋舺の名に依つて知られ、遂に臺北の名に依つて北臺灣の主要都邑となり、遂に臺灣の主都となつた。その進展の著しさには驚嘆に値すると共に、この僅々百数十年間の歲月を閲する間に、この進展を致したのは、全く蕃人と争鬪しつゝ、開拓し、血と汗とを流して努力奮闘をした、先人の賜物であると云ふを憚らない。建設から發展への。向上努力の偉大なる人の力、人の動きを思はざるを得ないのである。

府城が造營され、城内なる市街地が出現したので、艋舺大稻埕とは、三者それ〴〵程近き所に位置して鼎立して居るので、これ等各都邑市街を包括して臺北市街と云ひ、或は臺北三市街と稱するに至つたのも別段不思議がない。而してこの三市街は、其處にそれ〴〵土地柄として差異特色があるのは疑ふ餘地がない。最も古い艋舺は過去に於て殷賑を極めた土地であり、その後建街された大稻埕は新興の氣分で進展を見、商業地として認められて居るし、最新の城内は府城造營に伴ひ、知府の執務する官衙を初めとして、その他各官衙が置かれ、官廟が造營されて、官衙官廟街を見たのであるが、最も早く建街され、過去に於て、殷賑を極め、文化華かであつた艋舺は、歳遷り月變つて咸豊



年間の分類械闘の爲めに、繁榮に一頓挫を來した以來、同治年間の淡水河の水深淺淤に因る大稻埕の建街が、新興氣分で商業地として進展を見たので、流石の艚舳も商業が衰退して嬰退の傾向を示したものの、尙盛衢たるを失はず、古き都邑の誇りを呈して居る。艚舳とは田圃を隔て、その北方に建街を見た大稻埕は、同治年間淡水河の水深變化が、艚舳の繁華を致した戎克船の出入と繫留とが此地に移されて以來、茶業の發展に因り、從來商業地として新興氣分で進展を促して居た上に一層の進展を見、商取引と物資の集散が盛になり、商業地として殷賑を持続し活況を呈して居る。而して城内は官衙官廟の街とされたので、城内には官人竝にこれに附隨した人々や、東瀛書院その他官學に入つた學徒の群や、官衙官廟關係の人々が居住し或は往來する所となり、大稻埕の如きは勿論艚舳にも見るが如き商賈往來は見らるべきもない、と云つた憊うした三市街それ／＼各々特色が認められるのである。従つて三市街の居住人も既に記述した如く艚舳人稻江人のそれ／＼有する氣風氣質が見られるが、城内の居住人は、官人竝にその附隨者や官廟關係者の人々なので、此處に他と異なる氣風氣質が窺知される。即ち官人氣質が



明かに見られるのである、従つて城内居住の人々と、所謂艋舺人稻江人とは、自ら何かに就い差異があるのは寧ろ當然で、三市街それらの特色を考察するのにも、興味あることと信ずる。

城廓が築營され、臺北が府城の地となり、知府の任命を見て、北部臺灣の主都となつたその前後から、清國は内憂外患事漸く繁多となつたが、殊に西洋諸國が漸く意をば東方に用ひ、臺灣亦た放任に委すべからざるの勢を來たせる折柄、清佛難を構へて佛國艦隊の臺灣に向ふと云ふ狀勢に、清朝政府は往時の形勢に委すべからざるを覺り、英傑劉銘傳を起用しその建策に基いて、光緒十一年臺灣を一省とし、彼を臺灣巡撫に任命し、鬼才縦横な彼の手腕に俟つて臺灣統治の刷新改革をせしめた。巡撫即ち總督の印綬を帯びて臺灣統治の刷新改革に盡瘁すべく本島に蒞任した劉銘傳は、專任巡撫以下の各官を置き、更に地方行政を擴張し、種々新なる施設を斷行して、大に經綸を行ふ所があつた。

— 41 —  
即ち巡撫衙門（總督府）を臺北に置き、臺灣文武行政の事務を統轄し、布政使衙門や按察使衙門を設け、地方行政機關としては、新に彰化縣の東方二十浬の地、即ち今の臺中に



臺灣府を設け、臺南所在の臺灣府は臺南府と改め、これに臺北府を合せて三府となし、更に幾多の府縣に分ち、臺東直隸州をも置いた。恁うして巡撫となつた彼劉銘傳は、巡撫衙門の所在地たる臺北城内に居し、臺灣統治の事務を統轄し、切に刷新改革に努めたが、巡撫衙門の建物は、領臺以來我總督府の廳舎として、大正八年三月まで二十餘年間使用され、新廳舎に移轉後暫くその儘となつて居たが、昭和四年由緒ある建物なので舊蹟として保存せらるゝこととなつた。而して劉銘傳が、臺北に巡撫衙門を置き、全島の文武行政事務をば此處で統轄したので、臺北は臺灣の首都となり、續いて領臺後我國も臺北に總督府を置いて、首都としたのである。劉銘傳が巡撫となり臺北に來任するや、艫舩は既に過去に於て殷賑を極め、今は古きを誇つて盛衢たるを失はざる状態なので、先づ城内の繁榮を促進すべく劃策した、當時城内は官衙官廟の所在地、官人の居宅が多きを占め、人煙稀に田圃あり竹藪ありて、寂寥たるを免れなかつたばかりか、商戸は僅に官衙に近き街衢に、極めて少數あるのみで、商賈往來など云ふに足らぬものがあつたため繁榮策として、上海、浙江、蘇州の各地方の富紳を勸誘して、建物會社とも云ふべ



き興市公司を設立し、公司の手に依つて、新に街衢を設け、電燈を點じ、商戸を建築して、商人を招致し、商舖を開き營業せしめた一方、商業地として進展を辿りつゝある大稻埕に對しては、更に商業地として發展を期し、街區を擴大すべく、盛に工を興しては新なる街衢を設け、商戸を此地に集め、商取引地として、物資の集散地としての施設を、大に行つて面目を一新したので、外商の來往する者の多さを加へ、米獨二國の領事館相踵いて開設され、本島の巨商も亦た、此地に根據を構ふるやうになり、従つて商取引や物資の集散も亦た盛を致し、全く商業地として殷賑を示し、重要物資の集散地としての繁榮を示續して居る。その他時勢に鑑み時流に應じて、或は清賦局を置き税制を矯正し、善後局や機器局を設け、火葉庫を置いて兵備を整へ、電報總局を設けては全島竝に福州に電信線を架し、基隆新竹間のみを終つたが、鐵道を敷設して交通機關の改善設備に努め、又た新式西洋の文明を輸入して、施設統治の上にも幾多の新設改革を斷行して全く面目を改め、進歩の狀著しきものがあつたばかりか、臺灣府の所在の臺中が全島の中央に位し、統治の中心地として適するとし、此處を首都となすべく、大規模の都市



建設の計劃を企圖して居たが、この銳意斷行した新設改善施設が餘りに急激に失し、財政上將た又た統治上から、官場の非難攻撃を受け、民に怨嗟の聲を聞く等、四圍の事情に禍されて、劉銘傳は遂に失脚し、巡撫の印綬を解かれ、刷新改革施設も半ばにして完全せず、本島を去つてしまつたが、その後任の巡撫は邵友濂と云ふ劉氏の部下であつた人、光緒十七年就任し、翌十八年欽差行臺を設けたが、總て劉氏と正反對に、消極政策を執り、嬰退を示す一方なので、何等進んだ施設を見なかつたため、劉氏の銳意努力に依つて、發展を遂げた大稻埕や城内は、その發展に頓挫を招いてしまつた。次いで同二十年、布政使の唐景崧が代つて巡撫に任せられたが、この人亦た何等一つとして見るべき施設を行はないばかりかその遑もなくして、日清戦争に際會し、次いで臺灣が帝國の領有に歸し、清朝領有二百十餘年にして、これを割讓するに至つたのである。英傑劉銘傳が巡撫として臺灣に來任し、縱令中途失脚したとは云へ、改新に新設に、幾多銳意斷行の績を示し、泰西の新文明が輸入され、城内や大稻埕の進展を促したことは事實であるのみでなく、劉銘傳が巡撫衙門を臺北城内に置いて、自ら此處に居て、全島の文



武行政の事務を統轄し名實共に臺北が臺灣の首都となつたことは特筆に値すべく、而も今日我總督府の所在地として、文明の大都市が建設されんとし、我國有數の都市として、大臺北が出現するに至らんとするのは全く劉氏が臺北を臺灣の首都と定めたからである。と云ひ得る、この意味に於て臺北としては劉銘傳の名は永久に忘れられぬものであらう。

臺北の地に府城が置かれて、城内と稱する市街が新に建設を見、古き艋舺や商業地と云はるゝ大稻埕と共に、所謂臺北三市街が出現し、臺灣首都となつた臺北は、この三市街に大別され、各市街はそれ〴〵數多の町内に分れ、例へば城内には府前街とか文武街とか、撫臺街とか云つた工合に、それ〴〵町名が呼ばれ、艋舺でも龍山寺街とか、八甲街とか、舊街、中街、媽祖宮街とか云ふやうに、街々に名がつけられ、大稻埕もその通りで、六館街とか、港邊街、南街とかと、それ〴〵町名があつて、非常に多くの街に分れて居た。艋舺や大稻埕の進展で街の數も増し、街衢も擴大し、殊に艋舺の地域は最も廣く、從來の艋舺街以外、城内の東方から南方へかけての地域をも含まれて居た。而し



て大稻埕の進展に伴ひ、艋舺との往來も頻繁となつたので、淡水河畔の小徑路の外に、城壁の外側に通路が出来たもので、今日と存在して居る西門町から末廣町を北に至る、三線道路に浴ふた道がそれである。また城内への艋舺からの通路も出来、それが新起街と新起横街、今の新起町通りである。恁う云ふ工合に艋舺や大稻埕も、それ／＼進展變遷を見たが、近郊の各地は、これが亦た影響を受けて三街に比すべくもないが小さな街が出来、人家も多くなつた。殊に大稻埕の北方にある大龍峒街は、大稻埕の建街以前に、既に開拓されて一市街を見たもので、艋舺の如く地域も廣く、殷賑を呈しなかつたが、然し相當多くの人家が建てられ、小さな街衢が出現された。何でも舊記や古老の言に徴すると、最初閩人陳姓の者が、この地方の開拓を企てたもので、この地方はトアロ、ンボン、蕃社の蕃人の占據地なのを、これを驅逐し侵佔したもので、現在の街衢より稍東方に、最初は人家を建て竝べて一部落をなしたが、その後來住者の増加と地利に乏しいので現在の地に移り建街し、蕃社名の音をその儘に漢字を充當して、大龍峒と附けたが、最初大隆洞とも書いたとか、現在の大龍峒町がそれである。恁うして建街後、一時



は艫舳と交渉往來も頻繁であつたので、その股販の影響を受くること多く、繁榮を見たが、大稻埕が建街され、漸次著しき進展發達を呈するに及び、この地との交渉が、隣接地だけに艫舳よりも多く、一方大稻埕の股販に伴ひ、繁榮がそれに遷り、漸次衰退の傾向著しく、僅に餘喘を保つて、過去を偲ぶのみと云ふ狀勢になり、大稻埕に隣接して居るので、殆んどこれが一部分の如き觀を呈するに至つたが、然し街衢は昔の儘に存在維持され、近郊の一市街としての街觀を示して居る。その他艫舳から枋橋枋寮に通ずる即ち今の海山郡板橋街中和庄等の方面に通ずる道路にある、加蚋仔と呼ばれた現在の東園西園の兩町も、艫舳の繁華の影響を受け、交通往來の頻繁に伴ひ、人家も多く一部落をなすに至り、農家や小商人の家が三々伍々軒を竝べ、近郊村落としても發達を示したものと云はれ。又たその他、大稻埕や城内の東、双蓮や西新庄仔、中崙、朱厝崙、さては大安等の各村落も大に開拓されて、立派な農村部落を見る一方、南方古亭村庄から、頂内埔や下内埔の邊、新店景尾地方に近い一體の地も、農家の數を増加して各所に村落の出現を示す等、近郊の各地は、市街たる大龍峒は勿論、各村落は何れも發達を見、人家



の数は年々増加の傾向を示したのである。而して慙うした近郊の各地は、今は何れも臺北市内に編入され、近郊地として異常の進展を呈しつつある。

### 領臺後の臺北と文明都市建設

…皇軍の臺北占領と土匪掃蕩…領臺後の臺北三市街と進展

…時代の變遷と臺北の繁榮…文明都市の建設と文化の向上…

泰西の文化を移し、臺灣統治の改革と新しい施設の數々を斷行して、銳意革新の實を擧げた劉銘傳も、急度の改善とその過激なのに失脚して一頓挫を見たが、後任者は何れもこれを中止し寧ろ嬰退主義を採つたので、劉氏の畫策實施した諸般の施設は、空しくなつたのみか、續いて起る日清戰役の末が、臺灣が日本領土に歸してしまつた變遷に、此處に一區劃を示すに至つた。而して臺灣が帝國へ割讓に決した當時は、匪賊島内に横行するのみか、巡撫以下清朝の官人その他は、臺灣割據に反對して我に抵抗しやうとする形勢に、島情甚だ騒然たるものがあつた。それで既に歴史で知る如く、陸軍大將北白



川宮能久親王殿下が、師團長であらせられた近衛師團が出勤し、本島平定の事に従ふことになり、近衛の精銳を引率し給ふた宮殿下は、澳底に御上陸、三貂嶺の險を越へ、瑞芳基隆を占領し、更に明治二十八年六月七日には敵兵を撃退して、皇軍は臺北城を占領したが、既に基隆が陥落我軍が占領したと聞くと、當時臺北城内に駐屯守備に任じて居た五千餘の清國官兵は、未だ皇軍の到來しない前、一部は淡水に、一部は新竹方面に逃走退却する始末で、漸く臺北三市街は戦亂氣分濃厚に物情甚だ騒然として、人心極度に動搖したので、英獨の居留民は臺灣人の有志と共に、水返脚（今の汐止）に赴き、皇軍の速に前進して靜定されるやう哀願したので直に急ぎ進軍したが、皇軍到ると知るや敗殘の士卒は或は官廳の建物や、或は火藥庫を爆發させ、その混雜に紛れ官有の財物を掠奪亂暴の限りを盡して退却し、前進した皇軍は僅少の抵抗を受けたのみで、臺北城を占領してしまひ、師團長の宮殿下は幹部と共に。馬を先頭に進められ、威武堂々入城遊ばされたが、その皇軍が臺北城に迫つた際、抵抗をした少數の殘敗兵は、城壁の上から發砲し、城門を閉ぢて進入を防いだが、この際一臺灣老婦人陳氏法と云ふ者が、我兒と協力



して、竹梯子を城壁に架したので、我兵は容易に城内に入り、城門を開くことを得たと云ふ一つの佳話が傳へられて居る。かくて臺北城が皇軍の手に歸したので、樺山總督は十四日に臺北に到り、巡撫衙門の舊時代の廳舎をば總督府の廳舎に充て、臺北城内に總督府を置き、十七日には宮殿下の御臨場を得て、盛大な始政式を舉げ、臺灣統治を開始した。而して宮殿下には臺北に暫時御滯陣となり、布政使衙門の舊廳舎内の一隅に、二室を御宿所に充てられ、軍務に御精勤遊ばされて、承るも勿體ないほど、御不自由な御起臥に、軍旅の月を眺めさせられたことは、陣中の御生活とは申せ、炎暑甚しい地に金枝玉葉の御身を以て、御厭ひ遊されたことは恐れ多いことで、辛苦を士卒と共にされた御心こそ、畏き極みと申すべきである。愆くて御滯陣中天長の佳節を迎へたので、城東の原で近衛兵に依り宮殿下の御指揮の下に、盛なる立派な觀兵式さへ行はれた等、幾多の御物語は盡くべくもない。加之この間尙殘敗の兵が附近の地に據り抵抗し不安を招くものがあつたので、淡水や新竹方面に向つて、切に偵察搜索隊の派遣を見、やがて宮殿下は兵を南に進められ、臺南指して發足遊ばされたが、遂に十月臺南を占領するに至



り、宮殿下は南進の途次、御病を獲られて、臺南占領と共に、惜しくも悼しや神去り給ふたが、これで臺灣は平定を見た。然し賊徒は緘滅したものの、土匪は全島各地に蜂起出沒し全く鎮靜するに至らない状態で、臺北附近にも出沒し、明治二十九年一月は、陳秋菊等を首魁とする土匪が蜂起し、臺北城に來襲するの騒ぎがあり、我兵はこれと砲火を交へて撃退し、續いて附近の匪賊を兵力に依りて掃蕩したので、全く臺北三市街は勿論、附近の各地は平穩に歸し人心に安定した。而してかの芝山巖の變、六士先生が兇刃に斃れ、臺灣教育史の初頁を、尊い血を以て彩ることになつたのも、陳秋菊等を首魁とする土匪が、新店景尾方面より臺北城を襲ふのに呼應して、士林方面から來襲した北投方面に蜂起した土匪の一類が、芝山巖の六士先生をば士林から臺北に至る途上で襲ひ、兇刃を加へて慘殺したのであつた。然し恚うした土匪、從來から切に蜂起來襲して、殺戮掠奪を逞ふして暴威を振つた彼等は、我官憲の力で明治三十五年に全く掃蕩されたが、臺北地方の土匪は、既に明治二十九年陳秋菊一味の掃蕩で、その跡を絶つたのである。



日清戦役の結果、帝國に臺灣が割讓され、臺灣平定に向つた皇軍が、既に臺北城を占領し、總督府が臺北に置かれ、始政の式も舉げられ、帝國の統治の下に、皇恩に浴するやうになり、今日の幸福を享受する第一歩が印せられたが、既に臺灣が帝國領有に歸したと知つたる巡撫の唐景崧は、切に反對意見を高唱し、臺灣を獨立國となすべしと、人民に説く所あり。虎を描いた旗さへ造つて支持を求めたので島情は不穩動搖して人心極度に不安となり、人々は恐怖に襲はれ、戦亂氣分に包まれた。いよ／＼皇軍が臺北城に迫まると聞くと、城内殘留の兵士は逃走退却をするもの多く遂に唐景崧も逃走を見、皇軍の入城に先立ちて、城兵は官廳建物を破壊し、火藥庫を爆發せる始末であつた。従つて城内は勿論艋舺大稻埕その他近郊の村落までも、敗退兵の掠奪殺戮を恐れ、一層人心不安に陥り、家々は門戸を堅く鎖し、夜も灯を殆んど消して聲を發することを戒しめ、晝さへ往來する者その影を絶ち、死の町を出現したので、商賈往來の物資の集散も絶え唯だ恐怖不安の巷と化してしまつた。然し幸にも敗殘兵の臺北から退却するに際しては、官の財物を掠奪して旅銀を比較的裕福に懷中して居た故、退却の途次通過する人家を襲



ふて掠奪亂暴を働かなかつたため、この災難は免れたと云はれる。殊に退却した敗殘兵は、何れも大部分は淡水方面と新竹方面に走つたので、その通路であつた大稻埕大龍峒の人々は、その災害を蒙ることを恐れたものゝ、通路とならなかつた艋舺方面と同じく災害を殆んど見なかつたさうである。然しこの戰亂に紛れて騷擾たる際は、掠奪亂暴を當習的手段とした兵士のことゝて、これに對する災難危害、即ち戰禍を恐れたことは想像以上であつたことは、古老の言に徴して明白で、彼等が戰禍の恐しさを痛感したと何れも當時を追想して寧ろこの難を免れたことを不思議として切に感謝して居る。而して退却の敗殘兵の魔手から脱したが、一方これにも優さる土匪の襲來が、甚しく恐れられ不安を生じたもので、一難去つて一難來るの心痛苦をば、何れも親しく味はされたが、土匪の襲來に處すを防禦策を講じ警戒したので、これも亦た事無きを得て漸く愁眉を開いた。恁うして居る間に、城内に總督府が置かれ、總督以下の我官憲が着任し、始政の式を舉げて統治の緒に就いたので、一方城内は軍隊に依り、事後の整理が行はれたのみか、官憲の手に依つて、秩序が保たれ平穩に歸した。而して艋舺大稻埕その他も亦た我



官憲の手に依り、善後の處置が施され治安秩序が維持されるに至り、漸く人心安定世情亦た靜穩に復し、家々は門戸を開き、人々の往來も日々に繁く、商取引が行はれ、物資も漸く集散して、漸次復舊を見るに至つたが、何せ領臺當初のことであり、庶政漸く緒に就いた時とて、臺北三市街は、最初我兵を以て警戒守護せしめ、漸次警察官に交替せしめた始末であつたり、一方在住の島民は、一つは自衛の爲め、一つは我官憲兵士に不良の徒として疑はれる者が尠くなかつたので、これが對應策として各街に保良局と云ふ自衛自治團を組織して取締に當らしめ、秩序維持に努めたものである。愆くして漸く平穩に歸し人心は安堵して、民は業を勵み、我國法に遵ひ、被治者としての安寧幸福を享受することとなつた、爾來善政が行はれ、種々の施設に依り改善せられたもの多く、全く面目を一新した。而して明治三十年五月には島民退去規則の滿了に依り、去就を決定したが、多數止まつて我國籍を有し、新附の民として皇化に浴することとなり、生命財産の保護を受け、生業を勵み文化の向上と共に、著しく進歩發達を遂げるやうになつた。而も一面に於て内地から渡航する者漸次多きを加へたが、鐵道發着の關係上、最初は大



稻埕に來り、六館街や港邊街、今の港町から泉町邊に多く居住し、内地人を顧客とする商家旗亭等々があつた。城内は官衙町として從來通りであつたから、此處には官人その家族竝に官衙關係の商人その他が多く、本島人の商家は領臺前も尠かつたが、内地人の來住する者多きに從つて減少するに至つた。艋舺はその當時、内地人の來住者極めて尠かつたが、漸次臺北の進展發達するに伴ひ城内の繁榮も影響してか、大稻埕から城内艋舺と移つて來る者も尠くなかつた、但し内地人の艋舺方面の轉出は、新起街八甲庄方面、即ち今の新起町方面で、舊來の所謂艋舺街には及ばなかつた、而して現在でも大稻埕と同じく艋舺は、本島人町と云はるゝ通り、内地人の居住するものは比較的僅少である。臺灣統治の實績大に舉り、開發進步極めて著しきものがあつたと共に、地方の行政も大に發達し、從つて臺北三市街の如きは、新しき文明の光を受けて進展して、今日の繁榮を致して居るのである。されば今日に於ては舊態を存する街觀は艋舺の一部分と大龍峒と、その他近郊の部落に見られるだけで、文化的の街觀は實に整然として美しく、文明都市としても決して恥しくない位で、内地から渡來した人々は、臺北三市街の都市



としての景觀の、大きなこと、立派で整頓として居ることに、何れも一驚を喫し豫想外として稱賛の辭を惜まぬ程で、領臺前に比較しては異常な進展振を示し、臺北の人々は、都會人として大きな誇を有すると云つて可い。その昔、閩人に依つて開拓された、蕃人逐鹿の場裡であつた臺北平野が、艤舳の建街から大稻埕の出現と云ふことになり、劉銘傳が此地に巡撫衙門を置き、臺灣統治の中樞地とし、首都となしたのでも、その變遷の異常なことが知られるだらう。恁うした進展發達を遂げたのは、全く開拓に續く建街と、先人の汗と血に依る努力の結果で、實に尊い賜物である。領臺後もこの地に總督府が置かれ、統治の中樞地として、商業旺盛に文化の向上を遂げ、首都として今日の隆昌を見たのも、官民協力向上に發展に、不絶の力を以て努めた、大きな動きであると共に、一視同仁の聖恩に因ることは勿論で、臺北在住の人々殊に臺灣人は、對岸支那の地、彼等祖先の地の現状を願て、至幸至福安穩の生活をついで居ることを喜び感謝しなければなるまい。

今日の臺北の殷賑を見ると、其處に時代の變遷の數々が知られる。時の勢人の力が恁



うも支配するものと思ふが、艋舺の建街以來百幾十年、或は三艋と稱せられて殷盛をば極めた時代の華やかさを見たが、後に淡水河の水勢や、艋舺に於ける泉漳兩州の分類械鬪等々が因を作つて、大稻埕の建街を見而も漸次に繁華を示し、艋舺はこれがために商業取引や物資集散が奪はれ、減退衰微を來し僅に古き盛衢として存在するに至つたのも、其處に見らるゝ變遷の一つであらう。臺北府城の造營に依つて出現された城内は、官衙官廟街として、商取引や物資集散が盛ではなかつたが、新しい街として恁うした事情の下に置かれて特色を呈して居たが、領臺後も依然官衙街として官廳と官人住宅が多く、而も内地人の渡來者は領臺當初から、官衙關係の商人やその他が官吏やら官廳側の勤人であつたので、城内は官舎や恁うした人々の住家が多く、臺灣人の居住者が尠かつた、従つて城内を内地人街と見るに反して、艋舺大稻埕は臺灣人街と云はれ、全く色彩が異なるものが認められ、城内は内地人の官吏や商人が多く、それ等の人々に依つて繁榮が致された。爾來街觀も城内が先づ改善され美觀を呈し、街區は整頓し前垣道は縦横に、所謂主要街衢としてその建物の堂々たる大厦高樓の櫛比する街景は、敢て内地のそれに



比して遜色がないと評判され、城内は臺北市街の中心となつた。大稻埕は臺灣人の商人多く臺灣人に依つて商業地が建設されたと云つて可いので、臺灣人の商取引や物資集散は頗る旺盛股賑を極めて居る。表通りと云ふ大道路は勿論、商家軒を竝ぶ商人街は、何れも新式の煉瓦積の二階家建で、何れも立派であつて商人街らしい街観を呈して居るが、その他の街々は、臺灣人の普通住宅が見られ、それも多くは煉瓦積の臺灣人の家屋である。艋舺は過去に於てこそ、商業股賑を極めた土地であつて、今は僅に古き街として商家よりは寧ろ一般の人家が多く、舊來の建築様式が見られる家屋が多い、これ等に依つても過去榮えた街として、その盛りの面影を偲ばせ、活況こそ認められないが、可なり盛に賑つて居る。恁うした時代の變遷に伴ふての榮枯盛衰は、各街に於ても明かに見られ、古き時代の物語と、現在の狀況を比較すると、全くその著しきものがあることをば領き得る。これは單に街に於ての變遷だが、各街に住む人々の上にも、變遷があつて、世態の變化が認められ、而も其處に著しき進歩と向上が窺知される。時代の進運に従ふて文化の向上したことは驚くほどで、殊に領臺後に於ては、その異常なる進展を見た



ことは、歴史に徴しても、生存する古老に訊ねても、直に證據立てらるゝ數々の事實が提供されると云ふものである。我總督政治の下に、治安秩序が維持され、教育の向上普及、産業の進展、交通機關の發達等々の原因は、領臺後に於て、更に臺灣の文化を著しく向上發達せしめたもので、恚うした進展に因り内地との接觸最も密なるを加へ、臺灣は内地の延長とさへ云はれるやうになり、繁榮は年と共に著しく、殷賑又た殷賑、文明の光遍く、人は何れも輝く新時代の風潮に棹して切に向上に努力し、諸般の事物は悉く現代の文明を取り入れ、駁々乎としての進展振は、實に目醒ましいものがある。首都臺北の如き、この傾向殊に著るしきを見たもので、臺北在住の臺灣人は、老齡の舊人を除く以外の人、何れも新時代の文明、東西から押寄せ來たる文化の潮に棹して、向上と發達に努力し精進して、活動を休止せぬ意氣と力を以て、動き働いて居るのは實に現在の状態で、文明都市の建設にと奮闘し、首都在住の人として恥ぢざる大きな動きを示して勵み獎めて居ることは尊い事實である。従つて臺北の繁榮は益々その度を加へ、華々しさを示して居る。而もこれに對し内地人臺灣人の差別が認められず、兩者一致し官民



協力して、臺北のために奮勵努力し更に繁華に更に殷賑にと、在住の人々は互に期待しつゝ動き働いて居る。されば現在の臺北の繁華に對しては、内地に於ても相當都會と呼はるゝそれに匹儔すると云はれ、臺北の繁華殷賑を見、初めて臺灣の地を踏み、此處に到來した誰もが、一様に異口同音、その美しさと共に激賞して措かず、『臺北が此處に賑かで、美しい所だとは、全く豫想しなかつた』と云つて、且つは驚き、且つは褒めつゝ、『好い所だ、結構な所だ、内地の二流どころの都會地以上だ』と云つては、その進展の著しきに敬意するのを屢次耳にして、快心の笑を洩すことが尠くない、何と誇るべきことではないか。

内地二流の都會地に比較して、優るとも劣らぬと云はれるほどに進歩發達繁榮を示した臺北の殷賑には、我人と共に誇りを感じずに居られない。全く臺灣の首都たるに恥ぢぬ、市街としての總ての素質條件を具備して居ると云つて可い、市街としての整頓設備は、全く現代文化に適しいもののみであつた。街觀と云はず、衛生設備、教育の普及、産業の進歩、警察消防の機關の完成、その他在住人に對する百般の施設は、悉くよく行



き届いたものであるが、恚うなるまでには相當長年月を閲し、その間官民の協力一致、これに努力盡瘁した結果に他ならない、此處に建設から發展への、汗と力の多きものがあり、幾多の犠牲さへ拂はれたことは否定されぬ、羅馬は一日にして成らずとの言は、臺北市街の建設發展に就ても、至言として當てられるではないか、今や人口二十有餘萬の多きに達し、尙増加の傾向著しきを示すものがあると云ふことである。而も一方駸々として進んで止まぬ文化は、唯だ向上の一筋を辿つて居て、新しき時代に適しい、諸般の事項施設は、次ぎから次へと現はれて限りないと云ふ現勢であつて、一つ油斷をすれば、後れて取り残されてしまひ、衰微は直に示されねばならない。昔は南の方、海遠い國と、異郷視された臺灣も、今は内地の延長とも云はれ、現代の文明は相互の距離を極端に短縮して、接觸最も密なるものあるに至らしめたので、現代の文化の影響は、忽ち最大急速度で及び來り、押寄する文化の潮も亦た滔々流れ來つて、而も寸時も休まない、従つて土地柄刺戟が薄弱で、暢氣な所と云はれたのは過去の事で今では決して然うでない、暢氣にして刺戟を受けないなら、猶豫なく時勢に後れて時代に置き去りにされてし



まふと云ふのが、臺灣の現況である。それで大正九年田總督は時勢に鑑みて、内地延長を高唱し、地方官官制の改正を斷行し、地方行政は内地のそれに則つて、變態ではあるが自治制とし、所謂市制の發布を見たもので、この地方制度の改正は、全く從來の地方制度を打破し、新時代の趨勢に適應すべき新制度で、一時代を劃した破天荒の英斷であつた。これに依つて臺北市が出現したのである。而して領臺後臺北市街の名稱の下に、城内艋舺大稻埕の三市街を抱擁したものであつて、領臺前は三者各別々に認められ、單に總括して臺北と云つて居たものである。その後この名稱は呼び續けられ、領臺後は臺北地方廳の直轄として、三者抱擁臺北三市街と稱し、また單に臺北乃至臺北市街と呼ばれたものであつた。然るにその後城内と大稻埕が繁榮著しく、而も殊に城内の繁華進展は、異常なものがあつたので、誰云ふとなく臺北市とか、臺北市内と呼稱することになり、臺北市街とか臺北三市街と稱した呼稱に替ゆるやうになつたし、これが一般に呼び通用されたもので、事情を知らぬものは、臺北市内とか、臺北市とか云ふので、實際市と云ふものが出來たのかとも思ひ東京市や大阪市のそれと同様なものと見做した向



も尠くなかつたが、實際は市制も發布されず、名のみ市の市であつたのである。然るに大正九年の地方制度改正に依つて、名實共に市が出現し、市制が公布實施されるやうになり、爾來市としての發展を辿りつゝあるのである。加之、臺北市としては、舊來の城内艋舺大稻埕の所謂臺北三市街の地以外大龍峒や加蚋仔、大安中崙朱厝崙と云つた、隣接の地を合せて、市の地域に編入し、今や東西二里八丁、南北二里十二町の廣袤を有し、人口二十二萬有餘を抱擁する、一大都市が建設されたのである。而もこの廣袤と人口とは、内地二流の都市に伍することが出来るほどで、臺灣の首都としても、敢て貧弱なものでないと斷言して可なりと思はれる。臺北市の出現、それは多年在住者の口から叫ばれ、希望されたものであつて、その進展の著るしき狀勢から推して、早晚實現さるべく期待されて居たことであつたのが、漸く田總督の手に依り、時勢の動きに伴つて、實現を見たわけで、これは著しき進展の致した當然の結果と云ふことが出来やう、猶その上に、領臺後面目一新した、市街としての百般の改善され、新設された施設は、街觀に將た又た市街の内容に、往時と比較すべくもないほど、美化し充實し、整頓し來つて、立



派なものになつたばかりか、押寄する現代文化は、此處に花と咲き、燦として光彩を放ち、美しく明るき都、文化的都市と推稱せられ、全く翠綠滴り風薫る、所謂南國臺灣の首都として、名實共に出現したのである。恁うして臺北市は、將來に於いて大臺北市を出現すべき運命に置かれてあることは、今や何人も否定せぬところで、即ち市勢は月に日に伸びて行き、時代の趨勢に伴ふ施設は新設に改善に、都市としての發展を促して止まざる状態で、活氣横溢した市民は、内地人臺灣人相共に協力、將來の進展に活動して、奮闘努力不斷の力を惜まないが、一方現代の文化は、海を越へて内地より、或は多國より、常に臺灣に致され、人心を刺戟して、これを採取消化して、臺灣文化の向上に努めて、着々功果を示すの状態で、年々歳々文化の向上は著しいものがあるが、殊に首都として、將來の大發展を期待さるゝ、臺北市は土地柄だけに、他の都市より遙に文化は向上しつゝあるのであるから、敢て百年と云はず、五十年を出ずして、立派な文化の向上を示す、大なる文明都市として、臺北市が實現することを疑はないのである。嗚呼我敬愛する臺北市、その前途は洋々多幸であらう。



## 市制の實施と出現した臺北市

…地方官官制の改正と市制實施：臺北市の發展と諸施設…

鶴駕奉迎の光榮と臺北市市制：實施以來十年と我等の誇…

領臺以來三十有餘年、聖旨を奉體して、一視同仁の大御心に副ひ奉り、歴代の總督以下の諸有司が、銳意統治に努め、民間の内臺人協力一致發展に精進して、産業の開發進展文化の向上に活動奮闘した結果は、今日見るが如き文運の隆盛となり、著しき進展は、領臺前に比し雲泥以上の差であつて、全然面目を一新し、過去を知る者は、何れも隔世の感に打たれて、稱賛これを深くする、殊に進展の著しい現代の文化は、交通機關の異常なる發達に、彼我の距離を夥しく短縮した結果、内地との交渉接觸益々密なるを加へ、急速度を以て臺灣に及ばしたから、臺灣の文化は一層向上したと共に、内地に於ける時代の動きの如きも、忽ち響き傳はりて、茲に世相は變り、時勢は遷り行くのであつた。即ち我臺灣に於ける時勢の變遷は、内地のそれと順應して動き、遂に地方官官制の



改正を見るの機運を生んだのである、大正九年の地方制度の改正は、田總督の英斷と時勢を洞察の明に依つて行はれた、劃新すべきもので、臺灣統治上特筆に値する事件と云つて可い、地方制度の改正に依つて、市制が實施され、臺北に臺北市が置かれ、市政の運用を見たのであるが、此處に新に發布された市制なるものは、内地のそれに準據したことは勿論であるが、土地の事情や民度と云ふ點に就いて、大に考慮斟酌されたことは勿論で、同じ自治制が布かれたにしても、内地とは大にその趣きを異にして居る。即ち地方官制に基き、市政運用機關としては、市尹助役その他の官吏が任命され、別に地方待遇實令に依り、衛生、社會事業、勸業、土木等の各方面に主事書記技師技手が置かれ、更に市制に依る吏員として主事技師書記技手等が置れ、何れも市尹統轄の下に執務し、市政運用の行政機關が出来た、更に諮問機關として、州知事任命の協議會員が置かれ、市の豫算その他重要事項に關し、市尹の諮問に應じ、協議意見を陳述することとしたが、決議執行權が附與されて居ないから、官選の協議會員は、單に市尹の諮問に應じ、賛否の意見を纏めて、市尹が市政運用の資にすると云ふに過ぎないと云つて可い、従つて市



尹は諮問した事項に就いて、賛成がない場合は反省して再考する、又は是なりと信ずれば決行しても可いので、協議會にて協議員が決した意見は、參等とすると云つたことになり。而も市尹や助役や其他の幹部は官吏であり、市尹は選舉の結果任命を見るのでないから、内地に於ける市會のそれの如く、市長不信任問題が持出され交迭を見ると云ふやうなわけにはならぬ。故に彼等は督府の任命に依る、官吏なのであるから、市尹の身分も内地の知事郡長のそれと同様と云つて可い、だから自治制が布かれても變態なのは、臺灣の事情がまだ内地の如く進んで居ないからであると云はれて居る、これは蓋し己むを得ないことであらう。然し近時漸く臺灣人中の新人と稱せらるゝ一部人士の間には、自治制も内地のそれの如きものを布くやうに改められたいとの希望の聲が高まり、自治聯盟と云ふ政治結社が組織され、運動が漸く盛ならんとしつゝ、あるのは、注目に値すべき時代の動きと見べきである。その他市政運用機關としては常置委員が任命され、市政運用上の重要事項、殊に協議會で委任された事項を議決することになつて居る。尙各町内に町委員や、勸業學務衛生土木社會事業並に財源調査の各委員を任命して、各方面の事項に就き市



當局と連絡を保ち、施設その他の事項を善處することとなつて居る。恁うした行政機關と協議機關とに依り、市尹統轄の下に市政は運用され、市の伸展を見つゝ今日に及んでこの盛を致して得たのである。

地方官々制改正市制實施以來十年間、幾多の重要事項が處理されたがその主要なものは、大正九年第二回國勢調査の執行、久邇宮竝妃の兩宮殿下の御來臺の事があつたが、同十年には駐日英大使エリオット博士來臺し、英國軍艦や帝國第二遣外艦隊が來航を見、市では何れも歡迎行事があつたが、尙市規則に依り常設委員、勸業學務衛生土木社會事業財源調査の各委員が、町委員規定で出來た町委員と共に任命された。その他比律賓總督も來臺し特務艦員も來北したが、同十一年には故山縣元師の遙弔式、明治大帝十年式祭遙拜式が執行され、東伏見宮御葬送の當日は、全市の歌舞音曲が停止されたのである。尙この年臺北七星海山新莊の一市三郡の蔬菜聯合品評會が開催され、市召集事務の査閲もあつた。同十二年には米國觀光團が來北し、練習艦隊の來航があつたが、四月には鶴駕を本島に奉迎するの光榮を浴し、臺北にも前後六日間御滞在、親しく市内その他



附近の地を御巡啓遊ばされ、市民は奉迎の至誠を捧げ奉つた。この年關東の大震災あり、市にても義損金の取扱事務や、罹災民の收容職業紹介等の事務をば臨時應急施設として開始した。同十三年には皇太子殿下御成婚奉祝の官民合同の祝賀會が舉行され、一市四郡の蔬菜品評會が開催、第一艦隊の來航乗組員來北したが、皇太子殿下行啓第一回記念日には、臺灣神社に獻燈式を舉行し、圓山運動場にて市内學校生徒兒童の聯合運動會が盛大に催された。その他財部海軍大將特命檢閲使として來北を見、家庭副業展覽會が植物園内の商品陳列館に開かれたが、五月東宮御結婚の大奉祝行事が行はれ五日間に亙りて市内は奉祝氣分漲つて賑を呈したが、七月元老故松方公の遙弔式あり、暴風雨に見舞はれ相當被害があつたが。十二月初代武藤市尹の轉出に市尹助役の交迭を見、尙全國新聞協會の大會が臺北に開催された。同十四年には、東園園藝研究會及品評會の開催に次いで第一遣外艦隊員の來北、佛領印度支那答禮使山縣公一行臺北に立寄られたが、五月秩父宮殿下の御臨臺を辱ふし、市民は熱誠なる奉迎を致したが、十二月皇孫内親王殿下御誕生に御命名奉祝會を催し、更にこの年大橋公學校の開校を見、臺北橋の開通式あり、伊太利



飛行機が淡水に來つたので搭乗者の歓迎し、市制五週年記念懇親會が開かれた。同十五年には一月加藤首相の遙弔式あり、三月市の事務分章規程改正で庶務、教育、社會、土木水道、衛生、財務の五課を設けた。四月には高松宮殿下を奉迎し、第一艦隊幹部の歡迎會が開かれたが、日本米穀大會も本市に開會を見、李王殿下國葬當日歌舞音曲を停止し、十一月全國中等學校長會議が臺北に開催されたが、既に七月には東門町の市營水泳場落成して東門プールが開場し、市民講演會が第一回を開いた。而してこの年北白川宮大妃殿下の御渡臺、續いて十二月大正天皇崩御、昭和と改元、奉悼式が舉行されたが、初代の市尹武藤氏も五月卒去した。昭和二年御大葬儀遙弔式を執行したが、一市四郡の蔬菜家禽品評會の開會、米國觀光團來北、市教育會の發會式舉行、第二艦隊員の來北するこどあり、四月臺銀問題で一時財界が不安となつたが、大事に至らずして平穩に歸した。五月大龍峒の孔子廟上棟式に、次いで六月納涼展覽會發明品展覽會があり、更に事務規程の改正で臨時水道擴張課が設けられた。市の依囑で内地市政視察員の派遣を見たが、朝香宮殿下十一月御來臺遊ばされた。而して十二月には龍山寺新營落成式、大正天皇御



一年祭遙拜式が行はれた。昭和三年には、米國觀光團來北し、花弁盆栽品評會があり、朝鮮教育視察團の訪問を見、久邇宮朝融王殿下御來北遊ばされた一方、獨逸軍艦基隆に入港し、軍樂隊の演奏があつたし、第一艦隊員や獨軍艦員が來北したが、四月初めて航空戰隊來航し艦員の歡迎が催され、而して久邇宮邦彥王殿下には臺灣軍特命檢閲使として御來臺、軍司令部その他臺北部隊の御檢閲があつたが、更に練習艦御乗組の高松宮殿下も再び御來北遊ばされ、同艦隊員も臺北を訪問した。而してこの年内親王第二皇女殿下の薨去に市民敬弔の意を表した。その他建功神社の鎮座式があり、獨大使ゾルフ氏來臺、基隆臺北間の縦貫道路開通し、日本西部水産大會、全國港灣大會、臺灣美術展覽會等が開かれたが、十一月聖上陛下の御大典に市民は熱誠に溢れ奉祝に狂喜し、全市數日に互り、各種の奉祝催物がありて奉祝氣分滿都に漲り、空前の盛況賑ひを呈した。而して市よりは石川畫伯謹寫に係る次高山の風景油繪を、御大典奉祝として献上した。昭和四年には、佛大使竝佛極東艦隊幹部來北歡迎會の催しあり、次いで英大使チイレ一行、徳富蘇峰氏夫妻等來北され、久邇宮邦彥王殿下の遙弔式も執行された。二月市の事務分掌



規程改定され、教育社會課が教育社會の二課となり、築地町に魚菜卸賣市場の鎮座祭が行はれ、魚菜卸賣市場代行會社が創立された。四月に錦小學校の新設、後藤伯の遙弔式あり、五月伏見宮博義王殿下御來北、比律賓水泳選手を迎へて、日比交驩水上競技大會が五月東門プールに行はれ盛況を呈した。その他伊號六十一潜水艦乗組員、鹿兒島縣町村長一行、救世軍山室少將、武富參與官等來北し、九月に全國上水會議が開かれ、十月在職十年以上の小公學校教員表彰式や神宮式遷宮祭遙拜式が行はれ、全國圖書館長會議、大日本山林大會等も開かれ、東伏見宮大妃殿下も十月に、愛國婦人會總裁として御來臺遊ばされて各地を御視察になつた。又た全島産業組合大會も開會を見た。昭和五年には、吉澤支那公使、荒木第六師團長、高田早大總長、米國觀光團、第一艦隊乗組將卒、伊國軍艦及び練習艦、帝國軍艦春日滿州等の各乗組將校水兵何れも臺北を訪れたが、この年南門下水幹線工事起工式、高松宮御結婚奉祝會、建國祭、社會教化團體及納稅功勞者表彰式、明治橋新營地鎮祭、兒玉總督二十五週年法要等各種の催物行事が執行され、市教育後援會の設立、兒玉總督遺物展覽會の開催を見たが、尙四月市營バスは開業して自動車



課が設けられた一方、更に九月土木水道課が土木及水道の二課に分立した。而してこの年實業會の納涼會が開催され賑を見た。昭和六年には九州臺灣の海軍飛行機の飛行があり、臺灣放送協會成立臺北放送局が開始され、又た防空演習燈火管制等新しい國防作業演習が行はれて何れも好結果を收めたが、更に臺灣電力會社の外債成立し、日月潭工事の着手も近く工事請負問題が議論され島内も活況を呈すること、云はれて居る。尙この年華陽の宮殿下が陸軍大學生として演習旅行に御來臺遊ばされた。以上は市制實施以來今日までに、市として行ひ取扱つた事項中の主要なもので、その他大小幾多の事務は、市尹以下の人々の手に依つて處理されたもの多く、市としては多端を極め、不斷の努力が拂はれたものである。

大正九年七月に、臺灣地方官々制改正と共に、律令で臺灣市制が公布を見たので、市役所を現在の地、臺北市樺山町（當時三板橋畔大竹團）に設置し、樺山小學校の建物の一部とバラック式の建物とを以て市廳舎に充て、『臺北市役所』の大標札が、墨痕鮮かに掲出され茲に市の新装を見、九月一日開廳式を舉行して、市政の運用を開始した。臺北市



の出現に、年來の希望が到達したので、市民は喜悅に満ち市内到る所歡呼の聲を聞き、市民は何れも前途をば祝福し、市民祝賀會も總督の來場の下に盛大に開催された一方、市尹以下の任命と、協議會員の任命があり、市訓令第一號で事務分掌規程、施行細則の公布あり、告示第一號で臺北市公告は、臺日附錄臺北市報に掲載するを以て公告式となす旨の決定があつた。恁うして以來今日まで十有一年、その間市勢の異常な發展に伴ひ、市民福利公益を増進すべく、諸般の施設が新に見られたり、改善されたりして、臺灣首都としての面目を保ち、文明都市の設備街觀その他、恥ざるなきを見るに至つた。

從來とても然うであるが、御來臺遊ばされる各宮殿下は申すまでもなく、内外知名の人々、顯官顯職の人々は勿論本島を視察觀光する者は、誰でも必らず臺北の地を訪れ、まづ最初に臺北の地を視察觀光するのが當態であつた。而して此れ等の人々は、異口同音に臺北の立派な、明い、文明都市であると云ふに一致して稱賛しない者もない。従つて市に於ても、首都の面目上、一意専心、各方面に各種の計畫を建て施設を行ひつゝ、進んだる現代の時勢に順應して、善處これ努めて居る。而も市制實施以來十年間、市勢は



益々伸展する一方、現代の文化は向上を辿り、生活の程度も亦た高くなつたり、スピート時代が到來するほどに交通が至便になり、教育の普及發達は、學校の増設を餘儀され、産業の發展は、新時代の機運に合致すべく改善進歩を促すや切なるものがある。而も一面市の財政は年々擴大されるのみで餘りに餘裕がない位で、市政をば料理する市幹部の心勞は察するに餘りがある、然るに歴代の市尹は、何れも市民の福利公益の増進を計り、文明都市の設備と内容充實に、銳意努力して、不斷の活動をつづけられて居る。而して市民は内臺人協力、市民としての義務を果し、市の發展を念として、市と共に一つに、大臺北市の出現へと、奮闘して活動して居る。恚うした事情が、十年の歲月を閲した今日、異常なる進展振を示し、名實共に具備した臺北市として出現を見たと云つて可い。加之市當局としては、各宮殿下を始め本島來臺の人々は、一度は必らず首都臺北を訪れるのであるから、各宮殿下の奉迎は申すまでもなく、相當の人に對して、或は團體に對しては、歓迎することになつて居るので、恚うした外交的行事も多い。艦隊乗組員の來北には、幹部は歓迎宴下士以下には茶菓の饗應接待をしたり、觀光團や知名の人に對し



ては、歓迎會を催す等なか／＼隨時の處置が、多種多様で多忙を極めて居る。その他奉祝賀、遙拜遙弔の式も行はれ、常に市が中心として幹旋、市民合同の會合を見るのである。これ等は市政運用以外の取扱ひ事項で、若し市の事務に至つては、伸展著しい市勢に適應しての施設を見るので、多岐多方面に互り、一々枚舉するに違ないが、而も着々善處改善されて、治績は大に擧げられつゝあるのである。過去十年間、思へば長いとは云ひ得ない、寧ろ短い方だが、その間市としての發展は、目醒ましいもので、歴代市尹以下の所員の努力には、感謝を表すと共に、更に不斷の努力を望み、將來に對する期待も亦た大なるものがある。

市制實施されて十年、その間市政運用宜しきを得、益々市の伸展著しきを見たが、殊に市の光榮とし、市民の感激狂喜した市史の上に特筆大書して、永遠に傳ふべき、空前の盛事が、大正十二年四月にあつた。それは鶴駕の臺臨を辱ふし、首都臺北市には前後六日間御滞在遊ばされ、市民が熱誠を捧げて奉迎申上ぐる裡を、臺北市内各地附近の地を御視察玉歩を印し給ふたことである。鶴駕奉迎の盛事は、島民の等しく子々孫々に傳



へ語つて、記念すべき光榮事項で、既にこれを詳述した圖書に幾多刊行されて居るか  
ら、唯だその要を謹記し奉ることにした。領臺當初近衛の精銳を引卒召され、臺北城を  
占領された、故北白川宮大將殿下は申上ぐるまでもなく、領臺後屢々皇族方が御渡臺遊ば  
され、臺北に幾日かを御過し遊ばされ、在住民の奉迎を受けさせられたのみならず、市  
となつた今日までに、屢々各皇族の宮の御來臺を辱ふしたのであつた。殊に大正十二年  
には、今上陛下が東宮に在しまし、攝政の職に在せられた時分、親しく鶴駕を本島に進  
まられ給ふのである。その後秩父高松の兩直宮殿下をも奉迎して、臺北市民は重ねく  
の光榮に、皇恩の難有さに感激し、熱誠溢るゝ奉迎にこの永遠に記念すべき盛事を、狂  
喜感激に目のあたり拜したのである。即ち新緑薰風の四月十六日、基隆に御安着の東宮  
殿下は、その日臺北に御着御泊所總督官邸に入らせられ、第一夜を御過しになつたが、  
この夜市官民二萬の提灯大行列を行つての奉迎を受けさせられた。翌十七日は臺灣神社  
御參拜、督府御成の上、市内學校生徒兒童の旗行列御臺覽、次で植物園内臺灣生産品展  
覽會中央研究所農事部に行啓、芝山巖へ御使御差遣、同夜御泊所で清樂演奏御聽問、十



八日は中央研究所、臺北師範學校、同附屬小學校、太平公學校、軍司令部、高等法院、臺灣教育品展覽會（臺北第一中學校）、醫學專門學校へ行啓、御泊所で蕃人舞蹈御臺覽、衛戍病院警察官及司獄官練習所、臺北工業學校へ御使御差遣、十九日は臺北御發中南部澎湖島御巡啓の途に就せられた。二十四日御召艦金剛御坐乗、澎湖島より基隆御着、御召艦上よりクルーバー濱に御成り、御召艇で港内築港工事御巡覽、重砲兵隊行啓の上臺北に御歸還、一旦御泊所に入らせられ、更に博物館に御成り、次で圓山運動場に於ける全島學校聯合運動會に行啓、競技を御覽になつた。二十五日は草山北投に御清遊、途中基隆河で家鴨放飼御臺覽、御還啓後御泊所で島内官民七百名に御賜茶の茶を賜はり、二十六日は歩兵第一聯隊へ御成、營庭で御閱兵、專賣局、第一高等女學校、武德殿、第三高等女學校へ御成、圓山運動場で舉行の臺灣體育協會の陸上競技大會に御臨場競技の臺覽を賜はり、御還啓後御泊所で總督以下官民八十名に御陪食仰付けられ、市民の赤誠を罩めた本島固有催物行列を御覽になつたが、當日總督を召されて、御沙汰書を御下賜、明石總督の墓前にも御使を差遣された。かくて二十七日臺北御發、基隆より御召艦金剛に



御坐乗、東都へ御還啓に相成つた。殿下親しく臺北の地に御駐駕遊ばされること前後六日間、極めて御多忙な御日程の下に、各所御巡啓御視察を遊ばされたのは畏き極みと申すべきである。我臺北官民は奉迎に關し萬遺憾なきを期し、市民は奉迎の誠を致し、街々は美しく飾かられ、國旗提灯を掲げ、この盛事を迎へたことに狂喜感激したが、毎年四月十六日を記念日として、永久にこの盛事を偲び、語り傳へてその光榮を誇りとして居る。

人口今や二十有餘萬、内地人臺灣人と少數の朝鮮人とを市民として、臺北市は大正九年成立以來、既に十年を經過して居る。領臺後一大進展を示した臺北の地は、臺北市の出現に依つて、名實共に市としての存在を認められ、市尹以下の幹部その他は、一意専心市政運用に努力し、時代に順應したる、各方面の施設を見、協議會は内地人臺灣人中から協議員任命され、協議會を開會すること既に十有九回、會議は毎回和氣靄々の裡に議事の進行を見、會員の言動は、終始眞摯而も穩健に、研究的態度を持し、毫も内地人臺灣人たるの差別は勿論、黨派的色彩をも些も認められず、何れもその職責を盡すに熱



心に努力しつゝ、茲に協議機關としての協議會は、市政の運用を圓滑なしめて居る。鶴駕を奉迎した光榮を有する臺北市民は、愈々聖恩の厚きに感激し、市の發展に努力し十年間の進展の跡を顧み、更に文化の向上に盡し、時代に適應して穩健の發展を辿ることを念として、大臺北の出現を期せねばならぬ。現に久しき以前から耳にする、グレート臺北即ち大臺北の聲は、近き將來に於て名實共に出現するものと信し、今でも大臺北と呼んで、我等市民はこの十年間の進展を誇つて居る。十年と云へば一昔、長いやうだが短い、更に十年を加へて二十年、また十年を加へて三十年、やがて五十年後の臺北は如何、敢て遠きを語らずして近き十年間の異常な發展を慶賀し、文明都市が建設されたことを、衷心から喜悅するのである。健全なれ臺北市、我等は美しき、明るき臺北市を有することを市民として誇るものである。



# 繁榮する臺北の鳥瞰圖



- || 昔の臺北三市街と臺北市内 ||
- || 市内を装ふ大小の道路と街観 ||
- || 街観美の建物と内地人の住宅 ||
- || 交通機關とスピード時代出現 ||
- || 大小公園と散歩地と涼み場所 ||





## 繁榮する臺北の鳥瞰圖

### 昔の臺北三市街と臺北の市内

…所謂臺北の三市街と臺北市…位置地勢と廣袤と人口…

臺北の氣候天氣と夏季…伸び行く臺北市と新開地

臺灣を訪ふ内外の人々が、何れも異口同音に、美しい明るい都會、文化的の都市であると推稱する我臺北市は、四時翠綠滴り、常夏の國の都市として、深紅の花咲き、新緑の風薫る、南國的情趣極めて濃厚な所である。而も在住する人々は、内地人と呼ぶ大和民族を經とし、本島人と稱せらるゝ、支那民族の新附の民を緯とし、それに僅かなるこれも我同胞の朝鮮人と、更に少數の外國人や、對岸支那から渡來する支那人とが織り込んで、一つの紋様をなして居る。既に歴史が物語るが如く、乾隆の四十八年に閩人陳賴章とその一味が、開拓に従つてから二百有餘年、艋舺や大稻埕さては後れて城内と云つ



た、所謂三市街が建設され、漸次發達進展を辿つて今日の盛を致したものである。今日こそ臺北市と呼ばれ、人口二十有餘萬を抱擁する都市の出現を見るに至つたが、その昔閩人開拓の當初は、今更に語るまでもなく、この地一帯が廣漠たる原野で、所に森林が散點し、丈なす荆棘が繁茂し、その間各所に蕃人が部落を作つて、茅屋の蕃舎が此處の森蔭彼方の河畔とに點綴し、互に勢力維持の争鬪を行ひつゝ、この廣漠たる曠野を、彼等蕃人は鳥獸の狩獵地とし、野に鹿を逐ひ、河に魚介を獲て、原始的な生活状態に、來る年も來る年も、恁うした生活を續けて居たのみか、他の民族の侵入に對しては、甚だ強硬な態度を持し、一步も容易に踏み入らせなかつた。嘗て淡水の地を本據とし、北部臺灣の地を、布教教化を以て占領せんとして、南部占有の蘭人に退却を餘儀なくせしめられた西班牙人も、臺北平野の蕃人に對し、これを手馴けんとしたが、失敗に歸してしまつたと云ふことである。西班牙人は淡水河の上流に、臺北平野なる廣漠たる原野があつて、其處に蕃人が割據居住して居ることを知つて、宣教師の如きは、幾度も或は陸路に依り、或は淡水河の上流に依り、蕃地の踏査を試みたが、悉く蕃人の拒む所となり、彼



等が暴戾な行爲で、その兇刀に斃れた者も尠くなかつた。鄭成功時代は、兵を此地に進めたが、蕃人を容易に屈服し得ず、麾下の將卒中二三が止まつて、僅少の地を蕃人と交渉の下に開拓したに過ぎない。閩人は艋舺の地を本據に、その土地から附近の土地へと、開拓の手を伸ばし、巧妙な手段で蕃地を浸佔して、遂に蕃人を驅逐してしまつたが、艋舺の地には徐々に人家を建築して、その數を増し街衢が出来たが、それ故に艋舺の建街地域は狭小であつたのは勿論、開拓しては人家を造り、それが集まつて一街區を形成し市街が建てられたから、三艋と稱せられ、その殷賑を極めた時代に於ても、北部臺灣に於ける、隨一の繁華地ではあつたとは云へ、その街衢としては今日の艋舺と呼べる、臺灣人街のそれよりも狭かつたのである。亦た大稻埕にしてもこの例に洩れなかつたが、その街衢の地域としては、その隣接街たる大龍峒と同様、今日のそれと略ぼ大差ない位であつた。大龍峒は一時盛況を極めたものの、大稻埕にその殷賑が奪はれ、而かも殆んど街そのものが接觸して居た關係上、その一部であるかの如く思はれたから、盛時の名残りを止めつゝ街衢が存して居るのみか、街衢そのものの地域が狭まかつたから、衰へ



ても然う變化がなかつた。城内は今日の地域であつたのは、城壁で圍まれたる官衙官人町であつたため、城壁が取除かれた後も、依然他とは自ら區劃が明かにされて居ることとは、今も昔も同様である。而して魃舳と大稻埕との間には、領臺當初後四五年即ち明治三十二三年頃までは、田圃で細い路があつて、それが通路であり、竹藪に圍まれた農家が散在して居たし、魃舳の北寄の所には、養魚池である魚塭が所々に見受けられて居たし、墳墓もあつて、現在榮座と云ふ劇場を中心とした、西門街即ち今の西門町末廣町方面には、今でも地中から人骨が掘り出されるとか云はれ、明治三十二三年頃は、内地人が家屋を建築するために地を掘ると、棺の破片や人骨が出て氣味悪い思ひをしたさうな、今から考へると嘘の如き話だが事實である。城内は同じく領臺後三四年、或はそれ以上かも知れぬがまだ人家が稀薄で、僅に街衢を成したと見られるのは、今の榮町本町京町の各町位で、新公園から南方には、田圃があり竹藪や農家があつたと云はれる。その他南門以南や東門以東の各方面は、總て見渡す限り田圃で、竹藪と農家が點綴するに過ぎず、今日郊外に見るが如き、田圃の致景であつた。それ故に臺北三市街と云つても、



それは狭い街が三つ飛び離れてあつたと云ふわけで、一つの都會地と云ふには、聊か變態の觀があつた。その後即ち領臺後數年にして、内地人の渡來する者多きを加へ、依然として臺灣の首都となつたので、臺灣人の方も人口増加し、艋舺方面と云はず、大稻埕方面と云はず、人口増加に伴ひ人家が増築され、艋舺と大稻埕、城内と艋舺との間の田圃は、爾來漸次に街衢と化し、立派な幾條かの道路が出来、交通が頻繁となつて、三市街は合一した觀を呈した。加之南門外一帶の地も、明治末年から大正九年頃までの間に、内地人の住宅が夥しく建てられ、遂に内地人街が建てられてしまつた。城内も田圃は、早くも街衢に化せられ、官衙や病院學校官舎等も多く建てられ、それに商家も増加して立派な街觀を呈した。それで現在では、城内と今も呼ばるゝ地域は、主として内地人の居住者が多く、島都としての行政上、經濟上の諸機關は勿論、公園圖書館博物館等の各種の文化的設備が行き届き、銀行會社内地人商店が軒を接して建ち並んで繁華殷盛の巷となつて居る。而してこの地域は大體に於て、近代文明都市として、立派な外觀を備へ、市街は煉瓦又は鐵筋コンクリート造二層三層高樓大廈が建られ、いよゝゝ街觀美を呈し



て居るが、道路も幅八間以上のタークレーの坦道は、市街を縦横に貫通し、城壁を取除いた址は約二十五間乃至四十五間の幅のるリングカーデンで、俗に三線道路と稱し、これには遊歩道を設け、所々に圓形若くは半圓形の小公園をも配し、その瀟洒たる感は他に見得られない光景である。大稻埕も亦た艋舺と同様に本島人の居住者が大多數を占め、全地圏が商業地帯で、臺灣重要輸出品たる米や茶の取引中心市場となり、家屋は概ね煉瓦造の二層三層樓で巨商軒を並べ、外國商館これに伍すと云つた工合に、城内や艋舺とは些か異つた情趣を漂はせて居る。艋舺は今は萬華と書かれるが、まだ艋舺の文字が多く使用されて居る、既述の如く最古の街でその昔殷盛であつた名残りを止め、本島人が最も多く居住して居る。而して所謂艋舺街は煉瓦造の臺灣人家屋が多く、新しい新起町及び西門町と今日呼ばれる各方面には内地人の居住多く、内地人の家屋が軒を並べて内地人街が出来て居るが、かの西門町市場の八角堂を中心として、夜は露店が店舗を並べ、散策の人で賑ふ地帯及びその附近一帯の地は、内地人經營の料理店、バー、カフェー等々があつて盛り場を見せ、仇姿の藝妓衆も多くこの方面に居住して繁く往來し、所



謂臺北に於ける花柳界の氣分を多分に漂はせて居るが、更に常設活動寫眞館や劇場もこの方面にある。又た淡水河の河畔には、艫舳遊廓があつて、河岸に建ち並ぶ十數軒の青樓からは、夜の帷幕が垂れ紅燈に火が入ると弦歌の聲が頻にさんざめき、本島人街の一角に、不夜城が出現される。而してこの遊廓は内地人の遊廓で一般にまんかと呼ばれて居るから、内地人の間には單に艫舳と云ふと遊廓と解される。而して淡水河の緩き流れには、端艇を浮べて舟遊する若人もあつて、暑い國柄水に親しむ人々で、夏の夜は恁う云ふ風でこの方面は賑かであるし、常に小型の戎克船が往復し、面白い風景が描き出されて居る。現在の臺北市はこの三市街の外に大龍峒と郊外の九村落を抱擁して、これを六十四町に區劃し、南北兩警察署が各々分轄して居る。市内の町名は市の出現前までは舊時代の街名を用ひられたが、大正十一年以來内地風に現在の町名に改められたのである。臺灣の首都、總督府並に軍司令部の所在地たる我臺北市は、市の中央に總督府高等法院軍司令部等々の首腦官衙が集まつて、本島統治の中心を成して居るが、又た一面には高等學校や専門學校を始め、昭和三年には臺北帝國大學の開校を見、學系の完備せる



と共に、臺灣文化の源泉を作し、而も市内には緑樹多く植ゑられ、翠緑滴り風亦薫るの大都會地として、稀に見るにの美しさを呈し、南國の情趣豊かなものがある。この美しき都市臺北の位置を記すと、西には帶の如く平野の間をば緩かに貫流する淡水河があり、これを狭んで新莊郡と對し、北は劍潭山を以て七星郡の士林庄と界し、東は七星郡松山庄に接し、南東は山岳を以て文山郡に連り、南西は淡水河の上流たる新店溪を以て海山郡に隣つて居て、頗る形勝の地を占めて居るが、これを更に地理的に示すと、東經百二十一度三十一分、北緯二十五度二分、海拔七メートルを示して居る。地勢は概ね平坦なのは、臺北平野の中央に位するからだが、それでも多少東南から西北部へと緩漫な傾斜がある。廣袤は東西二里八丁、南北二里十二丁、面積三方里〇六、沃野穰々として遠く連り、道路は四通八達し、鐵路南北に去つて運輸交通亦た至便に、地の利を占めること多く、島都としての名に恥ぢない。而も溶々たる淡水河の清流は、帶の如くに市の西半面に沿ひて流れ、北には秀麗な大屯七星觀音の諸山が聳え、東は沃野穰々として遠きに展開して青田の廣々しさが見られるし、南は蕃界の青巒連峰が遙に雲際に山姿を見する等、



その風光明媚なことは、都市の美しさを一入増し、臺北は正に自然に城を作すと云つた。觀があり、街頭に歌ふ兒童の歌に、流れゆたけき淡水河、山河自然に城をなす、と云ふのがあるが、全くその通りである。而して市制實施前は、艋舺大稻埕古亭村の三區にこれを大別し、更に別にこれを百四十五の街に分割したもので、その地域は可なり狹小で、街名の稱呼亦た頗る繁雜を極めたが、市制實施と共に、この三大區の別を撤廢し、更に郊外の部落を併合して、茲に臺北市を形成し、翌大正十年町名を改正して六十四町となし、これに郊外の部落たる大安六張犁下内埔中庄子朱厝崙上埤頭中崙下埤頭西新庄子の十を加へて臺北市内と稱するに至つたが、これ等は所謂郊外の村落で、何れも農村と云ふべきもので、市制實施前に於ては、古い時代は勿論大正年間以後いや、近年に於ても、城内艋舺大稻埕の三市街と古亭村方面とを包んで、俗に臺北市と稱して、久しきに及んで居る位で、その地域も狭かつたが、市制實施の結果、郊外の十村落をも編入され、地域も従つて擴大されたから、今日に於ても市街地を除くと、市内にも水田、畑、山林等がある。これは市街地以外に憊う云ふ郊外村落を市内に編入されたゝめであつて、その



總面積は四千百二十六甲餘で、官有地は六百十甲餘、民有地は三千五百十六甲餘を示して田が最も多きを占め、次で建物敷地、畑、山林等がこれに次で居る。而して市制實施以來十年間に於ける地價の趨勢は、市勢の發展と共に人口の増加は、自然的に市區計畫線以外に住宅地を選定して、家屋を建築する者が漸増するやうになり、所謂郊外の發展を見るの狀勢を示し、その結果自然に地價の騰貴を招來したものである。恁うした現象は何處も同様であつて、臺北市内でもこの例に洩れずこの趨勢が著しく、近年いよ／＼上騰を辿る一方である。一例として地價を二三記すと、臺北城内の目貫の場所、榮町の如きは、大正十一年には坪當百二十八圓であつたのが、昭和元年に百三十圓、昭和五年に百五十七圓を唱へ、住宅地たる大正町も、大正十一年には坪二十一圓位であつたが、昭和元年に二十五圓、昭和五年に二十八圓と云ふ値を示して居る。その他郊外の地、富田町の如きも、大正十一年には坪二圓だつたが、昭和元年に三圓となり昭和五年には八圓と云ふ高値を示して居る。これは帝國大學やその他學校がこの方面に建てられた結果が、大なる原因を作つたと思はれるが、大安方面の如きも同様大正十一年には坪三圓が、



昭和五年には倍額の六圓を示すと云ふ状勢で、何れもこの状勢は市の發展を證明するものであると云つて可い。次に人口であるが、全體最近の國勢調査の結果、日本全體に於ても、非常に増加して今や一億近くの數字を示すであらうと云はれて居るが、臺灣も臺灣人の増加と、内地人の渡來者が激増したのとで、領臺後は人口は増加する一方、それに臺灣人の増加も著しきを示して來たからで人口二十餘萬の都市と誇る臺北市の出現は寧ろ當然のことと考へる。無論領臺前には、人口と云ふことは問題にされぬほど、文化の度が極めて低く、人口統計の如きも發表されて居ず、國勢調査なんか、勿論一度でも行はれなかつた故、臺北の人口は恐か、臺灣全體の人口になどは一切知られて居ない。但し漸くかの劉銘傳が巡撫として就任し、臺政に大革命を斷行し、租税の關係から、人口を調査したもの、それとて完全な人口統計ではなかつた。領臺後は督府の手で、而も統計課が官房の一課として置かれ、専門家が課長として統計事務を執り、人口統計は勿論、その他諸般の統計書が、續々毎年刊行發表されたから、これに依つて臺北に於ける戸口人口その他人口統計上の各般の事項が知り得ることが出來て今日に及んで居る。而



して市制實施に依つて臺北市が出現してその編入地域も、從來の三市街以外に近郊十村落を含んで居るので、市出現以前の人口に就ては、地方行政區域が屢次變改されて居るため、その數字の上から直にこれが増減を比較することは頗る繁に失するから、市が出現して以來十箇年間の人口に就いて、その趨勢の概略を示す方が、賢明な事ではなからうかと考へ、市出現以來の事のみを記述する。即ち市制實施直前たる大正八年末では、戸數二萬九千四百二十四戸、人口十一萬二千九百七十人であつたが、これは所謂三市街の戸數及び、人口と見るべきである。同九年九月制度改正に伴ひ、郊外部落合併の結果、戸數は内地人一萬三千七百二十一戸、本島人二萬五千九百八十三戸、朝鮮人八戸、支那人二千六百四十九戸、その他の外國人二十九戸、合計四萬二千三百九十戸で、人口は内地人四萬六千五百五十三人（男二萬四千二百八十人女二萬千八百七十五人）、本島人十一萬五千六百人（男五萬八千五百四十四人女五萬七千五百五十五人）、朝鮮人十六人（男十五人女一人）、支那人九千七百七十六人（男七千三百三十人女二千四十五人）、その他の外國人五十五人（男三十三人女二十二）、合計十七萬千二人（男九萬九千二百八十八人女八萬三千三百三十四人）に増加して居る。爾來市勢の進展著しく、郊外に住宅地が出



現し、所謂新開の街が各所に出來、その昔竹藪で圍まれた農家が諸所點在し、田圃には水牛を叱る農耕の人影で賑つた土地が、今は立派な家が建ち並び夜は家々から洩れる灯影も美しく、ピアノや琴の音、さては蓄音器やラヂオの音さへ聞えて、以前の面影を消してしまつたと云ふ工合で、随分開けたものである。されば戸數や人口の増加の著しいのも寧ろ當然で、市制實施五年後の大正十四年末の現在は、戸數は内地人一萬五千二百十九戸、本島人二萬八千五百九十七戸、朝鮮人四戸、支那人三千五百一戸、その他の外國人五十五戸、合計四萬七千八百八十一戸を算し、人口は内地人五萬二千三百五十二人（男二萬七千四百六十四人女二萬四千八百八十八人）、本島人十三萬四千六百六十八人（男六萬七千三百八十八人女六萬六千七百八十人）、朝鮮人五十五人（男二十二女三十三人）支那人一萬千九百六十一人（男八千七百九十一人女三千百七十人）、その他の外國人九十三人（男五十人女四十三人）、合計十九萬八千六百二十九人（男十萬三千七百五十五人女九萬四千九百十四人）であつて、五箇年間に激増したことは夥しものである。更に最近昭和四年末の戸數人口を見ると更に激増を示して居る。

戸數は内地人一萬八千二百六十八戸、本島人三萬千八百七十三戸、朝鮮人十九戸、支那



人四千四百九十戸、その他の外國人五十二戸、合計五萬四千七百二戸、人口は内地人六萬四千八百九十八人（男三萬四千九百九十三人女三萬七百五五人）、本島人十五萬三千三百五十三人（男七萬六千五百七十六人女七萬六千七百七十六人）、朝鮮人九十四人（男四十人女五十四人）、支那人一萬四千九百三十三人（男一萬二百四十五人女四千六百八十八人）、その他の外國人九十四人（男五十四人女四十八人）、合計二十三萬三千三百七十一人（男十二萬二千二百六十三人女十一萬二千七百零八人）を示し、異當の増加あつて遂に二十三萬を超ゆるに至つた。而して最近の人口を見ると、本島人の人口が非常に多く、約總人口の半分弱、内地人は約四分の一弱、支那人が二割、朝鮮人や外國人は極めて少數で、初めて臺北の地を踏んだ人が、支那式の服裝をした男女の本島人が多いので、支那に來たやうだ、と云つたのも無理はない。本島人は新附の民としての土着人、内地人は母國から渡來した人で、女の數が少いのも當然、而も大部分は官吏か官廳關係の人並にその家族、會社銀行員、商店經營者と云つた順で、臺北がお役人本位の地、殊に城内の商店が官界人を顧客の主なるものとして居ると云ふことは、これを見ても判らうと思ふ。それに地理的關係からして九州沖繩方面の出身者が多く、山口縣廣



島縣からも多く來て居るが東京以北は少い、要するに關西地方人が多數であると云つて可い。本島人は艦舳や大稻埕に多く、その他の所にも居るけれども城内には尠いが、而も郊外部落は悉く本島人で占めて居ると云つて好い位である、而も男より女の方が多いと云ふことである。朝鮮人は一般勞働者の徒輩で、女は娼妓酌婦と云つた賣笑婦の類だと云はれ、男より女の方が多いのもこれに原因する。支那人は所謂勞働者とその家族で、女の方が少いのは出稼者が多いからである。彼等は故郷が動亂續きで不安なものと、一方銀安關係等で近來特に出稼者が激増して來た。その他の外國人は茶商並にこれに關係した歐米人殊に米人とその家族、それから宣教師や學校のお雇教師等で、男より女の方が少いのも恚うした事情からであらう、彼等外商や宣教師は大稻埕方面に居住して居る。而して臺北市の人口は、逐年増加を辿る一方で、市の進展と共に激増を見つゝあるが、二十三萬の人口を抱擁する都會地は、三府を除いた大都會にも比敵すべきもので、廣島市位であらうと云はれる、何と榮えたものではないか。

東經百二十一度三十分、北緯二十五度二分の位置に在る、臺北市並にその附近の地即



ち臺北地方は、曠野の中に在るので、緯度から云ふと温帯、寧ろ亞熱帯の地圏に入つて居るので、暑さも甚しいことは當然である。既に臺灣が常夏の國とさへ云はれ、暑い所暑さの甚しい土地として、誰知らぬものがない位である。されば人々は夏は苦熱に喘ぎ、流汗拭ふに暇なしと云ふ、暑熱振に耐へつゝ働いて居る。だが然し、年中然う暑いのはなく、嘉義臺南高雄の各地方の如く熱帯圏内に在るそれ等の都市とは、暑さに就いては相當差異があると云ふものだが、然し常夏の國と稱せられる土地だけに、臺灣の各地は何れも夏期が長く、約一年の大半を占めるほどで、一方短い春も秋もある、これは僅々月餘に過ぎないため、春や秋と云ふふ季感が内地の如く著しくない。冬は春秋に比しては長く、寒さを口にすることがあるけれど、何しろ季感が内地と全然同一でなく、また季感を示す花やその他の自然界に於ける現象の顯著なものがないから、うか／＼すると、何時の間に春が來たのも知らず、冬から直に夏めくやうに感ぜられるし、また秋も然うだが、これをよく觀察すると、自然は争はれぬもので、四季折々の季感が貧弱鈍感ながら知り得られるのである。たが何せ、新緑薫る春四月と云ふ位な自然界の現象だ



から、季感が明白でないと言ふことになる。憊うした現象は、熱帯地圏の南部各地に於て殊に著しく、亞熱帯の地圏に在る北部地方はそれほどでない、臺北地方もその通りで、季感が鮮明ではないが、四季折々の季感は味ひ得られる。何しろかの北回歸線なるものが本島の中央、即ち嘉義市の少し南を横斷して居るし、臺北の地方は亞熱帯の地圏に在りながら熱帯地圏に程近いから内地に比較すると、夏季が長く冬季が短いし、春と秋とは尙更に短い、従つて極めて短い春と秋とは、その區劃が甚だ不鮮明で、また冬は非常に暖く、雪などは平地には降らず、偶には積雪を程近い大屯山の山頂に見ることがあり、臺北の人士は何れもこれをもの珍しがり嬉しがり、雪見に出かけると云ふ始末、唯だ冬になると、晴れた日は遠い蕃界の山々に時折り積る白雪を遠望する位、雪の實物を知らぬ子供は尠くない。而も結氷は領臺後僅々二回、結霜は時々あるが、これも極めて稀有であるから、冬は温暖で決して凍傷や輝に禍されることもなく、兒童などは恵まれて居る。而も秋に樹々の紅葉は、霜がないから平地では見られないが、冬の寒い時に於ても眞紅の色濃かな、熱帯植物佛桑華の花が美しく咲いて居るし、冬木立などは一向見られ



ず、樹その梢は常に緑に繁茂して居る。何でも内地の一年生植物は、臺灣では多年生植物として成長するので、四季草花は絶えず花を見せ、常緑な田野の美景と相俟つて愈々南國的臺灣情趣を濃厚ならしめる。既に二月には緋櫻が咲いて桃が散り、四月には新緑を見る土地とて、もう四月に入れば夏めいて來て、夏は十月末頃まで約半歳に及ぶほどに長いが、然し内地に居る人の想像するやうに、非常に暑いことはないと云つて可い、九十度以上の日が、毎年七十日乃至百日位であるけれども、同じ九十度に寒暖計が上昇する氣温でも内地のそれに比して、海軟風や驟雨等の關係があるため遙に凌ぎ易い。であるから盛夏の日中でも、室内や樹蔭に在ると、清風常に去來して寧ろ清涼を感ずると云つた工合で、即ち流汗拭ふに違なき炎暑でも、驟雨が一過すると、涼味萬斛苦熱に喘ぐ人々を蘇生させる。しかも大抵毎日驟雨を見ることが多いから、天の配劑はよくしたものである。殊に夜半から黎明にかけては氣温が著しく低下する故に、凌ぎ易いと云ふもの、但し恁う云ふもの、常夏の國の夏だ、電扇も氷も必需品たるは無論のことであり、暑さで寢られぬ夜も尠くない、まだ夜半後夜明までに氣温が變化するから、寢冷等



に罹り易いと云ふものである。されば臺灣の夏は毫も恐るゝに及ばない、唯だ長いからその辛抱には聊か困憊する。然し夏は暑いが男性的で、人々は苦熱と闘つて活動するから、寧ろ活氣は充溢して臺灣の臺灣らしい所臺灣生活の眞味は、この夏に於てのみに知らるゝと云ふも過言でなからう。その他緋櫻や桃が咲き、何となく陽氣が温かに、自然界が目醒めたやうな心地になり、山野に霞が立つと漸くに春と感ずるが、それも僅かの間であつて何時とも知らず春は逝き、内地の花信を耳にする時分はもう初夏である。而して落葉も紅葉も見ないので、漸く風の音にのみそれと知らるゝ位、秋の感に乏しと云ふのは、秋の野を飾ざるべき薄や女郎花など、まだ夏である八月に咲くからである。冬は十一月頃からで、臺北地方は勿論北部地方は、季節風が夜毎に募り、一日くゝと寒さを感じる。寒さは二月が最甚しく、多くの人は内地同様冬の装をするし、火鉢も必用な場合も尠くないが、内地のそれとは雪泥の差で、雨の日だけが寒さを感じて晴れた日は暖かである。而して在臺久しきに互れば互るほど、冬の寒さを甚しく感ずるから、内地同様の冬の衣裝、外套襟巻と云ふた防寒服裝で、寒いくゝと呼ぶのは憊うしたな在臺久し



きに及ぶ人によく見受けられる現象である。而して臺北地方の天候は、十一月から翌年二月頃までが冬季で、季節風の影響を受けて雨季である、殊に一二の兩月から、時に三月頃までは、概して降雨の日が多く、大抵陰鬱の空模様で而も寒いのである。それで雨季に於ける降りつづく雨は、梅雨を見ない臺灣だとは云へ、内地の梅雨に似た天氣なので人々の氣を腐らせること夥しい。ところが四月から夏に入つて十月頃までの夏季は、殆んど快晴の日が打續き暑さも甚しいが心地よい空を仰ぐことが出来る。但しこの間に盛に驟雨即ちスコールが襲來してなかく痛烈壯快を極めるが、これも亦た南國氣分の一つだと云ふべきであるし、それに依つて晝の暑さが緩和される。然しこの夏季には多く七八九の三箇月の間が亦暴風雨季とも稱せられ、また物凄い暴風雨が襲來し、河水の氾濫その他水害の夥しいものがある。臺灣の名物としては、難有からぬもので警戒を要する、而もこれが多い時は、月に幾回も頻りに見舞はれるから恐慌である。雷雨も夏には可なり大きな、恐しいのが、屢々天に轟くが、春でも雷鳴を聞くことが多い、雷鳴を恐れては、夏の臺灣は過せない。而して既に記した如く臺北に居ると冬でも綿入や羽織外



套の冬服装や火鉢も入用な位寒さを感じるが、内地とは全く異つて、寒いとは云ひながら、非常に温暖だから恵まれると云ふもの、また夏は暑いながら、驟雨があつて緩和され、而も想像するが如き暑さでなく、單にその期間が長いだけで恐るべきでないから、氣候に就いては内地の人が云ふが如きことは全然杞憂に過ぎないと云つて可い。而も天恵豊かな所、全く恵まれて居ると云ふべきである。ところで面白いことは、これは地形の關係であらう、基隆と臺北とは僅々十餘哩の近い所でありながら、基隆は雨の港とさへ云はるゝ位雨が多いが、而も兩地はその中間汐止街（水返脚と云つた地）で、天氣が全く別になることがある。即ち臺北が降雨ても汐止を過ぐると晴天を見ることがあるが、基隆が降雨と云ふ場合が多いし、また反對の場合も尠くないので、旅行者を一寸間誤つかせると云ふ妙な現象がある。而して参考に最近昭和四年中の氣温を示すと、一年平均二十一度・六、最高（八月）二十八度・二、最低（二月）十四度・七で何れも攝氏である。

暑いと云つても、内地で人々が想像するほどに恐しいものでなく、たゞ夏の季間が長いと云ふだけで辛抱されば可い。流石は南國である、炎暑は男性的で活動する人々に活



氣を與へるし、而もこの暑熱を緩和する驟雨の爽快味は、他では到底味はれぬものがある。冬は亦た寒からずして氷霜を見ぬ温暖さは南國らしく、四季の綠樹に紅白紫黃の花が彩られ、甘い果實に舌鼓を打つと云ふ、自然に恵まれる所として臺灣は誇り得ると思ふ。加之領臺後に於ては、萬事悉く面目を一新して、都鄙何れを問はず、異常な進展發達を遂げ、衛生の設備の如き内地より遙に進んだものがあり、教育は帝國大學や高等專門學校以下各學校があつて學系も整ひ著しく普及向上をなし、交通はこれまた發達著しく、内臺間の距離は頗る短縮され、定期航路には一萬噸の巨船就航して航海の安全が保證されて居る。その他島内には鐵道自動車運轉して、これ等の交通機關は、四通八達の道路の完成と共に至便を極め、スピード時代を出現するの狀勢で、文化の向上發展は、實に驚くべきものがあり、長足の進歩を遂げた産業の開發と相俟つて、臺灣は眞に一樂土と稱するも過言でなく、南海の極樂境に相應しい、住居心地の好い土地として、人々の憧かれの所となつて居るとは、自盡自贊の嫌ではあるが、話半分としても結構な所と云ふべく、やれ生蕃が町に居て敲首するとか、夏は暑さで海の魚が死滅する等々の噂や



評判は、まだ見ぬ人の想像話、瘴烟蠻雨の惡疫流行の地であると云はれたのは、領臺當初の頃のこと、今尙これを云々して斯く考へて居られるに於ては、在住者の遺憾の上もないことで、これ等は悉く三十有餘年も前のことに屬し、今日は日進月歩して所謂現代の文化は此處にも及び、時の流れと共に在住の人々は動いて居る。臺灣首都臺北市も、異常な進展を遂げた臺灣の狀勢に伴ひ、首都の設備その他各方面に互り時代の趨勢に順應して向上する文化を取入れて、文明都市の出現を見て、今や名實共に市としての内容充實と更に向上發展とに、多々益々努力し、市政の運用よろしきを得て、一日／＼と伸びて行きつゝある。而して最近に於ては、低利資金の活用によつて、道路建築物の改善が施され、街觀は堂々として美しく、立派な坦道と建築物とは、渡來の人々を感嘆せしむるものがあつた。今や領臺以來三十有餘年在臺内地人の數も、漸次に著しく増加して、今や約十四五萬人にも及んで居るが、その三分の一は臺北市並にその附近に居住して居る。であるから人若し一度臺北以外の地に行くと、内地人の數の少いのが殊に旅行者の目につく、これには種々の原因もあらうが、臺北が首都である一方、内地人の多數



が官界の人々とその家族であるからだとも思はれる。而して本島人と云はるゝ臺灣人は、その名の如く本島に移住した支那民族の子孫で支那人なのだが、領臺後去就決定の結果新附の民となり、我日本の國籍を取得して居住して居るもので、臺灣は彼等の故郷であると云つて可い、これに反して内地人は母國から遠く渡來した者竝にその家族で、領臺當初の渡來者は『一儲に臺灣に行け』と一攫千金を夢に見た連中か、『臺灣に出稼しやう、内地では食ひ詰めたから』とか云つた連中で、何れも一時的臺灣生活者、腰掛生活者が可なり多かつた、従つて運よく目的を果した者は、三年か五年にして内地へ引きあげると云ふ成功者も尠くなかつた。これは何事も萬事創設の際であつたから、一攫千金の甘い汁を吸へたであらうが、今では立派に萬事が整頓し發展したから、恁うした浮雲的な成功は望まれなく、此處優勝劣敗の原則に因る社會現象が、人々の上に現はれて來て、もう昔の如きことはなくなつた。而してこの間堅實に努力したものが成功したと云ふことにならる。恁う云ふ工合に、世の中の事情が變つても、渡來者の多くは、まだ舊套を脱せず、内地に歸ることを名譽の如く考へて居たし他人もそれを羨望した、と云ふ風が容易に失



はず、而もこれが統治上の樞要の地位に居る高官の人に多く、従つて一般に落着かず、妻子は大抵内地に留守させ、獨身生活をやつたものである、然るに近時はもう學校機關は子弟の教育に何等差支を生せず、世間一般が落着いて眞面目な家庭が營むやうになり、その生活振が内地に於けるより遙に安樂であるから、自然に永住する人が多く、住宅なども自ら建築すると云ふ趨勢となり、在住内地人の考へが今では全く異つて來た、これが市勢の進展を見た一原因とも思はれる。もう城内や艋舺大稻埕の方面は、建街してから長歲月を閲して、伸展の餘地に乏しいが、南門外や東門外の各方面は、その餘地があるので著しく伸展して、昔の田圃は新開の街となつて、續々と新しい家屋の建築を見、漸次郊外村落には、立派な街衢が建設されるの狀勢で、市の發展は益々大を致すと信ずる。これは一面低利資金を利用する建築利用信用組合が最近に於て多く組織された結果、この組合の手に依つて新開の街が出來、新しい家屋が建てられることが多くなつたのである。而して臺北市の西は淡水河に臨んで居るから、もうこの方面にては伸展することは絶無だが、東門外即ち東方と、南門外即ち東南の各方面は、その餘地が可なり多く現に



盛に新開の町が建設されて居る。北方には基隆河が流れて居るので、この河の以南には、尙餘地はあるが、まだこの機運に到らず、漸く最近に於ては住宅がぼつぼつ建てられるのを見るのみである。新開地の増加は、市の伸展を示すもので、十年前に比較しても、その著しき伸展には、誰しも驚かぬものがなく、着々大臺北市が出現されつゝあると思ふと、市民としても心強く喜悅せずには居られない。十年後のそれは果して如何であらう、我等は多大の期待をかけて居る。

### 市内を装ふ大小の道路と街観

…緑樹に彩られた臺北市街と三線道路…改善された大小の道路と

淡水河護岸壁…市區改正工事と街観美…勅使街道と遺物城門…

平地に結霜や結氷を見ることの稀有な臺灣は、全島到る所山野は緑樹を以て蔽はれ、四時翠緑滴るの美しさが見られ、常夏の國南國の氣分をいやが上にも濃厚ならしめて居る。従つて緑樹に乏しい都市の地の例を裏切つて、臺灣の都市は何れも緑樹に彩られて



居る。首都臺北の如きも亦たその一つで、最も多く緑樹に彩られて、都市としての美しさと霑ひとを添へて居る。大厦高樓軒を並ぶる商業地圏にも、寸餘の地には樹林が栽植され、それが四時緑葉を梢につけて居るから美しいものである。その他一帯に庭が廣く取られて居る住宅も多いので、街路樹の繁茂すると相俟つし、市街は緑點々たるの街觀を呈して居る。殊に土地柄植物の發育は極めて旺盛で、街中には榕樹の如き熱帶植物の大樹が、天高く聳えて枝は空を蔽ふのが尠くない。それに住宅地等では道路の兩側に恣うした緑樹が植ゑられ、それが何れも青々と繁茂して緑蔭を作つて居るから、道路側の緑蔭には牛車を御する苦力が、夏季には涼を求めて午睡するのを見ることが多い、これも南國の情景、臺灣でないで見られぬことであらう。首都臺北の市街でも、この光景はよく見られるが、殊に我臺北市には廣場があれば緑樹が多く植ゑられ、道路の兩側にもこれを見、かの三線道路には、幾多の樹木が栽植され青々と繁茂して居る。これが城壁の跡で、城内を圍む中央部の一線にあつて、高さよりこれを眺むると、誠に緑に彩られたその美しさは一入である。加之緑樹の繁茂する以外には、一步郊外に出れば青田が廣



く遠く連り、晩春から初冬にかけて、穰る青田の青嵐は、點綴する竹藪と農家のとが特徴の田園致景を致して異彩を放ち、都市としては内地に於けると趣きを異にするものがある。而もこの翠緑滴る、樹々の繁茂は旺盛で、緑色は四時常に鮮かなのであるから、塵埃に苦しむ都人士には、想像もされ得ぬほどこれに恵まれて居ると云つて可い。然し近時交通機關の急速度の發達、スピード時代の出現に、殊に夏が甚しいが紅塵吹き捲くる風に、緑樹の葉を汚すこと夥しいが、驟雨一過した後は、紅塵悉く雨に洗滌されて緑色亦た一入濃厚に、涼風を懷にして市中を散歩すると、樹々の緑の美しさが、人の心を爽快ならしむるものが多い。而も三線道路には、所々に公園と云ふほどでもないが、緑蔭が作られて休息するに適する所があるから甚だ調法至極である。これ等の街観は、臺北市を一度を訪れた内外人から、美しい、明るい都市と云はれ、讚辭を受くる所以であらう。殊に緑樹を以て彩られ、美しい市街と云はれる臺北市の、この三線道路こそは、誠に美しいリングガートンで、内地では見られないものと思ふ、誰かが臺北は東洋の小巴里だと評したが、全く恁うした整頓した道路や、美しい緑樹に彩られた街観が、かく



評せしめたものと思はれる。この三線道路と云ふのは、舊城壁の趾なので、領臺當初即ち明治二十八年六月、臺北に總督府が置かれ、地方廳として臺北縣が出来て縣廳が設けられ、内地人の居住するに至つて、市街の衛生設備を整ふるのを急務とし、市區改正を行ひ、下水道の敷設延長等その諸般の施設を見たが、城内は城壁を以て艋舺や大稻埕は勿論南門外方面とも區劃されて居て交通上支障もあり、市區改正を施すにも、これを取毀つが必要が生じたので、城内の市區改正を着手すると同時、明治三十三年に城壁全部と東西南北の四門と、小南門の五樓門をも取毀つことになり、その工事に着手して城壁は全部これを取毀ち、その城壁として用ひられた石材は、官廳建物の塀や下水溝に利用したが、樓門は西門を先づ取毀ちに着手し、半以上工事が進んだ際、後藤(新平)民政長官の意見で、西門のみ取毀ち、その餘は舊代の遺物として保存することに決定した結果、現在もこれが保存されて居る。取毀された城壁の趾は、城内を一周包圍して居るので、自然に道が出来、延長約一里に及ぶが、これを補修して道路とし、芝生を植ゑ綠樹を栽植して、更にこの兩側に遊歩道を附けて三線道路とし、この環狀散歩道の各所には圓形



又は半圓形をした大小の遊園地を作り、道路幅員は二十五間乃至四十五間とした、この三經道路は臺北の誇りとするもので、現在では自動車の通路と定められ、交通上便利な道路ともなつて居る。何しろ城内を包圍するこの延長約一里の坦道、それに繁茂する綠樹が多く栽植されて居るので、月明の夜は勿論殊に夏の夜涼を趨ふによろしく、この坦道に自動車をドライブするのは快亦た興多く、蓋し夏の夜の一快事である。加之夏炎暑の日中には、此處の綠蔭に休息する行人も尠くなく、秋の月見と晒落る連中も、仲秋の夜などには三々伍々その姿を見せて居るし、散歩道路としても可い。而して遊園地の一つとしての西門跡の、俗に楕圓公園と云ふ場所は、新起町の一角にあつて暖簾を下げた屋臺の飲食物店や、餅菓子類その他を賣る夜見世などで賑ひ、程近い西門町の市場内の夜店と相對して、この附近の夜の繁華を見せて居る。

改隸前は臺灣到る所何れも同様に、交通機關は不完全を極めたもので、而も道路と云ふべき完全なものがなく、都會地から都會地へ、村落から村落へ、また都會地から村落への道路と云ふものは、單に名のみばかりで、凹凸の甚しい粗惡なもので、狹小なもの



ばかり、甚しいのになると、畦道と何等撰ぶことがないほどに貧弱な悪路であつた。それで稍々大きな道も、漸く牛車が通ずる位、それに雨の日や雨後には、泥土脛を没すると云ふほどで、夜間などは燈火をつけて歩いてても、凹凸の甚しいので危険極りなしと云ふ状態であつたから、到底今日の比でないことは勿論である。而も都會地に於ける街路は狭小で、僅に轎の往復が出来る位、荷車の通行が出来得るのは可い方である。臺北の如きも、改隸前はこの例に洩れず、街路は粗悪な凹凸の夥しい狭小なもので、不整頓を極めて居たが、それでも所謂大通りは多少幅員は廣かつたが、現在でも艫舳や大稻埕や大龍峒の一部には、多少舊態の儘に存して居る通り、狭い悪い汚い道路であつて、一見横町露地の觀を呈して居たのである。これは舊慣として改隸前の道路施設は、専ら地方人民の共同仕事で行ふか、或は地方富豪紳商の特志經營に依つて行はれたもので、唯だ一二の幹線のみが政府の補助を受けて行つたに過ぎない、従つてその計劃は粗笨を極め、工事は姑息の手段であつたのは怪しむに足らない、道路の悪いのは寧ろ當然なことであらう。それが領灣後は交通上の施設も急務の一つとされ、督府は銳意これが改善に



努め、明治三十年十月に道路橋梁假準則を定め、直轄工事の道路橋梁工事の大部分が地方廳の所管事務となり、更に同規則が同三十三年十月に道路橋梁設備準則と改正され、道路の等級幅員勾配曲部の半徑調査の標準等を定め、濕拔敷竝木敷共五間乃至七間とし、又た一方改修豫定道路の調査に着手し、地方管内人民に訓諭して、道敷材料を寄附せしめ、大にこれが進捗に努力し、同三十五年匪賊掃蕩したのを好機とし、南部に於て直に保甲民をして、必要な道路の開修を行はしめて好成績を得たので、中北部地方もこれに倣つて開鑿に従事し、爾來大道は都邑村落に普くなつたが、臺北を中心とする各方面に通ずる道路は、多く憊うした工合で完成したのである。臺北市内の道路は、市區改正に伴ふて改善されたもので、城壁を取股ちてその跡に三線道路を設けたるを始めとし、先づ城内の街衢を整理すべく、市區改正の工事に着手し、今日城内に於ける繁華の巷、目貫の場所たる、本町通り、榮町通りその他に大小幾條となき立派な坦道が敷設され、アスファルトの坦々たる美しい、廣い道幅を有する道路は、城内を縦横に貫通するに至つた。殊に明治四十四年八月に於ける、未曾有と云はるゝ颱風の襲來で、土确造の舊來の



本島人家屋は大半破壊された慘事を見、被害甚大であつたが、これを機會として當局は大英斷を以て、革命的都市計劃を實施し、艋舺大稻埕方面の本島人町に對し、家屋の建築に就ても勿論改善を行ひ、道路も立派な廣い坦道を敷設延長し、北門から北への大稻埕の大通りや、艋舺にも主なる道路は幅員を廣くして全く而自を一新したし、又た南門外から新店へ通ずる新店街道も、廣い幅の道路を見るやうになつた。而も一方今の市役所のある地點樺山町から基隆への道路は、縦貫道路と稱するもので、廣い延長十八哩餘の坦道は、見るからに立派なもので、自動車が盛に往復して居る。それで現在尙市區改正が實施されて居る一方、市勢の著しい進展は、都市計劃を新にせんとするの趨勢を見督府に於てもこれが準備中である。而して道路修築や開鑿は、その地方の保甲民の手に依れるものが多いが、臺北市に於ける道路の改修その他は、保甲民を煩はす一方臺北市に於ても施工して居る。而して最近には試験的に一部分の道路に對して、重油を原料としたるワーピット式の坦道だが、結果はまだ判明しない。かくの如く市制實施後十年間に於て、臺北市内の道路は、市區改正に依つて改善新設されたもので、砂利道路延長



五萬八千九十間、タークレー道路延長六千七百三間、その他郊外道路延長二萬八千八百八十七間、總延長九萬三千六百八十間、この面積四十三萬五百七十九坪に達し、道路の幅員は、タークレー坦道は八間以上でその他大小の別あり、廣きは四十五間位のもある。尙その他には私人の施設に係るものがあり、補助道路も尠くない。それにまだ市區改正の完了を見ないので艫舳大稻埕の一部は、舊時代の面影を偲ぶ狭い汚い道があつて、その多くは裏通りだが縦横に通じて居る、然しこれが亦た一面に臺灣らしい氣分を漂はせて異彩を放つて居ると云ひ得る。改隸前の道路はかくの如く不完全な惡路であつたが、橋梁と云ふものは、臺灣の河溪が奔湍激流に加へて、夏秋の季には洪水頻に至るから、小溪細流も架橋に頗る困難なために多くは竹筏か小舸で渡河したもので、紳商富豪が渡船費を負擔して奉仕的に無賃で渡船させる義渡と云ふのもあり、又た渡船賃を小額ながら徴したのもあつた、それで旅人は橋か徒歩で目的地に達し、貨物は大抵人肩で運搬する状態で、不便名狀すべくもとく、本島人は今に旅行を嫌ふ癖があつて、老人は程近い所でも便利な今日行くのを非常に苦痛とし、旅は憂ひものと思ひ込んで居る。橋梁



も亦た改隸後に、道路と同様改修されたが、架橋工事は難工事で材料を多大に要するか  
ら政府竝に地方廳は補助を與へ、或は直營で急を要するものから、漸次築設することと  
した。而して臺北市は西に淡水河が流れ、その上流は新店溪で、また一つは北に基隆河  
があるのみで、河川としてはこの二つだけである。従つて士林方面即ち北方から來る者  
は、基隆河を渡らねばならないし、新莊や海山の兩郡西方即ち西方から來る者は淡水河  
竝にその上流新店溪を渡らねばならない、それで領臺當初から暫くの間は、何れもこれ  
等の渡船の便を籍つて往復したものだ、明治三十四年劍潭山の山腹に、臺灣神社が造  
營された時に、明治橋と云ふ立派な鐵橋が出来た一方、新莊街へ大橋頭（今の大橋町）から  
通ずる交通機關として、劉銘傳が架設した鐵道用の木橋を利用したが、屢次の暴風雨に  
伴ふ洪水で遂に流失して以來、渡船で通つて居たが、その後二三度架橋を見たものの、  
暴風雨の爲め河水が増加して遂に流失して再び渡船となつて居たのを、漸く七年前に臺  
北橋と云ふ鐵橋が架せられたのである。それでこの兩橋が臺北市の主なるものとされ、  
橋として立派なものである。その他に混凝土橋や木橋の小さいのが六十七箇所あるが、



これは人の餘り知る所でなく、かの瑩橋の如きもその一つである。それであるから臺北市内には、橋らしい立派なのは臺北橋と明治橋の二つと云つて可い。明治橋は基隆河に架せられて延長五十一間餘の鐵橋で、十川督府技師の設計に係り、明治三十四年十月臺灣神社の造營が完成すると同時に、架橋工事も亦た竣工したもので、臺北から北二十九町、勅使街道の終點、劍潭の渡があつた地點、參拜の通路に當り架せられた立派な鐵橋で、その中央は車馬道で兩側は人道となつて居る。當時は臺北橋が出来ない時分なので、臺北に於ける唯一の鐵橋であつた。然し架設以來三十有餘年を経過したので、漸く架替を要することとなり、昭和四年度から三箇年繼續事業として、經費七十一萬六千五百三十餘圓（國庫負擔五十五萬四千五百三十餘圓市費補足十六萬三千圓）を以て、目下架替工事の進捗中である。臺北橋は俗に大橋とも云ひ、延長二百三十九間、明治橋に比し四倍強の長さを有する、實に立派な鐵橋で、臺北市大橋町から新莊郡三重埔へ通じ淡水河に架せられ、縦貫道路と連絡して居る。この臺北橋は領臺前劉銘傳が架せられた鐵道用木橋であつたが、鐵道線路が領臺後變更されて不用となつたので、普通の橋として領臺後暫く利用交



通して居たが、暴風雨に伴ふ淡水河の増水のためで流失してしまひ、その後は同所に渡船所を設けて交通の便に資して居た。その後架橋工事が行はれて完成したが間もなく大正七年の夏の洪水で流失し、再び架橋工事に着手して漸く大正十四年六月に間通式を行ひ、立派な長大を極めた現代的偉觀を呈す大鐵橋が架せられ、新莊方面への交通は、これに依つて非常に便利となつた、この經費百四十四萬圓、工程三箇年を費したと云はれて居る。その中央は車道で兩側が歩道、橋上の景趣は、淡水河の河畔の地を眺め、大屯觀音の諸山に對し、河を上下する帆影の面白さ、夜は河面に映ずる燈の美しさに、雅趣百パーセントである、殊に夏の夜の納涼には好適して居るから夏の夜は更くるまで、橋上に夜涼を趨ふ人の影が消えないと云ふことである、夜涼を趨ひ、或は月光を浴びてこの橋上を自動車で往復するも興深いことで、臺北橋は臺北に於ける近代的名物の一つ、見物に値する場所である。而して淡水河には新莊方面への交通機關として、臺北橋の外に、大稻埕河岸に建昌渡船場があつて、建昌街（今の港町）から新莊の三重埔への渡船があり、艋舺の河岸では、昔の船着場で賑つた大溪口街（今の有明町）に、新莊街に渡る大溪口



渡船場と、艋舺遊廓の西北、下崁庄(今の綠町)製糖工場附近から、對岸海山郡の江子翠へ渡る下崁渡船場、それから淡水河の上流新店には、古亭庄の川端(今の川端町)から、對岸海山郡の溪州へ渡る川端渡船場、それから基隆河の河岸には、圓山公園の裏、大龍峒に近い所に士林への創潭渡船場があり、また大直へ渡るのには、下埤頭から大直への渡船場があり、以上の六渡船場は何れも市に於てこれを管理して居るが、この他加蚋仔と云つた今の東園西園の兩町から、海山郡板橋及び同郡中和庄(枋寮)に渡る新店溪には兩所共輕鐵用の木橋が架せられてある。但しこれ等の渡船は、乗合自動車が発展して今日尙ほ大に利用されてゐるが架橋するに至らない、而も洪水の爲めには、頻々交通が杜絶される。まことに暴風雨の來襲、これに伴ふ洪水沙汰も困つたもので、臺北市民は勿論、その他各地の人々も、屢次襲來する暴風雨に被害が夥しく、多い時は年三四回も受ける始末、臺灣の一名物だが、暴風雨だけは、人々の心を不安に陥らしめることが甚大である。これは低氣壓が本島の近海に發生し進行するからで、かの低氣壓發生地として有名な石垣島は、宜蘭東方の近き洋上に在り、又た呂宋島は恒春の南方パンジー海峡を隔て、彼



方に在るから無理もない。加之改隸前は勿論改隸後も久しい間は、奔湍激流の河溪に對して河川修築整理も容易に行はれず、多くの河溪には護岸の施工を見ることがなかつたが、年々の風水害に督府はこの方面に修築整理を行ふことゝし、今では可なり各方面に進歩しつゝあるから、比較的河水氾濫に依る被害も漸減する傾向を示して來た。淡水河と基隆河とが西と北とに流れて居る臺北市も、名物の暴風雨に見舞はれると。忽ち河水が増水して、濁流は滔々として非常な速さを示して流れ、見渡す限り市中は濁つた海原を現はす状態で、従つて護岸工事が不充分であつた、領臺後に於ても淡水河が氾濫すれば、古亭庄の川端即ち今の川端町から馬場町方面、竝に東園西園兩町の加蚋仔、それから艋舺大稻埕の方面は常に浸水家屋夥さに及び、甚しい時には城内にまで洪水騒ぎを見、今の表町から本に町かけて一帯海と化して、家々への交通は船で行つたと云ふ騒動があつた位、城内と云はず艋舺大稻埕その他、臺北市に編入された近郊村落は屢次浸水の厄に遭つたことは、今尙人の記憶に存して居るところである。無論基隆河もこの例に洩れず、氾濫して圓山から双蓮坡即ち今の宮前町附近までは常に洪水騒ぎがあり、毎年被害



を見ると云ふ始末であつた。依つて古亭庄の川端に護岸堤を設けたがこれとて屢々河水の堤防を越ゆるの始末で、艫舳大稻埕の河岸にも、護岸の目的で、石垣を高く築き上げたが、その功がなかつた。何しろ猛烈を極むる暴風雨の襲來、夥しい河水の増量は、なか／＼これを防遏し難く、而もこの氾濫した水はこれ等の河に近い方面から、更に城内各所に溢れ、且つ増水に依つて流下すべき下水の面が、淡水河の水面よりは非常に低くなるため、城内に逆流して一層出水騒きを甚大にするのであつた。それで臺北市街を出水の厄から脱せしめ、居住民の安全を期する目的で、古亭庄川端(今の川端町)の新店溪の下流の地點に、延長二百四十八間餘の、河岸を切均して堅固の玉石空積をその上に施し、尙これに鐵線蛇籠を上置した護岸土手を築造し、更に防禦完成のために三十間の鐵線蛇籠の堤防で河中十一箇の水制を護岸及び堤防に適當に配置して岸の缺損を防ぐの工事を施し、翌二年三月竣工して同方面の洪水を防ぐことが出来たが、更に一方艫舳から大稻埕に至る淡水河の河岸に對しても、護岸工事が施された。何せこの方面は艫舳大稻埕の兩市街を控へ、從來屢次淡水河の増水は兩街に濁水氾濫を見るのみでなく、城内近く今の



新起町方面にも及ぶので、護岸の完成氾濫の防遏の要極めて大なるものがあり、大正二年度から同五年度の繼續事業として工費六十九萬三千二百餘圓を以つて、艀舢栗倉口街（今の有明町）の河岸から大稻埕港邊街（今の港町）の河岸に至る、延長實に千四百九十八間餘に亙る、高い大きなコンクリート造の護岸壁を造り、その間に數箇所の水門を設け、平素は開門して人々の通行に自由ならしめ、増水と見れば直に鐵扉を下して堅く鎖して浸水を防ぐ装置をしたもので、これを臺北橋や淡水河上から観ると、艀舢の遊廓の所から大稻埕の河岸一帯に亙り、一大高壁が偉觀を呈して居るが、實に見事なもので誰もこれには驚嘆する。而して更に大正七年度には川端町から艀舢に至る千六百二十間の堤防を築造した、この護岸壁の完成以來、屢次淡水河の増水を見、而も時に濁流が僅に壁頂を剩すこと二三尺位になることはあるが、浸水を防ぎ得て昔日の如き水害の患なきに至つて、市民は暴風雨來襲にも漸く安堵することが出來得るやうになつた。但し基隆河の方面は、その方面に繁華の巷がまだ出現しないし、縦令増水氾濫しても、淡水河の如き被害の影響が比較的甚大でないからか、護岸の設備も着手されず、後日を期されて居るらし



い。

領臺前の臺北三市街は、街衢は通路狹細に加へて下水溝の設備もなく、凹凸を極めた汚惡なものであるのみか不整にして、街観は今日よく見る支那人街のそれと同一であつた。即ち換言すれば、領臺前の臺北三市街の如きも他と同様、街衢の方面不整にして道路の幅員極めて狹小に、大氣の流通や光線の射入共に不充分で、常に一種の臭氣が紛々として放散され、足を一度此處に入れると忽ち何人も不快不健康なことが直感するの狀態であつた。それであつたから領臺後保健上の見地からも、これが改善を急務とし、先づ市區改正を斷行することに決して、明治三十一年十一月に臺北基隆の市區計畫委員會を設け、最初に臺北から實施することとなり、同三十三年に臺北城内を續いて同三十四年に城外南方を、更に三十八年十月に三市街全部二百萬坪の改正を行ふことになつた。この計畫は人口約十五萬を豫想して、その中で二萬三千坪を公園に割き、舊城壁跡をグリーンガーデン即ち三線道路とし、道路は幅員三、四、五、六、八、及び十、十二間の七階級として、その兩側には幅員二間の歩道を設け、竝木を植ゑしめ或は本島習慣の亭仔脚



を設けしむることゝし、これに因る道路の延長は實に二十二里に及ぶことになつた。而してこの費用は約六百六十七萬圓を豫算として實施に着手し、城内では今の本町榮町通りや、その他の道路を改正施工し、領臺前に在つた官廟は、祭祀が絶えて廢廟となつたので悉く取毀ち、或は舊官衙も使用に耐ゆるものは、新廳舎の竣工までは充當し、私人廟やその他の建物も、移轉取毀をなさしむる等工事は着々進歩した。かの現存して居る市の公共施設物の一つである新公園も、この市區改正に依つて出來たものだが、今日城内を縦横に通達する大小の坦道も亦た市區改正に依つて出現し、臺北の誇るべきもの、一つとして、渡來する人々が、口を極めて道路の立派なのを賞賛して居るのである。而して市區改正は城内のみでなく、艋舺にも大稻埕にも及んだもので、艋舺方面は舊來の所謂艋舺街と稱する本島人街の一部と、大稻埕も北門から大橋町に至る太平町筋の所謂北門通りと稱する大道路と、その他各方面に部分的に可なり廣く實施され立派な道路が設けられたが、この事業は容易の業でなく、進歩に努めながらもまだ豫定の計畫の約五分の三に達したに過ぎない。而もこの間街勢の進展著しきものがあり、市區改正の計畫も



亦たこれに伴ふて、屢次變更を餘儀なくされたことは勿論、かの二百萬坪人口十五萬を目標とした計畫も、遂に進展する街勢と、年々約三分強の増加率を示す人口の増加の激甚な趨勢に支配され、今日では人口二十三萬餘人に達し郊外も亦た著しく開發され、計畫區域外にも家屋を建設する者漸く多きを加へ、昭和町御園村大安町と云つた、所謂新開地が夥しく出現するに及び、いよ／＼既定の計畫の完成を急ぎ、一面には更に大臺北市を出現すべく、大都市の計畫を實施するのが刻下の急務とされ、これが準備を見つゝあるが、現に大正十四年十一月以來施工中の京町通りの市區改正計畫の如きも、既に東側は完成し西側も略も完成に近づき殘餘の工事は目下切に進行中にして、昭和六年秋頃には完成の豫定である。而して市區改正と共に下水工事も施されたが、何しろ領臺前には臺北三市街の如きでも、全く恚うした保健上の設備は毫も見られず、市街は不潔を極め、臭氣紛々汚惡の限りを盡すの状態であつたのみか、臺灣人の家屋は、多くその附近の土を以て土碓（土壞）を製し建築材料としたため、住宅内には諸所に凹陷地を見、卑濕至らざるなく排水甚だ困難な上に、市街には排水工事など施されてなく、多く自然の放流に



任せ、各戸からする下水の如きも單に街路に排泄せしむるのみで疏通を計らず、汚穢物は常に地下に滲没し不潔さ言語に絶し、名狀すべからざるものがあつたので、領臺後は當局に於ても保健上公私下水の新設又は改良を計畫し、下水溝を設くることとなり、衛生工事顧問技師バルトン氏の意見に基き開渠式混合法を採用し、臺北市街に施工することに定めて、市區改正と同時に施工したが、本工事は基礎を玉石又は煉瓦層に目漬し砂利を混じて固め、側壁は切石を用ひモルタルを登積し、その頂上に笠石を置き、溝の内面はセメント及びモルタルを塗り、底部を半圓形兩側を直立としたが、或一部分は都合で多少勾配を附けたものである。而してこの下水路通常の最大降雨量を排泄し得べき大きさを保たしめ、位置は道路と歩道の間と定め、道路を横斷する箇所には硬質石材で蓋を作り、開溝は幅三尺以内としこれに接する幹線は暗渠とした。暗渠は城内に三線大稻埕艋舺南部東部の各方面には各一線を設け、幹線下水は全圓で直徑八尺乃至三尺五寸、鐵筋コンクリートを以てし、底部に半圓の溝を設け常時の汚水を流下するに便にせしむるの設計であつた。而して臺北に於ける公共下水は總延長四十五里餘に亙り、勾配



は自然に従ひ東南部から北西部に集めて淡水河に放下せしめるもので、この他には各住民の住宅よりは公共下水に排出すべき私設の下水が設けられた。而もこの公共下水の築造材料は石材が多く、それも舊臺北城の城壁用となつた石材を利用したので大に工費を減じたが、清朝時代に防敵の用に供せられた石材が、領臺後一轉して下水溝に變じ保健上利する所が多かつたことは、世の變轉も亦た感興すべきものではないか。明治二十九年臺北城の城壁外側に假溝渠を設け、城内の雨水その他をこれに導き、北門外在來の水路を経て淡水河に放流したのを下水工事施設の濫觴として、爾來工を起して現在に竣工した延長は、表下水二十七里餘裏下水四十四里餘幹線暗渠三千六百五十七間餘となり、尙更に昭和四年度から三箇年繼續事業として、南門下水幹線工事即ち龍口町大正町間延長二千二百四間を施工しつゝあつて、これに依り臺北市の衛生状態が大に改善されると云はれて居る。而してこの工費は總額七十五萬九千圓で、四十五萬五千四百圓が國庫から、十一萬三千八百五十圓が州から各補助し十八萬九千七百五十圓が市の負擔とし三箇年度に分つて支出されることになつて居る。恁うして市區改正や下水工事が施される一



方、家屋建築規則の發布に依り、土确造の家屋多き本島人の家屋はこの規則に據り建築せざれば許可せぬこととし、殊に明治四十四年の暴風雨に倒壊せる多數の家屋が新築するを機會にこれが徹底を期して、煉瓦積の家屋に改め大に面目を一新したのみでなく、城内その他艫舳大稻埕の目貫の街衢は、悉く低利資金等の便法を利用して、現代的建築法に依り、歐風を加味した二層三層の高樓大厦か軒を並べて建てられ、一層街觀の美を呈し、今日觀るが如き現代都市として恥しからぬ街觀を致すに至つたのである。

憊うした文明の大都市となつた臺北市の街觀上、非常に好評を博しつゝあるのは、城内を縦横に貫通する大きな坦道と、大稻埕艫舳方面に於ける目貫の通りが立派な道路と、その他かの三線道路は勿論、基隆への縦貫道路、さては新店街道と稱する南門外よりの道路等々、何れも自動車に便乗しドライブすると、實に爽快を感ぜしむること夥しいものがある。尙これ等に次く街路は城内方面は悉く平坦で、相當の幅員を有し立派なものだが、今尙艫舳や大稻埕の方面には、幾多の狭い道路が縦横に見られ、昔の面影を存して居るし、これ等は市區改正の進捗と共に漸次面目一新し、やがては立派な道路とな



るのである。憊うした道路に於て誇りを有する臺北市は、内地の都市に比較して遜色が無いと云はれ、來臺した人々の中では、『臺北の道の廣くつて立派なこと、それに雨が降つても泥濘に苦しめられないと云ふのだからすばらしいもので、東京の道とは比較にならないほど立派なものには感心した』と云ふのを聞くが、半分はお世辭と聞いても、臺北市内の道路は實に立派な結構なものと云ひ得るのである。而して憊うした道路の中で、またしても誇り得べき道路は、かの勅使街道とか或は御成道、又は御成街道と稱する圓山への街道である。この勅使街道と云ふ道路は、幅員八間以上で二十九町ほどの坦道で、臺北市樺山町即ち現在の市投所のある地點から一線に北へと進み、基隆河に架せられて居る圓山の明治橋畔に至る、坦々たる一筋路で、その兩側には樺山町から御成町に至る三四町の間、商舖軒竝で商人街が出来て居るが、それから以北には年を経た相思樹の竝木が植ゑられ、四時緑の色濃かに繁つた老樹は、街道の風致を増すこと夥しく、而も圓山近くになれば、左に田圃を越して大稻埕市街の側面が見られ、また北の方には大屯七星觀音の諸山が、晴れた空にその雄姿を現はして居るし、右には臺北市内の郊外村



落が展望する田園の間に隠見して致景一段と面白く、緑の梢を渡る風も吹くからに心地が好く、實に立派な大きな竝木街道である。この街道は明治橋を過ぎ、劍潭山の山麓に沿ふて士林に至り、岐れて一方は草山に行く道となり、他方淡水北投への道となつて居て、何れも立派な廣い道路が續いて居る。而してこの街道こそは呼ばるゝ名の如く、去る明治三十四年十月に、劍潭の山腹に造營された臺灣神社が、その造營を終り神社に奉祀する神靈を内地より奉迎し鎮座祭が盛大に執行されたが、その造營當時劍潭山腹への道路は、大稻埕よりする畦間の小徑であつたのみで、參拜道路として神社造營と同時にこの道路が出来、特に鎮座祭に内地より御神靈を奉侍して來た勅使が、この街道から進向したのでこの名があるのである。爾來今日までいや將來も依然として臺灣神社への參拜路として、參拜する人の多くはこの街道を行くことであらう。されば毎年神社祭典の日は勿論、新年には初詣として、參拜する夥しい人で、この街道は十二月の三十一日、大晦日の午後十一時前後から往來が一層甚しく、或は徒歩に、或は人力車に、自轉車に自動車に、思ひくゝ神社を指して行く人、歸り來る人々で非常に賑ひ雜沓を呈して、人車



織るが如き状態である。殊に夜が更ければ一段盛況を見夜明まで絶ゆることがないのみか、三ヶ日間は朝から夕暮まで、神社参拜の人々で往來が絶えない。加之近時自動車の運轉することが激甚の結果、バスは勿論タクシーは忙しげに往復し、警笛の聲は次から次と聞え、スピード時代の混雑と騒々しさを示して居る。これは畢竟するに、詣づべき神社の少い臺北市民殊に内地人には、惠方詣も思ふに任せぬものから、初詣として臺灣神社に参拜するの慣例を何時とはなしに誰の思ひつきかは知らぬが作られ、それが年々盛になつたので、臺北でないと見られない、實に喜ばしい結構なことである。その他この街道筋には圓山公園と動物園があり、日曜祭日その他の休日には散歩人も尠くなく、これ等人々が徒歩や自動車でこの街道を往復するが、更に圓山運動場が開設されて以來は、學校兒童の運動會や陸上競技さては野球の試合等の催ものがあれば、必らずその都度この街道の人出は夥しく、自動車に徒歩に自轉車に、往來は實に織るが如く非常に混雑賑ひを呈し、交通整理の巡查はこれが應接監督に目を廻るほど忙殺されると云ふ状態である。また一方草山や北投淡水への通路なので、淡水行の乗合自動車やゴルフリング



へのタクシーも盛に通ふし、北投草山への温泉場行の自動車も往復頻繁で、妓を乗せて行く人、家族や友人と行くもの、種々様々の車上の人の顔が見られ、殊に夜のこの街道は、妓と同乗して北投へ急ぐタクシーの數も多く、街道を駛る夜のタクシーは、エロ氣分の濃厚なのが尠くないとか、恚うした緑濃に美しい相思樹の竝木に装はれた勅使街道は、臺北市内の坦道として誇り得るのみでなく、特種の使命を果しつつ、市民に利用されて居るのである。勅使街道！御成道！何と適しいその名ではあるまいか、その昔鎮座祭執行の日、この街道を威儀を正して行列を進めて行つた勅使一行の様子を想像して、當時の盛事を偲び、島に幸あることを喜ぶのである。

### 街觀美の建物と内臺人の住宅

：内地人街と本島人街と街觀…改善された本島人家屋と文化住宅…

：便利な亭仔脚と南國氣分…城内の建物と郊外の農家…

坦々たる道路と、洋風を加味した建物とで、現代的文明都市の街觀美を誇る臺北の市



街は、云ふまでもなく臺灣の他の各都邑と同様に、改隸前までは支那に於て見る街観と同一で、街衢と云はず建物と云はず悉く支那式であつたが、これは清朝治下に在つた土地のこと故、支那式であることに何等不思議がなく、寧ろ慙うした街観こそは當然過ぐるほど當然なことであつて、今日の如き街観を見るに至つたのは云ふまでもなく、領臺後のことであるが、漸次これが改善を施された結果である。この面目一新した事實は一面に臺灣の進歩發達を物語ると共に、文化の向上を示したものと云ふことが出来る。記すまでもなく領臺前の臺北は、他の市街と同然に、支那式の建築法に據つて建てられた建物で、官衙や神寺廟は木造で石を積み壁を作り瓦を葺いたもので、官人その他以上の人の住宅も、今日舊家として存在する家と同様に支那式のものである。商家やその他一般の住宅は、煉瓦を用ゆる向もあるが、下級の人や農家の多くは土碓の壁に木や竹の柱と云つたもので建てられて、今日の臺北市内に見る家屋とは趣きを異にして居る。從來の臺灣人の家屋は官衙でも神佛廟でも然うだが、支那式で内部は通風採光不充分で常に陰濕し、盜難防禦を主として建築されて居るから極めて非衛生的であるばかりか、人



口稠密な地に於ても災害豫防上何等の顧慮すべき設備など毛頭なく、且つ家屋の大小建築様式が統一を缺ぎ體裁の上からも甚だ醜惡であつた。それで街觀の美を呈し都市としての面目を維持する一方、保健衛生の立場から、これ等を改善するの要を認め、領臺後市區改正を實施すると共に、この家屋の建築に就いても改善を行ふこととなり、明治三十三年八月臺灣家屋建築規則を發布し、家屋の新增改築の場合は地方長官の許可を受け使用に際して更に検査を要し、地方長官は公共に必要と認め又は危険の虞ありと認めたるもの、或は健康に害ありとするもの、本規則に基き發する命令に違背し勝手に變更したるもの等は取毀を命じ、又た地方官廳が歩道を設くべしと指定した道に傍ひ建築する家屋には屋根を有する歩道を設くべしと命じ、命令不履行の時は地方税で行ひ後に義務者よりその費用を徵收することとした。而して同年翌月本規則の施行細則を發布し更に同四十年七月改正したが、これには家屋の面積は敷他面積の四分の三を超えぬこと、道路に傍りたる家屋は地方長官の定めた建築線を超ゆべからざること、裏地に建築する家屋は周圍に幅十二尺以上の空地と公道に向け幅六尺の道路を設くこと、土确を建築材



料とせざることを、家屋の高さは地方長官が特定しない時は、地盤より軒桁上端まで十二尺以上、家屋の採光面積は室内面積の十分の一以上とし、間接に採光する時は七分の一とし、床は地盤より二尺以上、天井は床上より八尺以上となす等々で、その他厨房浴室厠鼠族防禦構造等々が規定され、尙地方長官は總督の認可を得てこの細則の一部を適用せざることを得るとなし、この規則の施行區域は總督の認可を得て地方長官が定むることとなり、臺北市内にもこの規則が施行された。爾來市區改正の進捗に伴ひ、或は移轉改築するもの、或は腐朽新築するもの、或は増築するもの等があつて、漸次新規則に依り建築さるゝ家屋が増加したが、本島人中には尙依然舊態を持する家屋頗る多く、なか／＼改築も新築も増築も行はないので、家屋の改造は容易に進捗しなかつたが、明治四十四年八月に臺北地方で襲つた大暴風雨は、夥しい被害を與へて去り、土确造の多きを占めた艋舺大稻埕方面は勿論城内その他にも、この風水害に依つて倒壊した家屋が大多数に及んだので、これを好機として當局は一大英斷を以て革命的の都市計劃樹立の下に、總て新規則に據らざる家屋の建築は絶対に許さなかつたため、大多數の倒壊家屋は



何れも悉く新規則に據つて新築又は改築されて面目を一新し、僅に倒壊の厄を免れた家屋にして改築や増築を施さぬ少數の家屋のみが、危げに現存して舊態を見せて居る。從來臺灣に於ける風水害の甚大視されたのは、無論暴風雨そのものが強烈には相違ないが、夥しい倒壊家屋の數を見るのは、家屋が主として土を固め乾して造つた土確を積み屋根を葺いた粗雑極まるもので、浸水すれば忽ち倒壊を見るからであつた。然し新規則で建築した家屋は、絶対に土確の使用を嚴禁してあるから、近時臺北市内では恚うした災害は激減したのである。而して最近市の發展に伴ひ、所謂隣接近郊の地域にも新しい街が出来、新築家屋が激増するやうになり、現行規則施行區域は人口稠密の市區計畫線内に限られ、施行區域内の建築は許可を與へつゝあるので、恚うした新開地方面の家屋にはこの規則が施行されないが、然しこの方面は人口の増加地價騰貴の結果、組合その他の手で内地人が家屋を建築して居るから市に於ては將來に於て善處するものと見られ、別に問題がなく日本式の家屋が建てられてある。さるにても臺北市の伸展は一日／＼と増大して行きつゝあることを立證されてあるではないか。而して人口約六萬四千人の内地



人と約十四萬三千餘人の本島人と、その他朝鮮人支那人外國人が居住して居る臺北市内は、自ら内地人街と本島人街との別が見られ、内地人街は城内と南門外方面一帯の地と、東門外から南門外方面にかけて新開地とで、艋舺方面の中八甲町新起町方面に可なり多く内地人が居り、西門町から壽町方面にも内地人街であるが、その他大稻埕や新富町にも多くはないが内地人が居る。又た住宅地たる大正町や御成町は亦た内地人街で、艋舺や大稻埕やその他の方面は本島人街である。朝鮮人や支那人は艋舺に多く多少の支那人は大稻埕にも居るが、外國人は大部分大稻埕に居住して居る。城内は内地人街であるが官衙學校や銀行會社もあり、これ等は何れも領臺當初は舊時代の建物を一時流用して居たのが、何れも洋式の煉瓦積の大廈が新に出來次第にこれに移轉して、總督府廳を初めとして軍司令部その他立派なものが建てられ壯觀を呈して居る。舊時代官吏の住宅を内部改造して官舎としたのが、日本式のものや洋式のもの新築され、官舎街が各所に出來た一方、銀行會社何れも煉瓦積の立派な二階建のものが建築され、その宿舍は城内其他の各所に日本式の家屋が建造貸與された、而して城内の商店は何れも領臺後久しき



に互り舊時代の家屋に内部の改造を加へて店舗を開いたもので、當時の街観は現在  
町の一部艫舦への通路に當る方面に見るが如きものであつたが、市區改正が實施さ  
に伴ひ、改築の機運に逢ひ漸く低利建築資金を得て、大正二年まづ本町通りの改築を行  
ひ續いて同三年榮町通り續いて表町通り等の改築を見たが、何れも煉瓦積の歐風を加味  
した一定式の新建築は、二階或は三階建の大廈高樓で、擴げられたる坦道に沿ひ軒を竝  
べ堂々たる街觀美を呈して、渡來者を一驚せしめるほど繁榮振りを示して居る。尙その  
他方面でも京町の改築工事は近く完成されるし、殘餘の區域は後日に期せられて居る。  
而してこの以外の地域も、從來の支那式家屋を内地式のものに改築した、内地人の住宅  
も尠くなく、商家もその間に多少介在して居る。而して南門外方面は兒玉町通りなる新  
店街道の兩側は内地人を主とした商人街で、小さな内地の町の如く内地式の店舗が竝ん  
で居るが、その他は總て内地人の住宅で、他の新開地は何れも日本式の家屋のみが建築  
されて居る。而して新起町から八甲町へかけての方面の内地人部落も、多くは日本式に  
改築されたが、尙本島人家屋を内部だけ改造したのもある。艫舦は艫舦停車場から大稻



埕への貫通大道路に面した本島人家屋は、何れも煉瓦積の二層三層の新築で、見るからに現代都市に適しい街観を呈して居るが、所謂舊來の艫舳街にはまだ可なり多く在來風の建物で土确こそ使用しないが支那式の色彩が濃厚である。大稻埕は北門から北への大通りの大きな廣い坦道の兩側は、市區改正に伴つて煉瓦積の洋式建築になり二層又は三層の大夏高樓が軒を竝べて商舖を開き、その街観は驚くばかりの立派さであるが、その他商人街たる舊名中街南街と云つた商業旺盛な街區は、道路は狭いが建物は何れも二層或は三層の煉瓦積のもので、これも軒を竝べて統一され整然として居る。尙この以外の各街衢もそれ〴〵煉瓦積の建物に改築又た新築されて、舊態を存するのは僅少の淋しい街の一部分に過ぎない位、尙漸次改築して面目を一新しつゝある。それ故臺北に於ては内地の繁華な町を思はするのは城内で、南國氣分異國情趣の豊かな臺灣色彩を見るには、古き街の艫舳に行かねば見られないのであつて、現時の街観に就ても臺北市が進展に伴つて非常に變遷したかは窺知することが出來、愈々その發展の大なるに誰しも驚くのである。



市區改正が遂行され、家屋建築規則の實施を見、臺北市街の街觀は、今や全く面目を一新して、美しい明るい文明的都市に適しいものが現はれるに至つた。而してこの改善は在來の本島人家屋が改造されたもので、殊に土确造は僅少を剩すのみで、悉く煉瓦積に改められてしまつた。形こそは支那式の、臺灣固有の建築法に依つたものだが、多數の恂うした建築法に據る本島人家屋の中で、洋風の煉瓦積造が可なり多く、恂うした家屋は、二層或は三層の建物で、在來のものとは外觀は全然異り、新しいものと云つて可い、但しその内部は彼等の生活慣習に適當するやう裝飾と設備が施されて居るのは勿論である。これは艫舳や大稻埕と云つた本島人街に見られるもので、城内には現在に於て恂うした家屋は全然見られず、悉く洋風の建物か或は内地式の建築法に依る家屋で、これは南門外や東門外その他新開の地の方面も同様であつて、何れも内地人が多數を占めた内地人街であるからである。而して本島人街と云はるゝ方面に居住する内地人は、内地式の家屋が建てられてそれに居住するのも尠くなく、例へば新起町八甲町の方面から壽町築地町末廣町の各方面、或は下奎府町等には、内地人街とも見得べき街衢が見ら



れ、此處には内地式の家屋が建てられて居る、然し新富町方面の如き内地人も多く住むと云つても、憊うした方面は小さな内地式家屋もあるが、本島人家屋の内部で居住に適する如く改造したのも尠くない、従つてこの方面は内臺人が雜居して居ると云ふよりは、寧ろ内地人が介在して居ると云つた方が可いかも知れない。本島人の家屋は改善されたことは云ふものゝ、舊慣墨守の弊甚しい彼等は、保健上その他の必要を認めつゝも、生活上大切な衣食住の改善は容易に行はないから、屋内は依然舊來のまゝで、天井はなく土間に寢臺が置かれ、採光通風も窓を大きく開けてないから不充分たるを免れない。けれどもこの陰濕な室内は、一面に於ては涼しさを感じさせることが夥しく、常夏の國には適しい設備なので、夏は本島人家屋の方が内地人の家屋より餘程涼しい。殊に本島人も近來漸く亂れたが慣習上、分家と云つた長男や相續人以外の者が他に別戸を構へる風習が認められず、皆悉く同一の屋根下に居住して居るから、なか／＼大家族が同一門内に居るわけである。今簡單に本島人の家屋模様を記述すると、都會地と田舎とそれに生活程度の如何に因つて多少の相違はあるが、何れも支那式建築法に則つたもので、何處



の家でも間口が狭く奥行が深い、これは防敵關係も含まれて居るからであらう。恁うした長方形をした構造で、内地人の家屋に見るが如き離座敷や臺所と云つた袖附のある複雑な建築でなく至極簡單なもので、大きな家屋は周圍は塀壁を以て取圍み、中央に方形の中庭が設けられてある。家の入口には門柱や左右の壁又は鴨居に、例の門聯と云ふ吉慶文字を書した赤紙が掲げてある。これを門聯或は春聯と云ひ、蓋しこれは彼等の風習で正月に掲げられるもの、凶事のあつた家には赤を用ひず、黄とか青とか白とかを用ゆる。この門聯は優美な感を起させ、臺灣情調のあるもので、軒下を歩いてこれ門聯の字句を見るもの甚だ興深いもので、流石に文字を貴ぶ一美風が偲ばれる。屋内に入ると廣い土間があり、その正面に神を祀り祖先の牌さへ置いてある、これを正廳と云つて左右に紫壇や大理石で作つたものや、木や竹で製した椅子があり、中央に卓があつて椅子が配されてある此處が應接室で、その左右後に相似形の小さな幾つかの室があり、何れの入口にも緞綯が垂下して居るこの室が房間である。而して室と室との間の仕切りが約三尺程残され通路となつて居る。本島人家屋には障子や襖がなく、室を仕切るには布が垂れ



て居る。而して各室内は總て土間であるから夏は非常に涼しく、疊も床もなく寢臺に寢る。奥の後庭に出ると普通は相當廣い庭があり、奇石を配したり植木棚を拵へたり、或は周圍に大きな瓶を列べて、目高や金魚を飼ふ向もある。而して一般に窓が少なく小さいから採光は不充分で屋内は薄暗い、これは土匪の襲來を防禦し、日光直射を少くするためだとか云ふが、土間のあること、薄暗いことは、誰でも臺灣人の家に入ると直感するが殊に内地人は逸早く痛感する。又た如何な大家にあつても天井がなく、梁又は縦横の突へ棒の丸太がその儘用ひられてあるのが直に目につく、従つて天井方面の構造は至極簡單だが、上流人の家には、神佛廟に似てこれに色彩を施し金色燦爛たるものを見ることがあつて、いよく支那式臺灣色彩を濃厚に示して居る。次に家根は可なり上等の家でも、俗に臺灣瓦と云ふ在來の瓦を一枚や二枚敷くが、二枚敷く場合は一枚は扁平でその上に瓦煎餅の如き厚み二分大さ五寸平方ばかりのものを深く重ね合せて置くのみで、中以下の家では、扁平な瓦を用ひずに唯だ椽木で軽く留めて置くだけである。ところで屋根の方は、瓦の列の間々を漆喰で塗り留めるのみで、寔に無雜作に出來て居る



が、漆喰は暴風にも瓦が飛ばぬやう強く留めてあるさうな。建築材料はもう土確は絶対に許されず煉瓦を用ふるやうに改善嚴重に勵行されて居るけれども、臺北の田舎では然う云ふわけには行届いて居ない。而して臺灣人の家には何處に行つても便所がない、それは全く不思議なことだが、慣習上便器は寢臺の下や室の隅に置き、毎日糞尿汲取者に渡すことになつて居るからであるが、自家に近い屋外で用便を達す連中も尠くない。けれども昨今は衛生設備の改善施設が嚴達され、共同便所や自家用便所が設けられるやうになり、殊に最近では新築は勿論改築の場合も、内務省式便所を設くることになり、漸次在來のものもこれに改められつゝあるが、家に便所がないのは珍しいのみか呆れ返へらざるを得ない、風習とは妙なものである。更に珍しいのは臺灣人の風習として一家内の中に大多數の家族が居住し、多きは五六十人を算へる位だ、これは近親が一門内に住むためで、これは家族制度が然らしむるに原因し、且つ支那と同様に家族の多いのを誇る風があり、同時に妻妾の多い關係上子女が自然に多く分家することが殆んどなく、一家を數房に分つて住居するからだ。尤も近來は經濟上や時代の趨勢で分家する者もある



が、大勢は依然として大家族が一門内同一家屋根の下に住居して居る状態である。而して恁う云ふ工合で容易に改善が見られない臺灣人の家屋も、臺北市の如き都會地では、種々の方面に改善が行はれ、領臺前のそれに比しては奇麗になり衛生的となつたが、一面内地人の家屋も、時代の趨勢に伴ひ、内地に於ける新しい種々な建築様式が此處にも採用を見、モダンな家屋の新築を見ることが多くなつた。かの文化住宅と云つたものや和洋折衷式のものやが盛に各所に建てられて、その新しさを示して居る。これ等の新しい建築様式の家屋は、多く文化村とか云つた新開地方に見られ、一つの街観上色彩を放つて居る。

臺灣に於ける街観上將た又た家屋建築上に異つたものの中で、内地人の眼に殊の外珍しく感じ觀られるのは、かの亭仔脚であらうと思ふ。亭仔脚と云ふのは、建築された家屋の一部分であるが、それが歩道を指して云はれるやうになつた。尤もこの亭仔脚は家屋建築規則の施行区域内には必らずこれを見るのだが、町家でない住宅にはこれを欠くことがある。亭仔脚は在來のもので、一體臺灣人は家屋を厝屋と稱し、單獨式連續式の



二つの區分がある。單獨式は普通のもので、周圍に垣牆を繞らし外門を設け庭苑を造り園池を添へてある。連續式は市街地の商店に見る所で、相隣の兩家は公壁と稱する共通の隔壁が設けられ、幾多の店舗や人家が櫛比軒を並べ、店舗人家の前面には一間乃至一間半、或はそれ以上の廣い擔下歩道を設け、公衆の通路になつて居る。これが亭仔脚又は覆亭と云ふもので、従つて亭仔脚は歩道を指して居るが、元來は歩道の一端にあつて、その上部を支へる柱を指して云つたものだが、何時しか歩道を指すやうになつたのである。柱を指してのこの名は、實に巧に命名したもので、支那人の命名振りの巧さがこれに依つても今更に感心される。それは兎に角として歩道たる亭仔脚の上には家根があつて、大概物干場や涼場所洗面場等に用ひられたものだが、これは本島人街で多く見受くる光景で、現代的街觀を呈する城内や大稻埕艋舺の部分の建物では、亭仔脚の上は二階や三階になつて居り、居室倉庫に充て居るし、本島人の恁うした家屋には、この二階三階は幾室にか分割して他人に貸與し、三組四組の借家人が居る状態である。何しても中以下の臺灣人は、恁うして一室乃至二室位を借り生活して居るから、一家屋内には全く



借家人が雜然として住居して居ると云つて可い。だから唯だ番地のみで初めて人を訪ねて行くと、容易にその住家を知ることが出来ないと言ふことになり、甚しいのになると家主が他に居る故、同じ借家人で階下に居る人が階上の借家人とは没交渉のため、一層判らず甚しい不便を感じることも尠くないなどは、臺灣でないとい寸見られない街頭風景の一つであらう。而も家賃は年に一室五圓とか十圓と云つて、廣さその他で同一でないが極めて安く、月拂でなく一年一回拂、途中からの借家人は月割勘定ださうな、家賃はこれを厝税と云つて居る。而して亭仔脚なる歩道は、その上が家根或は家屋になつて居るから、降雨の際でも傘の必要なく、炎天でも日光の直射を防ぐことが出来るから通行人には極めて便利であるばかりか、これが家竝に連続して設けられて居るため、この道さへ歩くやうにすれば、降雨の時でも傘を用ひずに何處までも濡れずに行けるし、眞夏日中でも傘なしで歩けるから實以て調法千萬なもの、臺灣として誇るべきものの一つである。これは一つの笑話だが、内地から觀光に來た或俳人が、内地で亭仔脚と云ふ路傍に卓や椅子を置き、簡便に烏龍茶や何かの飲物を取らして休息させる設備があると聞い



て來て、亭仔脚を實見し説明されて、全く聞いて來た事實が虚偽なのに驚いたが、更にその便利な設備に甚だしく感心して讚辭を惜まなかつたと云ふことである。而してこの亭仔脚に似た設備は、秋田や青森邊の東北地方に降雪時期の交通を便利にさせる設備として施されてあるあのガンギで、これは雪のための寒國的設備だが亭仔脚は反對に、暑に對する南國的設備で、南國氣分を示す臺灣色の一つである。加之この亭仔脚は、歳末やその他商店が大賣出しの際は、これに種々の裝飾を施し夜は照明美しく、賑に景氣を添へるから、人出多く往來も儘ならぬ位だが、殊に歳末大賣出しには、亭仔脚の一例に出店が出來て、歳の市氣分を大に峻り、人の波で非常な雜沓を呈するが毎年の例である、これも臺灣殊に臺北に於て見られる街の風氣の一つ、亭仔脚も大に調法がられて居るではないか。而してこの亭仔脚の柱は、木製のものもあるが、多くは煉瓦造で、市街地ではこれに種々の裝飾を施して居るものもあり、近來これに廣告看板が掲げられて、街觀を彩つて居る。亭仔脚と云ふ名から既に支那めき、これが本島人家によく調和して居るのみでなく、洋風の商店街にも適應された設備である以外、南國在住人の交通上には至



極便利なものとされで、土地柄が生んだとは云へ、臺灣に於ては最も便利な設備で、内地人の眼には珍しく、南國氣分を示した臺灣地方色の濃厚なものの一つ、正に名物として誇るべきものであると斷言する。

文明の都市を出現した臺北市街は、街觀致を示す建築家屋の改築や新築に、漸次舊態を失ひつゝあると云ふものの、現代に適應した建物の堂々たるものが建ち並び、街間の偉觀を示すに對しては、立派な街と云ふ内外人の讚辭を、その異口同音に聞かされて居るのである。殊に繁榮を呈する城内の主要街即ち本町筋榮町筋と云つた一帶、それから大稻埕の北門通りの如き、面目を一新して立派なものとなつて居る。それで飛行機で臺北の上空を飛翔して機上から瞰下すると、洋風の大小の建築物や日本式の建物、臺灣式の家屋が三様各特色を見せ、餘地を剩さず建てられるのみか、郊外にも此處彼處と日本式や和洋折衷やうの家屋も數を増して建てられ、又た建築中のが見られるが、その機上から撮影した家並の寫眞を見ると、臺北市内の殷盛振が明かに知り得るのである。而もこの間臺灣の色彩を見せる本島人家屋や街衢は、何と云つても古さを誇る艋舺方面の、



所謂舊時代艋舺街と云つた一部分で、その他では比較的少數だが殘存して舊態を保つ大稻埕の一部に見られるから、臺北に於て臺灣の地方色、異國情調の濃厚な所を見やうと思へば、艋舺街に行くのが捷徑である。此方面に行くとき支那人街のそれの如き感があるが、これが臺灣らしい色彩で、臺灣が南國的色彩の豊かな異郷と云はれる所以をなすのである。而して一步郊外に出ると、臺北市内でありながら、全く市街地に於て見るが如き、街觀や建物は一つもない、尤も内地人に依つて開かれ家屋が建築され、また建築されつゝある新開地は、内地人街の趣きが認められるもそれも住宅地帯で商業地帯ではない。而してこれ等新開地を除いた部分、所謂市制實施と共に市内に編入された、大龍峒その他隣接の部落は、大龍峒が舊時代のまゝ街觀を呈する以外、總ては村落であつて農村である。従つて田圃は遠く廣く開展され、その間に竹藪に圍まれた農家が點在して居る、然し漸次市勢の伸展に伴ふて、この方面も住宅地と化し郊外の町が多さを加ふるも、近き將來にあらうと思ふ。又た現に恁うした伸展を示す現象が、郊外の隨所に發見され、つい近年までは行くにも遠い所とした、郊外の地點に、續々として家屋が建築されつゝ、



漸次街形を整へて行くのを見て何人も一驚を喫して居る位だ。而して既に記した通り臺北近郊の部落は農村に過ぎないから、他の所謂田舎と同様で、勿論市街地とは大に趣きを異にして、第一廣い田圃が見られ、農耕に忙しい人の姿が目につく、例の名物水牛が叱られながら動いて居るのも一風景である。而してこの方面の家屋即ち農家は、大概高く繁つた竹藪にその周圍が圍まれ、時に竹藪蔭から所在を隠見し得ることもあるが、概して一寸見えないやうになつて居る、然し竹藪があれば必ずその中に農家のあることは確實とされて居る。この竹藪は防風林として設けられてあるらしいが何と云つても昔から匪亂に悩まされたことの夥しい土地とて、家々の入口が狭く櫓の太く丈夫なのを撰んで門戸を鎖して居ると同一趣旨の下に、この竹藪で家の在所を隠して匪賊の襲來を防ぐ目的も含まれて居るとか、竹藪沿ひには小さいが濠が繞らしてある。農家では大抵門口の前が可なり廣い廣場となつて居て、これを埕と呼び、豆穀物その他種々の農作物を收穫して、此處で乾燥させることにしてある。又たこの埕の前方竹藪の外などに池を設け、養魚池としたり鶩や鵝鳥を放飼して居る。而して農家は皆單獨式のもので、瓦葺も



あるが茅葺の竹柱と云つた粗末なものも尠くない、壁は土碓の使用を禁じ煉瓦積としてあるが、田舎だけに勵行されることが難しく、多くは煉瓦積だか尙土碓を積んだのが尠くない。その他は一般臺灣人の家屋と大同小異だが、都會地の下層社會に見るが如く、廳堂と云つた應接間や房間と云ふ廳堂の左右に配する房室も、灶脚と云ふ厨房も一つに兼ね、壁間に神佛の畫像をかけ、古卓の上に神像や飲食器具時計等を雜陳し、寢臺は竹製で心ばかりに蚊帳を覆つたと云ふ簡單なものも多い。だが例の門聯は毎年新春に新しく貼られて門戸を飾つて居るが、年も半ば以上を過ぐる頃には、褪色したり剝がれたりして居るも一向無關心な點は、臺灣人らしいところがあると云ふものである。まづ恁う記した工合で、その他は所謂臺灣人の家屋に見るものと大差なく、唯だ農家に適しい設備が見られるが、農村だけに人家が多く集つて居ないで、此處彼處と近いながら飛び離れて建てられ、その間に田圃があると云ふ光景、尤も時に二三軒或はそれ以上の人家が一つの箇所建てられてあることがあるが、この場合は木の柱に屋根を蔽つた貧弱な亭仔脚が見られる。されば農村や農家は、全く市街地と趣きを異にし、廣い田圃の間に、竹藪



に圍れた農家が點在して居ると云つて可いと共に、竹藪に圍まれた農家の點在が、田園風景を致し、此處にも南國的色彩の濃厚なのが見られ、市内とは云ひながらこの方面の部落は純粹の農村部落で、臺北市内を巡遊視察してこの方面に行くとき農村の狀況も視察が出来ると云ふものである。而も田園の致景が、農民の耕作振やその他水牛や鷺やの姿、それに揚水をする龍骨車、收穫田植の狀況等に依つて、全く内地と異つた趣きを呈して異國情調を示し、臺灣の臺灣らしい所が明かに認められ、行客殊に内地から渡來した人々をして驚嘆せしめ、この致景の珍しさに感興を惹くことがあると云ひ得るのである。

### 交通機關とスピード時代出現

…臺北市内の交通機關と變遷…減退した轎と人力車と激増の自動車

自轉車…タクシーとバス…スピード時代の出現と交通整理…

異常の發達を領臺後に於て見た臺灣は、文化の向上發展著しく、各方面に於て夥しい



進歩を示し、その銳意百般の施設と改善とに努めた結果、全然舊態を脱して面目を一新し、その變遷の跡著しきものが各方面に見受けられるが、殊に交通機關の進歩發達に著しきものがあり、過去の状態と彼此これを比較すると、異常な變遷に誰しも驚嘆せぬものがない位で、至便を感ずる現状は、文運の進伸に伴ふ適切な設備とは云へ、かくも著しき發達を遂げたのは時代の趨勢の然らしむるとは云ふべく、領臺後日本領土としての施設よろしきを得た結果で、今や世界の動きに従つて、我臺灣にもスピード時代が正に出現し、その開轉の度の迅速なるを思ふと、文明の餘澤に浴する在住島人は、聖代の御恵の厚きを感せずには居られない。臺灣の首都たる臺北に於ける交通機關はスピード時代の出現に因つて至利至便を極め交通は頻繁に、これが整理に幾多の問題が惹起される一方、その解決と取締に當局は實に忙殺されて居る状態であるが、これを東京や大阪の如き内地一流の都市に比すれば、問題にならぬほどの程度であるが、兎に角從來刺戟の薄き悠暢な生活をなしつゝ來つた在住人には、この近來のスピード時代を出現した交通機關の變遷發達は一面に相當刺戟を受けたものである。而して一面内地の延長であるか



知れぬが、近時内臺間の距離は確に定期船は發着頻繁にして、航海所要日數は減少と、通信機關の異常な發達とで、いよ／＼短縮した等々の結果、時代に順應して内地のそれと歩調を合せて行かうとして居る。これは正に時の力人の力の動きに他ならぬが、蓋し臺灣としては實に喜ぶべき新時代の現象と云つて可い。臺北は勿論島内各地方も同様だが、蘭人占據時代や鄭氏の統下に在つた時代の古き昔は暫くこれを措き、二百餘年の長きに亙つて領有した清朝治下の時代は、何しろ臺灣は東海孤懸の島國、中央政府の所在地北京からは、遠く距つた南方の邊土、而も瘴癘の未開地と目され、地方廳所在地竝にその近き地方のみに漸く政令が行はれたほどだから、騷擾も多く土匪は横行して治め難い土地とされたものである。然しそれでも治臺に盡力した爲政家も、學識卓越した人士も相當出て、善政を布き行政的手腕を揮つた人々もあつたが、何れも一時的の良果を收めたのみと云つた状態で、治め悪い厄介な地と目されて居た。従つて領臺前の交通機關も、劉銘傳の時代大に革新的新設が斷行され聊か面目を改め、西洋の文化が取込まれ、文明の利器が幾分使用されたが、それも一時的で總てが實に幼稚なもので不便極まるも



のであつた。即ち陸上の交通機關は旅行者が利用するものは轎と云ふ輿物だけ、貨物は人肩に依るか、然らざるものは牛車と云ふ牛に牽かせた荷車であつた。而も道路は險惡な箇所多く、狭く凸凹の甚しい惡路で、降雨を見れば忽ち泥濘脛を没すると云ふ、道路とは名のみ過ぎない位のものであつたから、旅人はこの道路を轎に乗るか徒歩で往來したものである。加之その途中に細流があれば、小さな粗末極まる木橋が架せられてあるが、多くは舸を浮べた渡船に依るか、或は步涉せねばならず、河川には何れも橋梁は殆んど架せられなかつた故、竹筏が小舸を籍りねばならない状態で、旅行は正に難行に相違なかつた、而も一朝出水に會へば交通は忽ち杜絶を見たから、領臺前の旅行はなかく厄介な困難事とされ、餘儀ない場合の外は容易には出かけなかつたのみならず、一方例の支那人氣質で、同郷人とは親しみ、他郷人とは親しまぬと云ふ情實的傾向が強く働いて居たし、同郷人は近くに居たから等の事情で、旅行は盛に行はれなかつた。従つて交通不便の事も然う痛痒を感じて居なかつたと云はれる。現今の如き至便の世の中、文明的交通機關が容易に利用されながら、老人は勿論中年以上の女などで、直ぐ近所の



名所にさへ一度も行つたことがないと云ふものが多く、臺北市内に居る恁う云ふ人々で、基隆は愚か淡水や北投さへ行つたことなく、その地名だけ知つて居ると云ふ時代後れの人、老人連や中年以上の婦女の間に相當居ると云ふことで、虚言のやうだ眞實なのに驚き呆きれざるを得ないが、領臺前の交通機關が不完全不便を極めたのも恁う云ふ事情がその一因をなしたのではないかと思はれる。而して水上の交通機關は戎克船のみで、劉氏時代に汽船が利用されたが、それは外國の汽船會社が、南支那臺灣間に航路を開いたからである。さればその以前は大中小の戎克船が唯一の交通機關で、彼等は祖先の出身地たる福建地方へ等に風波荒き難航の場所として知られた臺灣海峽を思郷の念に驅られて戎克船で往復して居た。されば二百餘年間には種々の航海ローマンスが残され傳へられて居るが、彼等が深き信仰を捧ぐる天上聖母の媽祖神が、海上守護神であることを思ふと、蓋し戎克船での往復は、可なり彼等を苦惱せしめたものだが、何と云つても祖先の地への往復と云ふので、危険が伴ひ易い戎克船で航海することを敢て行はしめたものであらう。恁うした状態が劉銘傳の英斷的革新で、陸上では道路の改修も行はれ、貧



弱ながら基隆新竹間に鐵道を敷設するし、郵便電信が開通され、城内の一部官衙の一角に電燈も點せられ、海には外國會社の航路の汽船が往復することになつて面目を一新した、然しこれは劉氏の失脚に依りて頓挫して充分利用されずに終つた。領臺後は交通上の諸問題の解決と實施とを急として、陸上に海上に着々進んだ施設を見たが、道路は既に記述した如く、漸次改善に新設に工事は著しく進歩して、立派な道路が島内に普く、それに橋梁も數多架せられて、交通は非常に便利になつた一方、鐵道は劉氏の敷設したものに改善を加へ、更に延長して明治四十一年十月には南北を縦貫する所謂縦貫鐵道なる大幹線が開通する外、淡水線宜蘭線屏東線臺東線の各線路が開通し、愉快に安全な汽車旅行が出来るやうになり、海には今や一萬噸級の巨船が、神戸基隆間を定期に航海し、而も六隻で隔日に神戸基隆双方から發し、航海日數も僅に四日間に短縮され便利となつた。その他有線無線の電信電話が架設され殊にラジオに依る通信は至便を極め、大に文明の利器が活用されて居るし、近く飛行郵便や旅客輸送の飛行とかが行はれ、飛行機で内臺間を往復するやうになると云ふことである。その他橋が唯一の乗物であつたの



が、汽車が出来人力車が利用され、今や自轉車自動車がこれに代り、殊に自動車が廣く利用されて驚くべき勢を示して居る。而して島都臺北に於ける交通機關は領臺前は他地方と選ぶ所なく、轎が旅客の唯一の乗物で、貨物は人肩か牛車に依つたが、劉銘傳時代に鐵道が敷設されて、汽車の便利を知つた。領臺後はこれに大改善を加へ、線路も變更して、今の北門町邊から大稻埕の東方を迂回し、淡水河に木橋を架設し新莊に通じたのを、現在の如く臺北停車場を移轉し更に城壁跡三線道路に沿ひ艫舢に經て枋橋に至る線路とした外、淡水線の大稻埕から淡水に至る一線に、途中圓山雙蓮の停車場を設けたが、後に宮の下大正街の二驛が増し、汽車の外に機動車が約四十分間毎に發車して居るが、尙最近ガソリン車を基隆桃園間に運轉し、市内に北臺北新起町の新停留場が設けられた。その他通信機關は電信郵便の事務は領臺後既に開始されたが、臺北の公衆電話は明治三十七年十一月に通話開始以來、年々加入者は激増して今やその數四千三百に及び尙増加するの一方である。無線電信も明治四十三年十月から公衆通信を取扱ひ漸次改善の結果現時は發信は板橋から受信は淡水で、受付配達事務は臺北局で扱つて居る。而し



て乗物としての轎は何時しか姿を没して殆んど片影を認めなくなり、人力車は自轉車自動車のため激減し、牛車や荷車は貨物自動車に貨物を奪はれるやうになり、市内の交通機關も著しき變化と進展を見せたものである。これも時代の力と人の力の動きで、蓋し自然の趨勢と見做すべきであらうが、在住人は恵まれることの夥しきを感謝しつつ、便利な交通機關を活用し、更に大に臺灣のため、臺北市のためその發展に努めねばなるまいと思ふ。

交通機關や通信機關の完備、その異常な進展發達を遂げたのは領臺以後のことである。而して陸上の交通機關は、鐵道の敷設改善事業大に進歩し、臺北に於ける鐵道は、縱貫鐵道の幹線が北基隆より臺北を経て南高雄に貫通する外、汽車機動車を運轉する淡水線は、臺北より淡水に至り新北投に至る支線もあり。途中市内に大正街雙蓮圓山宮の下の各停車場が置れてある。而して最近縱貫線を利用して桃園基隆間にガソリン機動車を運轉することに因つて、臺北萬華兩驛の以外に新起町北臺北の二停留所が市内に新設された。その他大正十年四月から臺北（艦舩）新店間に、臺北鐵道株式會社經營の汽車が



運轉を開始し、市内に艋舺（今は萬華）螢橋古亭町水源地公館の各停車場が設けられ、又た時代の趨勢に鑑み、今や汽車以外にガソリン機動車も運轉するに至つた。而して領臺前唯一の乗物として、旅行者が大に利用した轎、支那に見るが如き輿物が、臺北市内にも多く見られたが、人力車が領臺直前頃から輸入利用され、而も車賃が至廉で便利であつたから漸次利用するものが出来たが、領臺後内地人の渡來する者多きを加へ、且つ彼等はこれを利用したので漸次轎の需要を減退し、僅に老年者や婦女子か或は近郊から臺北に來る中流以上の人が乗用するに過ぎなかつた。而してその後自轉車や自動車の如き、文明の乗物が激増した結果、舊態の遺物となり、殊にスピード時代が出現した今日では全然影を潜め、時に一二の轎が、纏足した婆さんを乗せて廟詣に行くのを見る位で、それも稀で容易に見ることが出来なくなつた、而して轎夫と呼はるゝ轎昇きの人夫は、何れも他に轉業してしまつた。唯だそれも極々僅少婚禮に花嫁を乗せた紅布で蔽ひ隠した轎を、郊外の田舎道や時に市中を昇ぎ行く位で、全然影を潜めたと云つて可い、従つて新しい渡臺者と云はず、然う在住久しからざる内地人は、この轎を他の田舎で見るとのみで、



臺北市内では一度も見たことがないと云ふものが多いと云ふことである、慙う云ふ工合で轎も遂に悠長な時代後れの乗物、舊代の遺物として憐な運命に陥つてしまつた。人力車は領臺前、劉氏失脚以後、無論支那から輸入されたもので、既に二三十輛はあつたと云ふことだが正確なことは判然しない、而もその頃は人力車に乗る人は多く官人か、さもなれば中流以上の人であつたから、大衆向の乗物ではなかつた。大衆向の乗物としては、まだこの時は轎であつた。領臺後内地人の渡來する者多きを加へて車數も増加し、内地に比して驚くほど俵賃が安いので、内地人は盛に乗用したから、それに伴ひ本島人も漸次利用者を増加し、一方減退する轎に代つて唯一の交通機關として人々に調法がられたことは夥しいものであつた。無論當時は自轉車も自動車もなかつた時代だし、轎に比して著しく速く、賃錢も安く、殊に内地人は俵賃を乗車前に定めず、目的地に到着後自己裁量で支拂ひ、俵夫もこれを甘受するの風なので、十錢銀貨一つで可なり遠くまで行けたさうな。而も車體は支那からのもので、支那行として日本内地で製した、よく古い繪に見るやうな舊式のものばかりであつたし、俵夫は臺灣人も多かつたが、支那人も



その數に於てこれに劣らぬ位であつた。その後車臺は内地から移入され、改良された内地のそれと同じで鐵輪のものであつたが、全部護謨輪になつたのは、大正二三年以後のことである。この間臺北市街の道路が改善され立派な坦道となり、人口を増加したので俥に乗る人も増して來た、而も賃錢は極めて低廉であつた一方、本島人も轎より便利で安いし、辻々や街頭で容易に乗用が出來たので乗用物として調法かつて、大抵の人は誰でも乗るし、近に行くにも俥上の人となる傾向が著しくなつた。而して多數の臺灣人や出稼に來た支那人が俥夫として稼ぎ働いて居る上に、内地人労働者中で車夫を職業とする者が出來、恁うして人力車は臺北市街に於ける有用至便の交通機關となつて、車臺數も非常の數に上り、車夫の服裝も一定して舊來の面目を一新した。然るに一方自轉車が既に明治三十七八年頃から見られて漸次その數を増し、店員やその他下級使用人のみか、相當立派な人社會的優越階級人中にも乗用する者も尠くなく、盛に自轉車の乗用が流行し、人力車と共にやがては臺北に最も多く見らるゝ交通機關の一つとなつたばかりか、現在でも二三萬輛に及ぶ車臺數を示し、依然恁うした店員や下級使用人は勿論、銀行會社員



諸官廳の勤人と云つた工合に廣い範圍に乗用者を見、自動車激増の今日でも、スピード時代の交通機關として夥しく利用されて居る。而して自動車は既に乗合自動車が大正二年七月に初めて臺北圓山間を運轉したが、餘り人々が利用しなかつた。その後時代の進運に伴ひ、官廳用の自動車を見、臺灣銀行にも自動車があつたが、これが數を増したのは大正十年以後で、この時分からぼつ／＼各方面で自動車が使用され、殊に大正十二年以後は非常に激増した。乗合自動車は大正二年に開業したが不結果に終つて斷絶して、漸く再び大正八年七月に臺北自動車株式會社の經營で、市内に乗合自動車が運轉營業を開始したが、更に一方臺灣人に依つて經營された大新自動車株式會社で、新店大橋町間に自動車<sup>が</sup>運轉されたものである。而して後に前者は後者に賣渡して經營を移したが、昭和五年四月からは、臺北市の市營となり所謂市營バス、俗に銀バスとも云ふ乗合自動車が市内を縦横に運轉したが、時勢に適合したものが利用する者日々に激増する一方で益々盛況を極め、市内交通機關として非常な利便を市民に與へつゝある。而して市營バスの生まれるに至つたのは、曩に昭和三年度に市營として電車の運轉が計劃され、着々



準備中の所、財政上その他の事情で中止となり、一轉して市營バスの運轉を見たのである。即ち昭和五年度に二十四萬八千餘圓を資金とし、既設乗合自動車の經營を讓受け、五月一日より開業、當初は自動車三十五臺を以て運轉し、市内の料金均一制を斷行したが、開始以來非常の好況を博し、乗客常に満員の状態で、市民の要望を充すことが出来ないため、更に幾度となく車臺の増加と、線路の擴張に努めると共に施設の改善を着々實行し進んで第二期計劃にも移り、市永遠の福祉を増進せんと期しつゝある。而してまた大新自動車株式會社は、依然新店線を運轉して居るの外、昭和五年秋頃より巴自動車會社は草山北投循環バスを運轉して居るし、その他臺北松山間や基隆臺北間、さては臺北士林淡水間の各方面にバスが運轉され、旅行者遊覽客に便利を與へて居る。尙この外にタクシ―の出現は實に夥しい數で、それが現時は時勢に順應して、市内は五十錢均一とし、所謂半圓タクが生まれ、市内を晝となく夜となく、縦横に運轉駛走してスピード時代を出現するの状態で、現時の臺北市内は官廳用や家用と、これ等のバスやタクシ―で自動車の數は夥しく何時しか千五百を超え、往來頻繁に交通整理の緊要に迫まられ、



交通整理の警官が血眼で整理するの街頭風景が見られるほど、交通機関は異常な發達を見たもので、これも現代的モータン現象、臺北が文明都市と云ふ證據の一つとも見られるであらう。加之この他に自轉車人力車があるが人力車は大正五年共進會開催以來、一町一錢制の車賃が定められたものの、近時バスやタクシ一の激増に壓迫され、賃錢も漸減の傾向を示す一方、乗客をば求めつゝあるが收得は面白くないとか。而して車夫は臺灣人は漸減して大部分は出稼の支那人で少數の内地人を見るが、臺北市内交通機関としては自動車自轉車に奪はれてしまつた。而して貨物の運搬も近時貨物自動車即ちトラツクが激増し荷車や牛車は漸減する一方となつたが、まだ市内を悠暢に牛を叱つて牛車を御する苦力や、汗を流しつゝ荷車を曳く苦力を見るが、實際舊代の遺物たるを失はない感がするほど、これも亦た時代錯誤の運輸機関と云ふべきものとなつてしまつた。

現代文化が生んだ文明の交通機關たる、自動車の旺盛を極めた臺北市内の交通は、全く前人が夢想だもせぬほどの、目ぐるましく、あわただしい、頻繁を極めたもので、往來人も以前の如く悠暢に歩むことが出来なくなつた。それは甚しい危険が伴ふからで、



暢氣な地とは前人の云つた言葉で、現代臺北人はスピード時代の出現に聊か神経を尖らさねばならなくなり、かの牛車の往來が甚しき時代錯誤を感じ、これを舊代遺物と笑ふやうになり、時の勢人の力の動きの恐しさが痛感せられるではないか。従つて交通頻繁が生む危険を防止することが極めて緊要となり、所謂スピード時代に適した交通整理の必要が高唱され、實行を見つゝあるのである。然し東京や大阪のそれに比すると交通が頻繁でないとは云ふものの、まだ恚うした事に充分訓練されて居ない市民、殊に多數の臺灣人を相手するので、この交通整理は重要且つ幾多の困難が伴はれるさうな。それは兎に角として、曩に左側通行が勵行され、警告的の揭示やら表示標が夥しく見られ、時機を見ては屢々宣傳されて居る。加之これに關する取締規則が發布されて強制的に勵行を見て居るが、恚うした取締や整理は一つに警官の手に依つて行はれ、腕章を附けた交通巡查が、街頭に立ち『進め！止れ！』の指揮をしつゝ、大手を振つて取締整理に活動して居る。風の日雨の夜さては炎天下に、恚うした警察官の姿を街頭に見ると、その勞力心勞のほどが思はれて、敬意と感謝を表せずには居られない、職務とは云へ、恚うした



新しい仕事が生れたのも全くスピード時代の出現からである。而してこれが爲めに市民は大に保護され安全たるを得て居るが、然しスピード時代の産物として不慮の災禍や事故等は、可なり夥しいとかで、可なり犠牲者を出して居るが、これも災難で仕方がない。さりとて警察当局では充分この交通整理には努力して居るし、交通業者就業員の監督は非常に嚴重で、交通事故の防止に専心銳意これ努めて居る。加之祭事のある時や、その他各種の催事のある場合や、何でも人出の多い時には、一層この交通整理が必要となり、嚴重な警戒と整理とが勵行され、交通巡査は街頭に立ち、大手を振り聲を濁らして、雑沓する交通を安全ならしむべく汗を流しつゝ大に努めて居る。この他在郷軍人や青年團の若人達も、臨時出勤協力して整理に奔走し、涙ぐましい活動を見せて居る。臺北市内もスピード時代に適しい交通頻繁振に、恚うした交通巡査や在郷軍人や青年團の協力的活動で、交通の安全が得られて居るに對しては、市民は何れも感謝の意を表せぬ者はなく、この光景は正に現代文明が生んだ街頭の一新風景で、その昔轎で悠々として交通したことを思ひ、彼此を比較すると全く今昔の感に堪えないのである。これを想ふとやが



ては、話に聞き書物で讀んだ歐米都市のそれの如き街頭風景が出現するものも、遠くは  
あるまいと考へられた。

### 大小公園と散策地と涼み場所

…北隅の圓山公園と中央の新公園…楕圓公園と市内の小公園…

散策地の植物園と近郊…夜涼の場所と臺北人

異常なる交通機關の進歩發達は、市勢の伸展文化の向上その他諸般の現代的情勢と相俟つて、臺北在住の人の外出を夥しく頻繁ならしめ、而もその機會を多く與ふるやうになつたことは、事實の上に於て争はれないことであると斷言する。而も領臺後は文明の都として臺北市街の向上發展に努め、これに適應した諸般の施設を見たもので、公共施設の一つである公園も、恊うして施された施設であつた。文明都市として公園の有することは當然のことで、而も苦熱の下に活動する人々の慰安として將た又た保健上から公園は極めて必要であつた。されば領臺後臺北にもこれが施設を見たもので、現存して居



る圓山公園と新公園竝に各所に散在する小公園がそれである。圓山公園は最も古いもので、市の北方圓山町に在る。この地は舊名山仔脚庄と云ひ基隆河の河畔の一丘陵で、丘陵の形が圓いので圓山仔とも云つた。圓山は蓋し邦語譯に外ならないが、この地が大龍峒街に程近いので一名龍峒山とも云つた。元來この所は大龍峒の富豪陳維英が別莊を建て太古巢と稱した所で、林幽境清、巖石地層をなして溪水に臨み風景甚だ明媚なりとて評判された。改隸當時陸軍墓地であつたのを明治二十九年九月改めて公園として圓山公園と命名された。而してその後公園としての設備に大改善を施し噴水や小飛瀑さへ設けられ遊覽に適するやうにして、小さいが鬱林に包まれ丘陵を利用した、而も四邊の風景が明媚で眺望亦た甚だ佳である地なので、臺北人士は杖を曳くものが多く、明治橋を渡ると直に劍潭山で臺灣神社に參拜も容易なところから、神社參拜の人は立寄るものが多し。園内には動物園がある。大正四年十一月御大典記念事業として擴張改善を見、二萬九千餘坪の面積がある、大正九年市制實施と共に市に移管されて今日に及んで居る。動物園は最初此地に私人の見世物として動物園の名で興行物があつたが、後に官に於てそ



の飼養動物を買収して、一度は今の植物園内に在つたのを、更に此地に移して動物園としての設備を完全にし、飼養動物の種類や數を増し、漸くその使命を果すことが出来るやうになつた。公園移管と共に動物園も市に移り管理されるやうになり、更に改善擴張されて動物の種類や數も増し、珍獸奇鳥がなかく多く、三百六十餘種を算して本島唯一のものであるのみでなく、我國五大動物園の一と稱せられ、觀覽者は逐年激増する一方、兒童が何時も嬉しがつて見物する所となつて居る。而も昭和五年から夏には夜間開場をして各種の餘興さへ催して居るので、夜涼に子供連れの觀覽者で大賑である。この公園には水野氏の銅像や筆塚等がある外、丘麓に明治三十二年兒玉總督の開基に係る鎮南山護國禪寺と云ふ臨濟宗の寺があるし、陸軍墓地があり、淨土宗の布教所忠魂堂があつたが、現在この寺は市内樺山町に新築移轉した。而してこの公園附近一帯地からは貝塚の遺跡や上代民族使用の石器が発見され、護國禪寺内に置かれてある大砥石は頗る珍奇なものと稱せられ、眞に半日の清遊に好適地である。新公園は圓山公園に對して新しい公園と云ふところから恁う呼ばれたのが公園名になつたのであるが、新公園は俗稱



で臺北公園と云ふのであるけれど、俗稱の方が普遍されて居る。領臺當初而も市區改正の實施前は、官衙官人街として總督府廳舎やその他の諸官衙、さては官舎等々があつた城内も、市街地域とは云へ、まだその頃は可なり廣い空地があつたのみでなく、その中央部以東以南の各方面には、水牛を吐りつゝ耕して居る田圃があり、竹藪に圍まれた農家がその間に散點して、到底今日では想像し得ぬ程淋しいものであつた。城内は官衙官人街だと云ふものの、街衢を形造つた部分は今の榮町通り以北、それも狭小な部分であつた。明治三十二年に城内から市區改正が着手されて、この計劃に基いて今の公園が設けられたものであるから、圓山公園に比しては新しいもの、それで誰云ふとなく新公園なる俗稱が呼ばれ、臺北公園と云ふよりこの方の名稱が普及されてしまつたのである。臺北公園即ち新公園は市區改正の計劃に基き、石坊街（今の榮町）と東門街（今の明石町二丁目と文武町三丁目）との間に在り、臺北停車場から南五丁、市の中央に位して居る。最初二萬三千坪の地積に樹木を植ゑ、幾條かの徑路を通じ、花苑池泉を造り運動場を設け、遊覽散策に適する設備をなし、公園としての風致を完全した。次で所在の官舎その他の建物



を取拂ひその地積の擴張を行ひ、今では地積二萬三千六百六十餘坪の廣い公園となつた。本公園も亦た市制實施の際移管を市が受け、公共施設の一つとして管理して居る。明治三十二年施工以來、種々改善が試みられ、益々市の公園として恥しからぬものになつた。即ち老榕の蒼鬱たる、椰子や檳榔林の亭々たる、その他各種の大樹高木は繁つて南國氣分を發揮して居るのみか、園内の林泉は奇を凝らし、花苑には紅白紫黄色とりどりの花卉は四時その妍を競へば、遊覽散歩に杖を曳く人も絶えない。それに園内には記念博物館の白堊館の堂々たる大建物があり、鯉魚の噴水は睡蓮咲き亂れる池中に建てられ、廣い芝生は運動場として野球や排球その他陸上競技が盛に行はれる一方、その近くに庭球コートもある。公園を東西に貫く坦道の南に音樂堂があり綠蔭室があり、臺北放送局も新に建設された。その他園の西南隅には臺北天滿宮の小祠があり、角力場には立派な土俵が築かれ、シーソー回旋木すべり臺等の兒童運動機具さへ備付けてある。尙園の西南の一隅には臺北俱樂部とパークライオンなる洋食店があり、廣い園内には兒玉前總督の石膏製の壽像、後藤前民政長官や柳生前臺灣銀行頭取の銅像が建てられてある。何しろ



市の中央に位し、遊覽散歩に適する公園としての設備が行き届いて居るのみでなく、音樂堂には活動寫眞の映寫や講演會が時々催され、夏は夜間演奏が一週二回もあるし、時折り／＼催される各種行事は、場所柄至便なので此處を盛に利用し、その都度非常な人出に賑ひ雜沓を呈する。適當の場所に乏しいためか、圓山運動場なき以前は、小公學校の聯合運動會や野球試合が盛に催され、現時は陸上競技や庭球さては軟式野球の試合は勿論、各種の催物が此處に行はれて居る。若しそれ春の麗かな日の散歩や、夏の綠蔭に納涼し夜涼を趁ふての漫歩、月見の集ひなどには最も好適し、市民に取つては實に慰安行樂の場所として、又た各種の催物行事等に利用することに於て非常に利便を感じ調法がられて居る。尙最近に於ては本島人街として繁華を呈して居る大稻埕方面には、小公園は一二あるが、所謂公園として市民の行樂その他に供すべきものがないので、この方面にも公園を建設するに決し、地を大橋町から大龍峒町に至る一部の區域に選び、相當大規模の設計に着手して居るから、早晚これが出現を見ることであらう。

新公園や圓山公園を有する臺北市内には、更に幾多の小公園とも見るべき、逍遙休息



に適する地域を劃して居る。この設備は土地柄炎暑の折に、或は行人の綠蔭に憩ふて涼を納る所として、又た夜涼の人が繁つた樹下に小憩をするに適する所としたもので、これは公園と云ふほどでもなく、休息地としては聊か廣いので小公園とでも云つて置かう。これ等小公園はその形も楕圓形あり半圓形あり圓形ありと云つた工合で同一でない。而も三線道路に在るものは城壁を市區改正の際取毀ちその跡に所謂三線道路を設けると同時に、これ等の小公園が所々に配されたのである。而してこれ等の地域には何れも綠樹を植ゑて繁茂せしめ、芝生を敷き徑を設けたのもあれば、單に綠樹のみを植ゑただけのもあり、また銅像が建てられその周圍に水を湛はせたのもある。樺山町州廳舎前のは綠樹を配し、大島前民政長官の銅像があり、圓形でこれに池水を繞らし休息用の据置椅子がある。南門には綠樹の數々を繁茂せしめ、青き芝生に小徑が造つてある。而して西門を取毀つた跡は楕圓公園と俗に云ふが、これは楕圓形であつて、綠樹を多數植ゑて繁茂させ小さな池もあり、据置椅子も設け、祝前民政長官の銅像が建て居る。尙この楕圓公園は小公園中最も廣く、而も城内から艫舳その他市の西部方面への通路に當り、交



通極めて頻繁の巷である。而も道を距て、直に臺北唯一の盛場たる西門市場に對し、近き此方面には旗亭劇場常設活動寫真館等々があつて賑ひを呈して居る場所柄、夏は日中道行く人が多くこれを利用し、綠蔭に涼を納れて休息し、夜は涼みの散歩人で往來繁く、且つ夜店と云つても飲食物を賣る屋臺見世がずらりと並び、燈影美しく客を呼ぶ聲も景氣が好い。その他艋舺方面には、かの有名な古刹龍山寺前にあつた養魚池を埋め小徑を作り樹木を按配し風致を添へて公園としての施設を小さいながら整へて居るし、大稻埕方面には日新町に圓形な小公園がある外、各所に憇うした小公園が散在して、市民の爲めで慰安休息の用に供して居る。而してこれ等の小公園は何れも繁茂した綠樹が植ゑられ、或はこれに樓門や銅像や池水を配してそれ／＼風致を添へて居るが、その瀟洒たる感は一寸内地の何處にも見られぬ所で、市街風景としても寔に綠翠滴る南國都市の誇りを見せて居る。

南國の臺灣、常夏の國と云はれるだけに炎暑も可なり甚しく而も期間が長い、人々はこの苦熱を驟雨や夜吹く涼風に因つて蘇生し、晝の熱さから脱がれて居る。夜涼を趁ふ



人々の街に多いのもそれであり、夜の街の賑なものもそれである。臺北城内のミーンストリート即ち主要街たる榮町筋や本町通りの商店街や西門市場並にその附近一帯の盛り場に夥しい人出を見たり、川端町の所謂古亭庄の川端のお茶屋が繁昌するものも、これ皆夜涼を納るゝ人が行くからである。夏の夜の臺北で賑ふのは何と云つても榮町本町京町の商店街と盛り場の西門市場であるが、これ等は皆夜涼を趁ふての散歩人で、子供を交へた家族連が多いのも目につく、殊に露店の燈が美しい賑かな西門市場は、夜涼を趁ふ散歩に好適した所で、夜店を素見しながら、ぶらぶらの散歩は悪くない。それに露店の果物屋には、バナナや鳳梨西瓜等々の甘さうな果物が無數並べられて客を呼んで居るし、内地の縁日に見るやうな各種の露店が、場内に夥しく賑なものである。これも夏の夜の風景の一つ、城内の喫茶店は何れも氷や夏の飲物を求むる散歩人で何時も満員の盛況、奏する蓄音器の狂燥樂も景氣が好い。臺北の夜の街はその賑さが夏にあるとは誰やらの言葉だが、實に然りと云つて可いと云ふのは、もう夜も更けて十時以後になるとさすがに夜涼を趁ふ人々の姿も街から消えて、寂しげに街燈が光を投げて居るのみであるから



である。而して近時は恁うした方面に散歩する本島人の家族連のものや、若夫婦のものやその他老若男女が、漸次その姿を見せるやうになり、内地人同様夜涼を趁ふことが多くなつて來た、それも時代の動きであらう。さて臺北では城内や西門市場以外に夜涼の場所を求むると、新公園もその一つであらう。綠蔭に燈影を避けてベンチに憩ひ納涼する人も多く、夜涼旁々音樂堂の奏樂に耳を傾くる者も尠くない、だが此處は人出こそ目に立つほど多くないが、三々伍々恁うした人々の姿が、樹影に黒く動くのがよく見られるし、この樹蔭の暗い所には、若い男女の戀を私語するものもあり、夜更けても尙恁う云ふ人影が去らず切にエロ的行爲が行はれるとか。植物園も場所としては聊か距離があるが、鬱樹が多いので、樹下に夜涼を趁ふての散歩人は多くないが、若い男女の密會場所には可いとあつて、此處にもエロ的の噂さが立ち、屢々事實が發見されるさうな。尤も恁うしたエロ的行爲は、夏の夜はよく見られるものだが、此處彼處の小公園の樹蔭などにも珍しくないどの噂評判がある。又た南方古亭庄の川端即ち川端町の護岸堤の上は前に近く流るゝ新店溪の溪流を控へ、河風に吹かれつゝ涼味を掬し得るので、散歩の人を



見るが、夏は涼を趁ひ水に懐しむと云ふのは人情、それで納涼客を顧客とする旗亭が堤上に建て並べられ、川魚料理に酒を酌み、川風に吹かれて夜涼を納れる人々も多いから、夏はこの方面の旗亭が城内の旗亭よりも繁昌するし、藝妓は城内から聘することが出来、酌婦は家々に抱へられ夏を稼き時と活動して、彼女白粉の女がエロ氣分を盛に唆ることは他の場所と同様である。而して流に舟を浮べての納涼も盛であれば、新店からの川下りや艫舳への舟遊は、臺北人士の好む納涼的舟遊の一つと云はれ名物にもなつて居る。

若しそれ淡水河の夜は、萬華の河畔に船を館に大阪の蠣舟式の旗亭や酒場があつて、水面を吹く川風を懐に、淺酌低唱の粹な遊びをする人もあり、ジャズに浮れて女給と踊り、卓を圍んで彼女と語るものもあり。河に端艇を浮べ上下する人もあれば、愛人や妓を乗せてオートルを操つる若人も尠くない。更に遠く月明の夜は圓山あたりの散歩も好く、臺灣神社の神苑も涼味萬斛であるし、三線道路を自動車ドライブするのも涼しく愉快である。ところで臺灣人は内地人の如く夜涼を趁ふたり、納涼の宴を催したりしないのは、土地柄から妙に思ふが、彼等の習慣が然うでないからである。尤も彼等は近頃



こそ子弟に游泳や海水浴をさせるが、これも進んだ頭腦を持つた人々のみのことで、一般には水に親しまない故である。彼等の納涼は家々の門戸に竹椅子を出し、腰打ちかけ、團扇の風に涼を納れる位、又た淡水河の河岸近くの者は、河岸を夜の川風へ吹れつゝ、散歩する者もあるがそれも多くない。然し臺北橋が出来てからは、橋上に筵や蓆を敷いて、交通を妨げぬやうにして寢轉び納涼して居るのが多くなつた。又た夏の夜室内では暑さに寢られぬため、我家の前の亭仔脚の下歩道に、筵を敷いてごろ／＼寢て居るのは夜更の本島人街で隨所に見受ける。而して若い人々は門涼に胡弓を奏するが、亡國のこの哀音は南國情趣のあるもので、支那人街を思ひ出されると共に、本島人街に見る夏の夜の一風景として内地人の眼に珍しきものに映ずる。南國！常夏の國、島の首都臺北の夏の夜には、恁うした内臺人それ／＼趣を異にした街頭風景を描き示して居る。



# 臺北の進展振と各世相



- || 島治の中樞地臺北市とお役人 ||
- || 活動する新聞雜誌界と筆の人 ||
- || 臺北の公共團體と社交の團體 ||
- || 商業地の臺北市と臺北の商店 ||
- || 誇り得べき公設市場と行商人 ||



## 臺北の進展振と各世相

### 島治の中樞地臺北市とお役人

…臺北市の官衙と官界人…官舎街風景と官吏…

官界の動靜と臺北市の市況…奥さまの今昔と現代

臺北の地に領臺直後總督府が置かれ、始政の式が擧げられて、所謂總督以下の諸有司に依つて臺灣統治が行はれるやうになり、實に三十有餘年の星霜を閲して來た、即ち臺北の地は島の首都として、島治の中樞地となつて今日に及んで居る。而して島の首都たる臺北市内、殊に領臺前も官衙官人街であつた城内に、總督府の廳舎を初め、重要な諸官衙が設置され、新領土の政都としての諸機關は、概ね此處に集中し、文明的施設は餘蘊なきまでに設備されて居る。而して領臺當初は萬事兵馬空惚の裡に在り、庶政漸くその緒に就いたと云ふ状態なので、總督府廳舎その他それ〴〵城内に残存して居た、清朝



時代の官衙建物を利用し、内部を改造して其處で執務して居たものだが、漸次弊頓から進展に向ひ、各方面に施設改善を見たので、各官衙も時代に適應すべく新に廳舎の建築を見、落成するに従つて舊時代の建物から新築廳舎に移轉して、今や舊時代の建物を利用して居る官衙はない位、而も新築廳舎と云はれたそれが、その後二十有餘年或はそれ以上に達し、更に改造の要を見て新装を重修したものや將に改築中のものも尠くない、而して領臺當初來我官衙として利用した舊時代の官衙建物は、何れも暫く空屋となり、時に内地人がその一部に居住して居たこともあつたが、もう今日では腐朽の末取毀を見て、殆んど取り除かれ一つもその片影さへ止めず、唯だ此處が何々と云ふ官衙があり、領臺當時何々と云ふ我官衙があつた蹟だと云ひ傳へられ、古老や古き在住内地人から説明を聞かされて、然うかと合點するに過ぎない。而して新築された官衙の建物は、何れも煉瓦積の歐風を加味した立派なもので、これも城内の街觀美を増すものの一つとなつて居る。而してその官衙の建物の主なものを列記すると、總督府廳舎は、明治二十八年六月十四日初代樺山總督が、文武百官を率ゐて臺北城内に入るや西門街（今の犬和町）清朝



時代の官衙建物行轅と布政使衙門を以て總督府廳舎に充てたもので、元來この建物は、嘗て清國の巡撫劉銘傳が、資を官民の餼出に待つて、本國政府大官の渡來に際する迎賓館とその公廨に充てたもので、構内も廣く堂々たる純支那式の建物であつた。此處に總督府を置き、臺灣統治の中樞諸機關が設けられ、樺山總督以來明石總督に至る大正八年まで二十有餘年間、八代の總督はこの廳舎内に於て、統治の事務を處理されて居た。而かも一面時代の進運に伴ふ本島開發の顯著なるものがあり、他面この廳舎は構内は廣いが純支那式の建物なので、行政事務官廳として執務上の不便が尠くなく、それに他の官廳も新築してこれに移轉する外、街觀その他各方面の事情からして、新に時代に適應した總督府の廳舎として恥しからぬ建物を造營することに決し、遂に建築設計を懸賞で募集しこれに更に意匠を加へ、工費二百八十一萬圓を費し、明治四十五年六月起工し、大正五年半成の廳舎を會場に充て、勸業共進會を開催し、同八年三月全く竣工、舊廳舎から移轉して今日に及んで居る。今文武町（舊文武街）の地市の中央部に、高塔天に聳ゆる近世復興式五層樓、建坪二千百餘坪の堂々たる大廈がそれで、この廳舎内には毎日千人以



上の人々が執務して居るし、大玄關には岡田三郎助氏大會議室には石川寅治氏の兩畫伯が揮毫した壁畫があり、これが亦た非常な傑作で大評判となつて居り、かの世俗阿呆塔と云はれる高塔には陸軍の午砲廢止以來、市設のモーターサイレンを取付け、市民に正午時を報じて居る。而して舊廳舎の建物は、可なり年數を閲し稍廢頽に傾いて居るが、何しろ領臺當初から總督八人まで此處で執務され、劉銘傳時代にも轅門として使用し、總督府としても二十有餘年の久しきにこれを使用して居た、由緒ある史の上重要な建物なので、一度は取毀とか移轉の議があつたが、石塚總督の意もあり、これを修覆して舊蹟として保存されることとなり、現在もその儘其の姿を見せ、展覽會やその他の會場にこれを利用して居る。軍司令部は今は書院町三丁目、三線道路の北それに直面して建てられた、煉瓦積の三層建な立派な廳舎で、大正八年起工して翌九年竣工、建坪千九十坪工費十七萬圓と云ふ立派なものであるが、臺灣軍が設けられたのは大正八年八月で明石總督が總督にして軍司令官とされた、その以前は武官總督で總督が軍事を統轄し、陸海軍の幕僚があり、何れも舊布政使衙門の建物を利用したもので陸軍幕僚のあつた陸軍



部の廳内には、故北白川宮能久親王殿下が南進軍の將として、臺北御滯陣中御起臥遊ばされた御室があつた、誠にお粗末な二室で、此處で故宮殿下の御事どもを偲び奉つるも恐れ多い極みである。この室も臺灣軍司令部が出来新廳舎に移轉後は、その跡も隣の海軍幕僚の執務所と共に何れも取毀ちになり、宮殿下の御遺蹟一つが永久に滅びたのは遺憾の次第である。海軍幕僚は臺灣軍設置と同時に廢され、督府附海軍武官が置かれ、海軍武官室は督府新廳舎内の一室が充てられてある。專賣局は南門外兒玉町の一角に、工費二十萬圓で大正二年六月に新築されたもので、中央に高塔ある三層の煉瓦建の宏大なもの、この高塔も督府の高塔と共に市の街觀上異彩を放つて居る。而して本廳とは道路を距て、これも煉瓦積の立派な樟腦阿片の製造工場があり、煙突が黒烟を吐き盛んに蒸氣を出して製造して居るが、この珍しい臺灣專賣品樟腦や阿片製造の實況を見學すべく、來臺者が何れも此處を訪れる。而してこの阿片製造工場の前身は、臺北製藥所と云つて、今の南門町三丁目(舊小南門街)にあつたのが、これに移り合したので、樟腦工場は明治三十二年七月開設の羅東樟腦局の後身と見るべきものである。尙煙草專賣となり煙



草工場が臺北停車場の北、下奎府町（舊下奎府聚街）に明治四十三、四兩年度繼續事業で建築され、建坪九百二坪餘の煉瓦積三層の立派な工場で、工費十八萬三千餘圓の建物があり、酒專賣法實施の結果、在來の釀造工場を買収した樺山町に酒工場がある。中央研究所は大正三年度に建築され、建坪二千五百五十坪の煉瓦建二層の洋式な建物、工費六十六萬圓を要して宏壯なものである。圖書館は書院町に在る以前彩票局の建物として、明治四十一年竣工し工費十二萬五千圓、煉瓦積二層の歐風建築、彩票廢止後は博物館とされたが、兒玉後藤兩氏記念博物館が新公園北側に建てられたので、圖書館となり今日に及んで居る。交通局遞信部は書院町に在り、大正十年起工同十二年竣工し、工費五十九萬圓煉瓦積三階建のモダーンの建物、建坪七百七十五坪防火設備も完全である。交通局鐵道部は北門外に在り、煉瓦二階建の歐風建築で、建坪五百六十坪工費二十九萬四千圓、大正四年三月竣工し、北門の城樓と對して偉觀を示して居る。臺北州は以前舊臺北廳の建物、これも舊時代の官衙であつたのを利用したが、大正五年竣工現在の樺山町に在る二階建煉瓦積で、建坪千七十五坪工費二十七萬圓、歐風の立派な堂々たる建物、而して



移轉後の舊臺北廳の廳舎たる舊代の建物は、暫くその儘であつたが、廢頽甚しくこれを取毀取除けて、久しく空地となつたのを、今は樂天地と云ふ本町一丁目の商店街が出来て居る。法院は地方高等二法院で、この建物は十萬圓で明治三十三年竣工し、その當時は臺北唯一の大建築物として異彩を放つたものゝ、爾來今日まで二十有餘年を経、白蟻の害に加ふるに廢朽に傾き、且つ他に立派な新しい歐風の堂々たる建物が多くなつた故、非常に見劣のする貧弱古臭いものとなり、法院の廳舎としては甚だしく時代後れがしたものであつたので改築に決し、現在の地の東に新築中である等々である。その他臺北郵便局(北門側)臺北停車場(北門町)刑務所(福住町)守備隊司令部その他兵舎、臺北醫院赤十字社醫院の外、帝國大學高等學校高等商業學校を初め中等學校等數多あつて、恁うした官衙の建物が、他の大厦高樓の建物と共に、臺北市の街觀を雄大に美化することが尠くない。而してこれ等官廳に勤務する人々は、總督長官以下各局長各課長各獨立官衙長は勿論、高等官判任官囑託雇傭員まで數へたら、臺北市内でも非常の數に上るであらう、臺灣在住内地人の三分の二は官界に働く人々で、臺灣が官吏本位の地と云はれるのも無



理からぬことである。これが植民地の植民地たる所以であらう。それに官吏たる判任官以上は在勤加俸を受けるので、収入も尠くなく恩給年限も十年と云ふから結構であると云ふべしだ。但し最近減俸され加俸減の問題が懸案中で、甚だしく不安らしい、又た暑中休暇こそないが夏は六月から九月まで正午退廳、賜暇歸省もあると云ふのだ、民間の人々より悪くない待遇である。而も官吏は制服があつて、吉凶事にもこれで間に合ふし、禮装の金線入の帽や帶劍エボレットも立派なものである。その以前は線とボタンで勅奏判の階級が一目瞭然で、聊か不都合もあつたが、今は平素は一様の服裝だから判らない、但し警察官は別だし、議式の時の禮装の場合だけ判るのみだ。それよりも結構なのは官吏は官舎が給與されまた宿舍料が出るし、囑託雇傭員でも宿舍料が出る。これは或は新附の民たる臺灣人に對してか、内地の官吏に比して何となく權威を保ちたがるし、兎に角官僚臭いのが感ぜられる、尤も近時は時勢に應じ餘程大衆的になつたが、役人萬能の感を深からしむるものがある、植民地氣質の一つとも考へさせられる。然し今日では非常に形勢が一變し、進歩したのが官吏自身もその立場を自覺して、民衆に對して親切を



旨とすることをモットーとして働いて居る。官廳に勤務する人でも制服でない洋服や袴姿の和装のものは、囑託雇員連中で、これは本官ほど結構なものでないらしい、然しこれを望んで官廳へ奉職する人が多いのは官界萬能と見るべきであらう。殊に近頃は職業婦人の街頭進出のため、若い女性の官廳勤めが多く、お役所にお化粧した若い婦人の姿を見たが、男の中に交つて働く女性の優しい美しさは、お役所の空氣を色彩化して、臺灣にも新しい味が示されて居る、殊に臺北に於てこれが最も多いやうに思はれる。恁うした女性の服装、和服洋装色とりどりの美しさには、やわらかな感を官廳訪問の人々に與へて居る、もう年代も新しい昭和だ、臺灣の官場いや臺北の官界も、これに順應して非常に變遷して新味を帶ぶる色彩が濃厚になり、昔の殺風景な官界風俗は一寸見る由もなくなつてしまつた。いや／＼まだこれからも多々益々變遷して行くであらう。何しろ恁うした帶劍金線金ボタンの服装は、例の故後藤子爵が民政長官時代に出來たとかで、故子爵一流の遣方だと思はるゝが、その當時までは對臺灣人の關係上、或は恁うした事に及んだものだらうと推知する。だが今日は然う云ふことは必要はない、それほど臺灣は進



歩向上した、官界の空氣も異つて居る、阿呆塔下の口善惡ない廊下人の噂さに、人々は神經を尖らせる時代である。千九百三十一年式尖端を行く時代だ、官界も動き遷り行くのは當然過ぎる當然であると云ふべきだ、今の官吏と昔の官吏とは、その氣質その意氣に於て異なるに何の不思議があらう、だがまだ多くの官界人中には昔を夢見る者がなひではない、これも臺灣なればこそか。

減俸で収入減となり、加俸減に脅されながらまだ加俸がある官吏、お役人さんは結構であると云ふべきだ。戦後物價騰貴を原因として俸給令の改正で収入を増大したのであるから、不況に崇られる民間人よりは生活上大に樂だと申すべきであらう。加之官舎が給與されるか宿舍料を受けけるのだ、家賃を拂はずとも可いし、拂ふにしても宿舍料があるから大に助かると云ふものだ。臺北市内でも特別の官舎の官舎は城内以外にある、例へば鐵道部の如き泉町に、刑務所の如き福住町と云つた工合にあるが、多くは城内に在る。それは總督府勤務の人だが、近頃は廳舎の建築や官舎の城外移轉で、南門外に在る千歲町錦町にも多く見受けけるし、總督官邸は東門側文武町一丁目新公園とは道一つ距て



て東に三線道路、立派な建物で臺北を訪ぬる人は驚く位、最初は書院町今の高等法院長官舎の附近にあつたのが、明治三十二年起工同三十四年竣工し、工費二十二萬圓で二階建ルネサンス式の建物建坪四百七十坪階上の眺望頗る佳で、構内亦た廣濶純内地式の假山水を設け、頗る林泉の雅趣に富んだもの、大正二年工費十五萬圓で大改修を施し、別に日本屋が増設され、テニスコートもある、攝政宮を初め御來臺の各皇族方の御泊所となつた。長官官邸は總督府の前にある、その他局長の官舎や勅任官の官舎も立派な建物であるが、兒玉町に在る軍司令官の官邸も、新味の多い結構な立派な建物である。高等官の官舎は一軒建が一棟二軒建で、判任官のは一棟幾軒の長屋式のもの、俗に東門官舎と云ふ文武町の官舎は尤なるもので、この一帯も官舎街と云ふ街觀。その他にも官舎は大體集まつて建てられ同一型のものだから、其處にも官舎街が見られ、それと一廓を成して居る。この官舎も昔は本島式の官舎や其他の建物を充用し、内部を改造して居住したもので不便も甚しかつたが、漸次街衢を整理して官舎街が出来今日に及んで居る。而して舊來では今の榮町筋以北に商店街があり、それ以南は官舎學校その他が建てられ、従つ



て南門外の兒玉町通の商店町とは連絡が出来ず、城内の商店街も兒玉町通りの商店町も、この爲めに伸びることが困難となり、城内の官舎街を他に移したらどの聲を聞くことが久しい。而して臺北市内の居住内地人の大部分を占むる官廳勤務の人々、所謂お役人さんで官吏氣質もお役人さんの居宅街たる官舎街の風景も、年と共に臺灣の進展と時勢の變遷に伴ふて、過去三十有餘年間に、種々の變遷の著しさが見られる、恁うした著しい變遷は、今や大臺北市の出現を云々される時の勢と人の動きに對しても、當然過ぐる當然の歸着結果であると云ひ得やう。その昔領臺當初から暫くの間は、官舎が給與されたと云ひながら、それは臺灣人の家屋、主として清朝時代の官舎を充當したもので、而もその内部を日本人が居住し得るやうに改造し、疊や障子襖を用ひたもので、今日では一寸想像のつかぬ變態なもので、現在の官舎とは比較にならぬお粗末極まる不便なものであつたばかりか、その頃はまた臺灣その土地が、海遠い南の果ての離れ島、生蕃が暴れて首を馘り、ペストマラリヤの惡疫が猖獗を極むる、野蠻未開の地とされ、事情もよく知られて居ないから、官吏として渡臺したのは大體獨身と云ふ始末、妻子同伴のも



のはまだ少数と云つて可い位、然うであらう、女や子供は臺灣に行けるものか、臺灣に行くと云ふので水盃をしたと云ふ話、今から考へれば虚言のやうだが事實であつた。而もその頃臺灣に奉職する官吏やその他は、何れも血氣壯んなものか、一儲けと云つた連中や加俸に誘はれた連中で、幹部準幹部の高等官は、さすがに少壯有爲の士が選抜された人々であつたが、屬以下の連中は、何れも慙うした加俸がある、収入が可いであつて募集に應じた連中であつたから、妻子は内地に置いて單身赴任するのが多かつた。従つて給與された前記の如き官舎臺灣人家屋に改造を加へた屋内に獨身生活、従つて一家に二三人乃至四五人も同居して共同生治をやり、炊事は請負の仕出し辯當、全く家庭的なものでなく、殺風景を極めたものであつた。それに萬事が創設の際、人々は元氣に任せ、て可なり蠻勇的行動が行はれたもので、酒は飲む女を買ふと云つた事も盛であつた、これは當時の狀勢が然らしめたものとも思はれる。不馴な土地で不自由の生活、家庭的の温情味は全く缺如し、一步郊外に出れば、蕃人こそ出ないが土匪が横行するから危険で、一般に殺風景で、結局植民地氣質とか出稼根性とかを發揮したもので、懐に入る金はま



づ使つてしまふと云ふ有様、家庭的な女性が皆無なのとは、その生活が荒み行く一方であつた。それ故官舎風景も今日では夢想されぬ位、亂暴殺伐を極めたもので、白粉の女と云ふ正體も判らぬ賣笑婦が、休日の晝の官舎に姿を現はして、エロ氣分を發揮したものであつたし、日毎に見聞する出來事にも、可なりグロ的なのが多かつた。従つて到底今日見るが如き、家庭的な生活などは藥にしたくとも得られなかつた。夜更けての酔つた人聲、家の内から洩る、媚びた魔性の女の笑聲、さては臺灣人對手の怒鳴り聲等々、物騒なエログロ的な聲で、官舎街の夜が明ける状態であつた。それが開發進展に伴ひ、秩序も立ち、官舎も新しい日本式のもものが建ち、官舎街が出來ると、もう以前とは世相も大分變化して、妻を迎へる人も多く、所謂新家庭を持つ者が多くなり、内地のそれと同じに家々の交際も行はれ、官舎街の街頭に丸髻を結つたマダムの姿が現はれて、非常に落ちつきが見え、殺伐な氣が漸次消失してしまつた。而してこれは殺伐乾燥の官舎生活が生んだものの一つ、既に領臺當時如何して渡來したか、無論例の密航か、兎に角天草女が先陣をしてから、恁うした賤業婦の一味が可なり姿を現はして、盛に活動してエロ



氣分を發揮したもので、酒と女と楽しみを定めた官吏お役人さん、これ等の女も土地柄調法と云つて相手にし、馴染を重ねたものから、多い人々の中には、情意投合の結果、内地に妻ある人は勿論、然うでない人でも、内縁関係を結んで妻に迎へ、官舎に同棲したもので、この内縁の妻君は、臺灣に居る限りの妻君、島外に轉勤その他で退去するが最後もう他人で、基隆埠頭が涙の訣別場と云はれた灣妻がそれである。その當時基隆の出帆日には、この訣別の悲劇、涙のシーンが埠頭に演ぜられたもので、これも名物の一つであつたが、今はもう見るべきもなく、過去の事で唯だ話に聞くのみである。この灣妻が官舎に乗込んで奥さま顔に振舞つたが、無論素性が素性だけに、大部分は主婦としての働きもせず氣隨氣儘な振舞多く、三味の音もすれば酒に酔ふての狂態もあり、痴話喧嘩に官舎街を騒がしたものであつて、全く植民地氣質を遺憾なく發揮したのもの、主人のお役人さんも酒よ女とあつて料理屋も非常に繁昌したし、その他圍碁撞球の道樂を行はれたが、多數を占むる屬官以下の面々では、讀書なんかする人は變人扱にされたものであつた。然るに歳月を閲すると共に進展を見、文化が向上して、もう殺風景な植民地氣も



薄弱となり、一方眞面目な家庭が營まれる一方、灣妻は漸滅すると共に、恚うした生活が恥辱と云はれ、非難の聲が高まり、而も學校出身者が多くなつたから、遂に灣妻は自滅の悲運を見てしまつた。而して歲月を閲して二十年二十五年となると、もう生まれた娘も嫁に行くと言ふ工合で、若い新智識の人々が正式に結婚して家庭を營む者が多く、遂に今日見るが如く、内地のそれと異らぬ立派な家庭が見られ、和氣霽々の團樂に新時代の生活が續けられて行き、ピアノの音洩れ、新刊圖書雜誌が家々に見られるやうになつた。然しまだ臺灣には年寄の居る家が尠く、姑さんの姿も餘り多くないので、夫婦生活は親戚の尠いのと共に系累の煩がないから氣樂なものである。それにまだ何と云つても暢氣な土地柄、生活も内地よりは世智辛くないから夫婦は恵まれて居ると云つて可い殊に官吏には加俸があり、恩給も十年で受けられ、官舎や官舎料が貰へ、制服があり、夏は六月から十月まで正午退廳等々、恵まれたものである。而して變遷する官舎街景も昔の殺伐なことはなく、眞面目に紳士的になつたのは、時の勢人の動き進んだもので、文化の向上を示すと云つて可い。もう正月に酔つた禮装のお役人が正態もなく眠つて俥



に運ばれる姿や、屠蘇の機嫌で役人が喧嘩をしたり、佩劍で俵夫を威喝したりする光景は到頭見られず、全く過日の物語となつてしまつた。

減俸や加俸減で騒いだのは本家のお役人、官界の人々で、屬官連中も大活動をしたが、これまで他方面に比して懐工合が悪くないお役人さんが、と云つた一部の人士もあるが、不景氣の今日、恚うした問題で脅かされて悲鳴をあげたのは、まア仕方がないとしても、更にこの問題に就き我等の死活問題だとばかりに奮起したのは商人であつて、實際官吏の反對運動以上盛に活躍して、大に社會に訴へて氣勢を揚げた、而もこれは多數を占むる臺灣人側の商人ではなく、數に於ても尠い内地人側商人であつた。官界と内地人側商人、これはなかく密接極まる關係が兩者の間に存在して居るのである、と云つて一方が官廳關係だから、賣込とか入札とかのことと早合點してはならない、然ういふことも密接な關係があるのには相違ないが、減俸加俸で騒ぐに至つたのは對官吏の問題であつた。殊に臺北市内も城内の内地人側の商人が奮起運動を起したのは、この對官吏の問題が最も密接なものがあつたからで、臺北は他の地方に比して官吏の數が非常に多



いからで、臺北市の城内に在る内地側商人の影響打撃が、甚大であるからに他ならぬ。減俸や加俸減で精神を尖らし、商賣上の至大事件、彼等城内の内地人側商人、いや城内は殆んど内地人側商人だから、これ等の人々の商賣に影響したら、臺北に於ける内地人商店は自滅する、尠くとも不景氣が深刻化しつゝある今日更に衰退は免れぬと、反對運動に奮起したものである、考へればそれも無理もないことである。由來臺北に於ける商人は艋舺、大稻埕方面の商店は、何れも同方面の土着の臺灣人と近郊部落の臺灣人とを顧客にし、城内に多數を占むる内地人の商店は、近時臺灣人の顧客が多少あつてもそれは問題にならぬほどの少數で、在住内地人を顧客にして居るし、殊にその内地人の多數を占むる官界人、即ち官吏と官廳勤務の人竝にその家族を顧客とし、それに會社銀行通勤の人竝にその家族を加へ、大多數の顧客は内地人のサラリーマンとその家族である。恚うした關係なので城内の各商店でもお役人相手の商賣が重なので、従つて現金賣りよりも掛賣が常態で、以前は少し顔馴染になれば商人の方から『え、お拂は月給日てよろしう御座います』と云ひ、現金買の人は通り一遍の客で、寧ろ歓迎しない様子、



それに現金賣も掛賣も値段が同一であつた。今日でも時勢に伴ひ現金賣を歓迎する風にもなつたが、然しまだそれは眞に一少部分の商店で、大勢は依然たりである。これ畢竟官界人を重なる顧客とするからの結果であると云ふべく、これも土地柄己むを得ないことで、植民地の一色彩とも見得られやう。それ故内地人商店は内地人を顧客とし、殊に官界人を主たるものとするから友喰ひになると非難されるし、種々の點で行き詰らぬとも限らない、これが内地人側商人の反省熟慮を促られる所以である。何しろ臺北市内でも臺灣人側の商人は多數の土着人たる臺灣人を顧客とし、更に進んで彼特有の商戦術で内地人の顧客を求めやうと、孜孜として努力して居る一方、内地人側の商人は官廳や會社銀行の納入品を扱ふ外、多くの商人は多數を占むる官界人と他の俸給生活者を主な顧客として營業して居るから、農村の不況には臺灣人側商人の如く直接打撃は受けなが、これに反して官界の異動は忽ち反響すると云ふ次第、官人の収入減は購買力の減退となり、それが彼等内地人側の商店の商賣に影響することが甚だしく且つ速かである。この實證として毎年臺北市内の各商店の歳末大賣出しの景況如何は、官廳が支給する年末賞



與の多寡に依つて定まると云はれ、この歳末の賣出し景況も官廳が年末賞與を支給し、官界人がその賞與金を手にしない前は一向引き立たぬが、支給されたその夜からは忽ち城内の各街は賑ひ混雜を呈して、歳末賣出し氣分が横溢し、年の市らしい感が濃厚となつて來るのである。昨年未などは不景氣の聲喧しく緊縮が高唱され、城内の商店の如きも市況沈退したが、まだ官廳の年末賞與額が前年に比して少くなかつたので、歳暮の景氣も悪くなく、緊縮氣分で購買力が稍々鈍つたものの、可なり商品の賣行は活潑であつたと云ふことである。然し減俸があり、加俸減が問題になつたので、官界人も財布の口を緊めて居るから商店は何れも不景氣を嘆じて居る始末であるけれども、まだ官界人の懷合は悪くないから、減少を示しながらも相當賣行が見られて居るが、貴金屬品やその他高い贅澤品は頓と賣行不振で、日用必需品は相當好況を示して居るのが現況である。何せ植民地は何處でも然うだが、臺灣でも官界の力が動かないと何事も出來ないと云ふ位、官の指導獎勵に因つて開發された關係上、總てか官界の狀勢に支配されて居る。殊に官界人を顧客の主體として營業する臺北の内地人側商人が、官界人の懷合如何で商



品の賣行に影響を見るも當然であり、減俸や加俸減の問題で反對運動をするのも、自衛的の立場からの動きで、これも仕方がないと思はれる。かくの如く臺北の内地人商人は官界人と密接の關係があり、土地柄が然うさせて居るのであらうが、官界人の動き、お役人さんの力亦た大なるかなである。

建て聯ねられた官舎街、其處はお役人さんの塲である。同じ型の日本建の家が幾棟と並び、それが幾條の街衢を成して居る。而も同勤務先の人々が同一の場所に集まり住んで居る、其處に官舎街の街景が、幾多開展されて特色を見せる。官舎や社宅さては宿舍の生活は、うるさい面倒なものだと云ふ聲は、俸給生活者の間から屢々聞かされる言葉である。集合的生活にはそれごとく人その人に依つて異なるものがあり、私的生活は各自が思ひくに行ふから、善いこともあれば悪いこともある。而も口善惡がない男女は、何處にでも二人や三人は居て、それが悪いことは忽ち喋舌り散らす、噂さが生み評判が立つ、最近の言葉で云ふと、恚うした人々に依つて放送さるゝ事件が、噂や評判の本人に轉々して耳に入るから面倒となる、うるさいこと夥しい、殊に女の口は一層である。而も恚



うした放送に興味を持つ女、即ち奥さんが實に尠くないから困る。お互に近所の手前可然交際せずばならず、體面を保つ必要もある、井戸端會議は開かれずとも奥さんの往來は可なり頻繁である。それと云ふのも官舎住居の官人の妻君は概して氣樂なもので、主人公を役所へ送り出せば、退廳歸宅まで氣隨氣儘仕度い放題、多くは老人が居ないから暢氣なもの、主人の留守には用事を濟ませば寢やうとまゝよで、訪問か來客かそれも正式な四角張つたのは僅少で、大抵はお隣に遊びに行くか、先方から來るかで四方山の無駄話、それでなければ活花や盆景と云つたお稽古から、三味線琴の鳴物、遊び半分に日を送るのが多い、但し例外も尠くないのは勿論だが、親戚の人か少いたため、暢氣なもので氣樂な生活、官舎の奥さんは或意味では仕合者である。夜は主人公と散歩にも行かうし、芝居活動見物も悪くないと云ふ工合、衣服や裝身具も買ふし、流行ものを欲しがらる。主人公は主人公で勝手な私的生活に夜を過し、謠曲、圍碁の道樂や、晚酌に好心地になる、宴會に行くと云ふのである。女は何と云つても衣裝が生命、それに随分虚榮的色彩を有する奥さんも尠くないが、それで官舎は高等官判任官の階級的差別がある。



これは當然のことだが、官舎街には特に目立つが、それは餘り氣にしないから無事だが、官舎街の奥さん中には、その昔高等官のみが招待される總督官邸の夜會に、漸く招かれる光榮を有し、嬉しさの餘りに『妾も漸く宅が高等官になつて呉れましたね、總督さんの夜會に參られることになりました』と、近所を觸れ廻り呉服屋を呼んで大得意で衣裝の注文に及んだ古手の判任官の妻君があつて、同じ棟の判任官の妻君を憤慨させた、ナンセンス的の逸話がある。これなどは官舎街の氣分の一つと見られやう。今は此塵連中もなければ、一體に官舎街の各家庭も眞面目に家族團欒の美しさを見、新しい時代の空氣が此處に流れて、清く朗かな家庭に官舎街の街景が彩られて居る。眞面目なる主人主婦、善良な父母、これが今日の官舎街に於ける官舎の主體である。であるから賤しい女を引き入れたり、酒を飲んで亂痴氣騒ぎをしたのは灣妻と云ふものが、官舎で妻君然として奥さんと呼ばれた過去のことで、灣妻が滅失した今日はもう殺伐なことも、顰眉すること一つもなくなつてしまつた。唯だ灣妻の名残とも見るのは、臺灣では何處の家の人でも娘や年寄でない限り、女を奥さんと呼ぶことで、臺灣ほど奥さんが安賣さ



るゝ所はなからう。殊に臺灣人の商人は行商でも何でも、内地人の婦人を見れば、それが女中や賤業婦であらうが、立派な夫人であらうと、何でも彼でも一視同仁的に『奥さん！』と呼びかける、『奥さん空壕あるか……』と云つた工合だ、一寸馴れぬ人は驚く。

これは内縁を結んだ女即ち灣妻が、妻君として内地人の家に納まる、他からはそれらが正妻か否は判らない、然し表面は妻君だから『奥さん』と呼ぶ。恁う云つた工合で官舎街の人は何處の家の主婦でも奥さんと云つた。内地人の多數たる官界人の呼びなしが他にも移つて擴がつた一方、何も判らぬ臺灣人の商人やその他が『奥さん』と云つたもので、彼等は日本の婦人は奥さんと云ふのだと思つたらしい。それが今日まで呼ばれ、奥さんの安賣となつたので、ナンセンス然たる事だが、一寸面白味があると云ふべきであらう。臺灣に在住して居る限りの妻君たる灣妻は、素性や教養と云つた點やその他、妻としての資格等を探究の上迎へたのでなく、多くは所謂出來た仲と云ふのであるから、放縱な生活、主婦としての價値を云々するのが野暮の骨頂、迎へる男も一時限り、中には内地に正妻があり、子まであるのがあつた、それ故灣妻に子が生まれて問題になつた



ことも多いさうな。またどうせ基隆で生別と覺悟を最初から定めて居るので、伶俐な女は手内職、裁縫の賃仕事などをして臍繰金を溜めて、將來に備へた殊勝な働きをしたものもあつた。また灣妻であつたのが正妻になつたのもあるがこれ等は例外で、灣妻は植民地草創期の社會的産物の一つで、その當時の世相の一端が窺知される。何せ官舎街に居住する官界人、その多数を占むる屬僚は特別關係者以外は、植民地に出稼と云つた氣で渡來したもので、到底今日の官界人と種が異つて、下品で官僚的な下役人根性のものが多かつたから、これに附隨する家人も灣妻でないにしても眞面目な家庭は稀有、今日の所謂奥さま令夫人とは、同じ奥さんと呼ばれながら、總てに於いて雲泥の差があつた。もう今日の奥さまは修養ある主婦として、新時代の生活を營まれる立派な人々、正に文化の向上に伴ふ、女性であること云ひ得ることは決してお世辭ではない眞實で、進んだ世相の一つと喜んで居る。

### 活動する新聞雜誌界と筆の人



…日刊週刊紙と操觚界…新聞記者と雜誌記者…

市内刊行雜誌と刊行物…文筆の人と口の人…

社會の文運進展を見る一面には、言論界や操觚界の動きが存することを否定すること  
は出来ない。島の首都臺北の文運世相が今の如く進展その盛を致した一面には、臺北に  
於ける言論界操觚界の人々の盛なる動き、活躍が大なる力を致したことを否定すること  
は出来ない。臺北の地に新聞雜誌が刊行され、文運進展の上に資したのは無論領臺後のこ  
とで、渡來した内地人の操觚者即ち記者の筆の力であり、その他辯論に花を咲せて闘つ  
た言論界の猛者連の強い叫びであつた。而して新附の民たる干係以外、慙うした文明な  
る機關に就ての知識が低かつた臺灣人の中には、現今こそ新聞雜誌も刊行され、公開演  
説も盛に試みられるが、これ等は新知識の若い人々に過ぎないのだから、古い以前は彼  
等はこの方面に携はつたものはなかつた。領臺後既に明治二十九年六月には現在の臺灣  
日々新報の前身とも見るべき臺灣新報が創刊されたが、これが臺灣に於ける新聞發行の  
嚆矢である。而も最初は一週一回か二回であつたが、同年十月に日刊紙となつた。その



後臺灣日報が發刊され、臺北新聞や臺灣民報等が刊行され、互に筆戰華々しく盛に政治經濟社會各方面に互つて、激烈な評論を紙面に掲げて、随分思ひ切つた筆勢は屢々官憲の緯忌に觸れて發賣禁止や發行停止となつたもので、而も當時は記者として少壯氣銳の士が多く、何れも慷慨悲憤の面々は忌憚なく堂々と論陣を張つたもの、恁うした記者中には、なか／＼有名の人士が多く、後年言論界の雄として、或は文筆の人として天下に名を成した人が尠くなかつた。而してかくの如く賑つた新聞界もその間に種々變遷を見、日刊紙としては臺北に本社を置くものは現在の臺日紙のみであるが、同紙は明治三十一年五月に臺灣日報と臺灣新報發刊の上合併して生まれ今日に及んだのである。而してその他幾多の刊行新聞紙は、經營に可なり困難し、惡戰苦闘を續けつゝ、言論に筆紙に操觚界の使命を果すべく努力し、幾度官憲の緯忌に觸れ、發賣禁止や發行停止の厄に遭ひ遂に發刊を見たものであつて、その後新聞界に幾多の波瀾變遷を見、現在では日刊新聞として臺北に發刊されるのは臺灣日日新報のみで、その他は臺南新報、臺灣新聞の兩社が支局を置いて活動して居るが、島外即ち内地新聞の支局は大阪朝日大阪毎日を初め東



京大阪その他の地方の新聞も支局を設け駐在記者を置き、それごとく通信を行つて活動して居るが、大阪朝日の如きは、中等學校野球競技の豫選や關西寫生聯盟等の各方面の催物の外他の支局と共に活動寫眞の映畫上映等、大衆に向つて呼びかけて大に活動して居る。大阪毎日も都市選抜野球豫選や水上陸上の競技にも力を盡すのみか、大朝大毎兩支局共に各本社の計畫の下に社會的に有益の運動を行ひ、他の支局に勝さる活動は著しい。その他電報通信社の支局があつて、内地からの電報通信に島内新聞に材料を供給してニユース種を賑はして居るし、臺灣通信社もある。而して週刊紙は、何れもこれ等の多くは最初は月刊の雜誌が更に進んで週刊紙となつたもので、成功したのは臺灣經世新報が第一で、随分思ひ切つた論鋒を各方面に向け活動し、新聞紙の使命を果し進展に幾多の貢献をし、もう可なり古く十有餘年間續刊して有力なものとなり、發行部數も多い。南日本新報も南瀛新報も何れも週刊紙でこれ等も凱々たる論陣を張つて氣勢を擧げ、各方面に就き批判の筆を振つて居る。その他基隆に最初發刊して臺北に移つた新高新報もなか／＼盛に活動し、時々政談演說會を開いて社會人の上に呼びかけて居る。昭和新聞は



本島人の週刊紙である。而して新聞記者たる操觚界の人々は、これも時勢の變遷に伴つてそれ／＼異動のあつたのは當然であるが、以前は血氣旺盛な豪傑肌の人も多く、經世家を以て自任し、所謂天下の木鐸と云つた意氣で、無冠の帝王として社會に活動し、人々を呼びかけたもので、元氣横溢であつたことは、その當時の各紙面を見ると判るが、何せ世間一體が殺伐の氣に滿された時だし、今日の如く社會の秩序整然としても居ず、丁度明治初葉から中葉に於ける日本のそれに類した觀があつたから、操觚者たる人も時流に掉して天下の公器を活用して、堂々の論陣に萬丈の氣を吐き、文戰亦た華々しかつたものであつた。今日では新智識の所謂新人が記者として手腕を示し各方面に動き、尖端的の行動はスピード時代に適しい活躍振を示して居る一方、人間が襁健で、惡徳記者も尠くなつて來た。従つて今日の紙面と以前の紙面とを對比すると、其處に記者その人の上が窺はれて、その變遷が面白いものである。而して内地新聞の臺北市内に於ける讀者の狀勢は何と云つても土地柄、臺灣は關西人が多い、即ち名古屋以西の人々が多數を占めて居るから、關西地方に堅固の地盤を有する大阪朝日が臺北市内に於ける讀者が最も



多く次位は大阪毎日である。その他は福岡日々位で、關東方面即ち東京のは、時事中外商業が多いが、これは實業界方面に多く讀者を有して居ると云つた工合で、その餘は云ふほどの數でない。而して臺灣日々新報は或方面では御用紙とさへ云はれる、府報州報市報の附録があるからでもあらう。市内では大抵の家々に配達され可なりの發行高を示して居るが、最近減俸の影響もあつたが不況の打撃が配達を稍減じたらしく、定價は高いと非難されて居たのが、島内三新聞は何れも低減したが、一方官界人の多數は官廳の分で間に合はず連中も尠くないとか、これも不景氣緊縮の世の中なるが故であらう。

文筆に依つて活動する新聞や雑誌記者は、日刊紙や週刊紙や雑誌と可なり多數に上るが、これ等の人々は以前は既述の如く、記者の氣質は可なり放膽な、元氣横溢血氣な人々であつて、記者としての品位も相當立派で、態面も保たれて居たが、中には所謂惡徳記者の類も尠くなかつた。而して此等の人々は正々の筆陣を張り、忌憚なく各方面に互つて是々非々の議論は堂々たるもので、男性的の愛すべきものがあつたし、恚うした人々の中から後年知名の言論界文壇の人士が出た位であつたから、文章も立派で今日の如



き文體でなく、漢文言調の明治文壇のそれに見るものであつた。それも時勢の變遷に伴ひ、新舊人の新陳代謝は記者としての氣質も一變し、所謂新人の活躍を見、若きモダンな書き振りは現代に適し、新聞や雑誌の記事は全く一新したと云つて可い位になつた。而も臺灣産業の進展の結果、經濟方面の記事や論説も多く、ニュースも重要されるやうになり、經濟記者にも立派な具眼の人も尠くない位に進んだ。新聞記者氣質としても若い新人に依つて造られた新味のもので、以前の如く豪傑肌と云ふより紳士的態度と云つた傾向が著しく、惡徳記者も漸次減少して、今では極少數になつて來た、これも時代の動きの一つであらう。殊に文化向上して世界的になつた世態は臺灣でも然うで、臺北の如きも外人の往來も多く、新聞記者としても對外關係の記事も重要となり、外人對手に對話も出来る人が多いのも頼母しいことである。而も今日では唯だ單に政治經濟社會のみに限らず、各方面に互つて活動せざるを得ない時勢なので、新聞記者にも運動方面、科學方面、さては家庭婦人の方面と云つた新しい方面の記事が必要とされて居るので、この方面の擔當記者を見、婦人記者も以前からもないではなかつたが、成功しなつた



が、近頃では相當活動して居る婦人記者が居るさうな、これは嬉しいことである。而して何と云つても新聞や雑誌の勞力は大きなものであるので、これと提携して種々の催物が行はれる。即ち後援の名の下に行はれるが、社會と密接の交渉關係がある新聞としては善良なるものを後援成功せしめるに努めて居るから、新聞社や雑誌社の仕事も、單に報導すべき記事を得て編輯刊行する以外、恚うした事や社自身主催の場合もあるので、記者もこれに關聯して、一層多忙に奔走せねばならぬことになり、一管の筆を以て經世的論議や批判や報導記事を書くだけでは使命が果し得られなくなり、社會人をリードするのだから、活動も骨が折れるが面白味もあると云ふもの、無冠の帝王と構へ込むわけには行かなくなつた。従つて修養のある人が必要である、新人で確實眞面目に働く人が記者として認められるから、現在の記者は何れも恚うした、若き新人が活躍して居ると云ふものである。ところがこれは單に臺北否臺灣、それに限らず何處でも然うだが、新聞雑誌記者としてその實筆を執らず、廣告募集やその他圖書の賣捌方など行ふ、名に背した連中が居る、尤も内地の新聞や雑誌にはそれごとく各社に於て採訪と云つて所謂俗に種



取りと云ふのがあつた。これは新聞や雑誌の記者の名刺を持つて働く、編輯局員の一人だが、記事を書く文筆の人でない、材料の供給のみを擔當する連中である。臺北の臺日社ではこの探訪は置かず、記者が自ら奔走して探訪し記事を書いて居る、恐らく他の支局も然うである。だから名刺に記者としてある人は記事を書く名實共に記者なのだが、前記の連中が可なり多い、殊に小さな新聞と銘を打つたものに、恁う云ふのが多いから、よく問題を惹起する。恁う云ふ連中は、廣告募集の廣告取り即ち外交員なのだから無論一篇の文章も書き得ないのである。然し新聞や雑誌の記者の名刺は、彼等の仕事の上に功果が極めて多大なので、且つ同じ社員なので、便利上これを振り廻すので、新聞記者或は雑誌記者と云ふ名刺を出す人でも、眞正の所謂記者だか否やは、一寸素人には判らない、悉く新聞や雑誌の記者と見る、これは名刺が既に然うなので當然である。然るに事實仕事は廣告募集員だから驚く、これ等は新聞記者の名を籍る、甚だ面白くない事實だが、現在それが多い、而も廣告募集して歩合を貰ふて生活するのだから、無論學問も修養もない、常識が發達したのは上の上である、であるから新聞記者としての態面とか



言語舉動とかに關心しないのも多く、これが爲めに眞の記者は迷惑し、一般人も新聞や雑誌記者を、無冠帝王社會の木鐸とも思はず、厄介視し難物視して敬遠する傾向があるので、品位を傷けられること多い、而も屢々恚う云ふ連中には、甚だ悲しく忌むべき犯罪や裁判沙汰を見るので、いよ／＼新聞記者が、一般世人から嫌はれることは、惡徳記者のそれと同一である。然し大きな新聞は然うでもないが、小さな新聞即ち週刊紙や新聞の名を附した雑誌的刊行物や雑誌には廣告が唯一大なる財源なので、切にこの種の廣告募集員を使ふし、その多くの中には新聞記者と云つて動くのが尠くないから、小新聞の恚う云ふ行動が、新聞雑誌界に惡影響を來すこと夥しく、世人は厄介視して居る。然しながらこれも一職業であり、職業上の一手段として、これを選ぶのだから、なか／＼絶廢する所が一向數に於て減退せず、なか／＼目に立つて居る。殊にこの例は多くの新聞の名を附けた雑誌的刊行や雑誌中には、記事は眞の添物で、廣告掲載を主要とするのが尠くないので、なか／＼この手段が行はれる一方、廣告の勧誘を受けて迷惑する人や商店が可なり多いが、これは臺北のみでなく何處も同じだが感心されぬものである。況



んや新聞雜誌記者にあらざるに、記者たりと云ふ人が多く活動して廣告を募集するの  
で、眞の新聞雜誌記者には氣の毒である。

臺北市内には可なり多くの雜誌が刊行される。月刊や年刊さては隔月とか三月に一回  
とか、刊行度数も種々雑多であり、その種類も學術文藝經濟教育その他各方面に互つて  
居るし、専門家の研究發表に依るものや、文藝もの教育機關のもの等々で、その數も多  
く且つ又た廢刊創刊屢次にして、變遷興廢が可なり頻繁である。而も新聞紙條例に依ら  
ぬ刊行物なので、時事に互る記事は登載を禁止されて居るが、この中では保證金を納め、  
新聞紙條例に依るものもある。臺北では領臺後可なり多數の雜誌が刊行され、廢刊となつ  
たもので、その雜誌も各方面に互つたのは勿論だが、隨分思ひ切つて統治に就て論戦し  
たのもあり、發賣禁止や發行停止に遭つたものであるが、それ故かなかゝ活氣があつ  
た。既に領臺後明治二十九年六月に臺灣産業雜誌が創刊され、臺灣政報高山國臺灣民報  
等が續いて刊行されて居た、その後は種々の雜誌が刊行されて、臺灣政誌や臺灣めざま  
し、花柳雜誌おめでた誌等もあつた、爾來幾多の雜誌は刊行される一方、各官廳でも機



關雜誌が刊行され、これは多く會員組織であつたが、廣く會員外にも販賣したもののも尠くなかつたが、一時は總督府内の官廳で、可なり多くの雜誌の刊行されたばかりか、臺灣協會とか愛國婦人會とか云つた團體も、機關雜誌を刊行して居たが、恁うした官廳關係の雜誌は、主として官吏に依つて編輯され、發行事務が扱はれ、制服の記者が活動したものであつた、而してこれ等の雜誌にも廣告が掲載されたから一寸妙だ。而して現在でも、臺法月報、臺灣教育、臺灣之産業組合、臺灣警察時報、臺灣鐵道、臺灣遞信協會雜誌、專賣通信、まこと、臺灣社會事業之友、臺北州時報、臺灣時報、なか／＼數多に上つて居る。その他民間の發行雜誌は硬軟それ／＼各方面の雜誌が多く、それに帝國大學の開校以來、同大學の教授を中心とした學術専門の研究雜誌が刊行されて大に貢獻する所がある。而して文藝雜誌は餘り振はないが二三あるし、和歌俳句雜誌も刊行されて居る。これ等の雜誌は經營も困難だが眞面目に活動して、斯道に精進して居るが、前記の如く廣告を主としたのも可なり多い、これ等は雜誌とは名のみで、記事の讀むべきものがない、又た小公學校やその他各學校でもそれ／＼機關雜誌とも云ふべき雜誌が刊行されて居



る。而して臺北に於ても、なか／＼多數の雜誌の刊行を見る一方、内地刊行の雜誌が盛に讀まれるやうになつた。これは一面に文化の向上を示し、眞面目な人々が多くなつたからで、昔は讀書と云ふのは一部人士に限られ、多くは私的時間は酒か女か圍碁將碁撞球その他の娛樂に過したものであつたが、時勢が進むに伴ひ、讀書力を増したのは事實で、従つて雜誌が盛に讀まれるやうになつた。昔は官舎に行くと體裁に太陽位を卓上に置いてあつたものである、だが今は然うでない、書店に夥しい新刊雜誌が陳列され、盛に賣られて居る。殊に婦人向の雜誌の多く讀まれるのは近年のことである、これは眞面目な家庭が多く、婦人の讀書力が進んだ結果で、何處の家庭にも婦人雜誌の一冊二冊見ないことがない位だ。又た兒童向の雜誌も非常に盛に讀まれる。加之臺灣人の方面でも教育の進展と國語の普及との結果、多く内地の雜誌が讀まれて來た、然しまだ一般でなく、多くは支那からのそれだが、若い人や兒童は盛に内地の雜誌を讀んで居て、而も立派に理解して居る。而して婦人雜誌が最多く讀者があるが、次には娛樂的のもので、難しい専門的のものは、餘り多くの人々に讀まれない、兒童向の雜誌は可なり多く讀まれ



るが、臺灣では到底匹敵してあゝ云ふ立派な雑誌は刊行出來ず、刊行しても永續しない、また外國雑誌は、眞に極小部分の人士に限られて居るのみである。刊行物即ち單行本は領臺前にも可なり刊行され、有益な資料となるべき文献も尠くないが、何れも多くは官廳の刊行に係るもので、かの臺灣府志とか淡水廳志とか云ふ、郷土的のもの即ち風土記に類した書籍やその他幾多の刊行物が、今日古文書として珍重されて居るが、その他個人の著書も尠くない、然しこれ等は主として詩文の類である、而も當時統治の中樞地は臺灣府のあつた今の臺南であつたし、臺北は文化の進歩はこれに比して劣つて居たから、恚うした刊行物は尠かつた。而もこれ等の古文書は、何しろ刊行以來、可なり長い歲月を閲して居る一方、内亂多く兵燹の厄にも屢々遭つたらうし、領臺當初の戦亂等で散逸してしまつたものが多く、現在では容易に私人の手には勿論入れ難く、官廳の力でも一寸入手が困難と云ふ状態であるから、現在督府圖書館に收藏されて居る、これ等の古文書は眞に至寶と云つても差支なく、これが蒐集收藏に絶えず努力を拂つて居る、圖書館當事者の盡力を大に感謝するものである。領臺後は官廳側の刊行物が最も多く、督



府の手に依つて、各種の調査研究が、産業方面に教育方面に、その他各方面に互つて、費用を惜まず、産業法制教育交通治安理蕃と云つた工合に、これが進展開發に資すべく、その調査研究が發表され、印刷に附して頒布されたもので、この功果が今日の進展振を見るに至つたと云つて可い。何でも領臺後に統計書が刊行されたのが最初と云はれて居る。かの舊慣調査會で刊行された各種の調査報告書の如きは、廣翰なものだが、立派な著述たるを失はないが、中央研究所の今でも絶えず發表される報告書も一權威である。と云つて可い、その他各官廳でもそれ／＼隨時調査研究の結果が發表刊行されて居るから、その數は蓋し非常に夥しいものである。加之經濟調査に就いては、臺灣銀行から發表刊行された數多の刊行物は、權威あるものが多く、何れも好資料として重要視されたものである。尙各種の團體即ち組合銀行會社協會等からも、好資料と見るべきものが發表刊行された。而してこれ等の編輯執筆者は、何れも非常の努力を以て調査研究した人々で、その中には有名な學者や博士さては斯道權威者の手に成つたものが尠くない、そしてこれ等の刊行物は、多く無料で篤志家の希望に依り、或は斯道關係者に、それ／＼頒



布寄贈したものであつたが、多くの刊行物中には、實費頒布や定價を附して廣く一般に賣捌いたものもある。民間に於ても領臺後は個人や團體等で刊行した圖書も尠くなく、亦たその筋から發賣禁止の命を受けたものもある。民間刊行のものは、學術的專問の研究調査よりも一般的なものが多く、殊に特殊の事件、例へば鶴駕行啓に關した事や、その他種々の場合に起つた事件に就いてと云つた工合に、或事件に就ての出版物は、同様のものが多く見ることがあつた、而も臺灣事情の紹介的刊行物は大小多種に及んで居る。然し文藝物の刊行物は、比較的少數であるのは、まだ作家として優地位の人が少いからか、これは寧ろ將來を期待せねばなるまい。臺北が領臺後統治の中樞地となり、中央部が臺北にあるから、官廳側の刊行物も臺北に於て多く刊行されたのは當然である以外、内地人の在住者も多く、その他の原因から民間刊行物も臺北で刊行されたのが多く、他の地方のは尠い。而して内地からの刊行物即ち單行本は、悉く臺北市内の書肆でこれを見る事が出来るし、新聞廣告の力が讀者を誘ふことが多い當世であるから、新刊もので一寸評判の好いものは飛ぶやうに賣れる。而も大衆文藝物や肩の凝らない圖書が、研



究發表的な堅いものよりも遙に多數で勢よく賣られる。臺北市内には城内に、新高堂文  
 明堂杉田書店太陽堂等々大小の書店には、若い人々が店頭で新刊物を物色して居るのが、  
 最近著しく目について來たが、古本は餘り賣れないらしい。大稻埕に行くと、支那も上  
 海で刊行された書籍が多く讀まれるが、これはその筋の嚴重なる檢閲後賣られて居るさ  
 うで、若い新人間には内臺人共に思想問題や哲學や科學と云つた眞面目な、學問的のも  
 のが歡迎され、臺灣人間にも内地の刊行本が、漸次多く讀まれつゝある。恁う云ふ工合  
 で、内地や上海等で刊行された書籍が、盛に讀まれ賣られるが、臺灣殊に臺北で多く内  
 地人を對手にする刊行物が、可なり年々多く見られる。而してこれ等刊行物も種類が多  
 く、眞面目な研究の發表もあれば、賣らんがための著述も尠くない、而も對手たる讀者  
 は然う多くななく、發行部數もまづ千部が最上であるさうな、従つて印刷その他の費用上  
 から、定價が恐しく高い、内地とは部數が雲泥の差があるとは云へ、値打から云ふと高  
 々五六十錢のものが、五圓とか六圓とかの定價であるから驚く。それで新聞廣告や書肆  
 の店頭のビラやポスターを用ひずに、著者や發行所の關係者即ち外交員が販賣運動、購



讀勸誘に奔走し、一種の押かけ賣付けに及ぶので購讀者は著作者へ義理、運動員の煩い交渉に避易して、讀むのでなく買ふと云ふ調子、内地の如き方法では一冊だつて賣られない、だから極端に云ふと、臺灣の刊行物は買はれて卓上に置くのみで多く讀まれず、著者や發行者は賣れば可い、それで生活が出來るとか、原稿料になると云ふ位、それ故愚にもつかぬ書籍の刊行されることが夥しい。甚だしいのになると、著書に廣告を挿入して居る、これは廣告を勸誘募集してそれで主要の費用たる印刷費を拂ふのみか、その中から幾分利得しやうと云ふので、廣告料目的のも尠くない賣文の弊と云はうか、土地柄が然うさせたと云へばそれまであるが、これを聞いたら内地の著述家は呆れるであらう。たがら内地が不況で出版界が恐慌しても、臺灣は一向影響なく、刊行物は大小隨時に可なり多く見られるが、最近は中等學校の入學難が喧しくなつた結果、これ等の受驗用の参考書が著しく刊行され、何れも歡迎され非常な勢を示して居るのも、時勢の動きの一つとも思はれる。而して臺北も所謂ブックメーカーが相當居て、兎に角生活して居るが、内地の如く競争がないから好都合であると云はれて居る。



これも社會人である筆の人、即ち文筆を以て衣食する人々は、臺北にも相當多いが、これにも變遷の幾多があり、舊人新人とその時に従つて異なる活動振を見て居ることは、何處も同様である、筆の人でも新聞雜誌記者がその主なるものだが、この操觚界の人で記者としてのみでなく、文筆を以て一方に雄たる人は、昔は相當あつて、詩文にその才能を認められ、やがては廣い意味の日本文壇に名を致したものが尠くなかつたが、今では然う云ふ人はない、これは若き新しい人々で、將來を有するが故であらう。記者以外の文筆の人は督府内の各局に、それごとく達文の士が、以前ほどは居ないが、相當居ても式辭や祝文を草したり何かして居るが、これ等は何れかと云ふと老人に近い連中で漢文の素養はあるが、歐文は若手の方の人が多い。その他には所謂著述家と云ふ、例のブックメイカーの連中で、たい筆が達者で書物を著すことの出来る人で、この連中には研究もせず、唯だ書く文句を竝べる類もある。然し本職以外に調査研究を發表する人もなか／＼名文の士があるから嬉しい限りである。その他詩文に達する人は内地人のみでなく臺灣人にも多く、これ等臺灣人は學者と尊敬されて居るが、内地語も相當に話す、



何れも舊國語學校を卒業した連中に多い。而も臺灣人にしてよく邦文を綴る者も尠くな  
く、和歌や俳句をすする者が漸く多くなつて來た、これ等は何れも職業的の文筆人ではな  
いが、達文の人と云ふ部類が屬する人である。恁う云ふ人は、よく雜誌や新聞に寄稿す  
るが、發表した文には、なか／＼氣のきいた、新味のあるものが見受けられる、但し翻譯  
する人は餘り多くないやうである。それから近年は言論界が漸く盛になり、演壇上に  
立つ人も多いが、それは辯護士と操觚者が重なるもので、政談演說會も時々開かれて、  
時事問題の批判に氣焰を吐いて居ることが屢々ある。然し以前領臺後即ち明治三十二三  
年頃から六七年間は、この政談演說會が盛に催され、操觚者は辯護士と共に演壇に立ち、  
臺政の批判やら社會問題の是非を大に論じ高唱して氣焰を吐いて、聽衆を唸らしたも  
のださうだが、それもその後には中絶の姿となつて、久しく音沙汰がなかつたが、近時漸  
く社會問題が各方面に論議され、輿論を喚起する運動も見るとなつた結果、操觚者  
が先頭に立ち、演壇人となり辯護士の一部人士が加はり、政談演說會とか社會時事批判  
講演會とが、よく開催されて大衆に呼びかけることが多くなつた。筆の人が口の人にな



つたわけだが、筆は口に役に立たぬ連中も多少は見受けるのも無理はないが、雄辯術の書物位一度は讀んだらと思はれることがある。以前操觚者で演壇の人であつたのが、今は衆議院に議席を占めて居るのもあるが、今後とも恚う云ふ政論家も輩出することと思ふ。殊に大稻埕や艋舺では、例の文化協會の一味やその他新しい人々は、若人の血氣に辯論を行つて、左傾的運動をしては、演說會を開きよく解散をその筋から喰つて居るし、その他この以外に穩健な社會政治の運動に演壇人となつて動いて居る、若い新しい臺灣人も尠くないのも、進展した世相の一端を語るものと思はれる。然しまだ臺灣は變態の自治制こそ施行されて居るが、選良を議會に送ることも出來ず、政黨の論戰も見られないから、口の人としての活動は、目醒しいものがないのも當然で、植民地として多數の新附の民を有し、而もそれ等がまだ文化や生活の程度が、内地人のそれに比して概括的に低下して居るから、今直に選舉法が布れ代議士を議會に送る事も不可能で、それは遠き將來を期せねばならないから、言論界も相當活躍して居るが、まだ文筆に依らねばならぬ故演壇から呼びかけるには尙早の感があり、口の人も徐々に進まずばなるま



いと思はれる。泥んや突飛な言論を弄して大衆に呼びかける、左翼派的の辯論運動は、大に彈壓の要が時にあると思はれる。勞働デーのデモなんか、内地のを徒に真似て得々たるやうな時代には、口の人呼びかける力はまだ大ききものでない、而も百害あつて一利なしであるから、恁う云ふ連中は特に猛省すべく、内地人にして口の人たるものは、この意味からして、この點に留意して、彼等の反響をも考慮に入れて行動するのは、必要が、多々あることを痛感するのである。而して口の人としての辯護士は、臺北には裁判所たる法院がある、その制度も二審制三審制と變更し、今は高等地方の兩法院があり、司直官としては判官檢察官があるから、辯護士數も臺北が多い。而して臺灣には灣辯と云はるゝ、代言人から辯護士資格を認められ、臺灣のみで辯護士開業が出来るのがあつた外、辯護士資格を取得したのもあつて、臺北辯護士會が組織され、法律事務を扱つて居る。現今は灣辯は減退したが、以前は相當多數で、而も健訟の弊ある臺灣人を對手に、隨分所得が多かつたから、なか／＼羽振を利かせて隆々たる勢を示したもので、社會的地位も好い方を占めて居た、然し時勢は變轉して昔日の如くない。而して辯護士は



多く大稻埕に事務所を設けたものだが、城内その他にも居た、現今では大稻埕が多数を占めて、この界限に行く辯護士事務所の看板の多いのが目につく。何しろ人数も多く、健訟の弊がある、臺灣人の居住地が、業務上有利なのは明白だから、この傾向が見られるが、城内にも多少ありその他にも一二軒ある。ところで數も尠くないが、辯護士でも灣辯は古くから開業し、相當潜勢力を有する人が現存して居るから別として、その以外では多く判官か檢察官の退官開業したのが多い、殊に在職中好評の人は大に流行で繁昌すると云ふことである。けれどもその他辯護士試験に合格した人や、大學を出た連中でも、それ／＼門戸を張つて活動して居る、何のことはない、官立病院や赤十字病院で好評を得た醫者が、開業して繁昌すると同一で、多く繁昌して居る辯護士は、以前の經歷や前職の時代に好評なのが多いと云はれて居る。臺灣人の判官郡守、さては府や州の事務官がある世の中、辯護士があるに不思議がなく、彼等は帝大出身か試験合格者で、立派に辯護士となつた人は、可なり繁昌して居ると云ふことだが、成功謝金不拂で問題がよく起る時節柄、辯護士も以前の如く好いものでもないらしい、但し各銀行會社の



法律顧問を引受けて居る人も多いし、以前の如くでないにしても、立派に門戸を張り、通譯事務員を使ひ、何れも態面を保つて居るから、不況には相當打撃を受けて居るにしても、他の商賣よりは悪くはあるまい、而も時々辯護界から政界に乗出し、衆議院の議席を占める人もあるから、口の人としては結構であると云つて可いだらう。

### 臺北の公共團體と社交の團體

…主な公共團體と婦人團體：日本赤十字と愛國婦人…

鐵道ホテルと臺北驛頭…内臺人の社交振と内臺人融和

臺北を天地に活き動く人々、内地人も臺灣人も、何れも大にしては邦家社會人類のため祝福を祈り精進し、小にしては我家我身に多祥多福を希ふて努力し。其處に各種の方面に於て、恁うした意味の上から、所謂國利民福社會の幸運を圖り、進展すべく公共團體が幾多創設されて居るのである。領臺前の臺北には、今日の公共團體とは全然趣を異つたものがあり、富豪名家の人々が中心となり、救世濟民的の行爲を實行する目的で



資を投じた共同的事業が企畫實行されたが、けれども組織的に完備したものでも無論なく、隨時事變に應じての活動が主で、定時の世話を要したものは多くなかつた、その故であらうか、長い歲月の間に幾變遷が免れず、従つてその多くは形式に流れ、充分効果を奏し得なかつたから、自然に衰退して離散したのが大部分、片影を止めたのは、篤志の人の手で僅かに存續して居たに過ぎない。その所謂公共團體と云ふのは領臺以後のことで、内地人に依つて組織され活動を見るに至つたものであるが、その臺灣人側のもものは、内地人に倣つて後れて、臺灣人中の先覺者乃至有識者の力に依り、主唱の下に設立を見、活動することになつたのである。領臺直後には、治安維持やら騷擾に對する自衛等々の目的で、保良局と云つた自衛團が組織されたが、それも世情平穩に歸したので無用となつて解散した。内地人間で公共團體とも見るべきものは、明治三十一年十月漸次渡來居住する内地人の増加に伴ひ、これに關する公共團體の必要を認めて、内地人組合を設立し、在臺北の内地人の戸口や衛生その他公共的事務を處辨したが、これはその後幾變遷を見て、中央公會と云ふ名の下に各街の團體が、それ／＼各自の公共的事務を處理



し、中央公會は總括して居たので、臺北に於ける團體の公共的行事は、中央公會の名に依つて行はれたが、大正九年市制實施を見るに及んで、中央公會は解散して現在の如く各町に於て町内會が組織され、市民を中心とする公共的各種の行事が處理されて居て、大同、本町、京和、府後、城東、大成、西門、八甲、若竹、元園の各會と南門新起新富の三公會の十四を算する外、艋舺や大稻埕にも、恁うした公會がそれ〴〵設置して、公共團體として市を中心に活動して居る。而して更に臺北に本據を置く公共的の團體とも見るべきは、日本赤十字社と愛國婦人會の二支部があり、多數の社員會員を有して、使命を果すべくそれ〴〵動いて居る。而してこれも公共團體と見るべきだらう、各種同業組合も領臺後、内地人や臺灣人に設立され、それも幾多の變遷を経て、今日では臺北商工會、臺北實業會、臺北商業會、臺北銀行集合所、臺灣茶商公會、臺北鑛業會、臺灣正米市場組合、臺灣米穀移出同業組合、臺灣運輸業組合本部、臺灣土木協會、臺灣物產聯合協會等、各方面に團體が設立されて大に活動して居るが、この他にも臺北辨護士會、臺北醫師會、臺北齒科醫會、臺北米商組合、臺北粳摺同業組合、臺北吳服商組合があり、臺北農會瑠公水



利組合、臺灣中華會館總本部、臺北漢藥商組合、臺北鍼灸按摩營業組合、臺北材木商組合、臺北旅人宿營業組合、臺北地方法院司法代書人會、臺北保險協會、臺北紙文房具商組合、臺北煙草賣捌人組合、臺灣酒類賣捌人組合、臺北時計商工組合、臺北度量衡器販賣業組合、臺北履物商組合、臺北製靴業同志會、臺北壘商組合、臺北雜貨商組合、臺灣書籍商組合、臺北質屋組合、臺北菓子商組合、臺北浴場營業組合等の商人の各組合があつて、その數多く以上はその主なるものである。この他臺北人力車營業組合、臺北理髮營業組合が各南北にあり、臺北料理屋組合、艋舺貸座敷組合、臺北大稻埕艋舺共立の各檢番もあるし、臺北花道會も組織されて居て、各自その發達と繁榮とを期し團結を圖つて居る、尙督府内にも臺灣社會事業協會や臺灣教育會、臺灣警察協會その他各種の協會や何々會と云つた各種の團體が組織されて、それ〴〵活動して居る一方、購買組合や信用購買組合、建築信用購買利用組合等が組織されて、その目的を達すべく努めて居る。

その他内地人間には、遠く故郷を離れた地に活動すると、故郷に對する愛着心、即ち愛郷心と云はうか、郷土愛が強くなるのが我等日本民族の美しい感情だが、日本人のみ



でない世界の人に共通なことだが、在臺内地人間にこれが著しくあるのを認められ、従つて同縣同郷の人と聞けば、お互に懐しく親しみが出る、恁う云ふ意味から、臺灣は到る所に縣人會があつて、年に多きは二三回少きは一回位同は縣人が會合して、相融和し懇親を結んであるが、これは臺北に於ても盛に見られる、同縣人の美しい會合である。

而してこれも時勢に伴ひ、以前は主人公のみが、宴會をして懇親を結んだものが、家族會を催して家族と共に、老若男女共々に、或は觀劇に遊戯に娛樂に、一日を朗かに清く遊び楽しく暮らすやうになつて、縣人會の意義が一層好ましくなつた、恁うした事は臺灣の如き地に於て見られる有益な美しい行事で、内地では想像されぬ樂しさが示される。

この縣人會は、これも時に消長盛衰はあるが、現在では江戸ッ兒會、神奈川、埼玉、栃木、群馬、三重、静岡、福島、岩手、青森、富山、鳥取、奈良、岡山、山口、徳島、香川、愛媛、兵庫、長崎、福岡、大分、佐賀、熊本、宮崎、鹿兒島、沖繩の各縣人會と、千葉縣人溫知會、茨城縣人懇和會、越佐會、仙臺同郷會、尾張人共和會、三河郷友會、山梨縣人郷友會、岐阜、福井、島根の名縣郷友會、信濃會、土佐會、山形縣懇和會、加



越能郷友會、滋賀好友會、廣島縣同志會等四十四の縣人會があり、各事務所を設け會務を處理し、縣人の貧困者には保護救濟を致し、旅費を給して歸還せしむることも夥しいが、一方郷人の吉凶慶弔には會としてこれを祝ひ弔ひ、殊に葬送には擧つて會葬し萬般の世話をして居るが、臺灣神社の境内に石燈籠を各會が獻納し、見るからに美しい。その他勞働問題が擡頭して以來、既設の内地人勞働者組合以外、臺灣人も多く各種の勞働者組合が設立し、彼等はよく爭議を起し運動して騒かせて居る。而して婦人の團體としては多くなき、かの臺灣婦人慈善會は北投に無名庵、臺北に南菜園と云ふ建物を管理し、救恤事業に盡して居るが、華々しい活動は近頃見ない。篤志看護婦會は前者同様上流階級の婦人で、篤志看護婦としての有事の時に備へる修養に努めて居る。愛國婦人會は一般婦人の團體で、職業學校や幼稚園を經營し、北投や別府に療養所を有し、紹介をして靜養湯治をさせる外、蕃界事變やその他兵員の動く時や、入營除隊兵の迎送に活動して居るし、以前討蕃事業進捗の際は、慰問袋の贈呈等に盛に活動したものであつた。何れも幹部連の上流階級婦人が出動するだけで、一般會員たる婦人は會費を納むるのみで何



等動くことがない、その他婦人の團體としては、婦人修養會もあり、將校婦人會もあるが、何れも隨時會合して、會の目的遂行に努めて居るに過ぎず、對外的には餘り動きもしないやうである。

日本赤十字社は、明治三十二年十一月に支部を臺北に置き今日に及んで居る。而して支部の下に各地方に委員部の如きものを置き、民政長官即ち今の總務長官が支部長で、各地方長官以下の官吏に地方事務を委囑し、會員の募集に努め、多數の會員を有して居る。赤十字社の事業は、周知の如く濟生事業で、臺灣に於ても、支部の所在地たる臺北に於て、濟生事業を計畫實行して居るが、主として平時は救護員の養成、戦時事變に方り、全部又は一部を陸海軍傷病者の收容看護に致し、一方一般患者の治療を行ひ、貧困患者をも救療して居る。即ち討蕃隊前進の時、嘉義震災の際、その他凶變の場合に、醫員看護婦を特派して、醫療看護に努めたことは屢次あつたが、また最近は地方巡回救療斑を、各地方村落に派して巡回救療を行ひ、好評を博して居るが、更に市内人出の多き時は、救護班が出動して救護に従ひ、先頃は大毎社支局主催の健康診断にも、市内の醫師



と協力してこれに應じた如く、なか／＼活動して居る。而して篤志看護婦も、同會社支部に屬し、參加の婦人に看護法や救護法を指導熟達せしめ使命を果すに資し、討蕃隊前進の際は、これ等上流婦人は看護婦の服で例の縋帶卷に従事したとのことである。而も戦時變事の際の病傷者收容を、一般治療のため支部病院を臺北に置いて、入院外來の患者を治療し、貧困者には施療を行つて居る。病院は明治三十八年二月東門外、今の現在の地に、醫學專門學校（舊醫學校）と併び建てられた病院が竣工したので開院し、一般入院外來患者の治療は、醫學校學生の實地練習に供することとして、醫師は何れも醫學校の教授を醫長とし、同校關係の醫者が醫務に従事し、治療藥價も入院料も低減し、貧困者には施療を行ふこととして立派な病院が設立され、市民は勿論遠近の人々は、非常の恩恵に浴して居るが、治療を受くる患者は、入院外來共に年々増加の一方で、最近建築以來長年月を閲したので、一部改築新裝成つて美觀を呈する建物となり、三線道路を前に堂々たる病院が、日々多數の患者を出入させて居る。殊に衛生思想が漸次普及され、進歩した醫療を受くるの利であることを自覺した臺灣人は、漸次治療を受くる患者數を増し、



今や驚くべき數に上り、入院を希望するものも夥しく、彼等の間に信頼厚さを加へ、盛況を呈して居るが、施療患者も内地人が多かつたが、近來は臺灣人にも多さを示して居る。殊に赤十字社も臺北醫院と同様に、博士や醫士の肩書を有する何れも一流大家を醫長とし、設備萬端行き届き、これに熟練の看護婦を配し、而も治療入院の費用が、内地とは比較にならぬ低廉なので、土地柄病氣を恐るゝ内地人は勿論、漸く自覺した臺灣人も益々病院を利用して、治療して健康たらんと希望して居る狀勢なので、自然病院は盛況を呈する次第である。愛國婦人會は例の奥村女史の主唱に係るもので、臺灣に於ける婦人團體としては、多數の會員を有し盛大なものである。この會は明治三十八年七月臺北に支部を置き、總督や軍司令官の夫人を顧問とし、長官夫人を支部長とし、一流官民夫人が副長や評議員になり、各地方長官の夫人を地方幹事部長にし、それ〴〵會務を分擔し、盛に會員を募集して、内臺人を問はず婦人の入會するもの頗る多く、會員も現在では夥しい數を示して居る。而して支部としても本部と密接の關係連絡を保ちつゝ活動して居るが、本會の事業としては、本島事變の際即ち討蕃隊前進の時は、盛に慰問袋を



送付し、病傷の見舞討伐隊の送迎にも、各地方幹事部は支部と共に大活動したなどは、今尙世人の記憶の新なる所である。その他今は廢止したが、立派な臺灣愛國婦人なる雜誌を刊行したり、授産場を開設したもので、慫うした方面にも可なり力を致した。而して一方幼稚園（臺北幼稚園）や臺北女子職業學校、女子夜間講習會等を經營して、女子教育に盡しつゝあるが、入退營の兵士を送迎して歡迎惜別の意を致す外、救恤方面の事業も數々行ひ、婦人會としては可なり大きな活動を示して居る。加之北投に（有隣庵）や別府龜川に療養所を設けて、會員その他の紹介ある者には、休養安息を得るの便宜を與へて居る。建物は以前は文武街（今の文武町）法院側に在つたが、法院改築の爲め明石町新公園北に、モダン式の立派な事務所や學校幼稚園が新築されてそれに移轉した。その他内地から渡來の名士を聘しての講演會や、割烹染色裁縫等の講習會等各種の會合も催され、會の使命に盡すのみならず、婦人界のため貢献すべく努力して居るし、總裁として閑院宮妃、東伏見宮大妃の宮殿下も御來臺、盛大な支部總會が開催された。何と云つても臺北は島の首都であり、臺灣の統治中樞で、經濟界の中心地圈なので、官民一流の有力者の數



も多く、社交の團體も尠くない。而して領臺前も艋舺や大稻埕にも社交團體と云ふほどでもないが、一部の人々が趣味の上から又はその他の關係から、集團的會合をして歡談笑話親交を厚ふしたものだ、所謂社交團體と云ふものは、領臺後に於て見ると云つて可い。加之今日に於ても社交團體は主として内地人側に多く、臺灣人側には尠いのも、彼等は慣習上全く内地人と趣を異にして居るので、彼等は出身同郷人間に集會を催し、又た同姓人間には、祖廟と稱する同姓人の高祖を奉祀する廟の祭事を執行する時を好機として會合を催すと云つた工合で、その他は詩文の交、風流文墨の士の集會位に過ぎない。内地人側に於ける社交團體と見るべき中には、これも同じく風流文墨の集會やその趣味の會合をして親交を温める社交團體も多く、また出身學校の同窓會も夥しい。これ等は内臺人共に一堂に會して交誼を厚ふするから、一面内臺人の融和と云ふ、緊切な麗しい會合として、それごとく特色を有して居る。而して一般的の社交團體としては、古くからあるのは土曜會で、これは一流官民が毎土曜に鐵道ホテルに會合、午餐を共にして歡談を試みるべく會合で、今日でも繼續されて居るが、この會は一つは社交機關である



と共に、一流官民の集合なので、單に社交のみでなく、集まる各自の所用が便せられて好都合だと云はれて居る。その他臺北懇和會と云ふが、毎月一回同じく鐵道ホテルで、官民有志に依つて開かれたが、今日は餘り開催されるのを聞かない。これも今は自然的消滅したが、臺北番茶會と云ふのが、以前毎月一回新公園のパークライオンで開かれた、會名の示す如く手輕に番茶を綴つて寛き歡談、暢氣に一夜を過すと云ふので、この會は來者不拒去者不追主義の、その日集まる者即ち會員で、五十錢を出せば會員で列席され、茶菓子で勝手な熱を吹くのみか、此處のみは階級打破を斷行し、閣下も何も皆同であつたし、それに文墨の士が多く中心となつたので、席畫を試み詩歌句を詠賦したり、或時は内地渡來の一藝の士や知名の大家を招いてその話を聞いたもので、名物であり一寸風變な會であつた、然し今は同會が建立した天滿宮祠のみあつて會は自然的解散を見た。この外毎週一回開かれるロータリー俱樂部の臺北支部は、最近の設立で新しい社交團體の一つである。それから大正協會と云ふのは、臺灣人の若い新智識の人に、内地人有志も加つた一種の社交團體で、眞面目な態度は稀に見る所で、現に永續して時々開催さ



れて居る。又た臺北官民の臺北俱樂部は新公園に在り、撞球園碁將棋等が備付られてある。その他如水會や銀行連中の水曜會、官衙會社銀行等の各團體所屬の俱樂部も多く、かく數へたら尙幾多の社交團體があるが、此處にはその主なものゝみを記して置く。而して社交團體があつても、臺北市には公會堂がない、他の地方には大小それ〴〵これが建設されて、恁うした會合や一般市民の集合的行事、講演その他の催物に利用されて居るが、これを欠く臺北市はその場所に窮し、常に多く鐵道ホテルを利用して不便を忍んで居る。それ故公會堂建築問題は臺北として永年懸案とされ、市に於て最近これが實現を決し、それ〴〵準備して居たが、種々の事情で順調に進歩しなかつたが、近く督府の裁定に依つて建設が實現され、やがては立派な公會堂が見られることゝ思ひ、その日の來るを鶴首して居る。而して領臺後東瀛書院と云ふ清朝時代の官學であつた建物を、淡水館と樺山初代總督が命名し、臺北文武官の娛樂場としたのを、後に一般に開放されたので、専ら前記の各會合にこれが利用されたものであつて、場所は書院街（今の書院町）に在つた。然し舊清朝時代の建物で、蟻害に罹り且つ腐朽も甚しく使用に耐へないので、こ



れを取毀ち、その跡に洋風の建物を建て土木部が移つて執務したが、臺灣電力株式會社の創立と共に、この建物も同社に移つて現在に及んで居る。又た一方階行社は既に明治三十二年六月に創開され、現在の地に在つた劉氏建設の洋學堂と云ふ、洋學を教ゆる學校の建物を現在の如く改築したもので、陸軍關係人の社交用にされる以外、公會堂なき臺北市民もこれを利用しつゝあるのである。恁う云ふ事情に、鐵道ホテルが極めて利用されるが、一面には鐵道ホテルは名の示す如く、明治四十一年十月南北縦貫鐵道全通式が舉行され、次て十一月一日落成開業したもので、鐵道當局は由來臺北は勿論その他の地方にも、外人を宿泊さす旅館即ちホテルもないに鑑み、これを建設し補助金を下附して經營さすために出來たもので、年々可なり巨額の補助金が下附され、その保護の下に兎に角唯一の歐風のホテルが唯だ臺北のみだが、臺灣が有することになつた次第である。然し從來では内外人の來臺者も尠く、經營困難の状態なので、恁うした社交團體が利用するものも、幾多援助の意味も存するのだと云はれて居る。鐵道ホテルは表町、臺北停車場を距る南三町と云ふ近い便利な地位に在る。本館は煉瓦竝に石造で建坪六百二十坪、



中央に庭園を設けた、ルネッサン式三層樓で、階下に玄關、大廣間、大食堂、談話室、酒場、戲球室、事務室、小食堂簡易食堂等があり、階上にはエレベーターで昇降し得られる。二階は大廣間の外集會室客室で、三階は客室が數多く、附屬建物としては、各種の催物が行はれる餘興場、理髮場、炊事場、冷蔵庫用機械室、倉庫があつて、全面積三千六十九坪、堂々たる建物で、臺灣には幾多の旅館があり、臺北にも吾妻や日の丸館、朝陽號の一等旅館以外、内地人經營のもの臺灣人經營のもの大小十幾軒があるが、歐式旅館ホテルは唯一である。されば公會堂を有せざる今日、これを社交團體その他が利用するの無理からぬことだが、尙臺北一流の官民は毎日午餐を此處で共にするので、これ等の人々は毎日午餐時には顔を合せ談笑裡に所用を果して居るのである。而して臺北停車場も見方では、一種の社交が其處に行はれて居ると云ひ得る。由來植民地だからでもあらうが、驛頭の送迎は實に盛なもので、いよ／＼内地に引揚げる人とか、轉任その他或意味で内地その他に赴く人の見送は極めて盛況なもので、例へば轉退任の大官や有力者の出立の際や、選手の内地へ出向等の場合は、驛頭人を以て埋むるの概があると共に、



來る人の場合も同じであるばかりか、單に島内旅行にでも送迎がなかく盛なもので、これは到底内地等に見得られぬ光景で、馴れぬ人々は一驚を喫する程である、従つてこの間それ／＼社交的行爲が行はれるのは當然であると思ふ。

内地人と臺灣人との社交振と云ふと難しいが、集團的に將又た個人的に彼等の間に行はるゝ社交竝に内地人と臺灣人との交際振、乃至は彼等相互間のそれも、それ／＼差異が見られるのである。而も一般に都會地と田舎とは亦たその趣きを異にして居るのも當然と云ふべきであらう。臺北に於ける内地人は集團的には、やれ縣人會とか町内會とか、その他種々の關係同士が、よく幾多の會合を作つて、相互の親睦を圖つて居るが、集合的だけに形式に流れ、表面上のみに傾くのが多く、恁うした目的は主として宴會を催し藝妓の酌で酒杯を手に酔ひ唄ふて歡興笑談し、その間に親交を結ぶと云ふ仕組みだが、數多の人のことゝて徹底的には目的を達し得ない憾みがないでもない。殊に從來から宴會はなかく盛に、機會を作つては旗亭に會飲する風が著しかつたが、不況の今日では流石に時勢だ以前の如くない、それで女氣のない洋食を會食すると云ふ風が多く、鐵道



ホテルやそのレストーランで開かれるやうになつた。而も郷人會や町内會の如き會合は從來では主人公のみの會合、所謂茶屋酒を酌み交はしたものが、家族蒸共の家族會が催され、芝居や映畫の見物に楽しむことが多くなつた、即ち眞面目になつたものである。けれども土地柄であらう、社交には宴會が附物と云ふことは、今も昔も同様で、これは臺北のみの傾向でなく、廣く日本は愚か外國も然うだが、臺北では從來から盛である。而も大會社や大銀行は、新年宴會などには、一流官民を招いて、一夕萬金を費して盛宴を張つた時代もあつたもので、臺北の大官紳士は宴會が多く殆んど毎夜續きで、自宅で一家團欒で夜食をすることが、極めて稀有であつたが、今日ではもう憊うした盛宴なんか見られず、旗亭の老女將の昔がたりに話されるのみとなつた。個人的には所謂各地人の集りで、隣近所の人にも、まづ大抵の場合は一週の交際で、餘り親密でないこと云ふ風が見える、向三軒兩隣位は往復もするが、もう少し距られた知らぬ他人と云つた工合、甚しいのは隣人とも交際しないものもある。これは新領土で舊家もなく、勤人が多から移轉の度も頻繁なためであらう、それに妻君同士は往來しても、主人公は一向知



らぬ顔のが尠くない、袖振り合ふも多少の縁と云つた親しみは餘りに有する人がないやうだ。但し田舎に行くと、内地人が極めて尠いから、自然的に交際もして懇意になるさうな、これは種々公的の會合に顔を合せる機會が多いからである。臺灣人は個人間には極めて親密の交際が行はれるが、集合的には所謂支那民族性が動いて、對外關係には同郷同姓の團結排他が強く、例の分類械闘が屢次喚起されたことは、歴史にも明かで、臺北でも大稻埕建街の一因ともなつて居ることは、周知のことである。それであるから彼等は、個人的の場合と集團の場合とは趣きを異にして居るが、この色彩は時勢の變遷で漸次薄らぎつゝあるのが現状と見て可い、彼等個人的の社交は何しろ土着人なので、舊家も多く容易移轉しないから、自然同郷同姓人以外をも顔馴染も深く、互に往來して親交を結んで居る。集合の場合も團結排他が動くのは、何かの端緒動機があつてのとどで、それ以外は表面は平靜で、事業やその他の關係で交際は無論續けられて居る。臺灣人は内地人の如く、社交に旗亭を利用することが尠なく、多く個人の宅で宴を張り、心よく主客打寛いて痛飲するが、虚禮さへ敢行すると云はれる彼等は、酔ふても禮を失



しないやうに注意して居るから、酒席で亂暴することはないやうだし、若し亂醉者があつても決して外部に洩らさない、臺灣人にして路上に泥酔しての醜態を見ないのも、恁う云ふ工合に酒を飲むからであらう、珍しい好いことである。然し近年は内地人に倣つたのか、時々旗亭で宴を催すことが、漸く多くなつたが、これも時代の動きであらうと思ふ。内臺人間の社交は、主に公的の場合が多く、この場合は近來益々臺灣人が多く参加するの傾向が見えた。而も彼等は内地人よりも巧な應接振を示して立ち廻るが、國語をよくする人はごその鮮さが目に立つ、無論恁う云ふ場合に參加する人々は、中流以上寧ろ上流階級の人々である、これに對しての内地人も、相當地位の人だけに、可然應接して居るから、表面的だが圓滿に見られる。尤も臺灣人は内地人に知己の多い人を除いては、一般に控え目にして居るのを見る。而して婦人同士は、僅少上流階級の婦人が、内地人のこれも相當地位ある人の夫人と交際をするが、これも何れかと云ふと形式的であるし而も僅少だが、近來は女學校出身の人々が多く、新しい若い人は内地婦人と交際して、親しく往來するのを見受ける。然し一般的に、舊慣墨守の弊が殊に甚しい臺灣婦



人は、上流人ほど所謂深窓に在ると云はれる位引込思案で、非社交的に生活して居たから、對内地人との交際が盛になるわけがなかつたし、今もその傾向が甚しい、然し時勢は變遷する、漸次慙うした風は文化の向上に伴ひ、彼等彼女等もこれに動され自覺して減退すると思はれ、やがては内臺人互に圓滿な交際が行はれることと信じ、かの内臺人の融和も出來得ることになるのである。又た一方國語が普及され國語を解すると、相互の意志が疎通されるから、國語の不解から招き生ずる感情の行違や誤解が除かれて、圓滿の交際が出來ると云ふものである。而して内臺人融和と云ふことは、臺灣統治上重要なものの一つで、從來久しきに互つて高唱され、各方面から種々の方法でその實現に努力して居る。畏くも上皇室に於せられても、常に一視同仁の大御心を示させられ、歴代總督もこの御趣旨を奉體して統治に盡されて居られる。かの饗老典の如き、兒玉總督時代には、總督の主催の下に開催し、一面に於ては一視同仁の實を示された。爾來この内臺人融和と云ふことに對しては、心ある内臺人有力者は不斷の努力を續けて具體的行動に出たことも尠くなかつた、かの坂垣伯の同化會は失敗に終つたが、具眼の士は臨機



これを高唱して止まない、而して教育の普及、文化の向上その他總てに於ける著しき開發進展を見た今日では、眞面目なる意味に於て、内臺人間の結婚が漸次行はれ、圓滿な家庭生活を營みつゝあるものを見ること多く、或は共同事業が經營されたり、公共的行事や運動にも、内臺人が協力して居る等々の事實は、近年益々多きを加へて來た、これは眞に欣喜すべきことで、口喧しく高唱せずとも、領臺後三十餘年の間に、自然的に恣うした動きを見たものである。唯だこの内臺人融和が、主として中流以上の階級人に行はれ、多數の民衆即ちそれ以下の階級人に及ばないから、前途は遠きの觀がある。けれども今や多くは新時代の教育を受けた人々だから、これ等の若人の活動時代になれば、一層内臺人間の融和は、時代の動きに伴つて、各方面から實現さるゝに相違なきも、一朝一夕にはこれを見ることは難しいが、更に十年二十年と経過したから、この目的が必らず到達し得られると斷言する。



## 商業地の臺北市と臺北の商店

…商業地域と内臺人商店…金融機關と會社株界…

内臺商人の營業振と商業團體…出張通信販賣と臺北商人

島の首都臺北の地は、商業地としても、島内に於ける最大な物資の集散地であり、商取引も最も旺盛に活況を呈し、商業的機關は完備して殷盛を極め、臺灣經濟界の中心となす所である。現在に於て臺北の商業地域と云ふのは、先づ城内と大稻埕の二地域がその主なるものと云ふべく、艋舺が商業殷盛の地であつたのは、大稻埕や城内が建街されぬ以前、咸豐年間を最頂としてその前後であつて、既に五六十年の往時に屬し、三艋と謳はれた話は、過去を偲ぶ言葉に過ぎなくなつて、今は單に舊態を追想する片影を止めるのみで、商業地としての存在は危しいと云つて可い。城内は領臺後に於て、内地人の商人に依つて繁昌が保たれ續けられて居るが、これに反して大稻埕は、臺灣人の商人に依つて殷盛を見て居る。その他南門外の兒玉町通りの一帯や、西門市場以西、新起八甲



の兩町方面には内臺人の商店を見るが、市場附近以外は、商店街と云ふ程の繁榮さを示して居ない。城内は各商店は殆んど内地人の經營で、立派な街觀をなす店舗は、大小それごとく何れも店舗としては、現代的の設備即ち店の構へや飾窓の意匠裝飾、その他商品の陳列さるゝ店内の模様等、内地のそれに見るが如く、純然たる内地人商店で、而も商品は悉く内地仕入の内地人向のもので、現代の嗜好に投ずる品のみ美しく豊富に取揃へてある、而も商戰が可なり激烈に行はれて居るので、時勢に適した廣告宣傳も試み、不斷の活動に、商賣大切と努め、最近では店員のサービスも改善する外、營業振も漸次現代化しつゝあるが、まだ舊態を全く脱しない店も尠くない、されば城内が臺北市内に於ける最も進んだ、大きな商店が多いので、その繁榮も他に比して劣ることなく、立派な商店街が見られるが、それも所謂本町通りと榮町筋と京町通りの三街で、此處に行くとは街觀の美と櫛比する各商店の店構と、賑さに繁昌振が見られて、臺北の街も立派な美しい賑かな所だとの感を誰しも抱くのである。而して城内の各商店は、近頃臺灣人の顧客も漸増の傾向を示して來たが、まだ依然として内地人顧客が多數を占め、友喰ひと非難され



ながら内地人本位である。従つて商品も内地人向のもので、現代的なものだから、普通一般の臺灣人には適する商品が尠く、僅に洋雜貨や化粧品その他、時勢の變遷に伴ひ、生活の進歩改善の結果、彼等の嗜好や、使用に適したものが賣れるやうになつたが、それも若い新人に多くまだ一般的でない。大稻埕は臺灣人街で、城内とは店舗の構造や店内の様子が全然異り、幾分現代化したが尙從來の型を脱せず、商品も臺灣人向のものばかりで、内地からの仕入品も尠くないが、多くは支那の對岸地方、上海福州廈門汕頭の各方面からの輸入品と、土地で出來たものであるから、此處には支那的色彩が濃厚に示されて居る。それ故に此處の顧客は殆んど臺灣人であるのは當然過ぐる當然だが、品が多少粗悪でも價值が可なり安いので、内地人の顧客も幾分はある。而して此地は米茶の取引市場で、米茶の輸移出は盛況を見せ、この米茶の市況の好否は、大稻埕の市況に忽ち影響するのである。而して城内にも大稻埕にも會社や銀行があつて、本店もあれば支店出張所もあるし、各商店では内地の會社商店の代理店を引受けて居るのが尠くない。更に内臺人商人の營業振を観ると、兩者の間にそれ〴〵種々の點に於て甚しい差異がある。



これには雑多の事情や原因もあるが、要する商人としての民族的差異とも云ひ得る。臺灣人は新附の民で、支那民族の血統であり、商賣に抜目のないことは世界的に定評のある支那人で、支那人一流の商人としての行動をなし、取引習慣その他商業道德も、多少は差異があつても支那式である。また顧客も臺灣人であるから、自然内地人の經營振や取引、商習慣や商人道德とは同一でないのは明白である。これが總括的の説明だが、更に各個に云ふと何れも多少の除外例は免れないが、一般的に云ふとすれば、内地人の商店は、顧客が内地人で而も多數は、官廳や會社銀行等に勤務する俸給生活者であるから、店で扱ふ商品も大部分内地仕入の内地人向の商品である。それに店の内外の設備は勿論、仕入商品の種類は、何れも時勢に順應した、新しいモダーンの品を選択し、顧客の心を唆るにより、多き効果の現はれをと苦心努力して居る、故に内地人經營の店内に入ると、照明を巧に利用し、色とりどりの陳列商品の色彩と、店内の裝飾とで、美しく明るく、何れの店も現代色彩に富んだのが見られ、内地の相當大都會のそれに比しても、劣ることゝが尠いと思はするものがある。臺灣人の商店は、臺灣人を顧客とし、市内在住の臺灣人



即ち大稻埕艋舺の方面や市編入の村落の人々と、市に隣接の街庄地の臺灣人なので、商品も悉くこれ等の顧客の嗜好に適するもの、彼等の日用必需品で、土地で製産されたものや、支那からの輸入品、それに内地仕入のものもあるけれど、大部分は支那輸入のもので土地で出来たのが多い、だから内地人商店に見る商品とは、大部分種類品質色彩等總てが異つて居る。また同一又は類似のものも、価格は概して低廉であることが目につき、店舗の外観も店内の裝飾設や備、商品の陳列工合等は、多少内地人商店に似たのもあるがこれは極少数で、大多數は内地の支那人街に見るが如きもので、其處に美しさも明かさも見られない、勿論採光や照明裝飾と云つたことには餘りに無關心のやうだし、商品の陳列も單に店頭に置き並べて居ると云ふだけ、薄暗い一種の淋しみを感ずる店頭感を抱かしめる。而して臺灣人街の商業地域に異彩を放つのは、店舗を開いて普通商店の如く商買状態を示さないが、堂々たる建物を構へて、盛に取引を行つて居るのが茶商で、茶館と呼ばれて居る輸出商で、これは一見すると商店らしくない。その他大きな商店中には、支那向の商品を取引する輸出入商もあつて、これ等は所謂問屋筋とも云ふので



あり、これも可なり多い。

臺北市内の商人は、内地人側は内地から仕入を行ひ、臺灣人側は主として上海や南支地方から仕入れるが、幾分は内地に仕入取引をして居る。而して内地人側の仕入先は、大阪名古屋を中心とし、福岡や東京その他であるし、臺灣人側は上海が大部分で、彼等祖先の地福建地方や香港地方がこれに次ぎ、内地の合は大阪が主で東京等であるし、乾物等の海産物は北海道函館から仕入ると云ふことである。支那への輸出は領臺前の取引は悉くこれであつたが、泉郊とか厦郊とか云つて、各自取引先が定まつて居たもので、これは各その出身地に依つて別れたものである。艋舺の殷盛時代は、この別も明確であつたが、その以後は稍亂れたが、領臺後から今日でも、大體にこれに倣ふの風がある。而してこれ等の商人の金融は、その機關としては、領臺前には無論銀行や信用組合もなく、商業は比較的發達して居たに拘らず、金融機關は至極不完全なものであつた。これは臺灣が農業本位の地であり、二三の特産物を除く外その取引なるものなく、又た重要物産の取引は清商や洋商に依つて營まれ、これ等輸出商は仲買人を介して農家に資金を



融通し、農産物の收穫を待つて、生産物を以て決済する慣習になつて居た。従つて恂うした金融、即ち商業上の送金賣掛金の取立等の目的で、發行する滙票を取扱ふ錢莊と云ふのがある。これは支那に於けるものと同じであるが、臺灣にはこの問屋以外に滙單館と云ふ幼稚な銀行業を營むものがあつた。而して兩者が商人に利用されたもので、他に金融機關としては、我國の質屋に相當する當舖と云ふものがあつて、一般主として中産以下の人々に金融するを業として居たが、私に金融業を營む貸金業者即ち押店驥仔店と云ふのがあつて、不完全ながら金融が行はれたが、利子やその他も總て支那に於けるものと同じで、種々の弊害と不便が附添ふて居たけれども、兎に角恂う云ふ工合で商業資金や、その他の金子が融通されて居たものである。それに通貨が支那の今日と同じく、大別して銀兩清國銀貨外國銀貨銅貨紙幣の五つで、銀本位だが本位貨がなく、銀の一定重量に一定の價格を附し、秤量で授受したもので、臺灣では價格稱呼は元又た員と云ひ、角以下それぐ八種で、單位の十分の一を角と云つたもので、現に十錢を一角銀と云つて居る位だ。恂う云ふ工合で、領臺前の金融界は、不備不完な状態であつて、金融



界が今日の如く整然とし、完備した金融機関を見たのは領臺後である。改隸後は早くも日本中立銀行が臺北に出張所を設け、明治二十八年七月開業し、基隆臺南にも店舗を開き、主とし國て庫金の取扱に任じたが、これが銀行業を開いた嚆矢であつた。その翌年十二月日本銀行は、臺北や臺南その他島内樞要の地に出張所を設け、中立銀行から國庫金取扱事務を引繼いたが、兩者共に完全な金融機関たるを得なかつたし、當時は改隸後尙日淺く、百事備はらざるが故に、金融機關の如きも活動の餘地がなかつた。その後日本中立銀行は三十四銀行に合併して出張所は支店となり、明治三十二年から三十四銀行臺北支店が開業して今日に及んで居る。然るに臺灣特殊事情に因る財界の趨勢に鑑み、臺灣中央銀行たるべき特殊銀行を設立することとなり、明治三十二年九月臺灣銀行が開業し、本店は臺北に置き、現在の地榮町に新築して立派な店舗を構へ、銀行券を發行し、臺灣の富源の開發經濟の發達、惹いては南支南洋方面に、財的活動を行ふ使命に従ひ、大に活動して業績頗る好良を示し、臺灣の産業進展伴ひ業務擴張を見、臺灣各地以外南支南洋の各方面、東京大阪神戸や遠く倫敦紐育にも店舗を設け、爲替業務をも扱ひ、幾



度増資を斷行し、大正三年以後即ち世界大戰の好影響は、行運の隆々たるものを致し、財界の好況に際し非常に進展したが、その後財界は不況なり不良貸付が祟り、殊に鈴木商店の没落悲運に大打撃を受け、戦後好況の反動と、關東大震の突發事件等にて形勢逆轉した結果、内外の信用一朝に失墜し、昭和二年の全國的恐慌を惹起し、有名な臺銀問題となり、整理休業を餘像なくし、僅に上山總督以下の英斷と、官民協力善處したので島内は營業を續けたが、一時は大事には至らなかつたが取付騒ぎさへ見、財界不穩に陥るの危機を辛うして脱し得たことは、人の記憶に新なることである。その後政府の援助の下に救濟され、着々行務の刷新を圖り節約を斷行して、各方面の改善に努めた結果、尙無配だが業績は漸次良化するに至つて今日に及んで居る。この他臺北に本店を有する銀行は臺灣商工銀行（臺北に本店のあつた新高銀行嘉義に本店のあつた嘉義銀行は大正十二年八月合併）と華南銀行がある。臺灣商工銀行は明治四十三年八月に、南部地方の金融機關たらしむる爲め設立し、阿緱街（今の屏東街）に本店があつたが、明治四十五年八月に臺北の臺灣貯蓄銀行と合併本店を臺北に移し、大正十二年に更に新高嘉義兩銀行を合併して今日に及んだも



ので、臺中に本店を有し臺北に支店を開いて居る彰化銀行と、大阪に本店があり臺北に支店を有する三十四銀行と共に普通銀行業務を營んで居るが、この銀行も華南銀行と同様、財界不況の打撃を受け、政府援助の下に銳意整理に努め漸次業績が順調に向ひつゝある。華南銀行は大正八年一月に設立し本店を臺北に置き、南支南洋に於ける華僑民（支那人）と邦人の金融機關たると共に、南洋貿易の助長を目的とした、日支合辦の特種銀行である。それも臺銀や商工と同じ運命の下に政府に救護を仰ぎ整理中、業績聊か復活だが無配である。勸業銀行は臺銀を代理店として居たが、臺灣の著しき發展に伴ひ、大正十二年一月に臺北支店を開店し、主として農業資金を融通し、業績大に見るものがある。その他商工銀行の分身として、大正十年十一月創立した臺灣貯蓄銀行は臺北に本店を置き、貯蓄銀行としての機能を發揮し業績良好である。以上臺北に本店のあるのは臺銀商工華南貯蓄の四行で、これ等四行は今尙無配當を續けて居るが何れも業績漸次良好し、臺銀の配當も近きに在りと稱せられる位だから、臺銀の配當を見ると共に、それ／＼配當すべき、可能性ありと云はるゝほど改善良化した、而して臺北に大正六年八月手形交



換所を開設した以來手形交換が行はれて居る。尙金融機關としては、大正二年二月公布の臺灣産業組合規則に依り、産業組合の一種なる信用組合が設けられた。尤も以前これに類似なものがあつたが、何等準換すべき法規がなく、而も往々本領を没却して不法行爲多かつたので、取締ると共に指導奨励することゝして實現され、今日まで各組合は消長があつたが、臺北では内地人が經營組織する臺北信用組合（城内榮町）と、臺灣人が組織經營する稻江信用組合（太平町）大龍峒信用組合（大龍峒町）艋舺信用組合（元園町）の三つあり、何れも眞面目に業務を遂行し成績何れも良好で、臺北信用組合の如きは優良のものとして表彰されたことが多々である。而して無盡とか頼母子講とか云ふ下級金融機關が、領臺以後内地人間に行はれ、その使命を果しつゝあつたが、無届の者多く、漸次弊害を見、無盡には大正五年二月無盡法が施行され、頼母子講は警察で嚴重に取締つて來たが、兩者共性質上諸種の問題を惹起し易く、既に幾度が不正行爲の暴露で、恐怖騒動が見られ、被害も夥しかつたので、一層取締嚴重になつても、禍根は斷絶すべくなく、世間を切に騒せることが多い、それで無盡法に依り營業の免許を受け開業して居るのは、臺



灣勸業無盡株式會社、臺灣南部無盡株式會社と東臺灣無盡株式會社の三社があり、臺北には臺灣勸業無盡の本店だけある。會社は大正八年十二月設立以來業績順調に、配當も持續し健實に發展しつゝある。而してこの以外に低利資金が融通されて居る。これは臺灣に於ける郵便貯金をその限度で還元し、産業獎勵の爲め低利融通するもので勸銀が取扱つて居るが、貸付先は公共組合産業組合に限られるけれども、開始以來千萬圓以上を算する巨額に達して居る。而して郵便貯金を爲替振替貯金は大に利用する者増加し、殊に臺灣人がこれを利用する者著しきを加へ、金融機關としての機能を發揮して居る。その他年金簡易保険も應募加入者増加を示し、臺北市の如き著しきものと云はれて居る。而して保険としては、火災海上の保険は大成火災保險株式會社（北門町）が唯だ一つ本店を臺北に置いて居るのみで、他は代理店をして業務を扱はして居るが、大成火災保險株式會社は相當の業績を示し、内地にても活躍して居る。生命保険は支店支部を臺北に設けて、競走的に業務の發展に努力し、各社何れも好良の成績を見せて居るが、一方これ等の各保險會社が、島内の事業に投資する多きを加ふるの傾向を示し、金融界に盡さうとして



居る。而して當今は財界不況、節約緊縮の聲喧しき折柄、金融は概して緩漫を辿り、整理時代なので、新規の貸出も警戒する状態故、大正五六年から十二三年頃に比すれば、全く沈衰して充分機能を發揮するに難いと云はれて居る。金利は内地のそれに順應して常に上下して歩調を一つにして居る。尙質舗は當舖と云つた類似なものがあつたが、領臺後内地人が質舗を經營して來たけれども、領臺當初以來の慣例が改められず、不合理の取引高率等で、可なり營業者は利益を得るが、その反對に一般細民に對しては、不利の點が多くなかつた、それで社會的施設として官營質屋即ち公設質舗が開かれ、これが大に利用されて取引盛況に赴くの結果打撃を受けて、臺北市内の質屋は、時代に適した施設經營法を試むるも甚しく繁昌せず、お得意は公設質舗に奪はれた形である。この他一種の貸金業で、一時信託の名の下に營業する者があつた、信託法施行の結果、忽ち抵觸し廢業するに至り、今では信託の名に於て、土地家屋の賣買貸借、債務取立等の周旋を營むのがあるのみである。金貸業も相當臺北市内に見るが、所謂高利貸も尠くなく、これ等種々の取沙汰噂さが絶えず、識者は眉を蹙めて居ると云はれて居る。かくの如く



領臺後金融機關は完備發達したので、領臺前の金融機關は自然に漸減したが、一方幣制改革が斷行され、現今の貨幣が流通して居る一方、臺灣人間にも銀行信用組合その他の金融機關が益々利用され便益に浴して居るが、臺北の如きに於ても尙通貨を死藏をする者が無いではないけれども、一般的に郵便貯金や銀行預金貯金が多く利用され、小切手や手形の取引も、かの好況時代たる大正七八年頃以降、著しく増加するやうになつた。

完備した金融機關が益々利用され、商業界と云はず産業界その他事業界は、臺灣の開發進展に伴つて活躍し、大に富源を開發して、今日の盛を致したものである。領臺前は臺灣人間に於ても、清國の慣例に倣つて今日會社と云つた如き、合理合法的な組織ではないが、資本を合して一個の事業團體を設け、普通商事を營むが農工業の方面にも活動ものであつたが、それとて今日の會社が活動するのとは全然異り、極めて消極的なもので、單に資本合同組織の下に經營を續けて居たに過ぎない、舊慣に於ける合股と云ふもので、股が株式と云つたものだが、それも共同出資分と云ふ位のものである。而して改隸後も少數の合股が、我商法の規定を模倣して臺灣人間にのみ組織されて居たが、漸次減退して



今日では表面には出されず、臺灣人間にも恁う云ふ場合は、株式や合名の會社を設立するに至つた。無論今日の諸會社は領臺後に於て設立されたもので、島の首都臺北には、土地柄會社數も多いが、最初は内地の會社が支店や出張所を設けて、經營活動したものであるが、内地人の渡來者が増加する一方、産業方面の施設を見、當局指導獎勵と厚き保護の下に異常の發展を示し、産業界や事業界は漸次活躍するに至り、従つて在住内地人間に會社組織を以て、事業經營を計劃實行するの機運が年と共に濃厚となり、幾多の會社が或は株式に合資に合名に、種々の方法で設立され、それ〴〵事業を經營したが、臺北に本店を有する會社も非常に多く、而も明治年間にも會社の設立解散合併等は、各種の事情の下に行はれて、興廢消長が見られた、然しまだその頃までは恁うした會社と云ふものに就いては、臺灣人間に餘り理解するものなく、富豪名家は官民有力の勸誘に餘儀なくされ、株式募集に應じた位で、彼等自身に設立するものでない位、一般この方面の智識も經驗も乏しかつた。然るに大正三年世界大戰後、大正八九年を頂上として、内地財界の好況に伴ひ、本島財界も好景氣を呈し、企業熱は勃興して、産業界企業界は空前の大



活況を示したので、この間會社の設立も夥しく、聊か濫立の觀があつた。而して一方臺灣人の文化向上に伴ひ、漸く會社に對する理解も得、内地人の設立した會社に對し投資株主となるもの多く、殊に好況は先天的投機心に富むと云はれた支那民族だけに、彼等を自らこの方面に進向せしめたことは大なるものであつた。この會社簇出の際は多數の新會社中には、良否が當然あるものであつたが、當時は何れもその良否を問題とせず、賑を呈するほど夥しい會社が設立され、而も臺灣人のみに依つて設立されたのが尠くない、而も一方金融業者も好況時代と云ふので、恚うした事に資金の融通を辭せぬので、一層企業熱を煽つたのも事實で、銀行の貸付金も大部分この方面のものに使はれた。何しろ島の首都だけに、他の都會地に比して臺北に於ても、設立された會社もその數多く、何れも本店を此處に置いたもので、まづ有頂天になつて會社熱株式熱に浮されたものであつたが、都會人だけに臺北の臺灣人にこの熱の盛であつたのも頷かれる。従て地主連中の農業者も、この渦中に入つたものも多かつた。而して一方大正九年地方官々制の際、租税の改正があり、その結果納税關係から、合法的減少法の一手段として、個人經營の



商店や企業家は、この意味から會社組織に改めたものも多く、また税金以外に資本を集めて大資本で活躍すべく、個人經營の事業を會社としたものも尠くなかつた。恁う云ふ工合で、好況時代の會社はその數に於ても可なり多數で、大部分は臺北に於てこれを見たのである。然るにその財界は好況の反動や大震災の結果逆轉し、不況に陥り而もその期間も長く益々深刻化して、事業界は極度の萎微衰退を示し、緊縮節約整理の斷行が強要高唱られ、好況時代玉石混淆の觀があつたほどに設立された會社は、自然的淘汰を見、多くの泡沫會社は解散消滅し、然らざるものも多くは整理の進捗に努め、着々減資等が行はれ、改善に努めつゝあるの状態なので無配當のもの多く、年五分以上の配當を行ふ會社は、實に少數であると云ふ位、従つて株價は單に名のみで賣買も不振で、臺灣雜株と云はるゝ、臺灣の諸會社の株價は、十中七八は何れも、拂込價以下の時價を示し、甚しきは十二圓五十錢拂込のものが、僅々一圓五十錢或はそれ以下を示し、少しも動かないと云ふ状態、株式仲買商などは、全く業務閑散居喰ひ溜息で、内地市場の一流株の僅少な取引でお茶を濁して居る始末、嘗ては株式取引所設立の久しき運動が、好況



で設立を見んとして遂に沙汰止みとなつたが、これを思ふて今更に不況深刻の慘さが感ぜられる。従つて投機心に唆られた臺灣人も、好況に有頂天となつた内地人も、株式投機熱に浮された結果は、株價の暴落で大打撃を蒙り痛手の上に、銀行が整理進捗中なので、債務辨償の追求急なるに青息太息、全く一時の儲けは水泡と化し、往事を悔んで善後處置に悩まされて居るの状態で、この痛手に苦しむ臺北人も、各方面に多く、活況に華かであつた反動の夥しきを受けて居る、従つて昨今は投資は家屋土地に移つて居る。殊に近郊の地主連は、この崇りで窮迫し、地を小作人に譲るもの多く、今や以前と反對に主客轉倒して居る状態であるのも悲惨である。而して最近に於ける臺北市の會社趨勢は、株式會社本店百二十四、支店十三計百三十七で、資本金は本店一億五千九百四十五萬餘圓、支店は一億千二百八十七萬餘圓で、合計二億七千二百三十二萬餘圓、合資會社は本店七十三で、資本金百五十九萬八千餘圓、合名會社は本店二十四、資本金二百七十五萬五千圓、總合計本店二百二十、支店十三計二百三十圓、資本金は本店一億六千三百八十二萬三千餘圓、支店一億千二百八十七萬餘圓、總計二億七千六百六十九萬三千餘圓を示



し、而も新設解散合併や増資減資も常に行はれて居るが著しいことはなく、現在の會社は何れも整理緊縮節約を斷行して、經營受難の現狀に善處すべく努力し、不振の極に達して居る。而して臺北市内の有數會社は、臺灣電力、臺灣製腦、臺灣煉瓦、臺灣土地建物、高砂麥酒、臺灣勸業無盡、南洋倉庫、臺灣オフセット印刷、臺北印刷、高砂油脂工業、臺灣爆竹、臺灣畜産等の各株式會社、三井物産、三井合名、日本樟腦、日東製氷等の各支店で、その他内地に本店のある各會社出張所も尠くない。

物資の集散夥しく取引活況を呈して、般盛を極めて居る臺北市内の商業界は、これも御多分に洩れず、近時の内外財界の不振と事業界の萎微、農村の疲弊甚しき等の各種の悲觀材料は、高唱さるゝ緊縮節約と相俟つて、不景氣は深刻化に居る。この間に於て活動し經營に努力苦心する内臺人の商人も、過去好況時代の反動で、争うして現狀を維持し、受難を脱せんとして腐心して、種々活動を試みて居るものの、收得は思はしからず、油斷をすれば赤字を見んとし、臺灣人側の商店では破産を見るものなきにしもあらず、二三の倒産者に、尠からず脅威を感じて居るが、内地人側の商店は、幸に倒産沙汰



を餘り耳にしないけれど、多少數あるのは免れない。而して内臺人商店に就いて、その各商人の營業振を比較觀察すると、全くその趣きを異にして居るのは、既に民族を異にし、これに伴ふ氣質が同一でなく、また顧客が一つは内地人本位他はこれと反對に臺灣人であり、商舖所在地も、内地人側は城内に、臺灣人側は大稻埕と艋舺であり、又た内地人商店は官廳その他の俸給生活者を主とし、内地人を顧客にして居るが、臺灣人商店は、市内竝に隣接の街庄在住の臺灣人で、數に於ても比較にならぬ多數である等、全く分野が明白なものも、土地柄その他の事情を考へれば、當然のことと頷かれる。内地人商店は、現代に適した店舖を有し、店の内外には、人目を惹く新時代の裝飾を施し、飾窓や店内商品の陳列に、それと苦心を以て意匠を凝らし、廣告看板やポスターに至るまで、競争的に時代の尖端を行き、改善進歩に不斷の努力を惜まない、無論商人としての生活程度も、營業經費も向上して居るので、商品の價格もこれ等諸掛や仕入その他の金利を加はるからして高いが、品質の好良なのを選び、時々刻々時勢に伴ひ變遷する流行に後れぬものを豊富に取揃へる等で、臺灣人の商店で買ふが如き安價ではない。然しもう



不況時代の今日では諸物價の低落に因り自然に安値を示すの傾向があるが、尙全く脱けない従來の慣例の掛賣が、幾分の減少を見みつゝあるも、何せよ俸給生活者が大多數だから己むを得ないが、漸次時勢はこの掛賣から現金賣になる趨勢が擡頭して來たのは、新しい現象と見て可い。而して内地人商人は賣出しを種々の名目、例へば中元、始政記念、歳末と云つた工合に機會を作つて實行し、顧客の誘致に努めて居るが、歳末の賣出しは歳の市で、大々的に各商店が馬力をかけ、福引に購買力を唆り、商人街は街頭に店頭に電飾その他裝飾を施して美觀と景氣を添へ凄しい活動を試み、毎年多少の多寡はあるが巨額の賣揚金を示して、臺北の一名物と云はれ、在住人は誰しもこの賑ひの中に、歳末氣分に浸りつゝ素見や買物に出かける。而して内地人商人は、領臺當初以來官廳を主として諸會社等に所謂御用商人となり、一方一般内地人を顧客とするもの多く、然らざる一般の商店も、内地人向の品即ち内地や外國製の品のみで、最初は一般在住内地人は、植民地稼ぎと云つた工合に、金遣ひも荒らく、商店の數も少く競争的態度に出でない時分は、店員のサービスは、お話にならぬ位無愛想で、賣つて下さい賣つてあげや



うと云つた調子、値切るなら最後賣らぬと云ふ態度、常得意には相當商買氣を出して、お客本位にしたが、それも先方主人の社會的地位や階級を顧慮したもので、通り一遍の買手には驚くほど冷淡であつた。この傾向が傳統的に現存し、幾多時勢の變遷で改善されつゝあるが、商買上手なお世辭のよい、買よい店と云ふのが多くなき、概して改良進歩したものゝ、店員のサービスにはまだ改善顧慮の餘地が多い。而して内地人を顧客として、多數人の臺灣人を得意にせぬので友喰ひの形となり、而も店舗を構へての諸拂は多く、内地人の態面上生活費も安くならず、俸給生活者を顧客として居るから、彼等商人の營業状態の良否は、官界や會社銀行等の人々の待遇如何に支配されると云ふものである。近頃は新しい若人や、中産階級以上の臺灣人が、主として洋雜貨吳服化粧品貴金屬時計等の各商店に、買物に行くのが漸増したものゝ、多くはない上に彼等に對するサービスは、一段と悪く臺灣人だと輕視する風があるのを認める。而も恚うした臺灣人は内地人よりも多額の買物に、金札を切る上得意なのに、この風が見られるのは敢て臺灣人を顧客にと、その方面に進出しないことゝ共に考へさせられる。これは概括的だが、



内地人の商人は、大實業家は別として、所謂小商人は、臺灣人の商人よりは品物は良いが高く賣つて、多く利益しやうと考へる。これは生活程度や店の諸掛に費用が多く要する故だが、この風が明白である。而も臺灣人の商店では、少しの無理も通り買ひ易い、安いのを買はうとするのが人情だ、それで内地人も臺灣人の商店に赴くやうな狀勢が漸次増加して、結果は臺灣人の商人に顧客を蠶食されて行く、寒心すべきこと、思ふ。臺灣人の商人は、商買上手の支那人であり、掛引も可なり多く、掛値を云ふのが盛なもので、臺灣人から物を買ふ時は、恐しく掛値を云ふから三分の一以上に値切らぬと損とは、内地人が云ふ常套語、臺灣人の商人も値切られるから掛値を云ひ、而もよく思ひ切り値引して商品の賣捌に努めるし、商人は一般に業務に甚しく勤勉で、且つ低利の資金を融通する便法があり、生活費は極めて安價で、店舖も内地人のそれの如く飾らず、廣告も宣傳も餘り大掛には行はないから、商品は薄利多賣の主義で營業、愛嬌も蒔くし、氣輕に内地人をして買ひ得させる。商品は多數の臺灣人を顧客とし、その嗜好に適するもの以外に、内地商人に接近して嗜好品質の鑑別を會得した後、内地人顧客を薄利多賣



主義で誘致すべく、機敏に働くのは驚くばかりである。だから臺灣人以外内地人を顧客にして、内地人商人の營業圈内に蠶食しつゝある。而も臺灣人商店は大多數依然舊態を保持し、現代色彩も薄くサービスやその他も、内地人商店とは趣きと異にして居る。民族の差異とは云へ、その營業振に兩者各特色が見られ、或者は同じき營業振を見するものもあるが、概括的に商人氣質が全然一様でなく、日本的と支那的と區別が出来る。これは城内と大稻埕に行けば、一目瞭然として合點される。而して商業團體としては、領臺後内地人側に於ても屢次組織され變更解散多く、今日では内地人側には明治四十一年七月設立の、臺北商工談話會を改稱した臺北商工會があり、臺北實業會があり、商業會議所なきため、恚うした機能の幾分を遂行するに努めて居る。殊に臺灣人側には從來幾多の團體があつたが、屢々變遷を見漸く近頃では健實な活動をなす、臺北商業會と云ふのがあり、その他各同業組合が幾多あつて、活動の機關として商業界に貢献して居る。

臺灣が内地の延長と云はるゝからではないが、近時著しき交通機關の發達は、内臺間の距離をも夥しく短縮したのもその一因で、從來餘り見なかつた、内地の有力商店や各



府縣會の物産見本市と云つた類の、出張販賣が行はれる一方、通信販賣が發達して、これも多く見るやうになつた。これは内地に於ける商人の經營方法の改善進歩の結果であるが、殊に近時財界の不況は、一層この機運を多く作らしめたものと云つて可い。出張販賣店の進出は、主に呉服洋雜貨その他百貨店物であるが、見本市式のものはその地方の特産品乃至土産品で、種類も多種であり、何れもお國自慢の氣分が漂つて居る。出張販賣は三越大阪支店と高島屋が、毎年春に來つて開店し、盛況好成績を見せて歸るのが常例である。この他にも内地の商店がこれを試みるが、三越高島屋のそれに及ぶべくもない。三越や高島屋が出張販賣を開始すると云ふ、廣告や宣傳は可なり早く着手して、市内の要所に立看板やポスターを使ひ、市民各家にビラを配布したり挨拶廻り等、開店準備に油斷なく活動する、主として内地人だが殊に婦人連はこの出張販賣を常に歓迎し待っていて居る調子で、それも當今こそは、市内の商人は對抗上安價を示したが、以前は土地柄内地人の店で賣る商品は高價であつた反對に、進出した出張販賣店の品は、流行品で良く價も安いので、一層待ち受け歓迎したのも無理からぬこと、殊に商品が呉服洋雜



貨等が主なので、顧客は婦人であるから、この傾向が著しいのも當然であらうと思はれ、尙更に内地一流商店の商標を印刷した紙包を抱へ歸ると云ふことに、一種の軽い誇を持つからである。近時はもう品も價も臺北城内の商店のと大差ないが、前記の如き事情のため、婦人の心は甚く引きつけられて居たから盛況を見、而も臺灣人も買物に来る者が漸増して、人氣を沸かせて居るのも、また面白い現象と考へる。これに對して臺北の内地人商人は確に脅威を感じ、對抗的に賣出しをなすものがあり、殊に呉服商が影響を受けるので、城内の呉服屋さんは大に奮闘し、種々策略を廻らして對抗して居る。然し彼は一時的だから、思ふほど打撃が甚しくないとか、それにしてもこの出張販賣の進出は、確に刺戟を與へたことは僅少でなく、自然に覺醒を促したものと見られる。従つて臺北の内地人商店は時流に鑑み、營業方針や宣傳廣告、店舗内外の裝飾、店内商品の陳列方法に、新機軸を出さんと腐心し、店員のサービスも改善され、昔日とは面目を一新したが、まだ考慮改善の餘地が尠くない、尤も近時は、ネオサイン、マネキンガールも實行され、



チントン屋の廣告宣傳等、なか／＼時勢に則した活動に努めて居るのも嬉しい。通信販賣は可なり盛況で、小包の扱ふ數も驚くべき激増である。これは振替貯金や引換小包の便法が、盛に利用し得るからであるが、多くは呉服洋雜貨類であると云ふことである。

各府縣からの見本や土産品紹介を主とした催は、盛に販路を擴張して臺灣に及ぼす目的なので、屢次行はれるが、目的が紹介が主である故、内地人商店の營業には影響は尠く、一面に取引關係の新に開かれるのが多いと云ふことである。而してこれは資本關係や、廣告戰術の活用上からであるが、出張販賣や通信販賣にしても、盛に廣告宣傳に努め、これには思ひ切つて多大の費用と勞力を惜まない、立派なポスターやカタログ、看板にピラ等々、その他新聞雜誌の廣告、チントン屋を利用したり、店自身の廣告行列も可なり盛に賑に行ふので、一層効果を收められると云ふのも、これは廣告の功果偉大なることを證するもので誰しも知る所である。然しながら臺灣の商店、内臺人共に廣告に就ては、内地のそれには及ばないが、看板ポスターその他にも相當に費用も惜ま、總てが



巧妙でない憾みがあるし、廣告術は拙劣であると云はれ、新聞雑誌の廣告でも内地のそれには及ばない。これは資本關係も勿論だが、廣告と云ふものを利用する方法が進んで居ないかとも思はれる。それに島内殊に臺北市内にも、大小の新聞雑誌が數多發行され、所謂廣告取なる職業人が露骨に五月蠅ほど勸誘募集し、偶には強制等の不正手段も敢行するので、迷惑こそ感ずれ利用するのを忌む傾向が著るしく、讀者が實際新聞雑誌の廣告を注目するほどの意匠もなく、平凡なので功果が尠いのである。これは一つは商人の廣告利用の拙劣なものと、恚うした事情からで、新時代の商戦上には、大に改善すべき考慮を要するものでないかと、識者は云つて居る。けれど時代は動く、漸次臺北の商人は、新時代の商人としての研究工夫に腐心努力して居るから、彼是云はれるもの、敢て十年前と云はず、五年前に比しては、驚くべき進歩を示して居る。それ故將來は島都の商人として恥しからぬ活動と進展を見るものと大に期待して居る。



## 誇り得べき公設市場と行商人

…公設市場と市場商人…市場出入の人々と女風俗…

行商人と臺北の物價…雜貨屋と購買組合

臺灣には臺北を首として全島各地に、公共施設の一として誇り得べき大小百二三十の公設市場がある。この公設市場は、最初保健衛生の不完全を極めた清國時代に引き續き、萬事草創の領臺最初、保健衛生の施設を急とし、その一つとしてこの見地から、日用必需品、主として魚菜肉類を販賣する機關として、官に於て公共衛生費を以て、各地に大小の公設市場を開設した、寔に利便な衛生的の施備で、内外から渡來する人々は、何れもこれに對して稱賛の辭を惜まず、内地に見ざる誇り得べきものと云はれて居る。由來臺灣には今日見るが如き市場は、領臺前には一つもなく、唯だ街路の兩側や或は廟宇の近傍等交通の頻繁な場所に、日用雜貨や食料品を販賣する小賣商人が集まり、露店式の店舖を竝べ、風塵吹き捲くる所に、平然として商品を陳列販賣して居たもので、



店頭に雜然として、塵埃に染められた商品は、見るからに非衛生の感を深くしたが、一般人は衛生思想に甚しく缺如して居たから、何等不都合不結果も見ず、便利として盛に利用して來て居たのである。臺北でも艋舺には殷盛を極めた時代は勿論、それ以前から領臺前まで、主として野菜類は今の入船町媽祖廟附近に、魚鳥獸肉も今の新起町の祖師廟附近に、各多數の小舗を竝べたもので、日用雜貨等は兩者の何れにも憊うした店の間に介在して居たし、大稻埕には今の永樂町や大橋町に、又大龍峒にも一つあつた。設備としては市場と見るべきものでなく、單に露店の集合したものと云ふ位に過ぎなかつた。かくの如き状態なので、一日も早く改善の要を認め、領臺後最初は民間の人に建設經營せしめたが、衛生上の要求と經營者の利益とは兎角一致を缺いて、結果は不良であり弊害が認められたから、遂に公共衛生團の經營に委ね、公共衛生費を以て收支し、市場取締規則を公布して、地方廳で設備竝に場内の取締を勵行した。然るに市制實施後即ち大正十年四月、市街庄にこれを移管、販賣人より一定の使用料を市場使用條例に依つて徴し、一般人士をして廣く利用せしめつゝある。我臺北市内には現在市營消費市場と



して五個所あるが、領臺後建設以來、幾多の變遷を見たのである。而もこの外に屠畜場がある、臺灣人は豚肉を佳味とし大に食用に供し、毎年夥しく豚は屠殺さるゝ一方鶏も亦多く、牛は農耕に我等の爲めに忠實に働くからと云つてその肉を食せぬ風なので、屠畜は殆んど豚であつた。而も屠殺を屢々行ふに拘らず、一定の屠場がないので各自任意の場所で行ひ、弊害も多く不衛生であつたから、改隸後地方廳をして私設屠場を設定取締に留意したが、衛生上不満な結果を招いた故、公共衛生團に移管せしめ漸く設備も稍完整したが、後に地方廳にて管理することとなつて今日に至つた。臺北市内には綠町、大龍峒町、大直、中崙等に屠畜場が設けられて居る。而して臺北市内に於ける市場は、領臺前は各地同様前述の如き状態で、市場と俗に云はれたけれども、市場の設備や取締もなく、單に露店式小賣商人が店を置き並べての商賣で貧弱なものであつた。改隸後は漸く世情平穩に歸し舊態に復したので、艋舺方面は個人經營の下に、簡単な建物を以て、祖師廟附近（今の新起町）に市場を設けたが、更に西門外即ち現在の西門市場と云ふ盛り場の所に、新に市場として建物を築造して、魚鳥獸肉青物市場として、明治二十九年



九月開場し、祖師廟附近のものを撤廢した。これが臺北に於ける公設市場の嚆矢である。續いて大稻埕方面にも六館街（今の永樂町一丁目邊）に、同様の市場を大稻埕市場と稱して開場したが、尙當時は兩市場以外に、舊慣の市場類似のものは各所に大小これを見た。續いて大稻埕建昌街（今の港町）に、翌三十年十二月臺北米穀市場開業し、米穀取引行はれたが、これが正米市場の前身である。更に同年七月臺北臺灣人紳士が組織した臺北衛生合資會社の手で、大稻埕建興街（今の太平町二丁目邊）に屠獸市場が設けられ、翌三十一年六月には北門附近に北門新市場を、更に大稻埕の屠獸市場を大龍峒方面に移轉し、その跡に魚菜市場を開いた。その後明治三十三年九月一私人又は一會社の經營に委せしめず、街庄又はその一部に共同經營せしめることとし、公共衛生團にて管理することとなつた。而して艋舺の下崁庄（今の綠町附近）大稻埕大橋頭（今の大橋町附近）にある市場類似のものその他に就いてはこれを廢止し、新に下崁庄市場として、同所にも屠畜場を併置して市場を設けた。尙明治三十五年三月一切私設を許可せず、地方公共衛生團の管理の下に經營し、公共衛生費を以て收支し、市場取締規則に依り、場内設備取締を勵行するこ



となつた。悉くて臺北三市街の在住民、殊に艋舺大稻埕方面の臺灣人には、非常に稗  
 益利便に浴し、衛生上多大の効果を致した。明治四十一年十二月には、市場取締規則に  
 依り、市場としての設備を完成すべく、新に改築された新起街市場、即ち西門市場とも  
 云はるゝ、現在の西門町市場と、大稻埕に於ける從來の各市場並に北門市場を廢して、  
 新に蘆竹脚街（今の永樂町二丁目）城隍廟側に大稻埕市場として、現在の永樂町市場が開かれ  
 た。而して下炭庄の市場は、屠畜場を廢しその儘設備を改善して繼續して居る。然るに  
 大正三四年頃大正街（今の大正町）と云ふ内地人住宅街が建街され、引續き該方面に内地人  
 多く居住するに至り、今の御成町市場が開設された一方、南門外方面にも内地人街を見  
 るほど、内地人の居住者漸憎の結果、龍匣口庄（今の千歲町）に現在の千歲街市場が開場さ  
 れた。かくて市制實施後は總て市場は、市に於て管理することとなつて今日に至つて居  
 る。即ち市營消費市場は、大正十年四月以來市は移管を受け、從來の五市場を管理し、  
 時勢の要求に順應して、衛生保健上の見地から開設した關係上、この方面を重視したが、  
 今や經濟方面殊に私的經濟上重要性多きに鑑み、設備は勿論取引賣買上の改善擴張に努



め、物價の調節を圖り、優良品を廉價せしむる等、銳意これが機能を充分發揮して、市民の福利増進の爲め盡瘁し、功果大に見るべきものがある。而して市内の市場中では西門町永樂町の兩市場は最古のもので、前者は市の中央部に近く、規模も大きく商品も豊富で、便利の地に在るため、販賣店も販賣高も多く、主として内地人と顧客として居る。後者は殆んど臺灣人の顧客で、前者に次ぐ販賣高を示して居るが、他の三者中綠町市場舊下崁庄市場は、土地柄艋舺方面の臺灣人を對手とし、規模も大きくなり、販賣高も前二者に比すべくもない。御成町や千歲町の市場は、何れも前各者に比して新しく、その附近の内地人を顧客とし、規模も小さいから販賣高も多額でないが、これとてその附近の人に便益を尠からず與へて居る。而して各市場は何れも所在地の町名を冠した名稱であつたが、最近西門、綠、永樂、御成、千歲の町名を冠する食糧品小賣市場と改めた。而して以上五市場の最近昭和四年中の總賣上金額は、實に三百七萬二千九百餘圓で、賣店數は三百六十九店であつた。この他市には家畜市場がある、これは從來大龍峒を本場とし、艋舺綠町即ち下崁庄の市場内に分場を設け、生豚、山羊、黄牛、水牛、雜種



牛の取引を行つたが、昭和五年度がら一箇所とし分場を廢したが、生豚の取引が就中盛況を見、目下豚のみは糶賣を行ひ、日々の相場はこれを各消費市場に通報して居る。最近昭和四年中の取引家畜頭数は、三萬九千六百餘頭價額百六十九萬千百餘圓を示し、尙鷄鶩等の家禽竝にその生卵も取引されて居る。次に從來は新起街市場即ち現在の西門町市場の一部に魚市場が設けられ、臺北魚市株式會社をして糶賣代行をさせて居たが、昭和五年度から魚市場と蔬菜市場を統一して、新に中央卸賣市場を壽町五丁目、立派な洋式の現代的市場建物を建設し、同市場内で新設の臺北中央市場株式會社をして代行せしめ魚菜の卸糶賣を行ひ、商品を各消費市場に供給して居る。この卸賣市場の取引高は昭和四年に於て、魚類八百六十萬千五百餘斤價額百三十八萬五千三百餘圓、蔬菜類は六十九萬六千三百餘圓で、魚類は主として基隆地方より仰ぎ、淡水その他からも供給される。蔬菜類は市内の農村部落よりするも、多數は隣接せる新莊竝に海山の兩郡各地から供給されて居る。而し最近内地人が、多く郊外の地に家屋を建築する者多く、所謂新開地を各所に見るに至り、東門町即ち文化村や、その他に於て大小の街衢を見る方面には、巧



に市場取締規則に抵觸せぬやうに、私設市場を開場するもの生じ、而もこれ等は、その附近在住人は勿論、甚しく遠からざる地の人々にも便利なりとして歓迎利用され、盛況を見るに至つたが、一方中央卸賣市場の取引に不満の蔬菜供給者は、所謂場外取引を行ひ、それ故種々の紛擾を屢々惹起する始末で、今や私設市場問題と共に、州市當局はデレンマに陥り、解決善處すべく協議中にして、多く弊害を伴ふ兩者に對しては、早晚何等かの方法を以て解決處置すべくその必要が切迫して居る。

誇り得べきその設備を有する臺北の消費市場は、その設立動機が保健衛生上の見地からである故でもあるまいが、場内は整頓され、一見美しく整つて居るのを感じずるが、殊に最古にして最大な西門市場は、全く誇り得べき立派なもので、觀光視察の人々は、必ず一度は親しく觀察するの値がある。全市場は西門町の一角、楕圓公園の程近くに道を距て、建られ、門を入ると廣場があり、其處に臺北稻荷神社があり、事務所やピヤホールも建てられ、門の正面入口には煉瓦積の二階建の八角堂があり、階上は以前繪葉書や蕃産物、文房具その他の販賣店があつたが、今は簡易食堂となり、和洋食を始め



酒類を販賣し、喫茶店も兼營して居る。階下は以前から各種の販賣店があつて、八角堂に接し西の部分は野菜類の店で、それと丁字形をして魚鳥獸肉類の店が並び、何れも明るく美しき店構で、美しい明い感を抱かしめ、立派に整頓して居ることは、何人も贅辭を惜まない。又た以前は稻荷神社の後方に魚市場があつたが廢され、市營自動車の車庫や事務室になつて居るし、西寄の一角に冷蔵氷庫がある。而して最近市場を圍む廣場には淺草の仲店に似た小店舗が軒を並べて半圓形をなし、各種の販賣店が照明美しく夜は一入の賑を呈する外、日没後市場は閉止するが、廣場には露店が夥しく開かれ、夜の盛り場を見せ、臺北在住内地人唯一の夜の散歩場所として常に人出多く、この附近一帯は夜店の燈影に彩られて美觀を呈して居る。綠町や永樂町の兩市場は、殆んど臺灣人が顧客の大部分を占め、西門市場とは趣きを全然異にして居る。永樂町市場は綠町市場に比し、開場も古く規模も大きく、人出も賣上も夥しいが、建物は何れも木造のもので、場内の店舗は一定の形式の下に店構をなして居ると共に、建物外の廣場には、臺灣人勞働者向の飲食物を商ふ露店式のものや、行商人が店を開いて居る。御成町や千歲町の市場



は何れも内地人を主な顧客とし、西門町のよりは規模も小さく、開場の日も新しい、建物は煉瓦積の平家で、此處も一定の形式に依る店構で、他の市場同様店が竝んで居るし、御成町の方は、永樂町や緑町の市場に見るが如く、臺灣人労働者向の飲食店や行商人が商つて居る。これ等市場内で販賣する商品の値段は、毎日公定相場を場内各店頭に、各物品に就き見易きやうに表示する外、臺北放送局開始以來、ラヂオの放送に依り市より發表して居る。その他市に於ては、役人を隨時派遣して視察監督せしめ、市民の聲を耳に入れ、改良と擴張に努めて居る。全く市場は市民の日常生活上極めて必要便利なもので、これに依つて受くる市民の福益は、蓋し多大なものがあると共に、市民はこれを盛んに利用し、同貸家でも市場に近いと、多少高値でも借受人が多いと云ふ位である。どこで場所柄だが、何と云つても西門町市場は、品が豊富で概して良好、内地人向だが、御成町や千歲町は規模も小さくなく、顧客の數も少いし、料理店との取引がないから品薄で稍悪いと云ふ評判である。他の二市場は臺灣人向で、緑町市場は小規模で、顧客もその附近即ち艋舺街の臺灣人が主で、商品も潤澤ではないが、需給の調節は見られる、永



樂町市場は市内臺灣人を對手だとも云ふべく、規模も大きく品も豊富で取引が盛である。臺北市内の五市場も、對手にする顧客が、自然に場所柄に依るからでもあらうが二つに分別され、従つて西門町御成町千歲町の三市場には、内地人が出入して臺灣人は稀有であるが、他の二市場は全くこれと正反對で、殆んど悉く出入するのは臺灣人であると云ひ得る。それで市場内の景觀が、出入の人の様子と共に各異色を見せて居る。内地人の出入する各市場は、主として主婦連なのは當然だが、西門町市場では朝即ち午前中は、料理屋の板場や、女將その他商買人の買出し連中であるのが一寸他と異つて居る。主婦連の出入は何れの市場も午後で、賄の材料を買ふのであるから、午後三四時頃が出盛りで、憊うした女連で賑ひ混雜を常に見せ、商人も馬力をかけて商買し活況を示して居るが、この光景は一寸内地でも見られないものである。それに商人に臺灣人が多いので、臺灣人の商人は掛引きが強く、掛値を云ふものと先入主となり、公定相場が示して勵行されて居るに拘はらず、女ながらも勇敢に値引きや何かの交渉が切に試みられ、この談判が面白く確に一光景であると共に、市場歸りの女連が、風呂敷包を抱え竹籠をさげ、



赤い鯛をぶら提げて、ぞろぞろ家へ急ぐものや、買物を抱へたり前に置いて人力車を駛らす街頭風景も珍しく、市場へ行くとして何も衣装を替へ身装する者はなく、平常の儘で至極簡易に出かけるほど、氣輕な買物氣分が嬉しくもあり、臺灣いや臺北らしく、この女風俗は確に一特色と云ふべきである。内地人の出入する市場は、何れも清潔であるが、臺灣人の出入する市場は、建物の關係もあらうが、雜然として居る感があつて不潔で、彼等臺灣人の有する一種の臭氣が漲り、集まれば喧噪な彼等のこと故、場内は混雜し喧噪甚しく亂雜殺風景である。而も出入するものは殆んど男で、これは食料は男が買ひ求めて歸るからである。而して市場内は朝から夕方まで出入が絶えないし、従つて場の内外附近は常に雜沓と喧騒の世界なのには全く呆れさせられるが、場内の各店頭は顧客を前に、元氣よく商買して居る活動振は、活々として臺灣人の商買上手を思はしむるものがある。而も夜間は開場しないから、市場附近は晝間の盛り場で賑ひ、雜沓を極めて種々な警察事故も尠くないとか、而して臺灣人は内地人の如く盛に市場を利用しないが、それでも時勢が、漸くこれを利用して便益を求むるやうになつた。内地人は何れも市場を



調法物とし利用するが、殊に近來は交通機關の發達著しく、市營バスの運轉開始以來、市場に遠き所からも、これを利用便乘して出かける向も多くなつたが、更に近頃は奥さんと云ふ上流婦人も、自ら歩を運ばせる向も見えて來たしするやうに、市場風景も漸次變化しつゝあるのである。

便益多き市場を五箇所も有する臺北市内に、これは島の首都繁華の地、人口も多く殊に内地人も尠くないからか、行商の尠くないのが目につく。市内を賣り歩く行商は、臺灣人支那人で、豆腐や野菜花賣等の行商が多數のやうであるが、夏はアイスキャンデー等が尠くない。内地人の行商も相當あつて、販賣する商品は野菜類でなく、玄米バンどか云つた類やその他である。一體臺灣人は自己經濟に長じ、小供でも行商する風があるし、又た市場に近くない人は行商に依つてこれを求めばならず、殊に内地人は行商を利用する者尠くないやうだから、豆腐や野菜の行商が多いのも頷かれる。豆腐行商に支那人が多いのも妙だが、野菜行商は内地人が出來ないのは仕入關係のためと云はれて居る。而して臺灣人や支那人の行商は、何品を賣るにも根氣よく長い交渉の末、値引をし



て賣捌くことに努める、つまり掛値も思ひ切つて云ふし、買手もこれを承知して、思ひ切つて値引させ、對手が臺灣人なので、多くは女だが内地人は殊に無遠慮に談判する、これも面白い街頭風景の一つで、臺灣人や支那人の氣質が、明白にその一端を示して居る。而も市場よりは價は多少安いが、時々粗惡な品を握らせることがないでもない。然し常得意で掛賣をする者には、流石値引も餘りに行はず、多少高いが品物は悪くない故安心が出来ると云ふものだ。されば朝夕の豆腐屋や晝の野菜屋肉屋魚屋の行商は、内地人の主婦連には調法がられ、市場は遠く行かれない人はこれで所用を達して居る。臺灣人の方は中以下の家庭に於ては大抵男が仕事の歸りに食料を買つて戻るから、行商は主婦が野菜や肉類その他を、臨時必用の場合があれば、通りかゝりの行商を呼んで買ふ位で、餘り利用しない風であり、而も彼等臺灣人一流の賣買掛引が盛に行はれる。内地人の行商は、豆腐屋や野菜屋等はないが、飲食物類が多く、大抵は内地人街を賣り歩き、餘り臺灣人街に行かない。最近不況の結果であらう、内地人の行商も多きを加へたが、思ふが如き收得もないらしく、これも臺灣人に押され氣味である。その他露西亞人羅紗



賣や支那人の吳服賣が、可なり動いて居るのは内地と同様であるし、内地から賣藥その他の行商も可なり入り込んで來て居る。而して臺灣人の行商中では、煮賣屋が非常に多く、彼等は街頭到る所に荷を卸し、多くは苦力と云はるゝ労働者を顧客とし、薄利多賣式で忙しさに働いて居るが、殊に臺灣人街に於て人目に著しい。而して所謂内地人の商往來にもない、珍らしい行商の數々であつて一々枚舉に遑なく、出擔賣米糕粥の粥食賣、出擔賣澳燒の寒天賣、出擔賣仙菓の仙草賣で、これは仙草を煮て冷却し黒汁を混した寒天の如くにしたものを、夏の食料として賣るのである。米の粉と水を和してこねた小粒の東京丸を賣る出擔賣東京丸と云ふのがある。これ等の出擔賣即ち行商は市場や廟前さては住來繁き街頭によく見受け、臺灣色濃厚な珍奇な行商である。市場では日々に市役所で發表する公定相場で賣るのに、行商は勿論市場以外の商店で賣るものとは、同一の品で質も異ならないのに、價格が一致しないのが多い、これは各商人の勉強振や種々の掛引關係に基因するが、臺北の物價は米以外取引市場なく、市場の公定相場は中央卸賣市場の夥賣の結果で定まるけれど、一般の物價は仕入先の相場で定まると云ふ



もので、内地仕入品は内地の各市場の相場に準據し、支那からの仕入品は銀の相場が至大の關係を有する等で、簡單に物價は定められぬが、大勢は内地の市價に準せられ高低を辿つて居る。これに對しては督府でも又た臺灣銀行でも、常に調査してその趨勢高低を發表して居る。然し概して臺灣の物價は土地柄内地に比して高い、これは運賃や金利その他の事情が然らしむると共に、遠隔の地であり植民地と云つた氣分に支配されて居ると云つて可い。これは内地仕入品で、土地の生産品はこれに反して安いのは當然で、バナナや鳳梨の如きは内地では驚くほど高價だと云ふことである。領臺前は物價などは不定亂雜を極めたが、領臺當初は世態が草創時代で、夥しく不便であつたり、新領土植民地と云ふので、驚くほど高値でも賣れたのは、需給關係が圓滿でなかつたからである。その後歲月を重ねるに従ひ、開發進展の著しきものがあり、交通經濟その他の機關も完備し取引も圓滿に行はれ、需給關係も亦た順調を見たので、物價の高低が明白に知らるゝやうになつたが、尙今日でも多少内地よりは他の朝鮮滿州樺太等の植民地同様高いのは免れない。而して臺北に於ける物價は、領臺後漸次甚しき變動を見ざるに至つたが、大



正三年世界大戦後は、財界が好況となり更に反動を受け今日の不況を見たので、物價の高低にも夥しき變化を見るに至つたのである。大正三年七月を基準(一〇〇)とすると、臺北の物價指數は、大正九年三月が最高で二百八十六・九に達したが、俄然襲來した財界の大恐慌に激落し、同十二年には百九十三・一を示してからは、漸落の歩調を辿り、昭和二年には百八十・九となり、同四年には百七十・九と低落するに至つたが、昭和五年一月金解禁の實施に爲替相場は平價に近く昂騰したが、折柄前年末來の株式暴落で恐慌を呈した米國財界は、更に不況を増したる上に、銀塊相場の未曾有の慘落に我國重要品各輸出の全く不振となり、生絲綿布以下重なる輸出品相場は悉く低落した一方、内地は各商品共に全國的に低落したから、臺北の物價も呉服類を先頭にこの大勢に押されて、續々低落を辿る一方となり、市況愈々不振を極め、指數は一月の百六十・四から、八月は百四十九・六に低落して而も漸落を續けて居る。然しこれは問屋筋の卸賣相場で、市内各商店の小賣相場は、米穀類は低落が目立つたが、その他も多少の低下を見たのみで、卸相場に比して容易に低下せず、唯だ景品等の添へ物に買氣を誘ふ手段が行かれる



位、比較が出来ぬ位高値の狀勢で、物價下落と小賣商人は口では云ふが、實際の事實は容易に低下を示さず、種々の考案に腐心して顧客を誘致し、購買力を咬るに努力して居るのみに過ぎない現狀であるから、今日でも内地の通信販賣で買ふ品と比較すると、値段は驚くほど臺北の方が高いのは事實である。物價下落の、不景氣緊縮時代のと、聲のみするだけでは、漸次商品の賣行きが悪くなるのも當然で、日用必需品以外、奢侈品に屬する、貴金屬品や装身具等を買ふ者が、全く僅少となるのも仕方がないと思ふ。まだく臺北は小賣値段が高いと云はれても、商人は辯明することが出来ない狀勢に在るのである。然し島内各都市の物價に比しては、高いと云ふ部類には入つて居ないが、さりとて安いと云ふ部類でなくまづ中位であると云ひ得る。

臺北在住の市民は、日常生活に必需なる食糧品その他は、市公設の消費市場、即ち食糧品小賣市場と、野菜屋や豆腐屋の類の食糧品の行商に依つて供給を受けて居る外、市内所在の各商店に於て、それ／＼思ふが儘の品が購入し得られて、何等不便を感じないのである。殊に母國を遠くにして活動し生活する内地人は、進歩發達の著しい臺北に在



住して居るに於ては、何等内地に居住すると異ならぬのみか、田舎や小さな都會地に居住して居るに比して數等便利で、不自由なことは毫は感じない。然し内地人は市場や商店行商人を利用する以外、雜貨屋なるものを非常に多く利用して居るのが、臺北でもこの事實は著しく新來の人々を感ぜしめる。雜貨屋は名の如く、日用必需品は米薪炭類から食糧品は悉く取揃へ、酒煙草鹽は勿論菓子類や清涼飲料等、その他大小幾多の雜貨類に至るまで販賣し、更に店に備付けてない品の注文は、如何なる品物でも、奔走買ひ求めて、顧客の需用に應じ満足さすべく努力し實に調法な店である。されば一度雜貨屋に注文すれば、如何なる品にても、居ながらにして得られるので至便極まるもので、従つて各種の商店に注文買ひ求めずとも、雜貨屋一軒で用を達し得られるから、内地人の家庭でこれを利用しない家は殆んどない位である。殊に轉住その他で不案内の土地に新居を構へた場合、この雜貨屋を利用することに於て、不馴から來る不便を免れて夥しく便利を感ずる。従つて臺北市内殊に内地人が多く居住する方面には、到る所雜貨屋の店舗を見る始末で、その數も蓋し尠くなく、而も程近い所に各雜貨屋が店舗を構へて居るのをよ



く見受ける。それ故彼等雜貨屋は、顧客の多きを望み、お得意さんを増すに腐心努力して、可なり激甚な商買競争が行はれて居る。されば顧客の注文は、出來得る丈け奔走盡力して満足させるに汲々たる状態で、随分無理な注文さへ甘受して勉強するから、調法がられることは一層である。雜貨屋は米穀薪炭醬油味噌類の食糧品が主であつたのが、時勢の進歩に伴ひ、顧客吸收上からも、これのみでは顧客の注文に應じ難く、不満を招くので、多くの種類の商品を豊富に取揃へ、尙自己の店になきものは、それ〴〵の方法を以て奔走し、他店より取寄せて注文に應じて居るから、なか〴〵多用多忙で、店員も多く手廣く商買を行つて繁昌して居る店も尠くない。而して毎朝注文を聴取すべく店員を、毎戸に訪問して御用を聴くことを、一日も缺かさず不時の注文に對しても、迅速に注文品を配達すると云つた工合に、實際よく働くのに驚くし、新に店を構へると、新顧客の爭奪に奔走活動する等、なか〴〵抜目がない。而も雜貨屋は殆んど掛賣一方で、現金賣は僅少だが、縦令往々掛倒の災難に逢つても掛賣でないど、少し安くしても顧客が、これを便利として利用しないし、顧客も少し位高値でも注文するから、通帳を頒布して月



拂にすると云ふ從來からの慣習が、現時も續行されて居る。顧客にしても、掛賣の金利やその他で多少高くも、掛買で直に注文品が得られるから、高値は然う問題にしない風が尙存在して、双方便利と利益を得て居るのである。而も他から調達した品は、手数料を加へて幾分高いが、それも便利に得られるので、顧客は彼是餘り云はない。恁う云ふ工合に、内地人の各家庭では、大小共にこれを利用するから、餘りに過大の賣買をしない店は、多少賣掛金の回收不能があつても、この災害も幾分商品の値に加味する風があるから、漸次繁昌して行く店が多く、利益も尠くない商賣とあつて、新規に開店するのも多いのは、敢て新開地が所々に出来た故でもあるまい。近時は商賣に機敏な臺灣人中には、この内地人が雜貨屋を經營する工合をば研究會得して、内地人雜貨屋と同一の營業振を以て、内地人を顧客として開業する者多く、彼等は内地人に比し、生活程度も低く、生活費も安く、店の諸掛費も尠い上に、薄利多賣主義の下に營業し、極めて安價に勉強するばかりか所謂商賣上手の營業振で、顧客を吸収に努めて居るから、漸次内地人の店と對抗して來たのが、その顧客を奪ふやうに侵蝕しつゝあるの狀勢である。而して臺灣



人は生活様式が全然内地人と異なるので、雜貨屋を利用するに及ばない關係上、臺灣人街には多少臺灣人が開店して居るも、甚だ少數に過ぎないし、内地人街に近い所や、内地人と雜居して居る臺灣人の二三は、便利なので利用する者もなくはないが微々たるもので、問題ではないと云ふ現状、今日では雜貨屋は内地人を顧客としての商店と云ひ得るのである。ところが、これも時勢が進んだためであらうか、この廣く多く利用される雜貨屋は、思ふが儘に注文さへすれば、居ながらにして買ひ得られるのだが、何分小賣店なのであり、掛賣をするから金利もかゝり、他店から取寄せると手数料も取るしするから、値段は比較的高いがそれも無理もない。それで生活者としては幾分もで安價で良い品を得るのが、賢明な利得の方策であるとし、共同醸出した多くの資金を以て、卸商や製造元から直接取引をして、中間店が搾取する利益を減じ安價で良品を得やうと云ふので、内地の例に倣つて、購買組合を組織するの機運が到來した。それで同じ勤先の俸給生活者が集つて、購買組合を創設し、産業組合法に依つて經理を行ひ、組合員相互の利益を得ることにした。最初は臺灣銀行員に依つて、臺銀購買組合が創立され、同



行員に日用雜貨品等を配給し、年々好成績を示して居たが、次いで臺灣總督府の職員に依つて、臺總購買組合が出来、更に鐵道部の職員に依り鐵道部購買組合が設立され、臺北州廳の職員を中心とした臺北購買組合があり、其の他にも二三あるが、規模が大きく、扱ふ物品が多種多數で組織的に活動し、使命を果すべく努めて居るのは、鐵道部購買組合であるが、この以外の購買組合も、相當豊富に物品を扱ひ、年々購買額割戻が相當あつて、何れも目的到達に經營して居るが、まだ改善擴張の餘地があると云はれて居る。

而してこの購買組合の活動は、一般商人に相當打撃を與へたけれども、直接の影響は雜貨屋や食糧品店等であつたから、漸次組合の増加の傾向を見た時、彼等は大に對策を講じ、恐威を感じたものだが、然し組合に於ては、鐵道部購買組合以外は、充分機能を發揮するほど、扱ひ品の種類も數も多くなき、執務者も純商人でないので取扱や經營法も、商人に匹敵すべくもないし、従つて組合員に充分満足を與ふるわけに至らず、それで組合以外に商店や雜貨屋に注文して、迅速に配給されるばかりか、一方從來注文し馴れて居ると云ふ事情が、主婦の心を力強く支配して居たので、購買組合に加はり利益を



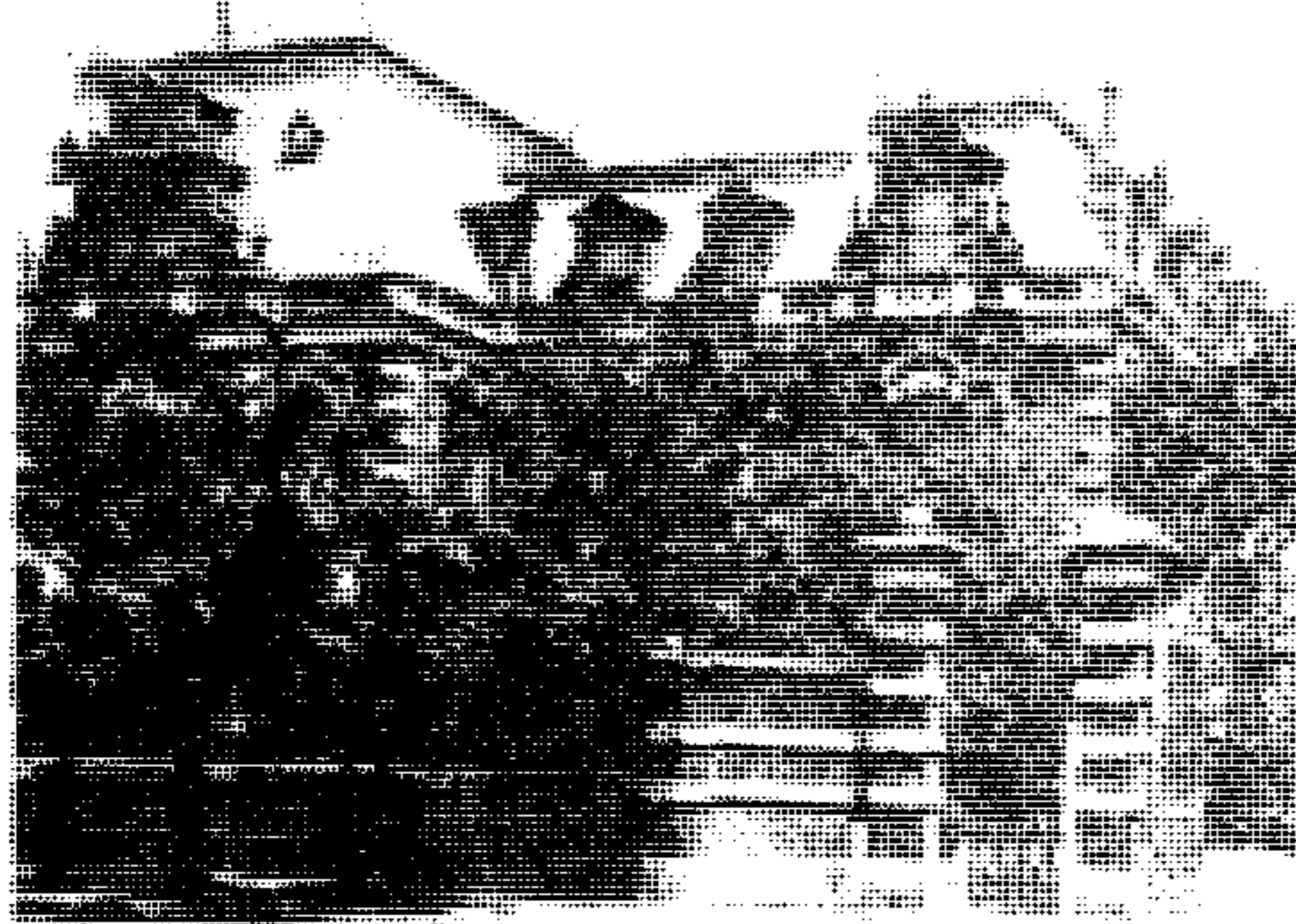
得ながら、尙且つ商店や雜貨屋の利用を捨てない風なので、購買組合の増加傾向に對策を講じた商人も、恚うした事情と少數なので、思つたより影響が大きくない故、運動も多少差控ゆるやうになり、現状維持に推移して來て居るのである。然しこの購買組合は確かに組合員たる俸給生活者を、相當利益を與へ存在有意義ならしめつゝあるが、その後著しき活動は餘り見受けない狀勢であつて、雜貨屋は勿論一般商人も、依然繁昌を示しつつあるのである。雜貨屋と購買組合兩者はよく似た商賣だが、前者の方が純然たる商人の經營なので、一般殊に内地人の家庭では多大にこれを利用して居るためで、後者は兎角進展著しきものがないやうである。



# 産業上より觀た臺北市



- || 臺北市の産業界とその生産額 ||
- || 市内の耕地と農業及び畜産業 ||
- || 臺北市の工業地帯と家内工業 ||
- || 市内に於ける鑛業及び水産業 ||
- || 各種の副業と労働者及び勞銀 ||





# 産業上より觀た臺北市

## 臺北市の産業界とその生産額

…工業不振は臺灣が農本位な故…改隸後の産業進展と産額…

臺北の産業開發と進歩…現在臺北の産業と生産額…

都會地殊に文明の都市の産業と云へば、何處も同様に大抵の場合、まづ工業と云ふことになり、農業や鑛業は餘に盛でないのが通例である。然し除外例は何時何物にもあるもので、臺北市の産業を記述する場合は、工業でなくして農業と云はねばならない現状だから、正に除外例の場合とせねばならない。由來臺灣は遠い蘭人占據の時代、鄭氏統治の時代はさて置いて、清朝の領土となつた、所謂領臺前は全く農耕の地で、沃野千里而も未開の地が廣大であり、豊かな天恵には、耕して穫らるゝ米穀の類、栽培して收め得らるゝ果實その他の所謂農産物の類で、製造して産出する材料はあつてもこれを製す



るよりも、耕し栽培して收穫を見得る地と目され、開拓すべく南支地方から渡來した數多の支那民族、即ち今日の臺灣人の祖先は何れも農民であり、それ等が開拓進展を示したのは、農耕の業に他ならなかつた。換言すれば、臺灣の地は農民の手に開發發展した農作の地であつたと云ひ得る。従つて臺灣は、農業地であり、今日工業も盛になつたが日本領土内に於ける農業本位の地として認められ、現に米糖茶が本島重要物産の大宗となつて世界的に知られて居る。恁う云ふ事情であるから、領臺前は幼稚の域を脱しないが、農業を本位とし、各地に農民村落が出來、市街が建設されて商業が盛に殷盛を見たが、それでもその市街地内にも、農耕の地が存して、耕作に忙しい農民の姿を見たものであつて、今日の云ふ工業と云ふものは一つとして認むることが出來ず、僅に貧弱な家内工業があるのみで、工場とは名のみと云つた小さなものすら見る事が出來ず、空に高く聳え流す黒烟を吐き工場は、島内何地に行くも見られないほど工業は認められず、また一般は農本位なので、官當局も一向無關心であつた。これは一面民度が低く、世態が進歩せず、文明の光に浴しないのみか、浴さうともしないかつた結果で、臺灣が文明に



後れたのも、一因はこの工業が興らず農本位で過ぎたからでもあらうと考へられる。工業が興され徐々に進展を示しつつあるのは改隸後のことで、糖産地であるからか、工業は製糖業の開始に依つて着手され、工場は製糖會社の工場が建設されて、最初これを臺灣の地に見得られたと云つて可い。但し改隸前に於ても、劉銘傳の英斷的大革新が生んだ施設中、官營ではあるが、西洋文明を輸入し、機械工場を臺北の地に建てたけれども、これは鐵道兵器の工場で、産業的工場ではなかつたし、劉氏退任後は充分活用せず、寧ろ顧られずにあつたから、工業も興らずに改隸となつてしまつたのである。臺北市の産業が、工業より寧ろ農業が主なるのも、恚うした事情に歸因すると云つて差支なからうと思ふ。臺北市の今日に至る沿革を考察しても、臺北平野の曠原は、淡水基隆兩河が其處を貫流し、蕃人占據の鬱林荆棘の繁つた地であつたが、まだ鋤を入れたことのない處女地として、肥沃な耕作地であつたから、臺灣開發に食指を大に動かしつつあつた農民の支那民族は、この地に着眼して渡來開拓したもので、最初の人たる陳賴章も彼等亦た農民であり、鋤を入れて耕して開拓したのであつて、工作場を建て材料を採つて



製作に従つたものではなかつた。而も最初に開けた艋舺の地も、農村部落に過ぎなかつたのが、漸次人家が増加して、遂に建街を見たものであるから、殷賑を極めた時代でも、艋舺街こそ商業地として繁昌を示したに拘らず、一步街より踏み出せば悉く耕作地で、米その他の農作物が栽培されて居たと云ふ状態で、云はい艋舺街は、稻田の中に建てられた街と云つて可い位、その他今日建街を見る各地も、悉く農村部落が發達したもので領臺前までは官營のもの以外に、煙突から黒煙を吐き、機械の運轉する響きを聞かする工場は、一も存在して居なかつたのである。改隸後は督府の指導裝勵保護の下に、所謂本島の産業は異常な進歩發展を遂げ、改善努力の功著しきものがあつたことは周知の事で、中外に誇る所となつて居り、産物の大宗と云はるゝ米糖茶は勿論、バナナに鳳梨に、その他幾多の産物は年々増加を辿るの勢を示し、従つて臺灣の産業界は全く督府その他官民協力、奮闘活躍の結果に他ならないが、而も産業中最も進展の著しいのは農業方面であつた。これは從來米糖茶が主要の物産とされ、農業國として開發を見たからである。従つてその以外の産業も、それぞれ進展を遂げたと云つても、農業に比すべき地位に到



達して居ない。換言すれば改隸後の産業發展を期した中でも、米糖茶の主要物産の改善増進に、まづ力を致した傾向が著しかつた。然り米は改善され増進を見て、唯に年に二回の收穫を見る地と云ふのでなく、有數な米作地とされ、砂糖は全く舊態を脱して新式製法に依り或は甘蔗耕作の改良等で、斷然世界有數の産糖國の名を得、茶亦た改善進歩して、烏龍茶の名聲は世界に遍くなつた等、その他の産業各方面も進歩したものも尠くないが、決して多いとは云はない、工業の如きも製糖工業は異常な進展を示したものの、その他はそれに及ばないし、水産業鑛業等殆んど皆然りで、將來を期待されて居るが、殊に工業は日月潭水力電氣工事完成後は、廉價な動力が供給されるに於て、隆盛を見る。と云はれ、既に近く工事に着手することになつたから、工業の發展もこれが動機で一段と著しくなるものと思はれて居る。恁う云ふ事情なので臺灣は農本位國であり、臺北市の産業も農業が主であると云ふことが出來得る。

臺灣の産業は、領臺前は農業のみであつて、而もその耕作も舊式な幼稚なものであり、産物も粗末でその生産額も少く、一向進歩改善に向つて行かなかつたし、祖先傳來の方



式を單に傳承的に繼承するに過ぎなかつたから、島内生産の米糖茶その他の農作物も、多少彼等の祖先の地南支地方に搬出販賣したが、大部分は島内消費に充たと云ふ状態なため、島民の多數を占むる農民の智識が低く、文化の程度も亦た低下して居たと云つた。恚うした事情で、産業の發達は遅々たるものであつたと云ふよりは寧ろ、一向進まなかつたと云ふ方が可いだらう。改隸後に於て、臺灣は總てに於て各方面全く面目を一新し、その結果異常な進展を來したもので、産業方面も亦たその一つである。即ち先づ糖業に於て觀れば、支那民族の移住と共に傳來し、蘭人時代既に主要貿易品の一つに數へられ、鄭氏時代進展増額し、更に清領となつて一層促進したが、後に歐洲甜米糖の勃興に因り漸次衰退し、改隸當時は僅々八九千萬斤の生産額を示し、栽培製造共に舊習を踏襲して、何等改良進歩の見るものがなかつたが、一方我内地の需要は六割を海外に仰ぐの状態なのに鑑み、督府はその不足を補ふべく、積極的改良施設の計畫の下に、大に指導獎勵保護を與へ、今日の盛を致したが、更に品種改良、蔗園の改善等砂糖農業の發展に盡し、植付面積九萬九千五百餘甲、甘蔗生産高百六億二百六萬餘斤の巨額を示したが、砂糖工



業としては、改隸當時千餘に上つた舊式の糖廬を、新式製糖工場を建設して漸次これに替へ、殆んど現時は新式製糖工場のみとなり、四十六工場能力七十萬噸、各製糖會社の總資本金は實に二億五千三百六十一萬六千餘圓の巨額を算するに至り、使用原料高百四億二千三百九十六萬餘斤、製糖高十三億三千五十萬五千餘斤に達して居る。臺灣の製作物中重要な位置を占むるものは、米、甘蔗、茶、果實としての芭蕉等で、就中米は年産額一億三千餘萬圓、到底他の産物の比でなく、十年前は平年作四百五十萬石で、豊作は五百萬石と云はれたのが、今や平年作六百三四十萬石、豊作七百萬石近くと云ふ増産を示して居る。それは水利の施設、品質改良殊に蓬萊米の出現と、肥料の施用量増加等、官の指導獎勵宜しきを得た結果に因る、一甲當りの收穫増加と耕法の改良等に原因し、植付面積も五十五萬二千五百餘甲に達して居る。その他青果物も、鳳梨の如き植付面積三千八百餘甲で、收穫高四千六百六十二萬六千餘個、バナナは一萬五千餘甲の植付面積と二億三千五百七十七萬六千斤の收穫高を示し、その他龍眼等があつて何れも栽培上の改良と獎勵に努め、販賣擴張に就ても大に活動を見つゝある。茶業は千八百六十五年に、



英人に依つて烏龍茶が海外市場に輸出されて以來、非常に進歩したもので、領臺當時は本島隨一の主要産業であつたと云はれる。爾來これにも官の指導獎勵を受けて、年々進展を見、植付面積四萬七千四百五十餘甲で、粗製茶生産高千八百三十四萬餘斤、再製茶の産額は千五百八十萬餘斤に達し、輸出額も年々消長はあつても、世界的に知られ、海外市場に歡迎されて居るため、烏龍茶は七百九十八萬餘斤五百十萬餘圓、包種茶は八百六十七萬餘斤六百四十五萬餘圓を示すの進展を示して居る。而して纖維植物には黃麻、苧麻、サイザル、大甲蘭、七鳴蘭、林投、月桃、鳳梨や芭蕉の纖維等々何れも盛に栽培されて増収を辿つて居る。尙甘蔗に比敵するものに甘藷がある。これは本島農産物中三位を占むるもので、爾來品質の改善に増収を見、蔬菜類や雜穀類何れも増収しつゝ、あるが、家畜類も改良の結果盛況好良のものが産するに至つた。而して鑛産は石炭、金、銅、石油、硫黃、砂金等の産出夥しく、施設は改善に改善を加へ、新式の採掘を以て増産に努めて成績見るものがある。水産業は生産高二千萬圓に過ぎないが、これは他の産業に比し、獎勵助長が遅れたからである。然し機船底淺網漁業、トロール漁業、鯉漁業、旗



魚鱒延繩及び突捕漁業等で、特種のものとして珊瑚漁業と捕鯨業とがあり、相當活躍し漸次進展を見つゝある。而して最近の漁獲高は千四百四十四萬六千餘圓、製造高二百七十七萬五千餘圓、養殖高三百七十三萬四千餘圓に達して居る。林業は百九十五萬三千餘甲の森林と、六十三萬四千餘甲の原野とを包む林野面積である。而も多く千古斧鉞を入られぬ、深山の大森林には有用材に富んで居る。それで官に於ては、一方造林事業に努力すると共に、斫伐事業を試み、阿里山や太平山や八仙山等で、盛に材木を斫伐市場に送つて好評を博して居る。次に工業は主として農産的工業で、製糖工場以外大工場は見るもの尠く、改隸以來官の施設よろしきを得、汽力、電力、水力等の動力に依り、漸次各方面の工業は勃興したが、殊に大正七八年を頂上とした、本島財界の好況は、企業界の活躍目醒しく、各工場も各地に建設され、工業界は一段と進展を見、製糖業以外製麻、製油、麥酒、製粉、煉瓦、製茶、木製品、製氷、鐵工、鳳梨罐詰等を主とし、幾多の機械力に依る工業が興り、何れも相當の成績を示したが、再び財界不況に事業界甚しく萎微し、工場も整理緊縮を見、自然淘汰が行はれて、爾來工業界は不振に陥つて、昔日の



觀を見るべくもない、唯だ日月潭水力電氣工業が近く工事に着手なれることゝになつたから、その竣工の曉に低廉な電動力の供給に依つて、工業の振興が期待されて居る。この副業も漸次發達して、製作品も良好なるものを見、各方面の需要を増しつゝある、その主なものは、竹細工品、臺灣菌、菌製品、臺灣麻、麻製品、臺灣籐、籐製品等であつて、その他多數に上つて居る。

臺灣の産業が、改隸後官の積極的施設方針に基く、保護奨勵指導の結果、全く面目を一新し、驚異に値する進展を示し、生産額も年々夥しい増加を見、往時とこれを對比すれば、實に今昔の感に堪えぬものがある。島の首都臺北市も市制實施以前に於ける所謂城内艋舺大稻埕の三市街を中心に、その隣接村落の二三、即ち現在市に編入されて居る地域に就いて見るも、改隸前は既に歴史が語る如く、移住の農民に依つて開拓され、農耕地として蕃人を驅逐侵佔したのだから、開拓された地は勿論農耕地であつた。村落が市街となり、艋舺や大龍峒や大稻埕、それに後れて城内と市街地が出来たが、これが爲め耕地は相當市街地と化し、商家その他の家々が建てられたが、尙田圃はそれ等の市街



に近接した部分にさへあつた位、艫舳でも大稻埕でも大龍峒でも、何れも街衢の端や背後は田圃で、年に二回の收穫を見る稻田が遠く開展し、所謂青田の風が颯々として吹いて居たし、官衙官人街の城内の如きも、その地域の大半以上は、野原や田圃であつて、領臺後市區改正が行はれぬ前の、明治三十年頃まで即ち領臺後二年にして、尙且つ今の新公園の所から東南兩方面は田圃で、例の竹藪に圍まれた農家が點綴し、水牛を叱つて耕して居る農夫の姿を見たと言ふ状態で、今日の城内に於て新公園からその東南兩方面を見ると恁うした風景が見られたと言ふことは夢想も出來ず、到底虚言と言ふより他はないが事實で、而も三十年も在住して、領臺當初渡來した内地人が、よくこの事を話して、今昔の感に堪えないと云つて居るのでも判る。而も南門外一帯は、明治の末年頃までは全く廣い田圃であつたりし、東門外も大正七八年年頃までは然うであつた、であるから市街の建設進展に伴つて、田圃は宅地化されながらも、廣い青田が隨所に見られたものである。従つて産業も農業が主で、工業としては製茶業以外は所謂家内工業であつて、小さな工場は從來多少はあつたが、かの大正七八年の財界好況の際、勃興した企業界の活



躍に依つて多くの大小工場が建設されたのである。鑛業は土地柄これを見るものなく、僅に石炭が採掘されるのみだが多く産出しない。水産業も海に相當距離があり、基隆淡水の兩河で漁獵するに過ぎず特記すべきこともないし、又た養殖業も養魚池が市街の發展上種々の不便が生じて大分埋められたが、尙各所に見られて多少の生産額を示して居る。林産業も現在市に編入された地域に、石炭と同じく産出し得べき山林があるが、云ふほどに多くない。畜産業は養豚業が最も盛で、農家も多いから副業的のものも含んでかなりの生産額を示すほど盛んであると云ひ得る。而して何と云つても島の首都、商業は最も殷盛で、經濟界の中樞地だけに、諸般の機關が完備して取引が亦た盛である。これを要するに、臺北市の産業は農業を主とし、畜産業これに亞ぎ、工業、水産と云ふ順序で、林業や鑛業は記するほどのことはないし、林業や鑛業は土地柄盛になるのは寧ろ困難であつて、工業が一時の好況に振興したが、不況の大打撃に萎微して淘汰の結果、現存するものは、節約整理緊縮を斷行し、合理的に善處して居る始末だが、既に日月潭の水力電力工事が、近く着手されるに決したから、その竣工の曉には低廉な電動力の供給



を受けることになれば、漸次振興するだらうと期待されて居るが果して如何なものか。然し工業界が活躍して、各工場が盛に煙をあげ機械の運轉する響を聞かせるのは、文明都市の要件の一つであることを思ふと、臺北市の將來は必ずや低廉の電動力の供給に依つて、これが實現さるゝと思ひ、或は更に進展して、工業の都市として誇り得る地歩を占むるかも知れない。この意味上からも、期待される日月潭の水力電の大工事は、その竣工の日が待たれると共に、竣工後の動力供給が、人々の期待する如く低廉なることを希望し、工業の勃興せんことを祈るのは、市の一層繁榮を希ふ市民の誰もがの心である。

臺灣の地方行政地域が、領臺後屢次變更され、市制實施前の臺北は例の三市街を主とし、それに隣接村落を含めたものであつたが、現在の臺北市として編入される地域を含んでの區域とは、其處に差異があるから、彼是を直に對比することは困難である。それに領臺前は産業統計の如きものは絶無であるから、不明としてこれは捨てるが、領臺後の趨勢も、恁う云ふ事情で、統計に依る比較は暫く措き、市制實施以來既に十年に及ぶから、その間の趨勢を對比考察して、臺北市の産業の如何に進展を遂げつゝあるかを示



すとしやう。改隸後異常な進展を遂げた臺北の産業は、更に市の實現後今日に至るまで十年間、その間には著しき進展を見せたもので、一例を挙げると、人口は優に二十萬を超過し、尙増加の勢ひ甚しく、市の歳出入額も亦た今や四百萬圓を上下し、市政開始當時に比すれば、約三倍の巨額に達した如き事實がある、これは一面に於て市の産業が發達したことを證據立つるものと云つて可いと思はれる。何しろ臺北市は云ふまでもなく、臺灣の首都として統治の中樞地であり、文化の中心をなす所であり、亦た經濟の樞軸地であつて、而も運輸交通の諸機關は、漸次發達整備してスピード時代を出現するに至り、物資の集散夥しく、商取引も旺盛を極めてその殷賑なことも、往時とは比較にならぬほどで、流石は島の首都と云はれるが、これ等の事實は確に臺北市は産業の都市として、名實共に謳はれ得る域に達したことと思はれる。而して從來商業や製茶業や農業畜産等進展を示して居る以外に、工業も漸次發展の機運に近づきつゝあるを思ふと、産業都市として更に大なるものが出現するも近き將來に在りとして、前途を祝福するものである。今大正十年に於ける臺北市の生産額を觀ると、農産百二十四萬八千餘圓、畜産五



十一萬千餘圓　水産四萬六千餘圓、鑛産二萬二千餘圓、工産二千七百五十四萬七千餘圓、合計二千九百三十七萬四千餘圓を示して居るが、更に昭和元年には、農産百七萬六千餘圓、畜産四十七萬八千餘圓、林産六千餘圓、水産八萬四千餘圓、鑛産六萬餘圓、工産三千二百五十九萬二千餘圓、合計三千四百二十九萬六千餘圓を算し、僅々五年間にして、何れも激増を示して居るが、これを觀ても臺北市の産業が、時代の進運に伴ひ、市勢の發達に連れて、かくの如き優地歩を占め顯著なる進歩を見たことが判る。而して最近昭和四年の統計に依ると、農産百四十五萬八千餘圓、畜産四十七萬八千餘圓、林産一萬六千餘圓、水産八萬七千餘圓、鑛産十三萬千餘圓、工産三千百九萬千餘圓、合計三千三百二十六萬千餘圓で、昭和二三年に比すると、何れも減少して居るのは、我國財界の不況依然續き緊縮整理の爲め、臺灣もこの例に洩れず、不景氣は深刻を辿るのみなので、事業界も農村も總て景況は相當な不振裡に終始する結果であるが、然しこれを十年前に比すれば夥しい増加で、その進展の著しさが頷かれるではないか、何時のことか測斷されぬが、總て好景氣が到來すれば、必らずや臺北市内の生産額は増大するものと思はれる。



而して各生産額中、多額なのは工産であるが、これは價格の大なものもあり、その種類も多數なるの故であつて、直に工業が主要の地歩を占めて居るとは云はれないが、農産の大正十四年に二百萬圓を示した事實は、これが主要産業と云ふ證據にもなると云ひ得る。殊に農産の減少は、近時米價の甚しい低落を示すもので、工産の減少と共に不況の現状を物語るものである。

### 市内の耕地と農業及び畜産業

…市勢の伸展と耕地面積…主要産品額と農民生活…

畜産業と農家の副業…市の奨励と指導…

都市の沿革を考察しても、何處も同じ變遷を見るもので、荒涼たる曠野が開拓され、やがて人集まり部落を作り更に發展して建街し、尙進伸して地域を擴めて行つたもので、東京然り大阪然り、その他今日殷賑繁華を示す各都市は、何れもこの例に洩れないと斷言し得る。従つて都市の伸展に伴ふては、その隣接村落は漸次宅地と化し、それが集ま



つて街衢の建設されることも、何處の例を見ても、將又た現狀を觀ても悉く然りで、全く先人が開拓して作つた耕地は、その面積を市街の伸展で、宅地として侵蝕され、減少を示すに至る状態である。渡來移住した閩人の手に依つて開拓された臺北の地も、その例に洩れないで、先人の開拓した田園は、艋舺大稻埕大龍峒さては城内等の市街が建設されたに伴ふて漸次侵蝕減少され、宅地化して街衢が建ち、僅にそれに接近した一部分が残存し、先人の開拓に努めた昔を偲ぶほどの、耕地が見られるに過ぎない。開拓後十幾年艋舺の地にも建街を見た結果、家屋が建て聯ねられ、街衢を成した部分の地は、悉く田圃であつたのが、進展の勢ひでかくも變遷して、毫も舊態を認めない。亦た大稻埕の地も然うだが、艋舺大稻埕の間の地も、田園があり養魚池もあつたのが、今はその片影さへなく消失し、全く立派な街衢に姿を變化してしまひ、南門外の一帯も然うであつて、僅に東門外や大稻埕の東の或部分の地その他中崙大安と云つた、市に編入された地域であるが、この邊に田園を残存するのみに過ぎなくなつてしまつた如き、一々例擧すると限りがない。これは恰も東京の現今では、一寸見得られないかも知れないが、少く



とも二三十年前までは、見ることが出来た如く、またその他相當立派な繁華街も然るであり、内地の例へば京都や廣島熊本等その如き都市に於ても見るを得べき、所謂郊外に於ける田園致景のそれである。恁う云ふ工合に市街の進展に伴ふ耕地の減少は、時の勢人の動きの結果で、一つの近代現象とも云ふべき、文化が産んだ變化であると言ひ得る、即ち都市にはお百姓さんの働く所がなくなつたり、また減少され失はれつゝあるのである。而して市街地の擴大されて減少を示しつゝある臺北市内の耕地面積は、繁榮する臺北、文明都市が建設され發展する臺北は、今や（昭和五年一月）市總面積四千百二十六甲中に、二千六百十八甲だけが耕地面積で、約半分強即ち五割一分強であるから、然う狭いものではないが、何しろ曠野が開拓された臺北平野中に、艋舺大稻埕城内それに大龍峒の市街があるだけだから、廣い耕地があつたのも想像され、寧ろ市街地が尠かつたものだけけれど、半分ほどに減じたのわけで、詳しい統計を示すのは極はめて煩雜で、正確を缺く恐れがあるからこれは措いて、恁うした考察を以て減少された耕地の趨勢を推知して置かう。それで二千六百十八甲の耕地を分類すると、田地が千九百九十九甲餘



で、畑地は六百十九甲餘である。この田畑を耕して生活する農家は、戸數は千九百八十  
三戸で、自作者は三百八十五戸で、自作兼小作者は五百二十一戸、小作者は千七十七戸  
である。而してこの農家は、市内に編入されて居るが、まづ近郊の村落とも云ひ得る方  
面で、この方面は農村とも云ふべく、今の大安、下内埔、六張犁、富山町、水道町と云  
つた南方の近郊地帯と、東園、西園、馬場の各町と云ふ艋舺の南方市の西南地帯、それ  
に宮前、圓山、河合の各町で市の北方地帯、更に東方地帯の中庄子、朱厝崙、上埤頭、  
中崙、西新庄子の各地帯で、流石に西方地帯は淡水河が流れて艋舺街の護岸壁が建てら  
れてあるから、耕地の存する餘地がない。而してこれ等の地帯は全く農村で、灌漑は瑠  
公圳と云ふ公共埤圳が通水し利益を蒙つて居る。それでこの方面に行くと例の名物とし  
て珍しい南國風景の一つとして、新渡來者の眼を驚かし嬉しがらせる、廣い田面に點綴  
する竹藪、それに包まれ隠見する農家、さては年二回の收穫を見る稻田に初夏と秋との  
收穫時の多忙な農民の姿、遠く連る青田の風に戦くあたり、悠々と働く怪物然たる、水  
牛の叱れながらに鋤を運ぶ様や、白鷺の舞ひ飛ぶと云つた、田園の致景が見られ、都會



に居住する人も、郊外散歩に街外れに出れば、何時でも恁うした珍しい臺灣の農村狀況が、容易に觀られ得るのである、而も恁う云ふ農村から、臺北市民の食膳を賑はす、米や蔬菜や果實の類が提供されるのである。

島の首都の臺北市に、田舎のお百姓の居る農村農家があるとは、一寸妙な思ひがしな  
いでもないが、これは發達した市街の何處にも見る現象で、少しも怪しむに足りないこ  
とである。臺北市内の農村、東北南の三方面の近郊地帯に居住する農民の手に依り、汗  
と力で産み出された農産物の最近（昭和四年）の生産高は、總價額は百四十五萬八千五百  
二十三圓であつて、年々消長増減はあるが、大正十三四年の兩年を最頂として、財界不  
況米價の低落を續けた結果が、大原因をなしたため減少したが、その十年前に比すれば  
非常な増加を示し、一方市勢の進展に伴ひ、所謂新開地を見ること漸増する傾向多い今  
日、住宅地の擴大に年々耕地の減退を見るに拘らず、生産額が増進したのは、多年農事  
方面の改善進歩に努めると共に、當局の指導奨勵に盡した、その結果であることに歸因  
するのである。而してその生産物は何と云つても、臺灣農産物の大宗と云はるゝ米が臺



北に於ても首位を占めて居ることは、一度農民部落の前記地帯に行つて、連り開展する廣い青田を見れば頷かれるのである。その生産額は五萬四千百二石、價額百三萬九千六百六十七圓を示して居る。次位の價額は、蔬菜類の六百七十九萬八千七百七十八斤、二十萬九百七十四圓で、多く東園西園河合の各町から生産されるが、その他の地帯からも生産される。而して臺灣茶の中で、主として南洋方面から印度地方を輸出先とする、包種茶が生産されるやうになつた以來、この包種茶に香氣を含ませるため、香花料と云つて、抹莉花や山梔子の花を、主要ものとして用ゆるが、この抹莉花や山梔子は何れも白い花瓣の、甘い一種の高い芳香を放つもので、この芳香を包種茶を飲用する、南洋方面や印度地方の人々が愛好するのでこれを用ゆるのだが、晩春三月頃からこれ等の花瓣を盛に摘み、拂曉に大稻埕の茶館即ち再製茶製造所へと、大きな竹籠へ山と盛入れた荷を急いで運ぶのが目につき、これもまた臺北のみに見られる晩春拂曉の街頭景の一つで、珍らしい南國情趣の一つである。而してこの香花料の植物たる抹莉花や山梔子は、主として東園西園の兩町から馬場町の一部にかけて非常に多く栽培され、開花の盛時には白



い花が咲き誇つて香氣を放ち、一寸と詩趣に富む致景である。而もこの香花作物は或意味に於ては臺北の名物と云つて可い。生産額は六十九萬七千九百九十一斤、價額九萬九千八百三十八圓を示し。果實類はこれと云つて特有なものは産しないが、各農民村落から生産する高は六十四萬五千八百七十斤で、價額にして六萬四千四百九十五圓を示して居る。次は蕃薯であるが、既に臺北平野開招の當初、蕃人は蕃薯を栽培して居たと云はれ、また艋舺の地で蕃薯の取引があつたと云ふので、蕃薯市街と總稱の名にも用ひられ、またその取引場即ち賣買場のあつた街をも、蕃薯市街と呼ばれたもので、それが後に改められて歡慈市街となつたが、市の出現町名改正に入船町となり、今の遊廓内の一部妓樓のある所である。これは兎に角として、甘薯が臺灣人の常食で、殊に中以下の人々は、時に米に代へての食糧とするので需要が多いから、各農民部落でも耕作するので、主要農産品中に入れ得ると云ふわけである。その生産額は百六十三萬五千五百二十斤、價額にして三萬二千六百三十圓である。尙この他にも種々の農産物はあるけれども、その數量や價額は少く、記するに足らぬから略すとするが、殊に最近人口の異常な激増は、



臺北市内に於ける蔬菜類の需給關係が變動し、市内のみの供給數量では、需給を充すことが困難となり、淡水河の對岸の地、新莊郡の鷺洲方面や、海山郡の板橋中和の方面から、夥しき額の供給を受くるの状態で、若し一朝淡水河の増水を見ると、この各方面の田園は屢々浸水し、臺北市へ供給すべき蔬菜類は水害を蒙り、供給を缺き市民は恐慌を招くの事例が尠くない。而して臺北市内に居住する農民は、都市の住宅地や市街に接近して居るだけに、一般農民の風俗慣習と同一であるけれども、文明の影響を受けてその恩恵に浴し、概して淳朴の氣質の中にも、幾分時勢に順應して、生活も向上したばかりか、教育や國語の普及も他に比して遍く、これが功果は間接直接各方面の事實に現はれ、自動車や鐵道の如き文明の利器を利用する者多く、風浴慣習も多少改善され、婦女子の服装も外出着などや、裝身具の如きも、幾分流行を趁ふ傾向が著しく、靴を穿ち洋傘をささぬものがない、男も外出には洋服も着るし帽子をかぶり、土足や竹笠などは尠くなつた。而して不況の打撃で、地主と小作者との地位を轉倒した者も尠くないとか、而して青年の如きは、何れも青年團を組織し、青年團としての活動をなしつゝありて、



漸次農村の狀態も變轉し、氣風も餘程變化したことは古老の言に徴しても明かだし、事實の數々の上に於ても然うである。而して一般も然うであるが、殊に婦女子が家内に於て、刺繡その他の手工を内職とする者多く、一方養鶏養豚その他の副業と共に盛になつて來たのも、著しい現象と云はねばならない。憊うした現象は、所謂近代に於ける、都市に接近せる農民村落の狀態で、辿るべき現象だが、其處に亦た確に進歩が見られると云ふものであるが、市勢の發展に、農民の一部分は、他に都市に居住するに適宜な職業に轉じたことも否定されぬことである。かくて耕地減退と共に農民も少くなると云ふものである、また一面には彼等は他に耕地を求めて移住した者もあり、或は場合に依り、自然的に他に移住するの餘儀なきに陥ることがないとも云ひ得ぬ。然し現時に於ては尙依然として農民の住居を見、幾多の農産物を産出し農村部落が存在して、華かな明るい文明都市の一部を構成して居るのである。

農業本位の臺灣で、米糖茶を産物の大宗とする土地柄、各地に沃野を多く見、年二回の米作が出来る、恵まれたこの郷土に、而も勤勞克く努むる臺灣人が、汗と苦心で産み



出す働き振は、實に尊いものがある。鍬鋤を肩にして、星を仰いで田園に出で、星を戴て我家に歸る彼等農民は、老も若きも、男も女も打揃ふて、野良の仕事に出精する、然しこの農民中には内地人の姿が一向見受けられず、殆んど總てが臺灣人であるのも、土地柄であらうが、由來彼等臺灣人の多くは、まづ移住農民の子孫、彼等祖先が開拓した地を耕して居る、土着の農民が多いからである。後來の内地人は、彼等と伍して農民として働くべく、耕地を持つて居ないし、勤勞と生活程度とが全然同一でなく、且つ渡來の内地人は、農民として働くと云ふより、他の方面に活動を期して居るから、耕地を有する人も地主となるのみで、鍬鋤を肩にしての小作者は僅少である、殊に都市に於ては、内地人の農耕者は、まづ皆無と云つて可い。お百姓は臺灣人である、耕地は彼等の手に依つて耕作されて居るの現状で、臺北とてもその例に洩れない。而も農民部落は、何處へ行つても、豚や鶏を飼養しない所がないほど、畜産業も亦た盛である。臺北市内に於ても、これ等農民部落に於て、畜産業が營まれて居るが、かの牧場の如きものはない、農家各自に於て養豚なり養鶏なりが營まれて居るに過ぎない、然し相當額の生産高を見



て居る。殊に養豚が最も盛なことは、臺北のみでなくして各地とも同様である。これは臺灣人は非常に豚肉と鶏肉とを愛好する、臺灣料理でも豚肉鶏肉本位の料理が多い位で、彼等日常の食卓の上には、必らず豚や鶏が料理された皿が二三置かれて居るのでも領かれる。牛肉は内地人は愛用するけれども、臺灣人は『牛は我等の食する米を作る時に、農民と共に働いて呉る動物だから』と云ふ、一種の迷心的人情愛に動かされて食用としない慣習が、久しい間彼等を支配して來たし、慣習墨守の弊多き彼等はこれを守まつて今日でも極最少の新しい若人以外の人には牛肉を口にしない、それで彼等はまづ需要の多い豚や鶏を飼養して居る。牛の臺灣に於て産する種類は、水牛と黄牛とが在來からのもので、洋牛や印度牛は領臺後島外から輸移人したもので、その他雜種牛がある。洋牛や印度牛は、普通農民の手で飼養されて居ない、内地人の食膳に上るのは、内地産の牛が最も良いが、價格が高いから黄牛が代用される、水牛の肉は非常に安い、悪く硬く不味なので、餘り食用にされない。それで黄牛は食用を主とし、運搬用に使はれるから飼養するが、水牛は農耕上、重要なものとして、賣買價格も高く、農家では財産の一つ



に見做される位で、この意味から蕃殖を計つて居るが、何しろ水牛が財産として扱はれ  
差押の物件となる位である。それに鶏も常食用として非常に需給が多く、卵は周知の通  
り賣買取引が盛に行はれので飼養も旺盛だが、鶩もなかく盛に飼養され需用も多い、  
これは肉卵共に有用なもので、鶏に劣らぬ勢だが、肉も卵も味はこれに數等劣るが、價  
格が安いから、内地人間にも相當需用が多い。その他家禽類は、七面鳥や鶩鳥がある。  
而して鶩は多く北部臺灣地方に飼養され、臺北は最も盛であるが、これを飼養するには、  
水邊が好適必要なので、必らず池沿河川の近くに飼養されるが、殊に興深いのは、鶩は  
群棲飼養されて居る結果、一本の細い竹棒なり、稍長い木片一つで飼主がその群を思ふ  
がまゝに操縦し得ることで、幾百と云ふ鶩群は、一本の竹棒の動き一つで、前後左右一  
絲亂れず列をなして動く放飼の奇觀は、實に面白く驚嘆に値し、鶩の群の行列は全く名  
物の一つ、美しく奇觀である云はれ、既に攝政宮や秩父高松兩宮殿下を始め奉り、各  
皇族殿下御來臺の砌りは、必らず基隆河でこれを御覽に入れ、その都度御興深く思召さ  
れたと云ふことである。而して臺北市内では、河川の關係からか、鶩の養飼は基隆河に



近い、宮前、大龍峒、河合の各町方面が最も盛であつて、この邊一帶鶯の群棲を見ないことがない。殊に奇觀なのは鶯群を御しつゝ、鶯の行商を営む者があることで、これなども南國氣分の臺灣らしいところ、面白い街頭風景であらう。鶏は農家は勿論、市内に多く飼養して、養鶏業を営む者以外、素人の連中も尠くない、これは副業的に飼養して居るのも可なり多いが、自家用の卵を得るためが尠くない、臺北市内の住宅街を歩くと鶏を飼養して居る家の多いのが目につく、殊に臺灣人街は空地も少いのこれにこれを多く見るが、彼等は大部分小さいながら、婦女子が副業的に行つて居るらしい。それで臺北の農家の副業は、この鶏と鶯とを主とし、鶯鳥や七面鳥等々の、家禽を養飼することが多く大で主要のものどされ、内地に見るそれとは異つて居る。而して一方副業として養兔業も一時行はれたが、餘り盛にならないやうである。而して畜産高は最近（昭和四年）に於ては臺灣人間に、養豚思想が殊の外發達した結果、飼育が盛になつて、その數八千三百三十一頭に達したが、市内の需要を充すことが出來ず、年々約四萬餘頭を内地から移入して居る状態である。牛は水牛が最も多くその數は千百八十九頭、山羊は少數で二百三十



二頭、馬は由來臺灣は馬を産しない地とされ、炎暑その他の關係で發育に不適となされた一方、運搬にも黄牛が大多數なので、殆んど飼養されず三十八頭ばかりである。家禽は鶏が最大多数で、鶩がこれに次ぎ、七面鳥や鶩鳥があつて、これ等の數は六萬九千三百七十羽である。

住宅地の擴大に、耕地は減少を示しつつある今日の臺北市も、尙幾多の田園を見、米蔬菜その他の農産品は、年額百四十五萬餘圓を示すほど生産して居るので、市に於ても勸業方面の仕事として、この方面の指導獎勵に盡し、銳意改善に努めて居る。米作は勿論農事に就ては州農會と協力し、品質施肥耕作等の改善進歩を圖り、増産と農民の福利に資し、或は組合を設けて、共同利益と發展を畫策する等、大に効果を收める一方、時々農産品の品評會を他の郡と共に共同開催し、優良品を表彰し、時に獎勵金を下附したり、また農事の講習や内地優良村の視察等、關接直接に獎勵と指導とに努めて居るが、一面舊加蚋仔今の東園町に、大正十年九月蔬菜園を設け、内地及び外國産の種子並に内地優良品種を取寄せ、これを専門家の手に依り栽培し、見本を示して參考指導に供し、



また蔬菜品評會を開催して獎勵したため、その功果頗る多大で、成績良好なるに至つたが、由來臺灣人間に、賤業視する傾向を見發達遅々たるものがあつたが、この蔬菜栽培が、有利有望なもので、賤業でなく重要なものであるとの觀念を深くし、爾來栽培する者多きを加へつゝあるの好結果を見るに至つた。その他畜産方面に就いても、養豚思想の發達に伴ひ、飼育することが盛になつたので、豚種の改良を計つて優良種の蕃殖に努め、豚舎や飼料の改善を行ひ、養豚組合を設け、或は他地方の同種組合の經營方法や、養豚方法を視察せしむる等幾多の改良進歩に努力して居る。家禽殊に養鶏に於ては、職業人のために、品種の改良と進歩を圖る一方、その發達を期すべく、養鶏者の組合組織を許し、品評會でも家禽の優良なものには賞與を與ふる等獎勵を行ひ、共存共榮の主義を以て、斯業の發達に盡力しつゝあるを以て、組合も消長こそあれ、相當經營成績を示しつゝある。かくの如く農業や畜産業に對しても、市は有用産業而も主要なものなので、勸業上から多大の獎勵と指導に努め、係員をして常に農家やその他に就いて調査研究を行ひ、新時代に則した改善進歩を圖り、銳意功果を示すに努力を拂つて居る。然し近



時は財界の不況が深刻化し、その結果は米價が非常に低落を來し、容易に復舊せず、正米相場は一向高値を持続せず、従つてその他の農産品も、一般物價と同一に低落を辿る一方なので、農村は疲弊夥しく、農民の懷合は豫想以上悲惨を極めて居る状態で、生産高は増加を示すに拘らず、價格は反對に低下を示すの現状に、市當局に於てもそれと上級官廳と協力して、これが對策に腐心しつゝ、改善と進歩とに怠らず、相當施設を行ひつゝあるの状態である。然しながら深刻化した財界不況の今日、甚しく打撃を蒙つて居るものゝ、農民村落はまだ市街地のそれに比しては幾多の餘裕を認め得られる、一般臺灣人の生活は、上流以上の人々を除いては、内地人に比して低いが、殊に農民の生活は、更に低く且つ簡易安直であるから、生活費も多きを要しない一方、勤勞所得も減じたとは云へ、米の收穫その他作物が、年に依つて上下はあるも、相當高に上り、取引も必需品なので、賣行きこそ不活潑でも、買取られぬことがないから、若干の金は懷に入るわけ、それに生活費が少いから、餘裕が生じ得ると云ふものだ、不景氣の聲が高く呼ばれるが、まだ内地の農村に比しては、疲弊の度も甚しくないと云ふことであ



る。これが臺灣の臺灣らしい所、農民の生活状態も、大分内地とは異り、種々の珍しい特色が見得られる。要するに勤勞の民と云はれる彼等は、その勤勞と簡素な生活とで、深刻化しつゝある不景氣に對抗して働いて居ると云つて可い。これも農業本位の國柄の故であらう、兎に角臺灣はまだ樂土と云はれる所以かも知れぬ。

### 臺北市の工業地帯と家内工業

…臺灣の工業と臺北市…主要な工業と産額…

臺北市内の工業地帯と主要な工場…家内工業とその變遷…

從來臺灣の工業は、製糖業の進展に伴ふて發達したと云つて可い位、各製糖工場の建設に依つて、臺灣に工場と云ふべきものを見た次第であるが、製糖工業とて一面甘蔗栽培耕作がこれに伴つて居る、純粹の工業とも云ふのは、大規模なものはまだ多くない觀がある。これは臺灣が農業本位國と云ふ關係で、農業の異常な進歩に比して、それに及ばないのは、まだ産業本位の地域を脱し得ないからであらう、勞働者にしても、職工よ



りも農業その他所謂苦力なるものが、多數を占めて居る今日の状態から推知しても、工業の進展は將來にあると思はれる。而も領臺前に於ては、純粹の農業國であつたので、製糖業にしても舊式糖廠の如き、製茶業にしても再製場の如き、工場と云ふことが出來ない、粗悪貧弱のものであつた位で、その他には家内工業ないでもないが、舊式な方法で、副業的のものに過ぎなかつた、今日見るが如き工場は、全く領臺後で、製糖工場が主要の糖産地たる中南部地方に、新式な機械工場を建設した以來に屬して居る。而も工業化に依つて生産を見る、資源の原料は、各方面に各種に互つて頗る豊富に埋藏され、これが開發を待つゝの状態にある。領臺後明治三十四年の頃から、土匪の掃蕩に依り島情が靜穩に歸したので、一層文明的設備の下に機械力を以て生産する、新式の工場を増加したのであつて、爾來臺灣の開發進歩は一面に工業の促進を見、各種の大小工場を、各地方に見るを得るに至つた。殊に大正七八年を頂點とした、臺灣財界の好況は、企業熱を旺盛に導き、各種の事業が振興し、工業界も進展を見て、工場も大中小と幾多各地に建てられ、景氣よく煙突から黒煙が吐き出されたものであつた。然るにその後反動的に



襲來した財界の不況は、關東大震災と共に一層惡化し、遂に昭和二年の財界恐慌以來、不況は益々甚しく、一面金解禁の斷行に續いて、緊縮節約整理が高唱斷行され、而も不景氣は世界的のもので、何時回復するか、なか／＼豫想されずに今日に及び、その結果財界は緊縮節約を唱へ、盛に整理が斷行され、産業合理化その他新時代の善處方法が、世人の口々から發せらるゝ等、時勢も變遷したが、臺灣の財界も同様の趨勢に、金融業者は滯貸の苦き經驗に、貸出の警戒甚しく、資金の融通に消極的態度を採り、遊資は遍在金融は緩漫を辿るの状態で、事業界は一つ整理縮小節約を以て受難時代を切抜けんと、經營困難裡に努めて業務刷新を圖つて活動して居る。従つて工業界も大小何れを論せず工場を縮小し節約を斷行し、生産費の低下を期し、青息太息で仕事を續けて居るのは上の部、休業や閉鎖した工場も尠くない。島都臺北に於ける工業もこの例に洩れず、不況裡に終始し、休業閉鎖を見た中小工場も多く、一二の大工場も危く状態に瀕しつゝ、作業を續けてゝ、經營を保持して居る向が尠くなく、今は財界極度の不振のため、生産費を低下し生産しても、需要が思ふが如くなく、安く製造しても賣らぬと云ふ状態である。



然し最近の福音として好感を以て迎へられたのは、建設計劃後、多少工事に着手したが種々の事情は財界不況と共に阻害し、中止を見るに至り、危く打切られんとした、臺灣電力會社の例の日月潭水電工事が、一度帝國議會でも問題された程、世人の注意を夥しく惹いたが、その工事も外債成立の結果、工事に着手することとなり、工事請負入札も、近く見るまでに進捗し、着工期も切迫したから、工事竣工後は、從來兎角不廉な電動力の料金が、日月潭水力電氣の多量な供給に依つて、低廉されるであらうし、低廉の電動力を供給して、工業その他の進展に資するの目的に依つて計劃された該工事であるから、必らず安價の動力が思ふまゝに使用されることは確實となつた以上、當然の結果として、低廉な電動力の供給に依り、工業方面の各計劃が實行せらるゝことは明白である以上、臺灣の工業界も活氣を呈するに至り、工業國となることも可能性があるから、それを期待して居る次第で、従つて臺北に於ても同様に、現在の工場以外、新設も増設も見られ得べく、一面財界の景況も漸次回復すべければ、これに依つて更に一段の進展盛況を示すも難くないと豫想され、臺北市も一方工業都市としての實現を見ることも、



左程に遠き將來でもあるまいと思ふ、敢て黒烟天を蔽ひ、煤煙の都と云はるゝ大阪のことは云はずも、工業地帯とも今も云はるゝ方面には、新しく工場が建てられ、高さ煙突から黒烟が吐き出され、機械の運轉する響が、灯影美しく活氣を見せる、工場の窓から聞えて來るの光景が出現されると思つて、日月潭水力電氣事業の完成を、切に待ち詫びて居る。而して一方家内工業も、領臺後に發展したもので、領臺前は何れも副業的のものが多く、また工場として見るべきものが殆んど認められなかつたから、臺灣の工業は即ち家内工業であつたと云ひ得る位で、幼稚な貧弱な、小規模のものに過ぎなかつた。而して臺灣人は工作には概して巧みな民族で、家内工業としては多種に互り、所謂手工の類であつたから、多くは指物類、金銀紙その他、一々記すると煩雜だが、男も女も一様に働き、青年や少年の中でも、懸命に従事して、一家總稼で働いて居ることは、今も昔も同様である。恁う云ふ工合に進んだものが、領臺後は進展に伴ひ、新しい種類も加はる一方、内地人の家内工業を営む者も尠くなく、而も臺灣人は内地人の作業を習得し、これを営む者さへ多く、漸次發達進展を見て、同じ不況裡に在つても、規模や組織が小



さいから、打撃も少く、經營難を嘆じながら、孜孜として努力して居るから、家内工業は相當尙今日にても、活氣を續けつゝあるのである。

一時財界の好況に伴ひ、勃興活動した工業界は、臺北の郊外と云つても、現時は市内に編入され、市街地に隣接した地域に、工場を建設して、或は麥酒の製造に、紡績業に、各種の工場が機械を運轉したものの、然し多數の工業は、家内工業と云ふべきで、工場も小資本の個人經營が多く、會社組織の下に在るものは尠かつた。而して現在に於て、臺北市の工業として、その特産品とも云ふのを挙げると、大稻埕の市況を左右すると云ふ位な、重要な地位を占むるほど盛な茶の取引が行はれて居る土地柄、輸出品たる烏龍茶や包種茶が、此處の茶館で再製されるから、製茶業が盛である、また高砂麥酒株式會社が、大正 年 設立され、唯一の島産麥酒を醸造して居ることや、その他煉瓦や紡織、紅酒や酸素、その他石鹼や醬油の各工場もあり、これは工場と云ふほどではないが、家内工業の一つだが、例の神佛廟の參拜や展墓その他吉凶事の際に、盛に臺灣人が、舊慣上使用する金銀紙の製造等である。而して所謂重要工業品とも見るべきものは、靱摺、



精米、菓子等々の家内工業に屬するもので、明治四十四年十二月設立した臺北製糖株式會社が、その後臺灣製糖株式會社に買収、同社臺北工場となり、今日も製糖を行つて居るから、臺北の工業にも製糖を加へて可い、而してこれ等の各工業も、領臺以來幾變遷を見、殊に臺北に電氣事業が起され、電燈電力の供給を得るに至つて、進展發達を見たもので、縱令財界好況に勃興した工業界が、その後の反動に續き、不況の度が加はり、今日の不景氣を見たが、この間に臺北に於ける工業界も、整理され淘汰が行はれ、消長の跡著しきものがあり、現に残された工場は、銳意經營の改善に努めつゝあるが、一方家内工業の多いこととて、これも盛衰著しく、自然淘汰の結果、經營を續けて居るものも尠くないが、何せ財界の不況が深刻だけに、經營維持に困難して居る状態である。而して臺北市内に於ける業態別工場數を見るに、昭和四年は紡績工業一、製絲業一、織物業一、莫大小製造業四、製綿業九、染色業一、で、紡織工業は合計十七工場である。金屬工業は三十で、鑄物業十、鑄物以外金屬製品製造十六、鍍金製品（電氣鍍金）四である。機械器具工業は、電氣用機械器具製造五、農業用機械器具及土工具製造二、車輛製造一、



其他の機械器具製造即ち鐵工場は三十九で、合計四十七を算し、窯業は陶磁器製造一、硝子及硝子器製造三、煉瓦製造一、瓦製造三、セメント製品三、瑛瑯器製造一、合計十一である。化學工業では、製藥業二、工業藥品製造一、染料製造三、塗料製造二、石鹼及化粧品製造十、發火物製造一、植物性油一、樟腦製造二、護謨製品製造三、肥料製造一、製革業一、線香製造一、合計二十八ある、製材及木製品工業は、製材業二十七、木製品製造六十、合計八十七を示し、食料品工業は醸造業は十一、清涼料製造八、製粉業九、製糖業一、菓子パン水飴蜜餞製造二十二、罐詰製造一、製茶業五十一、製氷業五、製麵業十二、其他の食料品製造三十、精米粃摺百七十一、合計三百二十一、その他の工業は、紙製品製造十六、籐製品一、藺蓆製造二、藁棕栢月桃製品三、皮革品製造十二、角貝類製造三、裁縫業十七、防水布製造一、醫療材料品製造三、金屬箔製造五、和傘及洋傘製造二、印刷業四十五、製本業四、瓦斯業一、その他製品業十、合計百二十六である、而してこれ等は原動機として、電力水力その他を以て機械を使用する大小工場である。而して臺北市に於ける重なる工産高は包種茶七百九十九萬三千餘斤六百四十六萬七千



餘圓、烏龍茶五百九十萬九千餘斤三百五十四萬七千餘圓、金銀紙二百六十四萬八千餘斤二百六十四萬八千餘圓、精米十四萬千餘石二百八十七萬八千餘圓、粃摺二十萬五千石二百二十一萬五千餘圓、砂糖九百四十二萬八千餘斤百五十四萬七千餘圓、菓子百七萬三千餘圓、石鹼九十四萬四千餘貫九十五萬九千餘圓、麥酒五萬四千餘箱九十二萬四千餘圓、木製品八十六萬餘圓であつて尙煉瓦やその他多種の生産品を見、總額は三千百九萬餘圓に達して居る。

數多い工業は多種多様で、その製作場の設備も、所謂工場と云ふべき、立派な建物に新式の機械を、電力蒸汽力等の動力で運轉し、會社組織の大資本で、社員職工を使用して、製産に従事して居るものもあれば、工場と云ふは名のみで、僅少の職工を使役し、個人經營のものもあつて、數に於ても可なり多いが、更にそれ以下の小規模で、内職の稍々大仕掛に類するものも可なりの數だが、詳細に調査すると、煩雜に堪えないから略する。而して廣い意味に於ける工業上より觀た分布は、所謂大工場とも云ふべきものは、多く大安方面で東部の郊外地に屬した部分に在り、鐵工場や木工場等は宮前町から大稻



埤に多く、製茶業は無論大稻埤に限られ、精米粃摺業も多くは大稻埤と艋舺だが、大稻埤が殊に多い、その他の各製造場は大小共に、概して臺灣人街に在つて、城内には印刷工場が五六ある位である。それに大規模の工場は、會社組織の下に經營され、内臺人資本家の手に依つて事業が遂行されるが、然らざる中小工場即ち個人經營のものは、臺灣人の經營者が多いのは、土地柄當然のことであらう。殊に多い製茶業や精米粃摺業は、殆んど臺灣人の經營であると云つて可い、これは農業本位の米産地であるからと思はれる。製材場は概して艋舺の濱町方面淡水河畔に在るのも人目に惹くが、概括的に云ふと工業と云つても、稍規模を大きくした家内工業、個人經營が多數を占めて居るので、工業地帯と云ふ地域はないと云つて可いが、市街地内に普通人家や商家に伍して居る工場も、城内には少數だが多く大稻埤方面に在るやうに見受ける。それで工場として主なるものを二三示すと、臺灣蠶絲業株式會社生絲工場(堀江町)日華紡織株式會社臺灣工場(大安十二甲)臺灣染織株式會社宮前工場(宮前町)宜蘭紡績株式會社工場(宮前町)臺灣電力株式會社修理工場(樺山町)臺灣煉瓦株式會社圓山工場(下埤頭字東勢)臺灣酸素合名會社工場(千歲町)東



光油脂工業株式會社工場（綠町）臺灣爆竹煙火株式會社工場（河合町）日本樟腦株式會社臺北工場（樺山町）臺灣製腦株式會社臺北工場（濱町）臺灣製革合資會社皮革工場（宮前町）高砂麥酒株式會社工場（上埤頭）臺灣製糖株式會社臺北製糖所（綠町）大日本製氷株式會社工場（下奎府町）同社萬華工場（綠町）臺灣織物株式會社工場（大龍岡町）株式會社臺灣日日新報社印刷工場（榮町）臺灣オフセット印刷株式會社工場（宮前町）臺北印刷株式會社工場（大和町）臺灣電力株式會社瓦斯工場（濱町）等可なり多く、何れも相當の工場設備を有し、空高く聳ゆる煙突から黒煙を吐き、運轉する機械の響、職工の働さに、製産に忙しい状態である。而して工場の多くは電動力を利用して居るが、臺北に於ては明治三十五年文山郡の龜山に水力發電所を設け、臺北市に電力供給すべく、臺北電燈株式會社設立の議が生じたが、督府は水利事業を計畫し、殖産興業に資せんとした際なのでこの計畫をは官營に移し、明治三十六年十一月臺北電氣作業所を設け、水力電氣工事に着手し、同三十八年三月六百六十馬力の龜山發電所から、臺北市に電燈を點し電扇を動かしたが最初で、その後作業所は工事部の所管となり、次で土木部の一分課となり、更に督府作業所となり、大正八



年日月潭水力電気事業が計畫され、同年八月臺灣電力株式會社設立したので、これに譲つて今日に至つて居るが、龜山發電所も臺北に於ける電力の需要増大に、更に小粗坑に三千馬力の發電所を設けて専ら同所より供給し、後に龜山發電所を廢したが、更に需要増大と風水害に備ふるため、市内今の富田町に火力發電所を設け、兒玉町に變壓所を設けて市内に配電して居るが、最近は松山に火力發電所を設けたので、それまで補足として宜蘭方面よりの送電を他に轉用して、漸く市内の動力と電燈の需用に應じて居るが、近き將來は日月潭發電所からの供給を受けることになることと云はれて居る。瓦斯は明治四十三年に臺灣瓦斯株式會社を臺北に設立し、瓦斯の供給を行つたが後に官營となり、更に臺灣電力株式會社に引繼かれて今日になつたが、相當需用もあるれけど一般市内何處でもと云ふわけではなく、二三の方面には及ばない。以上各工場の以外に、煙草工場（下奎府町）と酒工場（樺山町）が、專賣局の南門工場と共に官營で作業して居る。酒工場は大正十一年七月酒專賣となつたので、それ以來芳釀社の酒工場を官營工場として、紅酒を醸造して居る。



臺北市内に於ける工業は、十有餘の大工場を除く大多數は工場とは名のみで、小規模のもので、職工使用數も少く、個人經營のものがなかく多い、それ故に一種の家内工業と見做すべきものと思はれる。而してこの家内工業とも見るべき各工場中で、多數なのは何と云つても、茶の取引中心地なる故、大稻埕に於ける再製茶その他の製茶業と、米作地米産地だけに、これも大稻埕を最多とし各方面にあるのは精米糲摺業である。それからから魴艸から大稻埕にかけて多いのは豆腐蒲鉾の製造及び指物業、大稻埕に多いのは茶箱等の木製品工場、魴艸濱町から大稻埕の河岸に多い製材所、大稻埕の宮前町下奎府町に多い鐵工所、その各所に散在する印刷所等々が、まづ主なる家内工業と云ふべきと思ふ。これ等の工場は、多くて十五六人の職工が働く位で、所謂完備した工場ではないのである。その他金銀紙の製造や、竹籐細工の製造等の如き、全く家内がこれに従事し、取引は問屋に持參賣渡すものもあるが、自宅營業のも多い、而して在來の家内工業は、臺灣人向のものであつたが、領臺後内地人向のものも多くなつて來た。彼等臺灣人は内地人の工場その他製作所に徒弟として住み込み、技術を充分會得するべく、細心の



注意と努力に生積し、漸く獨立し得るに至つて開業したもので、この方法に依つて、内地人向の製品を製作販賣するものも尠くない、而も生活費も低下し、總ての経費が少く、而も技術も相當ある上に價は安いから、内地人の製作場に注文しても、責任こそ主人が負ふが、仕事は徒弟たる臺灣人が行ふから、内地人の製作場のものと製品こそ多少は巧拙、その他の差異はあるにしても、非常の間隔もないのに、高價を拂はねばならないから、普通のもものは臺灣人の方に顧客の足が向ふ傾向がある。然し精巧確實なのは、臺灣人の手では一寸困難である、さは云へ普通の指物類や家具類等は、臺灣人の製作所にて充分であり、安價なのであるから、内地人もこれを買ふやうになり、この方面でも内地人は臺灣人から侵蝕されつゝあるのである。恁う云ふ工合に、家内工業も文運の進展文化の向上に連れて、工場設備も内地人諸共、それごとく新式の進んだものを以てし、製品の種類の如きも、在來のものゝ外に、新しい品を製作するに努める傾向が著しく、この方面にも進歩を遂げたものが多い。但し臺灣人の製品は、兎もすると原料や材料を、安價に出來すべく、粗惡なものを用ゆることが尠くないから、安からう惡からうで仕方



ないとしても、注文者は充分注意して、製品受取の際は、一入検査を嚴重にして、悪いのは改めさせることを忘れてはならないのである。而してこれ等の家内工業者は、同業者もなか／＼多く、注文先の争奪も甚しく價格の競争は、自然價格の低下を餘儀なくし、薄利多賣主義の下に、廉價製造販賣に努めて居る一方、財界の不振、節約緊縮の時代なので、經營困難だけれども、規模資本その他經營上に於ても、所謂大工場と云はるゝものに比して小さいだけに、打撃も亦た薄く、經營難で廢業や休業する者も多いが、相當經營を維持して居るものも尠くないのである。然し彼等個人經營と云はず、合同資本のものでも、經營難を嘆じつゝあるのが現状であると云ふべく、何れも財界の景氣回復を一日千秋の思ひで待ちつゝあるのである。

### 市内に於ける鑛業及び水産業

…臺北市の地勢と鑛業…淡水基隆兩河と水産業…

鑛産高と水産高…水産業者と養殖業者…



臺北市が臺北平野の中央に位して居るから、地勢を見ても、鑛業地であるとは云へない、寧ろ鑛業があると云ふのが、不思議と云ふべきであらう。而して地勢上、山があるのは文山郡と境界する、石碇深坑方面に隣れる一帯の山地と、七星郡士林と境する劍潭山、大直山の一帯である、臺北市に林産があるのは、これ等の山地に於ける造殖林から得られるもので、僅少なもので一萬六千餘圓に過ぎない。市内に鑛區があるのは、石炭の鑛區のみで、六張犁方面にあるのだが、この六張犁は市内に編入されて居るも、農村部落であつて、青田の中に一部落をなして居る所であるが、北方は山地に接し、而もそれが石碇に隣つて文山郡との境界となつて居る、この石碇方面は基隆郡の石炭鑛區に續く石炭鑛區で、石炭の炭層<sup>\*</sup>がこの方面に連つて居るから、石炭が此處にも採掘を見る次第であるが、規模は大きくなり、炭質も然し良好でないけれど、相當採掘量を見、漸次増加しつゝあると云ふことである。六張犁方面のみが、唯一の市内の石炭産出地で、鑛區は五箇所あつて、その總面積は二十六萬二千二百四十二坪で、日臺鑛業株式會社（本町）もこの方面に採掘を試みて居るが、産額は三千七百九十萬斤、價額十三萬千二百十



五圓を示して居る、然し産額は年々増加し、大正十年に比すれば約七倍、昭和元年に比して約六倍の増加を示して居て、有望視されて居る。然し何分最近不況の深刻に、各炭業者は採算上、生産費以下の安價を見、而も販賣競争激甚で經營難に陥り、廢坑續出の状態なのだが、この方面は小規模であり、他に比して安い石炭を採掘販賣を試みて居るから、相當需用を見て居るため、廢坑するに至らず、兎に角事業繼續しつゝあるが、石炭界の現状では、此處にも消極的經營を以て處するの外なきの状態である。

淡水河と基隆河が、臺北市の邊境を貫流して居る臺北市は、この兩河に於ける水産業は、甚だ貧弱幼稚なもので、漁獲高も少額に過ぎないのである。臺北市に供給さるゝ魚類は主として基隆方面からで、淡水方面からも多少供給されて居るし、淡水産の魚類即ち鰻等は遠く南部地方からも供給されて居る位、兩河の漁獲物は市場を賑はすほどの位である。然しその昔蕃人はこの兩河に、例のマンカアと呼ぶ獨木舟を浮べて、漁獲に従つた位で、昔はこの兩河が、蕃人に對しては、相當重要な魚漁場であつたと云はれて居る、然し交通機關の完備した以上、近くに基隆淡水の兩港を控へ、更に蘇澳邊からも供



給されるから、この淡水基隆の兩河に於ける獲得する水産物は、然う重要なものでなくなつた。従つて臺北市の水産と云ふと、この兩河に於ける漁獲業なのだが、特記すべきものがなく、扁魚、鮎魚、烏魚、鯉魚、鰻等と、この他に鮎や鯉等々もある。而して水産業者としては、基隆河に四手網を卸して居るのをよく見受けるが、淡水河には餘り見受けませんが、その上流新店溪の下流方面、川端馬場、富田の各町の河岸、即ち水源地から川端馬場兩町先に至る河流で、鯉や鮎等々の釣漁が行はれて居る位で、市の水産業は頗る貧弱を免れない。而して生産高は、養殖業たる養魚池に飼養するものも合せて、數量五萬六千七百餘斤、價額八萬七千餘圓に過ぎないが、これが大部分は養殖業の所産で、漁獲高は一萬九千餘圓位である。

僅少の水産額を示す、市の水産業は貧弱であるが、單に淡水基隆兩河を控ゆるだけで、水産業の發展に適した地でないことは否定し得ない、従つて純粹の水産業者は少數で、多くは副業的のもので、水産業者と云ふほどのものでない、これ等の人々は、基隆河畔に居住して居る臺灣人に過ぎないが、川端町を中心に新店溪に釣漁を試むる人には、内



地人の職業人が多少ある、けれども大體から見ても、水産業者とも云ふべきものは少く、四手網位で漁獲するか、釣漁を試むる職業人であると云つて可い。而して養殖業も漸次養魚池が、耕地同様に、宅地擴大に伴ふて埋められて減少するので、漸次衰へつゝある一方、交通機關の發達のため、養殖された魚類も、遠く養殖業の盛な中南部地方からの供給が夥しいから、これで需用が充されて居る状態である。従つて養魚池も尠く、専心これに従事する人も尠いと云ふ状態だが、淡水産の魚類も亦た市場に供給されて居る、多數でないと言はれて居る。

### 各種の副業と労働者及び勞銀

…副業内職と内職人…苦力とその他の労働者…

労働者の種類と苦力…勞銀と労働者及勞資運動…

加工副業は、領臺後産業の發達と文化向上に因つて、顯著の發展を見、立派な製作品が量に於て増加したのみでなく、質に於ても向上し、今や内地各方面の需要は、益々多



くなり有望となつて來た。一體臺灣に於て加工副業の種類は、物指竹材料、籐骨、扇や團扇の骨、傘骨竝に柄、獅爪、塗箸材料、箆、飯簀手提等の、臺灣名産の一つ竹細工品と、臺灣産品の莫蔭や筵、それから原料豊富な苧麻や黄麻、林投、黄麻、鳳梨、月桃等の纖維植物の製品、苧麻糸や苧麻布、黄麻布、鳳梨布、月桃布と云つたものがあり、その他原料は山地繁生する臺灣籐の製品、椅子や卓子の類で、これが非常に内地に需要を見て居る等多く、婦女子の副業としては刺繡の如きも有數であつて、これに依る生産額も多大である。而してこれ等は多く家庭副業であつて、婦女子の手に成るのが尠くない。而して大多數を占むる農民の、豚や鶏鶩の類を飼育する、所謂農家の副業と共に、内地に於てそれ／＼盛に行はれて居る。尤も農民部落では、養豚が最も盛で、鶏や鶩を飼ふのも多く、これは農民部落に行くど、誰の目にも直に入る田園致景の一つである。臺北地方に於て農民部落では必らずこの光景が到る所に目撃され、各農家では必然的の事業にされて居る。然し臺北は土地柄農民部落以外では、この副業を營むに適しないほど、人家稠密して空地がないから、自家用の目的位で、僅かに養鶏を行つて居るに過ぎ



ない、而して中以下の臺灣人家庭では、金銀紙を製造する者や、竹細工品を製造するものがあり、魴艸や大稻埕の臺灣人街、殊に街衢をなす所では、副業と云つても家庭人が小遣ひを得るための内職に過ぎないので、その種類も多種多様で、殊に婦女子の手に成ると云ふ工合である。而して習慣上からと私經濟上からとで、内職は可なり盛で、臺灣人のみでなく、増加した内地人の間でも、中以下の家庭では同様婦女子の内職が多く、その種類も多様多種である。而して時には臺灣人にして懈怠の不良な者はあるが、これは例外であつて、一概に勤勞を厭ぬと云はれる支那民族だけに、老人は別として男女共に、よく勤勞をする風があり、若い人々や子供でも勤勞に努むるから、中以下の臺灣人は、その家庭に在る婦女子や子供には、それ／＼内職的副業を課して共稼をさせ、一家の生計を與へて居るものが多い、これに反して内地人でも、中以下の家庭では、婦女子こそ内職もするけれど、子供にこれを強制しない、これが内臺人の差異で、臺灣人らしい點の一つと云はれて居る、それ故臺灣人の子供は、自己の働き稼で多少の所得を懐に、すべく平素訓練され、四圍の環境がかくさせて居るから、中以下の臺灣人の子供で、



相當年齢七八歳からの者で、唯だ遊び暮して居るのは尠い、家族と共に何事か内職に忙しく、副業に従事して居る。然し都會地は臺北に限らず、何處でも恁うした副業が盛なのに拘らず、子供は自ら働き稼ぐの多く、傭はれて働くものが尠くないが、婦女子は家に在つて、他に傭はれ働かず、家事や育兒の餘暇を利用して、副業たる家内仕事、加工副業に務めて居る。尤も最近では時勢に伴ひ、職業婦人としての、内臺人の若い女子、娘達が街頭に進出して、生活第一線に立つて働き稼ぐやうになつたので、多少婦女子若い娘等の、家内副業的内職は、幾分減少の氣味を示して來たのも事實である。今此處に副業の生産額に關する統計は一寸得られないが、一面開發と向上に伴ふ生活關係と、内地その他需要増加のためと、また一方指導獎勵の結果、盛になつて來て、生産額も増進すると共に、品質も向上したと云はれ、籐製品や竹製品は、内地で好評を博しつゝある等、副業は愈々増加發達して行くものとされて有望視されて居る。恁う事情なので、財界不況の祟りはこれに及ぼして、賣行は稍不活潑だが、一方從來から製品取引關係が保持されて居るため、失業者を見る臺北でも、恁う云ふ人々は失業せず、仕事に出精して



居る始末で、副業なるものが、漸次臺灣人間にも理解され、生活安定の一手段にもなる  
 と云ふので、彼等臺灣人の中には、この副業が有利なものど認知され、これに手を染め  
 る者が漸増して居るし、彼等臺灣人は時代に適した有利有望のものを選擇し、在來の製  
 品外に、内地人向の品さへ製作するやうになつたものが多く、最近は内地人向の品を選  
 擇して製作する傾向が著るしくなつたのも、彼等の進歩の一つで、時代の勢とでも云ひ  
 得やう。而して一方内地人は、多く男は職業を持ち働くので、中以下の人々でも、従前  
 は内職を賤業視して、餘り行はなかつたが、近時不況の深刻化は、この觀念を打破して、  
 働き得る老人は、街頭の露店や行商に出かける者が漸く多くなつて來た、婦女子は從來  
 とても、中以下の人々は、内職を行つて居るものが尠くなかつたが、近時はこれも不況  
 のため、街頭に老人同様、露店や行商にも雄々しくも進出する者が増加し、飲食物の露  
 店や風呂敷包や小さな籐鞆をさげ、戸別訪問の女行商が、殊に目につくやうになつた、  
 樂士と云はれる臺灣も、不景氣の吹く今日、世智辛くなつて來たものである。

由來植民地は何處でも然うであるが、母國人と土着人との生活程度の差異、人情風俗



習慣その他各方面に於て異なるものが多く、異國情趣はこれに依つて見られるのである。母國を遠く後にして働き稼ぐ母國人は、以上の差異に原因し、資本家や事業家その他が、使ふべき人が、大多數を占むる土着人に比して、給料その他を多く支拂はねばならぬのに、土着人は比較的安く使ひ得られる、而も労働者を使用する上に於て、生活程度が低い土着人、而も大多數を占むる彼等に支拂ふ勞銀が、極めて低廉なものである。これが植民地を開發進展せしむる上に於ける最も功果多く利益とされて居る。臺灣もその通りで、勞銀安が何よりの利益とされて居る。殊に臺灣人の労働者は苦力と云ふ労働者であつて、労働は安くよく勤勉するとされて居るから、非常に雇傭するに好都合である。臺灣の苦力は支那との苦力同様なのみでなく、この臺灣苦力と云ふ中に、支那人の出稼労働者が可なり多數である。内地人は労働者でも多少の筋肉労働者はあるが、多くは職工徒弟その他の技術的の労働者で、苦力と同一視すべきものでない、従つて賃銀も高い。臺北に於ける内地人の労働者は、車夫も居れば自動車運轉手大工左官印刷工その他の職工等で、臺灣人の苦力は土方や臺車押人足車夫等々、所謂筋肉労働の苦力であつ



て、この苦力の仕事は多種多様であるが、大體に於て監督さへ嚴重にすれば賃安でよく働くが、仕事に責任などなく、牛馬同様云はるゝまゝに動くだけで、監督の眼を光らせないと、安逸を貧り不正行爲も行ふと云ふものだが、苦力以外の労働者、職工や徒弟は内地人と同様に、各工場各製作場に働いて居るが、最初は内地人の工場や製作場に徒弟となり、仕事を修得した上で、既に立派な一人前の職工となつたのも尠くない。内地人の労働者は多く職工として各工場や製作場に働き、或は大工左官その他の仕事を行ふ者で、内地の労働者と異なつて、土方等の苦力の仕事は餘り從事せず、苦力その他を監督する所謂苦力監督が尠くない。支那人は出稼ぎ労働者で、車夫が多く苦力も尠くない。而して臺灣人も近來は概して向上したと云ふものゝ、彼等の生活程度は尙ほ低く、簡易なものであるし、土着人と云ふところから、勞銀は安いので大に需用が多く、失業する者は少いと云はれて居る。而も最近出稼の支那労働者が支那が銀安のため、金本位の臺灣で働き稼いだ收得金を支那に送ると、非常に多くの利を見るので、彼等の渡來は激増して來た。今日臺北市内で稼ぐ内臺人の労働者、(苦力を除いて)職工の種類を觀ると、



金屬及び機械器具工業には旋盤工、仕上工、鑄鐵工、鍛冶工、木型工、製罐工があり、紡績工業は總て女工で、製絲、麻紡績、綿手織、絹手織、莫大小編等であり、窯業では陶器轆轤工、硝子檢瓶及吹込工、煉瓦及瓦型工があり、製藥工業では製藥工、爆竹製造男女工、樟腦油工、製革工があり、食料品工業には製粉工、製麵工、醬油味噌釀造工、製糖工、粃摺工、製菓工、再製茶工、茶撰女工があり、衣服身廻品製造には洋服和服本島服の各裁縫工、蓑笠製造工、靴下駄工、金銀細工、染物工がある。木竹草籐類製造には製材手挽及機械挽があり、その他指物工、建具工、漆器工塗師、竹及籐細工、疊刺工、車製造工、桶工、製筵工、活版植字工、石版工、製本工、煙草製造工、酒釀造工、樟腦阿片製造工等々があつて、何れも工場製作場に働いて居る。尙この他には左官、大工、植木職工、時計工等々數多あつて、なか／＼一々記すことが出來ない、又た臺灣人の女が、各家庭に女中として傭はれ、洗濯女として使はれるのも多く、洗濯女は各得意の家庭を洗濯して廻る一種勞働者で、臺灣でないと思はれないが、夏の長い土地柄、これは必要とも見られる。女中は内地人も多少あるが、臺灣人の方が給金も安く使ひ易いから多く、



小間使は内地人でないと務まらない。その他或意味から云ふと一種の労働者だが、臺灣人に多くこれを見るのが、料理屋や飲食屋の使用人で彼等は若い男である。また一方撞球場のゲーム取りも、臺灣の若い女が多く傭はれて居のが近頃多く目につく。これ等の新現象も時代の動きを語る一つであらう。苦力は下級の労働者、筋肉を資本とした土方その他の力業をするもので、荷を搬ぶ牛車の御者や、葬式の行列に見苦しい姿の雑丁人足も然うであり、苦力は内地の人足であると云つて可い、従つて最下級の人々で、賤民の日傭稼と云ふ部類に屬する、それでこの苦力にも時々女が交るが、これは近頃のこと。で例の纏足をしないから、働き得ることになつたためとも思はれるが、然し女は餘り多く見受けない。人足中でも力を多く要しない仕事には老人も居るが、如何にも哀れを催すもので、生活苦が彼等は働かすかと思ふと同情させられる。但し老人でも女はない、彼女等は纏足を尙行つて居るし、仕事に堪ゆる力がないから、彼女等は寧ろ家内で内職をして居る方が可いと云ふので人足稼をしないから、臺北には臺灣人の女人足は見るところが稀である。



勞働者は内臺人共に、各々職を持つて働き稼いで居るが、内地人の勞働者は概して生活の度が臺灣人の勞働者に比して高く經費も多く、且つ臺灣人の如く一家總出で働き勞働すると云ふことはなく、偶には夫婦共稼もないことはないが、これは極く少數で、女は大抵家に在つて、家事整理の傍ら所謂手内職をする位である。従つて勞銀も高いと云ふわけだが、一面には内地人即ち母國人と云ふ點からも、臺灣人より高いと云ふことになつて居る。何しろ領臺當時は、所謂萬事漸く緒に就いた時代で、勞銀も内地人の同業者も少く需要に應じ切れぬ位だつたし、一つは臺灣を稼ぎ場所として渡來したと云ふところから、また生活様式が亂雜で物資も頗る高く、彼等も餘程儲けねばとあつて、今日から考へると馬鹿らしいほど高かつた。然るにその後島情平穩百般の事物が秩序の整頓に依つて備はり、漸次勞銀も安くなる一方、臺灣人の勞働者が内地人の需用に應じ得るまでになつたので、昔の如き突飛な勞銀では、誰も備はず注文せぬやうになつた、これは當然の歸着である。ところが財界好況に事業界は活氣を呈し、物價も昂騰を見る等で、勞銀は一段平常に復して均衡を得たのが、これに伴ふて高くなり、而も需要は盛んで勞



働者の懐合は非常に良好であつた。その後好況の反動と、例の財界の恐慌その他で、不況を辿り漸次これが深刻化し物價も低落を辿るに至り、勞銀も幾分四圍環境に支配されて安くなつたが、小賣値段が一向低下せず、内地の如く不況が深刻化しない等で、種類に依つては低下したもの、一般には然う安くなるに至らない。臺灣人の勞銀は從來内地人のそれに比しては、生活費の少いのと、技能の關係や土着人と云ふ事情等で安かつたが、これも財界好況に際して内地人に準じて高くなり、不況の今日も尙幾分低下したものの、まだ種類に依り需要關係から低下しないものもある、然し一般には低下を示して居る。

苦力は内地の人足と同じく日傭稼で、親方が人足の口入をする通り、苦力の口入を苦力頭なるものがあつて、注文に應じ召集服役させるが、その手数料即ち頭をはねることには土方の親分と同じだが、苦力頭は苦力間の勢力者で、授職の仲介者として、苦力を部下として扱ふ風習である。苦力頭は相當金を所持し資力として居るから、生活も苦力仲間では裕福である。然し苦力は何れも細民、日稼で生活する人々なので、貧乏な賤民の



群と立つて可い。而も浮草のそれの如く、一定不變的の稼所を有するものもあるが、多く勞銀の高下に依つて、稼場所を轉々して歩く、高く仕事の多い所をと望んで、甚しいのになると、今日此處で稼いで居たが、他に好い口があると直ぐ無斷でそれに走つて顧みない亂暴なのがある。恚う云ふ手段は彼等の常習的で、誰に慮遠もせぬ。であるから一種浮浪者とも云ひ得るし甚だ危険千萬だな人間である。然し働いて居る間は苦力頭が責任を負ふことになつて居るがこれも甚だ不確實で安心は出來難い、それで彼等は苦力頭の所に朝集つて稼先を聽き、それに赴き夕歸つて勞銀を貰ふ、それで雇傭關係が消える、だから集る苦力も多くは、苦力頭とその日のみ關係を結ぶと云ふ風であるが、多くの中には久しく關係を結び働くのも尠くなく、これは稍確實である。無論苦力の群は、賤民で無智の徒が多いから、理屈は通らず強者が勝の壓制的統御で叱り飛ばして使ふ、叱り飛ばれて働いて居る。同じ労働者でも苦力は所謂日傭人足で下劣な者であるから、従つて勞銀も安いが、他の労働者に準じて、勞銀の變動があり、不況の今日は大低一般に一二割乃至三割位低下した。即ち臺北に於ける勞銀は、最近（昭和五年中）の調査に依



ると、内地人は、旋盤工三圓五十錢、鑄造工二圓、製革工二圓五十錢、製麵工一圓二十錢、製糖工二圓四十七錢、菓子工二圓五十錢、石工四圓、煉瓦積工四圓、瓦葺工四圓三十錢、ペイント塗二圓、陶器轆轤工二圓九十錢、瓦工一圓十錢、製材(手挽)二圓五十錢、指物工三圓五十錢、建具工三圓三十錢、疊刺工二圓八十錢、洋服裁縫工二圓五十錢、和服裁縫工一圓五十錢、漆器工(塗師)二圓、徑師二圓八十錢、電工一圓九十二錢、貨物荷捌夫一圓五十錢、靴工二圓二十九錢、下駄工八十錢、金銀細工二圓、染物工二圓四十錢、大工三圓五十錢、左官四圓五十錢、桶工二圓五十錢、活版植字工二圓、石版工二圓五十錢、製本工二圓三十錢、庭師三圓五十錢、日傭人夫男二圓等で、臺灣人は旋盤工一圓二十錢、仕上工九十五錢、鑄造工一圓五十錢、鍛治工一圓五十錢、木型工一圓五十錢、製罐工一圓二十錢、製絲女工四十五錢、麻紡績女工四十錢、綿手織女工五十錢、絹手織女工五十錢、搾油工八十錢、製革工一圓、製粉工七十錢、製麵工九十錢、醬油釀造工九十八錢、味噌釀造工一圓、製糖工一圓二十四錢、粃摺工一圓五十錢、製菓工二圓五十錢、再製茶女工九十五錢、石工二圓、煉瓦積工一圓八十錢、瓦葺工一圓八十錢、ペイント塗工二



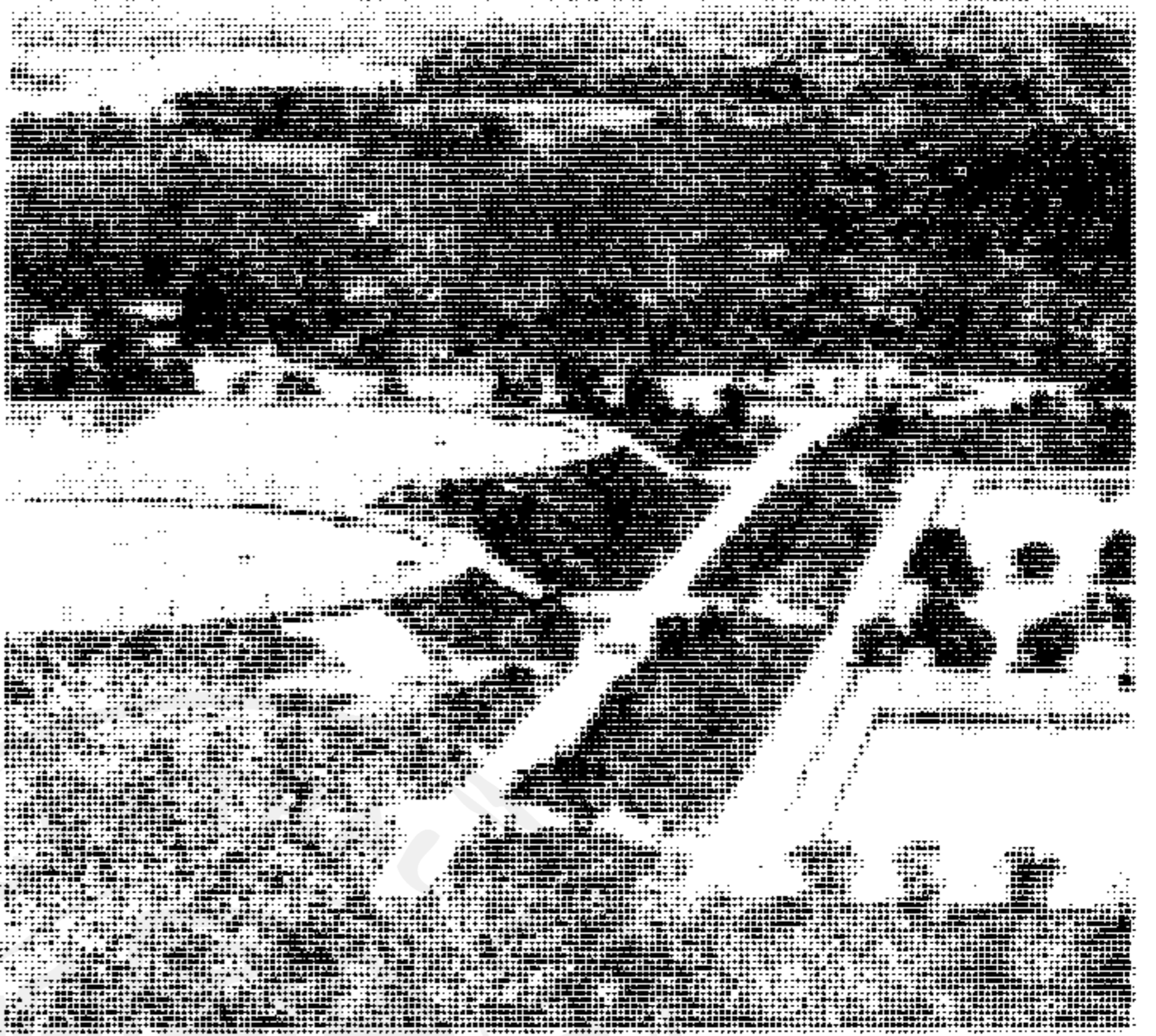
圓、製材工(手挽)二圓五十錢、同上機械工一圓七十錢、指物工一圓五十錢、建具工一圓五十錢、漆器工(塗師)二圓、籐細工四十錢、疊刺工八十錢、徑師八十錢、電工一圓八十一錢、輕鐵押夫一圓、貨物荷捌夫一圓二十錢、轎夫(二人昇一里)一圓五十錢、農業佃作男一圓、同女二十五錢、水田作男一圓五十錢、同女四十錢、陶器轆轤工一圓、硝子檢瓶一圓、同吹込一圓五十錢、煉瓦型工九十錢、製茶工四十錢、爆竹工男七十錢、同女三十五錢、煙火女工二十錢、洋服裁縫工一圓二十錢、本島服裁縫一圓二十錢、簀工七十五錢、靴工一圓二十錢、下駄工七十錢、金銀細工一圓四十錢、染物工一圓、大工一圓八十錢、左官二圓、車製造工一圓五十錢、桶工八十錢、製筵女工四十錢、活版植字工一圓三十錢、石版工一圓三十錢、製木工一圓、荷車挽(手押)一圓五十錢、同牛付二圓、庭師二圓五十錢、日傭人夫男八十錢、同女三十五錢と云ふ大體の相場である。この勞銀を見ても、今日では然う安くも思はれないが、然し内地人のそれに比し、臺灣人の勞銀が安いのは、植民地であるからである。然るに最近思想問題が云々され、例の文化協會連の社會運動が内地の亞流を酌み、而も不十分な研究、不用意、不謹慎な態度で爭議を起せて、資本家



に對する勞働者がある。彼等は臺灣人の勞働者で、主として職工だが、彼等は内地の勞資爭議を眞似て、賃銀の値上その他の條件を提出し解決を求めて、怠業をなし、容らざれば對抗して罷業する等、面白からぬ運動を屢次見るが、これはその背後に文化協會の如き連中が潜み、策動して彼等を踊せて居るけれど、この運動は内地の勞資爭議のそれの如くでなく、文化協會連中の不穩分子に煽動され巧に操縦されて、資本家に對抗しつゝあるので、新時代が生んだ臺灣の惡現象と云ふべきである。殊に職工の恚うした運動は、臺北に於ても最近多く見るが、常に彼等は失敗に歸して成功しない。而して苦力の一味は、恚うしたことは、殆んど無關心であるのも、一寸面白い對照ではないか、またく臺北、いや臺灣ではこの運動は成功し難いと思ふ。然し尙彼等は運動に關し、正しい研究が必要で、似而非の背景、操縦者のために喰ひものにされて居ると云ふのが、今日の彼等の運動と云つて可いと思ふのである。



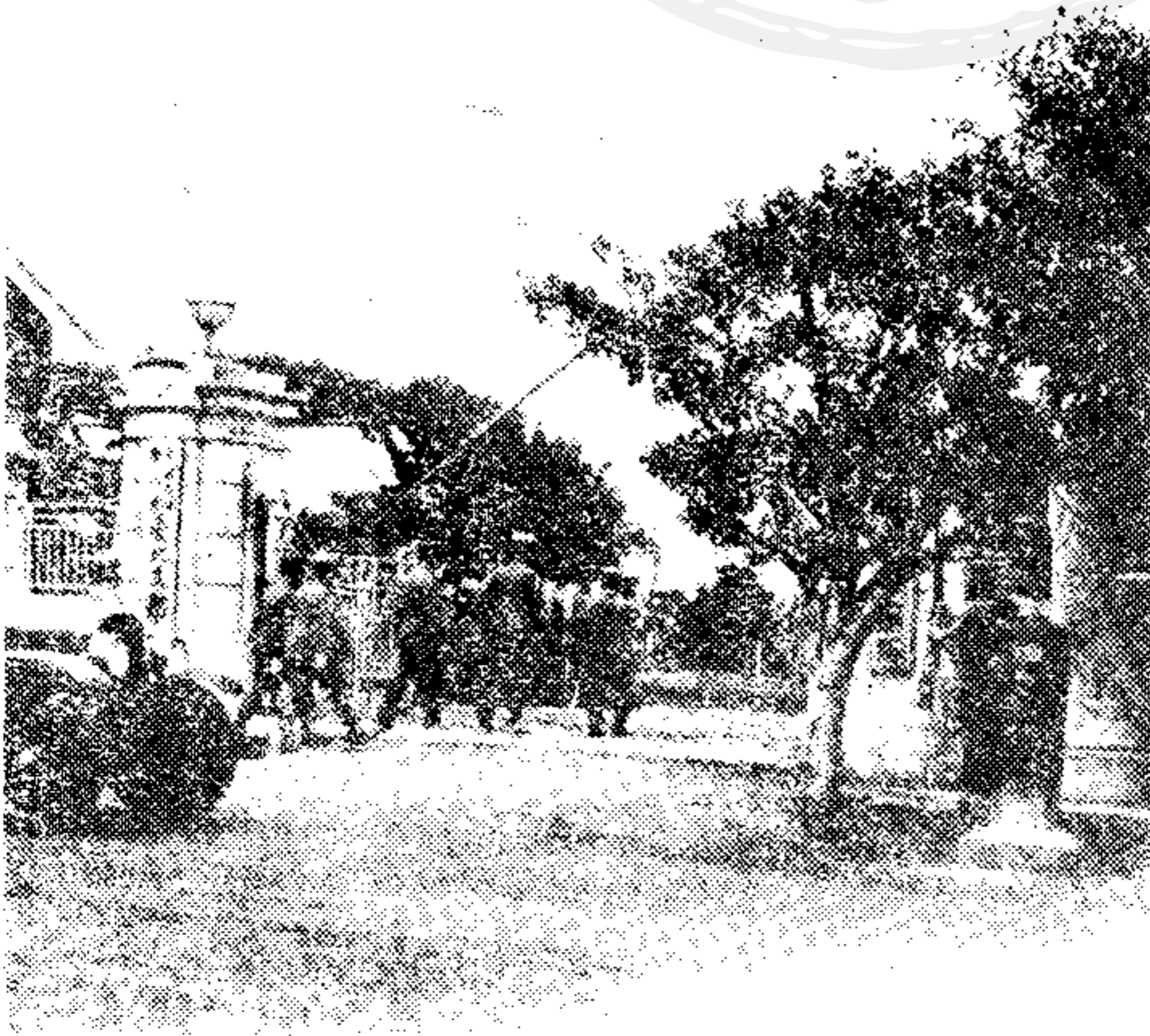
# 臺北の衛生保安と軍隊



|| 臺北市の衛生施設と保健設備 ||

|| 市の警察と消防と罹災民救助 ||

|| 島を守備する軍隊と臺北市民 ||





## 臺北の衛生保安と軍隊

### 臺北市の衛生施設と保健設備

…衛生保健の施設と臺灣人…保健施設と臺北の水道…

悪疫減退と防疫作業…醫事機關と墓地火葬場…

醫術や衛生學が進まない昔は、熱帯地や亞熱帯地には、幾多の移住民が悲惨の歴史を繰返さない土地はなかつたが、近代文明的施設を見るに至つては、この悲惨極まる状態から漸く免れた事例は尠くなく、臺灣も實はその一つである。由來臺灣は瘴煙蠻雨の土地とされ、世界の熱海や氷洋にさへ足跡到らざるなく、先天的に冒險性に富んだ支那民族も、臺灣の移住には難色があつたと云はれ、『水土不服病者即死』の聲を聞いたものである。而も領臺前は衛生保健の設備一つもなく、住民に何れも全く衛生保健の思想が缺如して、都會地に於てすらも牛や豚や鶏と殆んど同居すると云ふ状態、到る所屎尿や汚



水は潑溜し頗る不潔極まるもので、言語に絶する生活状態であつたから、蚊蠅鼠族の蕃殖甚しく、マラリヤ、チブス、赤痢等の悪疫は常に蔓延流行猖獗を極め不健康地として知られたが、領臺當初も依然悪疫流行甚しく、渡來した内地人も軍人軍屬やその他の人々で、悪疫に罹つて空しく斃されものは可なり多數であつた。それで衛生保健の状態を大に改善するの急務を認め、各種の防疫施設、醫療機關の完備に殆ど全力を注ぎ、着々効を奏して今では全然舊態を革め、内地に比して毫も遜色なしと云ふ程に進んだ施設を見、就中上水道や下水、市場醫院等の文化的施設に至つては遙かに内地より進歩し、かの俗諺に『臺灣迷惑何々ぞ』と云つて、ペストやマラリヤ、腸チブスと悪疫を數へたが、もう今では臺北にもペストもマラリヤも絶滅し、腸チブスだけがまだ撲滅に至らないで居る。而してかくの如く全然面目をば一新した完備を見た、衛生保健設備施設の費用は、改隸當時全部國庫から支辨したが、明治三十二年度から臺灣地方税規則を制定し、地方衛生事務費を以て、公醫費、傳染病豫防費、驅黴費、井戸下水及汚物掃除費、屠獸検査費、衛生試験費、水道費等を支辨し、傳染病豫防費の如き、その他負擔の大なるのは國



庫の補助を仰いだもので、その他市場や屠場等の建築、下水排除、汚物除去等の保健上の諸施設は、公共衛生費を以て支辨し、各地方廳に於ける衛生保健防疫の事務は、警察の所管として改善に努力して大に功績を示して來た。市制實施後は臺北市役所に衛生課を置き、市内の衛生保健の事務を行ひ、或は防疫に或は清潔法施行、汚物掃除等に努めつゝある。而して進んだ醫術の恩恵と、完備した衛生設備と用意深き努力に依る施設と衛生思想の普及宣傳とにて著しく臺灣人の衛生に對する觀念を喚起し、保健の大切なことも自覺する者増加した等々の事情で、嘗ては惡疫流行猖獗を極め、不健康不衛生の地と目された臺北も、今日では文明の都市とし本島の首都として、恥からぬ進歩した現代文化の設備施設の數々を見るに至り、一段とその進展の著しきを示すことになつた。敢て領臺前と云はず、領臺後數年間の状態に對比すると雲泥の差を見、今昔の感に堪えぬものがある、領臺當初から在住の内地人、今は白髮の老人も過去を偲んで、嘗て遭つた惡疫流行當時の悲惨事を追想して、今日の幸福を衷心から感謝しないものがない。殊に大多數を占むる臺灣人は、この完備した衛生保健の設備や施設から恐しい病魔の厄を逃



かれ、安樂に健康に生活しつゝあるを思つて、この大なる恩恵に浴して居ることを、深く感謝して居ると共に彼等祖先の地、南支那地の悪疫流行の慘事を耳にする時、一層喜悅に堪えず今の健康状態に在るを思つて、新附の民としての幸福を思はないものがない位、従つてかの迷信に因る加治祈禱や神佛に祈願することも、彼等の民族性たる迷信の深さと舊慣墨守とで全く行はれないのではないが、その愚昧を笑ひ病あれば醫療を受くるの風が多く、自然的に迷信が打破されつゝあるほど、彼等の衛生保健の思想も可なり進んで來たのである。

改隸後に於て、一大急務として施設された衛生保健上の設備施設は、阿片行政、保健、防疫、醫事の各方面に互つて行はれ、何れも完備して全く舊態を革め、著しき進歩を示して居るもので、殊に臺北に於けるこれ等の施設や設備は實に賞賛に値するものが多し。阿片行政は改隸直後政策上の一大問題として論議されたもの、臺灣人の大多數は阿片吸食の悪習者で、彼等吸食者は嚴刑重罰にも廢止させることが難事であると云ふ位沈醉して居たから、統治上からも大に慎重詮議の末、漸禁主義に依り矯正禁止することゝ



し、阿片令を發布して阿片を政府の専賣とし、政府以外何人も輸入販賣を許さず、販賣は特許者に限り許可し、阿片含有の製劑禁止、阿片癮者に限り吸食を特許して、私に販賣交換讓與、再製吸食輸入等を犯す者には嚴重の制裁を加ふることし、専ら警察の手に依り嚴重な取締を勵行した。その後密輸入や吸食犯則者も多かつたが、警察の進歩した取締勵行で密輸入者も犯則者も減退し、一時は特許吸食者十五萬九千餘人を算したが昭和四年には二萬四千九百餘人の少さを示し、臺北市内でも四十歳以上の人以外は阿片吸食者を見ぬ程激減した等、大に政策は成効し中外に好評を博したが、更に最近阿片吸食廢烟救療の目的を以て、大稻埕に更生院(太平町)を開き、全島より癮者を收容矯正して、阿片吸食の害毒から脱しめつゝあつて、功果成績大に見るものがあり、矯正者は再生の喜びに感謝して居る。阿片政策で救はれた臺灣人は更に保健施設に依つて大なる恩恵に浴して居る。即ち臺北に於ける保健施設の主なものは明治三十二年四月發布の下水規則に依る下水施設と明治三十三年四月城内から着手された市區改正とで、これは同年八月發布の家屋建築規則と共に三者相俟つて、不潔不衛生極まる市街道路竝に家屋を衛生上災害



豫防上から改善を見、體裁上からも一段と美化され、立派な街衢道路家屋が建ち並び、殊に艋舺大稻埕の如き臺灣人街は、廣い道路と明い風通の良い煉瓦積の家屋とで面目を改め、立派な下水溝に依つて汚水等の潑溜もなく清潔になつたが、更に春秋二季には大清潔法を勵行し、全市に互り警察官立會の下に、家屋の内外を掃除、家具什器の日光消毒又た汚物掃除規則や下水規則で依つて日常汚物下水の掃除を勵行し、市内の下水溝は早朝苦力を使役して掃除し汚水を流させる等各種の施設を見た。市制實施後は市衛生課に於て引繼ぎこの方面を施設に努力し、汚物塵芥取扱や糞尿汲取等には、日々監督を附し人夫を出動せしめ、周到な用意を以て清潔法を實行し、住居移轉若くは新居を構ふる者や一般申込者に對しては、低額の手數料で家屋の消毒を施行しつゝあり、又た市衛生課内に消毒所を設け、傳染病毒汚物は無料、その他一般の申込に對しては、實費を以て物品の種類に應じ、熱氣又はフオルマリン消毒を施して居る。而して土地柄夏期炎暑の際や風塵甚しき時は、道路に搬水自動車や手挽車を使用して日に幾回となく撒水作業を行つて、市民の便利を圖つ居てる。その他今は經濟上からも重要視し、物價調節安價良



品提供の目的を以て經營される市場も、一面は衛生上からの見地で建設經營されたもので、既記の如く市内に五箇所の市場があつて、市民はこの便益に浴して居る。又は屠場も地方廳の所管として、市内に設置されて居るが。尙保健上至大の關係ある飲食物の取締は、専ら警察の手に依り斷行され、隨時に販賣する飲食物、販賣用に供し又た營業用に使用する飲食物や割烹具、その他料理店内の炊事所を臨檢し不潔非衛生のものに對しては製造採取販賣授與若くは使用を禁止し、改善を強制する外營業の禁止停止を命じ、有害物件は所有者若くは所持者に物品廢棄を命じ、官に沒收廢棄する等、嚴重に取締るのみでなく、料理店飲食店遊廓その他旅館等の接客業の従業員の身體検査を屢々行ひ、保健上の諸規則を徹底的に施行し、違犯者は斟酌せず處罰に附して居るから、この方面の衛生状態は、良好と云ひ得ると云はれて居る。而して領臺當時臺北も然うであつたが、領臺前の飲料水は、河水又は鑽井に依つたが、土地が不潔で水質も漸く不良となり、住民も井水の保護に毫末の注意を拂はぬどころが、濁つた溝水も河水と共に飲用する始末で、不衛生の極に達して居た。かくの如き状態なので領臺當初は飲料水に窮する騒ぎ、



その後城内の井戸に改善を期へ小康を得たが、漸次内地人の渡來が盛に、在住内地人の増加と共に日本式の鑽井を各所に見たが、水質も水量減退と共に不良となつたので水道敷設の議が高唱され督府の手にて建設するに決し、幾多の迂餘曲折後、漸く明治四十年四月起工し同四十二年七月竣工したのが、今日富田町に水源地を有する臺北の水道である。この工事は工費百八十四萬九千餘圓で、臺北市街東南一里餘、新店溪の一部に取入口を設けたポンプ式配水設備で、内徑三尺のコンクリート管と煉瓦積水路で唧筒井に流入せしめて分水井に送るの設備である。唧筒は取入淨水押上の二種で共に三臺ある。押上能力は一臺一分時二百五十立方呎を百三十呎の高所に送水が出来、分水井から二本の鐵管で沈澱地に自然流下に依り送水するが、沈澱池は内徑百七十尺の圓形で、水深十二尺五寸のが二箇ある。人口十五萬に對し三箇を要し、一箇の水量は十二萬人に對する一日半の分量である。池内には各一箇づ、フローチングパイプを据付け、清淨した水面下一呎以下一呎半の水を附屬沈澱井に送り、同井内のポールバルブで送水量を調節して瀘過池に送るが、瀘過池は幅百尺長さ二十五尺のもの六つ、一晝夜十呎の速力で一人に對



する最大水量四立方呎半を瀘過し得る装置となつて居るが、尙附屬の瀘過井には自動バルブで瀘過速度を調節する、瀘過された水は海拔百三十尺の丘上、幅九十尺長さ八十五尺深さ十三尺五寸ある二個の淨水池に送られるが、池内には導流壁があつて、池水を流動させ空氣流通の装置を施した覆蓋で日光を遮つて居る、淨水池からの水は自然流下で配水され、二十吋鐵管二線が幹線となり、南門から幾多の枝線亞枝線で市内に給水されて居る。而して本水道に要する動力は水力電氣だが、停電準備として火力機關を備付けた。以上の設備は人口十五萬を限度とする給水能力に依つたものだが、早くも大正三年には給水區域の人口十三萬三千餘人に達し、殊に内地人の居住者多く、頓に消費水量を増加し、既設の設備では斷水の厄に遭はうとする状態なので、更に大正五年から同七年に互つて瀘過池の増設を斷行して小康を得たけれど、依然人口は加速度を以て逐年増加する一方で、同十三年には人口十八萬四千餘人に達し愈々不安の状態となつた。市制實施と共に移管を受けた臺北市は土木水道課に於て、水道に關する一切の事務を處理して居たが、この不安状態なのに鑑み、第二水源地の増設計劃を樹つると共に、從來放任制を



改めて同十四年四月から計量給水制を實施して、漸く給水持續の方策を採り今日に及んで居るが、更に一面大正七年督府に於ける調査を參酌し、これが擴張計劃を樹て昭和二年度から同五年に至る四箇年繼續事業として督府州の補助を仰ぎ、斯界權威者佐野工學博士の意見に基き設計方針を定め、調査研究の上一面施工上經濟上その他の事情を考慮し多少最初の成案を變更して、同博士の所謂天惠の水頭を利用したものである。水源として大屯山方面に最初第一第二第三の好適した水源を選び、再調の末臺北州七星郡北投庄竹仔湖の奥なる第一水源、田端前市尹が滾水頭と、同州同郡頂北投紗帽山々麓の第三水源、これも田端前市尹が湧泉臺と命名したのと、この兩所を水源としたが何れも天然湧出の清水で夥しい湧水量である。湧水量一秒時四立方尺の第一水源の取水井の水は、これを第三水源附近、草山北投間の州道に至らしめ、草山水管橋を渡り排氣室で氣曝の上連絡井に入れ、第三水源の湧水量一秒時入立方尺の取水井の水は、第一水源よりの水と同様混凝土の暗渠で草山水管橋を渡り連絡井で第一水源と合し、山腹に設けた水道に依つて臺北州七星郡士林庄三角埔字猴洞に設けた調整井に入り、此處で六百八十餘尺



の落差を有する鐵管で流下し三角埔發電所に至り、約五百キロの電力を發生し現在の水道水源地使用の動力と、士林方面の水田灌溉用唧筒を運轉する一方、この水を臺灣神社の裏山、同州同郡同庄福德洋山仔脚の山腹に、幅十五尺五寸餘長さ千八百尺餘、有功水深十四尺六寸の隧道形の貯蓄池に導入するが、貯水池の水量三十六萬立方尺最大送水量の約八時間分に相當し、一日一人平均使用量を六立方尺とすれば、十七萬二千八百人に對する八時間の水量に相當し、現在の水道給水量と合すると、實に三十二萬人の需要に應じ得べく、既往の十年間の給水平均人に増加率を約二分六厘を以て増加するものとし計算して、給水人口三十二萬人に達するには昭和三十五年になるから、この擴張工事完成後は充分圓滑に且つ安全に使命が果し得られると云ふものである。而して貯水池の水は、鐵管で基隆河を渡り、勅使街道を城内に向ひ、途中宮前町で分岐管を出し大稻埕方面の既設管に接續させ、又た一方勅使街道を南に市役所横に至る幹線管は此處で再び西に分岐管を出し既設管に連結し、幹線管は東門外方面を迂回し南門で既設幹線に同することとなつて居る。本施工の爲め市役所では臨時水道擴張課を置き、事務を處理し工事の



進捗に努め既に鐵管敷設も終り、水源地や調整井等の工事を完成して、基隆河に於ける明治橋架替工事のため、この部分の鐵管敷設工事と發電所工事が完成しないが、近く全部完成することになつて居る。而して水道に關する事務漸く繁多となつたので、土木水道課は分離して、水道土木の二課となつた。

俗謠にまで唄はれた臺灣の惡疫は、それはペスト、コレラ、マラリヤ、腸チブス、赤痢と云つた熱帶性傳染病で、何しろ古來瘴癘の地と目され住民に衛生思想が絶無であつたので、恐しい病毒は蔓延し流行猖獗を極め、これが罹病死亡の人数夥しく悲惨の状態は酸鼻の至りであつた。それで改隸後は衛生設備の完成と施設の改善に銳意盡力すると共に、この數多の惡疫の撲滅と防歴に多大の努力が拂はれた。恁る惡疫の流行は領臺前は勿論、改隸後も暫くの間は都鄙を問はず盛んであつて臺北もその一つであつた。それで督府の衛生課と地方廳と相俟つて協力防疫に努めて居たが、市制實施と共に臺北市内の防疫は、州衛生當局と協力、市衛生課に於て大馬力をかけて防疫事業に活動して居る。而してかの恐ろしいペストは、明治二十九年九月に臺北に發生し可なり猖獗を極め、



斃病者續出して在臺人間に一大恐怖を起させた、それで防疫としては單に患者を隔離消毒するのみであつたが、鼠族の驅除を防疫の大方針とし、不潔家屋の取毀ち、隔離消毒を勵行し、捕鼠獎勵として買上金懸賞金を附與し、これ等を續行した結果遂に慘毒を絶滅したが、大正二年七月突然大稻埕に患者發生、一大騒動を演じ翌八月上旬十二名の患者を出したが、迅速周密な防遏方法で基月を出ないで病毒を撲滅した。その後程近い淡水に患者が發生したが、臺北には病毒が侵入しないのみかその後には全く絶滅した。使マラリヤは可なり猛烈であつたが、血清検査や原蟲保有者調査、特藥無料服用、蚊帳の用、蚊族の驅除等を強制的に勵行した結果、臺北市内のこの患者は他所で感染した者以外に見ることなく、全くこれも絶滅したと云はれて居る。この他コレラや流行性腦膜炎や天然痘等は突發的に患者を出すか、それ／＼時に應じて、嚴重な防遏手段が迅速に行はれるから常に大事に至らない。然し腸チブスは今日尙猛威を逞ふして容易に撲滅しないので、市衛生課では督府並に州衛生當局その他市内の開業醫と協力切に防遏に撲滅に今や殆んど全力を傾注し、患者發生の家の消毒、便所掃除及清潔法、蠅油蟲の驅除、戸別



健康調査等種々の防遏撲滅手段を講じ、且つ腸チブス防遏作業としては、市内各戸から汲取の屎尿を自動車にて殺菌池に運搬して殺菌することとし、昭和三年に中崙及び猛卯有明町に翌四年大竹園に設け、この三箇所の殺菌池に於て市内汲取の屎尿を處分して居るが、屎尿殺菌池は、中崙の分八箇容積八千石、有明町の分四箇容積四千石、大竹園十箇一萬石である。この他防遏手段としては、撤水自動車を利用して警告式ポスターを掲げ或はピラを撒布し、映畫やラヂオを以て豫防宣傳を試むる等々大に努力しつつあるが、而して傳染病患者收容所としては、大龍峒町に稻江醫院と云ふ市營の醫院がある。これは改隸後設けられた避病院の後身で、臺北に於ける避病院は、市街の進展その他の事情で、幾度が移轉して現在の市營醫院となつたものであり現に院長一名囑託醫二名事務員二名看護婦七名で院務醫務を處理して居るが大規模でないから、流行盛な折は臺北醫院や赤十字病院の如き大病院も該患者が満員の状態である。而して臺北市内に於ける所謂十種の傳染病の最近（昭和五年上半期）の發生患者數は、腸チブス内地人三百二人、臺灣人六十人計三百六十二人、死亡内地人五十三人、臺灣人十人計六十三人、百人に對する死



亡率十七・四二、バラチブス内地人二十一人、死亡内地人二人百人に對する死亡率九・  
 五二、疑似チブス内地人二十五人臺灣人一人計二十六人、赤痢内地人四十三人臺灣人三  
 十七人計八十八人、死亡内臺人各一人、百人に對する死亡率二・五〇、猩紅熱内地人四人臺  
 灣人一人計五人、チブテリア内地人三十八人臺灣人十三人計五十一人、死亡内地人一人  
 臺灣人二人計三人、百人に對する死亡率五・八八で、以上各種の患者は内地人四百三十三  
 人臺灣人百十三人計五百四十六人、死亡内地人五十七人臺灣人十三人計七十人、百人に  
 對する死亡率十・九八を示し、人口二十餘萬人に對比すると、如何に好成绩かが知られる  
 と共に、防疫の奏功亦大なるものがあると云ひ得る。而して傳染病患者殊に腸チブス患  
 者が、内地人に比して臺灣人の少數なのは、近來内地人と同様に冷えたものを生物を口  
 にするから臺灣人患者も増したが、概して彼等は必ずしも食物は一度は煮て食ひ生物を口  
 にしない風であるからで、死亡數の多いのはまだ衛生思想が充分發達しない向が夥しい  
 からであると言はれて居る。恙う云ふ工合に防疫事業も行き届いて居るので、腸チブス  
 の流行は衰へないが、それも漸減する傾向が著るしいので、臺北の地は傳染病に對して



は安全な地とも云はれ、市民もそれごとく自衛上相當注意をして居るし、殊に臺灣人間にも衛生思想が發達しつゝある一方、映畫に講演に或は衛生展覽會等、彼等の開發に努め漸次好果を收めて居るから、恐るべき惡疫に對する恐怖懸念は殆んど一掃されたと云つて可い。而して臺灣人間には癩病患者が可なり多く、臺北市内にもこれを見るが、これに對しても督府は撲滅と傳染防遏に努めて居る一方、私立馬偕病院（宮前町）に於ても該患者の治療救済に従ひ好果を擧げて居る。

衛生保健の設備や施設の完整は、臺灣の誇りであり、開發に大なる獻貢をしたもので、國の文野は衛生保健の設備や施設で卜し得ると誰やら公言したが、その通りである。流石島の首都臺北には、堂々たる病院が二つもあり、その他中小の病院も尠くなく、博士學士の所謂國手連が、熟達した看護婦を指圖して治療看護に努め仁術を施して居る。即ち東洋一と稱せられる官立の臺北醫院を初め、私立の日本赤十字社臺灣支部醫院、林本源博愛醫院、馬偕醫院がある外、市内に幾多の開業醫が設立して居る病院もあり、特種なものは、傳染病院の外に精神病患者を救療する養浩堂醫院、娼妓治療の艸舩婦人



病院、阿片癮者矯正の更生院等があり、艋舺に仁濟院診察所もある。官立醫院は明治三十一年六月に制度發布に依つて設立したもので、臺北醫院は翌三十二年六月現在の地が建築中なので、大稻埕建昌街（今の港町）に假院を以て開業し、東門町（今の明石町一丁目）の建物落成と共に移轉したもので、敷地は一萬五千六百餘坪、建物面積五千餘坪、最初は翼狀式木造平屋建と煉瓦二階建とであつたのを、更に明治四十五年度から大正九年度に至る繼續事業として、二百六十餘萬圓の豫算で廳舎及び三箇の普通病棟附屬建物を改築し、新に隣接地約一萬五千坪を收め、傳染病及び結核病患者を收容する傳染病棟看護婦宿舎を新設し、現在の如く煉瓦建の堂々たる外觀と、四百の病床を有する大病院を竣功した外、内容は最新式の治療機械器具、その他病院としての萬端の設備を完成し、この建坪延數は實に九千坪に達して居る。入院患者は大正二年に一萬八百餘名だつたが、近時は臺灣人の文化向上に伴ひ、自ら醫療を受くるの傾向が醫院信賴の度と共に夥しく増大した結果、外來患者は日に千人を超へ、四百の病床も常に殆んど満員と云ふ盛況である。醫局は第一第二の内科、外科、産婦人科、眼科、小兒科、皮膚花柳病科、耳鼻咽喉



科、理學的治療科、齒科の十一科に分れ、職員は院長醫長以下二百三十二人で、この内に看護婦六十九名同見習生五十四名で、博士學士や醫師が何れも新しい進んだ治療法を施して居る。而して官立醫院は島民に對する善政の一つで、同時に母國人の臺灣での活動上健康の保障を與ふるのが目的だから、經營方針も收入主義でなく、患者の負擔を可成軽くするやうになつて居るので、内地の病院と比較すると、藥價や入院料手術料は非常に安く、臺灣在住者は内地の病院の高いに驚き呆れて居る位である。尙醫院の附屬事業に財産法人仁濟團があつて、入院患者のために食事營養品氷等の供給、附添婦附添看護婦の供給、用達、入退院患者の輸送、日用品の販賣、患者の救濟慰籍等を主な事業とし、明治三十六年から開始し好成績を挙げ、患病者は大に利便に浴して居る。日本赤十字社臺灣支部醫院は、三線道路を距て、臺北醫院の東側東門町に在る。此處も病院としては立派なものだが、臺北醫院より小規模で、病室の階級がなく入院患者は平等である。而して入院外來患者は逐年激増する一方で、藥價その他も赤十字社事業なので、臺北醫院よりは更に安い。林本源博愛醫院は最初建昌街(港町)に在つたのを、後に現在の地建成



町に新築移轉したもので、煉瓦建二層の洋館である。富豪林本源が貧困な臺灣人患者を施療救護する目的で分院を艋舺仁濟院内に置いた（後、これを廢す）院長以下醫員藥劑師通譯事務員看護婦に依て院務を處理し、患者は一般患者の外半施療全施療の別があつて、入院患者も亦た同様、此處も亦た臺灣人の醫療に信賴すること多大となつたので、外來患者非常に多く、入院患者も病床に空床を見ない位、大に利用され好成績を示して居る。馬偕病院は以前加奈陀長老教會傳道所病院と稱し、淡水に設けられたのが明治四十四年に臺北に移り、双蓮坡即ち現在の宮前町に煉瓦建二層の洋風館幾棟を建築して開院して居る、同院は明治元年同教會牧師故ゼームス、エル、マツクスウエル氏の設直である。醫員は院長以下總て外人で、臺灣人に對しては貧富の等級で藥價入院料その他の經費を幾分徴收し、經費不足は加奈陀長老教會の本部から支給し、慈惠的救療に従つて居るが、外來入院患者年々増加するのみでなく、最近癩病患者を收容治療して居る。この他臺北市内には内臺人の開業醫中で、入院設備を整へて居る者が尠く、何れも利用されて居る。市内には開業醫も多數で城内は殆んど内地人で、多く臺北醫院や赤十字醫院に、嘗て奉



職した人の開業したもので、何れも患者治療に忙しい。艋舺や大稻埕の開業醫は殆んど臺北醫專や内地の醫科大學その他の醫學校出身の臺灣人で、その中には病院に嘗て奉職したのも尠くなく、何れも相當門戸を張つて患者を診断して居るし漢法醫も居る。

然し人口に對しては開業醫の割合は少いさうな。産婆は内臺人共に多く、これも醫師同様内臺人の分野がある。看護婦は病院と開業醫の宅に働いて居るのが大多數で、私立看護婦會もあつて、各家庭に派出看護婦を送りつゝあるが利用は甚だ尠い。市内には藥劑師も相當あつて、賣藥店を開業して居るがこれは内地人で、顧客も内地人が多く、賣藥の賣行は不況の今日可なり盛である。臺灣人は從來の慣習上漢法醫と草根木皮の漢藥を用ひた故、現代の醫療を受くる傾向が多大になつたに拘らず尙依然利用され、艋舺大稻埕には漢法醫も漢藥商も多く何れも相當繁昌して居る。今日では臺灣人も衛生思想が大に發達したが神佛祈願や迷信的加治祈禱の類を病人に施すものも可なり多いが、一面病院醫師の治療も進んで受けることが盛になつた。内地人は土地柄その他の事情で、醫者や病院を非常に多く利用し、輕症でも病院へ駆け付ける傾向が多い。これは一つには藥



價その他が安いからであらう。然し不況の深刻は恐しいもので、賣藥治療が漸次多くなつて來たと云はれて居る。而して醫師の養成を急務とし、醫育機關として明治三十四年に臺北醫院附屬として醫學講習所を設け、臺灣人子弟に醫學と普通學を教授して好果を得、同三十二年に督府醫學學校を設立し、校舍を現在の東門町に建て、爾來幾多の官制で内容を改善し、更に大正七年に熱帶醫學專門科を加へ、翌八年專門學校會に依る醫學專門部を設け、内地人子弟も入學せしめ内地同一の醫學專門學校程度の教育を施すに至り、醫學專門學校と改稱して今日に及び、大多數の卒業生は醫師として島内各地に活動して居る。病氣と關聯して墓地と火葬場のことを簡單に記述しやう。由來臺灣人は總て土葬で、風水師と地理師の卜占に従ひ方角を定め、田圃中や山腹に埋葬する俗習があり、到る所に墳墓を見るが、その形は支那式の饅頭型である。臺北市内にも多くこれを見たが、改隸後はこれを整理し、從來管理等閑却されたのを改善し、管理法に依り取締つたが舊慣は容易に改められず、久しい間墓地の整理が出来なかつたが、市街の發展に伴ひこれが整理の要を認め、臺北市に於ては衛生課をして管理その他の事務を扱はしめ、埋葬許可證を



附下して埋葬せしめて居る。墓地も各所に散在したのを漸次整理して、内地人墓地である三橋町(舊三板橋庄)の共同墓地以外、臺灣人の共同墓地を下内埔大龍峒町六張犁富田町大安東門町、朱厝崙中庄子下埤頭大直と市外文山郡深坑庄興福の十二箇所に市有共同墓地を定め、墓地使用條件で使用料を徴し埋葬させ、市に於て管理整理して居る。内地人の共同墓地は改隸當時圓山にあつたもので、現在陸軍の共同墓地附近に在つたがこれも管理は完全でなかつたため、その後明治二十九年十一月乃木總督母堂が臺北に逝去され、その遺骸を現在の三橋町に墓地の所に埋葬して以來、この地を内地人の共同墓地とし、内地人のみを使用して今日に及び明石總督の墓さへあり、幾多内地人の遺骸が此處に埋まつて居る、然るに人口激増の結果漸次狹小を告ぐる一方、市の進展に伴ひ移轉の議が盛に唱へられて居る。市有共同墓地は現在十三箇所で總面積百一甲步餘、共同墓地の管理は地方廳で行ひ公共衛生費で支辨したが、市制實施と共に市に總てを移管し、市費を以て支辨して居るが、他に獸屍埋却場○甲○八二の地域を河合町に有して居る。臺灣人は俗習上葬儀は自宅で行ふので、葬儀所は必要でないが、内地人の爲め葬儀堂が三板橋即ち三橋



町現在の所にある。最初は假に曹洞宗の寺が便宜上粗末な建物を建て、葬儀を行つたが後に地方廳で墓地や火葬場と共に管理することとなり、改めて現在の建物を建設し、一般の使用に充て居たのを市で移管したもので、市民は大にこれを利用して居るが、自宅告別式や寺院で葬儀を執行するのも尠い、但し建築以來久しきに及び、この建物も古く狭小に感ぜられる故、墓地火葬場共に移轉の議がある。殊に最近は臺灣人間に、内地式の葬儀を行ふものが弗々出て、火葬場と共に此處を使用することも稀にある。火葬場は共同墓地の近く北方二三町の所中庄子に在る、最初私人經營であつたのが、弊害も多く非難されたのみならず地方廳で管理することとなり、煉瓦建の建物とし、火爐五個を具へたもので、臺灣人は風習上火葬しないから、内地人のみ使用して居るが、市に移管後管理上の改善を計り、昭和五年度經費三萬五千圓を投じ、重油火葬爐特に禮拜堂を有する新棟一棟を増築した、本爐は現代に於ける最新式のもので、一時間内外で完焼而も無煙無臭と云ふ好良なもの、爐は特別一個上等一個竝等二個計四個あり、舊來のものど併用して居るが、これも時代の動きか、臺灣人も火葬を行ふものも漸次見るやうになつた。尙市



役所では葬儀用自動車二臺を備へ、市民の需用に應じ廉價を以て使用させて居る。

## 市の警察と消防と罹災民救助

…臺灣の警察機關と臺北の警察…保甲壯丁團と消防組…

青年團と在郷軍人斑の活動…罹災救助と義捐金募集…

瘴烟蠻雨の土地と云はれた臺灣は、古來匪賊横行の天地で内亂屢々起つて、民は塗炭の苦に泣いたと、歴史が物語つて居るが、領臺前には警察機關が完備されず保安を維持することが出来なかつた。従つて匪賊の横行は凄まじく、在住民は土匪の襲來、夜盜の侵害に多大の恐怖を感じ、枕を高くして眠り得ない状態であつた。今日でも農家の周圍は竹藪を繞らし、小溝を設け所在を隠蔽して居る。これは一面防風設備だが、他面に匪賊夜盜を防ぐ手段であつた。又た富豪の邸宅は塀壁を高く堅固に築き廻し、門口は極めて狭小に且つ自家兵を備ふて居たのもこの災害を防ぐためであつて、今日富豪の舊邸を訪ねて異様に感ずる門戸の狭小なのはこれが故である、その他普通人家も門戸は狭く、



戸扉も堅材を選び、丈夫な大きい杆櫓を以て非常に戸締を嚴重にする一方、早く消燈したもので、今でも臺灣人の家に行くとき入口は狭く心張棒の太いのが目につき異様に感ずるが、早寝の人の多いのも慙うした事情だと、物識人が説明したが、成程と頷かれるほど、警察機關も缺如し保安が維持されなかつたこと、恰も現在の支那のそれに似て居る。

臺灣の治安維持が今日の如く見られたのは、改隸後警察機關が完備し、警察の保安行政が行届いたからで、警察力の功果は偉大なものであつた。土匪掃蕩等もあつたからか、警察力の活動は多大なもので、大正九年地方官々制以前は、警察官を長とする支廳が、各地に在つて下級地方行政機關であつた如く、警察官が地方開發に盡した事は多大なもので、統治成功の一半は警察力であると云つて可い。今日でも地方民が警察大人と云つて警察官に敬意を拂ひ、命を奉ずるに従順なものがあるのでも判る。改隸後明治二十八年七月内地募集の警察官が、同月二十七日に悉く臺北に到着したので、初めて警察機關が創設されたが、軍政中なので北部の民政部に配布された。これが臺北に於ける警察機關の最初である。その後軍政を撤して民政に復し、翌二十九年四月地方官官制の制定と



共に、縣に警察部廳に警察課を置き、尙樞要の地に警察署や分署を置いた、大稻埕に警察署を置いたのもこの時である。而して憲兵軍隊を加へた三段警備は、種々の事情で廢すと共に同三十一年六月警察署に代ゆるに、辨務署に警察課を置き警察事務を分掌せしめ、更に巡查部長を廢し警部補を置き部下巡查を監督統御せしめ、一方臺灣人を警察官吏に採用し判任待遇の巡查補に任命したが、その後縣及辨務署の代りに廳を設置して各廳に警務課を置いた。而し臺北の警務機關は臺北縣や臺北辨務署に設けられ、三市街の保安が維持され、臺北廳時代に直轄として警察課に於て事務を扱ひ、艋舺大稻埕に分室が置かれた。その後幾多の變遷を見、市制實施に際し臺北市を南北に分ち、鐵道線路以南城内艋舺南門その他東から南への地域は、南警察署の所管とし、州廳に南警察署が設置されたが、最近舊督府廳側大和町にモダンな新築竣工、これに移つて今日に及んで居る。艋舺も一時分署もあつたが廢止された。北警察署は大稻埕日新町に在り、舊來の建物を使用し、大稻埕大龍峒一圓と、大正町下奎府町以北の地、市編人の部落を含んだものである。而して多數の警察官吏派出所は市内各所に設けられ、建物は町内有志の釀金で新



築し、小さいが蕭洒たる立派な建物が多し。而して猖獗を極めた土匪は督府の大英斷を以て警察力に依つて、明治三十四年より三十五年に互り剿滅してしまひ、島内は平靜に人民は安堵生業に就くを得た。尙警察官は一般行政警察の外に、戸口調査簿を以て異動を明にし、戸口規則に依る戸口の取扱をなし、民有銃砲の整理取締臺灣保安規則同浮浪者取締規則の勵行に努め、例の老鰻たる無頼漢の取締最近は交通整理等、いよく繁多を極むる一方、盜賊の逮捕、賭博詐偽賣淫等の犯人檢舉等風俗上の取締を行ひ、刑事の活動は屢々兇惡な盜賊を忽ち逮捕する等、保安の維持に努める一方、保甲壯丁團を指揮し協力變事に際し救護その他に盡力するのみでなく、衛生保健の事務さへ扱ふのである。殊に盜癖の人が多し臺灣人は臺北に於ても竊盜の被害多く、まだ老鰻等の殺害及傷事件も尠くなく、大小の犯罪は土地柄甚だしく、不況の今日智識犯も尠くないから、警察當局は晝夜兼行不眠不休で活動して居る。加之蕃界不穩には應援に出動することもあると云つた工合で、臺北市内の警察官は多忙を極め取扱事故も多種多様である。犯罪に對しては、臺北には法院が種々官制に廢遷があつたが、現在は高等地方の二法院



(文武町)で刑務所は福住町に在る。而してこれ等の警察官並に司獄官は、内地や島内から募集試験の上に採用し、一度警察官司獄官練習所(八甲町)に入所、教育を施して後、各地に配置して執務させる。不況の故か今日では警察官の素質が向上し、民衆に對する態度も改善し、大衆との間は頗る圓滑を見、以前の巡查氣質は見られなくなつた。恁う云ふ警察官吏の爲め宿泊や娛樂の便を計り、立派なモダンな洋式の會館が建てられ利用を待つて居る。即ち最近建てられた明石町の警察會館がそれで、公會堂を有しない臺北市民はこれを會合その他に利用して居る。

今日こそ純粹の警察事務を處理して居るが、以前は警察事務以外に、尙地方に見るが如く、徵稅、土木、幫助殖産獎勵その他教育に救恤等の施設までに關與したもので、多忙であつたが、臺北市の警察事務は、内地の警察事務以外に、保甲戶籍吏の事務があり、内地に比して範圍の大きな犯罪即決もあると云ふ状態であるから、これが補助として從來存置した保甲制度を繼承して居る。保甲制度は臺灣人のみに適用するもので、一種の警察補助機關である。これは臺灣の舊慣を斟酌して明治三十一年八月に定め、保甲條



例として發布したもので、大凡十戸を一甲とし十甲を一保とし、役員は保に保正甲に甲長を置き、保正は保甲長は甲で選舉し地方長官の認可を得て就任する名譽職、保甲の責任はその區域内の安寧保持、規約に依り保甲内の戸口を明白に異動を整理し、出入者取締や不良子弟教戒等勸德懲惡に努め、事件の細大に拘らず連座責任を負ひ、保甲内の肅清安寧を保つことに定められてある。その他匪賊水火災等の警備防禦の爲め壯丁團を設け、保甲は主として區域内の安寧保持に、壯丁團は風水火災匪盜等の事變に際し救護防禦するものとされたが、兩者相俟つて地方治安の保持上責任を負せられた。壯丁團は一保或は數保合同して組織し、壯丁は區内の十七歳以上五十歳未満の男子で、品行善良身體壯健な者を選抜して、一朝有事に備へ活動させしむる。壯丁團に團長一名副團長若干を互選し指揮監督に當らしめ、而して壯丁團は警官の指導監督を受け、時々警察官吏派出所に召集、諸般の訓練を受けて居る。保甲壯丁團が土匪掃蕩に功果多大であつたことは人の知る所であるが、その後條例を改正し警察以外土木勸業徵稅戸口調査等一般行政の補助に任せしめたもので、臺北市内にも臺灣人街の艋舺大稻埕は勿論、市編入の



部落に保甲壯丁團が組織され、風水火害その他非常時に出勤して盡力し任務を果して居る。而して市制實施後は、臺北市内に於ける保正甲長の就任は、互選の結果警察署長の認可を受けるとし、任期二年再選が出來得るのだ。それで今日に於ても臺北市内に於ける風水火害等の變事には、危険を冒して保甲や壯丁團の人々が、警察官の指揮の下に消防夫や在郷軍人や青年團の人々と協力し救護防壓に努めて居ることは新聞の報ずる所で、市民は大に感謝して居るところ、臺灣の警察機關は活動著しきはこの補助機關に負ふ所多く、殊に犯罪人の搜查檢舉に當つて力大なるものがあるのを認める。而して臺灣人の家屋の構造乃至は生活様式の關係から、領臺前は判らないが、領臺後は火災が尠く、臺北の如き人家調密の土地に拘らず出火沙汰を聞くことが多くない。而も出火は内地人の家からで、臺灣人の家からは極めて稀有であると云ふ一種不思議な現象があり、火災保險を除き必要としないとさへ云はれたほど結構な事であつた。然し人口の増加と住宅の多くなつたに従ひ、漸く火事を見る事が頻繁になり、臺灣人の家にも時に出火を見るやうになつた。これには種々の事情も存するが、内地人の多くなる一方、出火事



故も多くなり、臺灣人の家も漸次火を扱ふ場合も多くなつたからであらう。然し臺北の火事も然う驚くべき大火はまだ聞かぬし見もしない、大火でも五六軒の焼失位である。然し近々は頻出する状態になつて、消防機關の完備が必要となり。殊に屢々寺院その他の大建築物が烏有に歸した事例も二三に止まらないから、恚うした刺戟に因る完備必要説が高唱されるに至つたのである。明治三十三年に内地人に依り消防組が出来、同年六月臺北内地人消防組取締規則が發布されてこれに従つて活動したのが最初で、地方廳長官の監督の下に警務課の指圖取締を受けて居たが、市制實施と共に自治的發展に組織されて來たのが、警察制度の進展に伴ひ整頓した臺北消防組は、市費を以て經營することとなり、警察署の指揮監督の下に市の經營に移つたが、組織は三部より成り一部を城内に、二部を艋舺に三部は大稻埕に置き義勇消防手常備消防手共百九人の消防手は、組長や副組長以下の幹部の下に消防に従事し、自動車唧筒二臺、蒸汽唧筒二臺、手押唧筒三臺、その他これに對する附屬機を備へ、本町の詰所に高樓を建て、常に警戒監視して火災警防に努むると共に、時々新公園その他にて訓練を怠らず、正月の出初式は臺北



の一名物で、消防夫の梯子乗や消火の實演等好評を博して居る。

非常時に出動して、警察官消防組さては保甲壯丁團と協力して、危険さへも冒して、救護防禦に努力する若人の群に、青年團と在郷軍人班とあるのを見逃してはならない。

在郷軍人班は在郷軍人に依つて組織され、各町内に班があり一定の制服に腕章を附し、人出の多い折柄は交通整理や警備に努め、一朝風水火害その他の變事に際しても出動して、交通整理警備と同様、警察官や消防組と協力して、保甲壯丁團も共に、避難民の救護消防防水その他の警戒に任ずる等、大に若人の活動を見る事が、近時多くなつて來た。これは在郷軍人の有志が組織せるもので若い人々が多く、西門町班や御成町班その他各町に班がある。青年團は最近勃興とした社會團體の一つで、青年として國家の中堅人物たる若人の、思想を善導して品性を陶冶し、私人としては一身の爭禍を増進し、その生活を向上せしめ、公人としては善良な國民となり、益々臺灣の開發に盡す所あらしめんどの主旨に依り、内地のそれに則つて最近組織設立されたもので、各市街庄共上司の指導の下に、住民の自覺と俟つて盛になり、今日では全島各地に組織されて居る。



臺北市内には内臺人の青年が、それ／＼これを組織し青年團所定の制服制帽靴總てを着し、團旗の下に社會奉仕の數々に盡力し、殊に風水火害の際の如き、變異の場合は進んで避難民の救護に努め、警察官消防組、保甲壯丁團と協力、懸命に活動するの外或は納税や傳染病豫防の宣傳、その他社會的施設に對する援助に奉仕して、殊に人出の多き折の交通整理、沿道警戒等は警察官を補佐して盡す所が多である。最初は市民もこれに對して關心しなかつたやうであるが、數々の慫した若き人々の、獻身的奉仕的の活動に感謝と感激を以て報ゆるやうになり、青年團なるものを理解する人の多きを加へ、敬意を拂ひその活動に感謝して居る。而して地方には土地柄臺灣人青年に依つてのみ組織されたのを多く見るが、市として各地には内地人青年に依つた青年團も少くない。臺北市の如きは、寧ろ内地人の青年に依つて組織された青年團の方が、臺灣人の青年團に依つて組織されたのより遙に多い、而も青年團員は内地人は何れも中等教育を受けた者が多く、臺灣人は公學校卒業生が多く、中等教育を受けた者も尠くないが、大部分は前者である云ふことである。従つて臺灣人の青年團は國語を解し、進んだ智識の所有者で



頼母しい若人の一團と云つて可い。現在臺北市内に在る青年團は内地人の青年に依つて組織されたものは八團體で、西門新起榮町本町大成兒玉町川端町府後會の八青年團で、何れも内地人の先輩を團長に戴いて、それ〴〵活動して居るが、大成女子青年團が極最近に設けられ、内地人の女子青年を以て組織し、これも一定の服裝をなし、社會奉仕としての婦人の仕事を行ひ、家庭や生活上の改善、その修養に努めて居るのが一異彩で、活動も目醒しく、團長は某夫人を戴き、團員は主として今は大成會の諸家の令嬢で、高女出身の方々が多いとかで前途有望視され、若き婦人に裨益することが多からうと期待されて居る。次に臺灣人の青年に依り組織された青年團は、大稻埕日新艫舢の三青年團で、これ等各青年團は何れも内地人青年團と何等異なる所なく、先輩の臺灣人紳士を團長に推戴し一定の服裝を纏ひ、交通整理や變事の警戒救護に、警察官消防組保甲壯丁團と協力して盡力する外、各種の社會公共の仕事に奉仕し活動して、眞面目に任務を果して居る。殊に彼等は若くて新しき教育を受け、國語を解し巧に使ひ、事理を正しく判別して、他の若人を指導する等、彼等の團員の善行も多く、好評を博し感謝を捧げられつ



、健實に圓滑な發達を遂げ、臺灣人青年を開發誘導するに力多大なるものがある。それかあらぬか、他の臺灣人街や部落でも、青年團組織が議せられ、將に實現されんとしつゝあるのがある。恁う云ふ工合に臺北市内の青年團は愈々盛大に、彼等の活動は漸次目醒ましきものがあるので、市民より好感を以て迎へられて居る。

救恤事業や義捐金の募集と云ふ救濟事業は、領臺前は主として一にその地方富豪の私財を以て行つたり、各富豪の醜金に依つたもので、時に清朝皇室や官に於て行つたこともあるが、餘り多くなかつたと傳へられて居る、領臺後は各方面の施設と共に、一面救恤事業にも督府は留意し、明治三十二年に臺灣罹災救助基金に關する律令を發し、地方税の一部を貯蓄し、その収入で非常災害に罹つた者を救助する目的で基金を作り、基金は二十年間に貯へてそれが収入で、罹災者に對する避避所や食料被服治療、小屋掛や就業等の救助費を支出し、不足の場合には年度末戻入の條件で、操替支出することを得、非常時の救助を實施することとし、基金は總督これを管理し、基金に組入れる土地建物等



や罹災救助等は地方長官が扱つた、既述の如く毎年暴風雨襲來屢々多大の被害を蒙り、家屋人畜の損失夥しきを見る土地柄な上に火災震災があり、爲めにこれを利用して救助に努めたので、臺灣人の心に咸孚して施政上無形の利益を得ることは蓋し大なるものであつた。大正九年地方官々制改正に依り本規則も一部改正し、州所屬罹災救助基金と廳地方費罹災救助基金の二つとし、前者は州で後者は督府で管理することとなり、臺北州管理の該基金は昭和四年末に六十八萬二千三百餘圓に達して居る。領臺以來屢々猛烈の風水害に見舞はれた臺北も、この基金の支出に依り救恤を受けたことは夥しく、市制實施後にもこの基金の支出と市費とにて、風水害の際は炊出やその他救助に屢次努めて居る。尙この他畏くも被害の趣宮中に達し、御下賜金を交付になり、救護の難有き御沙汰を拜したことも數多く、罹災民は何れも皇恩の厚きに感泣して居る。加之明治救濟會や大正昭和の各救濟會なる恩賜財團が設立され、これ等も罹災民の救護その他慈惠救恤に努めて居るが、嘉義の震災やその他風水害等の被害甚大なるものに對しては、臺北市民は義捐金の募集に應ずるの外、内地は勿論外國に於ける場合にも、これに應じて醵金す



ること多く、何れも島内三新聞社が幹施して居る。かの關東大震災に際しては市役所に於て救助事業を扱ひ、義捐金の募集に努める等大に盡す所があつた。憊うした救恤事業は、臺北に於ては島の首都だけに常に率先して好成績を示して居るが、内地人側のみでなく、臺灣人側も共同して盡力し、義捐金の如きもそれ〴〵應分の醜金をなし、巨額に達するの狀態であるのは頼母しい次第である。

### 島を守備する軍隊と臺北市民

…臺北の兵備と變遷…兵隊さんと臺北市民…

兵事係と多端な事務…臺北市内の在郷軍人と活動…

蘭人占據時代や鄭氏の頃のこととは暫らく措き、清朝治下の時代即ち領臺前の臺灣の兵備は、消極的な統治方針に基き、單に内亂に備へるに過ぎなかつたが、道光十五年以降即ち百餘年以來、對外干涉かの阿片戦争や清佛戦争の結果、その影響を受けて外人が臺灣を窺ふやうになつて對外關係が密接となり、これが防備の急要を覺り、殊に劉氏巡



撫となつてからは、兵制改革を行つて大に面目を一新した。而して臺北も艋舺の進展に伴ひ、百二十餘年前嘉慶十四年に、新莊から水師遊撃を移し駐屯せしめ、更に道光年間の極盛期の頃には、艋舺總兵が管下の兵鎮を置き、駐屯兵を艋舺北皮寮街今の綠町四五丁目邊に兵營を建て守備として駐屯せしめ、附近の廣場で調諫を行つたと古老が語つて居る、但し駐屯兵は今日支那に見るそれに等しきもので、不規律な傭兵の類に過ぎなかつた。その後光緒元年臺北城竣工し、艋舺の官衙は此處に移ると共に、駐屯軍も城内に移り、北門口街から府後街に亙る一帶の地に兵營を建て駐屯したと云ふから、今の臺北醫院の北方一帶の地の邊らしい。劉氏巡撫となり兵制を改革し、殊に海邊の防備に努め、臺北々門外に機器局や城内に火藥局を設け、大龍峒に火藥庫を置いた。機器局は洋式の兵機軍需品の新造修理を行つたが、劉氏退任後は消極的政策の爲め利用されず、領臺後は鐵道部の工場に機器局を充て今日に及んで居るし、火藥局は敗兵のため占領當時焼失破壊された。而して領臺の當時皇軍が臺北城を占領した時は、既に城内の清兵は大部分官の建物を焼き官の財産を掠奪逃亡して、僅少の殘敗兵が居て對抗したが、忽ち敗



北逃走した。皇軍は城内各廟やその他に分宿し、近衛師團司令部は布政使衙門跡に置かれ、滯陣中東門外の領臺前に於ける練兵場で壯大の觀兵式が、師團長宮の御指揮の下に行はれたりした。南進軍出發後は一部殘留部隊は城内に駐屯し、民政となつてからは陸軍部幕僚は布政使衙門に置かれた。而して守備隊の編制は屢々變更され、臺北には明治二十九年三月内地編成の守備隊が渡來して混成三箇旅團の兵力を有し、司令部と歩兵の主力や特科隊が臺中臺南と共に置かれたを最初とし、數度の變遷後、大正八年八月に臺灣軍が設けられ軍司令部が臺北に置かれ、臺北には守備隊司令部と歩兵一箇聯隊と山砲隊とがあり、尙憲兵隊司令部と分隊が臺北に在る。而して守備隊の兵隊さんは、内地から新兵が渡來して兵役に服して、除隊されば歸還することになつて居り、島内の内地人徵兵適齡者の壯丁は、受檢の爲め本籍地に態々歸還しなくとも、寄留地の守備隊で身體検査が受けられる。臺灣人も十七歳以上二十五歳以下の志願者を募集して守備隊に編入させ軍事教育を施し、内地人同様の役務に服せしめることになつたが、明治三十八年募集を中止したから、臺灣人に兵役の服務を見ないことになつて居る。而して守備の兵隊さ



んは、東門外即ち旭町の永久兵營に起臥して、役務に服して軍事教練に精進し、元氣に若い日本軍人の姿を見せ、臺北市民の爲めに警戒守備の任務に盡し、三張犁の射的場に射撃の稽古や、その他臺北を中心として附近の地に實習を行ひ、或は馬場町の練兵場に於ける調練や飛行機に對する防空演習等、多忙の日を送つて臺灣の爲めに島都の守備に努めて居るが、又た蕃人の暴動や討蕃事業に就ては、警察官と共に鎮定討伐に努め、殊勳を示す等軍隊の威力を發揮して島民の信頼愈々厚きものがある。而して陸軍の將校さん、書院町の軍司令部附近一劃の地に官舎があつて居住する人々と、兵營附近の旭町一帯の地の官舎に住む人々とで、軍司令部の人々は勿論守備隊の將校も、文官竝に民間の人々との間は甚だ圓滿に交際し、交渉事項等總て圓滑に運び他に見られ得ぬ位親交が結ばれ、陸軍記念日の行事や祝賀會には、官民舉つて參加し常に好果を收め盛況を示して居る。而して有事の際軍隊の出動を見る場合、討蕃事業や蕃人懲膺等の行動に活躍する時は、常に慰問袋その他の方法を以て慰問後援し、凱旋の際は極力歡迎して謝意を表する等、麗しき感情が常に示されて居るのも、植民地に於てのみ見られる情景である。



思はれる。

暑い土地で軍務に出精する兵隊さん、行軍の歸途隊伍を整へて、元氣よく兵營にと行くその姿を見ると、誰でも敬意を表せずには居られない。銃をかづくその肩の邊から背へかけて、カーキ色の軍服は汗が滲み出で汚點が著しく見える、あの日焼の赭顔は砂塵と汗に染まれて汚れて居る、ゲートルを卷いた足は靴と共に砂を浴びて重たげに運ばれて居るが、然し兵隊さんは元氣で疲勞の色を餘り見せず、軍歌を高らかに歌つて進む、やがて歸りついたのは兵營、立派な煉瓦積の二階洋風家屋が、幾棟も廣い營内に建てられて居る。これも他の人と同様、領臺當時は舊清朝時代の兵營を改造して用ひたもので、それが後に今の兵營、東門外(旭町)に新築され移轉したもので、將校の官舎は書院町に陸軍官舎があつたが、旭町の兵營附近と樺山町にも新築したモダンな家が幾棟も建てられたので、隊附士官や準士官の一部が移轉して軍人街が出来、書院町のそれと二つになつた。軍司令部が置かれな前、陸軍部即ち陸軍幕僚のあつた時分は、これも舊時代の官衙を充用した建物内の一部と、その附近榮町一丁目の裏通り俗に都通りと云ふ



邊に陸軍の官舎があつたものである。これは軍司令部が建物を新築竣工したので、これに移轉し舊廳舎を取毀つたと同時に、これ等の官舎も取除かれてしまつた。而してこの地所は市と交渉の末他の地所と交換されたと云ふことである。それは兎に角としてこの取毀つた跡は、所謂舊廳舎側の空地で、可なり廣い地所なところから、昭和六年の春には某氏が發起で消防組や市内の各商店等が後援の下に、内地から數百本の櫻樹を取寄せ移植し、これに配するに霧島躑躅を植ゑ躑躅人形さへ造り、櫻花園と銘を打つて華々しく開場し、内地に遠く働いて居る臺北人に、臺北では容易に見得られぬ、内地櫻を觀貴させやうとしたもので、それに毎日毎夜種々の餘興をも行ひ、僅少の入場料を徴して市民の遊樂場とし、約二月餘に互り景氣よく打續けて、櫻に憧かれる人々を喜ばせ、非常な盛況で入場者も夥しかつた。その後更に趣向を變へ夏向の納涼園を開場し、夜涼の人々の遊歩場として、今尙開場してこれも入場者が多いと云はれて居る。恁う云ふ興行物が使用されるこの廣い空地の一部には、近衛の精銳を御引率召せられた、故北白川師團長宮殿下の臺北滯陣中の御居間があつたり、今の臺灣貯蓄銀行の東隣側に、小さな朽ちかけた小



さな廢祠があつたもので、この小廢祠は領臺當初不幸にして病役した軍人軍屬や、南進軍の戦死病役者の遺骨を、假に此處に集め安置して祀るために建たもので、二三度招魂祭典が行はれたさうで、圓山へ陸軍墓地が出来た後、軍人軍屬の遺骨を此處に合葬してから、この小祠は顧みれらなくなり、人の注意を惹かなかつたから、古い内地人でも餘り知る人はない位だが、これも宮殿下の御居間と共に史蹟として見るべきものであつたが、兩所とも取毀されて何等記標もないため、やがては人々から忘れられてしまふに相違ない。廢小祠は兎に角として、宮殿下の御居間跡だけは、臺北市内の尊い舊蹟として、もう形は片影さへ認められないから、舊蹟保存の意味からして一つ石標でも建て、後人に知らせる方法をその筋で實行されることを切望する。兵營から官舎のことを記して飛んだ横道に脱線したが、由緒深い事だから記して置くのである。臺北の永久兵營に起臥し、軍事教練を受け暑い土地に活動して居る兵隊さんは、新兵として内地の聯隊に入つた人々が、臺灣守備として渡臺したもので何れも新來の者ばかり、初めて見る臺北は如何であらう、臺灣へ遠く來る、それさへまだ多くの人々は考へさせるのに、兵に召さ



れた身、邦家のためと云つても考へさせられ、若い多くの人々の中には、親兄弟から臺灣行を當惑顔で彼是云はれて、心が鈍つたものもあるらしい、だが來て見ると、内地で聞いた話と實際は大違ひ、聞された話で考へた種々の事どもは全く裏切られ、立派な内地のそれに劣らぬ、感じの好い臺北の街景と繁榮振に安心してしまふ位、それに臺北驛に着けば遠來の兵隊さんを、市の官民有志や愛國婦人會の奥さん方が、わざわざ出迎へて呉れる町重さ難有さ、他郷でこの好遇に誰も感謝せぬものがない。それに馴れば氣候も心配することなく、立派な兵營内に何不自然なく起臥が出來、日曜祭日その他休日に市中を歩けば内地と異らず、城内の店に行けば何でも買ひ求められるし、臺灣人の街艦舩や大稻埕も、新來の身に支那の色彩が濃厚だが珍しいものばかり、それに市民は誰も彼も親切で、臺灣人も自ら敬意を表し親しみ易く、子供は狎れて馴染にもなれば可愛いもの、劇場や映畫常設館やその他の興行物も、内地同様に觀覽料は軍人優待で半値位に割引するから、休み日の半分は心地よく楽しく暮らせる。それに行軍をすれば田舎の臺灣人が悉く集まつて來て、茶よ湯よと何呉となく歡待して呉れると云つた工合で、市民



と兵隊さんは親しみを持つて居る。殊に歸還する際、土産品を賣る商店は、大抵何處の店に行つても、歸還する軍人兵隊さんと云つて、特に割引して待遇して呉れるし、市からは記念の物品が寄贈があり、愛國婦人會やその他の會からの優しい心盡に預ることが多く、臺北驛出發の際は、驛頭には渡來當時と同様に盛に見送つて呉れる等々で、渡來してから歸還まで、在營中は勿論來る時歸る時の市の官民から受くる好遇に、若い武人の兵隊さんは、嬉色滿面誰もにこくして、臺北で兵役に服したことに満足し、郷里への土産品を抱へて歸る。二十有餘萬の市民も、我等のため守備に任ずる兵隊さんと親しみ、有事の時にも風水火災の時にも出動して、警察消防の人々や保甲壯丁團、青年團の若い人々と協力して、防壓に救護に盡力することの多くを見て居るので、自然に強き信頼と親しみと敬意を持つて、何呉れとなく出來得る限りは、話があれば盡力すると云ふ嬉しい優しい態度で、常に兵隊さんを見もし接しもしして居る。それは單に内地人のみではなく臺灣人も然うだが、流石に日本人として同胞である内地の方が、自然に恂うした優しさ親しみが多いのは蓋し當然のことと思ふ。殊に同じく母國を遠く距れての



地に活動をやる身、母國人としての懐しきは亦た一入であるからでもと考へる。而して幹部候補生も亦た臺灣で徴兵検査を受け、合格すれば臺灣で服務が出来るから、恂うした人々は直に指定の聯隊に入營する。それでこの人々の入營の時は、町内の人々や青年團員も、親戚知人と共に連れ立つて送つて呉れる美しさが、入營時の營庭に見られて優しさ美しさを感じしめる。然し入營を祝しての旗などを押てる業々しさは近頃餘り見受けないが、真情を籠めての見送りの人はなかなか多くつて、當日の營庭は一種の氣分裡に賑さが見られる。而も係の士官や下士の人々も、これ等の見送人に對しては非常に町寧で優しいのも、誰も嬉しく思つて褒めぬものはない。即ち軍隊の民衆化は軍旗祭やその他の場合、營庭開放の共樂以外に、恂うした事情の中にも見られるのである。而して恂うした兵事の事務は、從來地方廳の庶務課に兵事係があつて、各支廳と連絡を取つて萬端扱つて居たが地方官官制改正と共に、臺北市内の軍事關係は、總て市役所内庶務課の兵事係で取扱ふこととなり現に今日も扱つて居る。

守備隊として一箇聯隊が駐屯して居る臺北は、島の首都の警備に軍隊を煩はしたと



が、隨分以前領臺當初は多かつた。明治二十八年十二月三十一日から翌正月元日の拂曉にかけ、深坑石碇方面の土匪の首魁陳秋菊が士林方面の土匪と呼應して、臺北城を襲撃城壁下まで迫つた。城内の内地人は官民共に銃劍を手にし城門を鎖して防戦したが、この時軍隊が主として活動して、これを撃退したのを最初に、屢次土匪の襲來を見たが、その都度軍隊の力を籍りたことは多大で、漸く撃退したばかりか、附近の土匪を軍隊の力で掃蕩されてからは全く靜穩安泰に歸した。その後は風水火害の際に出動して、防壓警戒救護に努められ、常に治安が維持されて來た。何しろ恂うした軍隊の駐屯と臺灣陸軍の主腦部もあるので、軍事に關する事務は多様多端であるのは勿論で、軍部の交渉や軍隊と官民の連絡等、地方廳の兵事關係の當局はなかくの骨折りで多忙を常に極めた。地方廳の庶務課中に兵事係が置かれて、その管轄地方の兵事に關する一切を事務の負擔して來たものであるが、市の出現に伴ひ市内の兵事關係の事務は、一切これを市役所内庶務課の一係兵事係で負擔處理して、萬事順調に進捗して任務を果して居る。即ち現在兵事係として處理して居る主なる取扱事務は、徵兵適齡の壯丁に關する事項で、適



齡者が徴兵検査を臺北で受けられるので、これに關する出願書の處理やら合格不合格の決定通知、適齡壯丁の受檢の届出等、その他徴兵事項一切の件であつて、これもなかく種々の事務が多い。次に最も主要事務としては戰時召集事務で、臺灣在郷陸軍々人に關しては戰時召集規程あり、動員に就いては毎年その計畫を、陸軍側から長官に令達し、長官が各地方廳に分配して各般の準備をなさしめ、各地方廳の動員事務の整否に關して、時々吏員を派して檢閲させることになつて居るから、動員計畫の通知があると共にこれに關する諸準備を行ひ、而も整頓正確を期し檢閲に際し不結果でないやうに努めるが、この準備がなかく面倒である、從來は兎角この整理に就ては兵事係は、何れも非常に困難を生じたが、陸軍側の指導と上級官廳の監督が宜しかつたので、大にその事務が整頓し、臺北市の整頓は常に好評を得て居る。それから兵籍にある文官の勤務演習や管閱點呼の召集や免除を要求する場合の手續や、一般在郷軍人の勤務演習や管閱點呼等の召集に關する通知傳達や、その他召集等に關する事務、更に戒嚴令を布かれた戰時状態に入つた場合の各事務等である。この戒嚴令が臺灣に布かれたのは、かの日露戰爭の



時、波艦隊來航の際であつてそれ以外にない。それから軍隊の行軍に就いては、臺北市内に宿泊する場合、宿泊所の手配やこれに關する諸準備を、軍隊側と共に市民に交渉する外、市としての款待事務も可なり忙しいものの一つであつた。而して一方帝國艦隊や軍艦及び外國の軍艦艦隊が屢々基隆に入港するが、その際は何れも兵員は臺北を訪問をするので、これが接待に奔走するのみか、練習艦隊の少尉候補生の爲めには、市内の見學に案内、艦隊幹部には歓迎宴を催したり、また軍樂隊が乗組んで居れば交渉して市民の爲め奏樂を依頼するやら、市としての軍部關係の交際上に奔走することが可なり多い。而も駐屯兵の入營や歸還に際しての送迎、歸還兵への記念土産寄贈等、次から次へと事務は多い。又た陸海軍記念日や、聯隊の軍旗祭等の祝賀に關しても、市の兵事係は市民との交渉に當り、何れも市民の參加を勧誘して、盛大に催さたるべく努力する外、陸軍記念の行事や最近行はれた防空演習、燈火管制等の市民陸軍の共同動作には、常に中間に介在して、雙方の交渉を圓滑ならしめ、非常に良好の成績を致して居る。尙在郷軍人に關しては、市役所内に帝國在郷軍人會臺北市聯合分會を置き、市内に在る四分會と



常に聯絡を保ち、在郷軍人に關する一切の事務を兵事係に於て處理して、統一を圖り活動を多大ならしむる等、その盡力する所が多い。市役所の庶務課に屬する一係の兵事係は、軍隊軍人の關係事項の總てを取扱ひ、可然迅速正確に處理し、陸軍側や在郷軍人側や市民との聯絡を巧に結び、多様多端の事務を善處するので、市民は軍事關係に就き、多大の利便を得て居るのである。

帝國在郷軍人の各方面に於ける、奉仕的の活動は戰時に劣らぬ目醒ましいもので、何處の土地でも好感敬慕を以て迎へられて居る。臺北市内の在郷軍人も現在四千五百餘人であるが、これ等の在郷軍人中將校の人は勿論下士卒の人々も、何れも在郷軍人として社會の爲め奉仕的に活動して居る。これは在郷軍人としての義務の一端を履行するのであらうが、その凛々しい行動や目醒ましい働きは帝國軍人の面目躍如として、眞に涙ぐましい數々が見られ。在郷軍人に對しては、臺北市民も心から感謝好感を以て、常にこれを迎へて居る、臺北市内の在郷軍人はその數四千五百餘人、臺北市聯合分會があつて事務は臺北市役所内に置かれてあるから、市の兵事係でこれを取扱つて居るが、更に城内城



西城南城北の四分會に分れて居る。而して城内の在住者は城内分會に、新起西門八甲の各町を初め、所謂艋舺方面、縦貫鐵道線以西一帶の地の居住者が城西分會に、大正御成建の各町を初め、臺北驛以北大稻埕方面並に城内より總て北方地帯の居住者が城北分會に南門方面その他前記以外の城内以南以東の地帯の居住者が城南分會に、それごとく分屬して居る外、町内班もあつて活動して居る。而して在郷軍人總數の約四十六パーセンは官廳奉職者で、その他は商業、銀行會社通勤の俸給生活者であり、所謂筋肉勞働者は、土地柄の故か反つて少數である。それ故時に在郷軍人にして市その他方面委員等から救護を受くるものもあり、所謂軍事救護の惠に浴する者もあるが極々少數であつて、概して生活状態は安定であり、思想亦た穩健確實に、各々その事務に精勵する状態で、軍人氣質の麗しさが見られ、現に或る大會社では、雇傭員以下の使用人を採用する際、在郷軍人の否を先づ確め、在郷軍人を好んで採用する方針であるが、何れも採用後の結果は、久しい間の使用の上に、在郷軍人の方が好結果を示すと云ふ實例がある位である。従つてその服務上にも、義務履行の成績は概して確實良好と云はれて居る。而し



て既に屢々記述する通り、在郷軍人は警察官と共同して、市内人出混雑の際には街頭に出動して交通整理や救護事務に活動して警備警戒に任じ、又は風水火害の際には率先し催て出動して防風水火の事に努め、避難民の救助を警官や消防さては青年團、或は保甲壯丁團の人々と協力して、奉仕的に大活動して居る。それ故に市内に何事か變事若くは物その他の人出混雑の場合は、必らず在郷軍人の出動を見ないことはなく、その活動の著しく功果多大なるものあることは官民等しく感謝し、好感を以て若き人々の在郷軍人を迎へて居る。而して毎年總會を開催して市内の在郷軍人は一堂に會し、軍司令官以下軍部の幹部、守備隊司令部聯隊その他の幹部に、主なる文官も列席の上盛況裡に開會され、總會後は種々の餘興に和氣霽々として楽しく半日を過すのが例となつて居る。又た臺北市内居住の海軍々人の豫後備に在る人々が、海友會を組織して團體會員相互の親睦を圖つて居るが、海軍の軍籍に在つた人は土地柄少いが、日露戰爭に参加して日本海戰に活動した勇士もあつて、なか／＼意氣旺盛に、これも種々在郷の海軍々人として社會に對して奉仕的活動を行ひつゝあるが、何分少數なので陸軍の在郷軍人ほど花々しい

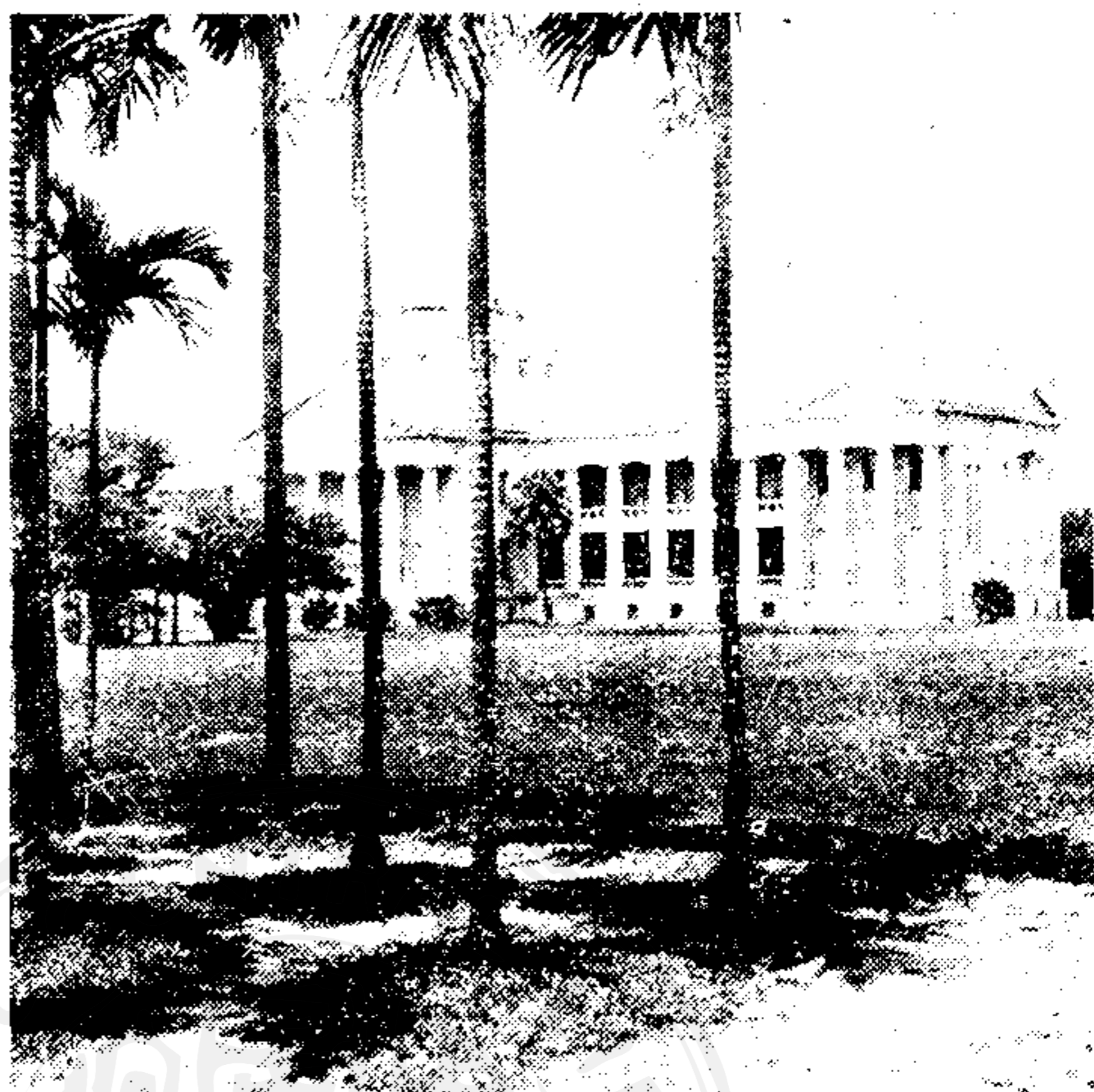


活動が見られないが、海友會は健實に發達しつゝあるのは邦家のため、臺北市民は何れも好感を持してその發展を祈つて居る。





# 臺北の學界と運動競技



- || 進展を示した教育界と向學心 ||
- || 完備した教育機關と研究機關 ||
- || 向上した讀書熱と趣味と研究 ||
- || 講演會座談會とラヂオの放送 ||
- || 旺盛時代を示す臺北の運動界 ||





## 臺北の學界と運動競技

### 進展を示した教育界と向學心

…教育の普及と向學心の勃興…共學制の發布と入學問題…

國語の獎勵普及と國語修得前…臺灣の女性の覺醒と女子教育…

尊い血潮に彩られた芝山巖を發祥地とした臺灣教育は、異常な發展を見、文化を彌益に進展向上せしめ、全島到る所學徒の姿に接しない所がないのみでなく、山奥深き蕃社にも『君が代』の合唱が、蕃童教育所の窓から聞ゆるやうに普及された。これは何れも領臺以後のことで、督府は一方産業の開發を圖ると共に、教育と云ふ方面にも多大の努力を致し、幾多の教職員が病に斃れ、臺灣育英事業の犠牲者になつたものである。領臺前の教育、それは蘭人占領時代には、宣教師の手に依つて土着民が教化されたことは、歴史に語られ又史蹟に残されて居る。清朝時代に於ては、全く清本國の學制に倣ひ、支那



古來の教育主義の下に、臺灣にも府縣儒學を設け、學校も府縣儒學書院の官立學校、義學或は義塾と稱する府縣街庄に於ける貧困子弟を教育する、地方富紳出資經營の半官立學校、その他社學や土蕃社學と云つたものがあつたが、更に普通書房と稱する民學即ち私塾が各地方にあつた。臺北地方が開拓發展され、艋舺や大稻埕さては大龍峒の市街が建てられて繁華を示したので、艋舺には既に乾隆三十二三年頃に都司を置き、嘉慶十四年頃には立派な市街となり、文物が整へられた結果、今から百餘年前道光十七年に書院邊街（今の龍山寺町五丁目）の河畔に、文甲書院後の學海書院を建て、官學として舉人秀才と榮譽ある學位を贏ち得た人々を輩出してその盛を致した、それで艋舺の地を風流韻士は文甲とも云つたものである。その後臺北城が建成されて臺北府が置かれ、此處にも臺北府儒が創立されることとなり、即ち光緒六年登瀛書院と云ふ官學校が、城内の書院町（今の書院町）臺灣電力株式會社並に臺灣總督府圖書館の在る一劃に建された、而してこれと同時に、舉人秀才の學位を受くる考試の場所考棚と云ふのが、新北門街（今の明石町一、二丁目）今の臺北州廳官舎邊一帶に建てられた。而してこの他の義學や殊に書房は艋舺に



最も多く、大稻埕大龍峒これに次ぎ、その部落には農村のことゝて餘りこれを見ないのみか、憊うした方面には就學の徒も稀れであつた。然し殊に面白いのは、これは一種の政策に出たものであると云はれるが、閩人が蕃人を驅逐し、蕃地を侵佔した際に同化した平埔蕃人、即ち熟蕃中に篤學の徒があると、考試の際稀には特に秀才となる名譽の學位を授けたものであつた。艋舺と云はず大稻埕や大龍峒の各方面にも、昔から傑出した人が輩出したことが多く、例の舉人や秀才を輩出した家の子孫が可なり今にも多く、その家は名譽ある家として郷人から尊敬を受けて居るし、この名譽を表示する石柱が、門口に建たものであつたが今は漸次に滅失したけれど、まだ此石柱が臺灣人街を歩くと残存して居るのを見るが、もう石に刻された文字も風雨に曝されて讀み難く、餘り大きくない石柱だから、今日でも注意しないと判らないし、土地の人々も無關心で過して居る。劉銘傳時代には、泰西の文物を輸入して大革新を斷行したが、その際泰西學を取入れることを緊要とし、光緒十三年にこの目的を以て西學堂を、書院街（書院町二丁目）今の陸軍偕行社の地邊に建て、洋式の學問を授け、且つ舊行轅即ち今の舊廳舍内にも蕃學堂を設けて



臺北附近主として屈尺蕃人の子弟を招致教育した。然しこれは領臺共に跡を絶ち、我日本  
本の教育が施されたが、従つてこれ等の建物も亦た全く使用されず、臺北府儒として建て  
られ開校した登瀛書院は、領臺後本建物のみ淡水館と命名され、臺北官民の社交集會所、  
公會堂の如き使命を果すべく使用されたが、後に腐朽甚しく遂に取毀されてしまひ、跡  
は今日の如き建物が出来た。西學堂はこれを改築して陸軍偕行社となり今日に及んで居  
るが、學海書院は領臺當初から久しきに亙り、學事關係の廳舎として使用されたが、後  
に民間の手に渡り今は高氏の祖廟として、その一部が残されて居るも、その片影を偲ぶ  
ことが出来ない。蕃學堂は廳舎に一部を充たものであり、考棚は領臺後一時官舎に  
充てられてあつたが取毀されてしまつた。結局清朝時代の官學校は、僅に學海書院が名  
實と共に減しても、その建物の一部が残存するに過ぎない。義學や書房も領臺と共に一  
時は全く其存在を見なかつたが、我督府當局でも、書房に改善を加へて臺灣人兒童の初  
等教育の補足機關として存在を認めたので、書房だけは再び各地に開かれ、今日でも領  
臺前のものとは改善された授業科目で、書房先生が昔ながらの状景中に教鞭を執つて居



る。領臺當時督府に明治二十八年五月學務部を置かれ、大稻埕港邊街（今の港町）所在の舊獨逸領事館跡に事務所を置いたが、更に地を由來文叢の地たる士林なる芝山巖と云ふ所に移して、文教の施設事務を執り、傍ら附近の子弟に國語教育を施したが、例の芝山巖の兇變があり、臺灣教育史第一頁は尊い六士先生の血で彩られたのである。而して明治二十九年五月國語學校を臺北に、國語傳習所を全島樞要の地に置いたのが、臺灣教育機關設置の嚆矢であつて、國語學校は今の臺北第一師範學校の前身である。その後同三十一年十月臺灣人教育機關として公學校を設けて國語傳習所を廢し、同年七月小學校制度を施行し、同三十二年四月に臺北臺中臺南の各地に師範學校を置いたが、後に教員養成は國語學校にて行ふことゝし廢した一方、同四十年五月内地人の爲め中學校を臺北に置き、高等女學校を附設し、國語學校附屬の中學部及び附屬高等女學校を廢して同四十二年三月臺北に高等女學校を獨立した。その他臺北に醫學學校や工業講習所を置き、尙農事林業糖業の各講習生があり、私立中學校や幼稚園も出來、外國人經營の神學校を開かれ、臺灣の教育は領臺後全く面目一新し、時代に則する進歩した教育が授けられた一



方、文化の向上と各方面の開発は、教育機關の完備と共に普及し、漸次臺灣人間に向學心が勃興して隆盛を見、燦然として文華の輝きが示された。かくしてその後種々の變遷を経へて、大正十一年四月教育會の改正があり、内臺人共學制が布かれ七年制の高等學校や専門學校令で商工農の各専門學校が出来、更に昭和三年四月から臺北帝國大學の開校を見、立派な學校系統が整ひ而も年々勃興する向學心は、幾多の中等學校を各地に設けられ、新學期に於ける入學志願者は募集人員を超過して、少きも二倍多きは數倍に達する盛況で、入學難の叫が高くなつた。臺北は島の首都、新領土の政都として、文化の中心地であるから、臺北帝大始め高等商業、醫學専門、帝大農業専門部の各専門學校と、高等學校、第一第二の師範、第一第二の中學、第一第二第三の各高等女學校、商業、工業の各學校の中等學校があり、初等教育としては小學校公學校があり、特種のものに盲啞學校があるが、私立としては中學會、曹洞宗中學林、靜修女學校、臺灣商工學校、成淵學校、女子職業學校等々がある外、幼稚園もその數多く、尙それに書房があつて、漸次臺灣人間にその子弟にして不就學の徒を見ないやうになりつゝあるのは、教育の普及を



如實に物語るもので、臺北のみでなく各地方にもそれ／＼向學心の勃興で、教育の普及進歩亦た大なるものがあり、聖代の惠恩に依り新附の民たる臺灣人は、實に幸福になつたと云つて可い。

進展普及の顯著な臺灣教育に、一大エポクメイキングを示した教育令改正は、更に内地人の共學制は中等學校以上の各學校で、從來臺灣人子弟の入學を許さなかつたものが共學し得ることになり、従つて公學校の卒業生にして上級學校に進む者は遠く内地へ留學せざるを得なかつたが、この共學制が布かれてからはこの不便利から救はれ、臺灣にて内地人子弟と共に通學勉強することが出來、さなきだに勃興した向學心は、一層盛になる一方、この多大な福音を受くる者が多くなつた。従つて各地に中等學校が増設され、入學志願者も非常に多きを加へた。加之初等教育に於ても、國語を常用する者を入れるのが小學校で、臺灣人の子弟は公學校に入ることになつて居るが、この共學制に基きて、臺灣人の子弟にして國語を常用し得るものに限り、考察の上小學校に入學を許すことゝなつたので、共學が完全に行はれてあつて、各地方の小學校に内地人子弟と全



く同一に學ぶ臺灣人の子弟が近時頓に激増するに至り、而も小學校のみでなく中等學校以上の各校にも在學して、何れも相當の好成績を示して居るのは、喜ぶべき新しい現象と云はねばならない。恁うして臺灣人の向學心が勃興し、今や誰でも公學校を卒業しなければ、青年として肩身が狭く、更に進んで上級學校に行かねばと云つた風であつて、その昔就學兒童が僅少な際は、教員が子弟入學を勧誘した當時を追想すると、正しく今昔の感に堪えないものがある。それに在住内地人にしても、臺灣の開發に伴ひ文化が向上して、完全な教育機關が設けられて、何等子弟の教育に、遠く母國の學校に入學勉強させるにも及ばず、且つ舊態を脱してその生活振も昔の如く亂雜放慢でなく、眞面目の家庭が多く殆んど大部分が然うであり、領臺後既に三十有餘年を閲し人口を激増したので、小學校位は卒業せねばならず、更に上級學校へ進まないど、時勢に後れてしまふし、小學校だけでは女子は兎に角、男子としては一人前でないとされ、中等學校入學志願者が増加すると共に、娘も高等女學校へ行かさねば、親としての心残りとおつて、女子の上級學校へ進むものも多くなつた、恁うした在住の内臺人間に、向學心が勃興増長



した結果、入學志願者の激増を見、中等學校の増設されるに拘らず入學難が叫ばれ、臺北は土地柄この叫びが最も甚しく、入學試験の競争は言語に絶する猛烈激甚さを加へ、受験の當人よりも保護者が、非常に憂慮してその成否に、子を持つ親の神経を尖らせて居る。それ故に中等學校へ入學志願者が激増し、入學試験と云ふ難門を突破すべき競争も亦た夥しく激烈に傾いた結果、自然憊うした兒童に對して、各小公學校でも準備教育と云はるゝ、入學試験準備を目的とする授業が行はれるやうになり、次第に入學試験を受くる人々の増加に比例して益々その度を強め種々の弊害さへ見、中等學校入學試験と云ふ一つの問題が論議された、殊に臺北は男子の中等學校は、第一第二の二中學校と、商業に工業の二校があり、女子には第一第二第三の三高等女學校と、更に高等學校尋常科がある。高等學校尋常科は成績優良のものを僅か四十名だけ毎年入學を許可するが、この入學試験には全島から小公學校の卒業生が集まる故、これは他の中等學校に比して入學試験も早く行ふし、これに不合格でも中等學校に受験入學を得るの機會があるから然う問題も起らないけれども、地方中等學校は男女子共に一齊同日に入學試験を行ふの



で、この入學試験の合格不合格は、直に其處に一ケ年の差が生ずるから、受験者も受持  
教員も非常な意氣込で教へもするし勉強もする。而して臺北の中等學校で第一中學  
校と第一第二の二高等女學校は、從來内地人が大多數を占め、共學の少數臺灣人がある  
が、第二中學校と第三高等女學校は、これと正反對であるし、その他商業や工業は内臺  
人共學で、數も商業は内地人多數であるが、工業は臺灣人の方が多いと云ふことである。  
而も一般内地人子弟は、近來では臺灣人と共に實業教育を受くる者漸増の傾向著しくな  
つたけれど、尙中學校の志願者が尠くならない、それ故にこの中等學校の入學試験と云ふ  
ことは、主として内地人間に論議されて來た、これは向學心の勃興と云ふが、公學校に通  
學せぬ所謂不就學兒童は、餘程貧困な下層民の子弟で、その他は悉く就學するけれど、上  
級學校に進むものは、家庭の事情やその他のためにまだ多くないし、その上級學校へと  
希望する者は第二中學校と工業學校が多いから、餘り入學試験に就ては論議しないし、  
論議しても内地人ほど激烈でない。それに内地人の間には、中等學校の入學許可者を多  
く出した小學校は、優良だと好評好感を以て迎へられるが、然らざる小學校は不評甚し



く、學校當事者を非難する始末に、勢ひ小學校では無理な方法手段で、入學準備教育が露骨に授けられると云ふ現象を見たため、督府學務當局では入學試験に就き改善すべく種々研究の末、各小公學校での入學準備教育を絶對廢止せしめ、嚴重に取締を勵行して違反者を所罰にすると云ふ強固手段を斷行すると共に、入學試験問題に就いても考究して、受験者の負擔を輕減する等、緩和矯正に努めつゝあるも、依然入學試験は競争激烈で、毎年三月末には市内はこの中等學校入學試験で大騒ぎを見、その結果の發表に依り、各家庭に悲喜劇の數々が演ぜられて居る。而して不幸な運命に泣いた兒童は、更に臺北第一師範學校附屬小學校の高等科（これは募集人員少數なので可なり猛烈な競争試験がある）と末廣高等小學校へ入學して、來年を待たねばならず、公學校の高等科に通ふより他はないのであるが、然しまた別に私立の學校があつて、男子は臺北商工學校や曹洞中學林、女子に靜修女學校女子職業學校があり、何れも入學試験が中等學校試験後に行はれるから、中等學校に入學出來なかつた人々は、これ等の學校に入學する者も尠くない。何しろ財界不況で内地の中等學校中には、入學志願者數が少く、募集數に達しないのがある」と云ふ



のに臺北は依然入學難から救はれない狀況は、向學心の勃興と教育普及進歩を表現するもので、文運の隆昌を思はしむるものが多いと云つても可い。

臺灣の教育が普及進歩を遂げ、向學心の勃興は各學校への通學者の激増と、帝國大學の開校に教育機關が完備し、文運彌が上に隆昌して、内地に劣らぬ立派なものが出来、特に土地柄異なる色彩を放つて居る。而して芝山巖で端緒を開いた國語傳習は、その後公學校に移り、臺灣人子弟に初等教育を施し、國語國文を教へ、小學校に準じた教程で教授して既に三十餘年、幾多變遷を経て立派な効果を結ぶ一方、書房にも國語國文の教授を行はしめたが、更に國語普及の必要を見、爾來種々の方法に依つて、國語普及會國語夜學會その他の講習會を催して、公學校に通はない者に對して、國語を教へて、何れも功果著しきものがあり、殊に地方に於てその成績良好なものがあるが、現時は社會教育の一事業として更に大馬力をかけて、各州各郡下それ／＼新しい施設の下に、市街庄に於て國語普及の講習會が催され、國語普及が統治上重大使命を帯びて居るのみでなく、内臺人の融和も國語の力が與つて多大であることが、自然的に了解されるやうにな



つたので、臺灣人識者は一層奔走に盡力して居るので、國語普及は益々好果を見つゝあるの現状は、進んだものであると云はねばならない、國語を解せば意思は自ら疎通するし、従つて内臺人間の交渉等は圓滿に渉られ、談笑裡に事物が解決されて、或は協調に或は協力に、所謂内臺人の一致協力が得られて、臺灣の開発は更に大なるものが獲得されるのである。臺北は土地柄内地人も多く、官廳その他商取引等にも内臺人間の交渉も密接であるから、自然臺灣人は國語を知らねば、種々不便損失を招くものがあり、従つて多少とも國語を解する者が可なり多く、行商や一般商店員などは、學校や夜學會に行かずとも、自然に修得して可なり巧に語る者が多く、内地人は臺灣語を知らずとも一向不便を感じない位である。これは臺北が繁華に伴ひ、文化の向上が著しく臺灣人が進歩したものであると共に、公學校もその數多く、通學の兒童は實に萬を超ゆるの盛況であり、卒業生の數は夥しいものであるから、國語を解し使ふ人々も多く、従つてこの四圍の環境からして、男は働さに行き商賣もする上に、多く内地人を對手にする機會が極めて多く、實際國語を解さないと不便利を招くことが屢次なので、自然に耳から入れて



覺えると云ふ方法で、變則で誤りが多少あらうとも使ふと云ふ調子で、夜學會とか普及會とかに學ばずとも、相當に用を辨するだけに國語を解し使ひ得るやうになつた者が頗る多數である。然し老人や婦女子には、男ほどに内地人と交渉がないから、國語を解しないのが多いと云ふことである。然し恁うした趨勢に在る一方、書房でも國語を教へ、夜學會も開かれ、國語普及に努めて居るから、もう臺北では臺灣人街や部落に行つても、國語を解する者が多く、巧みでなくとも、多少なりとも使ひ得る者も尠くないから、決して不便利は感じないほどに國語は普及され、また益々普及されつゝあるのである。而して臺北州や新竹州では、各郡や市街庄の國語普及會や講習會等で勉強した人々が、交代にマイクロフォンの前に立ち、國語で種々の談話や合唱等々を放送して居るが、その成績も非常に良好で進歩の度の著しさに驚かされる、殊に近年は中年以上の男女が競ふて國語を練習し修得する傾向が顯著となり、その中には可なりの老人も交はると云ふ、快心すべき沙汰も聞かされるが、恁うした連中の熱心さは、僅々短い二三月間で簡易な會話位は出來得るものが多く、これ等はこの修得した國語で、非常に便益を受けて喜び、



いよく勉勵して居ると云ふことである。臺北市内に於ける國語普及の狀況は、在住臺灣人中國語を解し、使ひ得るものの歩合は男三十五、三六パーセント女、十二、四七パーセントを示して居るから、更に年を加ふると共に割合を増加して、國語を常用語するに至ることも至難の業ではなくなつたほど、異常の進歩で普及されたものであつて、社會教育の一部として、この國語普及は、重大性を帯びて居ると共に、今や臺北に於ては、甚だ良好な成績を示して居るのは、實に欣喜すべき事實で、當局その他の銳意これに到らしめた努力は、蓋し多大なものとなつて、日本語は世界に於ける至難のものとして居るのを思ふと、一層國語教育の難事なことを感ずると共に、今日の好果を喜ばずには居られないのである。

教育の普及文化の向上に向學心の勃興を見、一方亦た國語普及の實績が示されて、完備した教育機關は、初等教育より最高學府の大學に至るまでに、系統的に設備され、幾萬の學徒は、螢雪の功を積むべく勵んで居るが、これは正に立派に臺灣開發進歩の異常なことを立證するものであつて、殊に近時女子教育の普及は、内地に於ける婦人界の覺醒と



相俟つて、臺灣の婦人界も漸次覺醒を促したことは、著しい新現象の一つである。在臺内地人の家庭が、もう今日では立派で眞面目な、新しい若い主婦の手に切盛され、時代に則した家庭生活が活動する夫妻の手で營まれて來たと同時に、子女の教養を特に重要視し、兎角男に偏重した女子教育の弊を覺ると共に、時代の進歩は娘の向學心を唆り、これ等の事情が高等女學校を卒業することが嫁入の條件の一つにもされる傾向があるから、高等女學校入學志願者が増加し、臺北でも高等女學校は三つある位である。加之最近女子にして臺北帝國大學に入つた者があり、また高等女學校卒業生に更に高等女子教育を授くる、女子高等學院が臺灣教育會の經營で開校さるゝ等、目醒ましい進歩振である。而して一方臺灣人間にも、時勢に伴ひ漸次風俗慣習に幾多の改善が見られ、殊に臺北の如きは、時勢に目醒めた婦女子も多く、高等女學校卒業生が、自然に尊敬されるし、嫁入するにも好都合となり、嫁の値打も高めるので、娘自身が進んで入學を希望する者多くなつて來た。加之公學校の就學兒童は、從來女兒の數が非常に尠かつた、これは中以下の臺灣人家庭では、既に十歳に達せぬのに、内地人その他の家庭や工場等に備



はれたり内職を働いて稼ぐの風があるつたので、餘り公學校に入らしめぬ傾向が甚しかつた、然し時代が進み、一般に向學心の勃興は、漸次この傾向は變つたものの、まだ地方に行くと依然女兒の就學する者は非常に尠かつたのであるが、流石に臺北は都であるから、他より更に向學心の勃興の影響も多く、公學校への入學者も逐年増加する一方、就學の女兒も數を増すので、女兒のみ收容して授業する一校、即ち蓬萊公學校さへある。然しその他の各公學校にして男兒と共に女兒を收容して授業するのが幾多あると云ふ状態である。而して公學校卒業生も既に多數に上り、これ等の人々は、内地人の婦女子と共に、盛に内地刊行の婦人雜誌や圖書を購讀する傾向が夥しく、臺灣婦人は四圍の恂うした情勢から、自然的に開發されて、女子にも教育が必要であると云ふ觀念が、中以下の家庭人の中に濃厚となつて、女學生や公學校女兒の姿が街頭に多く見られるやうになつて來たのは、喜ぶべく現象と云ふべきで、臺灣の女子教育も漸次盛況を示すに至るも遠くないと思はれる。この女子教育の盛運に赴かしむるやうになつたのも、全く教育の普及と進歩に因るもので、これに伴ふ向學心の勃興が、一面に於て促進せしめたことも多大と



云ふべきであると考えられる。然し現在では婦人界の狀勢も、異常に變化を來し、進歩したとは云へ、まだ充分でもなく、臺灣婦人間には多數を占むる中以下の家庭の中には、女兒を内職や傭人として稼せる者も多く、公學校の就學兒童は、男より女が少ないと云ふことであり、高等女學校への入學者も、誰も彼もと云ふほどでなく、多少の資産ある中以上の家庭人の娘位であると云ふことであるが、これは臺北に於いての狀勢で、他の地方よりは非常に女子教育に就いて、人々が多く考へて居ると云つて可いのである。されば臺北に於ては女子教育も相當盛であるが、それは内地人側のことと、臺灣人側の方では、内地人側の如くにはまだ到達して居ないと云ふ状態である。

### 完備した教育機關と研究機關

…備つた學校系統と臺北の學校街…小公學校幼稚園と私立學校及書房…

臺北市の教育施設と社會教育…研究機關としての中央研究所…

改隸をば機として、教育機關並に學制や教育施設が、我總督府民政部學務當局の手に



實施され、その後臺灣の開發と文化の向上とに伴つて種々の變遷を見、従つて教育機關の改善が屢次行はれ、學校系統も帝國大學の開校を見るに至つて、初等教育の小公學校から専門學校まで、何れも完備して内地のそれと殆んど同一となつた。然し新附の民たる臺灣人を抱擁する土地なので、國語を修得せしめねばならない事情から、初等教育に於ては公學校なるものが設けられ、兒童をして國語を修得せしむるに多大の努力が拂はれて來た。而して備つた學校系統の下に置かれた教育の諸機關は、總て内地のそれに準據したもので、中等學校以上の各學校では、從來醫學學校や工業講習所、國語學校や國語學校附屬小學校とが、臺灣人子弟を收容教授した以外、他の各學校には臺灣人子弟を入學せしめなかつたので、公學校卒業生にして上級學校へ進む者は、何れも内地に留學せざるを得なかつた。然るに大正十一年教育令の制定を見、諸機關も従つて改められ、共學制が布かれ、國語を解得する臺灣人兒童は、考査の上に小學校に入學を許し、内地人兒童と共學せしめた外、それ以上の中等學校や専門學校には、臺灣人子弟を進んで入學し得ることゝなつた故、從來遠く母國に笈を負ひ遊學するを要しないことになり、子弟のた



めに甚だしく修學上の便益が與へられた。その後帝國大學の開校を見、在臺内地人の子弟は勿論臺灣人の子弟も、最高學府に學び得ることとなり、臺北の街頭にも大學生や高等學校の學生の姿が夥しく見るやうになつて、子弟教育に多大の便宜が與へられたのである。然し中等學校は臺灣各地に、中學校や高等女學校その他商業農業工業の各實業學校があつて、就學に差支ないやうになつたものゝ、それ以上の専門學校は、醫學、商業、工業、農林業位で、他に東京その他に於ける専門學校令に據る私立大學がないから、中等學校卒業生は、憊うした前記の専門學校か高等學校高等科に入學しない者は、母國に遊學しなければならぬ、これは不便であるが、これは多く内地人子弟に關すること、臺灣人子弟には影響が尠いやうである。而して臺北に於ける各學校は、大學教育としては臺灣教育令に據り設置される臺北帝國大學(富田町)がある。大正十四年度から創立準備に着手し、昭和三年三月同官制が發布され開校を見たもので、本大學は綜合大學で、現在には文政理農の二部に分れ、文政部に哲學史學政學の四學科を、理農部に生物化學農學農藝化學の四學科をばそれ〴〵設けてあり、講座は文政理農兩部共各二十四でこの外に



附屬農林專門部がある。臺北帝國大學附屬農林部(富田町)は、大正八年四月臺灣人子弟に農業や林業に關する専門教育を施す爲め設けられた高等農林専門學校が、大正十二年一月臺灣教育令の改正で高等農林學校と改稱したが、大學設置と同時に附屬せしめ農林専門部となつたが、農業林業の二科があつて、内容は高等農林學校と同一である。高等商業學校(幸町)は、臺灣の拓殖經營の進歩と國威伸展の時運に鑑み、在住人子弟に臺灣を根據とし南支南洋に發展する必要素を與ふるため大正八年四月に臺北に開校したもので、後に臺南高等商業學校もこれに合併して今日に及んで居る。醫學専門學校(東門町)は明治三十三年二月に督府醫學學校として開校し、爾來臺灣人醫師の養成、公醫候補者の教習、熱帶醫學の研究を目的としたが、大正七年四月から臺灣教育令に依り醫學専門學校となり、從來臺灣人のみであつたのを内地人男子にも醫學専門教育を施すこととなり、同年督府醫學専門學校と改稱し、内地の醫專と同一となつた。師範教育は臺灣に高等師範學校はないが、現に臺北第一、第二、臺中、臺南の四師範學校はある、最初師範教育機關は督府國語學校のみで、小學校教員養成の小學校師範部と公學校教員養成の公學校師



範部とに分れ、公學校師範部は甲乙とし、小學師範と公學師範部甲科とは中學或は師範を卒業した内地人に更に一年の師範教育を施し、前者は小學校後者は公學校に教員たらしめ、公學師範部乙科は公學校卒業生を入學せしめた。その後幾多の改正あつて、大正八年一月師範學校と改稱し、更に内地人教員養成規則を公布し、公學師範部甲科を公學師範部と改め小學師範部と共に臺北師範學校に併置したが、大正十二年一月各師範學校に小學師範公學師範の兩部を置き、普通科五年演習科一年と定め、普通科は小公學校卒業生、演習科は中學や高等女學校の卒業生を入學させるやうになつた、これも土地柄であらう内地の師範學校とは趣きを異にして居る。而して臺北第一師範學校のみに研究科と、公學師範部演習科女子部が施設されて居る、臺北には第一師範學校(文武町)と昭和二年四月開校の第二師範學校(大安)とがある。高等普通教育には中學校高等女學校及び高等學校とがある。中學校が開校されたのは明治三十一年四月國語學校に尋常中學科が附設されたのが最初で、明治四十五年五月獨立し中學校となり、内地人子弟を收容教授したもので、臺灣人子弟のためには、國語學校に國語部國語科を置き、今日の高等普通



教育に準じ多少低い程度のものに、職業教育を加味した教育を授けたのが始まりで、その後大正四年に公立中學校を臺中に設け、内地の中學より程度も低く修業四年のものが開校され、その後大正八年の臺灣教育令で高等普通學校となり、同十一年の同令改正で共學制が布かれ、中學校と改正して内地同様の中學校が出来、現在では明治四十五年五月獨立した臺北州立第一中學校(龍口町)と大正十一年四月開校した臺北州立第二中學校と二つある。高等女學校は明治三十七年十月國語學校に附屬高等女學校を設けられたが、これが内地人子女の高等普通教育機關を設置した最初であるが明治四十二年三月獨立して高等女學校となつた。臺灣人子女に高等普通教育を施したのは、明治三十年四月國語學校第一附屬女子分教場として士林に開校したのが起源である。然しこの學校は臺灣人子女に普通學と手藝を授けたものでその後臺北に學校は移した、而して同校卒業生は出身地の公學校職員になつた者が多く、臺灣人女子教育の勃興を促進した、その後臺灣人女教員の需用益々多くなつたので、明治三十九年から師範教育又は技藝を施すこととし、校名も度々改められたが、明治四十三年に附屬女學校と改稱、大正八年四月に女



子高等普通學校となり、内地の女學校よりは低いが三年修了の高等女學校に改められ、更に同十一年に臺灣教育令改正で高等女學校となり、内臺人共學も他の高等女學校と共に、内地の高等女學校と同一となり、臺北には明治四十二年三月獨立した臺北州立第一高等女學校（文武町）大正八年四月開校の臺北州立第二高等女學校（幸町）と、士林で開校し幾多の變遷を見た臺北州第三高等女學校（新起町）の三校がある。實業教育は何れも中等學校で商業と工業と二つある。商業學校は臺北州立臺北商業學校（幸町）で、大正六年五月に開校し、臺灣に於ける商業教育の嚆矢である、最初は内地の甲種程度のもので第二外國語を支那語馬來語何れかを課する事にした特色のものであつたが大正十一年に實業學校となつて今日に至つた。工業學校（大安十二甲）は明治四十五年七月督府學務部附屬工業講習所として設けたもので臺灣人男子に職工に必要な智識技藝を授くるのを目的として開所したがこれが工業教育の最初である。その後獨立して工業講習所となつた一方、別に三年修了の機械電工木工建築應用化學家具及金屬細工の各科を置いた臺北第二工業學校が開かれ、大正七年七月内地人子弟のため五年修了の内地の甲種程度の工業學校が出



來たが、同十二年三月これ等を合併して内臺人共學の工業學校として今日に及んで居る。而してこの以外に初等教育としては小學校と公學校とがある。ところで臺北市内の諸學校は、小學校は城内にこそないが、城内近くの内地人の居住する街に建てられ、公學校は艋舺大稻埕その他臺灣人街に在るのは、これは收容兒童の關係に因る分布で當然なことであるが、小學校にも共學が許される關係上、大稻埕や艋舺等の臺灣人街から、小學校への通學兒童も多く、これ等は服裝から言語も内地人兒童と同一なので一見一寸判別し難い。帝大や高等學校や第二師範は郊外部落で大安から富田町方面に、城内には第一師範と第一第二の高等女學校があり女子職業學校がある。第三高等女學校は艋舺に在るのは古い因縁からであり、臺灣人子女を多く收容するからであらう。而して幸町の一劃には、高等商業學校や商業工業、第二中學と商工學校があつて近い所に集まり建てられ一見學校街の觀がある。であるから臺北の學校街と云へば、まづこの方面を指すもので、臺北市内には制服制帽の男女の學生生徒や兒童が、通學する健かな明い、元氣な姿が夥しく見られて、登校退校の時刻には、街頭が恁うした若い人々や幼い人々



の姿に彩られて、一つの街頭景が描き出される。

今日云ふ中等學校以上の學校は、從來督府の直轄となつて居たが、大正九年の地方官々制改正で州や廳が置かれ、市街庄制が布かれたのでこれを機として中學高等女學校商業工業の各中等學校は何れも州立廳立となり州廳の管轄となつた。而もこれと同時に地方廳たる廳が管轄した小公學校は市街庄管轄となり、臺北市内の小公學校は、第一第二の各師範附屬の小公學校を除き、總て市の管轄に移されてしまつた。而して臺灣に於ける初等普通教育は、小公學校の二つに分れて居て、且つその趣きが小學校に於ても、聊か内地と異なる所が多少ないでもなないのは、全く土地柄事情が然うさせたのであると云つて可い。臺灣の小學校は明治三十六年六月に國語學校第三附屬學校を臺北に置いたのが最初で、地方には同年十月國語練習所に別に教場を設けて小學教育を施したものである。爾來内地人の渡來者多く、兒童も増加する一方なので、小學校制度の改正を行ひ、今では樞要の土地は勿論偏陬地にも小學校が設けられるやうになつた。然し内地の如く義務教育制度でないが、就學歩合は九十八パーセントに達して居る、それで修業年



限や教科目教則等殆んど内地同様で、所謂臺灣生まれの兒童が、逐年激増して現在小學生の七割餘を占めて居る位、而して鐵道の便を利用する兒童には、中等學校その他の學生々徒と同様、無賃乃至割引の汽車通學と云ふ便法が設けられてあるし、土地に依つては小學生を收容する寄宿舎もある。殊に共學が許されて以來は、國語を常用し得る臺灣人兒童は入學を許して、内地人兒童と何等異なることなく、机を並べて授業を受けて居る。臺北市内の小學校は、臺北第一師範附屬小學校(文武町)の外に前記の如く國語學校第三附屬學校(臺北第二尋常高等小學校)が濫觴で、當時兒童數僅に三十四名に過ぎなかつたが、次で臺北第一第三第四の各尋常高等小學校を設立した後、この間教育制度の改廢に伴ひ、幾度か名稱を改正し、現在では旭(旭町)壽(西門町)南門(南門町)樺山(樺山町)建成(建成町)錦(錦町)の各尋常小學校並に末廣(末廣町)の高等小學校の七校で、學級總數百四十六學級、職員數百六十一人兒童數九千四百八十八人を算して居る。而して元來臺灣は義務教育制度を施行するに至らないけれど、事實は既に施行して居る同様もで、現在學齡兒童に對し九十八、九六パーセントの就學歩合を示し、大正九年から臺灣人兒童の共學を認めためたので、



現在三百七十八人を收容して實績も極めて良好である。公學校は明治二十九年五月に臺北その他樞要の地十四箇所、官立國語傳習所を設立したのが最初で、その後同三十一年七月に臺灣公學校令を發布し、國語傳習所を公學校と改稱し、臺灣人子弟に初等普通教育を施したもので、爾來時勢に鑑み幾度となく制度の改正が行はれたが、大正十一年大改正を見て今日に及んで居る。公學校では兒童の身體發達に留意し、教育を施すと共に、生活に必須な智識技能を授け、國民性格の涵養と國語習得とを目的とし、修業六箇年（蕃人公學校は四年）、修身國語算術國史地理理科圖畫習字唱歌體操實科家事裁縫等で、隨意科に漢文があり、實科は男兒に家事裁縫は女兒に課するが、實科は簡易な農業商業手工の中二科を選ぶことになつて居る、更に高等科を置いた公學校もあり、公學校も入學年齢は大體小學校と同様だが、土地の事情で例外がある。何しろ義務教育が施行されなから、最初は新入學生徒募集には多大の困難を招いたもので、都會地以外の地方では學校職員が草鞋脚絆で山越えて、一々學齡兒童のある家を訪ね、切に入學を勧誘したものの、それでも結果は面白くなかつたらしい。然るに臺灣の開發文化の向上、その他交



通機關の發達等の原因や進歩する時勢の變遷とで漸次向學心が勃興して、今日で各地至る所に公學校が設けられるのみか、分校が本校となるもの多く、就學兒童の數は夥しいものを示したが、然しまだくその歩合は最良とは行かず、都會地に比して田舎は不就學兒童も可あり、而も女兒に多いのは、民度が低い故かも知れない。臺北市内の公學校は、第一第二の兩師範學校附屬公學校（第一師範附屬公學校は文武町第二師範附屬公學校は大安）の外に、現在では十一校ある。而して臺北市の公學校は、前記の如く明治二十九年五月大稻埕に臺北國語傳習所、艋舺學海書院内に國語學校第二附屬學校を設立せられたのを始めとし、同三十一年公學校令發布に依り、國語傳習所を廢し公學校に改められたから、大稻埕の國語傳習所は大稻埕公學校となり、更に大龍峒に國語學校第三附屬學校が設けられた、その後臺北の發展と人口増加、それに文化の向上等の原因で、向學心の勃興を見、公學校増設の機を促したまゝ、爾後順次に市内各所に増設して、今日では艋舺方面には龍山（龍山寺町）老松（老松町）大稻埕方面には太平（太平町）日新（日新町）蓬萊（蓬萊町）大橋（太平町）永樂（太平町）大龍峒（大龍峒町）と、市内に編入された近郊部落には東園（東園町）朱厝崙



(朱厝崙)大安(大安)と合計十一校で、蓬萊公學校は女兒のみ收容し、大安や永樂の二校は、錦小學校と同じく最近開校したものである。十一校の總學級數は二百二十一學級で、兒童總數一萬三千八十五人、學齡兒童に對する就學歩合は、市制實施當時は平均三十六・一六パーセントであつたが、近時臺灣人間に向學心著しく昂進し、公學校を卒業させねばと云つた父兄の考へが、多く彼等の腦裡を刺戟し、入學希望者が頓に増加するに至り、市當局でも極力學級の増加を計劃して、志願者全部の收容に努めた結果、現在五十七・五八パーセントに達して居るが、尙入學志願者は逐年増加する一方だが、市の財政上學校増設や學級増加も意の知くならぬ状態であるが、これは一面向學心殊に臺灣人の向學心の勃興顯著なるを示すと共に、教育が大に普及されたことを立證するものであつて、慶賀すべきことと思ふ。就學歩合が約五十八パーセントを示すのは、人口増加の甚しきと、中以下の人が多いからでもあらうが、尙向上の傾向甚大であるから、やがては好歩合を示すものと思はれる。而して實業補習學校もあるが、臺北市内にはこれを見ない。幼稚園は明治三十八年四月に、臺北幼稚園が出来て地方稅支辨で官設されたが、そ



の以前にも私人經營のがあつたものの永續しなかつた。この官設幼稚園も同四十三年三月で一旦廢止し、大正九年の地方官官制改正に、同十年五月臺灣公立幼稚園規則を發布し、私立のものは同十一年六月公布の私立學校則に依ることになつたが、これも人口の増加幼児數も多くなり、文化の向上と向學心の勃興と共に、幼稚園に入園希望者多く、臺灣各都市の地に設立を見全島で五十五、姪母は内地人九十二人臺灣人三十九人で、園兒數は内地人千六百九十八人臺灣人千七百九十八人である。臺北市内の幼稚園は何れも私立で、種々變遷があつたが現在は愛國婦人會臺灣支部經營の臺北幼稚園(明石町)西本願寺臺北別院經營の樹心幼稚園(新起町)大正幼稚園(大正町)昭和幼稚園(龍口町)東門幼稚園(東門町)の五箇所は、主として内地人幼兒を姪育し、愛育幼稚園(蓬萊町)艋舺幼稚園(龍山寺町)は臺灣人幼兒を姪育して居るが、何れも既定人員を收容し成績好良である。而して私立學校としては、最初に明治三十年四月東門學校とて、主として督府の給仕に教育を施したもので、その後同三十六年四月成淵學校(大和町)と改稱現在の地に移轉して、依然官衙會社等に通勤する少年に夜間中學校程度の學課を授けて居るが、他に明治三十九年七月設立



の臺北中學會(末廣町)と云ふ私立で夜間中學程度の學科を速成教授するのがある。尙女子の學校としては靜修女學校(蓬萊町)が天主教會の經營で大正五年十二月に設立され、臺北女子職業學校(明石町)が愛國婦人會臺北支部の經營で同支部構内に在る。また男子に中等學校程度で商工業の學科を教ゆる臺灣商工學校(幸町)が、東洋協會臺灣支部經營で大正五年六月開校し、その他大正五年一月開校の曹洞宗中學林(東門町)がある。而して書房は臺灣人經營の私塾で、恰も我舊幕時代の寺小屋に似て居る、これは舊時代からある民學の一つをば改隸後改竄したもので、多くは設立者が教師を兼ね、最初は修業年限や教科目生徒の年齢等は區々で一定しないし、設備教授法管理等も甚だ不完全であつたから、明治三十一年に書房義塾規則を發布して地官廳をして監督させ、教科目をも漸次公學校に準じ、成るべく國語と算術を加擔せしめたが、大部分は漢文に依る讀書教授であつた、大正十二年六月から私立學校規則を準用することとなり面目を改めた、而して改隸後は一時盛況を見たものの、公學校教育が普及された結果、漸次減退の傾向を示したのも當然のことであらう。臺北市内には現に尙艋舺大稻埕に十六箇所あるが、多くは神佛廟内



の一部か、民屋の一部分を供用して教授して居る。

臺北市内の教育機關は前述の如く、市立小學校七校公學校十一校の外に、師範學校附屬小學校一校附屬公學校二校があり、中等教育には州立中學校二校、高等女學校三校、實業學校二校、師範學校二校があり、專門學校は醫專高商の二校と大學專門部があり、高等普通教育として七年制高等學校があり、その他醫師木村謹吾氏が私人經營したのを、昭和三年四月から州立とした臺北盲啞學校（大龍峒町）の外に各私立學校があり、臺北帝國大學も開校して學系が全く整備された。現行の學制は大正十一年二月に制定したのを原則とし、内地の學制に則り唯だ初等普通教育に國語を常用する者と否とで小學校公學校の別を設け、師範教育でもこれに準じ制度を定めた特例があるのみで、その他は内地と同一である。但し教員俸給は内地と異り、小公學校は州費より中等學校以上は國費を以て支辨されて居る。臺北市としては小公學校の施設を行ひ、最近（昭和五年度）までに教育費累計經常部二百八萬四千餘圓平均二十萬八千餘圓、臨時部百六十五萬千餘圓平均十六萬五千餘圓を支辨して、視學學校衛生の各機關を整備し、新時代の教育に順應すべく



大に策勵して實績功果を收めつゝあるが、尙毎年夏季には市内小公學校生徒有志を基隆淡水の兩地に赴かしめて臨海教授を行ひ、秋季には圓山運動場（以前は新公園）に於て聯合運動會を催して居る等、或は講演會唱歌會等各種の聯合の催物を屢々行ひつゝある一方市教育會があつて市内の各小公學校職員の講習會體育會さては講演會等、これ亦た種々の催物を行つて、研究と體育の奨勵に努めて居るが、この多端な市の教育施設を後援すべく、臺北市教育後援會が創立されてそれ〴〵機能を發揮し、市の教育事業の進展に盡力して居る。而して尙この他に市の社會教育としては、公學校卒業生に二年間人格的教育を施し善良な公民健全な國民を養成すべく、臺北州に於て開始された青年教習所は龍山と太平の二校内に在り、現に十一人の職員と九十八人の生徒があり、國語講習所は市設として老松日新兩公學校内に置かれて、國語の講習を行ひ良成績を示して居るが、更に一般市民に國語を普及し風俗の改善と生活の向上とを圖り、善良な國民としての資質を充實すべく、臺北州同風會聯合會の下に臺北市同風會を組織し、既設の大稻埕萬華大龍峒朱厝崙大安東園の各同風會を統一として、これを支會として教化の事業進展を策



勵し、漸次母國の國風に親しましむる方針の下に獎勵活動しつゝある、然し處女會は他の地方には開設されて居るが市内にはこれを見ないが早晚設けられやう。尙少年團があるが當今は各地にこれが組織されたが、臺灣に於ける最初のものは、大正十四年六月樺山小學校生徒に依つて組織された樺山少年團である、事務所は樺山小學校内で、同十四年十月少年團日本聯盟に加盟して居る、團員は樺山小學校生徒で、四隊十六班百六名、普通訓練野外訓練野營班會集班長又は指導元會議等の事業を行ひ、内地見學や大震災記念非常召集、各種のハイキングや積善演習竝に奉仕作業を催して大に活動し、制服姿の勇しい團員の活動振をば屢々見ることが出來、大に良好の成績を示して居る。

研究機關としては、督府の中央研究所と、殖産局主管の商品陳列館とがある。何れも臺灣の産業開發進展に關する調査研究機關で、從來は各種の試験場が各地に設けられ、研究調査を行ひ貢獻する所が多かつたが、明治四十二年四月に官制を改正して、中央研究所なる一獨立機關の官衙とし、從來所在の各種試験場を統一したが、これまでには種々の變遷があつたのは勿論である。現在は中央研究所と稱せられる建物は、臺北醫院の



東、三線道路に面した幸町に在り、此處には工業部と衛生部と庶務課が置かれて居るが、農業部は臺北帝國大學の南隣地富田町に在り、舊農事試験場であつたのを改稱したものの、林業部は南門町の苗圃として設立され、その後植物園と改稱した園内に在る。而して商品陳列館も植物園に在るが、この建物は、大正五年共進會開催の時の貴賓館で、翌六年六月商品陳列館として開館し、平常は館内に南支南洋の貿易參考品、島内の生産商品並に内地の商品と參考品を陳列して一般無料で縦覽を許し、南支南洋内地との商取引の發達、商品の研究や産業智識の普及等に努め、一方これ等に關する研究會や講習會が屢次開催され好果を示して居る。

### 向上した讀書熱と趣味と研究

…向上した趣味と盛な讀書熱…利用の多い圖書館と博物館…

婦人の趣味と讀書と兒童…研究熱の勃興と學會…

臺灣の文化向上進展は、改隸後各方面に於ける顯著なる開發に伴ふて著しきものがあ



り、教育の普及は向學心の勃興を促す一方、一般人心が健實となり智識慾を増加したことも夥しく、社會教育や社會教化の諸般の施設改善は、内地人のみならず臺灣人にも、社會人としての行動の上や生活の上にも變遷を見、内地人側は領臺當初より數年間の如き、植民地稼きと云つた氣風もなくなり、眞面目な生活と圓滿な家庭とが見られ、新しい人々も多く、時代に則し時勢に順應した生活活動が行はれて面目を一新し、自然趣味の上にも變化を來たし向上を辿る一方、讀書熱が盛になつて來たことは、近時著しい現象と云つて可い、又た臺灣人も生活が自然に向上する一方、内地人との接觸密になつた結果、老人その他一部の頑固な連中が、例の舊慣墨守の弊に陥つて居る以外は、これも時勢に順應して、新傾向を示すことが著しく、彼等の趣味の上に於ても、大に新時代が生んだ現代的なものが取入れられてあつて、幾分支那的色彩は減退するに至つたばかりか、教育教化の影響を受くることが夥しいので、向學心の勃興を促したのみでなく、一般に智識慾が旺盛になり、對岸即ち南方支那文化の影響を受けることなく、我母國の文化の影響を多大に受けて、従つて新しい現代的氣分が濃厚となつて來たことは、各方面



に於ける彼等の生活の上やら活動の上やらにこれを例示して居る。恁う云ふ工合で殊に臺灣人でも若い所謂新しい人々の間にはこの新傾向が著しく、從來は殆んど上海邊で印行された、支那の圖書や雑誌のみを讀んで居たのが、國語國文を解する人々が多くなつたので、内地や臺灣等で刊行の邦文圖書や雑誌を讀むことが盛になつて來た如く、その他各方面に見られる新しい現象は、多く内地人のそれに似たもので、餘程進んで來たものである。殊に公學校卒業以上の所謂若い人々の間には、恁うした事實は夥しく認められて來たが、又た内地人間にも一般に研究と云ふことが盛になり、下品な趣味は漸次滅失して、高尚な趣味が多くなつて來たのも事實である。内地人側では古い時代は兎角酒色の樂みが最多く、圍碁將棋やその他花合戰等の勝負事が盛であつたのが、近來は恁うした事もないではなく、圍碁や將棋はさすがに優勢だが、その他の勝負事は漸減して來たし、餘り以前の如く酒色の快を最上する等の低級なものも尠く、各種の蒐集道樂や文墨の戲事や風流な韻事や、音樂美術謠曲と云つた高尚な趣味が盛になつて來て、讀書熱の隆盛と共に、清く明く美しく人々の心がを潤ふて居る。臺灣人も一般に讀書熱が盛な



一方、種々の社交機會が出来、研究に興味に會合し、現代の文化を吸収するに努め、内地人と共に趣味の生活に入らんとする向も多くなつた。然しまだ全部が然うでなく、これは極めて一部の人々で、新時代即ち改隸後の教育を受けた人々や、その他有識者間の人々のみで、尙大多數を占むる人々は、依然舊套を脱せず趣味に娛樂に、總て傳統的な彼等の俗習であるものを行つて居て、新しい進んだものは行はれない。これは舊慣墨守の弊甚しき支那民族であるからであらう、さは云へ漸次舊套を打破しつゝ、新しきに進みつゝあつて、内地人同様に撞球も麻雀も盛に行はれるし、尖端なモーダンな男女連は、かのダンスのお稽古に、暑い夏を意とせず汗を拭きつゝ、ステップを踏んで踊つて居るのが尠い、これなどは全く驚へべき變り方で、寧ろ極端な變化は内地人より臺灣人の方が甚しいと云はれて居る。而して彼等の青少年に對しては、新時代の教育教化が施されて居る結果、内地人と相接觸しつゝ、漸次歩み寄つて、時に同一なことも行ふ場合が多く、この場合は合同して行ふが、その間彼此の差が些少も認められぬほどである。従つて恁うした男女の生活や活動の上に於ても、餘程改善されて來て老人連は全く驚いて、



その進歩振に嬉しがつて居るとか、兎に角内地人は勿論臺灣人も、何れも趣味生活の上に改善が見られて、眞面目な健實振を示すことが多く、一體に向上したことは事實であると共に、讀書熱は實に驚くばかり旺盛となつて來たが、殊に島の首都たる臺北人に就いては、これ等の傾向や事實が一層顯著であつて、喜ぶべき現象の一つとすべきであると思ふ。

社會教育の一つである圖書館と博物館とが、近來大に利用されて來たのも、一般に趣味の向上と讀書熱が旺盛になつたのが一因であると云ふべきである。臺北には督府圖書館がある以外に圖書館は設けられてないが、各學校には圖書室があり、小公學校にも兒童文庫があつて、何れも適當な圖書や雑誌を備へて、學生や生徒兒童に閱讀させ、會社銀行その他の俱樂部にも圖書雑誌が備付けてある。臺灣には漸次圖書館が設立されて、今や各地方に大小の圖書館があるが、總督府直轄のは臺北のみである。臺灣總督府圖書館は大正三年四月開館したが、以前に東洋協會臺灣支部附屬の臺灣文庫があつたが一般閱覽に供しなかつた、而して圖書館は現在の地(書院町)に彩票局として建てられた建物が



殖産局所管の博物館として使用されたのを、記念博物館が竣工移轉と共に、此建物を充用して臺灣文庫の圖書は勿論幾多の寄贈購入圖書雑誌を藏書として、通俗圖書館として社會教育の一つとしての使命を果すに努め、現に藏書は和漢洋書十二萬冊で、臺灣關係の貴重な古文書や得難い珍書等も多く藏されて特色を示して居る。而して漸次利用閱覽者が増加して、常に讀書子や學生が席を滿し、考究研學に熱中して居るのみが、婦人や臺灣人の閱覽者も非常に多くなつて來て、最近（昭和四年中）閱覽者は十六萬六千四百人の上つて居る。而して大正十一年九月からは巡回文庫を地方に回送し、又た一面館外貸出をも開始して、これが活用を獎勵し便宜を與ふる一方、大正五年七月から兒童室を設けて、兒童の讀み物を閱覽に供ふるのみか、時々やお話の會を開き館員がお話を試みる等、非常に努力するが、更に毎火曜日には臺北放送局開設以來、館長や館員がマイククロフォンの前に立つて、新刊圖書の紹介をラヂオで放送し便宜を與へて居る等、圖書館は大に利用されて居る。博物館は明治四十二年に始めて設けられたが、既に明治三十一年頃文武町の現臺北第一高等女學校の敷地の一部、北隅の所に在つた建物を利用して、貧弱なが



ら臺北の物産を陳列して臺北物産陳列所を設けたが、これが博物館を縮小したものであつた。然しこれは永續せず終つたが、明治四十一年十月に縦貫鐵道會通式が舉行され、閑院宮同妃兩殿下御來臺の砌、督府は産業的標本を一堂に集めて臺覽に供するため、彩票局廳舎として新築した現在圖書館の建物を充用して、殖産局附屬博物館として常設標本室の如きものを設けたのがそもぐの最初である。爾來内容を改善して、博物館的施設をなして博物館として公開して一般の縦覽に供したが、その後大正六年五月別に商品陳列館が出来たので、殖産局關係の標本は舉げて陳列館に移したので、更に他の標本を蒐集し、蕃族歴史動植礦物の各部の資料を蒐集陳列して公開無料縦覽を許したが、大正九年十月内務局の所管であつたのを文教局に移管し、社會課長が館長兼任して今日に及んで居る。而して現在の建物は、兒玉總督後藤民政長官在任中の治績を記念すべく、當時の民政長官や其他の人々が發起で全島官民有志の賛同を得、記念造營物建設委員會を組織し、官民の醸金に依り出来たもので、希臘ドローツフ式二階建地下室白聖館で、この建坪五百十坪、大正二年三月起工同四年四月竣工、工費二十七萬三千餘圓、竣工と同時に



に督府にこれを同會から寄附したので、彩票局を充用した博物館を此處に移した。それ故に同館階下兩側には兒玉後藤兩氏の銅像が置かれてある。臺北驛の南方真正面に當つて、堂々たる白堊館がこれで、立派な建物は新來の人を驚かして美觀壯觀を呈して居るのみでなく、臺北名所として必ず訪づる所となり、畏くも攝政宮殿下を初め奉り御來臺の各宮殿下には玉歩をこの館に運ばれ御覽になつたばかりか、誰でも來臺する人々は必ず訪れて蕃族歴史の珍しいものやその他蒐集されて居る資料の特色あるのを賞賛し裨益する所多く、又た島内各學校學生々徒兒童は、臺北の地を訪れる時はこれ亦た必ず此館を訪れて見學するのが常例となつて居る。又た時々この館を利用しては繪畫展覽やその他各種の展覽會が開かれまた講演會等にも利用されるし、博物館當局も種々内容を絶えず改善して、博物館としての内容充實に努めて居る。土地柄とは云へ、種々の事情のためではあるが、圖書館と云ふ社會教育の一事業たる仕事をなす建物が、種々の事情が原因して、一擡千金を賭す彩票の事務を扱ふ廳舎たる彩票局の建物を充用するなぞ、縱令新築しただけで一度も彩票事務を扱はぬとは云ふものの、彩票局が圖書館



とは、いさゝか妙なコントラストだと思はれて可笑しい、されば圖書館としてのこの建物は兎に角不便極まりないので、何れは改築か新築されることゝ思ふが、圖書館當局もこの希望があるとか、それは然うであらうと合點される。

社會の進歩と云ふべきであらう、婦人の趣味が内臺人共に現代的に進歩したことで、内地人の婦人も眞面目な主婦として新時代に順應した家庭を營みつゝ、傍ら社交上にも變遷を見せ、かの灣妻やそれに類した風の婦人が家庭に見なくなり、新教育の女性の時代が到來したので、女子の生命とも云ふべき、衣服や装身具さては化粧品等々から身廻の持物まで、兎に角現代文化が生んだ、内地の流行を趁ふ傾向が著しく、日本髮結より美容術が歡迎され、洋風の髮結びが目立つて來たのみか、夏の暑い折柄は洋装の軽い服装が、若い女性の間に移しく見られる。而して趣味としては、生花や琴の類が盛になると共に、洋樂が非常に流行されて、洋樂を研究する女性が多く、上流家庭にピアノがない所がない位、音樂會も恣うした女性で滿員盛況、かのソプラノを嬉しがり、ベトヴェンの作曲を愛好すると云つた工合、管絃樂やピアノ、ヴキオリンの彈奏を傾聽して、



アンコールを拍手を惜まない、加之近時新舞踊も大流行をすれば、童謡民謡も唄ふと云ふ状勢で、明る朗かな所を見せる女性が尠くない、臺灣人の婦人も時勢に動かれ進歩したことは頗る非常なもので、元來良家の女子は、所謂深窓裡に在つて淑かさを見せたのが、今は若い人々は我家を出て、社交に努め、服装も上海流行型で内地婦人の一部にも見る斷髪が、可なりモダンガールやマダムの間流行して居るし、洋樂を歓迎する人々も多く、琴さへ彈ずる女性もあれば、若い女學校出身者間には和服を着るものもあつて、裾模様の丸帶姿を見せる二三があるが、何れも好く似合つて美しい優しい日本婦人になり切つて居る。而して彼等若い女性の間には刺繡は依然流行するが、活花や盆景もぽつ／＼行はれて來た。それに特に嬉しいのは、繪畫の稽古が盛で作家としての優秀な前途を囑望すべき人々が、漸次多くなつて來たことである。然し尙老人や中年者さては中以下の家庭の婦人に於ては、依然として舊態を脱しないで居る、けれどもこれ等の婦人は、我愛子には時代に順應した趣味や嗜好を認めて、彼是と云はぬのみか愛兒に着せる着物を和服にしたり、日本物の布地をば用ゆるのが著しくなつたのも一つの變遷である。



而して兒童は内臺人共に、學校教育や社會教育の普及進歩に連れ、一般に讀書熱が旺盛で内地や臺灣で刊行された少年少女間の讀物、圖書や雜誌が盛んに讀まれるが、雜誌を讀むことが殊に盛になつた。従つて内地人の大抵の家庭で兒童のある家には、恁うした讀物の二三が買はれて置かれぬ所がなく、臺灣人でも中以上の家庭は内地人同様だが、それ以下の家庭では、學校の兒童文庫等の書籍を借讀して居るのが多い。而してこれも學校教育の普及であらう、内臺人共に兒童の遊び方が大分異り、野球や庭球等の運動の眞似事を行つたり、唱歌を唱つて遊んだりする、殊に恁うした唱歌を歌つて遊ぶ臺灣人の女兒が街頭に多く見るのも、時代の動きに伴ふ變遷の一つと見て可い。それに玩具類もなかく進んだものも多く、これが選擇には兩親や上長殊に母親やその他の親しい女性か、非常に注意を拂ひ考慮するの傾向が著しく、教育的なよりは趣味的のものが喜ばれ、美しい朗かな氣分を養ひ得るものと求めらるやうになつた。臺灣人間には玩具として見るに値するものが殆んどなかつたが、改隸後内地人に接することが多くなり、これ等の影響を受けて漸次内地人が求むるが如き玩具類を、兒童に與へるやうになつて來たのも



新しい現象と云つて可い、以上の如き事實や傾向は、島の首都臺北に於て見らるゝ所で、他の都會地では内地人側は同様であるが、臺灣人側は恚うした進んだ傾向は容易に見得られず、況んや田舎に於ては兒童は昔ながらの儘であると云ふ状態である。

教育教化の普及は、文化の向上進展を促したことは多大で、全く新しい現代文明が各方面に取入られて、人智の開發されたことは非常なものであつた。従つて趣味の向上變遷を見た一方、研究熱が旺盛となつたのも近代であつて、殊に教育界の進歩發展は驚異に値するものが多いと云ひ得る。而して社會教育としては、多數の臺灣人が殆んど無學の狀況であり、臺北もこの例に洩れないので、各地方と同様に我國民精神を徹底せしめ國語を普及して、彼等の生活向上を計り善良なる國民たらしめるため、これに多大の努力を拂ひ、國語普及獎勵の手段として、國語講習會國語演習會ラヂオ放送を試み、臺北に於ても常設的或は臨時的に講習會を開催好果を示し、國語演習會には成績優良會員を選出して稱賛したことも屢々であり、國語普及の夕にも出演してラヂオの放送を試みて居る。更に公學校卒業生指導講習を行ひ、一般教化としては映畫とラヂオを利用して



居るが、市内には私設團體として希望社や修養團等の教化團體が、近時著しく増加して思想善導その他修養行事に努力盡瘁して成績の見るものが多い、而して社會教育施設を獎勵しつゝある團體は、何れも臺北に在つて臺灣教育會と臺灣教化事業獎勵會、齊美會の二恩賜財團と、總督記念財團とがあり、別に臺北には臺北州同風會がある。臺灣教育會は明治三十四年三月創立既に三十年を經過し、その間幾多の變遷があつたが、概して順調に發達して督府の施設と相俟つて臺灣教育界に多大の貢獻をなして居る。事業としては教育功勞者表彰や芝山巖祭典を行ふ外、新渡臺教員講習會や訓導講習會、農業工業各講習會娼母講習會、中等教員研究會國語講習會、體育講習會女子教員講習會の各種講習會、さては學力向上講習會小公學校々長講習會、衛生音樂の各講習會も開いて居るが、これ等各講習會は臺北に於て夏期に催されて居る。尙同會は機關雜誌『臺灣教育』を月刊する外、各種の出版物を刊行廣く販賣して居るが、更に農業教育實業教育に對して獎勵助成をなし、全國の中學校長や師範學校長、實業學校高等女學校長や盲啞學校長の各會議等の臺北に開催された際は、後援贊助して多大の便宜を圖り、種々盡力する所が尠く



なかつた。加之大正十五年から三箇年に亙つて教育調査を行ひ、又大正五年以來名士に乞ふて屢々講演會を催したが、濟美會館(龍口町)を經營し教育關係者の便を計り映畫を購入或は製作して府内映寫や出張映寫をも試みて居る。殊に特筆すべきは臺灣美術獎勵のため昭和二年から臺灣美術展覽會を毎年秋開催すること、この出品は東洋畫西洋畫の二部門に分ち、島内作家の出品を内地及臺灣よりの審査員の審査を経て入選畫を陳列公開縦覽せしめることとして、第一回を樺山小學校講堂に同年十月開催して盛況を見上野の秋を偲はせ、臺灣生活に一つの潤ひを感せしめて好果を收め、爾來毎年秋開催して居る、本會の事務所も督府内に在つたのが、最近(昭和六年四月)美しい立派な教育會館(龍口町)の竣工と共に其處へ移轉した。恁うした工合に種々の施設が見られ、各種の講演會が開催されて、種々有益な講演を聽き得るやうになり、大に智識的に恵まれる所が多かつたが、昭和三年臺北帝國大學の開校を見、大學の教授その他の學者を迎へたので、自然的に南方土俗學會や國文學會心理學會等各種の學會が多く、從來臺灣博物學會やその他の學會もあつたが、更に一段と研究熱が勃興し、篤學の人々が時々會合して、大に



各自の研究發展をなし、機關雜誌さへ刊行して學界を漸次賑ひを呈するやうになつて來た。それは一面大學生や高等學校の學生その他が多くなつた結果にも因るが、帝國大學の出現が、その動機となつたことは明かで、臺灣のため欣幸とすることである。

### 講演會座談會とラヂオの放送

…盛になつた講演會と座談會…聽衆の種類と女性の人々…

童話口演とお話の會…開拓されたラヂオ放送…

文化の向上進展の結果であるとも云へるが、智識階級人の多くなつたのにも因ると思はれる。近時講演會がなかく盛に催され、聽衆も全く大衆化したのを見る一方、座談會も時々各方面に開かれて、研究的に批判なり意見が吐かれて賑かである。講演會は從來時に應じて折々開かれたが、それは多く内地から來臺する名士や學者に請ふて、一席の講演をして貰ひ、或は一般人士の爲め、或は特種人士のために聽講させたもので、東洋協會や南洋協會の各支部や、臺灣教育會等が屢々主催の下に開催されたが、その他各



種團體でもこれを試みたものである。而して何れも臺北に於て開かれたが公會堂を持たない故、常に學校の講堂が多く會場とされたもので、東洋協會や南洋協會の各支部臺灣教育會の主催の講演會は、一般人士のために公開して來聽を歓迎したが、各種の團體では關係者のみに限る場合が多く、而も多くの場合は専門的の講演であつた。臺灣紹介の宣傳の功果と交通至便になつた結果、大正四五年頃からは内地から名士學者やそれ／＼斯道の權威者が渡來さるゝことが多く、その都度努めて恂うした人々を演壇に立たせ、一般の人々に來聽を勧誘して、講演會を開催するやうになり、今日まで各種の講演會が臺北に開催されたことは、實に夥しい回数に上つて居る。而も従來も女性に對する講演會は多少あつたが、女性も時代に目醒めて來た當今愛國婦人會支部が主催で、この種の講演會を催した位で多くない、然し近時は通俗家庭講演が大に歡迎され、女性向の講演者或は女子教育者等の來臺を見るに至つて一層盛になつて來た。尤も講演會は基督教々會の主催の下に、古くから宗教講演は試みられたのみでなく、佛教側でもこの種の會合はあつたが、これ等もこの方面の通俗的一般講演會を催すことが多くなり、従來餘り



好まぬ傾向を見た臺北人士なので、主催者側は聴衆を集めるに相當苦心をしたものであつたが、今は開催を發表すれば求めずとも聴衆が集まり、殊に講演者が内地の雜誌新聞等その他で知られて居る人ならば、開會前に會場は聴衆を以て滿され、會場外の廊下やその他に溢れるの盛況を呈することが珍しくなくなつた。以前は講演など聴くのは、窮窟で面白くないとあつて、圍碁や撞球に夜を過した者が多かつたし、晝もその儘家に寢轉んでと云つた傾向であつたのが、時代は進み智識慾も増したのか、講演會に出かけて名士や學者の語る所説く所を傾聽して、利する所があつたら満足して喜ぶの風が著しくなつた。然し政談演説は、以前に辯護士等が時事問題に就き催したが、一時中絶して所謂講演會が盛になつたが、最近は新聞雜誌に執筆する筆の人が、時に辯護士その他を加へ、時事問題の批判など説述して演説會を開いて氣焔を吐くことが多くなつた。臺灣人側には、從來政談演説會も開催されず、通俗の講演會も催されなかつたし、内地人側の主催のこれ等講演會に行つても、國語を解しないから一向判らぬので、來聴者を見なかつたが、昨今は中以上の人や智識人の新しい若い人々は、國語を解する人も尠くないから、



これ等の人々は内地人と共に聴衆として、聴取する者が漸次増加して來た。然しかの文化協會その他の團體の人々は、政談演説を試み或は講演會を催して、主として政的運動や社會運動に關するものを論述するので、治安上から甚だ屢次辯士が中止を喰つたり、演説會の中止解散を命ぜられることは今更に記するまでもない。而してこれは主として、文化協會その他が本據を大稻埕に構へて居るからであらう、多くの場合大稻埕の地で開かれるが艋舺にても時々開催されるのであつて、聴衆は一般臺灣人であるが、中以下の労働者風の者が多數で、智識階級の中以上の人々は餘りに無關心であつて、來聴者は尠いと云ふことである。恁う云ふ工合に講演會が盛になり、何れも相當好成績を收め、市民の利益する所が多かつたが、恰も大正十五年二月建國祭を初め行ふに際し、臺北市に於ては市民講演會を催すことになり、爾來内地から來臺した學者や名士その他權威者に請ひ講演を依頼する一方、臺北在住其他島内の名士學者で來北した人々にも依頼して、大衆向な通俗講演會を催して好評を博したので、隨時にこれを開き今日に及んで居るが、尙東門町の曹洞宗別院に院主であつた水上老師が發起の、國民精神振興を目



的とした國民精神振興會の名の下に南門公會堂(龍口町)に毎月開會精神修養の講演會を開いて居る。尙乃木講は毎月十三日に講演會を催して修養運動に努めて居るし、其他恂うした會合の講演會は市内隨所隨時に開催されるので、その數は詳らでないが多いことである。それに内地で近時盛に行はれて居る座談會が臺北にも時々催され、今は中止の姿であるが、臺灣教育會の主催で濟美會館に毎月二回位座談會を催し、廣く來會者を求め、各種の問題に就き、座談的に研究の發表や意見の交換を行つて居たが、濟美會館の建物が高等女子學院で使用するに至つたので中止となつた。雜誌臺灣實業界では、毎月座談會を催し、各方面の人士を集めて意見を聞き、同誌上を賑はして好評を博して居るが、その他にも隨所隨時に同好者相會して、好きな事や研究して居る事等々に就いて、意見の交換や研究の發表を座談的に行つて、互に利する所があると云はれて居る、而して漸次この座談會が各所に行はれるであらうが、今では然う流行はして居ない。

臺灣が進んだのであらう、臺北が進んだのであらう、從來餘り聽衆を得なかつた講演會も屢次開催される一方、内地から來臺する名士學者や權威者と云はるゝ人も、常に



演壇に立ち馴れ、殊に昨今は大衆向の通俗的な講演會が大に行はれて居るので、恁うした人々も大衆を聽衆とする講演會での講演振は、なか／＼巧に趣味の多き感興深い講演を試み、多少専門的に傾くものでも、ユーモアを交へて笑ひを呼ぶ等、敢て何の誰と内地で好評の人を云はずとも、大抵がこの流儀で試みるから、從來兎角窮窟な思ひして聽くものとされ、かく思つた人々も、漸次講演會に對する趣味とでも云はうか、興味も覺え而も聽けば利する所が尠くないので、大衆向の講演會には、もう主催者の誘引にも及ばず、開催を發表すれば續々來聽者が來ると云ふ状態となつた。然しこれは内地人側のことで臺灣人は然うは行かず、智識階級の新しい人以外には其姿を見せない、これは多數を占むる中以下の人々は、國語を解しないからである。而して聽衆も以前は多く官廳に通勤する人で、智識階級でも學校出身者であつたが、今では講演者に依つて多少差異はあるが、一般的になつて來て、官廳や會社銀行の通勤者は勿論、市民の誰彼と云はず多種多様で、學校出身者以外に老人もあると云ふ位で、殊に近時目に立つのは、女性の聽衆が男の間に交つて居ることである。これは婦人雜誌が廣く多く讀まれ、家庭人と



しても、恁うした名士や學者の通俗講演を聴くと裨益する所が多いと覺つたからで、若い女性のみでなく中年以上の婦人が姿を見えて、會衆を彩るやうになつた、けれどもまだ多いとは云はれない。これは上流の婦人や若い女性は兎に角、中以上の婦人で主婦である、姑と云つた年寄が家に居ないのが多いから、子持の人は外出が困難な故であらう。とは云ふものの、婦人のみを聽衆とする講演會には、なか／＼多數の女性が來聽するやうになつたのも、近頃喜ぶべき現象である。ところが臺灣人に依つての講演會の聽衆は、これはまた中以下の人々で、女性は一人もないと云つて可い、而も聽衆は勞働者や商店等の使用人と云つた連中、智識階級の人や中以上の人々は餘り姿を見せない、これは講演會そのものを好まぬからであらうが、概して彼等は講演會に行くことと云ふことが從來から尠く、恁うした人々は、別に眞面目な道德とかその他修養的なことか、歴史文學に關する講演會が極めて稀に開かれた際は來聽する位に過ぎない、だから臺灣人は講演會には無關心と云つても可いと思はれる。

然しながら兒童を聽衆する童話の口演が、近時なか／＼盛況を呈して來た。所謂お伽



嘶の口演である。これは小公學校や幼稚園の内臺人兒童で、何れも兒童は悦んで聽くのである。これが最初は大正五年二月例のお伽の小父、童話界の元勳として普く知られた巖谷小波氏が渡臺し、臺北を始め各地で童話口演を試みたのが最初で、それ以來久留島武彦氏やその他内地の童話家が屢次口演すべく來臺した一方、臺北でも童話を口演する者も出て、時々これが口演を試み或は口演會を開いて兒童を喜ばして居る外、基督教の臺教會堂で開く日曜學校や各佛教寺院の日曜學校でも、何れも童話を口演して居るが、臺北童話會の連中は、市内の各小學校にも出演するし、小學校や幼稚園でも教員や媒母で童話を試みて居るが、殊に公學校では國語教授の聽き方や話方の上に効果があるとして、時々お話の會或はお伽會の名目の下に、教員や兒童が童話を口演して大に利用しつつあるが、漸次盛になつて行くのは嬉しい。それに臺北放送局開始に伴ひ今まで隠れて居た學校教員や同好者が、盛にマイクロフォンを通じて童話を放送して、子供の時間を賑はして居る。それに最近では、單に童話口演のみでは淋しいとあつて、慙うした口演會の際には、童謠の獨唱や合唱さては童謠と唱ふにつれて踊る新舞踊さへ加へる傾向が出



て、來て、兒童藝術の普及進歩に努力精進することが盛になつた。而して臺灣人の兒童は内地人兒童に劣らず、童話を聽くことが非常に好きなので、童話口演は彼等を娛ませ利益する所が多く、學校教育の一助として認められるやうになつた。但の低學年生はまだ國語を解する力が貧弱だから、大抵内地人が口演する場合は三年以上として居るが、臺北の公學校兒童は他の地方よりは、國語理解力が強いのか話がよく判り、内地人兒童に對するのと、多少氣分氣合は異なるが効果を見ることは同一である。而して殊に人意を強くするのは、臺北の臺灣人中にも同好者があることで、無論少數人だが國語を以て口演をする以外臺灣語でも試みて、非常に歡はれて居ると云ふことである。これも十餘年前からの新しい事ではあるが、この盛況を見るに至つたのは僅々十年前頃からで、他の運動競技の如く異常な盛況をも見ず、華かではないが、徐々に開拓しつゝあつて、學校教育と相俟つて効果を得べく、童話普及運動は十年以來繼續して、眞面目に熱心に、理解ある人に依り研究も重ねられ、内地の斯界と歩調を一つにして連絡を取り進みつゝあるから、やがては益々盛に社會からも一層認められることと信ずるのである。



世界の距離を短縮すると云はれた無線電話即ちラジオの放送が臺灣にも開始されて、J F A Kの臺北放送局から、日毎夜毎ニュースに講演に、洋樂邦樂の妙なる音色等々が、擴聲機を通じて各家庭に街頭に放送されるやうになり、居ながらにして内地は勿論遠く米國からも肉聲が聞かれると云ふ、驚くべき文明の利器の恵に浴することが出來、慰安に報道に教養に、我等臺北市民は他の地方人士と共に非常の裨益を得て居る。ラジオの放送事業は最近文明の所産で、内地で放送開始された當時から、臺灣にも開始されるやう希望があつたが、各方面の種々な事情で果されず、大正十四年六月始政三十年記念祝賀として臺北に展覽會開催の際、實驗的に會場の一部で放送を試みたが、これが臺北否臺灣でのラジオ放送の最初である、その後昭和三年十一月に督府遞信部で實驗放送として、一キロの放送を開始して、聴取料を徴せず一般に聴取を許し、内地中繼や地元放送を毎夜行つて好評を博し、簡単な鑽石受信機で臺北市内は充分聴取し得られ、居ながら遠き母國の放送が耳にするを得、ファンならずとも一般人々は喜悅し文明の利器の難有さに感謝した。その後更に御大典記念事業として十キロ放送の施設を行ひ、臺北新公園内にモダンな



建物を建築し、此處を演奏所と事務所に充て、海山郡板橋街に發信所を置き、新公園で演奏するのを有線で板橋に送り、同處から放送することゝし、内地からの中繼は淡水受信所で受信し、有線で一度臺北に送り更に板橋より放送することゝした。この新放送施設は昭和六年二月に完成したので、新に臺灣放送協會を創立して、放送に關する一切を同協會の手に移し、十キロ放送を行つて居る。而して協會の手に經營されると同時に聽取料を徴し、放送番組の編成に苦心努力し、毎朝午前六時から夜は十時まで放送して居るが、朝早々のラヂオ體操に開始し、夜のニュースに終るその間、主婦の時間としては料理献立、晝間娛樂時間にはレコードに依る演藝娛樂の浪花節や端唄義太夫三曲洋樂等々、天氣豫報は朝と正午と夜の三回の外、警報の報道を怠らず、市役所發表の小賣値段の發表、家庭百科問答や經濟ニュースがあり、又た内地に於ける運動競技やその他特種の催物のある時は、中繼放送を行つて聽衆に満足を與へるし、夜は子供の時間を設けて童話や少年少女の課外講話、音樂や童話劇を放送し、講演としては名士學者さては權威者に講演を、或は内地中繼に或は地元放送で聽かしめ、演藝娛樂時間には内地中繼に續いて地



元放送を行ひ、ニュースとしては放送局編輯の分と臺北ニュースを放送し、その他官廳や團體の公示告知事項や職業紹介事項等々も扱ふて居る。特種のものにはJ F A K子供新聞や夏季復習時間、國語普及の時間語學講座圖書館ニュース等の教育關係のものや、廣く一般の聴取を希望する全國放送のものは殆んど中繼しないことはなく、臺北に於て行はれる野球や水上競技や演藝等は、その都度會場から中繼してファンを喜ばせ、人氣を煽つて居るが、臺灣人向としては支那音樂や支那芝居、さては臺灣語での講演に講座を設けるのみか、市内小賣値段は臺灣語でも放送して居る。而して放送局では、地元の放送にも努力して、在臺北の人士や出北した地方人にして、名士や學者その他一藝の士に放送を依頼するのみでなく、來臺した知名の人士には、切に請ふてマイクروفオンの前に立たしめて、その肉聲や妙技を放送させるに盡力して効果を收め、ラヂオ放送の有する慰安報道教養の三大使命を遂行すべく不斷の努力が拂はれて居る。

### 旺盛時代を示す臺北の運動界



…臺北の體育運動の變遷と今日…臺灣體育協會と運動團體…

野球庭球と陸上水上競技…臺北市内競技の運動場と運動熱…

運動即ちスポーツが今日の如く、臺灣各地到る所素晴らしい勢で旺盛になつたのは、大正の末葉頃からのことで極めて最近事であるが、然し今日云ふスポーツなるものは多種のもので以前には行はれて居なかつたが、劍柔道馬術や庭球は行はれて若い人々が立ち働き、端艇競漕も賑に人氣を湧せ、競馬も自轉車競走も催された。領臺前は一向これを見ないが、臺灣人間には支那式の武術が多少行はれた位、運動と云ふべきものは無論なかつた。改隸後諸事整備された時代でも、内地でさへ運動競技も盛でなく、臺灣では僅に各學校で毎年が催した陸上運動會位なものであつた。臺北でも小公學校が増設されてからは市内の小公學校が、小公學校別に聯合運動會を新公園に催して居たが、これがまる人氣を呼び、在學兒童の父兄保護者のみでなく、一般臺北人士間の呼び物とされ、行樂に乏しい土地柄として、運動會は常に大賑ひ大盛況裡に終始したことは、今尙人の記憶に新であらう。攝政宮殿下行啓記念に圓山運動場が設けられてからは、市内小



公學校の各聯合運動會は同所で行はれてその都度非常に盛況を呈し、臺北行事の一つにさへされて居る。劍道柔道が中等男子學校の正科となつて居るが、武德會の臺灣支部に道場があつて盛に武道を研ぎ身を鍛えたもので、同支部は明治三十三年八月設立臺北文武街の廣場今の督府廳舍所在地に柔劍術の道場や馬場や矢場等の演武場を同三十五年十月に建造して、劍道柔術弓術馬術の各部を置き斯道の普及獎勵に努め、後督府廳舍建築さるゝに際し、總てを苗園即ち今の植物園内の一部に移轉して、今日も盛に武道弓術馬術の獎勵普及に努力し、同好者が集まつて練磨に汗をかいて居る。而して臺北市の西に淡水河が流れて居るので、水上競技の一つとして端艇競漕が大稻埕の河岸に行はれ、オールを手にする若者は盛に活動したもので、官廳や會社銀行その他の團體から選手を出して勝負を競ひ、大稻埕は觀覽者で大に賑つたものだが、この北部端艇競漕會は淡水河の河底淤淺その他の事情で、明治四十二年十月開催したのを最後に、基隆港で行ふことになつてしまつた。恚うして漸次運動熱が勃興しつゝある際、土地柄體育の獎勵を緊要とするに鑑み、臺北有力官民發起の下に體育俱樂部が明治三十六年一月に設



立を見體育運動を獎勵して屢次體育運動會が催された。然し競技は今日のそれの如きものでなく、競走や劍柔道弓術馬術の類であつた。然るに一方時勢の進歩に伴ひ庭球が漸次に若い人々の間に行はれ、今日の盛況を致すの因をなしたが、その盛況の兆を見たのは、明治四十一年頃で無論軟球を用ひたもので、各官廳や會社銀行その他の團體人に依つて行はれ、コートも恂うした各團體の俱樂部その他に設けられたが、中等學校の校庭にもコートが出来、學生々徒のラケットを手にする者が多きを加へて來た、かく運動熱が勃興する一方、野球競技が急速度を以て盛になり、早稻田慶應明治の各大學チームや米國の職業野球團さへ來臺して新公園に妙技を見せ、それに刺戟されて中等學校専門學校の學生々徒間には勿論、官廳會社銀行その他の團體にもチームが組織されて、盛に新公園で競技を行つたものである。恂うして臺北に於ける運動熱は盛な勢を以て上昂し、若いスポーツメンの姿が校庭に見られたのか、小公學校にも庭球コートが殆んど設けられ、小公學校の兒童も庭球を試むるまでとなつた。その後今日の所謂陸上競技が行はれ、三線道路を快走するリレー競走には、沿道堵列の觀衆の血を湧



かしたものであつた。この間臺灣人の若い人々も、進む時勢に刺戟されたこと多く、一面學校出身者が増加した等々の原因で、運動熱が漸次盛になり、庭球に陸上競技馬術に内地人と伍して練習して競技に参加するやうになつたが、庭球と陸上運動とに興味を多く感ずるらしく、在臺北の臺灣人の若い人々は、この方面に活動して成績の優秀な人を多く輩出して居るが、弓術や柔劍道には一向參加しない、これは彼等に餘り適當しない故であらう。然し今や中等學校の男生徒は、正科として柔劍道何れかを課せられて居るから、柔道稽古着や竹刀を肩にして通學する姿をよく見るやうになつた。相撲は職業人即ち力士が、東京のや大阪のが屢々乗込んで、相撲興行に常に人氣を湧したが、素人相撲としては、臺北で臺灣神社祭や招魂祭の餘興に、仮土俵で勝負を試むる位であつたが、最近内地で學生相撲が隆盛となつた影響を受けて、學生相撲が勃興すると共に、スポーツとしての相撲が、學生以外の若人の間にも漸次盛となり、血湧き肉躍る若人の肉弾戦が時々土俵の上に見られた。水上運動としての水泳は、土地柄夏の長い暑い所なので、臺北でも夏は幸に南方を流るゝ新店溪の下流を利用し、川端古亭庄（川端町）の川河に



水泳場を開き、游泳の教授して成績を見せたが競泳などは盛でなかつた。夏の長い土地、若人や少年少女を水に懐しむの必要上、設備其他も完全せぬ古亭庄川端の游泳場は、町外れの所にもあるので、市で東門町にプールを開設することになり、又た一方臺北第一師範の附屬小學校や工業商業の各學校や高等學校第二中學校等の各學校にも、プールを設けて水泳術、新しい泳法を教へ、市は基隆や淡水に臨海教授を開き、此處で水泳を稽古させる等、水泳はなかく盛になる一方、水上競技がプールに行はれてこれまた盛況を呈し、成績優秀の男女選手を幾多輩出して、南國に適しいスポーツの一つとして隆盛を示して居る。然し臺灣人は從來水に親しまぬ風習で、水泳などは土地柄の人に似ず行ふものもなく、稽古なぞ試みなかつたから、今でも公學校や中等學校その他に在學するものや出身者間には、プールや臨海教授で泳ぐ者もあるがそれは極僅少數で、水泳を知らぬ者が大々多數であるから、水泳を試むるものは殆んど皆無で、唯だ囀仔と呼ばれる中以下の家の兒童が、濁つた瀦水に浸つて水に戯れて居るに過ぎない。今や臺北市内は少年でも野球や庭球をの運動をも行ひ、小公學校の運動競技も所謂十種競技に準ず



る等、全く驚くべき進展と隆盛を見、正に運動旺盛時代を出現したと云ひ得るばかりか、朗かな明い元氣な若人が、輕裝の姿で活動するを見かけることが甚だ多い。

臺灣に於ける運動熱の勃興、いや臺北に於けるそれは最近に一層著しきものがあつたが、由來臺北は島の首都であり、總てに於てリードする位置にあつたからと、内地人が多く若い人々も尠くなく、學校や銀行會社等の團體が官衙と同じく多かつたので、他の地方に比して運動が盛であつた。云はゞ臺北から他の地方に移り行つた觀がないでもない。既に大正九年十一月臺灣體育協會が新設さるゝ前に、臺北には北部野球協會や臺北庭球協會、陸上競技團體の二葉會等があつて、それと相當活躍して、臺北の運動界を賑はして居たものである。それを合同して臺灣體育協會なる一大團體として、國民身體の健全精神の充實を圖るため、體育を獎勵する目的で法人組織を以て設立、スポーツマンの養成、スポーツの普及獎勵に盡力し今日に及んで居る。無論本部は臺北の督府文教局内に置かれて各地方に支部が設けられ、臺北市にも支部があつて、體育協會の主催の下に、全島各競技の爭覇戦や選手權の爭奪が行はれる一方、各支部主催の下に支部所屬の各團



體をして同様競技を行はしめて居る。而して協會には庭球野球陸上競技水泳相撲球技の六部に分れて居る。庭球は從來軟球のみであつたのが、近時は硬球が行はれて、兩者共盛に行はれ、庭球コートを各所に設けて技術の練習に努め、屢次試合を行ふ外毎年全島的或は臺北州下の選手権の争覇を行ひ、内地にも優秀選手を派遣して居る、野球は市内中等學校及專門學校の争覇リーグ戦が行はれる以外、鐵道部の鐵團遞信部のC B團專賣局の養氣團實業團體の各試合も行はれるし、小公學校の少年野球争覇のリーグ戦もあり、その他内地の優秀チームを招聘島内チームと試合を行ふ等、野球狂時代の今日に適しい活動を見て居る。陸上競技は年々全島的に競技を行ひ、各技の記録も漸次内地のそれに接近し、優秀選手を内地に遠征せしめて居る、水泳は常夏の國と云はれる土地だけに、最も恵まれて居り旺盛になつた、日が淺いに拘らずプールの數も尠くなく、技術も長足の進歩をし、神宮競技にて日本記録に達するものあるのみか、これを破らんとするの勢を示したが、特に昭和四年五月臺北市東門プールでは比律賓の水泳選手を迎へ、臺に交驩水競技大會を華かに催して一般の熱を昂めた。學生相撲は年々數回競技を行ふて居る



泳が、専門學校の爭覇戰以外競技の見るべきものがなく他のものに比して盛ではない。球技は昭和四年から盛になり、殊に臺灣人に適したものの如くで、臺灣人の若い人々の間に盛に行はれて居るのも面白い新しい現象である。而して女子の運動も極めて盛になり、主として高等女學校の生徒間に行はれ、庭球や水泳さては陸上競技、籠球排球等が盛に行はれ、庭球や水泳陸上競技に優秀な選手を輩出するほど技術が進歩し、漸次に内地記録に接近しつゝあるのみか、水泳の如きは新日本記録を示すの勢となつて來たのも頼母しい限りである。而も一般男女學生々徒間には庭球が盛で、選手ならざる者もこれを試むることが盛になつて、元氣な活達なスポーツメン姿が非常に多く見られて來た。この他運動としては登山熱が盛になつた、臺灣は高山國と昔し云はれたと云ふ歴史家の云ふ通り、新高次高の諸山を始め一萬尺以上の高山が四十八座もあつて峻嶺高峰多く、登山家の食指を大に動かす所であつて、既に新高山に登山する者が漸次に増加し、殊に男女學生の登山が著しくなつたと同時に、内地の登山熱旺盛なのに刺戟されて、臺灣にも登山熱が勃興し、遂に大正十五年十一月臺灣山岳會が臺北に設立され、山岳に關する



智識普及登山獎勵を行ひ、屢次新高山以外餘り登攀踏破しない次高山や大霸尖山と云つた峻嶺高峰は勿論、臺北附近の諸山等に大衆登山を試みて元氣を見せて居る。而して内地の上流社會の人々の間に盛になつた、ゴルフも、臺灣に於ても漸く行はれ、大正八年四月に臺灣ゴルフ俱樂部が設立され盛に臺北市内の一流官民その他を會員とし、淡水にリングを所有して、所謂ブル階級人は盛にグラフを揮つて居るが、同所リングには來臺された皇族方の御臨場を辱ふしたこと二三に止まらぬ光榮を有して居る等、特種の運動として旺盛だが大衆的ではない、尙この他に臺北には臺灣ホツケイ俱樂部や臺灣蹴球聯盟があつて、それ／＼その技の普及と發達に努めて居る等、臺北も今や運動旺盛時代を出現して居ると云ふべきである。

臺灣の運動界が旺盛時代を出現したほど隆盛に、血湧き肉躍る若人連がスポーツの精神を體しての活動は目覺ましいものがあり、臺北の運動界は他の地方のそれに比し、古き歴史を持ち、多數の若人を擁して居る土地なので常に旺盛を見て居る、殊に野球は所謂内地でも野球狂時代が口にされ、其全盛を示して居る位の時勢なので、臺北でも大正四



年二月北部野球協會が設立を見るに至るほど、その頃は官廳の各團體が、若い選手を擁して新公園で試合を行ひ、ファンを狂喜させたのみか、早稻田や明治の各大學の優秀チームを招いたもので盛りを見せたがその後衰兆を示して餘り花々しくなかつたが、臺灣體育協會設立を機として復活すると共に、中等學校や專門學校にもチームが編成され漸次盛況を呈して來たが、殊に内地の野球が旺盛となると共に、臺北は勿論他の地方も盛に行はれ、臺北市内でもチームの數も多くなり、一方圓山運動場が出來てからは、球場としては此處に多く試合が開かれたもので、その他學校の校庭でも試合が行はれたが、所謂晴れの場所は圓山グラウンドと云ふことになつた。而して大阪朝日の甲子園に開催の全國中等學校野球大會には臺灣代表選出の豫選大會が、毎年圓山グラウンドに開かれ、臺北市内の愛好者を狂喜せしめ煮え返るほど大人氣で、觀衆はスタンドは愚か場外に溢るゝ盛況を呈し、臺北市内の中等學校即ち一中工業商業が何れも甲子園に出場して、相當の成績を示したので、いやが上に野球熱を煽つたばかりか、大阪毎日の全國都市野球戰の豫選には、臺北が代表として出場する等、臺北の野球界は相當有力の地位を占む



るに至つたが、この他市内一中工業商業の三中學校の爭覇戦もある。而して早大慶大その他内地のチームを招聘して試合も屢次行はれ、今や臺北では野球を語らぬと時代人ではないやうになつて、野球愛好者夥しく、殊に臺灣人も近時愛好する者が、スタンドにその姿を見せることが多くなつた。加之婦女子の愛好者が非常に多く、若い女性で野球を口にせぬ者がない位、試合當日のスタンドには美しい優しい女性の見物が、場内を美しく彩るやうになつた。それに一方少年野球が盛になり、市内小學校では盛に選手の養成に努め技を練り、對校試合を新公園で行つて來たが、最近は全島少年野球大會が催され、市内小學校の豫選が行はれ、新公園は野球ファンで十重二十重に會場は蝟集され、援助に熱狂する状態で、今では臺北の一名物となり盛大に行はれて居る。この野球熱の旺盛に刺戟されて、昔取つた杵柄と云つた工合で、オールドボイス連の軟式野球が行はれ、盛況を呈して、毎年新公園や學校々庭で試合が開始され、これもファンを喜ばして居る。庭球は可なり古い歴史があるも、野球ほど華かでないが、各所團體や學校等にテニスコートコートの設けない所もない位に普及し、選手ならずとも中年者も諸共に若人と共に、コー



トに出でて活動して居る、殊に臺灣人の若人の間にも非常に盛んになり、優秀の選手を多く輩出して居るし、各團體が互に試合を行ふ外、臺北州下或は臺北市内の各團體が、毎年盛に爭覇戦を行つて居るが、常にその會場は新公園内に在るコートが多く使用され、見物も野球ほどではないが可なり夥しく、コートを圍んで人山を築く位で、なか／＼盛況である。而して多數のテニスマントは軟球式であるが、これも最近盛になつた一部人士に依つて行はれる硬球式は、漸次その同好者を増す傾向であるがまだ軟球の方が非常に多い。これはまだ庭球として歴史が新しいからであらう。軟球式でも硬球式でも全島から代表選手を明治神宮競技會へ毎年派遣することになり、豫選會が臺北にも行はれたことがあり、臺北から出場代表選手を派遣したことも尠くない。恁う云ふ工合で庭球は非常に廣く行はれ、充分普及されて居るから、學生でラケットを手にしない者が無い位である。殊に女子は主として高等女學校生徒であるが、何れも盛んに行はれて臺北の高等女學校からは屢々優秀の選手を輩出して居る。陸上競技は近時勃興進展したが、これは各學校生徒及其他の團體干係の人々で、臺灣人間にもなか／＼盛に行はれ、トラック



にフキルドに妙技を見せ、新しい臺灣記録を續出し、内地のそれに大に接近しつつあり。圓山運動場や最近出來た臺北帝國大學運動場で、盛に練習が行はれ競技が催されて居るし、體育獎勵の下に、市内小公學校の職員間にも、庭球や軟式野球さては陸上競技が盛で、市教育會主催で學校教員の陸上競技大會が年々行はれて好成績を見せて居る。水泳競技は東門町に市營プールが出來て以來、頓に盛況を極め、中等學校以上の學生生徒が主として猛練習に技を磨き、競泳は屢々試みられ、これ亦た優秀選手を夥しく輩出し、新臺灣記録を續出する外、内地のそれに接近するのみか、これを破つて新日本記録を出すの勢を示し、土地柄水泳に恵まれた國の人として恥からぬ成績を示して居る、殊に前年催された臺北交驩水泳大會で、比律賓選手を迎へての競技は、大に得る所あり刺戟されたもので、それ以來一層技術は上達されたと云はれる。殊に女子これは主や高等女學校生徒だが、非常に水泳熱が盛で優秀の選手を出し、内地記録に接近するばかりかこれを破るの勢である。加之學校でプールを設けてある所も多く、小學校兒童間にも水泳が盛に行はれて居る。然し臺灣人は水に親しまぬ風習で、寧ろ恐れる傾向なので水泳は餘



り行はれないが、然し漸次水泳熱の旺盛に刺戟され、一方水に親しむ機會を得ることも多くなるので、若い人々も水泳を試むる者が多くなるであらうと云はれて居る。

恁うした運動熱の旺盛、殊に野球の盛況を見る今日、臺北には唯一の圓山運動場があるばかりであつたが、幸に最近臺北帝國大學に運動場が出来て、陸上競技場としては二つある次第だが、帝大の運動場は野球場として適當しないらしい。以前は兎に角野球と云はず總て運動競技としては、各學校の校庭かさもなくば新公園内の東北寄の芝生に限られたものであつた、地積も野球場としては狭く、何しろ公園の一部なので不適當であつたが、他に求むべきものがないので、多く此處を使用したものである。觀衆は市の中央に在る新公園なので便利な所から、常に蝟集盛況を呈したものであつた。然るに大正十二年四月攝政宮が本島に行啓になつたので、これが記念事業として、市當局は官民と協議の末官民有志の醵金と市の財源とに依り、市營の運動場を建設するに決し、地を選擇した末、現在の地圓山町に、地積二萬千九百七十坪の地を求めて運動場を建設したが、場内の西北側に九連より成る、延長七十四間幅四間の鐵筋コンクリート造の觀覽席（ス



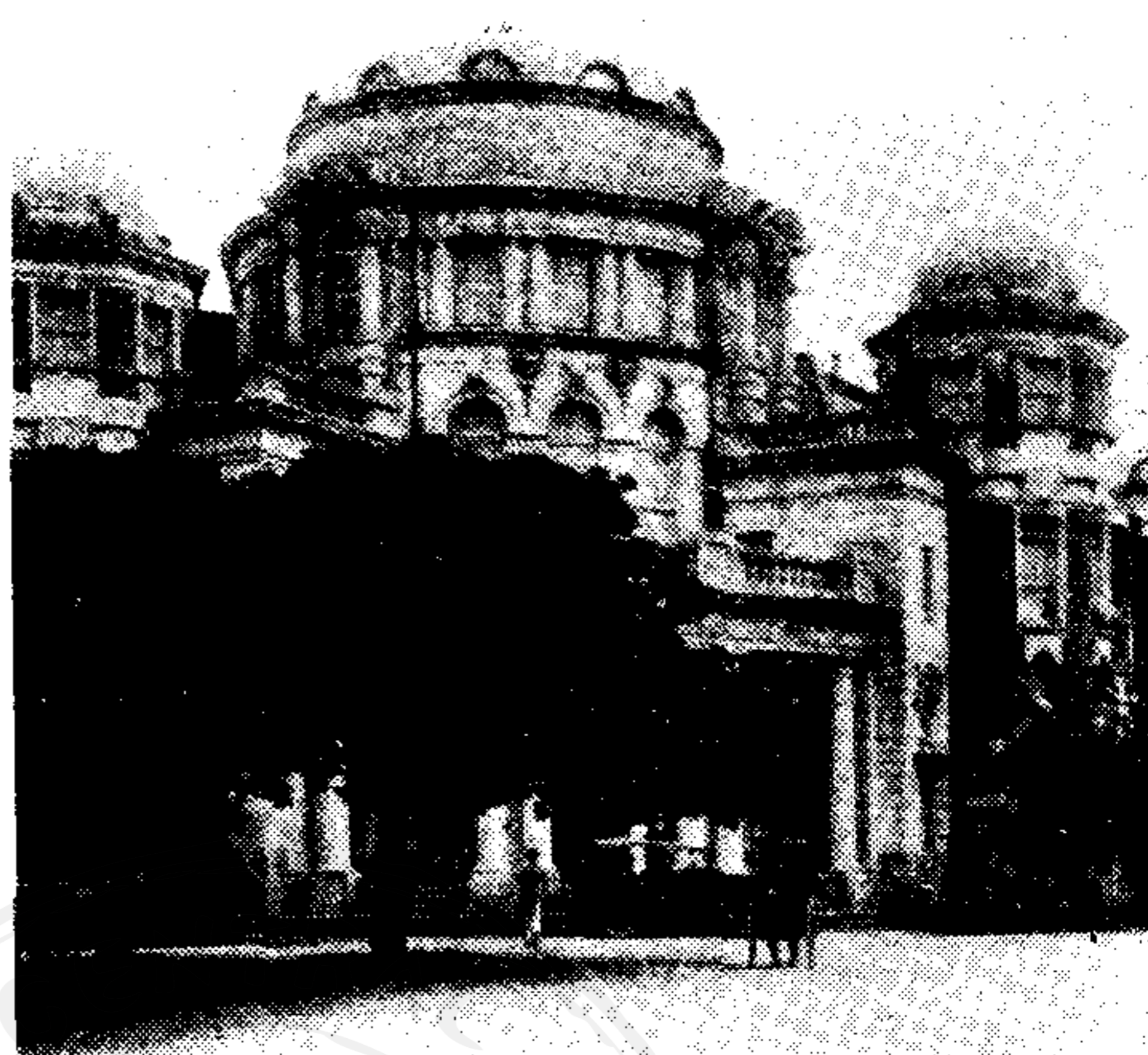
スタンド)を設け、優に數千名を收容することが出來得るやうにし、場内には野球場や庭球コート、トラックやフキルド等の施設を行ひ、別に二階建煉瓦積二十坪餘の休息所を造り、市營運動場として運動競技に使用させ、毎年市内各學校の行啓記念聯合運動會を行ふ外、野球試合が殆んど此處に行はれ、陸上競技も盛に見られやうになつた。殊に輓近體育獎勵の結果運動熱熾烈となり、野球やめ各種の運動競技並に練習が絶えず行はれ、各試合は勿論運動會の開催には、汽車や自動車その他で、臺北から集まる觀衆は夥しく、常にスタンドは満員で、場外に溢れる盛況を呈して居るし、人氣を湧す野球試合は、放送局設立以來、J F A Kで野外中繼放送を行ひ、益々ファンを熱狂させて居る。水泳場は時勢に鑑み市民の要求に應じ、市營プールを開設するに決し、大正十五年七月東門町水泳場を建設開場した。同プールは大小二池に分れ、大水泳池は長五十米幅十六米半水深一、二米乃至二、八米容水量千四百立方米、小水泳池は二百七十平方米水容量百二十五立方米、同様鐵筋コンクリート造で、附屬建物として事務室脱衣場があつて、工費四萬圓を要した、立派なプールで内地のに比して勝るとも劣らぬとの好評なものである。



う一つは明石町にあるが、これは既に市営プール開設前、臺灣基督教青年會が兒童に水泳せしむる目的で建設したものだつたが、昭和三年七月市の經營に移したもので、小規模で水泳池は長さ二十米幅十一米深さ一米乃至三米である。これは主として女子用に充てゝある。而して今や臺北は勿論臺灣全島に亙つて、運動熱は旺盛を極め、父兄でもスポーツに理解を有する人多く、若い人々は思ひ／＼にスポーツに活動して、炎暑も意とせず元氣さを見せ、年々内地への派遣選手は好成績を收めつゝあるの現勢で、以前と異つて運動家は、その態度動作に全くスポーツマンスピリットを發揮して、朗かに元氣よく伸びて行きつゝあるのである。



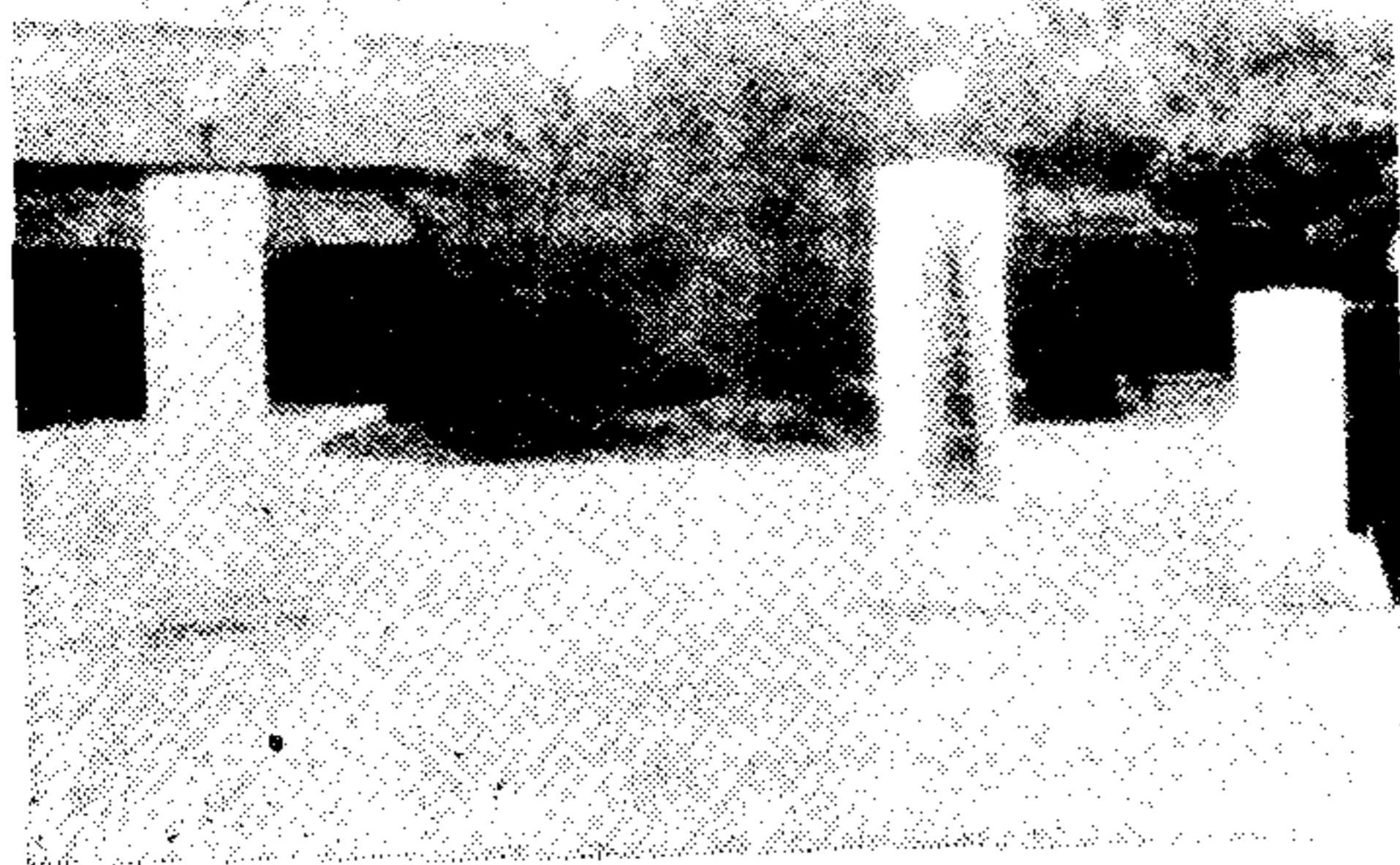
# 臺北の治政と市の出現



|| 治政の沿革概要と臺北三市街 ||

|| 臺北の市政運用と市の諸機關 ||

|| 伸展する臺北市勢と市の財政 ||





## 臺北の治政と市の出現

### 治政の沿革概要と臺北三市街

…改隸前の臺北地方と治政…改隸後の治政と臺北三市街…

地方長官と臺北の行政官廳…臺北三市街と臺北市の出現…

今を去る二百二十餘年前、康熙四十八年閩人陳賴章が官許を得て開拓に染手した、我  
臺北の地は大加蚋堡内の一地方で、見渡す限り茫漠たる所謂臺北の平原で、鬱林所々に  
點綴蕃人此處に居據し、原始的生活を營んで居たものであつた。古い昔は兎に角として  
約三百四五十年前明朝の初葉、萬曆年間前後には早くも此地に漢民族が來住したと云ひ  
傳へられて居るが、その後十七世紀の初期（西曆千六百二十六年から十六年間）西班牙人が淡水  
地方に居據し、淡水港頭に今も紅毛城の遺跡を見るサント、ドミンゴ城を築き威を示し  
たものの、淡水から北方基隆にかけての地方、即ち金包里（今の金山）から基隆（舊名鷓籠）の



一帯の地域で、臺北平野には宣教師が淡水河を上遡して踏み込んだが、土蕃の迫害で成効せず、續いて南部地方に占據し威を振ひ、土民を歸順せしめ、島治を行つた蘭人占據時代も、彼等の勢力は南部地方今の嘉義以南に限られ、北部地方に及ばなかつたし、鄭成功が占領した時代も南部地方のみで、北部には及ばず單に北上征途に上つたが、臺北に至つたか否やも疑問で、臺北平野に入つて勢力を示すことはなかつた。清國の領有となつて漸く全島的に清朝政府が支配することになつたもので、その以前は何等占領統治者の配治を受けず、全く荒蕪に任せ蕃人の逐鹿場に委し治域の外に置かれたものであつて、閩人陳賴章が官許開拓に着手したのが實に臺北の發祥で、爾來閩人の移住多く酒肉布片の類を蕃人に與へ、漸次蕃人を驅逐し蕃地を侵沾して拓殖に努め、漸く雍正年間に淡水河畔に小部落を形成し艋舺の基を開いたものである。従つて清朝治下に置かれた時代の初葉康熙二十三年頃は、嘉義以北の地を總括する諸羅縣に屬しその一地方であつたが、雍正元年頃には新竹(舊名竹塹)以北一帯の地を行政區域とせる淡水縣の一地方であつた。然しこの時代にはまだ臺北地方の開拓も全くなく、開拓に移住した閩人は盛に蕃人



を驅逐し蕃地侵沾に血と汗とを流して争鬪これ努めたもので、清朝の政令は普及されなかつた。然るに艋舺は咸豐年間を最盛期として殷盛を極むる一方、大龍峒や大稻埕が建街後異常な進展を見るに至り、光緒元年頃には新に臺北府が置かれ、臺北の名が呼ばれたが、府城はまだ竹塹の地にあり、臺北府下の淡水縣に屬する一地方とされ、艋舺大稻埕の各街が存するのみであつた。而して今の城内が府城築造と共に出現し、臺北城内が臺北府の行政中心地となるに至つた。臺北の地が臺灣の首都となつたのは劉銘傳が巡撫として來任、臺北臺灣(今の臺中)臺南(臺灣府を改名)の三府とし、臺北城内に行轅を置いてからで、臺北の所謂三市街城内艋舺大稻埕は府の直轄地としたもので、この時從來臺灣府として今の臺南の地が首都であつたが臺北の地に移されたものである。而して領臺後も依然臺北に總督府が置かれ、島の首都として今日に及んで居る。而して改隸前即ち清朝以下の時代は清國の通制に依つたもので、巡撫布政使學政使按察使と云つたもの、監督を受けて、臺厦兵備道が臺灣の行政に當り、府縣を指揮したものであつたが、特に臺灣に關しては特別委任を受けて、普通行政を施行する外按察使學政使を兼ねたものである。



而して道治を文武に分ち文治は府治を開き知府を地方長官として地方行政を行はしめ武治は鎮を置き總兵を以て管せしめ、更に府を一海防三縣に分ち一同知三知縣をして統轄せしめたもので、臺北地方は臺北知府を長官としその下に淡水知縣があつて統轄し地方行政を行つたが、艋舺には嘉慶十四年に出入船舶地方稽查のため艋舺縣函衙門が置かれ光緒五年これが廢止と同時に府に臺北知府や經歷教授等の役人が執務した。光緒十一年劉氏巡撫就任の結果臺灣省が設けられ、臺北城内に臺灣巡撫衙門や臺灣布政使司衙門檢察使衙門等が置かれ、全島の文武兩管を總統したものである。而して下級行政區劃を街莊社に分ち、總理地保等を置き自治的行政を行はしめたもので、これは清朝治下時代幾多の改廢はあつても大體はかくの如きもので、臺北地方にも艋舺大稻埕大龍峒に街があり總理や地保があつた。

改隸後臺北に總督府を置き、島の首都として統治の中樞地となし、特別官衙たる法院專賣局等並に各學校が置かれたもので、地方行政は改隸後今日まで幾多の變遷改廢を見ながら、これは時代の趨勢に鑑みて行はれたものである。而して最近臺灣は内地延長なり



と云ふ論からと、一面臺灣の異常に進展を示した等各方面の事情から、文官總督を迎へ地方官制の改正に自治制を布き市制の公布を見るに至り、從來内地人が勝手に臺北市と呼んで居たのが名實共に市となつたのである。これは一面臺灣の進歩發達の著しきを示し、文明都市としての臺北に値打つけたと共に臺灣統治の上の眞に一大エポックメーキングであると言ふべく、我等臺北在住民の誇りとする所と云つて可い。領臺後の地方官々制は明治二十九年三月に初めて發布となり、臺北、臺中、臺南の三縣と澎湖島の一廳があり。縣内須要の地に支廳が置かれた、續いて同二十八年八月及び同年十一月と同二十九年四月に小改革があり、明治三十年六月には前記の外に新竹、嘉義、鳳山の三縣と宜蘭、臺東の二廳が置かれ、各地方廳下に警察署辨務署撫墾署があつたが、翌三十一年六月兒玉總督の改革で、臺北、臺中、臺南の三縣宜蘭、臺東、澎湖、恒春の四廳を設け、その下に四十四の辨務署が置かれた。次で同總督は同三十四年十一月に縣廳辨務署を廢して從來の三級制を二級制として臺北以下二十廳を置いたが、更に佐久間總督の時に改廢を行ひ、臺北その他十一廳とし依然支廳を設けたが、更に大正九年十月田總督に依り全然改正



して現行の如く五州三廳となり市街庄制を公布した。臺北の地は縣の時代にも所謂三市街は直轄であり、警察署も辨務署も設けられたが廳時代には三市街は勿論接近した大龍峒その他部落も直轄地とされて居た。而して縣には知事があり、辨務署警察署には各署長があつて署務を行ひ、廳には庶務警務財務蕃務(蕃地警備線管轄廳に依る)の各課があり、事務官、警視、技師の各高等官の下に屬、警部、技手、通譯、警部補その他の屬僚と巡查巡查補が置かれ、以前縣時代には警察部長とか、監獄長などもあつて、今日から見ると奇異な感を抱く職制があつた。而してこの廳には參事と云ふのが置かれたが、これは廳管内の臺灣人中で學識名望ある者を廳長が任命し、管内行政事務に關する諮問機關たらしむるもので名譽職であつた。而して各廳下には街庄社があり、これは内地の市町村の如き自治團體でなく、廳長や支廳長の指揮命令の下に、管内の行政事務を補助執行せしめたものであつたが、後にこれを區とし區長を置き、區書記を任命執務させたものである。臺北も廳直轄に置かれた土地であるが、區長役場は大稻埕艋舺古亭村庄大龍峒その他の部落に置かれて、所謂區長役場の事務は臺灣人の六箇年公學校卒業生以上の學力へまこと



て國語)を有する者を任用(判任待遇)したが、場合では保甲役員を補助執行せしめたものである。而して城内は既に殆んど内地人のみ居住する状態なので、區長を置かず中央公會なるものが組織されて更に各町内會があつて、内地人に關する行政事項を補助しつゝあつたものである。中央公會は市制實施と共に解散し各町内會のみが現存して居るし、區長役場も市制實施に伴ひ廢止されたが、艋舺大稻埕には臺灣人に依つて内地人の町内會に比すべき團體が創設されて居る。一方町委員が任命され、町委員事務所が各町内に置かれて市と連絡を保つて市政の運用を圓滑ならしめて居る。而して市制實施に依つて臺北市が出現して従來の臺北三市街が一つになつたが、その以前は改隸前同様三市街は個々別々で、一つの市街を形成して居たのである。されば古くから臺北市と呼ばれながらも、この區別は明かに確立せず居たもので、市制實施前は何れ大加蚋堡臺北城内とか大加蚋堡艋舺何街或は大加蚋堡大稻埕何街と、諸届書に記されたものであるので、なか／＼面倒であり、戸口届を提出する時は誰も惱まされたものであつた。

改隸前の地方長官は知府だとか經歷だとか、難しい妙な支那の官名であつたが、清朝



治下時代だから仕方がない、改隸後は縣に知事、廳に廳長、支廳に支廳長、辨務署や警察署には各署長があつた。無論縣知事さんでも廳長さんでも、内地のそれとは職務が異ふから遂行上の権限も同一でない。然し縣知事さんは既に早く廢止されたばかりか、辨務署長も警察署長も廢されて廳長さんだけが、市制實施までは地方長官として地方行政に當つた。良二千石と云ふ所を臺灣では大守と云つたものだ、なか／＼新聞雜誌記者は巧な尊稱を奉るものだ。何しろ地方長官大守であるから、昔の大名よろしくの豪勢振で今日の浮草稼業の内地の知事さんの類でなく、出入は堂々として權威並行したものである。臺北は島の首都だけに臺北の縣知事さんも臺北廳長も地方長官としては一等の地位であつた。初代の臺北縣知事は橋口文藏氏、臺北辨務署長が七里恭三郎郎氏で、その後縣知事さんは村上義雄氏で辨務署長さんは與倉東海、續彦三、山名金明の諸氏であり、臺北廳長は菊池末太郎、佐藤友熊、加藤尙志、井村大吉、加福豊次、富島元治の諸氏であつたが、大正九年十月の地方長官官制改正で、臺北州の知事さんには相賀照郷氏、臺北の市尹さんには武藤針五郎氏が就任された。その後臺北州の知事さんは高田富藏、吉



岡荒造、高橋親吉、片山三郎、宇賀四郎の諸氏が就任し、現に平山泰氏が知事さんである。市尹さんは武藤針五郎氏の後は太田吾一、田端幸三郎、増田秀吉の諸氏であつたが現在は内海忠司氏が市尹さんで活躍して居る。而して地方行政官廳としては、臺北市内には現在は臺北州廳の下に臺北市役所があり、七星郡役所(樺山町)に在るが、七星郡は臺北市に接した郡部を管轄し、地理的に郡役所が市内に置かれてあるので、臺灣でもこの例が多く、新竹市内に新竹郡役所があり、臺中市内に大屯郡役所があると云つた工合で東京市内に東京府廳があり、横濱市内に神奈川縣廳があると同一である。

臺北の地は艋舺の地點に建街し發達殷賑を呈し、續いて大稻埕が建街繁昌を示し、遂に艋舺の繁華を奪ふに至つたもので、その間の變遷盛衰に就いては既に記述した所である。而して大稻埕に先立ちて大龍峒が早く建街したが、大稻埕と隣接して居ると一方大稻埕の非常な勢で進展を遂げた結果遂に押されてしまひ、接觸した地域關係は市街として擴大せず漸次繁華は彼地に奪はれてしまひ、僅に舊態を存するに過ぎなくなつた。城内はこれ等の市街に後れて建設され、官衙官人街として地位を保ち、艋舺大稻埕と



鼎立の形であつた。それで大龍峒は古き街として存して居るに過ぎないので、これを除き臺北三市街の名が城内艋舺大稻埕に冠せられ、多くの場合に三市街を一括して臺北の市街と呼稱されたが、正式には三者別個の市街として存在したのである。改隸後も同様であつたが、城内は督府その他の我官衙官舎が多く、自然に内地人の居住が増如し、遂に殆んど内地人のみ居住すると云つて可い位、極々少數の臺灣人が一二商店を開いて居るだけである。それ故同じ市街でも大龍峒は他の村落と同様に扱はれて來たのである。然るに大正九年十月市制實施に臺北市が出現し、名實共に臺北市として市制が布かれ、市政の運用を見、これと同時に大龍峒も他の加蚋仔（今の東園西園の兩町）朱厝崙中崙その他近接村落と共に臺北市内に編入されて、同地域の在住民も三市街の住民と共に臺北市民として島の首都人として誇り得るに至つたのである。然し三市街の住民とこれ等編入された地域の住民とは、大龍峒だけは三市街の住民と同一だが、他の地域の住民は全く趣を異にし、その地域も亦た悉く農村部落で、彼等は多く農民であると云つて可い、従て生活程度も彼此比較すれば低く到底三市街の人々に及ぶべきもない状態である。けれども臺北



市民である以上、大に市政の運用宜しきを得つゝ文明都市の一部に編入される地點にあるので、漸次刺戟を受けて進展しつゝあるのは明白で、交通機關の發達殊に市營バスの運轉は、一層彼等を開發するに力多きものがあり、それに教育の普及やその他の事情は一刻も猶豫せず彼等を市民としての實力を得せしめるべく導きつゝあるので、近き將來は名實共に臺北市民として恥かしからぬ人々となると思ふ。而も市制實施以來十年の歲月を閲して居るので、その間大に彼等の進展啓發は直間接に多きものがあると云つて可い。臺北市の出現、これは大正九年七月臺灣地方官官制の改正と共に律令第五號を以て臺灣市制なるものが公布されたので、臺北市が實現したのである。即ち直に現在の地即ち樺山町六十九番地（當時三板橋庄字大竹園）に市役所を設立し、種々の事情よりして取敢えず廳舎として樺山小學校の建物に一部を襲用し、これにバラツクの建物を接續建設して市の廳舎となして、臺北市役所なる大標札が墨痕鮮かに掲げられ、茲に臺北市役所の新装が成り、同年九月一日の吉辰を以て開廳式が舉げられ、初代市尹としては桃園廳長であつた武藤針五郎氏が衆望を負ひ就任され、市政の運用に努められたものである。而



して市としては臺北三市街の外に大龍峒、加蚋仔、中崙、朱厝崙、大直、圓山仔、上埤頭、西新庄子、下內埔、六張犁の各接近部落を編入して、從來の艋舺區大稻埕區古亭村區の三區を廢止して臺北市内とし、百四十五街を同年十月六十四町と郊外十部落として、町には内地風の本町とか榮町とか有明町入船町と云つた名を付け、また舊名をその儘龍山寺町とか日新町太平町とか云つた工合に附けて、臺北市として名實共に立派な市が出現するに至つたのである。思へば驚くべき改變で、空前の大事件であつたが、臺北市民は記念すべきことで、それも今は十年前一ト昔のことになつてしまひ、今や益々文明の都市として進展して大臺北市の出現に努力向上しつゝあるのである。寔に欣幸慶賀すべきの至りで、市民は一層市の發展向上の爲め協力一致内臺人共に奮勵努力すべきであらう。

### 臺北市の市政運用と市の諸機關

…市の行政機關と職員… 諮問機關と諮問事項…

補助機關と活動… 市の制定した徽章…

大正九年七月に市制が發布され、同年九月に臺北市が出現し、樺山町の一角に市廳舎



が出来、墨痕鮮かに筆太に揮毫された。「臺北市役所」の標札が石の門に掲げられ、市尹助役以下職員が任命され、分掌規程に依つて分課が定められて茲に陣容が全く整ひ、市政の運用を見たのである。即ち市役所の職員としては督府地方官々制に依り地方理事官たる市尹、助役と技師の高等官とその以下に屬、視學、技手が置かれ、別に臺灣地方待遇職員令に依り産業主事、産業書記、産業技手、土木書記、土木技師、土木技手、衛生書記、衛生技師、衛生技手、社會事業主事、社會教育書記を置き、又た市制第五條に依る吏員として主事、技師、書記、技手の各職員を以て市政の事務を、市尹統轄の下に處理執務して、市政の運用を圓滑に市勢の發展を期して居る、市役所の事務分掌規程に依り分課を定め、各課に於てその所管事務を分擔處理しつゝ、あるが、この事務分掌規程は市制實施以來時勢に順應して幾度か改正があり課の新設や分離を見、現在は庶務、教育、社會、勸業、土木、水道、衛生、財務、自動車の九課と臨時的な臨時水道擴張課がある。而して土木と水道は最近に於て土木水道課が分離したものであり、自動車課は市營バスの開業運轉を見て、これまた最近新設されたものである。教育社會の二課も、社會事業の施設



愈々多きを見、數年前に二課となつたものであり、臨時水道擴張課は目下工事進捗中の草山方面より引水する擴張水道工事施工の爲め四年間繼續事業として施工されることになつた結果、臨時に一課を置いたのである。而して各課には何れも係を置いて事務を分擔處理をなして居る。各係は庶務課には秘書庶務兵事の各係があり、教育課には教育社會教育、社會課は社寺社會事業、勸業課は勸業市場、土木課は土木營繕、水道課は計理工務撒水、衛生課は保健防疫、財務課は賦課徵收會計、自動車課は庶務運轉、臨時水道課は庶務工務の各係に分れて、課長の下に係長がある。而して庶務課長は助役が當つて居るのみか、現在は臨時水道課長も前任者退職後は助役が兼務して居る。助役は最初理事官と在任し大正十三年十二月官制改正に因つて助役の職名が置かれたのである。以上が市政を運用すべき行政機關である。尙市役所には囑託もあり、雇傭もあり、可なり大世帯であるが、土地柄が大衆に最も接觸すべき役所だが、以前は官僚臭が多く、兎角の執務振が批判されたが、漸次上司の督勵宜しきを得てこの弊は尠くなつたが、まだ大衆化しない嫌ひが多い。然し大臺北市を將來に建設すべく、市民の協力一致の努力は、時



勢と共に市勢の伸展を促し、文明都市の施設は多種多端で、市としての執務は頗る多忙を極めて居るし、なか／＼小姑の多い土地なので、市尹さんはなか／＼の氣苦勞であるが、一面には仕事の仕甲斐があるもので、歴代の市尹は市民の福利増進に精進して、市民の期待に反せぬやうに努力して居る。殊に島の首都たる地位に鑑み、市民との交渉も多く世論も可なり喧しく、市政の運用に就いては深く考慮を要し萬全を期せねばならない。それ故歴代の市尹は行政的手腕の達者な人を任命し、多くは知事に榮轉する關門の如き地位にされ、臺北市尹は他の市尹よりは上位の待遇を受けて居る。然し配下の人々課長係長は相當事務に熟達の人が多く、執務振も可なりと云ふことが出來得るが、その以下の連中は何れかと云ふと、内地の市役所や區役所に見るが如き中年以上の人々で多數は恩給附の連中であるか、一面惡口を云へば養老院の觀がないでもない、尖端を行つて世人を驚かすほど時勢が變化して居るのである、時代に順應した執務振を示し、親切丁寧をモットーとして活動することを市役所のお役人さん達に切望するが、これは敢て我等のみの聲でなく、巷間に聞く聲なのである。要は係長さんばかり忙しく働かず、全



員が緊張して活氣ある活動を期待して止まないものである。一寸苦い言を記して頂門の一針とする。

市政の運用には、市制の定むる所に依つて、市に諮問機關として協議會が設けられてある。これは自治制が布かれた結果だが、この諮問機關は名の如く市尹が市政に就いての諮問事項に關し、協議會員はこれに答申して意見を忌憚なく吐露して参考にするのであつて、内地の府縣市町村に於ける會議とは全く趣きを異にし、これ等府縣會議員や市町村會議員には議決權が附與され、殊に市の市長や助役は公選であり、議員も公選であるが、臺灣の市尹街長庄長助役等は官が任命し、市尹助役は地方理事官の堂々たる高等官であり、市街庄議員も府や州の協議會員も官選なのであつて、而も諮問機關たる協議會は諮問に答申する以外何等議決權もないので、意見を陳述して知事市尹街長庄長の施政上の參考に供するに過ぎないから、協議會で反對の意見が多數を占め否決した場合も、是なりとすれば施行して差支なく、大抵の場合は再考して修正するのだから、協議會員は官選で諮問事項に答申するだけなので、徹底した自治制でなく變則なものである。



されば自治聯盟と云ふ團體が眞の自治制の發布を望み運動を續けて居る、然し憊うした變體の自治制を布かれたのは、現代の臺灣文化の進捗に鑑みての事で、一面進歩を示して居るには相違はないけれども、全體から云ふと内地同様の自治制を布くと各種の弊害も生じ易く、まだ尙早とされた結果である。従つて當分は現状維持で行かねばならないが、若い新人學校を出た知識人中には、協議員の官選にも不満があるらしいが、内地人でも市尹の選定推薦で、知事が任命する市の協議員の任命にも彼是の評を聞くことがないでもない、殊に二年の任期滿了最近の改選結果には種々の噂さ評判に、内臺人殊に内地人に不満の聲が聞かれた。而して市制では市協議會員は知事の任命に係り、三十名(内一名は市助役)で任期二年を以て組織し、市の豫算その他重要事項に關し、市尹の諮問に應ぜしむるものとし、尙協議會員中から互選せられた五名の常置員を設け、協議會の委任事項の議決をなしつゝある。協議會の議長は市尹が當り、市の課長係長その他幹部を參與として任命して議場に列席せしめ、諮問案に就き説明並に會員の質問に應答せしめ、可否相半する時は議長たる市尹の裁決に俟つと云ふことにしてある。何しろ官選議員で決



議實行權がなく、意見を諮問案に對して吐露して、市尹以下市當局の參考に資するのであるから、内地の市會議員や縣會議員その他とは大分趣を異にして居る。然し今日まで協議會を開く十八回、各協議會員は何れもその言動は終始眞摯に、議事は時に波瀾を見多少場内の紛糾がないこともないが、總て圓滿に解決して平穩裡に進行し、各協議員間には毫も内臺人の差別は勿論なく、黨派的色彩などは決して見ることが出來ず、何れも諮問案に對しては研究的態度を持ち、只管その職責を盡すべく、誠心誠意これ努めて、市政運用の助長に努力しつゝあるので、會場は和氣靄々たるの空氣に滿されて居る。常置委員は時々市尹の招集に應じ參集して、協議會に於て委任された重要事項を市當局と共に研究し議決實行を圖つて居る、而して協議會に於て諮問可決の事項は知事に上申裁可の上遂行することになつて居る。市政運用に就いては、協議會を開き知事任命の協議會員を招集して、重要事項に就き諮問案を提示し、各自の意見を徴して運用上に資すべく、諮問機關が設けられてある。而も更に市制第十條に基き常設委員を設け、各委員に勸業、學務、衛生、土木、社會事業、財源調査の各事務を分擔委托し、市當局と協力して各



分擔する事務に就き考究もし遂行上便宜を圖り、各方面の市としての施設や改善に努めて、市政運用上の補助機關たらしめて居る。尙市勢の伸展著しく、市區改正や市街地整理に就いて、市民との交渉も可なり複雑繁多を極めつゝある現状に鑑み、土木事業その他土地に關する事務の遂行上圓滑を圖るべく、臨時土地整理委員を置き、これ亦た市政運用の補助機關として、市の當該職員と協力解決すべきは解決し、整理すべきは整理して交渉上便宜を計り、市民の福利増進に努めつゝある。而して市制實施前は臺北中央公會なるものが組織され、市民と地方廳との連絡、在住民共同の行事遂行等に中心となり活動し、更に各町内にそれ／＼町内會を設け、町内の公共的事件を扱ひ、地方官廳と交渉事件に中央公會を通じて連絡を結び、公私共に團體的行動をして居たのが市制實施後これがために臺北市が出現され、中央公會の機能は市に於て行ふこととなり、遂に解散各町内會のみが残存し、市と直接に交渉を持つこととなつた。加之市制施行令第四條で市に町委員を置き任期を二年とし、その區域を定めて區域内に於ける各般の事務を補助せしむることとなつたので、市から任命された町委員は、事務所を町内會事務所と同一場



所に置き、事實は町内會の事務は町委員の事務も略ぼ同一なので、町内會は町委員の事務をも扱ひ、市との交渉の事務は町委員に於て扱ひ、町内會はその以外の町内に關する事務を扱つて居るので市との交渉連絡もよく保たれ圓滑に活動して、市政運用の補助機關たる使命を遂行して好成績を示して居る。

人口二十有餘萬を抱擁し、面積三方里餘の臺北市は臺灣に於ける首都で、臺灣統治の中心を成し、臺灣文化の源泉地で經濟の中樞地をなし、新領土の政都とし、南方寶島の經濟都市とし、文化の向上著しく諸般の機關は完備し、文明的施設は餘蘊なきまでに設備され、美しくして明るき都、文化的都市として推稱を得、更に日進月歩駸々乎として伸展する市勢は、今やグレート臺北即ち大臺北の出現を見つゝあるのである。臺北市が大正九年七月市制公布に依り、名實共に市の出現を見たので、自然市を象徴すべき徽章を設定するの要を市民間に高唱され、又た一方事實として市當局に於てもこれが設定の必要を認められたので、双方の意見が合致した結果これが設定することになつた。然るにこの徽章設定は既に臺北廳時代にも必要を高唱され、同様廳當局も設定の必要を認められたので



協議の結果、一般より廣く圖案を懸賞を以て募集し、その良好なるものを嚴選審査して決定採用するのが最も良策で、時勢に則した方法であり、優良の圖案が得られるとの議論が有力となり、遂に廣く一般から懸賞を以て公募するに決しこの旨發表公募したが、その結果應募數は實に五千三百二十點の多數に上り、公募として好結果を見たわけである。それで廳當局ではこれが審査員を委囑することとし、加福(廳長) 木村、赤石、谷口、森山、井手、高木、蜂谷の八氏を審査委員とした。審査委員は加福氏の廳長以外、木村、赤石、谷口の民間有力者と森山、井手の督府建築技師、高木、蜂谷の美術圖案家とであつた。而して各審査委員は臺北廳會議室に參集し、嚴密なる審査を遂げ漸く決定したものであつて、この入選決定したものが、その後臺北市の出現に際し市に於て臺北廳が廳の徽章として採用したものを襲用して今日に及んで居る。入選採用の徽章は㊦であつて、これが解説は高砂島(臺灣の別稱の一つ)の北の都と云ふ意味を象徴するため、松葉形に北の字を變形にし松葉とも北とも見ゆる如く圖案したものである。一見釜の蓋の如くも見ゆるが解説を知ると成程と思はれ、簡單によく圖案化され、氣品と威嚴を保たしめ、而も描き



方が至極容易であるのが好いとされたもので、市の徽章としては最初見た眼には妙に見えるが、馴れて静に見ると、上品であつさりして居て、なか／＼好いと云ふ感じが出て来る。

### 伸展する臺北市勢と市の財政

…臺北市の市勢と市の豫算…市の出現と市有財産…

市の施設と市公債及借入金…市の財政と稅務概況…

人口に於て既に激増を示し、街衢に於て郊外とも見るべき市内編入部落に新開地が多く出来、交通機關は市營バスやタクシー等の文明の利器が夥しく使用され、スピード時代を出現せんとし、ラヂオ放送は内地その他と距離を異常に短縮し、文化は益々向上して、變遷著しき時潮は、非常な勢で押寄せ、時代に適應せる各般の施設は着々として遂行される一方、改善すべきものは改善して、市勢は益々伸展するのみで、而も文明の大都市を建設して島の首都たるに恥ぢぬものにしやうと、不斷の努力が官民の協力に依り



市民として拂はれて居る。従つて市政運用上に最も密接の關係ある市の財政も、年々膨脹して常に市當局は數多き施設に財政難を訴へ、種々これが對策に腐心して最善を期して居る。而して市の豫算は毎年市協議會に諮問案として市の歳入歳出豫算に關する件が諮問され、協議會員の熱心にして研究態度を持しての討議、甲論乙說互に自家の意見を吐露陳述し、或は希望を附し或は修正を唱へ、漸く議決して上司たる知事の認可を得て實行しつゝあるが、市制實施の當時は、臺北市が出現して開廳執務したのは大正九年十月でこの時市制が實施されたため、大正九年度は豫算編成關係上歳入を得ることが出来なかつたから、市税はこれを徴收しないで、歳出は總て州の補助金で支辨して、翌十年度から初めて市税を徴して市が財政上獨立を見たのである。而して從來在住人は個人所得に對しては課税されずにその負擔を免れたので、生活上餘裕も出来得るわけで樂であつたけれど、市制實施の上市の財政は獨立し、歳入に依り歳出を支辨しなければならぬので、市税が課せられるやうになり、臺灣租税規則が改正された。畢竟州市街庄に協議會なる諮問機關を設け、諮問をなし民意を問ふことになつたものも、この徵稅關係にも因るも



のと云はれて居る。それは兎に角として市勢は爾來年一年と發展し、従つてこれに伴ふ市としての諸般の施設事業は、各方面に互り多種多様で増加する一方、その爲めに市は連年財政の窮乏を痛感しながらも、施設すべき事業は緩急を調節して遂行せねばならず、而も着々遂行しつゝあるので、専ら既定の歳出に對し極力冗費を省き節約を勵行し歳計を維持して來たが、昭和の新政に當り市勢興隆の機運に際會したので、昭和二年度に於て既に二百七十萬圓に増加し、翌三年度は四百十八萬圓更に昭和四年度は一躍五百六十萬圓を突破するの巨額を示し、市制實施當時に比較すると實に三倍餘の多額に達して居る。これは戸口の増加や一般經濟の膨脹、物價の騰貴や生産の増加施設事業の發展等に原因し、市民の生活程度の向上進歩に伴ふ結果と見るべきであらうと云はれる。然れども昭和五年度の豫算は財界極度の不況に、事業界は萎微衰退し、一方節約緊縮が高唱さるゝ所謂不景氣深刻緊縮時代の經濟状態に鑑み、市民の實生活に寄與し、市勢の内容ある發展に資し、而もその事業の實行に就ては市財政の現在及び將來を特に考慮し、出來得る丈け市民の負擔を輕減するやう、歳出に緊縮節約を強制して、事業自體が採算立ち



且つ市民の生活に深き關係を有し、將來市財政の根幹を培養せらるべき事業を慎重研究の上選擇し、これが經費を含めて豫算を編成する等非常に努力を重ね、漸く前年度に比し百七十三萬餘圓を減額し、一般會計に於て二百八十二萬三千餘圓、特別會計百四萬六千餘圓、合計三百八十七萬餘圓を計上した。而して特別會計に屬するものは市街地整理費、公設質舗費、水道費等であつて小公學校建築費や公設質舗費、水道量水器設備費や水道擴張工事費、市場新營費や土地買收費等その他特種の事業費は起債又は借入金をしてこれに充てゝ居る。而して市制實施以來十年間に於ける市財政の膨脹を概記すると、大正十年度は一般會計百六十三萬八千圓特別會計は計上しなかつたが、同十三年度一般會計二百九萬九千餘圓特別會計十萬七千餘圓合計二百二十萬六千餘圓、昭和三年度一般會計三百十萬八千餘圓特別會計百七萬八千餘圓計四百十八萬餘圓を示すの巨額に達して居る。而も島の首都としての施設事業多く、市の財政は窮乏を告げ、殊に不況深刻時代は所謂赤字が出ぬとも限らないので、當局は苦心慘膽たるものがあるのには同情するものである。



臺北市の出現に依り、從來の市街たるかの臺北三市街城内艋舺大稻埕の外に、大龍峒と更に郊外の十部落を併せて臺北市を形成したので、廣袤も東西二里八丁南北二里十二丁而積三方里餘の地域となり、市としての財産もこの地域内の土地建物その他であつて、これを土地建物その他と基本財産とに分ちその外に積立金があり、公設質舗の經營資金がある。この市有財産も過去十年間には種々時勢の變遷に伴ひ、可なり異動があつたことは勿論であるが、漸次増加の傾向を示したもので、昭和五年三月末現在では土地建物その他に於ては、土地六十九萬二千九百五十一坪五一九で價額は五百二十七萬九千二百五十四圓だが、價額には墓地火葬場道路敷地は含まない。建物は二萬六千九百四十五坪七一三價額三百九十三萬六千九百九十二圓、價額合計千二百三十七萬二千七百七十五圓を示して居る。基本財産は土地千九百九十六坪八八〇價額六萬三千五百七十一圓、積立金一萬三千二圓七十一錢合計七萬六千五百七十三圓七十一錢を示して居るが、他に公共施設資金積立金四萬三千四百二十六圓二十六錢、慈善事業資金積立金三千九百六十六圓九錢、公會堂建設資金五萬三千八百四十三圓八十二錢で、こ



の諸積立金合計九萬七千八百四十四圓十七錢が計上され、公設質舗資金が三十九萬圓ある。

島の首都としての臺北市は、その施設の遂行すべき幾多の事業を各方面に有して居るが、一方可成市民の負擔を重からしめぬやう、歳出入の調節と節約緊縮の勵行に努めて豫算編成に苦心し、財政は兎角窮乏を告げつゝあるが、然し緊要と認めるものや急を要すべき事業は、種々の方法を以て遂行せなければならぬので、市は従來市債を起し、或は借入金を充當して、これ等各種の施設事業を遂行し來たが、施設事業中には國庫や州の補助を得るものや、負擔額を割當てられるものもある。而して市として昭和二年度までに、舊債は諸般の事情を考慮した結果、舊債を整理して一應償還すべく、新に臺北市舊債整理公債を發行したが、その額は百萬圓で利率年七分三厘、昭和二年度より毎年これを償還して、同九年に至つて完済するものであるが、既に償還仕拂を了した額は三十七萬四千圓で、現在高即ち未償還額は六十二萬六千圓である。市は起債して施設事業を行ふ以外に、銀行の資金を借入れてこれに充て、市の財政上調節を計つて返却しつゝある



が、現在ではその主なるものは四つで何れも多額を示して居るが、その總額は百四十七萬九千二百九十五圓五十七錢を示し、これが内容は臨時水道擴張工事費借入金七十八萬四千圓を筆頭に、中央卸賣市場新營費借入金の四十萬圓、市區改正用土地買收費借入金の二十萬圓と、消費市場改築費借入金の九萬五千二百九十五圓五十七錢である。而して市としては、發展の途上に在るので、時勢の進運に伴ひ施設を要するものが非常に夥しいが、その重要にして且つ緊急なものは、市廳舎の新築や小公學校の増設と補修學校の新設、御成街道の路幅擴張工事や市區計畫、傳染病院の改築や腸チブス撲滅施設、道路下水の完成や北門町御成町鐵道踏切問題等々で、市民の自覺と努力に俟つは勿論、直間接督府州廳の同情援助を仰ぎ、國庫の惠澤に浴せねばならないのである。尤も草山を水源とする上水道擴張工事や南門下水幹線工事は何れも工事の進捗中であつて近く完成すべく、又た多年懸案の市公會堂建設も御大典記念事業の一つとして、三ヶ年間繼續事業として八十萬圓の豫算を計上し、不日適地を選定し起工準備中である。

市の財政上歳入は市税と基本財産所得及び利子であつて、その他にも手数料觀覽料使



用料等の雑収入があり、尙他に種々収入があるが、主なる歳入は市税である。市税は地租割所得税割戸税割營業税割雜種税割で、生産千圓當戸税及び戸税割は、毎年市協議會を開き協議會員の諮問を経て、上司の裁可で決定することになつて居る。市制實施前は戸税が徴收されず従つて戸税割も課せられなかつたが、戸税や戸税割は假令間借や下宿しても課せられる一種の人頭税の如きものと云つて可い位、市内に在住する人々に總て課せられるやうになつた、これも市政運用上蓋し當然のことであらう。大正九年度は市税を徴收せず州補助金で總て歳出を支辨し、翌年度から市税を徴收して歳入歳出の豫算を編成して、市の財政が獨立したが、恰も市制實施前即ち大正七八年の頃は、臺灣財界の最好調時代で、市況亦た殷盛事業界は活氣を帶び、金融も好調であつたから、諸税も自然尠からず增收を見、納税成績の如き自ら好良であつたけれども、大正九年頃市制實施當時からは、財界は逐日不振を加へ不景氣の聲は巷間に喧しくなつたので、市制實施に伴ひ諸税の加重を避けたに拘らず、尙營業税や雜種税に附加税が課せられ、更に同十年度からは第三種所得税が創設された一方、市況愈々沈衰し金融は梗塞して、納税の成



績に影響する所尠くなかつた故、同十二年度では營業稅率を引下られたが滯納者續出し、納期内に完納する者三分の一に過ぎない状態となつたため、完納方を獎勵して覺醒を促すべく、宣傳に理解に努力を拂つた結果、翌十三年度から漸次納入成績向上し、且つ納税に關する理解と觀念の普及と相俟つて納税の義務を果すやうになり、翌十四年度では第三所得税の免稅點の引上を見たるため一層納入成績は良好となり、更に昭和二年度から宣傳に理解に觀念の養成に、文書ポスター講演映畫等の手段に依り、州當局と協力不斷の活動に努め、且つ納税成績優良團や納税に關する功勞者の表彰並に獎勵金を交付し、尙一層納税に關する觀念養成に努力した結果、近來著しく優良な成績を示して來た。而して市の歳入の趨勢を概括的に記すと、市税は大正十年度七十萬千餘圓、同十四年度七十八萬六千餘圓で、昭和元年度（大正十五年度）には八十萬餘圓を示し、爾來八十萬圓以上に上り、同四年度は更に増加して九十一萬二千餘圓に達し、最近同五年度（豫算）八十四萬八千餘圓となつて居るが、市税中多額は戸税割を最多とし三十一萬千餘圓から漸次増加して四十八萬圓に達し、その間を上下して居る、次は營業稅割で二十四五萬圓



から二十八萬圓であり、地租割は十五六萬圓から二十二三萬圓、雜種税割は七八萬圓から十一萬圓、所得税割は最少で二三千圓内外である。而して生産千圓當戸税は大正十年度五圓二十錢であつたのが低下して、大正十四年度は一圓三十四錢、昭和二年度一圓十八錢となつた、同三年度一圓七十四錢、同四年度一圓六十五錢、同五年度一圓六十六錢の負擔を示し、戸税一圓當戸税割は大正十年度一圓七十五錢、大正十四年度十二圓、昭和二年度十二圓二十五錢となつたが、同三年度は九圓二十四錢で同四年度は九圓十二錢、同五年度八圓七十四錢をば示し、生産千圓當戸税及び戸税割は、大正十年度十四圓四十錢餘で同十四年度十七圓四十二錢、昭和三年度十七圓八十一錢餘同四年度十六圓六十九錢餘、同五年度十六圓十六錢餘で、戸税及び戸税割負擔額は、賦課產生一戸（戸當數）は、大正十年度一圓六錢五厘、同十四年度八十錢四厘昭和二年度八十四錢、同三年度八十九錢九厘、同四年度六十一錢、同五年度六十一錢八厘、戸税（賦課戸數）一戸當大正十年度五圓五十三錢二厘、同十四年度九十九錢七厘昭和二年度九十八錢一厘、同三年度一圓四十五錢五厘、同四年度一圓四厘、同五年度一圓六厘、戸税割（賦課戸數）一戸當大正



十年度九圓七十八錢九厘、大正十四年度十二圓八十二錢昭和二年度十二圓四厘、同三年度十二圓四十五錢三厘同四年度九圓十五錢四厘、昭和五年度八圓七十九錢三厘を示し、可成負擔の輕減を圖つて居るから、これを他の市街庄に比すると、負擔額は常に輕減少額を示して居ると云つて可いのである。尙歲入としての使用料手数料は何れも市條例の定むる所に依るもので、主なる収入は火葬場公園公設市場水泳場簡易宿泊所墓地葬儀自動車圓山運動場乗合自動車等の各使用料と、家屋消毒國稅徵收法の督促の各手数料と、臺北市手数料條例に依る印鑑證明その他の手数料等である。而して臺北市の金銀出納事務は、臺北市金庫に於て扱ひ、市金庫は臺北市役所内に置き、事務取扱銀行としては、臺北廳時代より取扱つて來た株式會社三十四銀行臺北支店が引續きこれに當つて居る。

### 昔の都市計畫と將來の改正案

…市區計畫事業の沿革…特殊事情と其將來…

臺北市街概況…將來の大臺北計畫私案…

從來本島の市街は支那式であつて、道路の幅員狭く且つ曲折してゐる上に濕氣が多く



て不潔甚だしく、家屋の構造亦通風採光聊かも考慮されてゐないので、惡疫自ら發生せざるを得ない状態であつた。總督府當局に於ても特に此の點に留意し、明治二十九年臺北市街に排水工事を施行すると共に下水溝の設備を完成し、次いで同三十年四月市區改正竝に衛生施設に關する審査機關として臺北市區計畫委員會を組織し、同三十三年に至り臺北に市區改正工事を實行し、基隆市街の改正をも併せて施行した。尙ほ明治四十三年に全島の市街を統一的に改正するに就ての諮問機關として、臺灣總督府市區計畫委員會を組織し現在に至つて居る。而して今日まで市區計畫を確立して發表したものは臺北、基隆、新竹、臺中、臺南、嘉義、高雄、花蓮港、臺東以下主要市街二十四ヶ所であつて、是等の市街は何れも其の計畫に基いて夫々工事を施行しつゝある。今其の工法の概要を述べれば、下水は開渠又は暗渠とし、大下水溝は道路の中心に、小下水溝は道路の兩側に布設することゝした。道幅は二十間以下各種のものを設け、其兩側に各二間宛の歩道を設け之れを亭仔脚に利用することゝした。從來、道路の如き公共の用に供する土地は、本島舊來の慣習として無償にて提供し來つたのであるが、市區改正進捗し



道路擴張さるゝに伴ひ、家屋の移轉を要するもの増加し、殊に逐年地價暴騰の爲め地主に甚しく損害を與ふるので、臺北市に於ては明治四十年より時價の半額にて買收することゝし現在に至つて居る。

大正九年制度改正後に於ける市區改正事業は、市街庄に於て施行することゝなつたのであるが、常に財政に左右せられて市區の發展膨脹に應ずることが出來ず、且つ臺灣の如き亞熱帶地にあつては本事業の成否は衛生保健上に至大の影響があるので、國費又は州費を以て施行するか、或は之等の補助に依つて之を完成せしむるかの方法を採ることが最も緊要である。

一體都市計畫は其の土地に則した計畫でなければならぬ。各國の都市計畫が其の究極の目的に於ては一致してゐるにも抱らず、各々其の特異性を有するのは之が爲であつて、臺灣と内地とに就て見るも都市計畫上に差異があるのは理の當然である。然らば本島の市區計畫は如何なる特質を有してゐるか。

顧ふに本島の市區計畫に存する特種事情は臺灣が内地と異り(一)熱帶亞熱帶に位してゐ



ること(二)帝國の新領土であるといふ事柄に其の源を發して居るのであると言ひ得る。由來熱帶都市に於ける施設が特種の研究を要するものゝ多いことは、熱帶地に植民地を有する歐米諸國が所謂熱帶都市政策の考究實施に努めてゐることによつても知られるのである。我臺灣に於ても光、熱、暴風、其他熱帶の氣象、風土病に應ずる施設を要するは言を俟たない。彼の空地を成るべく多く保存するに努め、路幅を一層廣くし、亭仔脚を作り、樹蔭を多くする等は之が爲である。又本島は新領土であるが故に、其陋屋を改良して本島人を暗黒の生活から光明の生活に導き、市區を改正して内臺雜居に適するやうにし、以て有形的施設により内臺融和を計り、都市の發達を助長するは植民政策上極めて望ましい事である。而して其市區計畫は所謂都市の改造に止らず進んで都市を建設擴張するを必要とするのである。

蓋し本島の市街及農村は内地の市町村と趣を異にし、新興のものが多く且將來も産業の發展に伴ひ膨脹の趨勢が著しいからである。

今や本島の都市計畫は行政に法制に財政に技術に總て市區計畫の範圍を脱して新都市



計畫への一大轉換期に際會して居る。當局に於ても既に大正十三年以來之が基本調査に必要なる經費を要求し、重要都市の根本的計畫を樹立中であるが、幸ひ本島に於ては一小農村と雖も都市計畫の利益を認め、其の改良をなさんとする氣風が全島到る處に盛であるから、之を指導して計畫を助成せしめたならば、將來全島の市街庄面目を更に一新して、都市計畫上見るべきものがあること、思はれる。

臺北市は臺灣の首都であつて、清國の所領時代遠く康熙五十七年既に北路淡水營都司を置き、北部臺灣に於ける政治の中心地となつた。其の後巡檢、縣丞等の駐在地とし、降つて同治十三年（一八七四年）臺北府を置きて臺北城を築造し、光緒十八年臺灣省治の地となり、明治二十八年我が領有に歸して總督府の所在地と定められた。領臺當時既に一萬二千の戸數を有し、政治商業の中心地として殷賑を極めて居たが、街衢の不潔甚だしく、病毒全市に充滿するの狀況であつたので、叙上の如く街路の改良を行ひ爾來孜孜として市區の改正擴張を爲したのであるが、明治四十四年八月大暴風の襲來に依つて舊來の本島式建物の大半壞滅に歸したので、當局は之を好機とし、大英斷を以て近代的都



市建設の計畫を樹て、市内主要幹線道路の幅員を擴張し、洋式三層樓を櫛比せしめて市街の面目を一新した。大正九年地方制度の改正に依つて市制を布き、次いで町名を改正し市の區域も亦た漸次擴張せられ、今や廣袤實に三方里人口二十三萬を包有する大都市たるに至つた。

總督府に於ては、かくの如く二十年後の大臺北市の理想的建設に就いて、總務長官を委員長とする市區改正委員會によつて案を練つてゐるから、今年末には成案を見るであらうと思はれるが、茲には記者の私案とも付かず想像案とも付かぬものを畫いて見やう

グレート臺北の輪廓は素晴らしく太くきなくてはならない、即ち内地人町と本島人町との現在の境界線である北門を中心として、徑二十哩の圓を描いた大地域を以てすべきである。東は遠く汐止街を西は淡水河を越えた新莊街に、北は士林、北投、南は景美方面一帯を包藏するの大地域を必要とする。一體臺北は西方は淡水河の流に阻まれ、北は基隆河の爲めに進展を害せられ、自然東南の二方に伸びつゝあるのである。城南一帯の地は遠く古亭庄と云はれる南門外の方面から、帝大や高等學校の建設で大に開發され



て、御園村とか昭和町とかの新開地が出来、東門町、文化村、大安、樺山町と広い地域があつて日に増しモダンな住宅が雨後の筍の如く連立して行く姿は實に物凄い有様である。北方大正町は昔日ほどのことはないが、清淨な閑靜な住宅町として大臺北の一名所たるを失はない。又大稻埕の東にも續々と家屋が建てられて居る。それ故十年を経ずとも現在の市内編入の地域、まだ農村部落をなす近郊隣接の地もやがては住宅地化すことは明白である。而して東門外の方面から圓山方面にかけて、各工場があつて、何れはこの方面が工業地域とならうと思はれる。而して領臺當初は三市街鼎立し、城内が改隸前既に官衙官人街であつたから總督府も此處に置かれ、久しく舊時代の建物を使用して居たが更に城内の中心とも見るべき地に移轉新築されたのが現在の總督府廳舎である。然し東に伸び南に展がり、今では市の中心は現在市役所が建られて居る樺山町の地點であると思はれる。而も今や漸次郊外に街勢が伸びるので、將來の大臺北市の中心は早や既に他に求めねばなるまい、即ち理想としては北は一大遊園地とすべく計畫が進捗されて居る。温泉郷の北投、草山が近くに在り、貿易港として過去に繁昌した淡水港は、風光明



媚の地で探勝すべき所なので、この地も包含して北は淡水、北投、草山及び臺北市に接する士林とを加へ、東方には既に鐵道部工場が建設され近く移轉さるゝ松山の地があり而も其處に近く汐止街もあるので、曠野續きの此地まで編入するとし、南は景美、新店も程近いからこれを加へ、新店溪を越えた板橋方面をも入れることゝし、西は淡水河があるが、臺北橋が架せられ縦貫道路も通じ、坦路遠く桃園を通じて居るし、新莊街は艋舺建街前、臺北平野の都邑として相當繁昌した地であり、此方面は平野廣く交通も至便だから、これを加へたならば立派な大臺北市が建設されやうと云ふもの、換言すれば臺北平野の廣大な區域を以て市街地化し、これに草山、北投その他隣接地を含ませるならば、蓋し理想的の大都市が出現すると思ふ。無論一私案であつて一つのユトピアに過ぎないが、既に督府で北門を中心とする大都市建設の計畫があるのだが、やがてはこの理想的私案の一端が實現するかも知れない。これは二十年後のことだか或は五十年後に屬するかは知らぬが、何れは將來榮えゆく臺灣の首都として建設せらるべき大臺北市の變遷であらうと信ずる。



## 歴代の市尹と助役のその功績

…名市尹武藤針五郎君…ヌーポールの太田吾一君…政治家肌の田端幸三郎君…

美男子増田秀吉君…快男兒内海忠司君…才人助役佐々木金太郎君…

二十三萬の大衆を抱擁する我臺北市は、臺灣の首都として耻かしからぬ文明都市を建設し、時代の進運に順應すべく幾多の文化的施設が行はれつゝあるが、之れ固より歴代市尹のリート宜しきを得てゐると共に、市の機務に携つてゐる多數の有力なる公人が、至誠を以て市政の運用に努めてゐる結果で、又これが女房役として市尹を補佐してゐる助役の犠牲的苦心も與つて大に力あることは勿論である。

初代臺北市尹武藤針五郎君は、彼の織田信長、豊太閤、徳川家康の諸公によつて有名な史績に富む三州蟠豆郡の産で、明治三年十月一日の生、本島の我有に歸するや、明治二十八年五月大本營附として率先渡臺し、臺灣縣誌を命ぜられて兵馬倥偬の裏に苦楚を嘗め、臺中縣、斗六廳、阿緱廳、恒春廳、臺北廳、桃園廳、新竹廳等を歴任した臺灣官場最古の役人である、爾來殆んど三十餘年、粉骨碎身、臺灣を墳土の場所として奮勵努



力せられた公的典型的の人物である。

君は全く一點の野心なき正義の士であつた、而かも犠牲的觀念強く全島に於ける古參官人中君程國家の爲めに不遇の位置を甘んじた者は稀であつた、曾ては恒春廳長より官制改革によつて臺北廳の庶務課長に下り、又官三等の新竹廳より自治制の實現と共に、衆庶の懇望を受けて臺北市尹に轉じ四等官に下るの任命を甘受したるが如き、君ならでは能はぬことであつた。當時の君は當然二等官に昇進すべきであつたが、自治制の施行には世上に幾多の疑惑を挾むものがあつて、臺北市尹の地位は官等低きに反し頗る重大視されてゐた、民間に於て君ならでは此重任を果し得るものはあるまいと官民の衆評が一致してゐた爲め、君は決然として起ち官等低下の犠牲を拂つたものである。市尹としての君は時に協議員と激しき論争を爲すことも珍らしくなかつたが、凡ては公人としての義務を重んじた結果で、出勤退廳等の時間にお構ひなく孜孜として働いたものであつた、あたら紅顔の美青年であつた君もその晩年は實に見る俤もなく面やつれ、ベタコウのニツクネームを頂戴した程に、全頭霜を置いたは雄辯に君の此の苦辛を物語るのであ



つた、臺北市尹の重任に着く勿々宿痾に悩まされてゐたので、友人三好氏、相賀臺北州知事が内地へ轉地療養を薦めたが頑として應ぜず、「病氣で轉地療養する位なら官を罷めさして貰はねば上に對して誠に相濟まぬ』と云つてゐた。何といふ美はしき公的心事ではないか。市尹の功績として特筆に價するものは、特に小公學校の教育方針を確立し、又協力一致を缺いで居つた自治制初頭の臺北市に愛市觀念の大精神を打込んだ精神的勞務の功は大なるもので、君が今日尙名市尹として傳へられてゐる所以である。

大正十二年四月 皇太子殿下台臨に際しては宿痾再發してゐたにも抱らず眞に寢食を廢して克く其奉迎送の大任を完うした、當時君の計畫斷行によつて生れた行啓記念圓山運動場の如きは實に君が市尹として 殿下奉迎の誠意を致した好箇の記念事業として見るべきである。

大正十三年十二月二十三日勅任二等に名譽昇進して總督府土木局長に轉じ、越えて二十五日永年の臺灣官場に惜別し、大正町に閑居靜養に努めたが間もなく逝去されたは惜しいことであつた。



第二代市尹太田吾一君は名市尹武藤老の後を繼いだので凡てが不利なるを免がれず、疑惑の監視を受くるの餘儀なき苦境に立つたが、君の舉措ヌーボーにして捕捉すべからざるが如き觀あるも實は然らず、巧みに世相人心の要領を掴み、何事にも虚心坦懷情實に囚はれず、能く衆議を容れ、苦辛經營に努め、正しと見れば難事と雖も斷じて敢行したので、其誠意は漸くにして市民の認むる所となり、三好、井村、安田氏等長老の庇護もあつて、大に油の乗つた仕事を行つた、今日より見れば臺北市尹としては最も多くの事業を成就して居る。君は明治四十三年の帝大法律科の出身、山水美なるを以て名高い静岡縣濱名郡可美村の産である。

大正九年九月一日静岡縣の小笠郡長を辭して臺灣入りを爲し、臺北州教育課長を振出しに新竹州警務部長を経て臺北市尹に轉じ、高雄州知事に躍進し、現今は臺中州知事として老練ぶりを示してゐる。

君は叙上の如く臺北市尹として存分に働いた。先づ市政の凡てを衆議に諮るべく、市協議員中より常置員を選び、恰かも内地に於ける市參事會員の如き市尹の諮問機關を設



けた。又社會教育、社會事業に大馬力を掛け、市内幾多の幼稚園に助成金を下附し、臺灣に初めての少年團である樺山少年團を創設したが如きも其一である。又財界の好況に好機逸すべからずと爲し、臺北市舊債整理公債を發行して舊債償還に充てたが、其總額は百萬圓、償還期限は昭和二年度より同九年度に至るといふのであつて、其措置頗る宜しきを得たものとして一般の賞讃感謝を受けた。

大正十四年度より上水道給水制を實施し、昭和二年職業紹介所、簡易宿泊所を御成町に新營し、大正十五年東門町に公設水泳場を開き、其他京町大和町の陸軍所有地の移管問題を解決し、市公會堂並に市廳舎新設問題にも着手する等功勞甚だ少くなかつたが、中にも特別大書せなければならぬ大功績を残したものは、昭和二年より同五年度に至る四ヶ年繼續事業として草山を水源とする臺北市第二水道工事を計畫したことである。

君が市尹に就任した當時の臺北市は、人口約二十萬人で水道使用者は其約七割を占め而かも需用者は累年増加する一方とて、既設の(水道町)水源地給水能力を以てしては、數年を出ずして寒心すべき給水状態に陥入るべきを豫想されてゐたので、臺北市の水道擴



張事業は最も焦眉の急を要すること明瞭となつた。茲に於て市當局は水源地の撰擇其他工事費に關する經濟上の利害得失其他に關し調査研究を爲した結果、大屯山方面の湧水を以て水源とするを最も有利なりとし、之が實行計畫を樹立したのである。當初の工事計畫は工事費の關係上第一水源第二水源の兩工事を一時に施行せず之を二期に分ちて、第一期擴張工事は工費二百五十萬圓を以て第二水源湧水のみを導水工事を實施し、第二期工事は二十年後に於て工事費數十萬圓を以て第一水源の導水工事を爲すべき計畫であつた。

然るに昭和元年に至り本水源に關係ある士林北投庄の下流關係部落民から、湧水を水道用水に奪るゝときは灌漑用水に不足を來すべきを訴ふるに至つたので、太田市尹は工事實施前に灌漑用水問題の圓滿なる解決策及工事設計の遺漏なきを期するため、昭和二年三月日本水道界の權威者である工學博士佐野藤次郎氏を招聘して實地の調査を依頼した。而して博士調査の結果工事方法を變更せば、第一期工事費の二百五十萬圓を以て二十年後に施行豫定の第二期工事も同時に施行し得るのみならず、本水源は清冽掬すべ



き水源であつて、而かも非常なる高地で稀に見る天惠水源であるから、其落差を利用して五百キロの水力電氣を發生せしめ、其電力の一部を以て士林庄附近に揚水唧筒を運轉し、本水源引用に故障ある灌漑用水問題を解決し、一方剩餘電力を既設水道水源地に送電し、其の動力に利用せば一舉兩得の策であつて、天惠水源の利用に遺憾なきを期することが出来るとの報告を得た。依て其後博士の設計方針に基き工費二百五十萬圓を以て第一期第二期兩工事を同時に施行すべく工事計畫を變更し工事實施に着手し、現在に至つて居るのである。此工事は總工費二百十五萬圓を以て竣工すべき豫定で、當初の工事費より約三十五萬圓の剩餘を得る見込である。君の此成功は全く萬難を排して佐野博士を招聘した先見の明識によるものと云ふべきである。

第三代市尹の田端幸三郎君は和歌山縣日高郡の産、明治十九年二月生れであるから前任の太田君よりは半歳の後輩である。同郷人の時の長官下村海南博士の引立てによつて大正八年八月警務局に入り、後新制度の際選ばれて新竹州の警務部長に榮轉し、次で警務局衛生課長、臺北州内務部長等を歴任して、昭和二年七月臺北市尹に任ぜられ、在勤



一ケ年十ヶ月にして新竹州知事に榮轉し、今は退官して東京に居住し、政友會系の人として他日の活躍を期しつゝある。臺北市尹にして勅任待遇を受けたものは君のみで、昭和四年三月三十一日此辭令を受け、新竹州知事に轉ずる迄の二十日間全く他に異例なき勅任市尹であつた。君は頭腦明晰、帝大英法科在學中明治四十四年十月卒業に先つ一年前早くも高文にパスした程の英才で、臺灣に於ける勅任昇進も全く同輩を抜いてゐた。特に雄辯宏辭、立板に流水を見るか如く朗々たる音聲は滿場をチャームせずには置かなかつた。君が鐵道ホテルに於ける市尹就任歡迎會での演説の如き議政壇上の天晴天下の選良を見るが如き觀があつた。開口一番「臺北市尹は官吏である、然るに自分は臺北市民諸君に選ばれて此任を奉じたものと思惟してゐる」と大衆的の辭令を用ひ、滿場の拍手を浴びたものである。只惜しむらくは餘りに秩序を尊び、智謀優ぐれたるに禍されてか果斷に乏しかつた。然し僅々一年十ヶ月の在任中に、京町通りの市區改正と、之に伴ふ陸軍用地の買収問題の解決及市街地の整理問題を決し、中央卸賣市場の新設工事、西門、永樂、千歲町等の消費市場の改善を計り、錦尋常小學校、大安公學校の二校を新設



し、上水道擴張工事を進捗せしめ、昭和四年度より三ヶ年繼續事業として南門下水幹線工事に着手し、衛生事務特にチブス撲滅事業に伴ふ屎尿處分として殺菌池特設と墓地問題とを解決し、又市區計畫案の確立促進に努め、其他公會堂の建築問題、社會事業助成會の設立、市政調査費を計上して將來の發展を策する等大に經綸を施し、晩年電車敷設を計畫したが着手を見ずして退官した。君も又臺北市尹としては政治家肌の人として特色を發揮した一人である。

第四代市尹増田秀吉君は、臺北市尹として最も多くの批評を買つた、が君は智謀の人として押しも押されもせぬ一個の傑物であつたことに異論はなかつた。前市尹田端君計畫の電車問題を一蹴し、バスを以て之に代へ尨大なる經費を市民に負擔せしめなかつたあたりは、時代を視るの明があつたと云ふべく、太田君の第二水道問題と共に臺北市經營の一大記念事業たるを失はない。而して當時の市役所は恰かも養老院の感を呈してゐたが、君は先づこの内面に銳利なメスを揮ひて根本的の整理を斷行した。此果斷の前に一切の情實を排した勇氣は眞に敬服するに足るものがあつた。少しく自力を信ずるに



強くて他を善用する雅量に乏しかつたのは惜しかつた。君は埼玉縣北足立郡の産、田端君より一年下の明治二十年生、大正二年帝大獨法科出身、翌年高文にパスし、秋田縣から大正八年十月臺灣に任官し、警務局を振出しに、總督府土木課、臺南州地方課長、同警務部長、臺北州警務部長等を歴任し、一ヶ月計りを總督府土木課に腰かけ、昭和三年五月歐米を一巡して翌四年四月歸來臺北市尹に榮轉した。臺北としては補習學校計畫を考案したが、その一の現はれであつた女子職業學校の移管問題に破綻を生じた爲め目的を達せなかつた。然し補習學校の計畫は時代に適應したもので、君の先見の明は之に依つても知らるゝ。又公會堂問題には三ヶ年繼續事業として工費八十萬圓の思ひ切つた計畫を立て、水道剩餘金四十萬圓を初め他の剩餘金を一切打込んで之が完成を計る意氣込であつたが、種々の故障も頻出したので凡て君の經綸は小公學校後援會の如く終りを完うし得なかつたは臺北市の爲めに遺憾であつた。然し市營バスを斷行して市の交通機關を整備し得たは大手柄とすべく、其他御成町に公設質舖を開設し、重油に依る火葬場の改善、墓地の擴張、葬儀自動車の開始、永樂公學校の開始、錦小學校々舎の新築、上



水道擴張工事及び南門下水幹線工事の進捗、撒水自動車の増設、大稻埕公園新設計畫、道路舗装事業、中央卸市場の新營工事の竣成と開場、京町通り市區改正の進捗と土地問題、青年教習所の設置及青年會の設立等仲々仕事を爲してゐる。而かも君は歴代市尹中の美男で、又若々しい雄辯家であつた。

五代現市尹の内海忠司君は臺灣官場の掘り出し者として上下衆評一致の人気男である。明治十七年十二月生れと云へば前任増田君より三つ上の兄である。京都府宇治郡醍醐の産、明治四十四年七月京大法科を卒業し、大正二年に高文パス、山形縣の一農村に於て郡書記に身を起した所、天下を取らんとする大望を藏し先づ眞の民情に通せんとした。當時の君の心事を想察し得る。かくて大正三年沖繩に轉じて初めて高等官に昇進し、爾來各地に於て郡長、學務課長、視學官、警察部長、内務部長等を歴任し、九ヶ月ばかり浪々の身となつてゐたを昭和三年九月臺北州警務部長に返り咲き、臺南州内務部長を経て臺北市尹に轉任した。

此間佐賀縣で知事と喧嘩したり、滿州や露領沿海州へ出張したり、山形、沖繩、香川



青森、島根、群馬、佐賀、愛媛等に轉々浮草稼業の苦勞を経験し、數奇な半生であつたなどは、前任増田君が秋田と臺灣以外を知らぬ單調な官場生活に比して面白い對照である。

君島都臺北に警視總監たるや、本島人街横行の老鰻征伐を斷じ、臺東の收容所をして忽ち大入滿員札止めを演せしめ、以て大に警察の威力を發揮し、島都をして眞に安きを得せしめた。又街路上の事故頻發、特に自動車の子供礫殺事件が日々の新聞紙上を賑はすので、市民は甚しく不安の念に驅られてゐるを見た君は、茲に交通整理の安全策を編み出し、急速に之を施行して市民の恐怖を一掃したことは、老鰻征伐と共に君の二大功績であつた。又内務部長として臺南に在つた時にも君の存在は餘りにも巨大にして、爲めに時の知事、時の臺南市尹をして何となく影の薄きを想はしめた。

嘉南大圳に關して地方民に不平あり、蓆旗の襲來を見んとす、どの情報を臺北より傳へられ、君泰然として曰く、「百姓は内海の首が欲しいのかどうなんだい」と豪語し、臺北の情報者をして「穴あらば」の感を懷かしめたといふ。



臺北市尹としての君は赴任匆々所内の空氣が何となく暗雲低迷の感があつたので、之を一掃すべく、正しく、明るく、朗らかに、をモットーとして、機會ある毎に其の相互の意思疏通を圖るに努め、今や漸く内海化せられつゝあるのは喜ばしきことである。

君は豪放磊落の裡に明細緻密な所があり、郡書記から叩き上げた仁だけに屬僚の言分を鵜呑みにするが如き馬鹿殿さまではない、それでゐて部下を愛する者にあり勝ちな上長を愚弄する風は君に微塵もない、内海市尹の臺北州知事との折合ひは相賀、武藤兩者の仲睦じかつたによく似てゐる。君は日に何度となく州廳通ひを爲し、スツカリ知事と融合してゐるから、市尹室では悠々閑々大きな椅子に埋れて天井を見上げ、天下取りの夢を見てゐても良いわけ、前任増田氏が忙しさうに行つてゐたとは正反對である。最近臺北市の十一青年團をもつゝ見事に聯合せしめ、市民の一人内海忠司としての君がその五百の青年より總團長に選ばれる光榮を得、五圓の團服ユニホームで若返り、今や國防費献金の大問題を提げ、全島五萬三千の若人に呼びかけてゐる英姿颯爽、何と素晴らし

い内海さんではないか、市公會堂敷地問題、京町通り市區改正及土地處分問題、上水道



擴張工事や、南門下水道幹線工事の完成促進、市場々外取引問題、大稻埕市街照明問題等、君はテキハキ雲集の諸問題に明快な裁きを見せてゐる。

某の長老曰く「武藤は名市尹であつたが、精神的の崇高な人格者で仕事を期待するのは無理であつた。内海こそはほんたうの名市尹だぞ、たゞ市の名譽職が小うるさく彼を悩まささんやうに願ひたい、存分にやらせて見て、悪い時は直接談判諫告するが良い」と筆者又大に同感である。

君は正義の觀念に強く、筋の通らぬことは大の嫌ひで、良いと信じたら千萬人と雖も我往かんの概を以て百の反對も眼中にないと云つた強さを持つてゐる。偉人西郷南州翁は恐らくは君の崇拜してゐる守護神であらう。

女房役の助役中で、何と云つても出群の器であつた人は初代の大橋長行君である。財政通で、品が良く、忠實で、肌さはりが良かつた。

大橋君にいくらか似てゐるのは現助役の佐々木金太郎君である。二代助役村田三郎君の存在は今日判然として居らぬ程、あまり仕事を爲さなかつた。元來は能きる男であつ



たが腕を揮はずして去つたは惜しかつた。三代助役の石川定俊君は今日督府に理蕃課長として時めいてゐる。學士の肩書を二つも持つてゐる上品な仁である。四代助役の長谷川録郎君は財政通、下情通として田端市尹に懇望され、東港郡守から都入りを爲した男である。民衆向きの好女房役の適材であつたが、増田君とソリが合はずして去つた。

現助役の佐々木金太郎君は静岡縣賀茂郡白濱村の産、明治三十一年三月生とあるから三十四歳の男盛りである。東京商科大学出身の商學士、卒業前の大正十五年十二月に高等試験行政科にパスし、翌年卒業と同時に四月臺灣入りを爲し、殖産局屬を振り出しに四年五月七星郡守の登龍門をくぐり、一年後の五年十一月には疾くも衆望を擔うて臺北市助役に擧げられた。先頃臺北市聯合青年團の評議員にも選ばれ、今や市の吏務に明快なる裁決を與ふるの傍ら。青年運動の第一線にも立つて大に活躍してゐる。若くて美男で才氣喚發の君は、正に快男子内海市尹の女房役として最適材である。近時所内の空氣一新し、春風蕪々として眞に朗かなるを得つゝあるは、全く君が夫内海市尹の心を以て己の心とし、忠實なる良妻ぶりを努めつゝあるに由るものである。

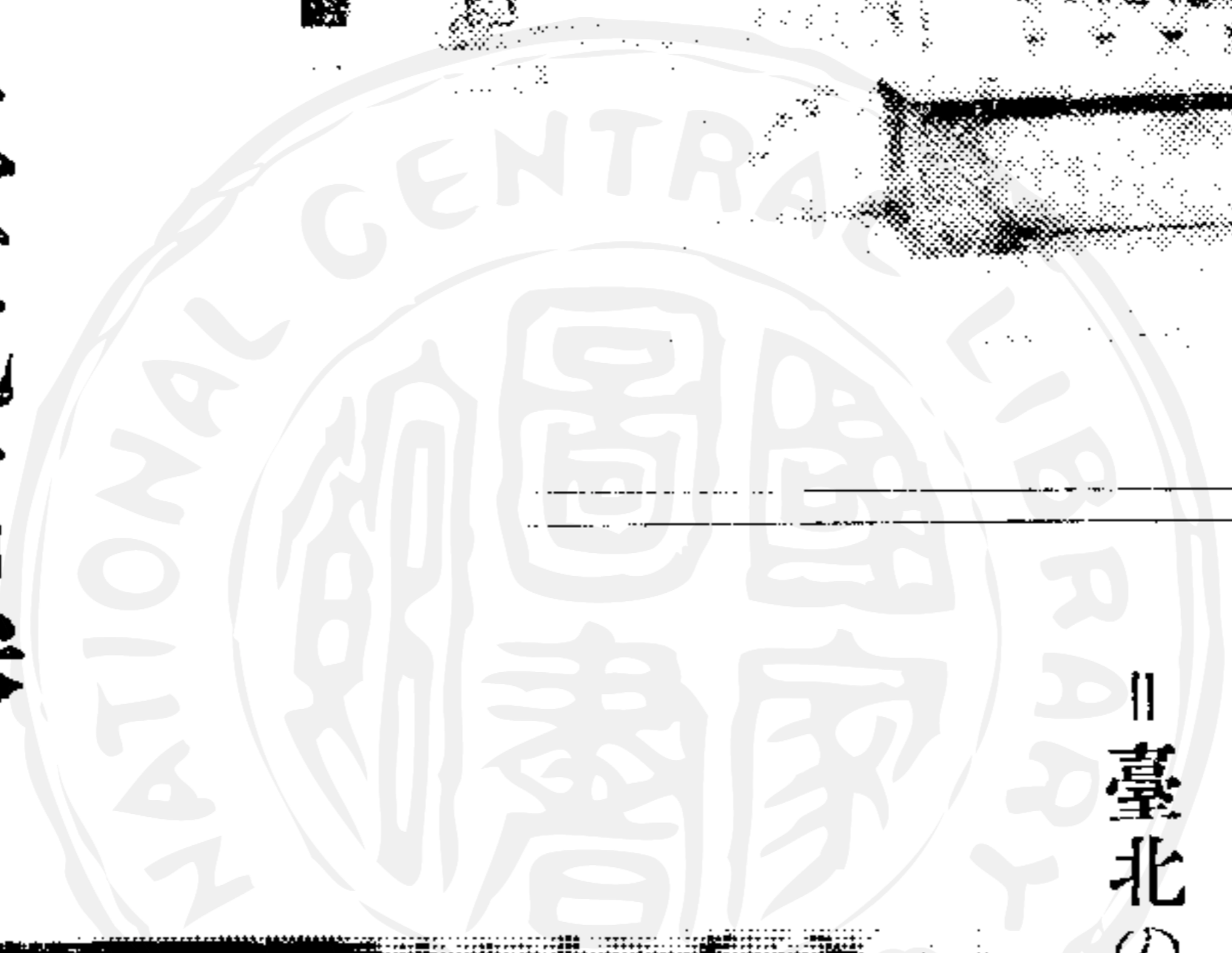


市民の人氣も又滿點で、内外の好評嘖々たるは臺北市の發展上悦ぶべきことである。

餘白を利用して一言して置きたいことは、歴代の市尹を外部から援助した市協議員諸公の功績である、初代から今日迄を市協議員で通して終始市政の努力に一貫してゐる者は安田勝次郎、谷口巖の二老である、初代市協議員の人選方針は、州協議員とのそれには何等わけへだてなく、寧ろ市に人材を集中するの觀あり、三井の津久井、電力の大越、三卷氏の如く市協議員には事實腕利きが多かつた。然るに何日とはなしに、州協は市協の上座に位すものとされ、今や市協には安田、谷口の二老を残して、他の同輩は勿論、下流の人々の多くが州協又は府評に去り、二老は孤影淋しき觀があるのは氣の毒にも思はるゝ、然し筆者は臺北市政の爲めに二老が飽くまで市協に踏み止まつて臺北の爲めに盡されんことを熱望する。



# 風俗の變遷と臺北名勝

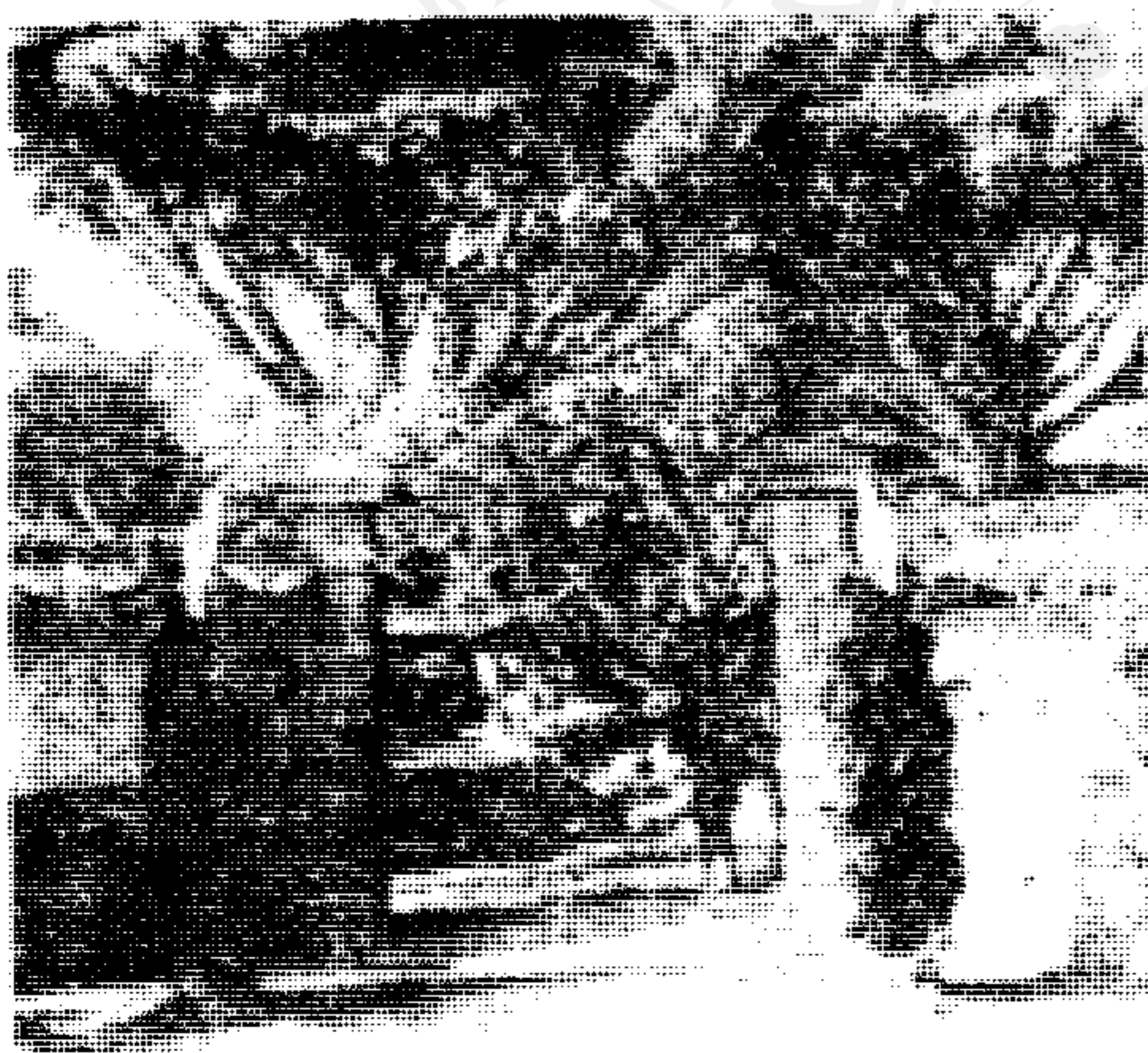


|| 臺北の名勝舊蹟と臺北名物 ||

|| 生活風俗の變遷と臺北人 ||

|| 臺北の社會事業と細民の生活 ||

|| 臺北の享樂境と柳暗花明の巷 ||





## 風俗の變遷と臺北名勝

### 臺北の名勝舊蹟地と臺北名物

…市内の神社佛閣と神佛廟…市内の名勝舊蹟と附近の史蹟名所

…遊覽地としての市の近郊と北投草山臺北の名物とおみやげ品…

神社佛閣は領臺後建立されたもので、臺灣人の神佛を奉祀せる場所は神佛廟や祠である。臺北市内には神社としては、官幣大社臺灣神社の外に無格社の建功神社臺北稻荷神社があるだけで、その他は臺北天滿宮が豊川稻荷と云つた小祠はあるが、これ等多くは會社工場や旗亭妓樓、さては私人の邸宅内に奉祀する小祠に過ぎない。官幣大社の臺灣神社は。臺灣の守護のために鎮座す神社で、臺北市街の東北約一里、劍潭山の中腹に在る(大宮町)。明治三十四年十月鎮座式を擧られ、大國魂命大己貴命少彥名命の三神一座故北白川宮能久親王一座の四神を奉祀しまつるが、一般に故北白川能久親王殿下を奉祀する本島唯一の官幣大社と云はれ立派なお宮で、神苑の樹木は緑に掩はれ鬱陶として繁り、神さびて一段崇嚴の感に打たれる。總地積十五萬千坪を境内にして居る、鎮座式舉行以



後は一般内地人の敬神思想を振作すると同時に、臺灣人の神社に對する崇敬心を馴致し、市内在住の内臺人は勿論各地方の參拜者著しく増加し、最近(昭和四年中)内地人十四萬七千餘人臺灣人五萬八千餘人でその他蕃人や外國人も加へて總計二十萬六千餘人に及んで居る。建功神社も無格社と見ても可いが、改隸以來臺灣で公務の爲め戦死殉職した功勳者の英靈を祀つた神社である。以前は濁水溪を境に南北に分ち各地出身の尊、靈を祀つて、毎年臺北、臺南その他各地方で招魂祭を明治三十五年以來舉行して來たのを、大正十四年始政三十週年記念事業として招魂社の建立に決し、地を植物園(南門町)内の一地域に定め、神社と寺廟の形式を折衷した珍しい建物を建築し建功神社と稱し、昭和三年七月鎮座祭を舉行、爾來毎年四月祭典が盛に行はれて居る、奉祀の英靈約一萬五千餘柱である。臺北稻荷神社も無格社だが明治四十三年六月建立したもので新起町市場内にあり、近來内地人の參拜者が増加するの傾向である。而して神道は金光教天理教御嶽教神習教實行教大社教扶桑教天母教の各教で、金光教は二教會天理教は八教會神習實行扶桑御嶽大社天母の各教は何れも一教會を設け、布教師を派遣駐在せしめて、銳意教務擴張



に努め、内地人の信者もそれごとく多く、金光天母の兩教の如きは臺灣人間に布教し信者を得て居る。けれど各教は信者數に多寡あるのは勿論でそれごとく盛衰がある。而して天理教は明治三十三年以來金光教は三十五年以來何れも傳道し、最近傳來したのは扶桑教と大社教である。佛閣即ち寺院は内地佛教の傳來に依つて建立されたもので、内地佛教の傳來は領臺當時の從軍布教師等が駐錫して開教に努めたのに端を啓いて居る。當時は曹洞東西兩本願寺淨土真言の各宗が活躍したが、明治三十三年頃から各宗本山の經濟難に方針一變し、布教費の支出を節減或は中止したので、在臺布教師は獨立自營を餘儀なくされ、専ら内地人本位に傳道するに至つたのみか、内地人の増加は佛事法要の執務に忙殺され、臺灣人の布教は閑却されたが、最近は臺灣人の布教傳道に着手し効果を示して居る。現在では市内の寺院又は別院は真言宗高野派の弘法寺(西門町)日蓮宗の法華寺(若竹町)真宗大谷派の東本願寺(壽町)真宗本派の西本願寺(新起町)と了覺寺(古亭町)臨濟宗妙心寺派の護國禪寺(四山町)曹洞宗別院(東門町)淨土宗西山深草派の別院(樺山町)等で、他にも本門法華宗現本法華宗等がある。而して別院は曹洞淨土兩宗の外東西本願寺が然うで



あつて、東願寺は昭和五年火災の厄に遭ひ新築の本堂を失つたが、曹洞宗別院も亦た圓山から移轉した淨土宗別院も立派な建物が出來西本願寺は新築中である。この各寺院では何れも婦人會青年會があり日曜學校があり、曹洞宗に中學林があるし、社會事業も行つて居る。而して基督教は領臺前から外人に依り布教され、淡水を中心に西班牙人宣教師が天主教を布教したが臺北地方には及ばなかつた、然し再び南部地方から北進して臺北で布教し、現在も天主教會堂が蓬萊町と樺山町にあり、傳道學校靜修女學校を臺北で經營して來る。英國の長老教會は南部地方を布教したが臺北地方は淡水に根據を置いて布教したもので、マカイ博士の大努力は臺北では教會堂を艋舺に設け次で大稻埕にも設けたが、後ち艋舺より大稻埕方面に力を注ぎ、現在は双蓮(宮前町)に教會堂があり、馬偕醫院臺北神學校を經營して居る。内地人宣教師に依り傳道されて居るのは、日本基督教會(幸町)日本組合基督教會(明石町)日本聖公會(京町)希臘正教會(艋舺新起町)で最近傳來したのはホーリネス教會(御成町)救世軍である。領臺後臺北在住の内地人基督教信者が基督教一致會を組織し、各所屬教會別を問はず教名集會信仰修養に努めて居たが、明治二十九



年五月日本基督教會が傳道のため宣教師を臺北に派遣したから、西門街(末廣町)に教會堂が出来、これが最初であつて後現在の地に移轉した。次で同三十一年聖公會が大正元年組合教會が教會堂を建設したのである。尙基督教青年會があり婦人矯風會禁酒會等があつて、社會風教改善運動に努めて居り、各教會に婦人會青年會日曜學校その他があつて信仰修養に精進し傳道に努め、信者は内地人が大部分で可なり多數で増加の傾向が著しい。臺灣人の宗教は南方支那地方と同じく儒教道教佛教であるから、臺灣各地に在る神佛廟は何れもこの儒道佛の三宗教の神佛であつて、この中佛教と云ふのは支那傳來のもので、曹洞宗や淨土宗と云つた日本の佛教とは異り臨濟宗に近い。而して臺灣人が信するものは道教が多いけれども佛教も儒教も信じ、神佛を祀る廟に行くと、その多くは神廟の主祀は神で、佛廟は佛であるけれども、神廟に佛を寺廟に神を配祀し神佛混淆の状態で奇異の感を誰しも抱くが、南支那でも同じで彼等の信仰が昔から恁うなので、それ以來今日まで傳統的に繼承されて居るからである。それで神廟には廟守があり寺廟には僧侶が居る、僧侶は昔こそ布教も行つた者もないではないが、概して迷信に近い信徒の



信仰で寺廟を維持し、生活し葬儀の行事に携はり、朝夕佛に仕へ讀經するだけを仕事とし、積極的に布教を行はなかつた。恁う云ふ状態なので臺灣の神佛廟と神社寺閣とは全然外觀内容が一つは支那的で同じでないと共に總ての點に於て大に異つて居る。殊に寺廟は多く彼等祖先の地たる福州の巨刹鼓山湧泉寺と末寺關係にあるのだ。而して臺灣人の信仰は今日尙依然舊態を脱しないが、南瀛佛教會や曹洞宗中學林の設置と近時内地人僧侶の活動とで、漸次内地傳來の佛教に接觸連絡を保たうとするの傾向が著しく、僧侶も改善されんとしつゝある故やがて面目も一新されやう。臺北市内に於ける神寺廟は立派な大建築を見る廟から、内地の無縁塚に似た有應公と云ふ路傍の小祠に至るまで數へると五十餘ほどあるが、迷信の深い臺灣人なので、信仰の動搖が甚しく盛衰が著しい。而してその主なるものを挙げると、艋舺に龍山寺(龍山寺町)清水巖の祖師廟、大稻埕の霞海城隍爺廟(永樂町)慈聖宮(太平町)圓山の劍潭寺(大宮町)大龍峒の保安宮孔子廟(大龍峒町)等何れも著名な大廟で、孔子廟は目下新築進捗中だが、それの他は何も領臺前の建立で、古廟として歴史を有して居るものである。尤も領臺前には城内に官が祭祀を行ふ所謂官廟



なるものがあり何れも大廟であつた、然し領臺後祭祀は絶え廢廟になつたが、同じ城内の官廟でない公私廟も艋舺大稻埕に移され、現存せるものもあるが多くは廢廟となつてしまつた。一體何れの廟も廟内の室房を常に總て使用しないから、空房に書房が開かれて居るのが尠くない。この廟の外に市内には齋堂がある。齋堂は佛教徒中觀音佛を信仰する齋教信者、即ち齋友と稱し菜食をなす菜食人なる信徒が觀世音を奉祀する所で、一見普通人家だが内に入れば觀音像を奉祀して禮拜讀經する場所が出来て居る、だから何人でも判るわけでない。恁うした齋堂が八つあるし、その他廟の祭典をしたり或は神佛像を定時に或場所に奉祀して祭事を修める宗教團體神明會が九十ほどある。

名勝舊蹟は何處にもあり、觀光する團體人や個人は必らず訪れる場所となつて居る、唯だ地方によりその箇所にも多少の別がある。臺北市内の名勝は臺灣神社建功神社圓山公園と動物園、圓山運動場と臺北公園(新公園)、博物館と植物園、總督府廳と同舊廳舎、專賣局と同工場、舊城樓門と三線道路、乃木總督母堂墓と明石總督塋域、乃木館と南菜園、古亭町河畔と水道水源地、臺北橋と淡水河畔である。この各所中で植物園は南門町に在る、最初苗圃と稱し熱帶植物の栽培試験場で後に中央研究所の林業試験所となり、



植物園と改名したもので、園内頗る廣大で林泉の美を備へ景趣愛すべきものがある。園内には熱帯各種の苗木草花類を試験的に栽植培養し、臺灣産の樟楠木巒大杉油杉の有用木、椽果パンの木の珍奇な果樹類を始め、薬用染料香料油脂植物の各種を網羅し四百有餘種に及んで居る。園内に商品陳列館があり、武徳會臺灣地方部があり、柔劍弓道場角力場馬場があり、建功神社もある。明石總督は大正八年十月郷里に薨去され、遺言で同年十一月三橋町の塋域に遺骸を葬つたので毎年墓前祭が行はれる。乃木總督母堂も明治二十九年十二月臺北に永眠、同じく三橋町墓地に葬り毎年墓前祭を行つて居る。尙後年墓標兩側に故乃木將軍夫妻の遺髪を埋め碑を建立した。乃木館は乃木總督官邸跡で乃木町臺北偕行社構内に在る。南菜園は兒玉町に在り兒玉藤園將軍が總督在任中別荘として建てられたもので、建物は簡素な茅屋、政務の餘暇此處に來り吟詠自ら娛まれた所、辭任本島を去るの際臺灣婦人慈善會に寄附され、今日も同會が保管して居る。龍山寺は艋舺龍山寺町に在り、約百九十餘年前乾隆三年の開基建立に係る臺北最初の巨刹で觀音佛祖を祀り、最近臺灣が生んだ彫刻家黄土水氏の彫刻した釋迦尊像が配祀され、遠近から



善男善女の日々に參拜夥しく、現在の廟宇は昭和三年十二月落慶式を擧げたもので、その結構莊嚴木石彫刻の巧妙と華麗なのは人目を眩するばかり、實に臺灣寺廟中の白眉として全島に冠絶して居る。劍潭寺は鄭氏時代の開基で、臺灣神社の程近き所に在り、再建して今日に及んで居るが、莊麗色彩絢爛の美は、近くを流る、基隆河は劍潭の水光に映じ浮城の如く、臺灣人の敬信篤く詣者が絶えない。霞海城隍爺廟は小さな神廟だが、臺灣人の信仰頗る深厚で、毎年行はる、祭典は非常に盛大を極め全島に冠たるものである。而してこの城隍爺の神像は猛舄の分類機闘に敗退して大稻埕を建街した、その敗退街民が逃げる際捧持して來て祀つたもので歴史的因縁が深い。次に市外としての史蹟は臺北市を去る北淡水線に沿ひ三哩餘で士林驛がある、即ち其處が士林街でそれから北東十二三町草山道路の左方水田を隔て、屹立する丘陵が芝山巖であつて、全山岩石から成り奇峭削るが如く、苔蒸して古木生ひ閑雅の境地である。この丘上に惠濟宮文昌閣がある、此處は古來文人相會して文を練り詩を作つた所で士林の名も畢竟此處に起源すると云はれて居る。この丘の東方に揖取道明氏以下六名の殉難教育家の碑がある。それで既に記述



した如くこの丘山の宮閣内に改隸當初學務部を置き教育事務を開始したもので、臺灣教育の發祥地である。一方この七教育家は匪賊の兇刃に斃れ殉職した故、尊い史蹟の一つとされてある。それで毎年二月一日臺灣で死亡した教育家を合祀して芝山巖祭が行はれて居る。尙少し遠くの地では古い開港場の淡水港や温泉場の草山や北投、竹仔湖それから松山の鷺山、板橋の林本源庭園、南に行つて新店の碧潭から蕃地の烏來の温泉があり。恁うした市外の名勝は何れも一日或は半日で往復が出来清遊に適するのである。

市内の遊覽地としては土地柄が内地の各地と大に趣を異にして居るから、一日の行樂として遊覽する場所に乏しく、また土地も狭いのでこれに適しないため、市民の行樂は春の花見も出来ず僅に郊外散策か、自動車が開通し鐵道の便があつたりするので草山北投の温泉か、夏は基隆淡水の海水浴が盛況賑を呈するが、市内では新公園植物園の散步位に過ぎない。それで内地その他からの渡來人は、臺灣人街の艋舺大稻埕に南國的な異つた支那色彩の濃厚な街觀や、臺灣人の服装その他珍しい光景を見、神寺廟に詣で、趣を異にせるに驚き、臺灣の臺灣らしい所を見物もするし、所謂名勝舊蹟も訪れるから



可いが、在住臺北市民殊に行樂を好み遊覽地を欲しがる内地人には唯だ草山北投があるのみと云ふのだから氣の毒で、市の内外に於ける遊覽地と云ふのは畢竟名勝舊蹟地に過ぎないのである。而して海水浴場としては海がないから近くの基隆淡水に求めるより他になく、兩所の海水浴は臺北からの人出で土曜日曜その他の休日は賑ふと云はれる位である。而して温泉場としては古くから知られる北投と最近利用者を増した草山があり、蕃地としては最も近い地點と云はるゝ烏來がある。北投温泉は臺北から約三里淡水線の汽車で三十八分で達するし自動車の便もある。この温泉は光緒二十年（明治二十八年）獨商アーローが發見したるもので、硫黄泉鹽類泉單純泉の三種がある、宏壯な公共浴場を中心に公園があり、四圍翠綠滴り靈泉の氣衣袂に迫り幽邃閑雅な温泉場で、全島第一の保養地且つ遊覽地で、旅館旗亭俱樂部別荘があつて四季浴客が絶えない。草山温泉は七星郡草山庄に在り、士林からは二里二十町北投から二里十六町、海拔千二百尺で自動車の便がある、沿道風景絶佳で滿山の桃林開花の候は杖を曳く者が多く、將來この地を中心に一大遊園地を造るの計畫があり、臺灣十二勝の一つで幽致閑雅の一仙境、聚樂園



と云ふモダンな大建築の公共浴場が新に設けられ、その他警察官療養所舊來の公共浴場旅館別荘もあつて盛夏避暑の好適地であり、大正十二年四月鶴駕を駐めさせ給ふた貴賓館もある。此處より一里餘七星山の半腹に竹仔湖がある、土地高濶で淡水基隆の諸川帶の如く環流する臺北平野を眼下に展望し得て風光頗る雄渾であり、内地櫻千餘株が移植され、花期は花見に客が多い。烏來温泉は臺北から七里で蕃地ウライ蕃社に在る、新店から輕鐵や轎の便がある、南勢溪の沿岸に湧出する炭酸性鑛泉で公共浴場があり、幽邃の一仙境で一日の清遊に適する。新店の碧潭は文山郡新店に在る、臺北から三里餘汽車自動車の便がある、臺灣十二勝の一つで碧水深く翠巖これに倒影する處風光掬すべく小赤壁の稱があり鮎の名産地、此處から新店溪を下り臺北川端町まで約三里の間深潭あり激流あり、肝を冷しつゝ舟を行るは頗る痛快で、所謂川下りと稱し臺北人士は夏の興として船を此處から川端或は艋舺に下るが、此處も納涼觀月に適する所である。名物に甘いものなしと云ふ通り、臺北の名物としてはこれはと云ふものがない。臺灣人の珍しい風俗習も名物と云へば云へる、かの城隍祭の賑かなことも名物の一つであら



う、内地人の元旦の臺灣神社參拜、臺北驛頭の送迎、市營バスや臺北の舊城門、三線道路に苦力、臺灣婦人の洗濯と田園の致景である農民の姿に、農事水牛豚鷺の類、悪いのでは老鰻に腸チブスの流行、食物では蜜餞の支那式砂糖漬、川端旗亭の川魚料理鯉鮎の味、蛇皮細工品苧麻織物、高砂麥酒は唯一の島産麥酒、これは最近だが藝妲の唄ふ日本の俗謠、臺灣人行商の掛値、世界的名物が烏龍茶包種茶で、これは臺北で再製輸出品となる、まづ此麼もので詳しく調べれば幾多もあらう。おみやげ品としては蕃産品に支那骨董、蛇皮細工に蜜餞品、果實類に苧麻織物、烏龍茶に紅茶、蕃産品商で賣る臺灣工産品で、大甲藺の細工品に支那人形、水牛の角に樟や籐のステッキ、樟やその他臺灣産名木の細工品に籐細工品、文石夜光貝の製品等々で、これも詳しく調べたら亦た多いであらう。それに臺北名物と云つて賣る品に他の地方でも製造して賣るものがあり、たゞ臺北名物と冠するだけのものがある。殊に概してみやげ品として内地に居る人に贈ると値打だけに見ないで安く見られるのが多く、たゞ臺灣色彩の異つた珍しいだけと云ふ品に過ぎないので、名物に甘いものなし碌なものなしと云ふ諺が、何だかよく當つて居ると思はれる。これも畢竟高値だからで、蕃産品などは特に高いやうだが、これは臺北と云ふのでなく



臺灣のみやげもの全體と云ふべきであり、その他果實類も然うである。恁う云ふ見地からすると眞の臺北名物としては僅少になるのも仕方がない、一つ臺北名物として恥ないものを産出してみやげ品にする工夫が必要ではあるまいかと考へる。

### 生活風俗の變遷と臺北人

…生活状態の變遷と内臺人…風俗の移遷と流行の傾向…

新職業の出現と婦人の街頭進出…臺灣人の年中行事と内地人…

時勢の變遷に連れて現はれたる世上の人の動きも、時と共に移り行くのであつて、そこに進歩と退歩の二つがある。島の首都臺北は、領臺後臺灣の異常な開發進展の結果、統治中心地として將た又た商業經濟の中樞地としての地位を占めて居る關係上、他の地方の都市に比して更に一層大なる進展を示し、文化は向上して文明の一大都市を出現した。従つて此處に在住する二十餘萬の内臺人は、日進月歩の現代の文化を取り入れ、日々に新に進み行きつゝあるのであつて、領臺前のそれとは總ての方面に於て比較にならぬ進歩を示し、全く今昔の感に堪えぬものがあると云はれ面目は一新してしまつた。さ



れば憊うした時代の進運に恵まれつゝある人々の生活状態も、亦た大に進歩したことは、總ての事實がこれを證明して居る。在臺北市の内地人の生活状態も、領臺當時のそれとは全く趣きを異にして居る。何しろその當時は植民地への出稼き、新領土へ行つて一儲けと云つた一攫千金を夢想した連中かゝさもなくば新開の地で甘い汁を吸はうと云ふ徒輩が多きを占め、従つて殺伐たる氣風が生んだ生活状態は亂暴なものがあり、眞面目を缺いだ嫌ひがないでもなく、第一家政を司る妻君も居なければ、可愛い子も居ないで働き稼ぐ男だけで、女と云へば浮いた稼業の化粧者位、家庭などを營む人々は極めて尠く、酒と女とが彼等の慰めものと云つた工合であつた。然し歳月を重ねるに従ひ諸般の施設が備ると、此間自然的に生活状態に變化が來たし、不眞面目の者は自然に淘汰され社會も憊うした人を容れなくなり、而も一方交通機關が發達して、内地との交渉が益々密となり、内地に於ける時代の動きが文化と共に押寄せて來るのみか、海外の風潮や刺戟も受けて、漸く眞面目な人々のみに依つて働かれるやうになり、妻子と共に眞面目な家庭が營まれることが多く、かの領臺當時以後幾年か存在を認められた灣妻も、遂に逐は



れ姿を消せば、若い人々が漸次に一本立となり、これ等の人々が受けたる教育の力で働く者が多くなつて來て、今や正に内地のそれと殆んど異ならぬ生活状態を見るに至つたものの、臺灣は臺北でも何處でも同様に、これも植民地と云ふのか、神棚や佛壇ある家や若人の居る家が少いやうだが。これは漸次多くなる可能性が認められる。而も一方概して腰掛主義のものが土着するの傾向が多く、自宅を建築したり、縁組を結んだりすることが近時多くなつた、然し一體にまだ老人と同じに親類縁者の關係、即ち系累と云ふものを持つ人が尠い、従つて主人主婦はこれが爲に暢氣に暮らせるやうだ。交際は所謂寄合の衆と云つた工合に、向三軒兩隣位で、親類や縁者の交際の如き面倒な煩さがなく、内地人の家庭人が比較的暢氣な生活をするのも恚うした事情に因る。然し更に歲月が経れば、これ等の事情は遷り變つて内地のそれの如くになると思はれる。而して文化の向上や時勢の進展は内地のそれと益々密接ならしめ、刺戟も漸次強くなりつゝあるから、生活難の叫びが巷間に聞えて來るばかりか、近時の不景氣が生んだ緊縮時代には、この生活難が刻々高まりつゝあつて、決して以前の如く樂な所でなくなりつゝある。殊に島の首



都だけに臺北は内地人も多いからこれが亦た一層甚しいのが現状で、景況の好轉を誰しも待ちつゝ奮闘努力して居る。而して生活状態の變遷の殊に著しいのは臺灣人であると云つて可い、彼等は總ての方面が領臺後進展開發されて面目を一新した結果と、文化の向上教育の普及等々の原因で、先づ家屋が大部分改善され、文明の恵みに浴し得た彼等は尙一面に於て舊態を持續しながら、それが部分的に改良され、服裝の如きも洋裝が多く見られるし、生活状態も若い新しい即ち現代の教育を受けた人々の間には日本流になり、日本家屋に住むものがあり、特に疊の部屋や内地式便所を設くる者が多くなり。内臺人の結婚も屢々見られるし、内地人との交際が頻繁になつて交渉も多くなつたから、これに伴ふ生活上にも變化を見るに至つたことは、一々例舉するに暇がないほど夥いのである。然し何せ臺北在住の大多數を占めて居る一方、時代に順應した生活振を見せるのは新しい若い彼等臺灣人の新時代の教育を受けた人々か、その他然らざる者で時勢の變遷を洞察し、總ての變遷に就いて理解して、これを行ふ一部の人士であるから、まだ大多數は依然舊態を持續して居て、これが容易に改善されないのは一面舊慣墨守の弊にも



歸因するし、老人が家庭や社會に相當權勢力を保有して居るのみか、殊にこの老人の多數が舊慣を墨守することが甚しいからである。従つて臺北の臺灣人が營む生活狀態は一方新しい進歩した人に依つて改善され、改善されつゝあると共に然らざるものとあつて、それは過渡時代に在る臺灣人の立場から生まれた事實で、内地人のそれと同じになることは非常に困難であり、舊態の改善も難事であるから、新舊混沌したものであると云つて可いが、然し時勢の動きは著しくはないけれども、漸次に改善されて舊態は打破されつゝあることは事實である。卑近な例としては服裝に於ても見られ、男子のシャツ帽子類、女子の髪飾化粧品洋傘等何れも内地品を使用し、食事の調理法食料品に於ても見られ、日本酒ビール清涼飲料水や味の素味噌醬油等が多く用ひられるばかりか、臺灣人が使用する生活用品中に、内地人が使用する物品が漸次多きを加へつゝあるのでも明白である。従つて將來は今日の新しい教育を受けた若い人々に依つて、必らず生活様式が變化されることは勿論で、現在はまだそれまでに達して居ないと云ふことが出來、まだ南支那に見ると同様なものが多分に行はれると云ふべきで、これは一面に臺灣地方色



を示すとも云ひ得るのである。

臺灣に於ける内臺人の生活状態が、時勢の動きと文化の向上に伴ふて變遷を見ると同じに、風俗の變遷も見ることが出来得るのである。内地人は風俗の上に於ては特に變遷の著しいものが多くはないが、近時は内地のそれが頗る急速に反映することであつて、これは交通機關の發達で内臺間の隔離が短縮されたことが大に原因すると思はれるが、著しく目につくのは婦人の服裝や結髪や持物等で、洋髪が多く日本髷を見るのは少く、また洋裝が女學生や女教員以外にもこれを見るし、夏期には大阪地方で「アツババ」と稱する西洋人の寢衣即ちナイトドレスに似而非な輕裝が多くなつたことである。これは餘り見好いものではないが、暑い土地柄であるから一つの便法であるとして恕すべきだらうが、外出時に着用は考へさせることが多い。男女學生生徒や小學校兒童が制服やそれに類似の洋服を學校以外に着用して、殆んど常用にして和服姿のものを見ることも稀になつたことや、幼兒でも洋服を常用させる風が甚しく、殆んど總てが然うであるやうになつたなぞは、時勢の動きが然うさせたのであらう、現に袴を着用したことがない小學校生徒が多



いと云ふことだが、これも變遷した風俗の一つであらう。但し靴も下駄も併用されるがフェルト草履を穿つものが多いやうだ。而して内地人の男は内地のそれと殆んど同様で、臺灣いや臺北に於いては特記すべきものがないと云つて可い。唯だ官吏の金ピスの制服が改正されて勅任奏任判任の別が平常に見別けられなくなつた位である。臺灣人は明治三十五六年臺北風俗改良會があつて盛に唱道したが時勢漸く變遷を見て、男にして洋服を着用するのが多くなり、若い人は殆んど外出その他の場合に洋服を着用するし、靴は勿論下駄が多く用ひられ、裸足は苦力その他勞働者の下層民の細民に限られて居る。頭髮も明治四十四年二月に故黃玉偕と云ふ有徳名望家が主唱の下に斷髮會が大稻埕に開かれて、種々のナンセンス的悲喜劇が屢々演ぜられたが、何等官憲の干涉もなく自覺的に自發敢行されて、今では辨髮の舊態を見せるのは極々少數の老人に過ぎなくなり、内地人同様散髮を見せて居る。殊に面白いのは多く若い人々だが和服を着用する者が漸く増加して來た。これは日本人家屋に住居する連中に見ることが多く、何れも國語の巧妙な人等である。婦人に就いては辨髮廢止と前後して黃氏の主唱で漸次纏足を解いたも



ので、今の若い女性には全く纏足を見なくなつたが、中年以上殊に老婆衆には尙今日見  
るも、これは市内の人に尠く郊外部落の人に多い、これは女だけに改善上に種々の困難  
があるらしいのであるから、臺北市内隨所殊に臺灣人街には勿論バス等の乗物内でも見  
受け、その危氣な歩行は寧ろ憐憫を感じて、舊弊の害を痛切に思はしむるものがある。  
衣服も尙多く従來なものだが、藝姐と云ふ藝者やその他花柳界の女性とか、中流以上の  
若い女性の間には上海流行の支那婦人服が多く見られるし、若い女性の中には結髪も洋  
髪が多く斷髪なものも尠くないが、これは斜巷の女に多く見るのである。而して極少數は  
和装の者もあるがこれは女學校の生徒か出身者である。而して幼兒にはよく和服を着せ  
て居るのがあるし、男女學生生徒は何れも制服だが、公學校の兒童はまだ多く臺灣服で  
中流以上の家庭の兒童中には洋服のものもある。流石女性殊に廣東人と云はるゝのが少い土  
地とて、纏足して居た關係上加概して靴や下駄を穿き裸足はまづ皆無と云つて可い、こ  
れも下層の細民の若い人を除き女は多くは纏足をして居たからである。唯だ公學校の兒  
童やその他で裸足のものがある。而も下駄は臺灣の下駄であるが、内地人の穿く下駄も



漸次使用することが多くなりつゝあると云ふことである。而して内地人と接觸交渉が密になつたからか、臺灣神社の參拜も盛になり、婚禮や葬式も内地風を眞似る者が出て來るし、吉凶慶弔にも花輪を贈る風が盛に行はれ、聘金の弊も緩和される傾向が見え、輓近神前結婚も増加し、披露贈答も内地人風を加味する等大分内地人を眞似、火葬さへ行ふ者があり、内地風の葬式を行ふものが尠くないのも風俗の變遷であらう。然しまだ風俗の大部分は舊態を脱しないことは、生活状態のそれと同じであるけれども、漸次時代に目醒めて來るだらうし、若い人々の力も強く動かし、更に内地や上海その他の刺戟で可なり變化するであらうと思ふが、また實際上變化しつゝあるのである。次に時勢が生み時代が動かす流行は、内地人は内地の流行を趨ふし、臺灣人は支那民族であり交渉もあるので、支那殊に流行の中心地とも呼ばるゝ、上海のそれが刺戟と影響とを受くることが夥しいのと、一方内地の刺戟影響も可なり受けて居るが、生活や風俗の差異は上海の力ほどに強く及ばない。而して内地人の婦人間に於ける流行は、臺北では花柳界が魁をするのでなくて一般に上中流の婦人からであつて、花柳界の女は別に内地の花柳界のそれ



を趨ふと共に臺北の流行を取入れるのである。臺灣人の婦人は藝姐なる花柳界の女が魁をするのであつて、或部分は内地人婦人の流行を取入れると云ふ傾向がある。そして恁うした流行の傾向は、内地人に於ては新聞や雑誌の記事廣告がこれを動かすに力多く、臺灣人に於ては上海との交渉が密なるが故であらうと思ふのである。殊に臺灣の老年中年の男女は幾分流行を趨ふけれども、多くは舊態を持續する風が例の舊慣墨守の弊に陥つて居るため強く、彼等を支配して居ると云ふ状態である。けれども便利で嗜好に投ずるものは彼等の間に流行するのは何等不思議もなく、又た若い人々の流行を趨ふには餘り苦情を云はぬと云ふことである。殊に女性に於ても然うなのは、嫁になる身の可愛さど、花と飾らさせたい親の心からであらう。その他内臺人何れに於ても時代に順應した流行は、男女共に同じで單に服装のみでなく、ピアノや蓄音器ラジオその他新しいものを好むのに何等變りなく、時には随分妙なものや妙な事が流行することも屢々あるとは内地その他何處とも同じである。然しその間に内臺人に差別あるのは仕方がなく、恁うした事も臺灣らしいことと云ふものであらう。



文明が生む生活風俗の變遷は、一面に於て生活手段に就いても種々の現象が出現するのは何處とて同様であつて、世の中に活動して働く方面も、複雑に且つ多種類となるもので世智辛くなると云はれる所以だ。臺灣も亦た然うだが臺北はそれが一層甚しい。されば進展に伴ひ活動する方面が多くなると共に、優勝劣敗の結果を生む競争も亦た自然に激烈たるを免れず、其處に生活も痛感せざるを得なくなつた。従つて從來家事育児を以て天職とした婦人も、恚うした事情から街頭に進出して、職業戦線に打つて出るものが近年著しく多くなつた。これは無論中産以下の人々に多いが、生活に餘裕があると思はれた臺灣で時勢が恚うせしめたのは、内地の都市に於て見ると同様である。尤も學校の女教員嫁母、看護婦産婆とか遊藝師匠とか云つた方面の女性は従前からこれを見なければ、所謂職業婦人として活動し働く女性は餘り多く見なかつた。殊に恚うした女性も多く若い人々で、女學校の出身者が可なり多くその他にもある。即ち銀行會社さへは官廳等の女事務員タイピスト電話交換手乗合自動車の車掌女給等が主なるもので、放送局が開設されてから女アナウンサーが現はれ、マネキンガールやダンス教師等も



出來、詳しく調べると尙夥だしいものがある。男にしても新職業は自動車の運轉手やアナウンサー、チントン屋等の廣告口上人や映畫の解説者等々で、まだこの以外多いことであらう。臺灣人も領臺後は新しい職業が多くなつたのは、内地人に使はれるやうになつたからで、殊に多く見る新職業は自動車運轉手であらうが、内地人から職を傳習會得して、内地人同様の職業する者が非常に多い、職人と云ふ稼業がこれである。この他アナウンサーや映畫解説者、銀行會社商店官廳の事務員や給仕小僧等々で、これも亦たその種類が甚だ多い。而して臺灣人の女に至つては、例の纏足をしなくなつた關係も多く、また時代の進歩と生活向上の結果その他の事情で、家にのみ在つて男から扶養されて居たのが、戸外に出て働くやうになつて來てそれが著しく、中産以下の人々は大抵男も女も働き稼ぐので、工女になつたり内職をするのも多いが、内地人の家に下女奉公するのも尠くなく、傭はれて洗濯をして歩き稼ぐのも多い、これは臺灣でないと見られないと思はれる女の職業の一つ、まづ女労働者に屬すべきものであらう。その他若い女性は銀行會社の事務員給仕タイピストやバスの車掌が新しい職業として多い方だし、『女給



や撞球場のゲーム取り電話交換手も多く、なか／＼數へると十や二十ではないが、大體はこんなものであらう。恁うして新職業も多いが、女性が職業戦線に立つと云ふのは内地人では中には家庭を持ち夫婦共稼のもあらうが、或は家計助勢のためとか或は嫁入仕度にと云ふのも尠くない。臺灣人とても然うであるが、公學校を出た少女で、銀行や會社その他に給仕として通勤するのは、家計の助勢嫁入仕度を目的とするのもあるが、多くは恁うした職業を持つのが一種の誇の如く思ふと云ふことである、これは何れも出身學校長の推薦で考試の上に採用されるからである、それ故彼女等の収入は、多く被服裝身具その他の用品代に費されるのが多いと云ふことである、これなどは一寸面白い不思議な事實ではあるまいか。尤も恁う云ふ連中の家庭は、中産以下でも何も娘に稼せなくとも可い程度の者もあるさうな、但し極く新しい職業の車掌や多く見られる電話交換手その他は、この給仕連とは異つて家計の助勢や嫁入仕度のためが多いと聞いて居る。而して内地人でも臺灣人でも恁うした若い女性は、多く嫁入前の娘であるから、やがて嫁入すべき時期が到達するのは當然であるため永く勤續する者が少いさうな。これは給



料や手當が男より安く、殊に客人や取引先の人との應對に女の方が優しく、比較的親切で丁寧でもあるから至極好いものだけれども、結婚と云ふことがあるので、傭ふ人がこれだけを苦にするが仕方がないと云はれる、それ故に女子職業人は永續性がないのが缺點とされて居る。然し職業人として女子が出現して使用されることも多くなつたが、まだ臺北は勿論臺灣では女子が男子の職業を侵蝕するやうなことは絶對になくつて、云はゞ女子の職業人は少數であり、仕事も自ら男子と區別されて居るから、内地で聞くが如き事實は遠き將來は知らず、またその域にも達せず、決して憂ふべき事でない」と云はれて居る。而も臺北は土地柄だけに女子職業人も多いが、他の地方に行くとき都會地には少數見るだけに過ぎないし、新職業は男女共に臺北が最も多く多方面であると云はれて居る。

生活や風俗の状態が變遷して居るが、この傾向は多少見られながら、内臺人の年中行事は従前と多く異なる所がないと云つて可い。而して臺灣人の年中行事は縦令支那的色彩であつても、これが所謂臺灣の地方色を現したものであるから面白く、土俗研究の資料



にもなると云ふものである。而して臺北に於ける彼等のみならず内地人も然うだが、他の地方のそれと大同小異であると云つて可い。これは一つに大和民族であり、他は南方支那民族であるからで、内臺人共にその祖先の風習から來て居るに因るのである。而して臺北に於ける年中行事で國家的のものは一月に四方拜元始祭政治始新年宴會御講書始陸軍始御歌會始、二月には紀元節祈年祭、三月は地久節陸軍記念日春季皇靈祭(春分日)、四月神武天皇祭、皇太子殿下啓記念日天長節建功神社祭(招魂祭)、五月は海軍記念日、六月は始政記念日、八月は日韓併合記念日、九月は秋季皇靈祭(秋分日)、十月は神嘗祭臺灣神社祭教育勅語下賜記念日、十一月は軍旗祭新嘗祭、十二月は大正天皇祭帝國議會開會等であり、社會行事は一月に名刺交換會年賀回禮事務始消防出初式新年會、二月は芝山巖祭建國祭天神祭雛市、三月は種痘實施諸學校證書授與式郊外遠足、四月は諸學校入學式諸學校新學期開始警察記念祭釋尊誕生會花祭孔子祭(春祭)、春季大清潔法實施、各種體育運動競技會夏物賣出し五月人形市市營プール開場愛婦赤十字總會、六月は時の記念日新兵入隊滿期兵除隊諸學校夏季休業小公學校臨海教授水泳避暑登山海水浴施餓鬼納涼的



催事、九月は酒なし日震災記念日乃木祭秋季大清潔法實施觀月的催事孔子祭(秋祭)、十月は市政實施記念日明石總督祭學校運動會各種運動競技會、十一月は聯合運動會(體育デー)新兵入隊滿期兵除隊、十二月は歲末大賣出しクリスマス乃木母堂祭御用納諸學校休業大稜年賀郵便取扱忘年會。家庭的行事としては一月に年賀試筆仕事始等新年の行事遊樂社寺詣、二月は節分雛飾、三月は雛祭春の彼岸、四月は鯉幟(五月人形)飾、五月は端午節句螢狩、六月は大稜稻荷祭、七月は七夕盂蘭盆中元藪入虫干、九月は彼岸觀月、十月は郊外散歩、十一月は七五三の祝觀菊十三夜、十二月は煤拂歲暮祝儀迎年準備除夜等で、以上は内地人側のものだが、國家的や社會的の行事は、内臺人共同で行はれるのである。家庭的行事は内地で漸次廢頽勝ちな節句など盛んであるのも、土地柄嬉しく頼母しく感ずるが、櫻なき土地でお花見氣分が味はれないのが遺憾だが仕方がない。臺灣人の家庭行事は表面は陰曆廢止となつて居るがまだ容易に廢止されず、彼等間には舊曆が行はれて居る、これも舊慣墨守の弊で改善は至難である。されば臺灣人は社會的行事で内地人と共に行ふ場合の外新年行事等は新舊兩度行ふのみか、通知その他年月を用ゆる時も新



舊曆兩様であると云ふ不便を敢行して居る。而して臺灣人は年中祭典を行つてお祭好きだと云はれる通り、行事の多くが神佛の祭祀であるのも風俗習慣の爲めで、支那民族なるが故である、然し大分内地風を加味して改廢が行はれて來て居る。一月元旦土地公祭老鼠毛妻（黨の嫁入日）接神開帳（初南）祖師公生夫公生燈節（上元節）、二月福德神祭文昌帝祭觀音媽祭一期米植付、三月清明節（展墓）、三日節保生太帝祭祈平安媽祖祭、四月迎神、五月城隍廟祭、六月皇帝曝龍服半年節觀音媽生二期米收穫二期米植付、七月開鬼門閉鬼門（盂蘭盆）七娘媽生（七夕）放水燈普度（施餓鬼）中元節、八月灶君生中秋節廣澤尊王生、九月重陽節、十月三界公聖誕日二期米收穫、十一月冬節（冬至）、十二月尾牙（歲末決濟）送神皇帝生、辭年（除夜）等で、各神佛を擬人視偶像を拜して信仰するので、聖誕日を生と稱して祭典するが、非常に祭典數が多く何れも盛で、また實際祭典に多大の費を惜まない位である。

### 臺北の社會事業と細民の生活

…臺北の細民部落とごん底生活…浮浪者と不良少年少女…

不景氣の襲來とルンペン…臺北の社會事業と市の施設…



文明都市の華かな反面には、生活苦に喘ぐ細民部落の暗闇さが影を投げて居る。時勢が進み發達すると共に、文化の向上するに伴つて、自然に激烈な生存競争が正しき方法に於て行はれ、優勝劣敗の結果が見られるもので、これが文運の進歩の度に應じて著しさを増すのである。所謂世智辛くなつたと云ふ渡世の難事は、生活難に喘がなければならなくなる。細民が生まれ、敗慘落伍者が見出されるのである。これは人々の運命の如何にも因るだらうし、人その人にして何等かの缺點もあらうし、兎に角處世法が拙なく多くは自ら招いたものであることは、臺灣のみでなく何地も皆然りである。臺北に於ける細民は内地人では事業に失敗したり、病苦に悩まされたり、失業失職したりその他種々の敗慘者たるべき徑路を辿つた者で、それは悲慘の境遇に在るが、殊に良人や子女と死別生別すべく運命に陥つて、赤貧に苦しむ者もある。これ等は多く臺灣人の家屋の一部を間借したり、日本人家屋のあばら家に起臥して、官廳側や附近の人々の情に露命をつないて居るが、然しその中に種々のその日稼に僅少の収入を得て居るものもあるが、それは云ふほどの數でなく實に哀れなもので、破れた衣をば纏ひ粗食も粗食漸く粥をすゝる



位だから病を獲れば醫藥を得るの資なく、内地に歸る旅費もない徒に死を待つゝの境遇で、情ある人の世話で施療を受ける始末である。けれど流石に袖乞をする乞食は内地人にはないと云つて可いけれども、浮浪者はなかく、尠くないと云ふことである。内地人に比して生活程度が向上したと云つても尠甚だ低い臺灣人は、總てが簡易で細民に至つては實に驚く位、どん底生活の悲惨状態は誰も面を外向けて驚き呆れ、憐憫の情に堪えない。即ち破衣に瘦軀を包む姿は男も女も乞食と同じである。臺灣人の家に間借する者は可い方で、檐下の小さい部分に板圍をして萱草に板を置いたのが寢臺で、不潔惡臭極まる裡に起臥して居るが、その食事は粗食と云ふよりも惡食で、恵まれた殘飯殘肴や各所の芥溜箱を漁つて食物を集め、歸つて食するので豚や犬猫と選ぶ所がない。無論彼等は一定の職業もなく、臺灣人街を徘徊して多くは前記の如く食物を探り歩くので、中には日傭を稼ぐ者もあるが、収入は僅少で生活難から幾分も救へない。而もこの部落の細民、どん底生活者は多く無智無教育の徒で、唯だ食ふて寢ることが出来れば満足し、その日くを過して居るから、他から見て思ふ程貧苦を惱んで居ないらしい。乞食を三日



するとその味が忘れられないと云つた工合で、この生活が結局彼等には氣樂なのであらう。それ故時に他から物質的の誘惑で悪事を働く者もないではないが、概して悪事は働かないけれども、中には妻女に賣淫させるのは多いらしい、闇に咲く臺灣人の白粉の花私娼は、慙うした徒輩の妻や娘だと云ふことであつて、これが梅毒やその他の花柳病を傳染させることが甚しく、領臺當時は内地人でいかもの喰ひをして恐しい支那梅毒を傳染され、一命を失つた者も多かつたと云ふ話である。而してこれ等の細民には市の方面委員や附近の篤志家からいろいろと世話され救護されて居るのが尠くない。臺北市内を徘徊して芥溜箱を漁り歩く臺灣人の少年少女は、何れも慙うしたごん底生活者の子弟で、彼等は非常に盜癖の傾向が強いと云はれる、支那民族だけに、時々竊盜やその他輕微な犯罪を行ふことがある。乞食は臺灣人には多いがこれは乞食と云ふ一階級をなして居る部落人で、乞食頭と云ふ親分の下に統御され、乞食寮と云ふ建物に起臥して、日を定めて戸別に金銀物品の恵みを乞ひ歩いたものであつて、一つの社會が彼等に依つて建設されて居る。それ故内地に見る如く市内に常時は徘徊せず行人や家々に恵みを乞ふの



を見ないので、この事情を知らぬ人々は乞食が居ないと思ふのも無理もない。然し最近  
は篤志家で力行の人である施乾氏と云ふ青年が、乞食救済撲滅を計畫して非常に努力し  
つゝあり、現に愛々寮なる私寮を市内緑町に建築し、大方の市内有力者に檄し資金を募  
集し助力を求めて活動しつゝ、臺北市内は愚か新竹その他の地方の乞食をもこの寮に收  
容して病者を施療し授産に努めて居るが功果大に見るべきものがあり漸次社會にも認め  
られ社會事業の一つとして官の奨励援助を受くる外、官民有志者の助力も加はつて一層  
事業の擴張と發展を期して居る。然るに一方内地人の多く參詣する圓山附近には、臺灣  
人の乞食が時々居つて道行く人に袖乞ひをして居る。ごん底生活をする細民の内地人は  
比較的少數だが臺灣人は可なり多く、兩者何れも社會から落伍した敗慘者か、又は不幸  
の運命に支配される哀れな人々だが、これも文明都市の一つの所産物であらう。而して  
細民は一つの街の隅に居るのでなく、内地人は多く南門古亭町から艋舺の新富町附近や  
城北の下奎府町等に居るが、これも集まつて居ず城内を除いた各方面に散在して居る。臺  
灣人の細民は、艋舺大稻埕の臺灣人街で各方面に散在して居るが、然し細民の群は此處



に彼處に集まつて居るので、細民部落は直に判るのであるが、その不潔を極め惡臭甚しく、汚れた衣に瘦せた躰、傾き破れた家内等々、誰も足を踏み入れるに躊躇するが、内地の貧民窟細民部落に數倍も勝さる不潔さと悲惨な状態である。されば社會事業に關係する人とか細民部落の研究者とか、その他この方面に交渉を有する人以外、訪れる所でないと言つて可い。

社會の進歩は貧富を生じ、優勝劣敗の結果を見ることは、自然的現象とも云ひ得る。それで細民が出来るし、その數も亦た生存競争が激甚になるに伴ふて多くなるのも當然の勢と見られる。而して細民以外にこれも亦た恚うした社會が生んだものに、浮浪者即ちルンペンがある。浮浪者にも種類はあるが、一定の職業も有せず街頭を徘徊して種々の惡事を働き兇害を敢行する無頼漢があり、失業失職者にして寢る家なく食ふに財なしと云つた者で、これも食に窮し飢に堪え兼ねて盜事を働く類も尠くなく、何れもこれ等は社會を毒し良民を害する厄介人物で、常に警察の取締が嚴重に行はれ、社會教化の力もこれに致されて居るが、なか／＼容易に徹底されず、警察の厄介になつてばかり居る。



内地人のルンペンには素行修らず業を怠り失敗して業を失ひ職に放れるやら、自ら招いた鑄ある身の持主が多く、中には同情に値する薄命な者もないでもない。これ等の内地人は親族縁者とてもない土地に恚うした境遇に呻吟するので、悪事を働き警察の厄介になり刑務所の門を潜る者や、同縣人會や知人その他からの同情、市役所の世話等々で救濟歸國する者もあるが、歸國した者は恚うした境遇に一度陥つたが最後、内地にも居堪らず再び戻つて厄介になるのが尠くない。この傾向は領臺當時は比較的に稼げば多額の金も得られるし、世間一般が新開地氣分で放縱であつたし整頓もされて居ないし、内地人も少數であつたりして、浮浪者を見ることも尠かつたが、内地人の渡來者は増加し、その中には恚うした劣敗者も交つて居たし、また一方臺灣の事情をよく判明知得せず、唯だ渡臺すれば何とかならうと云つて、發達した内臺間の交通機關を利用して渡來した者も多きを加へたが、臺灣殊に臺北の如き都市は、文明の施設は設備され、世態も變遷して、總てが眞面目になり秩序も立ち、内地のそれと同一になつたので、其處に暢氣な生活も出來難く、優勝劣敗の結果は確的に表現し、職業を失ふ人も出て來るに至つたの



である。即ち世智辛くなり生活難を感ずるやうになつた、これが内地人のルンペンが多くなつた原因である。一方、然らざる人も事業に失敗したのもあらうし、事志と異り薄命を嘆じて落伍したのもあらうし、何れにしても内地人の浮浪者は、まだ割合に少数だが存在し、窮餘に窃盜を働く者、恐喝横領詐偽等の犯罪をする者、押借りゆすりをする者等、種々の害毒を流して居るので、警察当局は嚴重に取締を勵行し、害毒を防止すると共に、市その他社會事業關係團體や關係者と連絡を採り、保護救濟矯正の事に努力して居るが、近時内地の不況は恚うした人々の群を、島の首都だけに臺北に見ることが多くなつた。而して更に恐るべく憂ふべきは、内地人の子弟中に不良少年少女が現はれた事實があつて、近年これ等の不良少年少女の群は、官憲や父兄保護者の眼を脱して市内を横行跋扈して惡事を働き、彼等は何々組とか何々團の名稱の下に、團長や組長の統率で動いて居る。何れも學業不良の徒で映畫や圖書雜誌新聞の記事その他の事情に因り惡影響惡感化を受けたもので、良家の子弟や顯門の子女も加はつて居るのが、警察側の調査で判明して父兄保護者學校當局さては社會人を驚愕せしめて居るが、一方これが矯正防止



保護に學校當局や父兄保護者側は、警察當局と相俟つて努力して居るし、既に警察側には人名さへ登記され、黒表も作られて居るから、彼等も充分取締られ矯正保護も出来る得るので、その數も今では多くはなく勢力も強くない故絶滅こそすれ大きくはならないであらうと思ふ。彼等の行動は内地の不良少年少女の行動と似て居て、彼等不良少年は書籍文房具その他商品の窃取、通學生を恐喝して金銭を奪取するとか、婦女に對するエロ行爲等々であるが、彼等は金銭を得れば、映畫見物と酒色に費すと云ふのが大部分である。不良少女は不良少年團に加はり、時に醜關係さへ結び行動を共にして居るのが多く、これ等は流石に女だけに恐喝などはせず、エロ仕掛けで男の財布を空にしたり、家から金品を盗んで來たり商店で窃取するが、得た金品は多く映畫見物とか装身具を買ふ位である。尤も女子のみが一團をなして居るのも現はれた。臺灣人の浮浪者は所謂名物となつて居る老鰻と呼ばれる、無頼漢で、行き方は内地のごろつきと似て居る。定業定職なく市中を徘徊し喧嘩の賣買賭博や窃盜の常習で、恐喝取財や傷害の犯罪は殆んど附きものとされ、盛り場を横行して傍若無人に振舞ひ、魔窟に入り浸つて私娼を情婦として酒色に耽り、



阿片さへ吸食するのが尠くなく、何れも前科者で刑務所へ行くことに馴れて居る。殊に喧嘩が商賣の如く、日常懐に刃物を藏し、多くは臺灣刀の類だが日本刀を持つのもある。概して強壯で屈竟な男、生命知らずの徒輩で、悪事を働いて社會に害毒を流して居るのだから始末に悪い。彼等も仲間がそれごとくあつて、親分子分の關係は親密で堅固なことは驚くばかり、警察當局は時に大掃蕩を行つて絶滅を計るが、かくと早くも知れば彼等は風を喰つて逃走し、他の地方に流れ込み、餘炎が盡きた時分に舞ひ戻ると云ふから、飛び去りまた來る飯上の蠅のそれの如きもので、警察側は取締に苦勞しなかく厄介千萬である。老鰻の跋扈横行は以前に比しては衰へたが、今尙老鰻の暴威に市民は惱まされ、蛇蝎視して居て後難を恐れ、誰も敬遠して居るから、彼等は調子に乗るので更に面倒である。警察當局では既に臺灣浮浪者取締規則が公布され、改悛しない老鰻や恐暴なものは捕縛して、遠く臺東廳のカロランや火燒島の收容所に送り、相當嚴重な刑罰を加へ、労働の習慣を培養し、獨立自營の人たるやう教誨指導監視することになつて居る。而してこのカロランや火燒島送りは、郷土に戀々たる情の厚い支那民族のことと



て、獄舎に拘禁されるより、遠隔の地に送致されるのを非常に苦痛とし、遠方へ送致される臺東送りには流石の彼等も震へ上つてしまふさうな。而して重犯や改悛の状なき者の外は、獄舎に拘禁し懲罰を加へ戒告して正業に就かしめ、場合に依つては強制就業に就かしめて居る。殊に老鰻は各團結して一團を成し、親分の勢力に動いて居るので、勢力争ひが醸される結果、繩張争ひが盛で刃傷沙汰が夥しい上に、魔窟女を情婦に暗黒方面に出入するので痴情の果て流血を見ることも亦た頻繁、老鰻と刃傷沙汰は不可分離とされて居る。それに彼等の報復手段は一つに刃傷に限られて居るから物騒千萬、暗夜は恐か白晝でも敢行されるから油断がならない。而して彼等は一人と一人の場合もあれば、一人に二三人或は數人もあるけれども團體と團體とは餘り行はない。殊に怪しからぬものは他人の依頼で金銭の爲めに動き殺傷することが多く害毒を流すことが夥しい。それに近來は殺害せず、重傷を負せ不具者にする方法を採る傾向が著しいとは變つたものである。警察當局も嚴重に嚴重を加へ取締り、既に人名も記録されて逮捕も出來易くなつて居るものの、彼等は巧に警察網を脱れ、警官の眼を掠め、出沒自由に姿を隠し



て悪事を働いて居る。而して不良少年は内地人のそれと全然異り、主として窃盜を犯すのが多く油斷が出来ない、これは盜癖が多いと云はれる性癖故に無理もないが、家庭が彼等をかくさせると云ふに至つて寧ろ驚くべきであらう。然し彼等老鰻は臺灣人街に活動し、臺灣人のみを對手にして内地人街に立ち現はれず、内地人には何等手出しをせないが、彼等は可なり兇惡慘忍の犯罪を犯すのが多く社會の爲め絶滅が緊要で、警察當局者もこれが取締に撲滅に努力して居る。

領臺前のことは暫く措いて、領臺後は進展に伴ひ、植民地として新開地氣分も濃厚で景氣も好かつたし、それに内地との交渉も今日の如く密接でなかつたから、内地の景氣不景氣の影響も餘り小さくなく、臺灣は進展向上を辿つて行くことが著しいので、各種の産物米糖茶等の産額激増等で樂土とされ、縦令時に景氣に好否があつても概して良好であつた。その後漸次内地との交渉が密なるを加へ、財界の好否が約半年を間隔して響いて來たものであつた。然るに大正七八年頃を頂上とする空前の好況時代が出現して、黄金花咲く島の景氣は素晴しかつた、従つて臺灣人も生活が向上して、臺北の臺灣人間



にも好況に北叟笑んだ連中も多く、人々は悉く好況に陶醉して有頂天になつたものである。その後これが反動を受けて不況となつたのみでなく、關東大震災が祟つて益々内地と共に臺灣も不況が甚しくなり、生活難や失業失職者の出現等、不景氣が生む諸現象が現はれた。その後不景氣は一向好轉せず益々深刻化し來り、臺北の巷も不景氣の聲に滿され、過去の好況は夢と化してしまひ、青息吐息悲觀材料のみとなり、一方節約緊縮が勵行され、官吏の減俸等もあつて人氣を腐らし、市況は極度に衰退して生活苦に喘ぐ人々の群は此處に彼處に夥しく、今では内地同様に不景氣裡に推移して居る始末となつた。従つて臺北の如き都市は他の地方に比して一層甚しいが、流石に總督府の在る所總督さんのお膝下、官吏の多勢な所から不景氣でも昨年末の如き、まだ減俸もないので歲末の景氣は好かつたが、その後は全然不良になつてしまひ、商人は勿論その他各方面も不景氣を嘆じ失業者を増し、學校出身者の賣行きは極端に不良と云ふ領臺以來未曾有の現象を見、何人も不況を呪はない者はない。然し流石は島の首都だけに、極端な不況でも四苦八苦して現状をば維持し漸く面目を保つて居るが、打撃の甚大な事は各方面の事



實が物語つて居る。臺灣人も不景氣に悩むが、内地人に比して生活費が低下なので、不景氣も内地人ほどないけれども、商人は不況の上に對岸南支地方の銀安が非常な打撃で、對岸南支地方との取引に密接なだけ苦慮して吐息を洩らす向が夥しく、米糖安や物價下落等で農村も可なり疲弊して居るため、農民を購客にする關係上商品の賣行が減退して居るから、今は僅に倒産を防ぎ汲々として現状維持に努めて居るの状態である。又た一般人も自然影響を受けて、不景氣に悩まされて活氣に乏しいけれども、内地よりはまた多少餘裕があると云はれて居る。恁う云ふ状態なので近時は内地人の無職失業者が著しく多くなつて市中に居住して居るが、これは不景氣で經營難の結果に人員整理に因るのであらうが、内地から恁う云ふ連中が内地の不景氣に追はれ何等考へもなくして、臺灣ならば植民地だ、一つ職を求めてと云つた工合に、よくも事情を究めず手蔓もなく漫然に渡臺して豫想に裏切られ、不況に當面し窮して居るのが多いことが著しい新しい現象、不景氣の深刻化が生んだ一つの事實で、これの始末には市當局もその他の人々も可なり悩まされて居る。然し臺灣人は土着民だけに親類縁者もあつて救濟保護も加へられ、全く



無縁孤獨のものは、市當局や附近の人が心配して處置して居るから、内地人のやうに目に立たないし、失業者も比較的少いのは賃安で何でも厭はず働くし、生活費も低下し簡単な生活振である等の事情に因るからである。然し幸に近時は臺灣でも社會事業と云ふことが盛になつて活動して居るから、憊うした不幸の人々も大に恵まれ、救はれることになり、明光を認めて再生することになることであらう。社會事業としての施設の必要を當局が感じ認めて實行を見るやうになつたのも、臺灣の進歩を示すもので、臺北市内にもそれ／＼のこの方面施設を見關係者は大に活動しつゝある。

臺灣には預臺前即ち清朝時代には、細民救濟その他慈善救濟保護の事業が施されたが、これは主として官の勧誘で地方縉紳の義捐に財を求めその援助で行はれたものや、富紳自身が行つたもので、官に於てもこれが施設を見ないことはないが、地方のそれには充分手を伸し難い事情があつて、僅に臺灣府と稱する(今の臺南)當時の島の首都にのみ施されたと云ふことである。即ち育嬰堂、養濟院、義塚、問善堂、留養局と云ふ名稱の下に、嬰兒孤兒の養育や貞節な寡婦の救恤、不具廢疾の窮民救助等を行つたもので、臺北にも



養濟院育兒院等々があり、天災地變の際貧民救助として艋舺義塾等があつたけれど、改隸の際これ等の事業は一時悉く廢絶してしまつたが、改隸後各制度が整備すると共に再興を圖り、諸調査を進行中に英照皇太后陛下の御大喪で、慈惠救濟資金の御下賜があつたから、從來の救濟施設を整理按配して、明治四十三年慈惠院規則を發布して慈惠院を置いたが、既に臺北では明治三十七年七月に臺北仁濟院を、臺南慈惠院澎湖普濟院と共に設置され、更に慈惠院規則で慈善賑恤機關となり今日に及んで居る。この他同三十二年十二月に臺灣罹災救助基金規則が制定され、幾多改正の末臺北州もこの基金に依つて罹災救助を屢々行つて居るが、窮民救助としては同年八月窮民救助規則の發布で、地方税から支出し窮民を救助して居る一方、この救貧及び一般社會事業活躍機關として、大正十二年四月に方面委員を臺北新竹臺中臺南高雄の五州に置き、相談指導保健救療や兒童保護周旋紹介戸籍整理金品給與その他各種の事件をば取扱つて年々好成績を示して居る。行路病人救護も同三十二年八月發布の取扱法が臺灣に施行されたが、その後府令で行路病人死亡及び同伴者取扱法中職務執行及び費途に關する件を規定し、内地の市町



村長の職務は廳長市尹街庄長郡守がこれを行ひ、市町村費で一時繰替ふ費用は、州費市費街庄費と廳地方費で支辨するとして、着々救濟の實を擧げて居るが、花蓮港以外はこれを慈惠院に委托救護して居る。而して私設の社會事業團體は、明治救濟會（大正元年十一月設立）大正救濟會（大正四年十二月設立）臺灣濟美會（大正十二年四月設立）臺灣獎學會（大正十三年設立）の各恩賜財團と昭和救濟會（昭和四年一月設立）、財團法人臺灣社會事業協會（昭和五年五月財團法人設立）等がある。而して社會的施設としては、公設質舖（大正八年十二月府令發布）公設市場簡易食堂職業紹介所（大正十年八月設立）公設長屋、州及び市經營の公共長屋公共合宿所宿泊保護公共浴場があり、保護教化事業には孤兒收容保育兒童授業職業少年教育國語練習會家長會主婦會青年團處女會があり。盲啞教育や感化教育釋放保護會があるし、軍事救濟も行はれて居る。而して社會事業團體の前記のものは、事務は多く督府文教局内で扱つて居るし、臺北市内に臺灣婦人慈善會（明治三十七年設立）もある。而して臺北市並に市内に於ける社會事業施設としては、市に於ては方面委員窮民救助職業紹介簡易宿泊公設質舖等で、市に於ては市制第十條に據り、臺北市常設委員規程に基き委員を置いて、



市民の福利を増進する爲め救濟防貧教化等の施設に關し計畫調査攻究をなしつゝあるが大正十二年九月州方面委員規程に基き、臺北市にも十五方面を分ち委員四十五名を内無任所として警察署長五名を囑託し、救療機關としては醫院長四名に醫務を、妊産婦救護機關として産婆七名に方面委員顧問を委囑し、市役所には聯合方面事務所を設け、公私設救濟指導機關と相策動し、銳意その目的に向つて努力しつゝあつて、最近（昭和四年中）の取扱件數五千九百十二件に及んで居る、又た州教育課内に方面委員後援會があり、各町に方面委員事務所があつて執務して居り。窮民救濟は市内居住の幼弱老衰不具廢疾傷病その他にて自活し得ず、他からも救助を受くる途のない窮民に、市費を以て救助する外、臺北仁濟院日本赤十字社臺灣支部醫院私立林本源博愛醫院官立臺北醫院と連絡し、救濟に努め衣食金品を給與し或は施療を行ひ、臺北仁濟院はを院内院外に分ち救養し、行旅病人及び行旅死亡人は市にて取扱い、病人は臺北仁濟院に委託救護し、死亡人は共同墓地に埋葬する。職業紹介は大正九年後の不況に失業者が多北市に蝟集するから、大正十二年六月明石町に臺北市職業紹介所を設けたが、逐年利用者増加し昭和二年七



月に簡易宿泊所竣工と同時に現在の地御成町に移轉し、紹介斡旋に努力して相當の成績を示し、最近はこれに關するニュースを臺北放送局で放送して居る。最近（昭和四年中）は求人三千二十四人求職三千二百六十一人紹介二千七百三十五人就職二千二十四人である。市營簡易宿泊所は昭和二年七月開始し爾來宿泊者多く、設備としては階上寢臺十六臺浴室娛樂室及び食堂等があり、階下の一部は職業紹介所事務室と御成町公設質舖に充てられて居る。公設質舖は大正九年六月創設に係り、市制實施に伴ひ大正十二年四月市營となつた。臺北市營公設質舖と稱し大和町に在るが、更に昭和五年四月御成町公設質舖を設け二箇所となつた。資本金は三十八萬圓を現在は三十九萬圓で經營し、下級金融機關として利用者多く、貸出利率も月一分五厘、流質期限六ヶ月である、最近（昭和四年）成績は貸出高七十一萬四千九百餘圓質受高六十二萬九千餘圓流質高六萬四千餘圓である。この他既記の如く消費市場水泳場があり、又た市の社會事業の普及發達を促進し、併せてその助成を圖る目的で、昭和四年二月臺北市社會事業助成會が組織され、事務所を市役所内に置き、銳意目的速成に努力し創立の日淺さも着々功果を示して居る。而し



て市の施設以外に市内に於ける主なる私設事業は、明治三十二年設立同三十四年改稱した財團法人臺北仁濟院(堀江町)、同四十二年設立の林本源博愛醫院明治四十四年臺北に移轉したマカイ醫院、大正二年設立の護國十善會(西門町弘法寺内)明治四十年設立の三成協會臺北一新會(古亭町)、昭和四年設立の臺灣共濟會(壽町東本願寺内)大正十二年設立の愛々寮(綠町)等で、護國十善會は無料宿泊職業紹介事業、臺北一新會と臺灣共濟會は免囚保護事業、愛々寮は窮民救助乞食收容救濟事業を行つて居る。臺北州としては庶民信用組合(樺山町州廳内)公共住宅として新榮町に百九十一と龍山寺町に二十四戸御成町に百二戸の長屋を建て低廉の家賃で貸與し、住宅難を緩和して居るので利用者多く常に空家がな  
い。佐久間町に鎌倉保育園の支部が大正四年十二月開設以來され、託兒保護を行つて居る。

### 臺北の享樂境と柳暗花明の巷

…内臺人の享樂境と享樂境…興行界の變遷と興行物…

内臺人の遊興境と花柳界…臺北市内の冤窟と白粉の女…



民族の相異に原因する習慣風俗嗜好の差は、内臺人の享樂振や遊興振に於ても、最も明白に判別し得られるのである。内地人の享樂振は觀劇映畫見物、寄席遊藝等の各種の興行物や音樂會獨唱會舞踊會の新しいものから、家内に於ける骨牌遊び麻雀碁將棋撞球、それに近頃ではダンスと云つたものであるが、また郊外に杖を曳くピクニックや夜店素見の盛り場散歩等であつて、何れも内地に於けると大差なく、所謂現代的享樂が大抵味はれ樂まれて居るのである。殊に夏が長く暑さも甚しい土地柄、夏の夜夜涼を趨ふことが盛である代り、櫻なく紅葉なき所なので春の行樂の花見や、秋の觀楓などは見るへくもなく行はれない。それに内地の如く縁日もないから、恁うした樂しさは絶対に味ひ得られないのも無理からぬことであらう。而して享樂も時代の動きに伴つて無論幾多の變遷はあるもので、領臺後内地人が渡來して今日の享樂が見られたが、改隸當初は諸事草創の際で、まだ土匪横行し内地人の數も多くなき、在居の人々は可なり收入も多く懷が暖かであつたから、享樂機關も不備の際とて酒と女とが享樂の對照物であつた。晝は思ひ切り働いて夜は酒と女に更かし送ると云ふ態で、何の事はない出稼者流の享樂振



で、野鄙殺伐淫蕩の沙汰を盡したもので、かの灣妻も恁うした時代の所産物であつた。灣妻が滅失し眞面目な家庭が多くなり、世態も整然し秩序も立ち植民地の出稼氣質が薄らぐ一方、眞面目な内地人の渡來が益々増加して以來は、以前の如き酒と女に享樂を求めることより、更に趣味向の享樂が多くなり、室内では撞球に碁將棋が盛になり、それから音曲とかその他の遊藝が行はれ、或は書畫骨董の蒐集や書道繪畫の研究稽古も見られ、時に花合戦も盛であつた。その後時代が進み、内地との交渉が密になるに従ひ、内地の流行が容易に傳波されるやうになり、内地に於ける時代の變遷が生んだ各種の享樂が移され、麻雀にダンスに新しいものが行はれて來た。戸外の享樂としては競馬自轉車競走の類やら、近郊のピクニック、夜店素見の散策も行はれて來たが、近郊のピクニックやトリップは花見や觀楓の出來ない土地とて、單に郊外の野遊か散策で家族連で行ふのである。ところが臺北近郊では、これに適した所は尠く大抵圓山公園を中心にその附近か植物園新公園位に過ぎず、眞のピクニックやトリップが味はれない、子供や家族と共に野外の風光に接し清い空氣に觸れる位である。夜店素見の散策は市内に於ける内



地人向の唯一の盛り場たる新起町の市場とその附近で、此地點にのみ夜店が每晚開かれ人出で賑ふだけである。従つてその順路たる榮町通りや本町通りは往來の人が可なり多いが、それも夏であつてその他の季節には尠いし、時刻も夕方灯の入つた時分から八九時までが人の出盛りで、もう十時頃になると夏でも人通りは淋しい位に減じ、商店でも戸を卸すのが多い。その他夜涼の場所としては新公園も植物園も好く人出も相當あるし、古亭庄の川端即ち川端町の新店溪の堤上もあるが、城内その他から遠いから餘りに夜涼を趁ふての散歩人は多くなく、川に舟を浮べたり、堤の旗亭に納涼會やその他で酒酌む人と以外には、婦女子同伴の散策人はまづ稀れであると云つて可い。鱸舳の河岸も遊廓が近くにあり、臺灣人町だから内地人は餘り行かない、然し舟で遊ぶ夏の夜の享樂は川端やこの地に限られる。秋の觀月は新公園の芝生や三線道路植物園で、川端もあるが此處へは聊か遠い、また圓山の神苑が好いけれども更に遠く一寸行くのが臆劫である。而して夏の夜の植物園や新公園の夜史には、繁つた樹林の下では時に若い男女の黒い影が動いて、エロ氣分を漂はせることがある、當世なればこそであらう。新公園では夏は一



週二回音樂堂で臺北音樂會の洋樂演奏が行はれる。臺灣人の享樂は支那式の音樂碁將棋や、文人者流の文墨の戲や詩作の高尙のものから種々雜多だが、賭博が隨一のものとして居る。これは投機心が強く賭博を上下男女老若が殆んど先天的に愛好するからで、支那民族の有する悪い通有性である。警察當局は國禁を破る犯罪として、取締を嚴重に勵行して居るが犯罪者は絶えない、酒と色も彼等の享樂の一つで上下通じて盛に行はれるが、遊興振は内地人と全然異つて居て餘り表面的でない、酒に酔ふても路上醜態を曝さぬが如きその一例である。一體夜は風習として男女と共に夜歩はしないが、近頃は時代の風潮に連れ、城内などに夏の夜は散歩する家族連を見るがそれも甚だ尠く、彼等の盛り場は夜は遊里附近で晝は市場附近であり、人出も多く喧噪亂雜を極めて居るが、盛り場とて散策人はなく、商取引の人と日用品購入の客人位である。而してこの晝夜の盛り場は例の老鰻の繩張り内で横行し、兇暴の行動が屢々演ぜられる物騒な場所である、近頃こそ内地人と同じに郊外にピクニックを試むる新しい智識階級の人があるが極少數である。芝居や操人形は非常に好むばかりか、寺廟の祭典や祝事にも必らずその場所に



村芝居式の支那芝居操人形が行はれ、見物は観劇料なしの公開だから人山を築く盛況、例に依つて喧噪夥しい。それに劇場や映畫館も彼等の享樂場所である。内地人と接觸するやうになり、新しい若い人々は撞球に麻雀にダンスが流行するやうになつた。而して夏の夜は亭仔脚に老若男女は竹椅子を出し腰をかけ、團扇の風に夜涼を求めて居ると、若い男は胡弓の哀音を聞せたり月琴を奏するものもあつて、内地人の如く夜涼を趨ふて散歩するものは尠く新しい若い人々に限るやうである。尤も近頃は内地人と同じく骨牌遊びその他内地式の遊びをしたり内地人の興行物も觀覽する者もあり、漸次若い人々の享樂が内地人のそれに接近するの傾向が見えて來た、これも時代の動きが生んだ變遷だらう。

臺灣人を觀客とする興行物は支那式芝居位なもので、村芝居式の支那芝居や操人形は多くの場合公開的のもので、寺廟やの祭時や町内部落内の主催で興行主があるのでない。

劇場も淡水戲館(下奎府町)と永樂座(永樂町)が大稻埕に在るだけで、これは上海の支那芝居や臺灣各地を巡業する劇班(村芝居)が開演するもので、相當成績を示すものが多い。然るに活動寫眞が全盛を見る近年には、前記の劇場でも映畫多く觀せるが反つてこの方が歡



迎されることが甚しいので映畫の興行が盛になつた。映畫は主として上海の製作ものに、歐米作品をも併用して居るが、内地人經營の常設館も大稻埕に開設され、以前は支那ものを映寫したが最近では日本ものや西洋ものを映寫して好評を博して居ると云ふ面白い現象を見せて居る。而して活辯たる映畫解説者も臺灣人間に出て臺灣語で説明し伴奏も臺灣人の手で行はれて居る。而して内地から渡來の興業物としては天勝式のもの好評歡迎されるが、その他は趣味が異ふし、大多數がまだ國語力の充分でないから不可能である。内地人を顧客とする興行物は芝居映畫浪花節色物演藝から天勝式の奇術舞踊その他内地のそれが時々渡來興行するが、何と云つても映畫が最も盛況でファンが夥しいのは内地のそれと同様であり、映畫も内地封切後短時日に上映されるのみか、優秀なものが容易に見られる、常設館も芳乃館(壽町)新世界館(西門町)第二世界館(新起町)前稱樂々園のキネマサロン(末廣町)舊龍口亭の南門座(千歲町)と、艋舺遊廓内の萬華世界館(入船町)の五箇所で、各館競ふて優良の作品を上映して觀客の吸收に努めるからファンは恵まれることが夥しい、従つて劇場榮座(西門町)等でも時々映畫を上場するの勢である。次は浪花節で



あつて、これの愛好者も非常に多いから、相當内地で好評を博した浪曲家が出演すれば常に大入満員である。場所は多くの場合劇場榮座で樂々園今(のシホマサロン)でも開演する。而して從來渡臺した浪花節の大家は故桃中軒雲右衛門吉田奈良丸(今の吉田大和丞)以下多数で、浪花節ファンは非常に恵まれて居るのである。演劇は市川羽左衛門河合武雄坂東彦三郎故川上音次郎故松井須磨子等内地一流の新舊俳優が一座を引率して出演し、地方巡業のため内地に於ける如き一座ではないが、それでも名優の技を親しく見物が出來たものである、劇場も盛衰變遷があり、今日では榮座(西門町)のみが唯一であると言ふ貧弱さだが、内地人が五六萬居住するからこの位で可いと思ふ。天勝や天華の一座は屢々渡來榮座で開演して、何時も好評大人を占めて居るが、これは一般向で、子供に歓迎されるに因るのであらう。その他先代大隅太夫や故加賀太夫伊藤痴遊柳家左樂故永田錦心の一流も來て、義太夫に新内に講談に落語に薩摩琵琶にその妙技を聞せたり、歌劇も舞踊も喜劇も屢々演せられて、興行界は可なり活動して居るが、何分遠隔の地なので招聘費用が巨額に上り、従つて觀覽料が高さを示すの已むを得ないと云ふ、興行主には大きな惱



みがある。而も臺北は兎に角他の地方では内地人も少いから、その興行成績は臺北は好いとしても、結局缺損を招く場合が多いと云ふので、容易に大物の招聘が至難とされて居るのであるから、興行主は興行界活躍のため改善策に腐心して居るとか聊か同情に値する。次に表面は興行としてないで、多くは基督教青年會が主催するが、その他の團體でも主催となつて、内地から音樂獨唱新舞踊の名流を招聘し會員組織で、公會堂がないから多くは醫專の講堂その他で開催され、本居長世父子や永井郁子吉田晴風等の名流が出演し妙技を示し、洋樂や新舞踊趣味の普及に努めて居る。相撲は屢々興行されるが、主に消防組の人々が勸進元その他となつて幹旋し東京大相撲は常に好評上成績で興行期間は全市に相撲氣分が横溢し、常陸山梅の谷大錦西の海宮城野と云つた、明治大正の名力士が顔を見せて居る。競馬會も以前行はれたが中絶し漸く近年また行はれて盛に賑を呈して居る。能樂や謠曲は最近非常に隆盛となり、觀世寶生喜多の諸流があり師匠としても立人が居る、能樂は喜多六平太師が渡臺出演されて以來觀世左近が渡臺したが、能舞臺としては喜多舞臺(樂地町)が在るのみだ。然し謠曲はなかく盛況で、素謠會が各流各團體別



に或は各派各團體聯合でも行はれる、以前は招魂祭臺灣神社祭今は建功神社祭に、奉納能が臺北在住同好素人の手に依つて催され、而も大成績で見物も満員盛況である、然し舞臺は或は新公園内に或は武德殿内に假舞臺を造るので、橋かゝりやその他の設備も小さく不完全であるのは仕方がないが惜しい事である。この他市内の琴三味線筑前琵琶等の遊藝師匠が、時折に演奏會や温習會を、鐵道ホテルの餘興場やその他で催して居るし、檢番連中の藝者連の温習會もあつて、何れも満員盛況、臺北市の同好の人を欣喜せしめて居る。怙した興行界演藝界の盛衰は詳記すれば頗る長くなるから専門名流に譲つて唯だ極めて簡略に概要を摘記するに止める。而して少年少女に對しては活動常設寫真館で子供テ―を毎週土曜に催す外、その他興行物でも天勝天華の一座の如きは或は特に小公學校兒童等に差支ないものは、市の教育課や學校當局の諒解を得て觀覽來聽せしめることもある。怙うして内地渡來の廣い意味の演藝家に依つて、興行界は新舊取交せて賑かに興行され、娛樂場に乏しい臺北市民の娛樂慰安に努めて居る。殊に最近臺北放送局が開設されたので、地元の演藝は勿論内地中繼に依つて内地名流の演藝も聽取し得て夜の



慰安が多大に恵まれて居る。

臺灣のみでない女ならでは夜の明けぬ日本内地も、對岸支那も遠く歐米の諸國も同様に、酒と色とが喜ばれぬ所がなく、媚び賣る嬌笑に遊蕩氣分を唆る柳暗花明の巷が必ず其處にあるもので、色を賣る女の群が夜を世界に活動する巷があつて、それが文明都市ほど多くエロ氣分の漂ふことが濃厚である。臺北の地にも恁うした花柳の巷があつて旗亭と娼家があり、浮川竹に稼ぐ女性も可なり多く、尤も盛衰は時に見え今日まで其處に變遷があつても、社會を彩つて尙存在して居る。而も此方面も内臺人に依つて全く明かに區別され趣きを異にして居るばかりか、内地人は臺灣人とは没交渉であり、臺灣人は内地人の接近を嫌忌して居るから面白く、これは臺北否臺灣の如き植民地で異民族を包含する地でならねば見られない花柳界の現象であらう。加之その遊興振が兩者亦た全然著しく異にして居るのである。内地人の遊興振は内地のそれと同じで、旗亭に酒肴を取寄せ藝妓や時に幫間を招き、三味線を弾せ歌はせ踊せるのであつて、宴會の如きも又たその他二三人が會合しての場合も或は唯だ一人の低唱淺酌式な粹な遊興も、悉く料理



屋で行ふのだが、内地の如き待合はなく、料理屋がそれを兼業すると見るべく、しんねこ式や藝妓との情約成立巫山の夢を結ぶに適するし、例の四疊半やその他小さき室も必ず何處の旗亭でも二三室位はあるし、仲居が藝妓と客との間を巧に調節し情約成立の仲介もする、客は酒肴料と花代を拂ひ馴染になつたら藝妓には祝儀は任意と云ふ形だが、宴會では然うはならない。遊廓では所謂廓遊び、酒肴を取寄せ藝妓を呼んで散財もすることがあるが、然うでなくとも敵娼は必らず總ての場合客の側に居る、客は規定の藝娼妓の花代を拂へばよく、仲居には此頃は規定された祝儀が勘定書に記入されて居る。一體遊廓は現金制度だが掛のことも大のお得意で馴染客ならば出来る。而して料理屋は現金でも可いがそれよりも後拂ひ掛けの方が普通であるが、初見の客は現金拂が多いけれど、顔馴染になつたり身許が確實と判れば最初でも現金拂を要しない風習である。藝妓の家で遊ぶのは旦那衆以外は難しいが、北投草山邊に遠出も出来る、然しそれは好況時代に盛であつたが今はそれも尠くなつたし、節約緊縮が影響して馬鹿遊びは料理屋でも遊廓でもなく不況の極に達して居る。臺灣人の遊興振は粹人でなくとも、少人數の場合は藝妓



なる藝姐を知る人があれば、その家に行き好む酒肴を料理屋から取寄せて飲酒して遊ぶので、料理屋では宴會以外は行かない。而して遊廓らしいものはないが、娼家軒を並べる一區域がある、この娼家には中以上の人々は恥辱として決して出入しない、出入する他の支那樂器の演奏する丈けで、舞踊は労働者階級か老嫗の類だからである。而して藝姐は酌をして唱歌を謳ひ月琴そのは決してやらない唄女の類であるが、拳は盛に對手をし牌を弄し麻雀もやる、恁うして臺灣人は遊興する外、妓と共に北投にも遠出する者が多い。金満家や有力者は内地人と同様に藝姐の旦那となりこれを誇りとする風があるし落籍して第二號第三號の夫人即ち妾にするが、而も内地人の如く蓄妾を恥ぢず寧ろ蓄妾の多きを誇りとするばかりか、夫人やその家族は勿論友人その他でも、當然のこととして平氣で、第二夫人第三夫人として交際して居るのは正に支那式である。内地人の花柳界は料理屋と藝者家で何れも檢番に屬し、檢番が仲介して藝者家と料理屋の取引を行ひ、檢番が恁うした業者の一切事務を扱つて居る。而して臺北の花柳界には藝妓半玉幫間も居る。何しろ領臺後三十餘年の間の臺灣島の首都としての臺北花柳界も、時勢の變



遷が最も反映すること甚しい社會だけに可なりの變遷が見られ、花柳界史の一篇が綴り得られる位資料もあるが、それは粹人の手に譲つて概要を記するに止める。かの領臺當初臺北城を占領し近衛師團が入城した時、大稻埕で樟腦の取引を行つて居た外商アーリーの妾にお秋と云ふ日本女性がアーリーと同棲して居た事實が知れて、大きなセセツシヨンを惹起したもので、この女が日本の婦人として臺北に居住した唯一人であつた。その後程なく世情騒然たる際、まだ内地人が勝手に渡來することを嚴禁されて居たのに何處から如何な手段方法で渡來したのか忽然として天草女が現はれた、南洋方面の未開地侵入の先驅を常に敢行する天草女のこととて、この舉を見たのは考へ方では不思議はないが、この天草女の出現は再び内地人間に大衝動を興へ人三化七的の醜婦だつたが女氣絶無の際とて千客萬來の大評判であつたとは、古顔の人が笑話にする一ナンセンスだが、これがその筋の問題になり退去せられた。明治廿八年十二月に城内の北門街三丁目（京町三丁目）に揚弓店が開業し、白粉の女を看板にエロ氣分を發揮したさうな。その後翌二十九年三月に西門町（大和町）旗亭養氣樓に小花と云ふ藝妓が現はれたが、これが臺北で内地人藝妓の



最初であつた。而してこの頃から内地人經營の料理屋が出来、城内やその頃臺北停車場の位置が北門外に在つたので、内地人が多く大稻埕六館街（港町）を中心とした附近に住し、内地人街がこの界限に出来た關係上其處へも旗亭が出来更に同年七月には旗亭娼家も増加し、藝娼妓や酌婦も漸増して漸く花街氣分が漂ひ相當賑つたから、官に於ても從來城内で營業させて居た旗亭の外に娼家開業を許可したが、その後城内の娼家は一年未滿で現在の艋舺の地に遊廓を指定し移轉させ今日に及んで居る。かくて城内に營業して居た旗亭は市區改正その他で漸次新に内地人街が出来た西門街や新起街方面に多く移轉して今日の如き状態になつたが、恁うした關係から今でもこの方面を臺北の花柳街と云はるゝやうになつた。檢番も昔は東檢と高砂檢があり、その後種々變遷を経て今日の臺北檢番が出来て居る。而して内地の如く旗亭や藝妓屋が一所に集つて居るのでなく、唯だ近所に在ると云ふだけであるから、一見してそれらしく見られず感ぜられもせず、旗亭が多くあるのと藝妓その他恁うした方面の人々の往來が特に目に著しいので、成程それかと思はするに過ぎない。娼家は艋舺に移轉して遊廓が出来てからは内地のそれと



同様に檢番も出來廊藝者も現はれた。旗亭も今日こそ立派な粹な家構だが、領臺當時は娼家も同様、今も邊鄙な地方に見る如き臺灣人家屋を改造した粗末極つたもので、面目一新した今日もう昔の旗亭などは見るべくもなく、人の話に聞くだけで進歩したものである。名古屋關係の有力者があつてそれが緣故であるか、花柳界も旗亭の主人や藝妓には名古屋人が可なり多く、藝妓に大阪神戸地方の者も尠くないが、概して關西九州方面の人々が多く總てが上方式と云ふ方であるが、遊廓は九州方面の人が多く、娼妓も同様九州女が多いが大阪女も尠くない。

臺灣人の花柳界は大稻埕と艋舺だが、艋舺の方は藝娼が少いとか云ふことである。藝娼は旗亭にも行くが、これは宴會の場合で低唱淺酌式の粹人遊子の遊興は、藝娼の家であるから、藝娼の家の多い所が花柳街である。艋舺は遊廓附近龍山寺邊までの所だが、今は平樂遊と云ふ旗亭が廢業後は大した旗亭がない。大稻埕は旗亭も東蒼芳とか何とか大きな旗亭もあつたが、今は蓬萊閣（蓬萊町）と江山樓（日新町）のみである。藝娼の家は太平町四五丁目の一帯で、この方面に殆んど藝娼の家が集つて居る。然し藝娼の家は一見それと判らないと云ふのは、それは一見普通人家で階下は商人やその他の人が住居し、階上の部分二



階なり三階なりに彼女等は居住して居るからである。遊廓はないけれど娼家は太平町四丁目江山樓を中心にその附近に集合せしめて營業させて居るが、これも藝娼の家同様一寸判らない。であるから臺灣人に案内されぬ以上内地人で初めての人は何處に藝娼の家があるか知る由もないのである。而して時代に鑑みその他各種の事情で、大稻埕檢番が設立し臺北檢番同様に活動して居る。ところが藝娼や娼妓酌婦は前借稼の者はなく、何れも名義は抱主の養女となつて居るので、他への出稼が容易なため去就が常でなく無鑑札が可なり多く、警察側は取締上相當悩まされて居る。而してこれも時勢が動かす變遷であるが、内地の變遷も反映して喫茶店が繁昌する一方、ピヤホールから更に進んでバアの開業を見、美しい女給のサービスで客を呼ぶやうになり、バアの甘酒に美しい女給のサービスで比較的安値に一夜の享樂遊興が出来るし、一方従來の藝妓對手の茶屋遊が千遍一律で新し味がないのに客は漸く飽いて來たため、時代の順應したこのバアが要求に適合したのであらう、新しい若人は勿論老人までも此處に走り新時代の遊興に満足し、女給のサービスに欣喜するやうになつてバアは日々に盛況を呈し開業する新店も夥しく、



バア洪水を見んとする勢、經營者は室内の裝飾設備に現代的な氣分を漂はすべく努力し、美しいサービス百パーセントの女給の争奪が激甚となり、今や臺北市内はもの淋しい旗亭のそれに反し、赤い灯青い灯の色美しく面白い蓄音器のジャズの音に人の心を浮き立たせ、夜の賑ひを見せての繁昌、それに若い人々のみでなく藝者相手の料理屋遊びに飽いた中年以上の人々も出入し、而も女給が第一の目的である祝儀を資力あるまゝ惜まないでサービスも満足し得られて、粹人とか云はるゝ紳士連がバア黨になつてしまつたと云ふ時代的變遷が見られる一方、遊廓もバアに顧客を奪はるゝ勢に對抗策として遊廓内にもバアが出来、娼妓をして女給代用のサービスをさせて居る。而して此處にも女があるからエロ沙汰がある、女給との情約云々が近時新聞や雑誌の艶種記事を賑はして居るし、女給の噂さが花柳便りのそれと同時に扱はれるやうになつて、花柳界は打撃をこの不況の際に受けて改善策が講ねばならなくなつた。

何處の土地でも何時の代でも、今の言葉で云ふエロの沙汰はあるものだ。闇に動く白粉の花の活動も必らずあるもので、文明都市にも同様なことは誰も知つて居る事實で、



彼是ど記すのは不粹な骨頂であるが、臺北としてその例には洩れない。古老の語る所に依れば領臺前にも貧民の妻女は、闇から道行く人を誰彼となく呼びかけて春を鬻いだもので人肉の市が見られた。無論法の嚴禁する所だがそこはそれ物に表裏があり、官に袖の下が甚だ有効に使はれた時代だから、人肉の市の存在には官は見ぬ振をして黙許して居たものであつた。これは多く細民の女性の生活難からの行爲だが、資力なき若人や中以下人で妻を迎へんも聘金がないため悩む者の、性の悩みをこれで醫して居たものであつたと云ふことである。領臺當時以後暫くの間は内地人は内地經營の旗亭や娼樓に酒色の快樂に満足した。いや日本刀を懷にして田圃路を傳つて土匪を警戒しつゝ、魑舛の廓通ひをしたと云ふ話も残つて居る。それが時代と共に各方面の事物が進展し花柳界も繁昌して、内地と同様の旗亭もあれば遊廓もあり粹な姿の花柳人も多くなつたが、それと一方に藝妓の出入しない料理屋飲食店も多く開業した。この料理屋や飲食店中には酌婦と云ふ稼ぎ女を置いた家が多く、現に今日でも然うだがこの酌婦が法網を脱れて私娼行爲をし、闇に動く白粉の女となつてエロ式に活動し、夜の稼ぎに魔性を發揮して安値な



遊興享樂を求むる人に應じて居る。これ等の魔窟は臺北にも尠くなく、新起八甲の兩町から壽町方面にかけ所謂臺北の盛り場附近から色街と云はるゝ部分に多く、また夏の納涼場所として知られて居る、古亭庄の川端(川端町)新店溪岸の堤沿ひに並ぶ、俗に川端のお茶屋と云ふ料理屋の多くが、この闇に働き稼ぐ白粉の女を酌婦として抱へ、その筋の目を偷み私娼に依つて人肉の市を開いて居るが、その他各所に見るから怪しげな小料理屋や飲食店中には恁うした私娼が活動して、エロ百パーセントの活動をして浮かれ男を寄せつけて居る。恁う云ふ工合に臺北にも魔窟や闇に働く白粉の女の數はなかく、多いがまた闇に隠れて道行く人の誰彼に呼びかけては淫を賣る辻君の類はまづ内地人には見ないど云つて可いが、恁うした人肉の市に對するその筋の取締はなかく、嚴重だが、彼等彼女等はなかく、機敏に巧妙に立廻り法網を脱して横行して居るものゝ、時々不意に試みらるゝ檢擧にはこの醜惡な犯罪行爲が暴露されて、彼女等は拘留處罰の憂き思ひをするが、飯上の蠅の如く追ふても戻るので容易に撲滅しない。臺灣人にも内地人同様に恁うした魔性の女が臺北になかく、多く、彼等は一層撲滅し難くその筋も惱みの一つとし



嚴重な處置に出でも改悛しないのである。それで屢々大檢舉をば行ふと夥しい犯罪者が捕縛されるのでも如何に盛なのか判ると一方、衛生思想絶無の彼女等のこと故、花柳病その他の惡疾に對する防遏手段が女にもなく、唯だ稼ぐ一方だから危険千萬實に恐しいものであつて、嬖媒(女)買つて命を奪はれたと云ふ恐しい支那梅毒を、ほんの氣紛れの惡戯に恚うした女を買つて病に苦しみ死んだ例が多いとは年寄衆の言葉である。この闇に働く白粉の女は無論貧民の女性で、下層社會の妻女が小料理屋に賣られた酌婦であつて、眞に憐むべき虐げられた女性である。小料理屋の酌婦の人肉を賣るのは内地人の酌婦と同じだが、かの辻君に類した私娼はなかく多く、彼女等は夜を待つて街頭の闇き所、多くは我家の近くに佇んで、道行く人を誰彼となく、臺内人の區別もあらばこそ小さき聲で呼びかける。中には内地人と見ると『もし、一寸』と誰から教へて貰ひ覺えたか、内地語で呼ぶのもあるのに驚かされる。而してこれ等の私娼は臺灣人街に限り活動するので、艋舺は遊廓附近から龍山寺町老松町邊の闇い街であり、大稻埕は太平町の江山樓を中心とする附近一帯で、此處は娼家が許されて居ながら、この一面は盛であつ



て彼女等は毎夜猛烈に活躍して居るから甚だ恐しい、この兩所が臺北の臺灣人街に於ける魔窟で、盛な人肉の市が毎夜開かれ、浮れ男の財布の金を捲きあげて居る。而して憊うした私娼の情夫は多く例の老鰻であるから一層危険が伴ひ、この界限に及傷沙汰の絶えないのも憊うした一因が存するのである。





# 臺北市十一年略史

自大正九年十月

至昭和六年十月

**大正九年** △十月一日第一回國勢調査執行△同二十日久邇宮殿下御臺臨同日臺灣神社御參拜、二十一日臺北公園に於ける體育協會發會式御臨場同夜直轄學校及小公學校の提灯行列を臺覽に供す二十二日南部御巡啓の途に向はせらる。△同二十七日久邇宮殿下南部御巡啓を了はらせられ御歸北あらせらる二十八日臺灣神社大祭に付殿下御參拜、次て博物館に御成り二階ベランダに出御臺北、艦舩檢番の手踊、本島人固有催物行列鹿兒島縣人棒誦等を臺覽に供す。三十日市内小學校聯合運動會三十一日公學校聯合運動會御臨場十一月一日臺北御發御歸還△十二月五日本年八、九月本島暴風雨の被害不尠趣被聞食 天皇皇后兩陛下より御下賜相成たる罹災者救恤金壹萬貳千圓の内金參百五拾四圓を本市管内へ配付。

**大正十年** △三月二日英國軍艦カーライル號基隆入港艦長以下幹部六名卒約百五十名上陸來北、大に歡待△同十五日英國大使エリカット博士來臺鐵道ホテルに歡迎會開催△同二十二日向井待從武官來臺、同日帝國第二遣外艦隊新高、春日勞山丸基隆入港、艦長以下四百七十六名來北臺灣神社參拜、市内巡覽、大に歡迎△四月二十六日、二十九日鐵道協會々員團長男爵辻良太郎氏以下二百二十名來北、五月三日鐵道ホテルに歡迎會開催出席者四百名餘△



五月十日柴軍司令官送別會開催△六月三日福田軍司令官著任△同十三日帝國軍艦須磨唐崎並潜水艇三隻基隆入港松村司令官以下多數來北、大に歡迎△同十七日臺北市規則第四號を以て臺北市常設委員規程を定め勸業委員二十五名學務委員十八名、衛生委員二十名、土木委員十七名、社會事業委員二十名、財源調査委員十八名任命、又同日臺北市規則第五號を以て臺北市町委員規定を定め町委員九十四名任命△七月七日特務艦野島丸基隆入港艦長以下百十二名餘來北、大に歡迎△同二十二日下村、賀來新舊總務長官著北△十月十二日比律賓總督ウッド將軍米艦ニユーガルリアンス號にて基隆入港來北總督軍司令官の招宴午後六時歸艦△十一月十五日軍艦利根基隆入港艦長八角大佐以下將卒百八十三名來北鐵道ホテルにて茶菓接待。

**大正十一年**△二月九日山縣元帥國葬日に付偕行社に於て神式遙弔式執行參拜者四百名△同十日臺北市及七星、海山、新莊郡の一市三郡蔬菜聯合品評會を西門市場構内に開く。△六月六日特務艦野島丸基隆入港乗組員百名餘來臺、鐵道ホテルに於て接待△同二十八日市召集事務査閲あり査閲官西原少佐以下七名佐藤參謀長臨場△七月三日東伏見宮殿下御葬儀當日に付全國歌舞音曲停止△七月三十日明治天皇十年式祭遙弔式を新公園に執行△九月三日大橋理事官國勢院事務官兼祕書官、大藏省事務官に榮轉△同六日村田遞信局監理課長市理事官後任決定△十一月二十七日寒氣強く室内四十六度大屯山に降雪平地に降霜。

**大正十二年**△一月十五日米國觀光團約四百名來北△同二十日帝國練習艦隊盤手、淺間出雲基隆入港司令官谷口中將以下二百六十六名來北各所觀光樺山小學校に於て中食接待△同二十四日皇太子殿下行啓記念圓山運動場地鎮祭執行△同二十七日より二月三日迄皇太子殿下奉迎準備打合會を開く△二月十四日伏見大宮殿下國葬日に付偕行社に於て遙弔式舉行當日歌舞音曲停止、市中弔旗掲揚△同二十五日西園寺式部次長戸田式部官八田侍醫等賀來總務長



官と共に來臺鐵道ホテル休憩後臺灣神社參拜圓山運動場太平公學校等下檢分△四月二日北白川宮殿下、同妃殿下、朝香宮殿下佛國御留學中(四月一日)御召自動車並木に衝突成久王殿下は二十分後御薨去被遊妃殿下並朝香宮殿下御重傷を負はせられたる爲 皇太子殿下本島行啓御延期の旨發表本日より三日間宮中喪仰出さる。△同六日 皇太子殿下臺北市奉迎委員會規程を定め、會長、副會長、委員、幹事、書記を置き、事務分掌を總務係、土木係、設備係、運動會係、衛生係、會計係と定め奉迎準備進行△同九日 皇太子殿下本島行啓御日程(四月十二日御出門同月二十七日御還啓)發表△四月十六日午後一時二十五分 皇太子殿下基隆御著御上陸、基隆驛御乗車、臺北驛御下車特別鹵簿にて御泊所總督官邸に御著田總督御泊所に同行し奉迎辭奉呈夜は臺北市官民二萬の提灯行列を嚮はす。此の日 天皇陛下より本島社會事業及教育獎勵の思召を以て金拾萬圓を御下賜相成り、臺灣神社へ先帝の御服一領大刀一振を奉納遊ばさる△同十七日 皇太子殿下臺灣神社御參拜、總督府御成臺北市内學校生徒兒童の奉迎旗行列を御臺覽次で植物園内臺灣生產品展覽會、中央研究所農業部へ行啓あらせられ、芝山巖へ御使御差遣あらせらる、同夜御泊所に於て清樂演奏を御聽聞に達す△同十八日 皇太子殿下には中央研究所、臺北師範學校、同附屬小學校、太平公學校、軍司令部、高等法院、臺灣教育品展覽會、醫學專門學校行啓御泊所にて蕃人舞踊御臺覽、衛戍病院、警察官及司獄官練習所、臺北工業學校へ御使御差遣あらせらる、同十九日 皇太子殿下御泊所御出門午前八時四十分臺北驛御發車中南部及澎湖島御巡啓の途に就かせらる△同二十四日 皇太子殿下御召艦金剛御座澎湖島より基隆御著御召艦よりクルールベ一濱御成り海上より佛國戰役將士の英魂を用はせられ御召艇にて港内築港工事御巡覽重砲兵隊行啓基隆驛御乗車午前十一時三十五分臺北驛御著車臺北御泊所に入らせられ午後博物館御成り次で圓山の全島學校聯合運動會へ行啓御臺覽△同二十五日 皇太子殿下草山及北投御清遊途中基隆河に於て家鴨放飼を御臺覽御還啓



後御泊所に於て島内官民七百名に御賜茶の榮を賜はる△同二十六日 皇太子殿下歩兵第一聯隊御成御閱兵、專賣局、第一高等女學校、武德殿、第三高等女學校御巡啓次で圓山の臺灣體育協會陸上競技大會へ行啓御臺覽、御還啓後御泊所に於て總督以下官民八十名に御陪食仰付けられ次で臺灣固有催物行列の臺覽を仰ぎ金壹千圓の御下賜を忝ふす又田總督を召され御沙汰書を賜はり、明石總督墓前に御使を御遣せらる△同二十七日 皇太子殿下午前九時御泊所御出門九時十分臺北驛御發車基隆御召艦金剛御坐乘御還啓の途に上らせらる△同二十八日午後三時總督官邸に於て皇太子殿下奉迎關係官民千餘名招待慰勞會開催△五月四日午後三時より鐵道ホテルに於て 皇太子殿下奉迎委員及關係者約三百五十名を案内慰勞模擬店開催△八月六日福田軍司令官以下更迭△同二十八日加藤内閣總理大臣遙悼式偕行社にて執行參列者軍司令官總務長官以下二百二十有餘名△同二十八日鈴木新任臺灣軍司令官來任△九月一日東京地方大震災の報午後三時に到る△九月二日山本内閣新任式は大震災の爲赤坂離宮芝生の上に行はれ田臺灣總督農商務大臣に親任△同三日東京地方大震災の報類々として到り人心憂鬱に銷され其の詳報を聞かんことを熱望するを以て臺北市所に於ては災害情報事務を開始し市内七箇所に掲示板特設以て一般市民に状況を迅速に報導△同四日東京地方大震災火災の被害甚大に付義捐金募集、應募者市役所に殺到し締切迄の取扱高十五萬四千九百九十一圓二十一錢(官吏側三萬七千九百四十四圓四十六錢民間側十一萬七千四十六圓七十五錢)に達す△同六日前民政長官内田嘉吉氏臺灣總督に親任△同十三日關東地方震災避難民として其隆入港備後丸にて本間國一外一名の渡臺を魁とし爾來便船毎に陸續渡來者あり漸次其數増加の傾向あるを以て本市に臨時應急施設として羅災民收容及職業紹介事務開始收容者二百二十六名に達し、内就職者百十八名△十月四日關東地方大震災救恤品に關する事務開始、受付點數衣類五千七百二點綿二十貫元圓(清涼劑)一萬五千袋△同十五日内田新總督著任△十一月二十八日ポーランド公使本島視



察の爲來北

大正十三年△一月十七日 皇太子殿下御成婚奉祝の件に關し市尹室に市協議會員及町委員總代を招集打合△同二十三日殿下東宮御成婚奉祝の爲軍艦大井馬港より基隆入港乗組員二百七十名來北、臺灣神社參拜、鐵道ホテルに於て中食接待、陸軍側の案内にて市中觀光△同十六日 皇太子殿下御成婚奉祝の爲臺北公園に於て官民合同祝賀會舉行、參會者四千五百名夜は市民提灯行列を行ひ參加人員二萬五千名 △同十日一市四郡の蔬菜品評會開催 壽小學校に於て褒賞授與式舉行△三月二十二日帝國第一艦隊陸奥を始め天龍、迅鯨、驅逐艦潛行艇等二十餘隻基隆入港 二十三日鈴木司令長官高雄より來北將校約二百名の觀迎會開催、本日より三日間に亘り將校以下水兵多數來北大に接待又市中及驛頭は軍艦團體拜觀の爲極めて雜鬧△四月十六日皇太子殿下啓第一回記念に相當するを以て臺灣神社に於て献燈式舉行、行啓記念圓山運動場に市内學校生徒兒童の聯合運動會開催△同二十七日特命檢閱使財部海軍大將一行高雄より來臺△五月七日植物園内物産陳列館にて家庭副業展覽會開催△同三十一日 皇太子殿下御成婚奉祝晚餐會を鐵道ホテルに開催出席者約五百名市中は御饗宴期間中五日間一般に國旗提灯を揚げ各町筋には電飾を施し晝夜花火を打揚げ、臺北公園には餘興舞臺を設け毎夜各種餘興あり各町團體並本島人團體行列催物屋臺等市中を練り廻る△七月十二日松方公爵(七月二日薨去國葬に決定)遙弔式を偕行社に於て施行△八月五日暴風雨襲來新店溪氾濫の爲富田町百餘戸全潰市中浸水家屋夥しく被害頗る多し△同二十日第二十師團長菅野尙一氏臺灣軍司令官に親補鈴木司令官朝鮮軍令司官に榮轉△同二十三日 天皇皇后兩陛下より暴風雨罹災者御救恤として御下賜金三千七百圓の内金百二十四圓を本市へ配付△九月一日伊澤多喜男氏臺灣總督新任、内田總督依願免官△同六日暴風雨あり前回より雨量少なきも風強く市内各所に被害多し△同十九日賀來總務長官依願免官△同二十二日總督府事務官後藤



文夫氏總務長官任命△十月十日暴風雨罹災御救恤として御下賜金一萬圓の内本市へ金百六十九圓六十錢配付△同十二日全國新聞協會大會を本島に開催、内地より會員六十六名來臺△十二月五日行政整理行はる△同二十三日武藤臺北市尹臺灣總督府土木局長に榮轉△同二十五日臺灣總督府官制改正、同日新竹州警察部長太田吾一氏臺北市尹に決定村田理事官臺北市助役任命。

**大正十四年**△一月四日恒例消防出初式舉行併て十五年勤續者表彰式舉行△二月十一日社會事業獎勵の御思召を以て臺北仁濟團外七團體に三千四百圓御下賜△同二十四日東園々藝研究會及品評會開催△三月六日第一遣外艦隊對馬基隆入港野村司令官以下來臺翌七日八日乘組員來臺鐵道ホテルへ招待△同九日佛領印度支那答禮使山縣公爵一行歸途本島視察の爲來北鐵道ホテルに於て官民有志合同觀迎會開催△四月一日臺北市大橋公學校新設△五月九日秩父宮殿下奉迎に關し市協議會員並町委員總代を鐵道ホテルに招集打合會△五月十日 天皇皇后兩陛下御結婚滿二十五年式臺北市官民合同奉祝會を臺北公園に開催出席者約二千名、當日全市國旗掲揚晝夜奉祝花火を打揚げ、夜は市内學校生徒兒童約九千名の提灯行列、各種の假裝行列あり又文武官一同より献上品奉呈△同三十日秩父宮殿下英國御遊學の御途次本島御巡視、本日御召艦出雲にて基隆御入港御上陸、御泊所總督官邸に入らせられ直に臺灣神社御參拜途中家鴨放飼を臺覽に供、次で總督府御成り諸員に拜謁を賜はり、軍司令部、歩兵第一聯隊、師範學校、專賣局、商品陳列館、博物館、中央研究所等の御視察を了はらせられ、御泊所にて市内本島人一千名より成る本島固有催物行列御臺覽夜は市民の提灯行列舉行參加人員二萬三千餘名三十日圓山運動場御成り市内小公學校聯合運動會御臺覽同日午前九時三十分臺北驛御發角板山御巡視の途に上らせられ、次で中南部地方及澎湖島の御巡視を了へさせ給ひ、六月三日軍艦出雲に御乘艦澎湖島御出發香港に向はせらる。△六月十六日第三十回始政記念式舉行記念展



覽會を本市に開催△六月十八日臺北橋開通式舉行△九月十五日朝來暴風雨の爲東園町、川端町等浸水家屋多數焚出救助約八百名△同十九日伊太利飛行機淡水港に著、鐵道ホテルに於て歡迎會開催△十月一日市制五週年記念懇親會開催△十二月六日皇孫內親王殿下御誕生の公報あり花火を打揚げ市民に之を周知し各戸國旗掲揚祝意を表す十二日御命名奉祝會を臺北公園に開催出席者二千餘名△同二十二日臺北市助役村田三郎氏臺中州南投郡守に榮轉臺北州七星郡守石川定俊氏臺北市助役任命。

**大正十五年**（昭和元年）△一月二十八日加藤內閣總理大臣薨去の報到る、二月二日遙悼式を日蓮宗法華寺に

執行△同十一日第一回市民講演會を樺山小學校講堂に開く來聽者六百餘名△三月二十一日軍艦春日基隆入港乗組練習生來北鐵道ホテルに招待△同三十一日臺北市事務分掌規定改正庶務課教育社會課、土木水道課、衛生課、財務課の五課設置△四月十六日高松宮殿下第一艦隊の南方巡航に際し、海軍少尉として軍艦扶桑に御乗組四月五日馬公御著以來高雄、展東、臺南、臺中、鳳山等順次御巡視更に東臺灣海岸近く御通過四月十五日基隆御著外港御假泊本日御上陸御召列車にて臺北御泊所總督官邸御著臺灣神社御參拜總督府御成り諸員に拜謁を賜はり軍司令部、山砲兵大隊、歩兵第一聯隊、專賣局、臺北師範學校、醫學專門學校、太平公學校等の御巡視後御泊所に於て本島固有催物行列御覽夜は參加人員二萬二千餘名の提灯行列を御覽に供す、十七日は植物園内商品陳列館、高等法院、博物館、中央研究所等御成り當日圓山運動場に於ける學校生徒兒童の奉迎運動會は雨天の爲中止依而御泊所に於て活動寫眞御覽の上下二時三十五分臺北驛御發基隆御著築港御巡覽後御乘艦四月二十日御拔錨△同十八日帝國第一艦隊歡迎會梅屋敷に開催、本日風雨の爲旗艦長門以下各戰艦より岡田司令長官以下各將校の上陸不能の爲出席無かりしも、司令長官代理古川司令官以下四百餘名の將校來著主催者側は後藤總務長官を首め官民三百餘名△同二十三日日本米



穀大會を本市に開く、二十四日州市主催にて參列員志村會頭以下二百名を梅屋敷に招待△五月四日武藤前市尹逝去  
六日三橋町に於て葬儀を營む會葬者約八百名△六月十日李王殿下國葬日なるを以て廢朝仰出され歌舞音曲停止市民  
一般弔旗掲揚弔意を表す△七月一日市營東門町水泳場新築工成り開場式舉行△同十六日伊澤總督東京市長就任、貴  
族院議員上山滿之進氏總督親任△同二十八日管野軍司令官軍事參議官に轉補、田中國重中將臺灣軍司令官に親補  
△十月二十七日北白川宮大妃殿下軍艦淺間にて基隆御入港御上陸夕刻御泊所總督官御邸著當夜市民一萬三千餘名の  
奉迎提灯行列を御覽に供し、二十八日臺灣神社御參拜次で商品陳列館御成り更に草山御成り御歸還の途次博御館御  
成り物變りたる陳列品御臺覽終りて蕃族室南側ヴェランダに出でさせ給ひ、市民の熱誠罩めたる内地人各種催物臺  
灣固有催物行列等御覽遊ばされ御泊所に御歸還夜は裏庭に於て彰化煙火を御臺覽に供す、二十九日臺北御發中南部  
へ御出發、三十一日大妃殿下中南部より御歸還夜は御泊所に於て清樂を御聽聞に供し奉り、十一月一日臺灣神社  
再度御參拜明治橋袂にて家鴨放飼を御覽遊され圓山運動場に於ける皇太子殿下下行啓記念第三回聯合運動會場御成本  
市二萬餘名の各學校生徒兒童の運動競技御臺覽御歸途市内各女學校幼稚園聯合運動會場たる臺北第一高等女學校に  
御成三千餘名の生徒園兒等の運動競技を御覽の上御泊所御歸還午後一時半より全島主なる官民九十二名並同夫人に  
對し御賜茶の榮を賜はる午後三時四分臺北驛御發基隆にて御召艦に御乘艦御歸還△十一月二十二日全國中學校長會  
議を本市に開催△十二月十五日臺灣神社に於て聖上陛下御平癒祈願式舉行當日市尹より天機奉伺並に皇后宮及皇太  
子殿下に御機嫌奉伺の電報奉呈△同二十五日聖上陛下本朝一時二十五分葉山御用邸に於て遂に崩御遊ばされ恐懼措  
く所を知らず全市休業弔旗掲揚敬弔の赤誠を表す同日市民代表市尹より御弔電奉呈、本日御踐祚式を行はせられ、  
大正十五年十二月二十五日以後を昭和元年と改元△同二十七日臺北公園に式壇を設け奉悼式舉行又各官衙學校奉悼



式舉行、

**昭和二年** △一月八日御踐祚の際賜りたる勅語奉讀式を樺山小學校講堂に於て舉行△同二十五日御大喪儀遙拜式の件に關し民間有力者十餘名を總督府會議室に招集協議會開催△二月七日大正天皇遙拜式を臺北公園に於て執行參列者官民約七千名この日及八日官衙學校銀行會社及商店は休業喪章を附せる國旗及提灯掲揚同日恩赦の大詔下る△同十八日一市四郡蔬菜家禽品評會を臺北公園に開催△三月六日社會事業獎勵の思召を以て市内臺北仁濟院外十一團體に御下賜金あり△同三十一日米國觀光團四百三十名來北△四月五日臺北市教育會發會式を樺山小學校講堂に舉行△同十三日帝國第二艦隊基隆入港司令長官吉川中將以下幹部來臺、十四日將校及下士以下千八十二名來北に付大に接待次で十五日も士官兵卒來北、前日同様接待△四月十八日臺灣銀行内地及外國支店三週間休業、上山總督臺灣銀行問題に就き諭告を發す△五月九日財界安定せる爲全島實業家百餘名鐵道ホテルに總督以下關係幹部招待△同十五日大龍峒孔子廟上棟式舉行△六月十五日納涼展覽會及發明品展覽會開催△同二十五日臺北市事務分掌規程改正の結果臨時水道擴張課新設△七月二十七日太田臺北市尹高雄州知事に榮轉、田端臺北州内務部長臺北市尹に決定同時に石川助役新竹州に轉出長谷川東港郡守助役に任命△八月六日七星郡役所落成式舉行△九月十五日本市の依囑を受け内地市政視察員谷河梅人氏一行臺灣神社參拜當日出發△十一月一日朝香宮鳩彦王殿下には御召艦瑞穗丸にて基隆御入港午後四時三分臺北驛御著總督官邸御泊所に入らせらる、二日總督御府成諸員に拜謁を賜はり高等法院、軍司令部、臺北第一中學校、師範學校附屬小學校、山砲隊、歩兵第一聯隊、醫學專門學校等を順次御視察圓山運動場に於ける 皇太子殿下行啓第四回記念運動會場御成り臺北市中等學校以下二十七校參加生徒兒童約一萬三千名の運動競技御覽御歸路樺山小學校に於ける第一回臺灣美術展覽會場御成り御覽の上御泊所御歸還三日臺灣神社御參拜次で



商品陳列館、植物園、專賣局、太平公學校、博物館、中央研究所御巡視の上御泊所に御歸還四日午前八時二十分臺北驛御發中南部の御旅に上らせらる、同十三日中南部の御巡視を了へさせ給ひ午後五時十五分御歸北直に草山貴賓館御成り御宿泊十四日淡水ゴルフリンクに御成り後藤總務長官を御對手にシングルプレーを遊ばされ草山御泊所へ御著。次て十五日御微行にて淡水ゴルフリンクに御成り正午迄御清遊零時四十分北投公共浴場御成りの上臺北御泊所御歸還この日御泊所に於て官民百六十餘名に御賜茶の榮を賜はる、同十六日午後一時十四分臺北驛御發基隆に於て各所御巡視同三時四十分御乗船御歸還△同十八日内地市政視察員村松一造、谷河梅人、郭廷俊三氏報告會開催△十二月二日松尾熊本市電氣局長來北八日都市交通講演會開催△同十四日古刹龍山寺新營落成式舉行、總督軍司令官以下官民五百餘名列席△同二十五日大正天皇御一年祭遙拜式を臺北公園に舉行。

### 昭和三年

△二月八日米國觀光團三百二十五名ベルゲンランド號にて基隆入港來北市内觀光△同十二日貴族院

議員青木信光氏外三名來臺△同十六日社會事業御獎勵の思召を以て本市管内臺北仁濟院外十一團體へ御下賜金あり△同二十四日臺北公園に於て花卉盆栽品評會開催△同二十七日期鮮教育視察團一行十四名來臺△三月八日第二皇女久宮祐子内親王殿下薨去に付本日市民は弔旗掲揚歌舞音曲を御遠慮申上ぐ、十三日御喪儀當日も弔旗掲揚臺北市尹より天機奉伺御機嫌奉伺の電報奉呈△四月一日米國觀光團一行約四百名來北△同二日帝國第一艦隊基隆入港御座乗の久邇宮朝融王殿下には加藤司令長官以下幕僚と共に臺北驛御著直に御泊所總督官邸に成らせられ、臺灣神社御參拜北投及草山御成り後臺北御泊所へ御歸還、同夜總督御招宴に臨ませらる翌午前九時二十二分御發中南部へ成らせらる、同日第一艦隊乗組員半舷上陸約九百名の將卒來北臺灣神社參拜動物園參觀市中觀光將校には午餐下士以下には茶菓を呈す、四日も前日通り接待、同日午後三時より梅屋敷に於て加藤司令長官以下將校の歡迎園遊會開催△同



六日久邇宮朝融王殿下午前十一時十二分中部より御歸還臺北驛に於て三分間御停車基隆へ向はせらる△同七日基隆入港の獨逸練習艦乗組軍樂隊一行を聘し公園音樂堂に奏樂會を開く、翌日獨逸軍艦乗組士官及候補生百餘名來北接待△同十五日航空戰隊基隆入港十六日及十七日司令官以下乗組隊員來北臺灣神社參拜市中觀光中食接待△同二十七日久邇宮邦彦王殿下臺灣軍特命檢閱使として御召船蓬萊丸にて基隆御入港午後四時十五分臺北驛御著御泊所總督官邸に入らせらる、△二十八日臺灣神社御參拜御歸還直に御泊所軍司令官以下將官上長官に單獨拜謁を、尉官に列立拜謁を賜ひ、裏ペランダに於て上山總督以下に單獨拜謁又は列立拜謁を賜ひ、總督府廳舍前御成り御閱兵の上御歸還午後三時より植物園内天長節奉祝園遊會へ御成り夜は三萬市民奉祝提燈行列御臺覽、四月三十日は自動車にて草山貴賓館御成り一日を過させ給ひ歸途北投を經由御泊所御歸還、五月一日軍司令部總督府御成り軍司令部に於ては檢閲を行はせらる、同二日軍司令部御成り終日同部に於て御過し給へり。同三日守備隊司令部御檢閲、同四日臺北練兵場に御成り幹部候補生並に初年兵教練御檢閲午後步兵第一聯隊御檢閲、同五日山砲兵大隊御檢閲、同六日午前七時二十分臺北驛御發車御南下遊ばさる△同一日長谷川助役は内地觀光團十五名引卒出發△同五日練習艦八雲、出雲基隆入港御乗組の高松宮殿下には午後四時十分臺北驛御著直に草山御成り御一泊六日午後四時總督官邸御著午後四時二十分より御機嫌奉伺を受けさせらる、同夜官邸に於て御晚餐會開催、次で七日御泊所御發水源地御成、六日七日兩日に亘り練習艦乗組將校及士官候補生等三百名來北蓬萊閣にて臺灣料理接待△同十四日久邇宮殿下には中部南部各部隊御檢閲を終らせられ午後二時四十分臺北驛御著御泊所御歸還△同十五日午前中臺北衛戍病院臺北衛戍刑務所御檢閲午後二時より總督府廳舍前舉行の臺北在郷軍人及中等學校以上各學校教練親閱式に臨ませらる。分列式は參加十一學校四千四百餘名了つて各學校並に在郷軍人に對し令旨を賜ふ、同十六七兩日は基隆部隊を御檢閲、



同十八日草山御成、十九日は角板山へ御成御一泊二十日臺北御泊所御歸還、二十一日は草山御成り、晩春の一日を過させ給へり。同二十二日臺北御發基隆より澎湖島御成り御檢閲を了らせられ、同二十六日午後八時馬公御發開城丸にて二十七日午前六時高雄港御著同日午後四時九十八分臺北驛御著御泊所御歸還、同二十八日御泊所御滞留、同二十九日海山郡鶯歌原野に於ける歩兵山砲兵聯合演習御實視の爲御成午前十時八分臺北御歸還、午後一時二十分御發草山御成貴賓館御一泊、同三十日午後一時草山御發北投經由同五十分御泊所御著上山總督に對し令旨を賜はる、午後三時より御泊所に於て奉迎關係者約三百名に對し御賜茶の御儀あり。同三十一日山中軍司令官、邸に於ける御餐會に臨ませられ午後六時三十分より御泊所に於て文武高官四十七名に對し御賜餐△六月一日約一箇月間に亘りて臺灣軍各部隊御檢閲各所在郷軍人學校教練御親閱遊ばされたる久邇宮殿下には午前七時四十六分臺北驛御發車基隆にて御召船扶桑丸御乗船御歸還△同十六日上山總督退官貴族院議員川村竹治氏臺灣總督親任△同二十六日後藤總務長官退官河原田稼吉氏總務長官任命△七月九日川村新總督著任△同十四日建功神社鎮座式舉行總督軍司令官以下各州知事文武官參列員遺族等約一千名、十五日は臨時例祭執行、同十六日成毛拓殖局長官來北翌十七日太平公學校及西門市場視察△八月九日獨逸大使ゾルフ氏來臺翌十日市内巡視△同十日田中軍司令官軍事參議官に轉補菱刈中將臺灣軍司令官に親補せられ同十八日著任△九月十一日基隆臺北間縱貫道路開通式舉行△同二十一日日本西部水産大會を本市に開催△十月一日水野前文相全國港灣協會々長として來臺翌二日全國港灣大會開催△同二十七日臺灣美術展覽會開催△十一月一日 聖上陛下御大禮、臺灣神社に於て祭祀執行午前十時樺山小學校講堂に於て總務長官臨場高齢者に對し天杯及酒肴料傳達式舉行、午後一時市役所員奉拜及參賀奉祝式舉行、同二時臺北公園に於て臺北市民の萬歲奉唱式舉行、△同十一日午前九時より圓山運動場に於て市内小學校聯合奉祝運動會開催又馬術會にては奉祝競



技會開催、翌十二日午前九時より市内公學校聯合奉祝運動會、十三日午前九時より各中等學校以上聯合奉祝運動會開催、夜は臺北公園に於て仕掛花火を催す本日より十七日迄臺北公園に於て奉祝菊花展覽會開催△同十四日午前八時臺灣神社に於て大嘗祭の式を行せらる市役所に於ては午前十時所員最敬禮の裡に勅語奉讀式舉行△同十五日午後六時より臺北市民奉祝提燈行列舉行△同十六日午前十一時總督官邸にて臺北に於ける饗饌の清宴を開かる、この日賜饌の光榮に浴せるは河原田總務長官を始め文武官民二千百八十名 天皇陛下萬歲三唱、記念木杯を一箇づゝ家寶に頒つ次で正午より臺北市民奉祝會を樺山小學校講堂に開催參會者總務長官を初め文武官民二千餘名長谷川臺北市尹代理の式辭、總務長官の發聲にて 天皇陛下萬歲三唱和氣鬪然歡喜の中に散會せり△同十七日臺北市民の熱誠を罩めたる各種の催物も降雨の爲中止の止むなきに至りたるも熱せる市民は歇み間を利用し市中を練り廻る午後六時三十分より總督官邸に於て奉祝夜會開催△同十八日前日來降雨の爲豫定の催物を舉行し能はざりし市民は早朝より各其の町を出發豫定の順路を踊屋臺、花車、囃屋臺、樽神輿、假裝行列、本島人固有催物行列等趣向を凝らし市中を練り廻る因に本市よりは御大典奉祝として石川欽一郎氏謹寫次高山油繪献上△十二月十日英國巡洋艦プールベル號基隆寄港艦長及副官來北。

**昭和四年** △一月五日佛國大使ド、ビー大使竝に極東艦隊司令官、艦長以下將士の歡迎會鐵道ホテル開催△同二十七日久邇宮邦彦王殿下薨去二十八日宮内大臣、皇后宮大夫、山田宮内事務官へ御弔電を發す、越へて二月三日故久邇邦彦王宮殿下の遙拜式舉行參拜者二千餘名△同四日英國大使チイレ、氏一行歡迎會鐵道ホテル開催△同九日貴族院議員蘇峰徳富猪一郎氏令夫人と共に來北同十一日正午鐵道ホテルに於て歡迎會開催△同十八日臺北市事務分掌規程中改正市に庶務課、教育課、社會課、勸業課、土木水道課、衛生課、財務課、臨時水道擴張課の八課を置く。



△同二十一日築地町魚菜卸賣市場地鎮祭舉行△三月十四日魚菜卸賣市場代行會社創立總會開會△同二十三日臺北公園に於て家食品評會開催△四月一日錦尋常小學校及大安公學校設立△同十三日後藤伯爵薨去の報に接す、同十六日圓山臨濟寺に於て官民合同遙弔式舉行△同二十日田端市尹新竹州知事に榮任、總督府事務官增田秀吉氏臺北市尹に轉任△四月二十八日增田市尹著任△五月十二日伏見宮博義王殿下樺艦長として基隆御入港、顏國年氏邸御一泊翌十三日午前八時十分臺北驛著臺灣神社へ御參拜後淡水ゴルフリンクへ御成十二日より十五日迄樺、桐乘組將校下士卒市内見學鐵道ホテル晝食接待△五月十七日比律賓水泳選手一行來臺午後一時より鐵道ホテルに於て同選手一行並に本島選手及關係者招待會開催、次で十八、十九兩日市營プールに於て臺比交驢水上競技大會開催△同二十五日海軍記念日馬公より軍艦北上基隆入港將校下士來北市内觀光鐵道ホテルに於て接待二十六日も同様歡待二十七日は海軍記念日市中國旗掲揚午前九時四十分臺北公園に於て祝賀會開催來會者約五百名△六月二日伊號六十一潜水艦基隆入港遠藤少將以下二十七名來北晚餐接待本日鹿兒島縣町村長六十六名の一行本島軍隊慰問並に視察の爲來臺す。翌三日鐵道ホテルに於て奉迎茶話會開催△七月八日川村總督告別式を總督府會議室に行ふ△七月十日午後三時より川村總督招待會を鐵道ホテルに於て開催參會者約七百餘名十一日午前七時廿分川村總督臺北發離臺△同十四日救世軍少將山室軍平氏來臺△同十八日午後三時より鐵道ホテルに於て河原田總務長官送別會開催、廿日河原田總務長官上京△同二十八日樺山小學校講堂に於て來臺中の全國中等學校地理歴史教員約六十名招待△同三十日川村總督退任貴族院議員石塚英藏氏臺灣總督親任△八月二十七日石塚新總督著任△同三十一日多年本島各種事業の爲貢獻せられたる前臺灣電力株式會社長高木友枝氏は午前十時臺北發離臺△九月十七日武富參與官一行來臺△同二十五日全國上水會議を總督府會議室に開く同夜上水會議參列者一同蓬萊閣招待△同二十七日軍事參議官鈴木大將來北△同二十八日上水協



議員一行は長谷川助役案内にて草山水道擴張工事視察△同三十日第三皇女内親王殿下御誕生の公報あり△十月一日樺山小學校講堂に於て在職十年以上の小公學校教員表彰式舉行△同二日神宮式年遷宮祭遙拜式を臺北公園に於て舉行當夜參列したる官民は約三千名△同六日第三皇女孝宮和子内親王殿下誕生奉祝會を臺北公園廣場に於て開會△同九日午前九時より全國圖書館長會議を總督府會議室に於て開催夜各館長江山樓招待△同十六日大日本山林大會を臺北高等商業學校講堂に於て開催同夜本島軍隊慰問の爲來臺せる熊本縣下町村長を蓬萊閣招待△同十七日山林大會參列員招待會を江山樓に開催、△同二十三日東伏見宮妃殿下には御召船朝日丸にて基隆御著午後三時四分臺北驛御著御泊所たる總督官邸に入らせらる、午後三時五十分より石塚總督以下百二十四名に對し單獨拜謁を仰せ付けらる、同二十四日午前九時十分御發臺灣神社御參拜後總督府に御成り夫々單獨列立拜謁を賜ひ御少憩表玄關御座所に於て市内各小公學校五學年以上の兒童並に高等女學校一、二學年生徒七千餘名の奉迎旗行列御覽覽愛國婦人會臺灣支部、同附屬幼稚園へ御成次で建功神社御參拜、商晶陳列館、林産物展覽會御巡覽、臺北第二高等女學校、博物館御巡覽の後同館ベランダに於て本島固有催物行列詩意閣を覽増田市尹より御説明申上ぐ、終つて御泊所御歸還夜は階上會議室に於て臺灣映畫御覽△同二十五日午前九時十分臺北公園内愛國婦人會第二回總會々場御成諸員に拜謁を賜はり次で有功章授與式々場に臺臨菱刈顧問人見支部長以下五百餘名の會員へ有功章を一々御親授あらせられ御少憩後婦人會總會に臨御會員一同に對し御諭旨を賜ひ廢兵及戰死者遺族總代に特別御下賜金授與同十一時四十八分御退場御泊所御歸還、同日午後一時七分御發專賣局南門工場御巡覽の上草山御成貴賓館に於て御休憩午後三時四十分五分草山御發御泊所御歸還次で午後六時十六分鐵道ホテル御成貴賓室に於て英・米・蘭の三國領事及同夫人に拜謁を仰付けられ、總督以下二百六名に對し御賜宴同八時四十七分御泊所御歸還、この日殿下には仁濟院、愛々寮、公設



質舗、盲啞學校、馬偕病院へ御使さして後藤評議員御差遣、又節婦四名へ御紋章入御菓子御下賜△同二十六日妃殿下には午前八時四十分臺北驛御發中南部地方へ御出發、本日臺北高等學校落成披露式舉行△同三十一日東伏見宮妃殿下には中南部の御旅行を了へ午後四時四十三分臺北驛御著御泊所へ入らせらる△同三十一日午前九時御微行にて商品陳列館御成御歸還御少憩御泊所御發同十時三十八分臺北驛御發角板山へ向はせられ御一泊の上十一月一日午後二時四十八分御歸還夜は會議室に於て活動寫眞臺覽客間に於て謠曲御聽聞あらせられたり△十一月二日午後一時より階上應接間に於て總督府職員其他に對し記念品御親授午後二時五十五分臺北御發基隆御著扶桑丸に御乘船御離臺△同七日全島産業組合大會を臺北高等商業學校講堂に於て開催。

## 昭和五年

△一月十二日武藤教育總監本島視察の爲來臺同日新任松木臺灣電力株式會社長著任△同十六日吉澤

支那公使來北△同二十一日南門下水幹線工事起工式舉行△同三十一日武藤教育總監太平公學校視察、△二月四日高

松宮殿下御結婚奉祝會を鐵道ホテルに於て開催參會者三百五十名△二月六日熊本第六師團長荒木中將來臺、同日朝

鮮京城商業會議所員來北△同十一日建國祭を樺山小學校講堂に於て開催參會者約四百名引續き社會教化團體及納稅

功勞者表彰式舉行△同十九日米國觀光船オーストラリヤ號乘組員三百三十名來北各所觀光見學△同二十一日明治橋

新營地鎮祭執行△三月八日市教育後援會總會を樺山小學校講堂に開く△四月二十日帝國第一艦隊陸奧以下基隆入港

司令長官一行來北、翌二十一日將校約四十名下士以下百十名來北臺灣神社參拜市中觀光、午後三時より准士官以上

四百名を梅屋敷招待△同二十九日伊太利國軍艦及練習艦、帝國軍艦春日基隆入港△同三十日臺北市訓令第五號を以

て臺北市事務分掌規程中衛生課の次へ自動車課を加へたり△五月九日憲兵創始五十年記念祭を偕行社に行ふ△同二

十五日軍艦五十鈴乘組員將校二十名下士二百十名來北臺灣神社參拜正午鐵道ホテルに於て接待△同二十七日第二十



五回海軍記念日市内小、公學校兒童旗行列を爲し又鐵道ホテルに於て祝賀會開催會員約四百名△六月二日菱刈大將は關東軍司令官に榮轉、後任航空本部長渡邊中將臺灣軍司令官に親補、同月二十七日著任△同二十九日農林次官高田稔平氏來臺△七月一日臺灣軍狀視察の爲瀨川武官來臺、七月二十一日龍山寺廟視察△七月五日より十日間圓山動物園夜間開場△同二十二日内地見學旅行の爲市内小、公學校生徒八十名中野太平公學校長引卒出發△同二十四日兒玉總督二十五周年法要圓山臨濟寺に舉行官民約百參名參列同日南菜園にて兒玉總督遺物展覽會開催△同二十八日暴風雨襲來近年稀なる豪雨各河川増水甚し、浸水家屋一萬七千五百戸、非常な混雜を極む△八月七日軍艦滿洲乘組員將校以下百十名臺灣神社參拜晝食茶菓接待△九月一日臺北市訓令第十三號を以て臺北市事務分掌規定中（土木水道課）を土木課、水道課に改正△同二日本日より十五日間臺北公園にて實業會主催市後援納涼會開催△十月一日臺北市制第十周年記念官民合同祝賀會を樺山校庭に於て開催八見長官、各部長、軍參謀長等官民約一千餘名參列同日市政功勞者表彰式舉行又同日市内小公學校兒童八千名の旗行列を爲す、夜は臺北公園に於て仕掛花火、活動寫眞、音樂、相撲、其他各種催物及青年團提灯行列を舉行頗る盛觀を極む△十月六日風水害御救恤金御下賜に付き傳達式を樺山講校堂に於て舉行△同十一日八幡製鐵所野球團を招聘圓山球場に於て市制十周年祝賀野球大會を開催（五日間）△同二十七日臺北公園に於て臺灣神社遙拜所鎮座式舉行△同日霧社蕃蜂起大逆殺の報に接す△十一月一日霧社事件慰問の爲本市を代表し近藤谷山兩市協議會員及北村屬霧社へ向け出發△同十日臺北佛教會主催霧社事件遭難者追弔會を公園音樂堂に開催△同十四日濱口首相東京驛に於て兇漢の爲大腿部を狙撃せられたる電報に接す△同十九日故田總督遙弔式を樺山町淨土宗別院に執行△同二十一日市助役長谷川録郎七星郡守に榮轉、七星郡守佐々木金太郎市助役に任命△三十日霧社事件殉難殉職者追悼會を臺北公園にて舉行△十二月十六日霧社事件討伐隊



慰勞會を榮座に開催

昭和六年 △一月一日臺北鐵道ホテルに於て新年交禮會開催石塚總督以下官民約一千名來會△同三日金谷參謀  
總長來臺△同十六日石塚總督依願免本官、關東長官太田政弘臺灣總督に任せらる△同十七日人見總務長官依願免本  
官、高橋守雄總務長官に任せらる△二月三日太田總督著任△同十九日高橋總務長官市役所へ初巡視△四月十四日高  
橋總務長官は警視總監に榮進、木下信總務長官に任せらる△同二十日佐世保大村海軍飛行部隊來臺△五月十六日増  
田臺北市尹は殖産局農務課長に榮轉、臺南州内務部長内海忠司臺北市尹に任せらる△六月五日賀陽宮恒憲王殿下御  
著臺△同十七日賀陽宮殿下臺覽市内小公學校兒童運動會を圓山運動場に於て開催、同日東門町水泳場にて水泳大會  
御泊所にて本島固有催物行列を臺覽に供す同十八日賀陽宮殿下御歸京の途に就かせらる△八月四日前軍司令官渡邊  
大將離臺△十六日眞崎軍司令官著任△同二十九日濱口前首相遙弔式を偕行社にて舉行△十月一日教育功勞者表彰式  
舉行△同四日内臺郵便試驗飛行陸上機來臺△同十日歸還飛行△同月十七日北區消防詰所落成式舉行。



# 臺北市現勢一覽

## 臺北市町名一覽

表町	榮町	東門町	水道町	川端町	壽町	若竹町	龍山寺町	馬場町	宮前町	御成町	大正町	下埤頭
明石町	文武町	旭町	南門町	千歲町	築地町	八甲町	綠町	上奎府町	日新町	大宮町	三橋町	西新庄子
北門町	乃木町	大安町	龍口町	新榮町	濱町	新富町	堀江町	下奎府町	永樂町	圓山町	中庄子	
本町	書院町	下內埔	佐久間町	錦町	西門町	老松町	柳町	建威町	港町	大直	朱厝崙	
京町	樺山町	六張犁	兒玉町	福住町	新起町	入船町	東園町	太平町	大橋町	河合町	上埤頭	
大和町	幸町	富田町	古亭町	末廣町	元園町	有明町	西園町	蓬萊町	大龍峒町	泉町	中崙	







臺北市尹助役任歴表

市 尹

就任年月日	退任年月日	在任年月	氏名
大正 九、九、一	大正 一三、一二、二三	四、三	武藤 針五郎
同 一三、一二、二五	昭和 二、七、二七	三、八	太田 吾一
昭和 二、七、二七	同 四、四、二〇	一、一〇	田端 幸三郎
同 四、四、二〇	同 六、五、一六	二、二	増田 秀吉
同 六、五、一六	現在		内海 忠司

助 役

(備考 當初理事官であつたが大正十三年十二月官制改正に因り助役となつた)

大正 九、九、一	大正 一一、九、六	二、〇	大橋 長行
同 一一、九、六	同 一四、一二、二三	三、四	村田 三郎
同 一四、一二、二三	昭和 二、七、二三	一、八	石川 定俊
昭和 二、七、二三	同 五、一一、二〇	三、五	長谷川 録郎
同 五、一一、二〇	現在		佐々木 金太郎



臺北市有財產一覽

(昭和六年三月現在)

土地建物其他		土地建物其他	土地建物其他
計	計	計	計
三〇、六六〇、三三二	三〇、六六〇、三三二	三〇、六六〇、三三二	三〇、六六〇、三三二
二二九、五三〇七 <sup>甲</sup>	二二九、五三〇七 <sup>甲</sup>	二二九、五三〇七 <sup>甲</sup>	二二九、五三〇七 <sup>甲</sup>
五、五〇五、二〇九 <sup>円</sup>	五、五〇五、二〇九 <sup>円</sup>	五、五〇五、二〇九 <sup>円</sup>	五、五〇五、二〇九 <sup>円</sup>
四、二四〇、八七八、〇〇〇	四、二四〇、八七八、〇〇〇	四、二四〇、八七八、〇〇〇	四、二四〇、八七八、〇〇〇
一三、三二三、〇一〇、〇〇〇	一三、三二三、〇一〇、〇〇〇	一三、三二三、〇一〇、〇〇〇	一三、三二三、〇一〇、〇〇〇
二三、〇六九、〇九七、〇〇〇	二三、〇六九、〇九七、〇〇〇	二三、〇六九、〇九七、〇〇〇	二三、〇六九、〇九七、〇〇〇
六三、五七一、〇〇〇 <sup>円</sup>	六三、五七一、〇〇〇 <sup>円</sup>	六三、五七一、〇〇〇 <sup>円</sup>	六三、五七一、〇〇〇 <sup>円</sup>
一三、〇〇二、七一〇	一三、〇〇二、七一〇	一三、〇〇二、七一〇	一三、〇〇二、七一〇
七六、五七三、七一〇	七六、五七三、七一〇	七六、五七三、七一〇	七六、五七三、七一〇
五〇五、四六〇 <sup>円</sup>	五〇五、四六〇 <sup>円</sup>	五〇五、四六〇 <sup>円</sup>	五〇五、四六〇 <sup>円</sup>
三、五二九、七二〇	三、五二九、七二〇	三、五二九、七二〇	三、五二九、七二〇
一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
一四、〇三五、一八〇	一四、〇三五、一八〇	一四、〇三五、一八〇	一四、〇三五、一八〇
四九〇、〇〇〇、〇〇〇 <sup>円</sup>	四九〇、〇〇〇、〇〇〇 <sup>円</sup>	四九〇、〇〇〇、〇〇〇 <sup>円</sup>	四九〇、〇〇〇、〇〇〇 <sup>円</sup>





臺北市財政一覽

年	度	一般會計	特別會計	計
大正	一〇	一、六四二、五一八・五〇 <sup>円</sup>		一、六四二、五一八・〇五 <sup>円</sup>
同	一	一、六五六、八〇六・九四	四二、九四二・九一	一、六九九、七四九・八五
同	二	一、六二七、八七九・一二	三九一、六〇二・一三	二、〇一九、四八一・二五
同	三	一、八二六、六五一・五一	七七、七一七・四六	一、九〇四、三六八・九七
同	四	一、七八六、六九五・一二	七二、八九一・八九	一、八五九、五八七・〇一
昭和	一	一、七三〇、二六六・一二		一、七三〇、二六六・一二
同	二	二、四九五、八一四・二九	四〇二、三〇三・七六	二、八九八、一一八・〇五
同	三	二、〇四七、九五〇・〇七	一、〇〇二、〇四三・八一	三、〇四九、九九三・八八
同	四	二、四〇九、四五五・七七	九三六、八二五・二〇	三、三四六、二八〇・九七
同	五	二、六七九、六三七・一六	九九二、五一四・二七	三、六七二、二五一・四三
同	六	三、二四一、九九五・〇〇	六六九、三四〇・〇〇	三、九一一、三三五・〇〇
(豫)	算			



臺北市土地表

(昭和六年一月現在)

地目	數		計
	官有地	民有地其他	
田	六四、九二八 <sup>甲</sup> 三	一、八九五、九九九 <sup>甲</sup> 四	一、九六〇、九二七 <sup>甲</sup> 七
畑	六三、一七九三	五四四、三五七八	六〇七、五三七一
養魚池	—	、四四六〇	、四四六〇
建物敷地	二五三、三四三二	六五八、〇〇一二	九一一、三四四四
池沼	一四、四七九〇	二六、二六三五	四〇、七四二五
山林	八七、五六〇五	一四四、五四四八	二三二、一〇五三
原野	六、五九〇五	一六、二六五二	二二、八五五七
祠廟敷地	、一六〇四	六〇、六五〇八	六〇、八一一二
墳墓敷地	、八〇一八	一〇七、八一九五	一〇八、六二一三
鐵道用地	三四、〇四四五	、二二七六	三四、二七二一
公園場地	、四五五六	一八、五七一〇	一九、〇二六六
練兵場	四〇、九八六四	二五、二四八九	四〇、九八六四
鐵道	六、五四九七	、	三十一、七九八六
鐵道線	〇、一一九	四、三九八八	四、四一〇七
甲惡水路	〇、五一六	七十一、二五五五	七十一、三〇七一



臺北市戶口表

年次	戶數	人		計口
		男	女	
大正九年	四二、三九〇	九〇、〇〇二	八一、〇〇〇	一七一、〇〇二
同	四三、九六六	九五、一七三	八四、〇四二	一七九、二一五
同	四五、三四一	九九、七三二	八八、二三九	一八七、九七一
同	四六、六六三	一〇一、四〇八	九一、九三五	一九三、三四三
同	四七、一八一	一〇三、七一五	九四、九一四	一九八、六二九
同	四七、四二〇	一〇五、三七九	九七、二三四	二〇二、六〇二
昭和	四八、六九二	一〇七、四六七	九九、三三一	二〇六、七八八
同	五〇、四一六	一一一、一六三	一〇三、〇二五	二一四、一八八
同	五二、六二六	一一五、六一二	一〇七、五一八	二二三、一三〇
同	五四、七〇二	一二一、一〇八	一一二、二六三	二三三、三七一

溝渠	堤防	雜地	合計
〇〇五七	四七七六	六一、五四七四	八九、五五四四
〇	〇	二八、〇〇七〇	二八、〇〇七〇
〇	〇	六〇一、一四九七	六〇一、一四九七
〇〇五七	四七七六	六一、五四七四	八九、五五四四
〇	〇	二八、〇〇七〇	二八、〇〇七〇
〇	〇	六〇一、一四九七	六〇一、一四九七



臺北市昭和五年各種別戶口表

同	五	五七、二三一	一二六、八九一	一一七、四〇四	二四四、二九五
---	---	--------	---------	---------	---------

種別	戶數	人		計口
		男	女	
內地人	一九、五八六	三六、八〇二	三二、八八一	六九、六八三
本島人	三三、一三八	七九、二〇六	七九、四六五	一五八、六七一
朝鮮人	二八	五三	七四	一二七
支那人	四、四三二	一〇、七八五	四、九四八	一五、七三三
其他外國人	四七	四五	三六	八一

臺北地價一覽 (一坪當)

方面	大正十一年	昭和元年	昭和五年	昭和六年
榮町	一二八 <sub>円</sub>	一三〇 <sub>円</sub>	一五七 <sub>円</sub>	一五七 <sub>円</sub>
大正町	二一	二五	二八	二七
圓山町	四	五	一	一



永樂町	新起町	龍山寺町	富田町	大安
四九	四〇	九	二	三
五五	四七	一五	三	四
五七	五三	一五	八	六
五三	五四	一四	七	七

臺北市舊債整理公債並に借入金一覽

元利償還年次表

(昭和六年十一月十日現在)

年 度	元 金 殘 高	償 還 元 金	年 度	元 金 殘 高	償 還 元 金
昭和二年度	一、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	昭和七年度	四八六、〇〇〇	一五一、〇〇〇
昭和三年度	九九〇、〇〇〇	一二三、〇〇〇	昭和八年度	三三五、〇〇〇	一六二、〇〇〇
昭和四年度	八七七、〇〇〇	一二一、〇〇〇	昭和九年度	一七三、〇〇〇	一七三、〇〇〇
昭和五年度	七五六、〇〇〇	一三〇、〇〇〇	計		一、〇〇〇、〇〇〇
昭和六年度	六二六、〇〇〇	一四〇、〇〇〇			

償還額

五一四、〇〇〇圓

未還額

四八六、〇〇〇圓

臺北市借入金一覽表

(昭和六年十一月十日現在)



### 臺北市稅一覽

#### 市稅歲入一覽表

科 目	區		分				
	大正一〇年度	同 一 一 年度	同 一 二 年度	同 一 三 年度	同 一 四 年度	同 一 五 年度	
市 稅	七〇二,三〇七〇	七六七,九〇六二	七〇三,九四五三	七五三,三〇二七〇	七六六,五六六三七	八〇〇,五三二一三	
地 租	一五,八八三.五三	一五,八六七.七四	一五,八七九.六四	一六,七八三.八〇	一六,五九三.三四	一六,五〇八.三三	
所 得 稅	四二,二二二	五,九〇三.〇三	三,九〇九.九七	四,三三四.七三	三,五二一.八〇	二,九三六.六三	
戶 稅	三三,六四二.七三	三九八,二〇八.一八	三八六,五六一.二三	四二二,〇二七.九二	四三九,一九八.八七	四二八,一七四.二五	
營 業 稅	二七七,〇三二.二四	二六二,四六四.三八	二二六,二八九.一八	二三三,三八四.五六	二五六,五七八.〇〇	二八四,四六〇.七〇	
雜 種 稅	九六,二五九九	八六,五六二.七九	八二,三〇五.三一	七六,八九一.六九	八〇,六八四.三六	七六,四六一.三四	

費 別	借 入 額	償 還 額	未 償 還 額
水道擴張工事費	七八四,〇〇〇	二三三,〇三六.八三	五五〇,九六三.一七
消費市場改築費	一〇〇,〇〇〇	五,六三四.六七	九四,三六五.三三
中央卸賣市場新營費	四〇〇,〇〇〇	三〇,九五五.六五	三六九,〇四八.三五
市區改正用地買收費	三一〇,〇〇〇	一三八,七六四.八三	一七二,二三五.一七
計	一,五九四,〇〇〇	四〇八,三八七.九八	一,一八五,六一二.〇二



科目區別	年度別					
	昭和二年度	同三年度	同四年度	同五年度	同六年度 (豫算)	
市租稅	八〇八、七二六・五 <sup>円</sup>	八八三、八五八・七 <sup>円</sup>	九二二、三五六・二 <sup>円</sup>	八四八、六二九・〇 <sup>円</sup>	八六〇、〇三六・〇 <sup>円</sup>	
地租稅	三三、三九一・八 <sup>四</sup>	三三、六二八・八〇	三三、九六六・〇 <sup>四</sup>	三三、三三三・〇〇	三三、六五七・〇〇	
所得稅割	二八八〇・三三	三、八三〇・四四	三、五〇七・五九	二、五七三・〇〇	二、八九四・〇〇	
戶稅割	四二六、六八九・一九	四七八、九八八・四〇	四七九、五二六・八四	四八一、七三六・〇〇	五〇一、七三六・〇〇	
營業稅割	二六九、六七六・八七	二七八、三七三・六四	二八三、九三八・二二	二四九、七四九・〇〇	二四二、八八四・〇〇	
雜種稅割	八六、〇七八・四三	八九、〇四七・四四	一一一、三三七・四三	八一、一九七・〇〇	七九、八六五・〇〇	

年度別戶稅及戶稅割負擔額

年度別	生產千圓當戶稅		
	戶稅一圓當戶稅割	生產千圓當戶稅	稅及戶稅割
大正	五、二〇〇 <sup>円</sup>	一、七七 <sup>円</sup>	一四、四〇四 <sup>円</sup>
同	三、三〇〇	五、一五	二〇、二九五
同	二、三六〇	七、二四	一九、四四六
同	二、三〇〇	七、〇七	一八、五六一
同	一、三四〇	一三、〇〇	一七、四二〇
同	一、二一四	一二、三〇	一六、一四六
昭和	一、一八〇	一二、二五	一五、六三五
和	二一、五四〇	一、一八〇	一五、六三五



戶稅及戶稅割負擔額一覽表

同	同	同	同	同	同
三	四	五	六	三	三
一、七四〇	一、六五〇	一、六六〇	一、六六〇	九、二四	一七、八一七
二、七四〇	一、六六〇	一、六六〇	一、六六〇	八、七四	一六、六九八
二、七四〇	一、六六〇	一、六六〇	一、六六〇	八、七四	一六、一六八
二、七四〇	一、六六〇	一、六六〇	一、六六〇	八、七四	一六、一六八

名 稱	年 別	大正一〇年度 同 一一年度 同 一二年度 同 一三年度 同 一四年度 昭和 一五年度					
		大正一〇年度	同 一一年度	同 一二年度	同 一三年度	同 一四年度	昭和 一五年度
賦課生產額		三五,〇四二,四九〇 <sup>円</sup>	二四,七九九,〇九二	二四,六六八,六八〇	二五,九四四,一六六	二六,二六六,六一八	二八,三九三,八〇六
賦課人員		三三,八八六	三三,四四五	三三,七八四	三三,七七八	三三,六五八	三四,二三五
賦課額	戶稅	一八一,九五六	八一,五二三	五七,八九〇	五九,三五二	三四,九三三	三四,一七〇
賦課額	戶稅割	三二,五九六	四八,九〇〇	四八,九〇〇	四八,九〇〇	四八,九〇〇	四八,九〇〇
生產千圓二付戶稅		五,二〇〇	三,三〇〇	二,三六〇	二,三〇〇	一,三四〇	一,二二四
同 戶 稅 割		九,二〇四	一六,九九五	一七,〇八六	一六,二六一	一六,〇八〇	一四,九三三
免 除 者	生產額	三三四,八七八 <sup>円</sup>	二二三,九四一	二四九,一七七	二〇三,四四八	二二七,六五四	二二七,七八
免 除 者	戶 數	三八四〇	二,七三六	四,七二〇	三,四七四	三,五二〇	三,三五五
十二月末日現在戶數		四三,三九〇	四三,九六六	四三,三四二	四六,六六三	四七,一八一	四七,四三〇
同 人 口		一七二,〇〇三	一七九,二二五	一八七,九七二	一九三,三四三	一九八,六三九	二〇二,六〇三
賦課生產一戶當		一,六〇五	七四一	五七三	七六九	八〇四	八二八



名稱	年別	昭和二年度						同三年度						同四年度						同五年度						同六年度																	
		賦課生產額		賦課人員		賦課額		生產千圓三付戶稅		同戶稅割		免除者		十二月末日現在戶數		同人口		賦課生產一戶當		戶稅(賦課戶數)一戶當		戶稅割(同)一戶當		賦課生產額		賦課人員		賦課額		生產千圓三付戶稅		同戶稅割		免除者		十二月末日現在戶數		同人口		賦課生產一戶當		戶稅(賦課戶數)一戶當	
戶稅(賦課戶數)一戶當		553		2437		1765		1759		1000		997		553		2437		1765		1759		1000		997		553		2437		1765		1759		1000		997							
戶稅割(同)一戶當		9789		12777		13434		12820		12333		997		12333		12333		12333		12333		12333		12333		12333		12333		12333		12333		12333		12333							
賦課生產額		2,303,696		3,018,954		3,213,625		3,354,590		3,558,195		3,303,696		3,018,954		3,213,625		3,354,590		3,558,195		3,303,696		3,018,954		3,213,625		3,354,590		3,558,195		3,303,696		3,018,954									
賦課人員		34,888		35,810		36,768		38,507		40,202		41,033		42,888		44,888		46,888		48,888		50,888		52,888		54,888		56,888		58,888		60,888		62,888									
賦課額		34,327		52,193		53,828		55,271		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505		55,505									
生產千圓三付戶稅		428,900		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736		481,736									
同戶稅割		1,280		1,740		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650		1,650									
免除者		339,822		250,199		238,025		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321		234,321									
十二月末日現在戶數		48,692		50,426		52,626		54,822		57,232		59,888		62,888		66,888		71,888		77,888		84,888		92,888		102,888		114,888		129,888		149,888		179,888									
同人口		206,788		224,288		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130		233,130									
賦課生產一戶當		840		899		620		620		620		620		620		620		620		620		620		620		620		620		620		620		620									
戶稅(賦課戶數)一戶當		981		1,459		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004		1,004									
戶稅割(同)一戶當		13,004		13,453		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154		9,154									

臺北市生產額一覽 (單位圓)



臺北市農耕地畝農業人口表

年 別	種 別	農 業 產 品						合 計
		農 業	畜 產	林 產	水 產	礦 產	工 產	
大正一〇	一	二,四八,二四八 <sup>円</sup>	五二,四七七	—	四,五六六	三,〇一一	二七,五四七,二〇七	二九,三七五,五一九
同 一	一	一,八八七,八六一	三七八,四一九	二,二八〇	五五,七二六	三〇,一〇〇	二六,九〇〇,五七九	二九,二五四,九五五
同 二	一	二,九五,一六七	四二五,三九四	九,〇七八	五四,六三一	二八,四七一	二七,四〇五,〇三一	二九,二二七,八三三
同 三	一	二,二七四,三六三	四八九,七六六	一四,三三四	八八,三二六	二五,〇四六	三〇,八七四,六四七	三三,七六六,三七二
同 四	一	二,〇〇〇,二三五	四五一,二四九	一〇,四五〇	九〇,八一九	六〇,四六五	三五,〇〇三,三八四	三七,六一五,五九二
昭 和 一	元	一,〇七六,九〇二	四七八,三三三	六,八七〇	八四,五五四	六〇,三〇〇	三三,五九二,二二七	三四,二九九,一七五
同 二	元	一,四三三,八二七	五二二,三三五	七,一六〇	八三,九七九	七四,一七四	三三,六六四,六二四	三五,七七五,〇六九
同 三	元	一,九二五,一九四	五二五,二一九	一〇,三〇〇	八五,六七七	七三,七九七	三四,九五七,〇〇五	三七,五五七,一九二
同 四	元	一,四五八,五三三	四七八,四六四	一六,一九二	八七,三三二	一三,二二五	三二,〇九二,九五二	三三,二六三,六六七
同 五	元	一,〇七〇,四六六	一〇五,〇三〇	一五,三七九	一七,五四七	一三,七七四	三〇,二八四,三二三	三一,六二六,五〇九

年 度	耕 地 面 積			農 業 戶 數	農 業 人 口
	田	畑	計		
大正一〇	二,〇八九,七一〇 <sup>甲</sup>	五六一,九四〇 <sup>甲</sup>	二,六五一,六五〇 <sup>甲</sup>	一八,七六 <sup>戶</sup>	一七,五三三 <sup>人</sup>
同 一	二,〇八九,六二〇	六〇九,七六一 <sup>九</sup>	二,六九九,三四五	一四,八一	一〇,一六二



臺北市教育費一覽  
經常部

年度	預算額	學級數	一學級當	兒童數	一人當
大正一	一九五五,八六三〇	六〇六,〇三七八	二,五六一,九〇〇八	一六,六一六	一〇,五四四
同 一	二〇二九,七四五五	五六一,九七五九	二,五九一,七二二四	一六,七一	一一,四〇二
同 一	二,〇〇五,三六五五	五五六,三七五九	二,五六一,七四二四	一八,七七	一一,九〇二
昭 和 一	二,〇二二,四五四六	五七八,〇二七	二,五九〇,四六八三	一七,五四	一〇,二九七
同 二	二,〇二〇,三三七	六二二,五三九〇	二,六四一,八七二七	一九,四二	一一,二二九
同 三	一,九九三,五四〇〇	六二九,五五〇〇	二,六三三,〇九〇〇	二,一三七	一三,四七〇
同 四	一,九九九,九八六〇	六二〇,三七五〇	二,六二〇,三六二〇	一,九八三	一一,三三八
同 五	一,九六四,七四九〇	六〇八,〇三六〇	二,五七二,七八五〇	一八,〇六	一三,一〇三

年度	預算額	學級數	一學級當	兒童數	一人當
大正一	一九二,九三四 円	二五八	七三三,二四 円	一四,一五三 人	一三,〇〇 円
同 一	二二五,〇〇九	二八三	七〇七,一〇	一五,四五六	一二,九三
同 二	二二〇,二〇八	二九七	六五五,〇六	一六,三〇〇	一二,九四
同 三	二三五,七三五	三二〇	六四八,〇六	一七,三三八	一一,八三
同 四	二二〇,九八七	三二二	六二六,五〇	一六,四二八	一二,七五



臺北市の傳染病は主として腸チフス、サフテリア、流行性腦脊髄膜炎、赤痢、猖紅熱、痘瘡であるが、罹病者は

臺北市傳染病患者一覽

年 度	豫 算 額	内 部		年 度	豫 算 額	内 部	
		營繕土木費	補助費			營繕土木費	補助費
大正 一〇	四二二,九九四	四二二,九九四	一	昭和 二	五八,一六〇	五三,三二〇	四,八五〇
同 一	二四五,二〇五	二三三,七〇五	一一一,五〇〇	同 三	五七,七四〇	五二,六九〇	五,〇五〇
同 一	一六四,八二二	一五五,三二一	九,五〇〇	同 四	二三三,二九五	二三六,八四五	六,四五〇
同 一	一七二,〇九八	一六二,〇九八	一〇,〇〇〇	同 五	六九,七六四	五八,二二四	一一,五五〇
同 一	一九二,七二七	一八二,四二七	九,三〇〇	同 六	五三六,二二三	五二五,〇〇〇	一一,二三三
昭和 一	五二,八三九	四二,五五九	九,三〇〇				

臨時部

同 一	二〇七,〇八四	三二	五八四・三七	一六,七六一	一一・二八
同 二	一九三,九一九	三三〇	五四一九九	一七,五七七	九・八七
同 三	一八九,九八〇	三三五	五三七・八九	一九,六〇八	八・九一
同 四	二〇八,四七五	三四四	五六九・二九	二二,〇四六	九・三二
同 五	二二二,八〇八	三六七	五八八・九八	二二,七八五	九・四九
同 六	二七〇,五二四	四〇五	六六七・九四	二四,四一七	一一・〇八



遺憾ながら内地人の腸チフス患者を最多としてゐる、左に市制施行當年よりの年次一覽を掲記する。

年次	發		生		死		百人對死亡率
	内地人	本島人	計	内地人	本島人	計	
大正一〇	五四二	四〇	五八二	八〇	一一	九一	一五・六三
同 一	六〇九	五二	六六一	六七	二二	八九	一六・一五
同 二	四〇〇	五五	四五五	三八	二五	六三	一三・八五
同 三	五一三	五二	五六五	五七	二〇	七七	一三・六三
同 四	二九七	五一	三四八	四一	一一	五二	一四・九四
同 五	三二三	七八	四〇一	二七	一六	四三	一〇・七二
昭和元	五七八	二〇二	七八〇	六八	三六	一〇四	一三・一八
同 二	七三四	二三五	九六九	六五	四九	一一四	一一・七六
同 三	五七八	三一五	八九三	六〇	九八	一五八	一八・八一
同 四	七九〇	一七〇	九六〇	九七	四七	一四四	一五・〇〇
同 五	三二五	一三〇	四五五	三七	三八	七五	一六・四八

臺北市給水年次一覽

(大正十四年ヨリ計量)  
給水制實施



臺北市土木工事費一覽

臺北市土木工事費總括表

年次	給水量	年次	給水量
大正一〇	九、二〇〇、〇三四 <small>立方米</small>	昭和一元	七、四四五、八九七 <small>立方米</small>
同 一	一〇、三五七、五一二	同 二元	七、八一、二四七
同 二	一〇、九三八、四三三	同 三元	八、一四〇、六六九
同 三	一〇、三四八、〇五二	同 四元	八、三八八、三七七
同 四	七、八九一、七三一	同 五元	八、六七五、八一四

區分	延長	面積	積	工事費
市區改正道路新設工事	五、一八〇・〇〇 <small>間</small>	四五、五四一、〇〇〇 <small>坪</small>	三三七、三一六、〇〇〇 <small>円</small>	
道路鋪裝工事	五、一七一・四四	四〇、一七二、六〇〇	一二三、五一七、〇〇〇	
郊外道路新設工事	二、三四三・九二	六、六七〇、三二五	一五、九四七、〇〇〇	
市區改正表下水工事	一〇、九九六・一三		二七四、五七一、〇〇〇	
同 大幹線工事	二、一五一・一〇		七五九、〇〇〇、〇〇〇	
橋梁新設工事	二四七・〇〇		一、四五四、八七九、〇〇〇	
合計			二、九六五、二三〇、〇〇〇	



臺北市土木工費內譯一覽

區分	延長	面積	工事費	摘要
市區改正道路工事				
大正十四年度	一、〇二六、〇〇〇 <sup>間</sup>	八、五八八、〇〇〇 <sup>坪</sup>	一三、一九六、〇〇〇 <sup>円</sup>	
同十五年度	一一七、〇〇〇	一、三六〇、〇〇〇	一、九一九、〇〇〇	
昭和二年度	一、四八一、〇〇〇	一四、九〇三、〇〇〇	一五四、七九四、〇〇〇	
同三年度	一、二〇四、五〇〇	一〇、八六八、〇〇〇	七八、二九五、〇〇〇	
同四年度	一、三五一、五〇〇	九、八二二、〇〇〇	八九、一一二、〇〇〇	
計	五、一八〇、〇〇〇	四五、五四一、〇〇〇	三三七、三一六、〇〇〇	
道路舗装工事				
大正十年度	一、〇四八、一〇〇	七、三五一、二〇〇	七、一九五、〇〇〇	コールター
同十一年度	一一三、〇〇〇	六七八、〇〇〇	五九一、〇〇〇	
同十四年度	一、六七九、二四〇	一二、四九八、四〇〇	一四、九八八、〇〇〇	
昭和二年度	七七三、五〇〇	五、五三一、〇〇〇	一三、三二〇、〇〇〇	
同五年度	二六五、六〇〇	九〇一、〇〇〇	六、九七一、〇〇〇	フーレナイトピチュコン ツク及アスファルトコン クリート
同六年度	一、二九二、〇〇〇	一三、二一三、〇〇〇	八〇、四五二、〇〇〇	
計	五、一七一、四四〇	四〇、一七二、六〇〇	一二三、五一七、〇〇〇	
郊外道路新設工事				



市區改正表下水新設工事		市區改正表下水新設工事	
大正	十年度	一、二〇〇、〇〇〇	三九、九二四、〇〇〇
同	十一年度	一、五五八、〇〇〇	三九、九四二、〇〇〇
同	十二年度	六三三、七〇〇	一九、八九二、〇〇〇
同	十三年度	一、〇〇三、四〇〇	一九、九四三、〇〇〇
同	十四年度	五七一、八三〇	一九、九九七、〇〇〇
同	十五年度	一、一四二、六〇〇	二三、六四五、〇〇〇
昭和	二年度	二、一二九、五〇〇	四六、〇三〇、〇〇〇
同	三年度	一、〇九五、一〇〇	二二、八九〇、〇〇〇
同	四年度	一、二一四、〇〇〇	三二、七六七、〇〇〇
同	五年度	四四八、〇〇〇	九、五四一、〇〇〇
計		一〇、九九六、一三〇	二七四、五七一、〇〇〇
昭和	六年度		七五九、〇〇〇、〇〇〇
計			
大正	十年度	二〇七、六五〇	一、七二五、〇〇〇
同	十一年度	一二五、六〇〇	八一八、〇〇〇
同	十五年度	四四〇、〇〇〇	一〇、六〇二、〇〇〇
昭和	五年度	一、五七〇、六七〇	二、八〇二、〇〇〇
計		二、三四三、九二〇	一五、九四七、〇〇〇
計			
大正	十年度	五四三、一二五	
同	十一年度	二五一、二〇〇	
同	十五年度	四、四〇〇、〇〇〇	
昭和	五年度	一、四七六、〇〇〇	
計		六、六七〇、三二五	



橋梁新設工事		計
大正十四年度	長	二三九、〇〇〇
昭和二年度		八、〇〇〇
計		二四七、〇〇〇
		一
		四、七〇〇
		六、〇〇〇
		一、四四〇、〇〇〇
		一四、八七九、〇〇〇
		一、四五四、八七九、〇〇〇
		七五九、〇〇〇、〇〇〇

臺北市勸業費一覽 (市制施行以來)

年 度	經 常 部							臨 時 部		合 計
	蔬菜試 作園費	農 業 獎 勵 費	商 工 種 補 助 費	小 賣 市 場 費	中 央 卸 賣 市 場 費	家 畜 市 場 費	營 繕 土 木 費	勸 業 費	補 助 費	
大正一〇	二、五七三	—	—	三、九二〇	—	—	—	—	—	三、八二四
同 一	二、九八五	—	四〇〇	三、五五二	—	—	—	—	—	五〇、〇七七
同 二	三、三三三	—	三〇〇	二、六四九	—	六、七三二	同 市場 四〇〇	—	—	六、七二九
同 三	三、三七七	—	三〇〇	二、九四七	—	六、七三〇	同 市場 一、〇八四	—	—	四〇、九五四
同 四	三、〇四〇	—	二七〇	二、六八四	—	六、〇四八	同 市場 一、四四〇	—	—	三、七六八
同 五	三、〇四〇	—	二七〇	二、四三〇	魚 市場 五、六二五	六、〇九〇	同 市場 三、〇〇〇	—	—	九、七〇八
同 和	二、三八二	五五〇	—	二、三五七	同 市場 六、三三五	三、〇六九	同 市場 三、八九三	產 品 視 一、五〇〇	—	一、七二、二九五



同	同	同	同
六	五	四	三
一八三〇	一八八五	二二二五	二〇八〇
四六五	四九〇	五〇〇	五〇〇
二八五	三〇〇	—	—
—	—	—	—
二〇,五二三	二二,三四一	二二,八九九	三二,六七八
二〇二,〇七四	中央市場 二七,一〇五	魚菜市場 九,九三三	同 六二,四五六
二五,九八五	二七,九四八	二七,七九〇	三〇,〇〇〇
三,七〇〇	一,五〇〇	—	五〇,〇〇〇
—	—	商展 三〇〇	商展 三,五〇〇
—	—	九〇〇	九〇〇
六六五	七〇〇	六〇〇	三,六〇〇
一五五,五一七	一七二,一六九	一五三,五七七	六三,一九六

臺北市物價指數表

大正三年七月基準(一〇〇)とする(昭和六年各月末現在)

內 地 白 米	臺 灣 玄 米	清 酒	麥 酒	紅 酒	澤 庵 漬	小 麥 粉	砂 糖
一月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月
一三八・五三	一三三・七〇	一三三・七〇	一三〇・六八	一三〇・二八	一三〇・二八	一三九・四七	一三九・八〇
一二三・二八	一二三・二八	一二六・四九	一二三・六八	一〇五・二六	九八・二四	一〇九・四七	九八・二四
三三二・四三	三三二・四三	三三二・四三	三三二・四三	三三二・四三	三三二・四三	三三二・四三	三三二・四三
一五三・六〇	一五三・六〇	一四九・六〇	一四九・六〇	一三六・〇〇	一三三・〇〇	一三三・〇〇	一三三・〇〇
一四〇・七四	一四八・一四	一七七・七七	一八五・一八	二〇三・七〇	二〇三・七〇	二〇三・七〇	二〇三・七〇
九三・三一	九二・四五	九二・五八	九四・九一	九四・九一	九四・一五	九六・二七	九九・三六



煉銅	鉛	洋杉	杉	日	洋	綿	白	包	烏	煙	鹽	落	鴨	醬	味	鯉		
				本			木	種	龍			花						
瓦		鐵	材	板	紙	紙	布	綿	茶	茶	草	油	卵	油	噌	節		
一六八·九六	一八三·六	七五·〇〇	九八·一五	二五·〇〇	二九·四	一八二·八〇	二二·〇四	七九·四八	九三·六五	二六·八八	六三·一五	一八〇·〇〇	二二·七三	一〇〇·〇〇	一三·一四	一四·七三	一〇〇·〇〇	一八五·六
一六八·九六	一三三·四	七八·二	九六·九九	一一·五〇	一一·二	一八二·八〇	一一·七三九	八二·三九	九六·〇三	二六·八八	六三·一五	一八〇·〇〇	一一·七三	八七·二七	一三〇·〇〇	一四·七三	一〇〇·〇〇	一七八·一八
一六八·九六	二三四·四八	七八·七五	九六·九九	一一·五〇	一一·二	一八二·八〇	一一·七三九	八三·三〇	九〇·四七	二六·八八	六三·一五	一八〇·〇〇	一一·七三	八二·〇五	一三〇·〇〇	一三·〇九	九六·九二	一六三·七七
一六八·九六	二三四·四八	七八·七五	九六·九九	一一·五〇	一一·六六	一八二·八〇	一一·七三九	八三·三〇	九〇·四七	二六·八八	六三·一五	一八〇·〇〇	一一·七三	七九·四八	一三〇·〇九	一三·〇九	九六·九二	一六七·七七
一六八·九六	二三四·四八	六三·五〇	一三六·五六	一一·五〇	一一·六六	一八二·八〇	一一·七三九	八三·三〇	八七·三〇	九二·二八	六三·一五	一八〇·〇〇	一一·七三	七六·九三	一三三·〇九	九二·三〇	九二·三〇	一六七·七七
一六八·九六	二八·五七	七八·二	一三八·五六	一一·五〇	一一·六六	一七五·六九	一一·三〇四	七八·〇八	八七·三〇	九二·六	六三·一五	一八〇·〇〇	一一·七三	八二·〇五	一三三·〇九	八七·六九	八七·六九	一七三·五七
一六八·九六	二八·五七	七八·二	一三八·五六	一一·五〇	一一·六六	一七五·六九	一一·三〇四	七四·一六	八七·三〇	九二·二八	五六·六六	一八〇·〇〇	一一·七三	八二·〇五	一三三·〇九	八四·六二	八四·六二	一八二·二七
一六八·九六	二八·五七	七八·二	一三八·五六	一一·五〇	一一·六六	一七五·六九	一一·三〇四	七〇·二四	八三·三	九二·二八	五六·六六	一八〇·〇〇	一一·七三	八二·〇五	一三三·四二	八四·六二	八四·六二	一九三·五六



目次	昭和五年	昭和四年	昭和三年	昭和二年	大正十五年
一 月	一六二・二七	一七三・九四	一七六・三四	一八三・〇八	一九〇・八〇
二 月	一六〇・四九	一七一・九三	一七五・四一	一八三・三五	一九〇・九五
三 月	一五九・六八	一七三・四二	一七四・八九	一八二・六八	一八八・三二
四 月	一五九・五一	一七二・五〇	一七四・二九	一八一・二八	一八八・六六
五 月	一五五・三三	一七二・四九	一七四・二七	一八一・四八	一八六・〇三
六 月	一五一・〇六	一七二・二三	一七三・九九	一八二・〇八	一八五・二〇

平均指數五箇年對照表

日本瓦	板硝子	セメント	燐寸	石油	石炭	木炭	薪炭	總平均
八五・七五	一五〇・〇〇	一五〇・〇〇	一九七・五〇	一三三・七三	一九八・〇四	一五四・〇〇	一二四・二八	一三九・三〇
八五・七五	一五五・八八	一五五・八八	一九七・五〇	一三三・七三	一九八・〇四	一五四・〇〇	一二四・二八	一三九・三〇
八〇・〇〇	一六〇・八八	一六〇・八八	一九七・五〇	一三三・七三	一九八・〇四	一五四・〇〇	一二四・二八	一三九・三〇
八四・五〇	一六〇・八八	一六〇・八八	一九七・五〇	一三八・二八	一八九・三三	一五四・〇〇	一二四・二八	一五六・六五
八四・五〇	一六〇・八八	一六〇・八八	一九七・五〇	一三八・二八	一八九・三三	一五四・〇〇	一二四・二八	一五六・六五
八三・七五	一六〇・八八	一六〇・八八	一九七・五〇	一三〇・四五	一八九・三三	一五四・〇〇	一二四・二八	一五五・二一
八三・七五	一六〇・八八	一六〇・八八	一九七・五〇	一三〇・四五	一八九・三三	一五四・〇〇	一二四・二八	—
八三・七五	一六〇・八八	一六〇・八八	一九七・五〇	一三〇・四五	一八九・三三	一五四・〇〇	一二四・二八	—



七	八	九	十	十	十
月	月	月	月	月	月
一五〇・四二	一四九・六六	一四六・四三	一四三・三〇	一四一・三六	一四〇・三一
一七三・二七	一七三・三三	一七〇・七九	一七〇・四五	一六八・〇二	一六三・三五
一七三・八八	一七五・六三	一七六・三九	一七五・九八	一七五・八五	一七五・三三
一八一・三六	一七九・七七	一八〇・三六	一八〇・〇〇	一七八・三五	一七七・〇八
一八五・二二	一八四・六六	一八三・三五	一八二・五四	一八一・五九	一八〇・〇七

各年八月を一〇〇とせる昭和六年同月平均指物

基 準 年 月	八 月 平 均
昭和五年八月	九〇・八
昭和四年八月	七八・九
昭和三年八月	七七・五
昭和二年八月	七五・七

### 臺北市勞銀一覽

(昭和六年上半期) ×印ハ本島人ニシテ内地人ニ雇傭セラル、モノナリ

職 業 名	内地人	本島人	職 業 名	内地人	本島人
旋 盤 工 工	二、〇〇	一、四五	鑄 造 工 工	一、四五	一、四〇
仕 上 工 工	一、四五	一、四〇	鍛 冶 工 工	一、三〇	一、四〇
職 業 名	内地人	本島人	職 業 名	内地人	本島人
木 型 工 工	一、八〇	一、四〇	製 罐 工 工	一、八〇	一、四〇



製絲女工	麻紡績女工	綿手織女工	榨油工	製革工	製粉工	製麵工	醬油釀造工	味噌釀造工	製糖工	粃摺工	菓子製造工	再製茶工	石工	煉瓦積工	瓦葺工	ペイント塗工	製材工(手挽)	同機械工
一、〇〇	四〇	四〇	七〇	一、一〇	九〇	八〇	九五	一、〇〇	二、一三	一、〇〇	九〇	一、五〇	二、〇〇	三、三〇	三、五〇	二、五〇	二、五〇	二、〇〇
三八	四〇	四〇	七〇	一、一〇	九〇	八〇	九五	一、〇〇	一、六六	一、〇〇	九〇	一、五〇	二、〇〇	一、九〇	二、五〇	一、八〇	一、七〇	一、二〇
指物工	建具工	漆器工(塗師)	籐細工業	疊刺工	經師	彫刻	電工	輕鐵後押夫	貨物荷捌夫	轎夫(二人昇一里付)	農業畑作男	同女	同水田作男	同水田作女	陶器轆轤工	硝子製造工(瓶)	同吹込工	煉瓦製造(型)
二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	一、〇〇	二、三〇	三、〇〇	二、一〇	二、一〇	一、五〇	一、三〇	一、五〇	八〇	三〇	一、二〇	六〇	一、四〇	一、〇〇	一、七〇	七〇
九〇	一、八〇	一、六〇	一、〇〇	一、三〇	二、〇〇	九〇	一、四八	九〇	一、三〇	一、五〇	八〇	三〇	一、二〇	六〇	一、四〇	一、〇〇	一、七〇	七〇
瓦製造工(型造)	製藥工	爆竹製造(男工)	同女工	煙火製造(女工)	茶撰女工	洋服裁縫工	和服裁縫工	本島服裁縫工	蓑製造工	靴工	下駄工	金銀細工	染物工	大工	左官	車製造工	桶工	製筵女工
一、〇〇	七〇	七〇	三五	一、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	二、〇〇	一、四〇	一、六〇	一、七〇	一、六〇	一、四〇	一、九〇	三、〇〇	三、五〇	二、五〇	二、五〇	一、〇〇
八〇	七〇	七〇	三五	一、〇〇	二、五〇	一、五〇	一、四〇	一、四〇	一、六〇	一、二〇	八〇	五〇	九〇	一、八〇	二、〇〇	一、〇〇	一、〇〇	三〇



製 本 工	石 版 工	活 版 植 字 工	二、六九	八〇	陸 仲 仕	一、八〇	一、〇〇	庭 師	三、三〇	二、〇〇
一、八三	二、四八	二、四八	七〇	荷 車 挽 (手 挽)	一、〇〇	一、〇〇	日 傭 人 夫 男	三、三〇	三、三〇	二、〇〇
一、〇〇	同	同	同	牛 付	一、八〇	一、八〇	女	一、〇〇	一、〇〇	五五

臺北市公設市場現況一覽

卸賣市場生魚類取扱高

年 度 別	取 扱 高	附 記
大正十五年 自一月 至三月	三九三、四五六 円	魚市場ニ於ケル取引
同十五年	一、二六二、六八九	同
昭和二年	一、二九二、三〇二	同
同三年	一、三四一、七二〇	同
同四年	一、四一一、八五八	昭和四年九月ヨリ現行通り中央卸賣市場ニテ取引ス
同五年	一、二二二、八四一	中央卸賣市場ニ於テ取引
同六年	四八八、八八七	自昭和六年四月 至同 年九月

自大正十年  
至昭和六年  
卸賣市場青果類取扱高



年 度 別	取 扱 高	附 記
同 昭 三 和 年 二 度 年 度 度	一、四三一、四一六・五二 一、五〇六、三四二・四九	三三、七四三頭 四六、六八四頭
同 同 同 同 昭 六 五 四 三 和 年 年 年 年 二 度 度 度 度 年 度 度 度 度 度	三七八五、四四四 六八九、八六七 六八二、七五六 七二八、二二六 六九〇、九五三 五五五、九三八 五五七、八九八 六七〇、七七六 五九八、五〇四 五八八、七五九 五八三、三八四	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 永樂町食料品小賣市場ニ於テ取引 昭和五年四月十日以降中央卸賣市場ニ於テ取引（雜部 ヲ含ム） 自昭和六年四月 至同年九月
大 正 十 年 年 度	五八三、三八四	附 記

家畜市場生豚取扱高



昭 和 四 年 度	一、六五一、〇五四・七一	四〇、三一〇頭
同 五 年 度	九六四、二二二・四三	三〇、五九六頭
同 六 年 度	三四〇、六九五・八七	一五、六八八頭
自昭 和 六 年 四 月 至 同 年 九 月		

自大正十一年一月各食料品小賣市場總賣上高 (單位圓)  
至昭  
和  
六  
年  
十  
月

年 次	市 場 名	西 門 町	永 樂 町	千 歲 町	綠 町	御 成 町	計
大 正 十 一 年		一、〇三三、六四三	六九九、六二九	一八三、五四六	一三三、四三九	四六、一六八	二、〇九六、四二五
同 十 二 年		九〇八、二二九	七二三、八四四	一八〇、八八〇	一二九、七七七	五四、七二一	一、九八七、三四一
同 十 三 年		八三五、六八七	六二四、六三三	一八三、二九九	一三〇、三九四	五六、二六九	一、八三〇、二八二
同 十 四 年		七八六、三二九	七二三、六三九	一八九、四四五	一三三、三九〇	六七、五一二	一、八八九、三〇四
同 十 五 年		七七四、六六〇	七〇六、八九六	一九五、七四二	一〇七、五二五	六八、七八九	一、八五四、六二二
昭 和 二 年		八六九、八八三	七〇〇、五二五	二九一、七一九	九九、五六九	九八、二七一	二、〇五九、九五七
同 三 年		一、二七九、六七七	一、〇一五、七五四	三三二、九四九	一一一、六四九	一五八、七〇九	二、七八七、七三八
同 四 年		一、三四〇、八九一	一、二六六、一三五	二八六、五八八	一四九、八九四	一四三、五八一	三、〇八六、〇七九
同 五 年		一、二五四、八四八	一、〇七七、二四九	二六四、五六三	一二七、一五四	一一〇、五七六	二、七三四、三九〇
同 六 年		七九八、〇二六	六九九、四四〇	一八八、三三六	八三、〇〇三	七三、三三四	一、八四一、一〇八

備考 昭  
和  
六  
年  
ハ  
一  
月  
ヨ  
リ  
十  
月  
マ  
デ  
ノ  
賣  
上  
高  
ヲ  
記  
載  
セ  
リ



臺北市公設質鋪成績一覽

年次	區分	貸出			受質			利息			流質		
		人員	金額	平均額	人員	金額	平均額	人員	金額	平均額	人員	金額	
大正九年六月十日開業		九、八三一人	二五三、八三三	二五·七三	四、七八三人	一二八、三六六	二四·七五	四、七八三人	四、二七四	〇·八九三	八七三人	二〇、〇三三	二二·九〇
大正九年		三〇、〇六九	七五四、三六二	二五·〇八	二、三四七	五九八、一七五	二五·五五	二、三四七	三四、九七六	一·四九四	二、九〇五	五三、五七三	一八·四〇
同		三五、九二二	八〇〇、一四八	二三·二八	三〇、五三五	七三六、八七一	二四·一三	三〇、五三五	五〇、八四六	一·六六五	三、三七〇	六一、七〇一	一八·三〇
本二年度ヨリ		四六、七二六	八五二、四七五	一八·三三	三八、三五七	七四一、四六三	一九·三三	三八、三五七	五二、九五二	一·三八〇	四、四一九	六一、四四七	二二·九〇
市正十二年		五〇、六四二	七五三、八三四	一四·八八	四六、八五九	七五五、四七六	一六·三三	四六、八五九	五六、六三二	一·二〇八	四、二四二	五一、四七七	二二·三三
同		四九、三二八	七六六、四六二	一五·五五	四二、八二二	六五八、七二八	一五·七五	四二、八二二	五〇、一三五	一·二九九	四、二二九	四九、二七〇	二一·六七
同		五三、三三三	七六八、六三四	一四·七三	四五、九〇五	七〇四、四八一	一五·三四	四五、九〇五	五七、五四二	一·二五三	六、二九〇	七六、六九七	二二·一八
昭和十五年		四六、五二二	六七二、二四九	一四·四五	四一、九三〇	六三六、五〇三	一五·一八	四一、九三〇	五四、〇八三	一·二八九	五、四〇四	五八、七二六	二〇·八六
同		四五、三八六	六五六、四三四	一四·四六	四〇、六二四	六〇四、六一八	一四·八八	四〇、六二四	五〇、三〇六	一·二三八	五、〇五九	五三、四九五	二〇·五七
同		四八、七三六	七二四、八二七	一四·六六	四二、五三八	六三九、一八六	一五·二五	四二、五三八	五〇、八四七	一·二三四	六、六三〇	八一、九八六	二二·三九
同		五五、四七四	七七六、七六六	一四·〇〇	四六、〇八八	六七六、六二二	一四·六八	四六、〇八八	五二、六六〇	一·二四三	八、三五二	九四、八三三	二二·三五







臺北市金利一覽

		定期預金(年利)					當座預金(日步)					證書貸付(日步)															
		三	三	商	彰	華	三	三	商	彰	華	三	三	商	彰	華	三	三	商	彰	華	高	最	低	最	年	正
		四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	九	大	三	六	年	正
	(年利)	七	七	七	七	八	七	七	七	七	八	七	七	七	七	八	七	七	七	七	八	高	最	低	最	年	正
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>大</td>	大
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>十</td>	十
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>大</td>	大
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>一</td>	一
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>正</td>	正
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>二</td>	二
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>正</td>	正
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>三</td>	三
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>正</td>	正
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>四</td>	四
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>昭</td>	昭
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>和</td>	和
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>昭</td>	昭
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>和</td>	和
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>六</td>	六
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>昭</td>	昭
	(年利)	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	高	最	低	最	年 <td>和</td>	和







臺北市在住宗信徒數一覽

佛 教 (信徒內內地人本島人合算)

宗別	寺院	布教師	信徒數	宗別	寺院	布教師	信徒數
天臺宗	一	一	三八五	曹洞宗	一	六	一一、五〇〇
真言宗	一	三	八〇〇	真宗本願寺	一	一〇	四、七〇〇
淨土宗	一	四	二、九〇三	同大谷派	一	六	三、〇五〇
臨濟宗	一	五	九二〇	日蓮宗	一	二	一、二〇〇

神 道

教派別	說教所	布教師	信徒數	教派別	說教所	布教師	信徒數
實行教	一	一	二〇〇	神習教	一	二	五〇〇
金光教	二	三	一、五三〇	天母教	一	一	七、八〇五
天理教	八	一六	一、五九一	大本教	一	一	一

基 督 教







淨土宗 (西山深草派)

兼子道仙

臨濟宗

坂上鈍外

曹洞宗

大野鳳淵

眞宗 (大谷派)

木下萬溪

金光教

齊藤俊三郎

日本基督教會

上與二郎

日本組合教會

原忠雄

聖公會

大橋麟太郎

天主教會

トーマス・テラホース

北部臺灣基督長老教會派

ジエームス・テイックソン

臺灣基督教長老教會北部宣教師會

ジー・グシウ・テイラー

救世軍

山本忠雄

本島人寺廟

劍潭古寺

龍山寺

孔子廟

慈聖宮

保安宮

清水岩廟

霞海城隍爺廟

此外市内に點在する寺廟數五十、齋堂數七、神明會數九十ある。



臺北市學校一覽 (昭和六年十一月末現在)

市立

校名	位置	創立年月	學級	職員數	兒童數		計數	學校長氏名
					男	女		
臺北市末廣高等小學校	末廣町	大正四年四月	一五	一七	四九二	三七九	八七一	三ツ橋安郎
同 旭尋常小學校	東門町	明治三年六月	三	四	一,〇五三	一,〇三三	二,〇六六	門間幸造
同 壽尋常小學校	西門町	大正四年四月	二元	三	九一八	八五四	一,七七三	東八郎
同 南門尋常小學校	南門町	明治四年四月	三〇	三三	九八一	八七三	一,八五三	山本真
同 樺山尋常小學校	樺山町	明治四年三月	二元	三三	八八八	七八九	一,六七七	石川彦太郎
同 建成尋常小學校	建成町	大正八年四月	二元	三三	九三〇	八六九	一,七九九	後藤止
同 錦尋常小學校	大安町	昭和四年四月	六	八	一七四	一五五	三三九	細貝廣作
同 龍山公學校	龍山寺町	大正八年四月	二七	二六	八七三	六三〇	一,五〇三	谷垣藤三郎
同 老松公學校	老松町	昭和二年五月	三〇	三三	一,三三三	六六八	一,八五二	小宮山信二郎
同 太平公學校	太平町	明治三年十月	三〇	三六	一,七六七	一,七六七	一,七六七	赤羽操
同 日新公學校	下奎府町	大正四年四月	三	三	一,八八五	—	一,八八五	三屋大壽
同 大橋公學校	太平町	大正四年四月	二元	三三	七三四	一,〇二二	一,七五五	小林正一
同 蓬萊公學校	下奎府町	明治四年四月	三〇	三三	—	一,八六六	一,八六六	下川高次郎
同 大龍峒公學校	大龍峒町	明治三年十月	二七	二〇	六七九	三三三	一,〇二二	野崎秀雄
同 朱厝崙公學校	朱厝崙	明治十五年四月	二	三	四八三	三三二	七四	新井末吉



同	東園公學校	東園町	大正二年三月	三	四	三三	三七	七八	稻田清
同	大安公學校	下內埔	昭和四年四月	六	七	三九	一四	三五	土持兵助
同	永樂公學校	太平町	昭和五年四月	三	三	四三	四六	六〇	(兼)赤羽操

同	臺北第一中學校	龍口町	明治三二年四月	二〇	四	一〇三	十倉精一
同	第二中學校	幸町	大正二年四月	〇	三	四五	河瀬半四郎
同	第一高等女學校	文武町	明治三七年十月	七	五	八六	淨田辰平
同	第二高等女學校	幸町	大正八年四月	九	五	四四	室田有
同	第三高等女學校	西門町	大正二年四月	三	五	六三	小野正雄
同	商業學校	幸町	大正六年五月	四	七	六三	小出梅吉
同	工業學校	大安	明治四二年七月	七	九	六五	瀧波惣之進
同	盲啞學校	蓬萊町	昭和三年九月	八	四	二九	木村謹吉

府立

臺北帝國大學	富田町	昭和三年三月	文 理 農 專	二四 二四 六 九	五三 九四 四〇 四四	一〇三 九七 二〇 二〇	幣原坦
臺灣總督府醫學專門學校	東門町	明治三二年四月		九	四四	二九〇	堀內次郎



幼稚園

私立臺北女子高等學院	龍口町	昭和六年二月	二	兼	三三二	一〇八	吉川貞次郎
私立臺灣商工學校	幸町	大正六年三月	九	兼	三〇九	五三三	佐多萬之進
私立女子職業學校	文武町	大正九年四月	三	兼	一七八	一八七	中田哲夫
私立靜修女學校	蓬萊町	大正六年四月	八	兼	一七一	四三二	トマス、テヲホズ
私立曹洞宗中學林	東門町	大正五年七月	三	兼	三五三	九三	江善慧
私立成淵學校	大和町	明治卅一年五月	八	兼	二六三	五八六	室田有
私立臺北中學會	末廣町	明治卅四年五月	三	兼	二二	二九	尾崎秀真

私立

同 臺北高等商業學校	幸町	大正八年五月	六		六	二九	切田太郎
同 高等學校	古亭町	大正十二年三月	六		五〇	六〇六	谷本清心
同 臺北第一師範學校	文武町	明治卅九年三月	九		二九	二八〇	濱武元次
同 附屬小學校	同	大正二年四月	三		九	五七	前野喜代治
同 附屬公學校	同	昭和三年四月	六		九	三六	國府種武
同 臺北第二師範學校	大安	昭和二年四月	〇		二七	三三	根井久吾
同 附屬公學校	同	昭和二年四月	四		二〇	五六	石井權三







臺北市官設社會教育團體一覽

稻江義塾	青年義塾	淡廬書房	培英義塾	文安雅言書房	修養書房	六張犁書房
港町	日新町	大橋町	蓬萊町	宮前町	入船町	六張犁
大正五年七月	大正三年二月	大正三年六月	大正三年三月	大正四年七月	大正四年五月	昭和三年五月
四	三	二	一	二	二	二
五	二	二	二	二	二	二
一〇三	五五	三五	四四	四三	四八	七三
五	二五	五	四	二〇	二	二七
一四	七	四〇	八五	五三	六九	一〇〇
稻垣藤兵衛	大野鳳洲	曹阿淡	トマス、テラホズ	林維巖	陳根泉	高春發

龍山青年教習所	太平青年教習所	老松國語講習所	日新國語講習所	大橋國語講習所	蓬萊國語講習所
龍山公學校內	太平公學校內	老松公學校內	日新公學校內	大橋公學校內	蓬萊公學校內
昭和四年四月	昭和四年四月	昭和五年四月	昭和五年四月	昭和六年四月	昭和六年四月
一	一	三	三	一	一
五	六	一〇	一〇	五	五
男	三五	六〇	四〇	一	一
女	一	一六〇	一四	八〇	六
計	三六	二二〇	一八八	八〇	六
主事氏名	谷垣藤三郎	赤羽操	小宮山信二郎	三屋大壽	小林正一
					下川高次郎



臺北市教育會	臺北州教育會	臺灣教育會	同 東園支會	同 大龍峒支會	同 艦舩支會	臺北市同風會	私立梅庭國語普及會	市同風會所屬東園國語普及會	市同風會所屬大安國語普及會	大龍峒國語講習所
臺北市役所 教育社會課內	臺北州 教育課內	佐久間町	東園町	大龍峒町	元園町	市役所	永樂公學校內	東園公學校內	大安公學校內	大龍峒公學校 內
昭和二年四月	昭和二年八月	明治三十四年二月	同	同	同	昭和三年十月二日	大正七年十月	昭和六年九月	昭和六年七月	昭和六年四月
四〇	一六二七	七四三	—	—	—	四〇	三	二	一	一
調查研究、講習會、講演會、展覽會、會報及圖書、刊行、體育獎勵、學事視察、教育功績者表彰及其他	研究調查、講習會、講演會、展覽會、會誌及圖書、刊行功勞者表彰等	講習會、講演會、雜誌及圖書、刊行、芝山巖祭典、國語演習會、功勞者表彰、活動寫真等	四、其ノ他必要ナル事項	三、本會功勞者篤行會員ノ表彰	二、各種展覽施設	一、講習會、講演會、國語演習會ノ開催	四	三	二	五
內海忠司	那須重德	木下信	楊育南	黃贊鈞	黃金生	內海忠司	陳清波	楊育南	土持兵助	野崎秀雄



青年團少年團一覽 (昭和六年十月末現在)

團名	位置	創立年月	團員數	事業概要	團長氏名
西門青年團	壽町	大正十年一月	六	遠足、體操、バレーボール會、講演會、奉獻神社參拜、勅語御下賜奉讀會、記念日ヲ利用シ國民精神ノ作興等	松岡幸三郎
榮町青年團	榮町	昭和二年十月	七	一、隨時例會及大會ノ開催 二、隨時召集非常召集ヲ實施シテ訓練ヲ行フ 三、講演會開催	谷口巖
本町青年團	本町	昭和三年一月	六	團員ノ親睦、團員訓練、講演會、非常時擁護、其他必要ナル各事項	北村惣吉
大成青年團	大正町	昭和三年十二月	七	國祭祝日ニ神社參拜、講演會座談會、講習會ノ開催、補習教育獎勵、圖書ノ回覽文庫ノ設置、各種社會奉仕、非常時警備人退營兵ノ送迎慰問、團員及其家族ノ不幸ニ際シ弔慰ヲナス、其他必要ナル事項	田中一二
兒玉町青年團	兒玉町	昭和三年十二月	三	月一回例會ヲ開催シ講演會座談會ヲ行フ社會公益事業ノ補助、非常時ニ備フル爲常置員ノ組織、區内人退營者ノ送迎、團員又ハ家族ノ死亡ニ弔意ヲ表ス其他必要ナル事項	尾崎秀眞
府後會青年團	表町	昭和四年五月	七	一、講演會、座談會、開催 一、訓練 一、非常時ノ區内保全 一、衛生上ノ保全 一、團員相互ノ親和保全 一、團員及其家族ノ死亡慰問	吉岡清一



大稻埕青年團	港	昭和三年十二月	六	一、修養ニ關スル講話、及講習會ノ開催 一、風紀ノ改善民風ノ作興 一、生活改善ノ研究 一、國語ノ練習 一、體育並娛樂施設 一、社會奉仕 一、其他必要ナル事項	陳清波
艦柳青年團	元園町	昭和四年一月	五	一、毎月一回以上例會ヲ開キ講習會及座談會ヲ開催ス 一、風教ノ改善ニ協力シ 一、社會公益事業ヲ幫助ス 一、團員及其家族ノ死亡ニ際シテハ弔意ヲ表ス 一、本團ト目的又ハ種類ヲ同シフスル事業ヲ行フモノアルトキハ成ルヘク協力ス	黃玉對
日新青年團	日新町	昭和三年十二月	四	一、修養ニ關スル講話及講習會 一、國語練習會 一、補習教育 一、生活改善 一、社會奉仕 一、體育 一、敬老 一、其他必要ナル事項	許智貴
川端青年團	川端町	昭和五年六月	三	一、月例會講習會座談會 一、社會公益事業幫助 一、常備員ノ設置(非常時) 一、團員及家族ノ入退營兵ノ送迎 一、團員及家族ノ慶弔	金井眞六
臺北女子青年團	大正町	昭和六年四月	二	祝祭日、記念日行事講習會、修養會、情操舞踊、子供部訓練、墓地掃除、視察見學旅行等	田中一二
樺山少年團	樺山町	大正三年六月	一	基本訓練、自然研究、野外訓練、衛生救急法、運動遊技、見學會等	石川彦太郎



臺北市官設社會事業團體一覽

名稱	所在地	創 年 月 日	要 項	代 表 者
社團 法人 臺灣社會事業協會	臺灣總督府內	昭和三年十月二十日創立 同五年五月五日組織變更	聯絡調查	大場鑑次郎
財團 恩賜 明治救濟會	同	大正十一年十一月	助成	總務長官
同 大正救濟會	同	同四年十二月	同	同
同 昭和救濟會	同	昭和四年一月	同	同
同 臺灣濟美會	同	大正十二年五月五日	同	臺灣總督
臺北市社會事業助成會	臺北市役所社會課內	昭和四年二月十日	同	臺北市尹
臺北州方面委員後援會	臺北州廳內	大正十五年三月	同	臺北州知事
財團 法人 臺北仁濟院	臺北市堀江町三二〇	明治三十二年創立 同三十四年十一月改稱	不具廢疾者救養、 施療、施藥、行旅病 人、精神病人受託	同
同 愛國婦人會臺灣支部	同 東門町一	明治三十七年	軍事救護、其他	總務長官夫人
同 日本赤十字社 臺灣支部醫院	同 同六	同 三十五年十二月	軍事救護、貧困患者 者治療、貧困患者 治療	堀內次雄
臺北市職業紹介所	同 御成町二ノ三	大正十一年六月	職業紹介	臺北市尹
臺北州公共住宅	同 御成町、新榮 町、龍山寺町	同 十年四月	經濟保護	臺北州知事
臺北市簡易宿泊所	同 御成町二ノ三	昭和二年七月十日	宿泊保護	臺北市尹



臺北市私設教化並社會事業團體一覽

同 公 設 質 舖	同	大和町一	大正九年七月創立	庶民金融	同
同 御成町公設質舖	同	御成町二ノ三	同 三年四月市營卜ナル	同	同
有 限 臺 北 庶 民 信 用 組 合	臺 北 州 廳 內		同 三年八月十四日	同	中村不覆兒
臺 北 醫 院 育 兒 保 健 相 談 所	臺 北 醫 院 內		大正十二年二月十日	健 康 相 談	臺 北 醫 院 長
臺 北 州 立 臺 北 盲 啞 學 校	臺 北 市 蓬 萊 町 八 三 三		大正六年六月創立	異 常 兒 保 護	臺 北 州 知 事
財 團 臺 灣 三 成 協 會	文 武 町 一ノ一		昭 和 三 年 九 月 州 立 卜 ナ ル	釋 放 者 保 護	山 本 眞 平
臺 北 一 新 舍	古 亭 町		大 正 四 年 九 月	同	松 井 晟 千 代
臺 北 仁 齊 團	明 石 町 一ノ一		明 治 四 十 年 四 月	同	松 田 良 清
			同 三十六年八月一日	病 者 慰 安	

名	稱	創 立 又 設 置 期	代 表 者
乃 木 講 支 社	社	大 正 四 年 二 月	小 松 吉 久
希 望 社	社	同 十二年二月	松 尾 寅 吉
修 養 團 支 部	部	同 十四年十二月	森 政 代
婦 人 養 修 會	會	昭 和 四 年 四 月	乙 森 大 三
南 國 青 年 協 會	會	同 五年三月	田 中 一 二



名稱	所在地	創立年月日	要項	代表者
財團法人臺灣婦人慈善會	臺北市兒玉町四ノ一	明治四十四年一月卅一日	助成	小宮多茂
臺北愛々寮	同 綠町五ノ一六	大正十二年八月十五日	乞丐の救濟及生活改善	施 乾
馬借醫院	同 宮前町七九	同 十四年一月	一般患者治療、貧困患者治療、癩患者治療	シ・グシウ・テイラー
林本源博愛醫院	同 建成町	明治四十二年十一月	一般患者治療、貧困患者治療	林 嵩 壽
養浩堂醫院	同 宮前町二九七	昭和四年四月二十四日	精神病患者一般治療並ニ救療	中 村 讓
護國十善會	同 西門町一ノ七	大正二年十二月十七日	無料宿泊、職業紹介其他	藤 生 祐 俊
基督教婦人矯風會	同 本町四ノ二六	同 九年十月	禁酒、禁煙宣傳其他	丹下得喜子
臺灣禁酒會	同 榮町二ノ一〇	明治三十九年九月	禁酒宣傳	橫 川 定
臺灣共濟會	同 築地町二ノ三	昭和三年四月二十五日	釋放者保護	芳 原 政 信
セツトル人類の家	同 港町二、下奎府町三	大正五年九月十五日	隣保事業	稻垣藤兵衛
財團法人鎌倉保育園臺北支部	同 佐久間町	同 四年	不遇兒童保育事業	佐 竹 齊 吉
慈惠夜學義塾	同 龍山寺町	同 十一年	貧困兒童教化事業	蔡 天 註



臺北市在任主要官吏

臺灣總督	南弘	社會課長	江藤昌之	同	土井季太郎
總務長官	平塚廣義	視學官	阿部文夫	水產課長	劉明朝
秘書官	池田有二	同	大塚精一	度量衡所長	山口鈕五郎
文書課長兼調查課長、秘書課長	能澤外茂吉	同	井上重人	營林所造林課長	大石浩
審議事務官	能澤外茂吉	編修課長	森谷一	營林所庶務課長	佐治孝德
法務課長	帶金悅之助	圖書館長	三屋靜	營林所作業課長	栗山忠男
會計課長	高橋秀人	財務局長	岡田信樵	肥料檢查所長	下斗米政行
統計官	原口竹次郎	主計課長	中島一郎	警務局長	友部泉藏
營繕課長	井手薰	稅務課長	角田廣次	警務課長	藤村寬太
內務局長	小濱淨鑽	金融課長	玉手亮一	保安課長	小林長彥
地方課長	西村高兄	稅務官	千住精一	理蕃課長	石川定俊
土木課長	小川嘉一	殖產局長兼營林所長	殖田俊吉	衛生課長	森田俊介
地理課長	小林六之助	特產課長	猪俣一郎	臺北更生院長	下條久馬
臺北測候所長	西村傳三	商工課長	中田榮次郎	翻譯官	井出季和太
文教局長	安武直夫	山林課長兼礦務課長	川村直岡	高等法院長	後藤和佐二
學務課長	赤堀鐵吉	技師	小笠原金亮	上告部判官	金子保次郎
				覆審部々長	緒方清繼
				同	鈴木英男







中央研究所(兼) 應用動物科長	素木得一	內務部長	岩滿重	南警察署長	濱中修三
同 畜產科長	柳川秀與	地方課長	伊藤完二	臺北市尹	西澤義徵
同 林業部長	關文彦	教育課長	那須重德	同 助役	佐々木金太郎
同 工業部長	加福均三	勸業課長	富田嘉明	第一中學校長	十倉精一
同 有機工業化學科長	服部武彦	土木課長	前田兼雄	第二中學校長	河瀬半四郎
同 電氣化學科長	門多道別	港務部部長	奧田達郎	臺北商業學校長	小出梅吉
同 酒精工業科長	中澤亮治	高等警察課長	原泰吉	臺北工業學校長	瀧波惣之進
同 衛生部技師	鈴木近志	警務課長	西村德一	第一高等女學校長	浮田辰平
同 庶務課長	三輪幸助	衛生課長	宮川富士松	第二高等女學校長	室田有
臺北州知事	中瀬拙夫	港務部檢疫課長	桐林茂	第三高等女學校長	小野正雄
調停課長	鳥井勝治	同 海務課長	梅田三良		
		北警察署長	岩田此一		

### 臺北市職員一覽

市尹	西澤義徵	勸業課長	中村彌太郎	財務課長	有馬一郎
助役	佐々木金太郎	土木課長	永野幸之丞	臨時水道擴張課技師	相賀六太郎
庶務課首席	吉田治久	土木課技師	永島文太郎	自動車課長	坂田吉三
秘書係長	赤嶺茂樹	土木課囑託	田中大作	臺北市公設	北村朝一
教育課長	千葉元枝	水道課長	武部八三郎	質鋪町公設	中村治太
社會課首席	佐山都貞	衛生課長	渡邊七治	質鋪主事	



稻江醫院囑託  
臺北市職業紹介所主任  
臺北市動物園長代理  
臺北市簡易宿泊所主任  
囑託

菊池志米吉  
井上龍代  
長坂周一  
肥後盛吉  
勝浦輝

臺北市中央卸賣市場主事  
同囑託  
臺北家畜市場囑託  
公設西門町食料品小賣市場主任

坂本萬藏  
池畑長右衛門  
折田猛輔  
荒卷正二郎

公設千歲町食料品小賣市場主任  
公設永樂町食料品小賣市場主任  
公設御成町食料品小賣市場主任  
公設綠町食料品小賣市場主任

三輪政治  
中島重雄  
新鄉芳平  
明神孝秋

臺北市在住武官

軍司令部官

陸軍中將

阿部信行

軍經理部附

技師(四等)

淺井新一

軍參謀長

陸軍少將

小杉武司

軍醫部長

軍醫監

遠藤精虎

軍參謀

砲兵大佐

浦澄江

軍醫部員

二等軍醫正

木村虎次郎

軍副官

步兵中佐

小林準

軍獸醫部長

二等獸醫正

吉賴八三

司令部附

步兵中佐

藤井貫一

法務部長

法務官(四等)

淺野清名

參謀

航空兵少佐

山瀬昌雄

軍法會議裁判部

法務官(三等)

新井明重

軍幕僚附

步兵少佐

西脇宗吉

臺灣守備隊司令官

陸軍中將

外山豊造

軍幕僚附

步兵少佐

宮下健一郎

臺灣守備隊副官

步兵少佐

宮田兼治郎

軍兵器部長

砲兵大佐

峰尾甲一

臺灣第一聯隊步兵

步兵大佐

仁禮精粹

軍經理部長

一等主計正

矢部潤二

副官

步兵大尉

大島雲八

軍經理部員

二等主計正

佐藤忠一

聯隊附

同

田北惟

軍經理部員

二等主計正

本田禎一

同

同

北川貞猪







李延齡 松本晃吉 林熊光 谷口巖  
 陳天來 石坂莊作 魏清德  
 蔡彬 淮山 中佐太郎 後宮信太郎

臺北市協議會員 (官吏を除く)

安田勝次郎 谷山愛太郎 黃金生 黃玉對  
 南政吉 大澤貞吉 江上恒之 陳振能  
 近藤滿夫 高橋猪之助 飯田清 汪明燦  
 吉鹿善次郎 陳其春 大栗巖 張穎川 福園  
 星加彥太郎 銀屋慶之助 近藤勝次郎 張境  
 德丸貞二 陳茂通 有田勉三郎 李園  
 河東富次 重田榮治 張清港 龍  
 佐々木金太郎 村崎長昶 楊漢龍

臺北市町委員

事務所		町委員	
名	稱	住	氏
務		所	名
務		域	員
務		置	員
務		區	員
表町委員事務所 電話三六三一番	表町一ノ二九	表町 明石町 北門町(臺北驛)	鈴木重嶽 葛岡陽吉 久木田寬



大 安 委 員 事 務 所	東 門 町 委 員 事 務 所  電 話 一 九 〇 六 番	乃 木 町 委 員 事 務 所  電 話 一 三 〇 番	文 武 町 委 員 事 務 所	榮 町 委 員 事 務 所  電 話 一 三 四 〇 番	京 町 委 員 事 務 所  電 話 二 三 八 一 番  (呼 出)	本 町 委 員 事 務 所  電 話 一 四 四 三 番
大 安 字 龍 安 坡 三 六 八	東 門 町 七 七	乃 木 町 一 ノ 一	文 武 町 四 ノ 四	榮 町 一 ノ 二	京 町 一 ノ 五 二	本 町 二 ノ 六 六
大 安	幸 東 旭 樺 山 門 町 町 町	乃 木 書 院 町	文 武 町 六 丁 目 四 、 五 丁 目	榮 町	大 和 京 町 町	本 町
龍 安 坡 三 六 八 十 二 甲 一 二 一	樺 山 町 五 五 東 門 町 一 〇 八 同 三 七	乃 木 町 一 ノ 一	文 武 町 六 ノ 一	榮 町 三 ノ 二 同 一 ノ 二 〇	京 町 一 ノ 一 五 同 三 ノ 六 大 和 町 二 ノ 八	本 町 四 ノ 一 五 同 一 ノ 二 二
林 林 顏 育 謨	中 村 不 羈 兒 竹 林 德 松 林 小 英	佐 藤 忠 一	兵 頭 高 一	鈴 木 重 男	谷 口 村 崎 長 親	吉 鹿 善 次 郎 福 田 定 治 郎
	近 藤 勝 次 郎 高 橋 猪 之 助 小 林 準 一					



				南門外委員聯合事務所 電話三二九四番		富田町委員事務所	下內埔委員事務所
				佐久間町二ノ三		富田町一四八	下內埔一六七
福住町	錦新千川古 榮歲端亭 町町町町町	兒玉町	佐久間町	龍口町	南門町	富田町	下內埔
福住町二ノ二	古亭町一四 川端町四八〇 千歲町二ノ二	兒玉町二ノ七 同 二ノ一八 同 二ノ一八 同 二ノ四四	佐久間町二ノ三	龍口町三ノ二二 新榮町二ノ一八	南門町一ノ一〇 南門町三ノ三	富田町 同 二八八	下內埔一六七 六張犁一九〇
磯野兼松	西尾善兵衛 周深 蓑和藤治郎	楊大宮福 泉造鳥鷹太郎 田正逸	南大川關橫 政坪村浦山 吉辰輝吉助	川村輝一	關浦吉助	鳩野修造 陳金水	陳春池 高燧堯



	八甲町委員事務所 電話二八五三番	若竹町委員事務所 電話二九九一番	元園町委員事務所 電話一四二五番	新起町委員事務所 電話二八一八番	壽町委員事務所 電話一〇一番
	老松町一ノ一	若竹町二ノ一六	元園町二四四	新起町二ノ四六	壽町一ノ二二
入船町	老松町 新富町一、二丁目	若竹町	元園町	新起町起 西門町二丁目一部 三丁目	末廣町 壽町 築地町 濱町 西門町一丁目 部
同 同 入船町一ノ一五	老松町一ノ三 新富町一ノ二〇 老松町二ノ七	同 若竹町二ノ一 二ノ四	同 元園町二四五 元園町二四四 三一六	同 新起町一ノ七 二ノ四	末廣町三ノ七 壽町一ノ一 築地町二ノ八 濱町四ノ一六
李松 蔡彬 李永福	友田守惠 吳佳仁 谷山愛太郎	平田藤太郎 有馬彦二	今道定治郎 澁谷武次郎 黃世泰	大栗巖 木村米太郎	金子光太郎 池上政吉 神谷仲藏 吳寶山



		西町委員事務所 電話一二六〇番		元園町二一		有明町		深川圓作	
		新富町委員事務所 電話二四五六番		新富町五ノ二一		新富町五ノ一〇三		飯田清	
		東園町委員事務所		東園町五〇四		東園町五〇四		陳棋楠	
		馬場町委員事務所		馬場町四五		馬場町四五		楊育南	
		太平町一丁目 建成町一丁目一部 上壱府町一、二、三、四丁目		港町一ノ六 建成町一ノ一四 上壱府町二ノ二四		中村勝次郎 王用中 大塚芳太郎		林振生	
同 建成町二、三丁目 下壱府町一丁目 建成町四丁目		太平町三ノ四四 建成町三ノ四 下壱府町一ノ一五		重田榮治 佐野研三 周郁文		龍山寺町		林卿雲	
同 建成町二、三丁目 下壱府町一丁目 建成町四丁目		龍山寺町一ノ一		同 一ノ五四		同 二ノ七八		吳永富	
同 建成町二、三丁目 下壱府町一丁目 建成町四丁目		有明町三ノ三五		同 二ノ七八		同 一ノ五四		黃金生	







<p>大正町委員事務所 電話一、八六五番</p>					
<p>大正町二ノ二一</p>					
<p>大正町 御成町 三橋町</p>	<p>宮前町 下奎府町四丁目</p>	<p>圓山宮直 大宮町九九 大直三一</p>	<p>大龍峒町一部 大龍峒町一部 河合町</p>	<p>大橋町二丁目 太平町八、九丁目 大橋町三、四丁目</p>	<p>永樂町五丁目一部 大橋町一丁目一部 港町四丁目一部 大橋町二丁目一部</p>
<p>大正町一ノ一二 御成町一ノ一四 同町三ノ二</p>	<p>同 下奎府町四ノ六〇 同四ノ一</p>		<p>同 大龍峒町五五四 同四六八</p>	<p>大橋町二ノ一二〇 太平町三ノ一五二</p>	<p>永樂町五ノ二四四 同町五ノ一四五 同町五ノ三五七</p>
<p>近藤滿夫 隣小坊 葉榮田</p>	<p>柯秋潔 周秋冬</p>	<p>松崎貞吉 陳尙九</p>	<p>陳培乞 許雨亭</p>	<p>陳春成 李金燦</p>	<p>陳振能 陳天順 李土</p>
<p>朱厝崙委員事務所</p>	<p>朱厝崙七一</p>	<p>中上庄 新埤頭 西下子</p>	<p>上埤頭一一〇 中崙四〇八</p>	<p>唐仁原景俊 劉銀漢</p>	







小松吉久  
尾崎秀真  
富田榮太郎  
謝汝銓  
楊育南  
方玉墩

土屋理喜治  
神谷仲藏  
等々力智惠太  
楊泉

藝和藤治郎  
大澤貞吉  
木村米太郎  
柯秋潔

今川恒二郎

小宮元之助  
鉅鹿赫太郎  
浦田永太郎  
呂阿昌  
林小英  
楊潤波

藤江醇三郎  
園部良治  
李添盛  
本田正己

三卷俊夫  
常見辨次郎  
蘇穀保  
施福龍

衛生委員

葛岡陽吉

安田勝次郎  
谷口巖  
魏清德  
蔡天註  
黃贊均

蔡彬淮  
阿部道衛  
李永福

佐野研三  
竹林德松  
郭廷俊  
李俊啓

殿村京造

谷河梅人  
大栗巖  
楊文桂  
許智貴  
石原幸作

平戶吉藏  
今道定治郎  
許丙

鈴木重嶽  
田代彦四郎  
蔡彬淮

永井德照



陳谷  
其口  
春巖

吉安  
鹿田  
善勝  
次次  
郎郎

高谷  
橋河  
猪梅  
之助 人

木郭  
村廷  
泰俊  
治

臺北市臨時土地整理委員

葉	王	吳	周	近	王	李	楊	友	宮	淺	磯	田	桑	佐	山
榮	成	金	郁	藤	祖	朝	春	田	內	井	野	代	原	藤	本
田	渠	水	文	滿	派	北	生	守	龜	政	兼	彥	太	忠	榮
								惠	一	雄	松	四	四	一	喜
												郎	郎		

松	李	高	柯	生	黃	莊	吳	倪	有	吉	中	西	宮	小	山
田	俊	敬	秋	野	玉	添	永	希	馬	田	川	尾	下	林	崎
繁	啓	遠	潔	豬	對	福	榮	昶	彥	坦	由	善	與	準	藤
義				六					二	藏	松	兵	太	一	
												衛	郎		

陳	楊	張	佐	陳	蘇	黃	佐	水	大	齊	藤	關	竹	內
清	仲	文	野	旺	穀	聯	藤	川	栗	藤	井	浦	林	保
波	佐	伴	研	生	保	發	竹	佐	一	雅	與	吉	德	傳
			三				太	善	巖	一	之	吉	松	次
							郎	治			吉			

中	陳	謝	大	栗	周	鍾	陳	富	要	池	山	福	林	谷
村	茂	唐	塚	原	晉	林	義	田	千	上	野	田	小	口
勝	通	山	芳	仙	源	塗		榮	枝	政	常	正	英	巖
次			太	勝				太	太	吉	楠	逸		
郎			郎					郎	郎					



江上恒之  
村崎長昶

土屋理喜治  
吉岡德松

後宮信太郎  
重田榮治

斐和藤治郎  
近藤勝次郎

### 臺北市方面委員

鈴木重嶽  
大坪種辰  
金子光太郎  
吉鹿善次郎  
大島鸞造  
神谷仰藏  
友田守惠  
黃金生  
陳春成  
張清港  
李松川  
近藤滿夫  
謝唐山  
柯秋潔  
濱中修三  
大塚芳太郎

近藤勝次郎  
楊泉  
大歲德太郎  
谷口巖  
中川由松  
木村米太郎  
谷山愛太郎  
飯田清  
黃贊鈞  
李俊啓  
黃玉對  
吳世雄  
吳金水  
周秋冬  
林水汾  
施福龍

林小英  
藤井與之吉  
今道定治郎  
柏木太兵衛  
齊藤雅一  
黃世泰  
陳旺生  
楊育南  
林光輝  
富田榮太郎  
和田彰  
許雨亭  
重田榮治  
佐野研三  
林清秀  
松田良清

竹林德松  
周深  
園部良次  
西尾善兵衛  
童錦秀  
平田勝太郎  
山下益治  
田中一二  
周清桂  
蘇穀保  
楊維垣  
王國棟  
周油定  
藤生祐俊  
洪長庚  
宮地安一



岩田 此一

方面委員顧問

郭 廷俊  
倉岡 彦助

蔡 彬 准  
堀内 次 辨

蕨和藤 治郎  
後藤 薰

三卷 俊夫  
北野 鐵彌

### 都市計畫委員會

平塚 廣義(長)  
岡田 信(委員)  
深川 繁治(同)  
小川 嘉一(同)  
西澤 義徵(同)  
納富 耕介(同)  
矢部 潤二(囑託)

堀田 鼎(委員)  
小山 三郎(同)  
安武 直夫(同)  
森田 俊介(同)  
前田 兼雄(同)  
永野 幸之丞(同)

井手 薰(委員)  
小濱 淨鑛(同)  
小野 榮作(同)  
西村 高兄(同)  
佐藤 林藏(同)  
佐々木 金太郎(同)

殖田 俊吉(委員)  
友部 泉藏(同)  
中田 榮次郎(同)  
中瀬 拙夫(臨時)  
荒池 忠吉(同)  
小杉 武司(囑託)

### 諸團體諸組合一覽

公共並に社交團體

臺北商工會  
同 實業會  
同 商業會

副會長 後宮 信太郎  
會長 中辻 喜次郎  
同 顯 榮



名	稱	町	內	國	體	代	表	者
同	辯護士會					同	安	保
同	消防組					組長代理	岡	今
臺灣	醫學會					會頭	堀	次
臺灣	醫師會					會長	谷	口
同	齒科醫會					同	松	田
臺灣	體育協會					會長	平	塚
同	ゴルフ俱樂部					幹事	三	卷
同	ロータリー俱樂部					會長	幣	原
自由人俱樂部						幹事	生	野
きくみ俱樂部						同	中	島
大正協會						會長	小	松
臺北實業野球協會						同	小	寺
府後會	表	町				(正) 鈴木重嶽	(副) 葛岡陽吉	
大會	榮	町				同 谷口巖	(副) 村崎長租	
本町會	本	町				同 吉鹿善次郎	(副) 福田定治郎	
京和會	京町大和町					幹事 近藤勝次郎	幹事 高橋猪之助	
新起公會	新起町					會長 大栗巖	(副) 木村米太郎	













城東住宅土地利用組合  
 昭和住宅利用組合  
 錦町住宅土地利用組合  
 共榮消費組合

同業組合

同 同 同 同  
 吉田 小林多助  
 金子光太郎  
 田村作太郎  
 小松吉久

臺灣鑛業會

會長

小松吉久

臺灣米穀移出商同業組合

組合長

杉原佐一

同運輸業組合本部

同

三卷俊夫

同土木建築協會

會長

藤江醇三郎

同實業藥劑士會

同

葛岡陽吉

臺北茶商公會

同

陳天陽

臺北漢藥商組合

組合長

陳茂通

臺北市南區理髮業組合

同

江上喜代治

同北區理髮業組合

同

渡邊嘉六

臺北料理業組合

同

唯岡省吾

飲食店組合

同

早川小春

臺灣パーテーナダ協會

會長

大本重武

社會運動團體

臺灣民衆黨  
 昭和 二、七  
 新臺灣聯盟  
 大正 一一、一〇

臺灣工友總聯盟  
 昭和 三、二  
 臺灣中華總會館  
 同 二、三











久大實業株式會社	張園	臺灣土地建物株式會社	木村泰治
林本源彭記產業株式會社	林忠	臺灣土地開拓同	安藤玄明
鶴木產業株式會社	林鶴壽	株式會社高石組	高石威泰
株式會社櫻井組	櫻井貞次郎	合名會社太田組	江原節郎
同 山一商行	曾根茂夫	合資會社古賀組	古賀達朗
後宮合名會社	後宮信太郎	臺灣煉瓦株式會社	後宮信太郎
大平興業株式會社	周清桂	東光油脂工業同	櫻井貞次郎
臺灣合同電氣同	菅野信躬	臺灣倉庫同	三卷俊夫
臺灣煙火爆竹同	山岸初太郎	臺灣電力同	松木幹一郎
株式會社臺灣宅商會	石原玉意	臺灣日日新報社	河內徹
大正醬油株式會社	櫻井貞次郎	株式會社	淺尾豐一
大和製氷同	許金來	臺北製塩株式會社	西岡英夫

市内に支店、出張所を有する内外諸會社

株式會社三十四銀行	山中佐太郎	大日本製氷株式會社	西中勘次郎
同 日本勸業銀行	近藤有曾	星製藥同	木村謙吉
日本ペイント製造株式會社	安藤兼太郎	日本樟腦同	伊勢田嘉一
會社名	臺灣代表者	會社名	臺灣代表者







三井生命保險株式會社	東亞 株式會社	山下汽船株式會社	三菱商事株式會社
本間資知	倉內平治郎	辻本正春	市岡正亮
大阪商船株式會社	近海郵船株式會社	日本徵兵保險會社	富國徵兵保險相互會社
竹內三一	松本晃吉	河東富次	小林多之助





— 近 刊 豫 告 —

臺 臺 基 新 嘉 高  
南 中 隆 竹 義 雄  
市 市 市 市 市 市  
史 史 史 史 史 史

二 月 發 行  
四 月 同  
六 月 同  
八 月 同  
十 月 同  
十 二 月 同

臺北市史と同じき興味本位の型破りであることが誇りであります

發 行 所

臺北市  
大正町

臺 灣 通 信 社



	一步を進めた青年運動	
	消費經濟の合理化運動	
	スピード時代の民衆雜誌	

拾錢雜誌  
月刊  
新臺灣

サラリーマン  
婦人・青年  
共有機關

發行所

臺北市  
大正町

臺灣通信社

電話一九三四番・臺灣振替二〇〇二番





株式會社

臺灣銀行



臺北市

株式會社

日本勸業銀行

臺北支店

株式會社

三十四銀行臺北支店





株式會社

臺灣商工銀行



株式會社

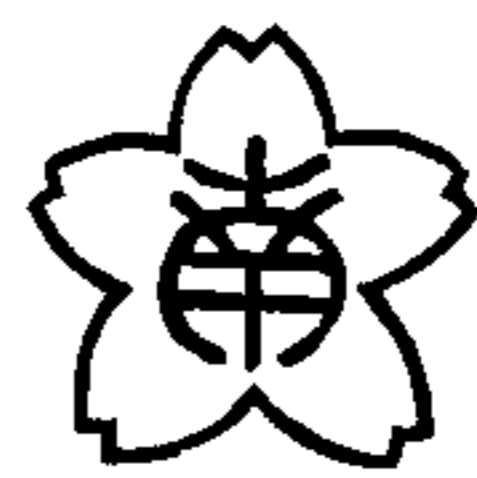
彰化銀行

臺中本店電話

一六九  
〇〇三  
五〇〇番



臺北市表町



株式會社

華南銀行

支店 廣東、新嘉坡、スマラン

臺北市本町

株式會社

臺灣貯蓄銀行

電話三三二二二番



——未來の國家を背負うて立つ男女青年に——青年と共に在る  
 教育家と父兄とに——讀んで貰ひたい此一書冊——  
 著者は少年團後援會長として、又男女青年團長として、或は青年雜誌の記者として、  
 青少年の社會教育に携はり、筆に口に其の實際運動の先頭に立つて活動し、恒に青年  
 と與に街頭に出で、勞務奉仕に献身してゐる本書は實に著者多年の體驗に基く感激の  
 記録である。

鐵道大臣 原 脩次郎 閣下題字  
 元文部大臣 高 田 早 苗 先生題字  
 法學博士 石 塚 英 藏 閣下題字  
 貴族院議員 倉 岡 彦 助 先生序文  
 醫學博士 田 中 一 二 著  
 臺灣通信社長

# 伸び行く南國青年

(菊版一冊金八十錢)

發行所

臺北市 大正町

臺灣通信社

電話一九三四番・振替臺灣二〇〇二番



況盛の刷増部萬二

月刊 新臺灣特輯號

敢て愛國者の一讀を望む

◆納税觀念を普及させたいための奉仕出版◆

臺灣總督府財務局審査入選  
納税宣傳映畫小説

臺北女子青年團主事

田中きわの作

燃

ゆ

る

力

一冊  
金拾錢

發行所

臺北市大正町

臺灣通信社

電話一九三四番

總督府財務局では、本篇の骨子を採つて、更  
士林を舞臺に、主演天草浪子、井上壽子によつて  
に島内各地に遍く公開中である。

作者のことば

本篇に流れてゐる所の一貫した精神は、女の力の偉大である。即ち内臺人の男女青年が郷土愛と國家尊崇の觀念上に立ち、正しい理解を以て、正しい戀愛の人生の幸福にひたりつつ、内臺人融合の範を示し、其の美はしい燃ゆるが如き熱誠の協力、青年團運動となり、納税奨励となり、驚くべき貢獻を國家に致すの結果を生むといふのである。

脚本を製作し、東京の振進キネマ社に託して、臺北、七巻ものの映畫劇を撮影し、納税觀念普及の爲め、既



昭和六年十二月十五日印刷

昭和六年十二月十八日發行

昭和七年三月二十八日再版

親筆

定價五圓

送料錢

臺北市大正町一丁目三十四番地

發行兼  
編纂者

田中一二

臺北市京町三丁目十一番地

不許  
複製

印刷人

小高育太郎

臺北市京町三丁目十一番地

印刷所

合資  
會社 臺北活版社

臺北市大正町一丁目三十四番地

發行所

臺灣通信社

電話一九三四番  
振替口座臺灣二〇〇二番



